

(2) 金属器 (第183図)

遺跡から出土した弥生時代中期以降の金属器は中世・近世のものが多い。A～D区より古銭が出土し、煙管はA・B区から、小柄はA区から出土した。出土層はほぼⅡc層からである。このことは中世・陶磁器類とも同様でⅡc層が中世・近世の包含層であるからと言えよう。

遺跡からは、これら以外に釘類・留金具などの金属製品や小破片が出土しているが、多くのものは残存状況が極めて悪い。

1は鉄銭で、面文が「洪武通宝」である。「洪」の文字は残存状況が悪く潰れている。背も酸化により損傷が激しく文字の有無が判別付かない。また、残存状況が良くないため渡来銭か鑄銭かは判断しがたいが、文字のくずれと粗悪な状況から鑄銭である可能性もある。厚さは薄肉である。

2・3・5・7・8は銅銭で、面文が「寛永通宝」である。面文より新寛永であろう。2・3・7・8は背が無である。5は背上部の背文「元」より寛保高津銭だと思われる。初鑄年代は1741年である。

4・6は銅銭で、面文が「寛永通宝」である。古寛永であろう。背が無である。4は面・背いずれも肌の部分のみ黒色を呈している。6は一部欠損している。

9～11は青銅製の煙管の雁首である。9の器壁は薄く、10の器壁は厚い。いずれも残存状況は不良である。11の断面形態は円形である。

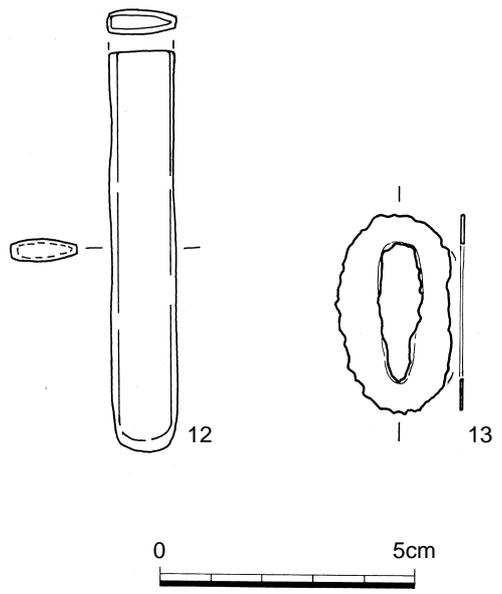
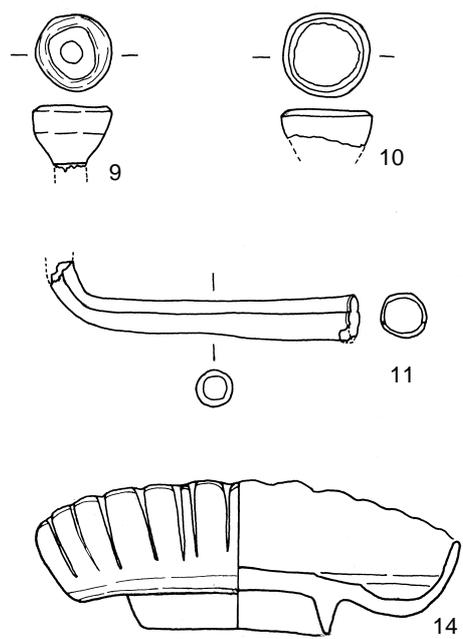
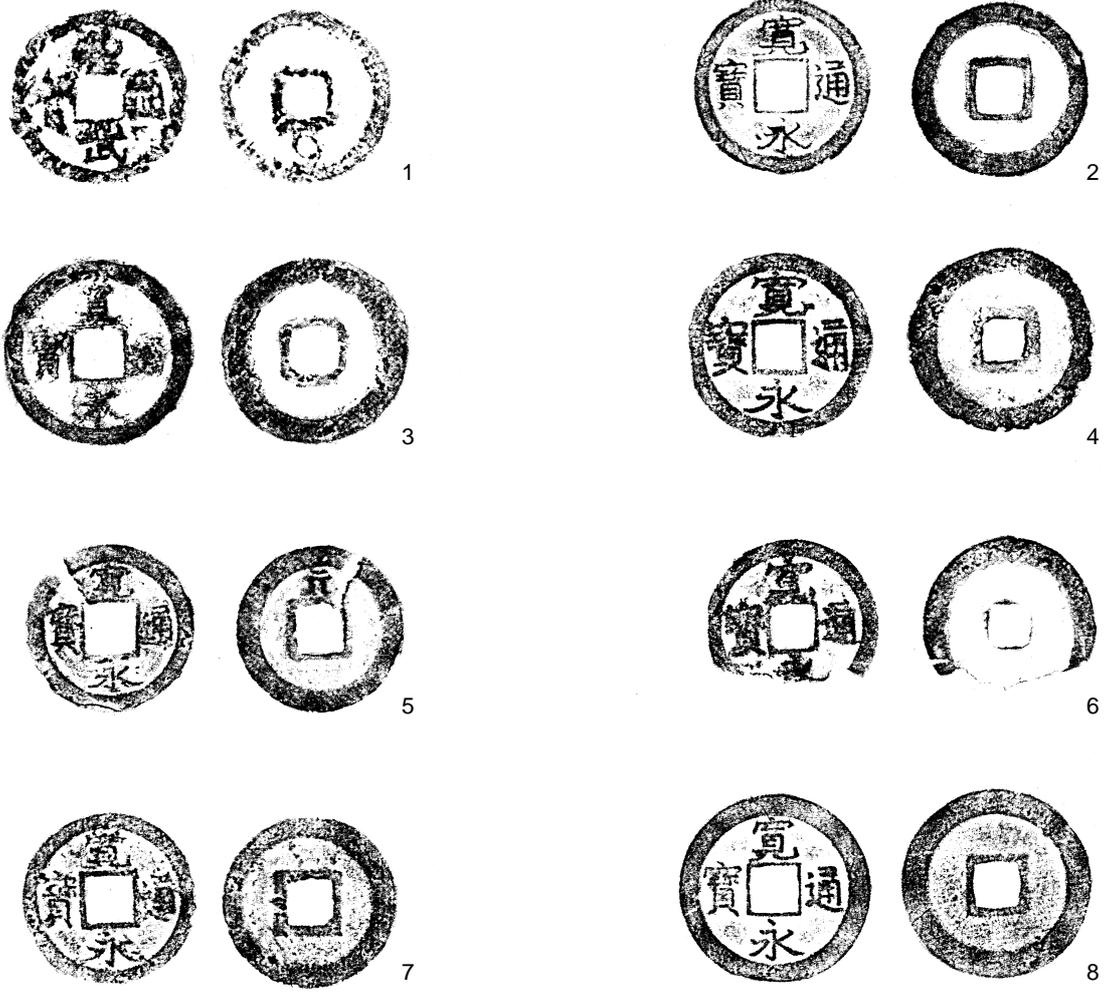
12は青銅製の小柄である。断面は薄く、端部が「U」字形である。

13は青銅製の鏝の様な形状をしているが、具体的な種類は不明である。厚みは非常に薄い。周縁および表面の残存状況は極めて不良である。

14は青銅製の仏具の稜花皿と思われる。型成形であろう。残存状況は形態の歪みが著しい。

第81表 中・近世金属器

図	番号	区	グリッド	出土層位	種類・器種	法量(単位:cm)	備考
183	1	A	M-26	Ⅱc	鉄銭 洪武通宝	直径2.3 内面窓径0.6	
183	2	A	I-30	Ⅱc	銅銭 寛永通宝	直径2.3 内面窓径0.7	新寛永
183	3	A	L-28	攪乱	銅銭 寛永通宝	直径2.5 内面窓径0.7	新寛永
183	4	A	表採	-	銅銭 寛永通宝	直径2.3 内面窓径0.6	古寛永
183	5	A	L-24表採	-	銅銭 寛永通宝	直径2.3 内面窓径0.7	新寛永
183	6	B	S-14	Ⅱ	銅銭 寛永通宝	直径2.2 内面窓径0.6	古寛永
183	7	C	V-4	Ⅱc	銅銭 寛永通宝	直径2.2 内面窓径0.7	新寛永
183	8	D	表採	-	銅銭 寛永通宝	直径2.5 内面窓径0.6	新寛永
183	9	A	J-2	Ⅱc	青銅製煙管 雁首	径1.6	
183	10	B	U-12	Ⅱc	青銅製煙管 雁首	径1.7	
183	11	B	R-14	Ⅱc	青銅製煙管 雁首	残存長6.1	
183	12	A	J-29	Ⅱ	青銅製 小柄	残存長18.0	
183	13	C	U-7	Ⅱc	青銅製 不明	径4.0 厚さ0.1	
183	14	A	M-26	攪乱	青銅製 仏具稜花皿	口径8.0 器高3.0 底部径3.4	



第183図 弥生時代中期以降の金属器 (1~8 S = 1/1, 9~14 S = 2/3)

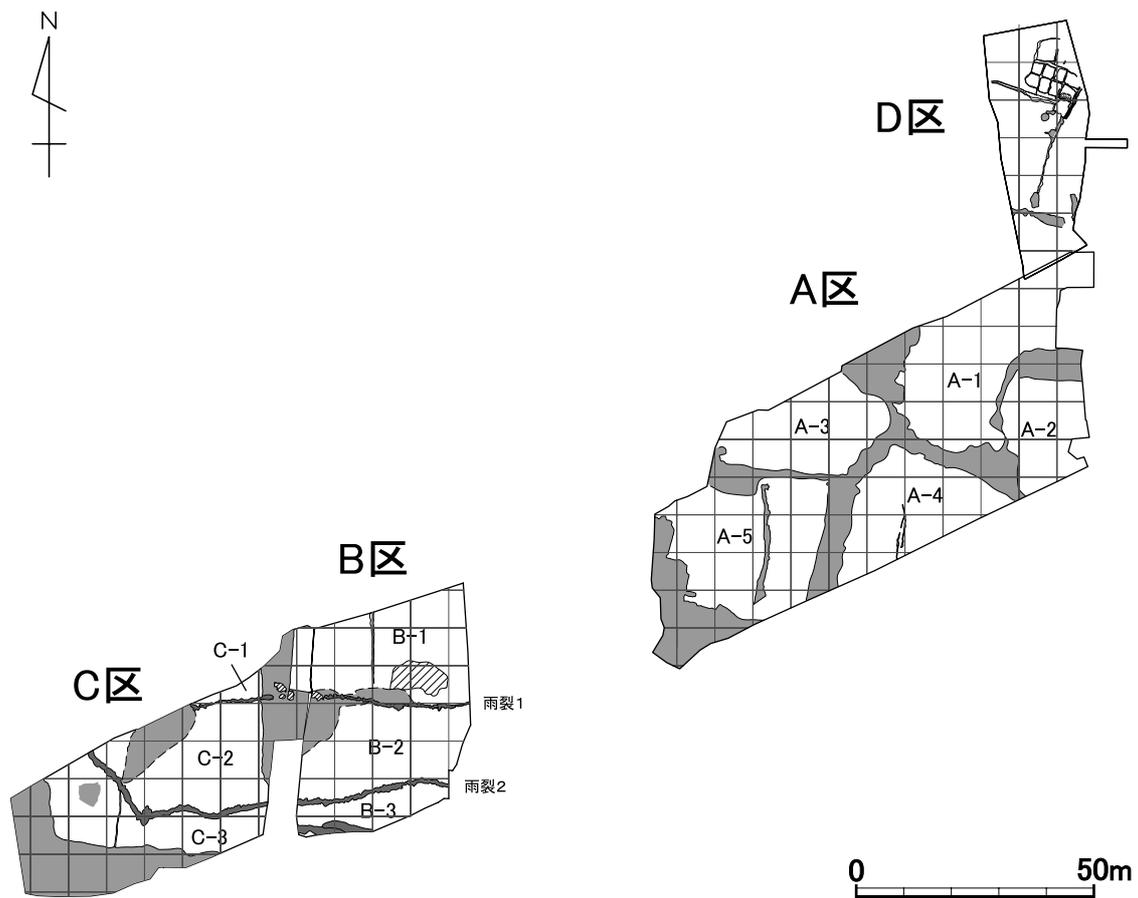
## 第5節 遺物の分布

### 1. 遺物の取り上げと出土状況

ここでは、今回の調査において出土資料の中心をなす縄文時代後期から弥生時代前期にかけての遺物の出土状況について見ていく。検討資料については、調査において出土位置の記録を行ったものに限定される。

最初に遺物の取り上げ基準について述べておきたい。

出土位置の記録を行ってから取り上げる遺物の層位はⅢ a層とⅢ b層に限定した。Ⅱ層以上の出土遺物については、近世以降の耕作地造成等の攪乱を受けているものと判断し、グリッドごとに層位の記録を行って一括して取り上げを行った。ただし、調査開始当初においては出土傾向がつかめていなかったことと層位の認定において曖昧な部分があったことから、Ⅱ層出土のもので出土位置記録するなど多少の例外が認められる。また、本来は無遺物層と考えられるⅣ層についても若干出土位置の記録を行ったものがあったが、基本的にはⅢ b層と同じ扱いで良いものとする。



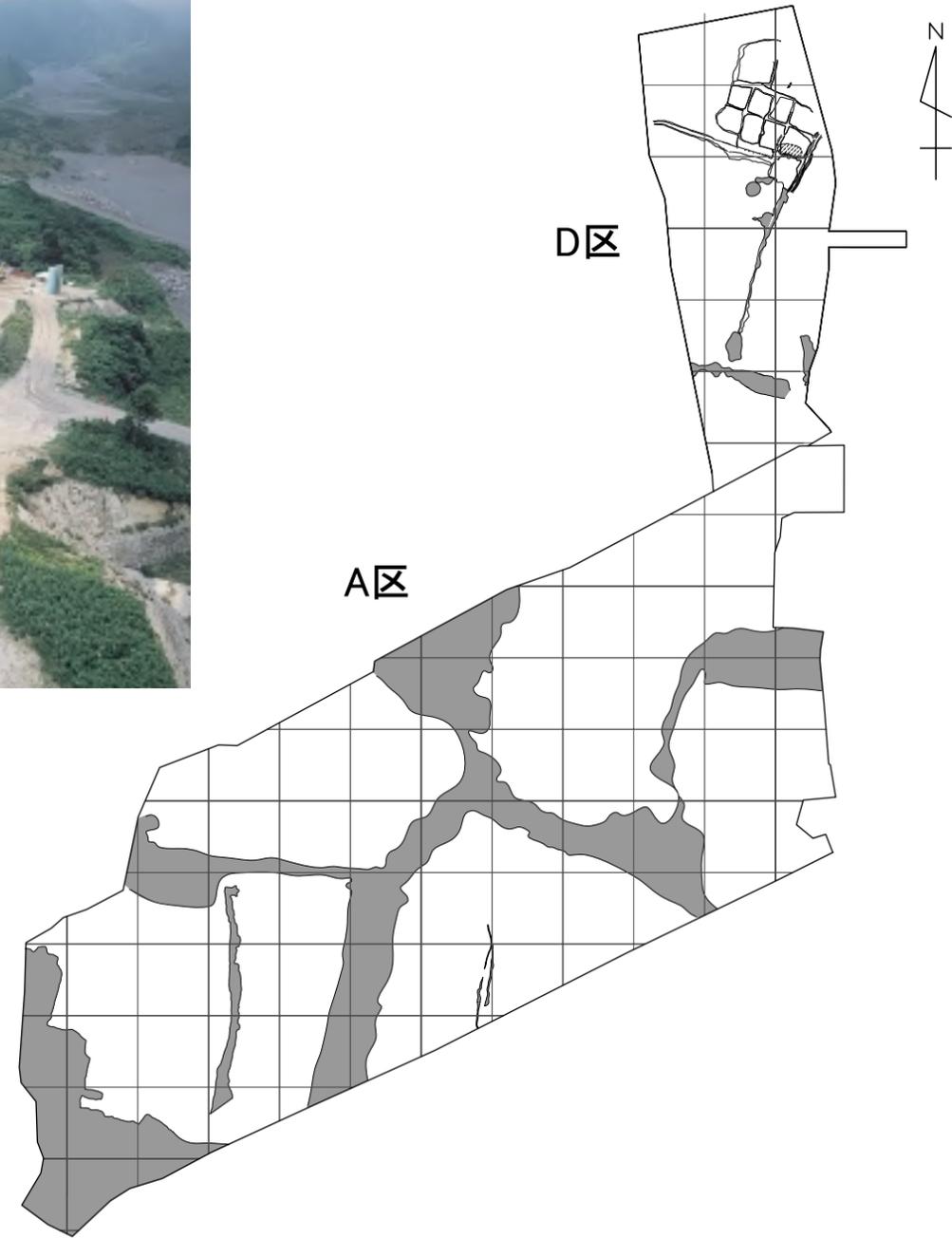
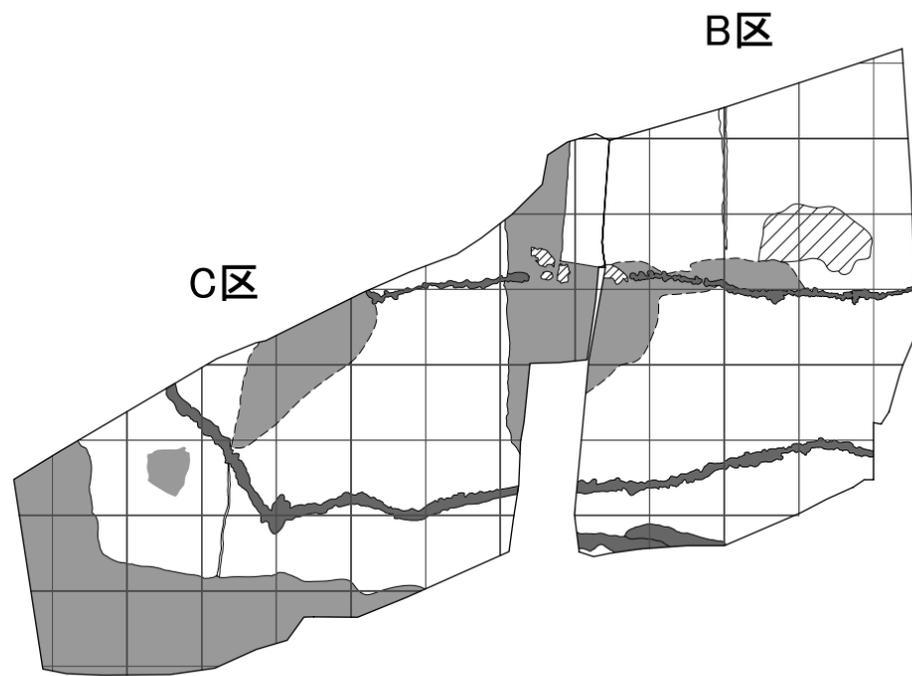
第184図 各調査区細分名称図 (S = 1 / 1,600)



調査区航空写真（西から）



調査区航空写真（東から）



-  ... 層露出部分
-  ... 削平・攪乱
-  ... 雨裂



第185図 全体図 ( S = 1 / 800 )

土器については、出土数が膨大であったため、時間的なことを考慮して全資料ではなく選択的に出土位置を記録した。記録の対象としたのは、分類や時期の判定などをしていく上で有効と考えられるものを中心とし、ある程度残りの良い土器片や周辺の出土状況などから接合などが考えられるものなども含めた。その他の細片などの資料はグリッドごとに出土層位を記録して一括して取り上げを行った。

石器については、基本的にⅢ a 層・Ⅲ b 層出土のものについては全点出土位置の記録を行って取り上げた。

出土遺物の分布を見ていくにあたって便宜的に各地区の細分名称を決めておきたい。

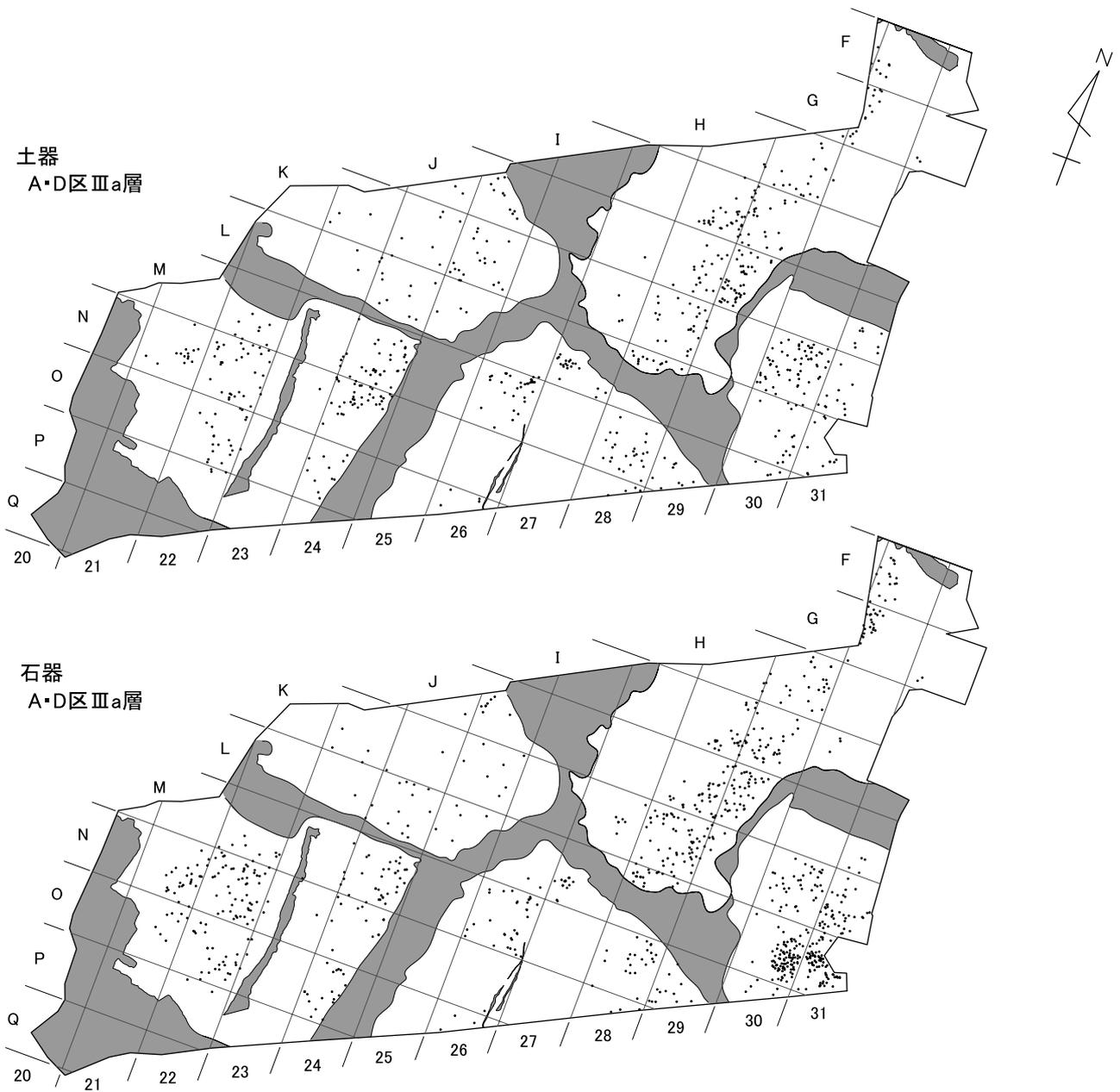
A 区については後世の耕作地造成によって攪乱を受けた網掛け部分を目安として A 1 区～A 5 区の 5 つの小区画に細分する。D 区については大部分が削平を受けており、出土資料の分布の検討ができるほどⅢ a 層・Ⅲ b 層の残る部分が少ないため、検討対象となりうる F 列以南について取り扱うこととし、A 1 区に含めることにする。

B・C 区については東西に横切るように 2 条の雨裂が確認されたため、これをもとに B 区は北から B 1 区、B 2 区、B 3 区の小区画に、C 区は北から C 1 区、C 2 区、C 3 区の小区画に細分する。ただし、C 区の北東部分は B 区に隣接するため本文中では B 1 区として取り扱った部分がある。

調査区全体は緩やかに西から東へと傾斜するため、調査に入る以前は階段状に耕作地が造成されている状況であった。そのため、各小区画を区画する南北方向の攪乱部分や A 4 区や A 5 区、B 1 区に見られる小区画を南北方向に横切る攪乱部分は地割の線であり、その東側部分は削平を受けていることを考慮する必要がある。

B・C 区で確認された 2 条の雨裂については中世期の遺物の出土が雨裂 2 の覆土最下位から確認されているため中世期以降の埋没として判断される。形成時期に関しては雨裂 2 の周辺では同器種が雨裂をまたいで分布域を持つものがあり、一方で雨裂 1 の北側部分である B 1 区においては集中的な遺物の出土があるのに対し雨裂 1 の南側では比較的遺物の出土が希薄である傾向もうかがえる。B 1 区の遺物の中心は突帯文期の資料であるから雨裂は突帯文期前夜に形成され、特に雨裂 1 はそれ以降の生活領域にいくらかの制限をもたらした可能性がある。ただし、雨裂 1 から雨裂 2 へ向かっては北西から南東へと傾斜しており、雨裂 1 の南側は後世の削平を受けているので、突帯文期の資料がこの部分にも分布していた可能性があり、断定はしない。

B・C 区雨裂 1 周辺において斜線をかけた部分があるが、この部分はⅦ層の露出が見られたところである。特に B 1 区ではⅡ層掘削時よりコブシ大から 1 m を超えるような大礫まで多量に出土し、Ⅲ a 層やⅢ b 層はこれらの礫の間を充填するように堆積している状況が見られた。Ⅶ層は土石流の堆積物によるものと思われるが、斜線部分ではⅥ層やⅤ層がほとんど堆積せず、Ⅲ層以上が直接堆積する状況であった。

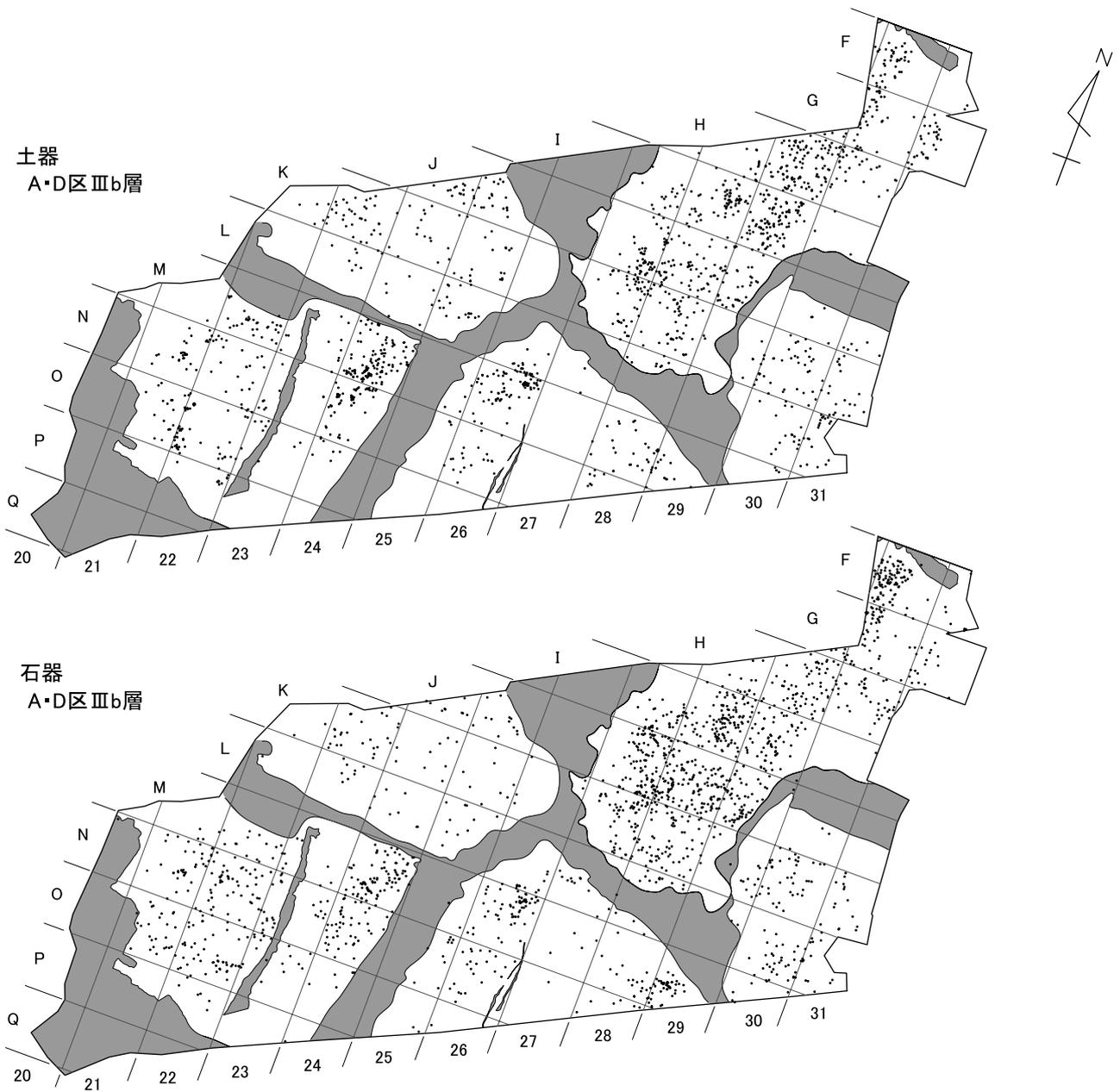


第186図 A・D区Ⅲa層土器・石器分布 (S = 1/800)

**A・D区Ⅲa層土器・石器分布**

取り上げを行った点数は土器・石器ともにⅢb層に比べると少ない。

A 1区の27列のように攪乱部分の東側は削平を受けて空白域となっているところも見られるが、分布の傾向はⅢb層ともほぼ共通する。土器と石器での大きな分布の違いは認められない。



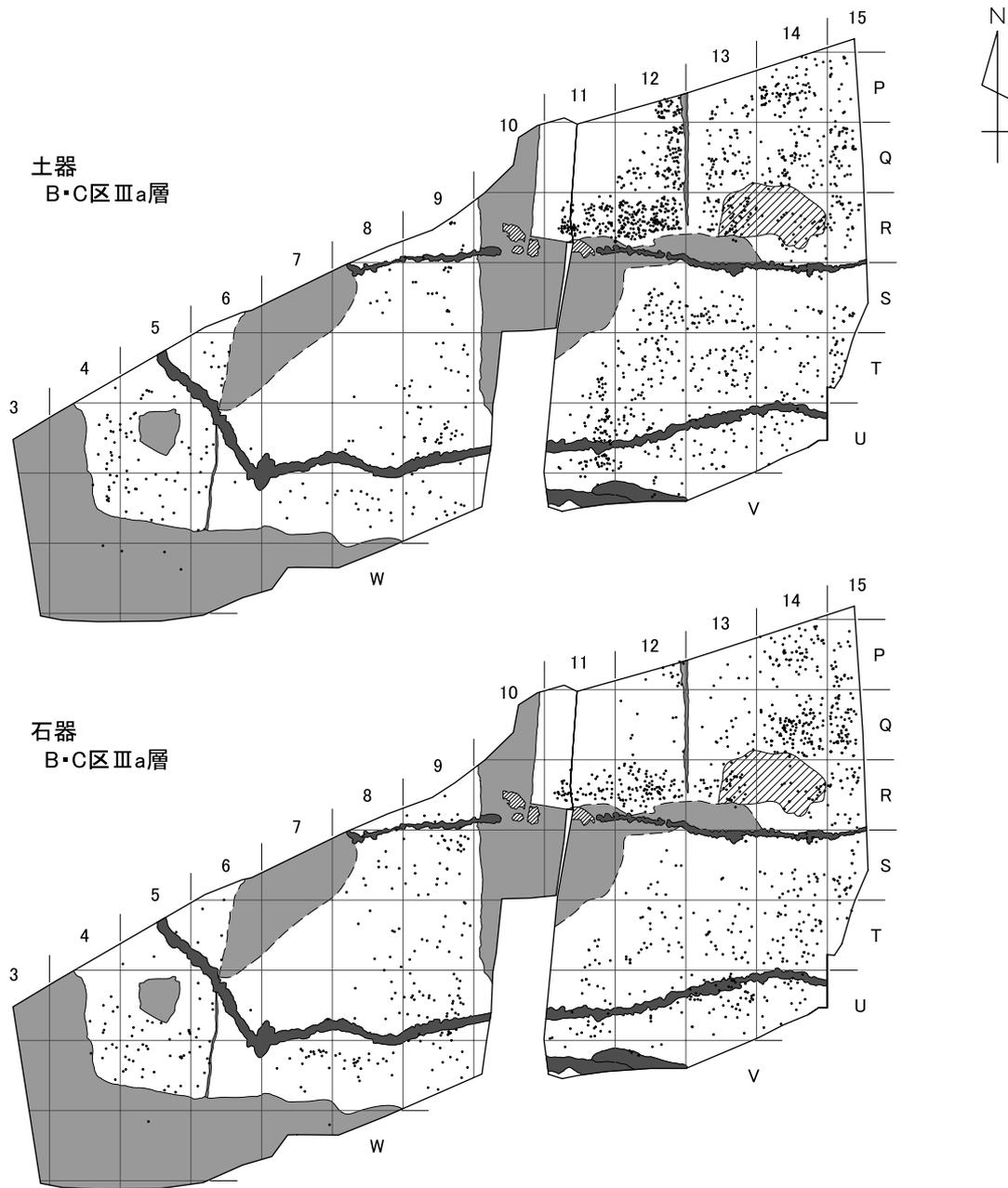
第187図 A・D区Ⅲb層土器・石器分布 (S = 1/800)

**A・D区Ⅲb層土器・石器分布**

土器・石器ともに主体的な出土を見せる。

特にA 1区, A 4区北西部分, A 5区北東部分にかけて遺物の集中が見られ, A 2区やA 3区での出土は希薄である。

土器と石器での大きな分布の違いは認められない。



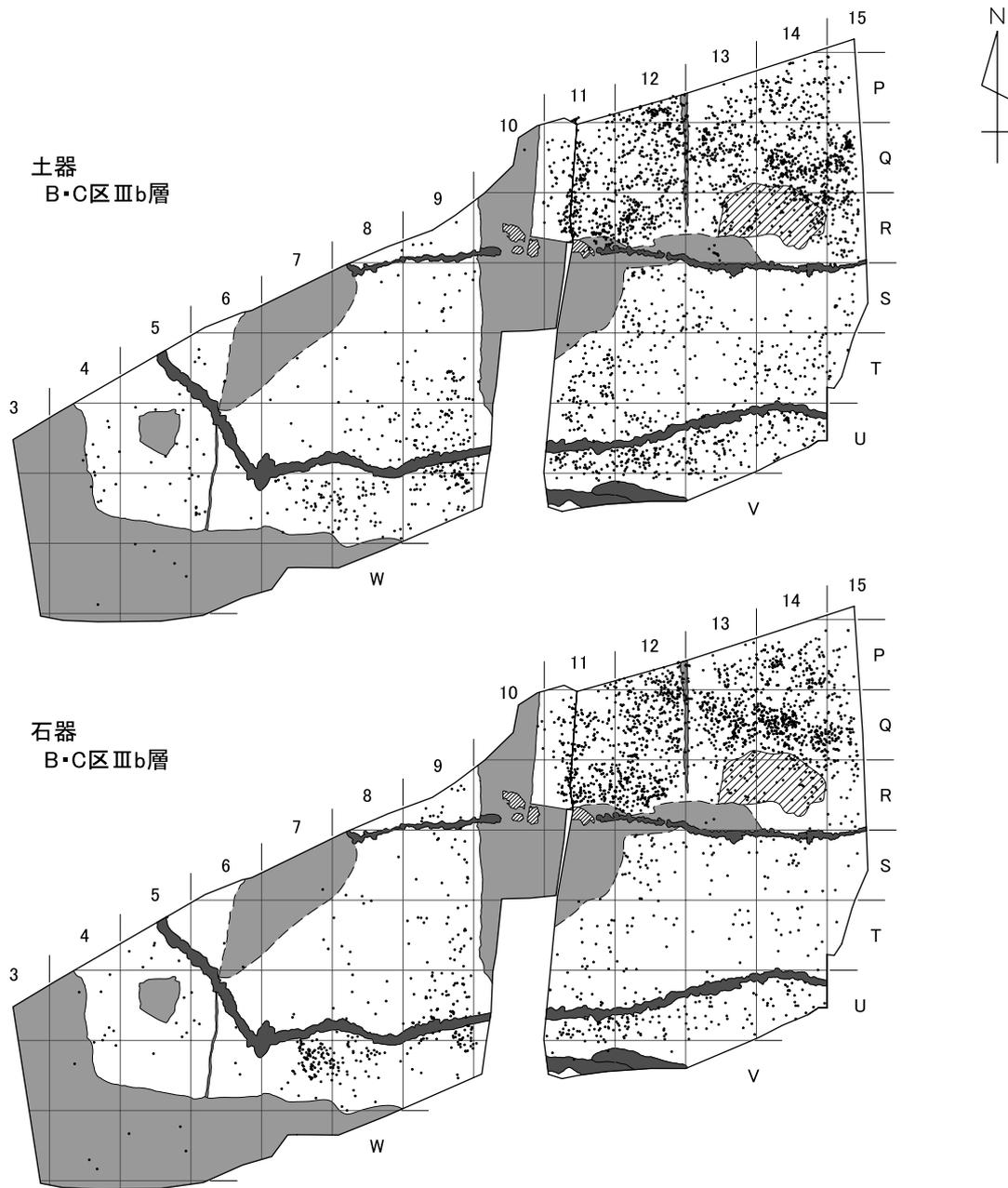
第188図 B・C区Ⅲa層土器・石器分布 (S = 1/800)

**B・C区Ⅲa層土器・石器分布**

取り上げを行った点数は土器・石器ともにⅢb層に比べると少ない。

遺物の出土はB区に多く、C区では希薄である。特にB1区西側に集中する。

土器と石器での大きな分布の違いは認められない。



第189図 B・C区Ⅲb層土器・石器分布 (S = 1/800)

**B・C区Ⅲb層土器・石器分布**

取り上げを行った遺物の点数はB 1区に特に集中する。また、C区の南東部分からB区の南側部分にかけての雨裂2周辺でもまとまった出土が見られる。C区西側部分では遺物の出土は希薄である。土器と石器での大きな分布の違いは認められない。

## 2. 土器の分布

### 各器種の出土数と出土層位の比率

まずB・C区とA・D区の両区における各器種の出土数を見る。

器種の断定に際しては、一概に深鉢や浅鉢と言ってもそれぞれ器形やサイズ、文様、調整、胎土、色調などの特徴には大きな差があり、器種断定の有効な基準となる属性をどのくらい持っているかによって各器種の出土点数は違ってくる。また用途や機能の問題もある。よって単純に出土数を持って各器種間の個体数の多寡を推し測ることは難しい。

深鉢については、両区とも深鉢C類、深鉢B類、深鉢A類の順で出土数が多い。しかし、深鉢E類の出土数については両区の間で大きな差がある。B・C区においては426点の出土があるのに対し、A・D区では16点と非常に少ない。また、深鉢C類、深鉢D類、深鉢E類では浅鉢の多くの器種と同様B・C区の出土数がA・D区の出土数を上回るが、深鉢A類、深鉢B類ではA・D区の出土数がB・C区の出土数を上回る。

浅鉢については、非常に器種が多様である。まとまった出土が見られるのは浅鉢A類、浅鉢B類、浅鉢C類、浅鉢F類、浅鉢H類、浅鉢K類、浅鉢L類、浅鉢M類がある。浅鉢では多くの器種においてA・D区の出土数をB・C区の出土数が上回るが、浅鉢F類ではA・D区がB・C区を上回る。また、浅鉢K類ではB・C区で53点とまとまった出土が見られるのに対し、A・D区では1点のみと大きな違いがある。

次に各器種のⅢa層出土数とⅢb層出土数の比率を見る。

全体として出土層位の主体はⅢb層であり、おおよそ60%～80%を占めている。

器種別に見ていくと、深鉢ではB・C区、A・D区それぞれにおいて深鉢A類・深鉢B類に対して深鉢C類のⅢa層出土比率が低いことが指摘できる。また、深鉢E類が深鉢の中では両区ともⅢa層の比率が最も高いことも共通する。一方、深鉢D類のⅢa層の比率は、B・C区では深鉢A類・深鉢B類と近い値を示すのに対し、A・D区では深鉢C類と近い値でやや違いが認められる。

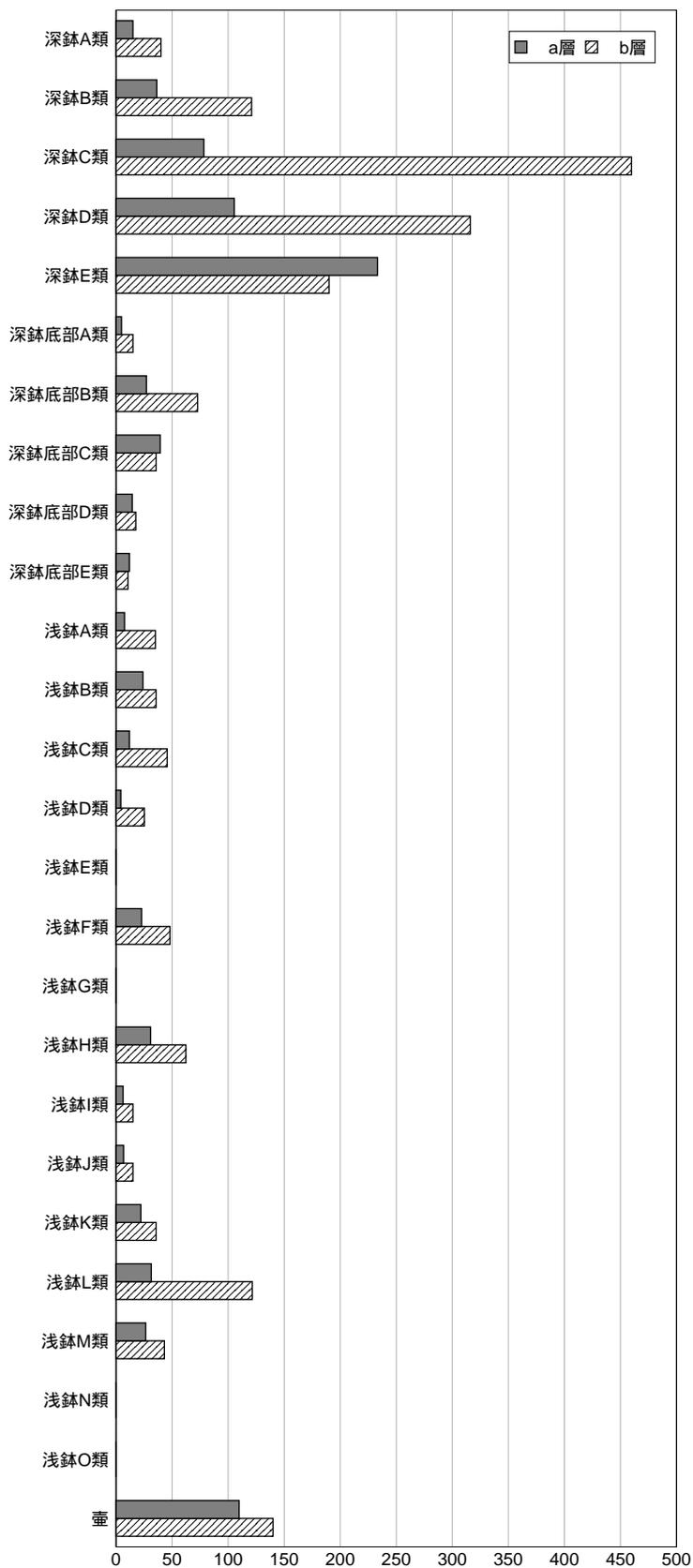
深鉢底部については、深鉢底部A類・深鉢底部B類に対して深鉢底部D類・深鉢底部E類のⅢa層の比率が高く、Ⅲb層の比率が低いというところでB・C区とA・D区の両区で共通するが、深鉢底部C類においては違いが認められる。B・C区での比率は、Ⅲa層52.6%、Ⅲb層47.4%で、A・D区ではⅢa層20.0%、Ⅲb層80.0%という値を示し、B・C区ではⅢa層での出土比率が高い。このことは、深鉢E類の出土状況がB・C区では多数あるのに対し、A・D区では皆無に近い状況であることが関係しているものと考えられる。つまり、深鉢底部C類の一部には深鉢E類、すなわち刻目突帯文土器の底部を含んでいることを表している。

浅鉢については、出土数の比較的安定したものについて見ることにする。浅鉢A類・浅鉢B類・浅鉢C類においてはB・C区では浅鉢A類、浅鉢C類のⅢb層の比率に対して、浅鉢B類のⅢb層の比率が低い。浅鉢F類ではB・C区とA・D区では出土層位の比率に差がある。また、B・C区においては他の器種に対して突帯文土器に伴う浅鉢K類のⅢb層の比率がやや低く、また組織痕土器である浅鉢M類もⅢb層の比率が比較的低い。

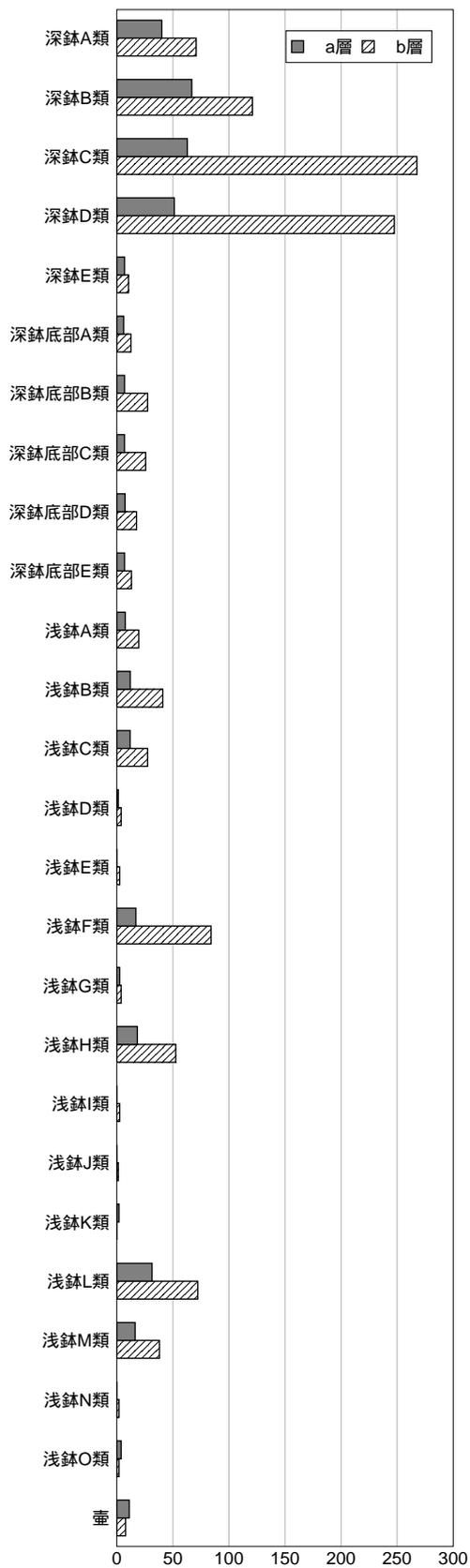
B・C区の壺についても他の器種に比べⅢb層出土の比率がやや低いようである。

第82表 器種別出土数（出土位置記録分）

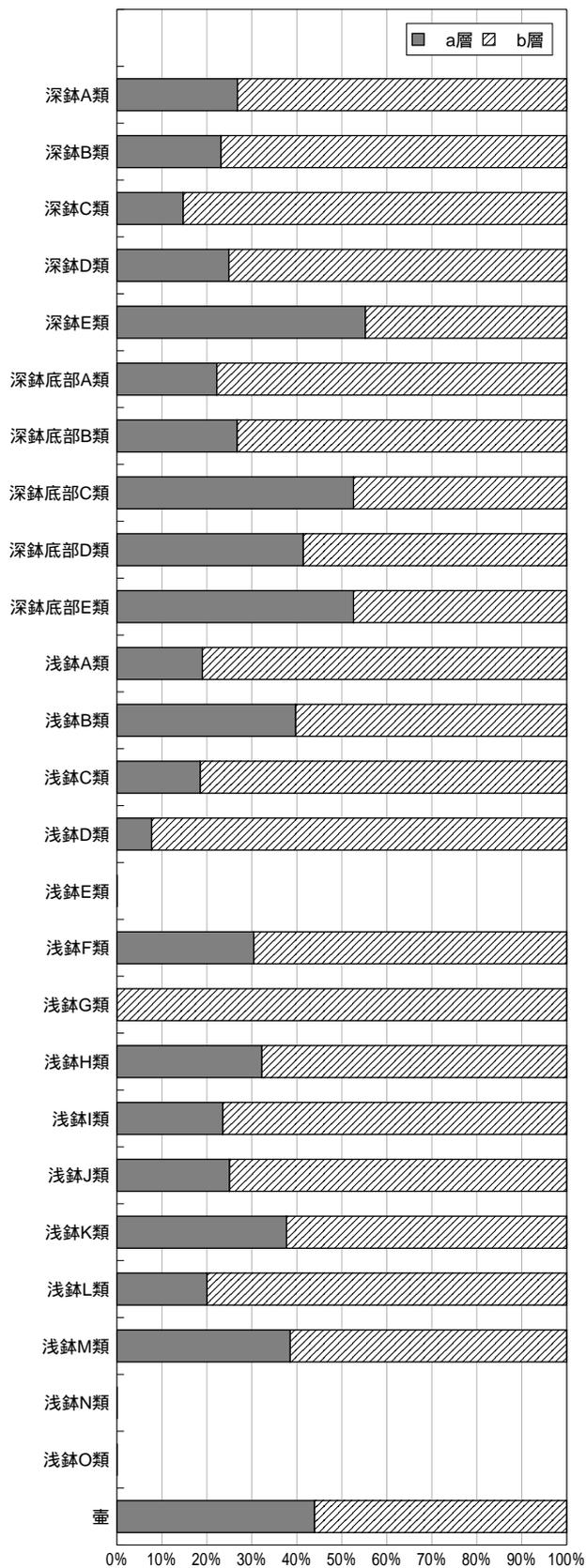
器種	B・C区					A・D区				
	Ⅲ a層		Ⅲ b層		計	Ⅲ a層		Ⅲ b層		計
深鉢 A 類	15	26.8%	41	73.2%	56	39	35.8%	70	64.2%	109
深鉢 B 類	37	23.1%	123	76.9%	160	66	35.7%	119	64.3%	185
深鉢 C 類	80	14.7%	463	85.3%	543	62	18.8%	268	81.2%	330
深鉢 D 類	105	24.9%	317	75.1%	422	50	16.8%	248	83.2%	298
深鉢 E 類	235	55.2%	191	44.8%	426	6	37.5%	10	62.5%	16
深鉢底部 A 類	4	22.2%	14	77.8%	18	6	33.3%	12	66.7%	18
深鉢底部 B 類	27	26.7%	74	73.3%	101	7	21.2%	26	78.8%	33
深鉢底部 C 類	40	52.6%	36	47.4%	76	6	20.0%	24	80.0%	30
深鉢底部 D 類	12	41.4%	17	58.6%	29	7	30.4%	16	69.6%	23
深鉢底部 E 類	10	52.6%	9	47.4%	19	7	36.8%	12	63.2%	19
浅鉢 A 類	8	19.0%	34	81.0%	42	6	25.0%	18	75.0%	24
浅鉢 B 類	23	39.7%	35	60.3%	58	11	22.0%	39	78.0%	50
浅鉢 C 類	10	18.5%	44	81.5%	54	12	31.6%	26	68.4%	38
浅鉢 D 類	2	7.7%	24	92.3%	26	0	0.0%	3	100.0%	3
浅鉢 E 類	0		0		0	0	0.0%	1	100.0%	1
浅鉢 F 類	21	30.4%	48	69.6%	69	16	15.8%	85	84.2%	101
浅鉢 G 類	0	0.0%	1	100.0%	1	2	40.0%	3	60.0%	5
浅鉢 H 類	29	32.2%	61	67.8%	90	18	26.1%	51	73.9%	69
浅鉢 I 類	4	23.5%	13	76.5%	17	0	0.0%	1	100.0%	1
浅鉢 J 類	4	25.0%	12	75.0%	16	0	0.0%	1	100.0%	1
浅鉢 K 類	20	37.7%	33	62.3%	53	1	100.0%	0	0.0%	1
浅鉢 L 類	30	20.0%	120	80.0%	150	30	29.4%	72	70.6%	102
浅鉢 M 類	25	38.5%	40	61.5%	65	17	31.5%	37	68.5%	54
浅鉢 N 類	0		0		0	0	0.0%	2	100.0%	2
浅鉢 O 類	0		0		0	4	80.0%	1	20.0%	5
壺	108	43.9%	138	56.1%	246	11	52.4%	10	47.6%	21



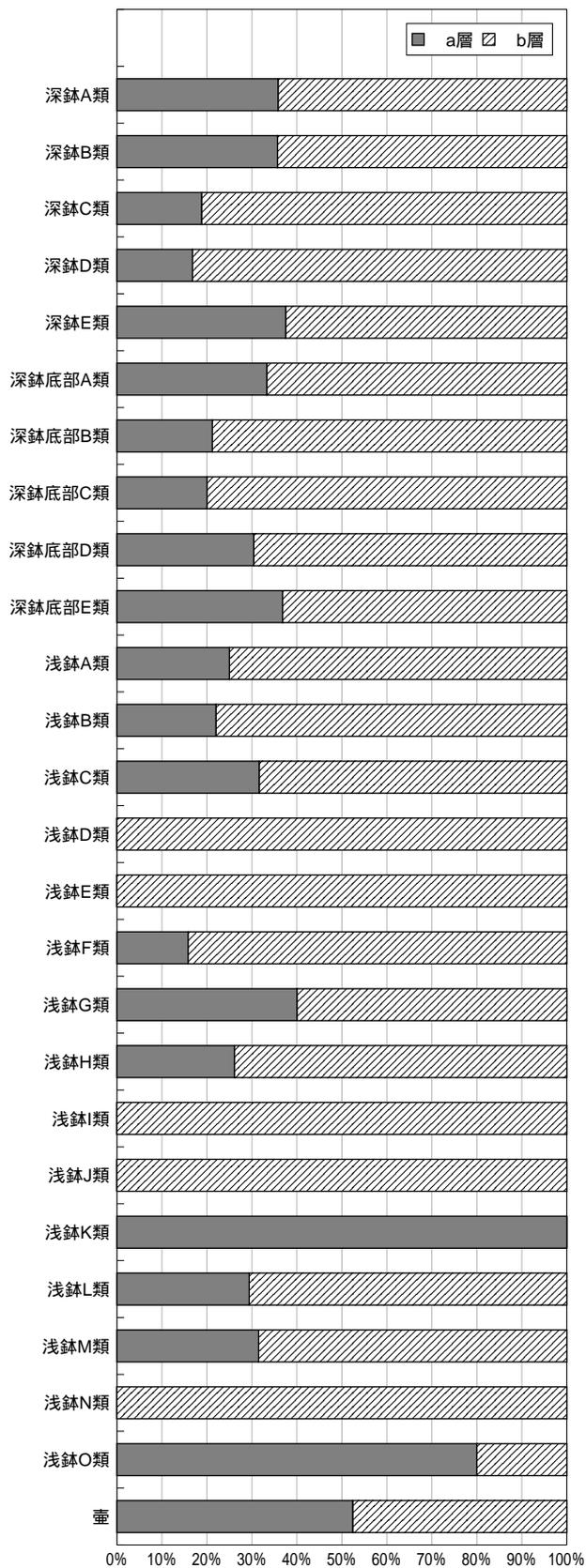
第190圖 B・C区器種別出土数



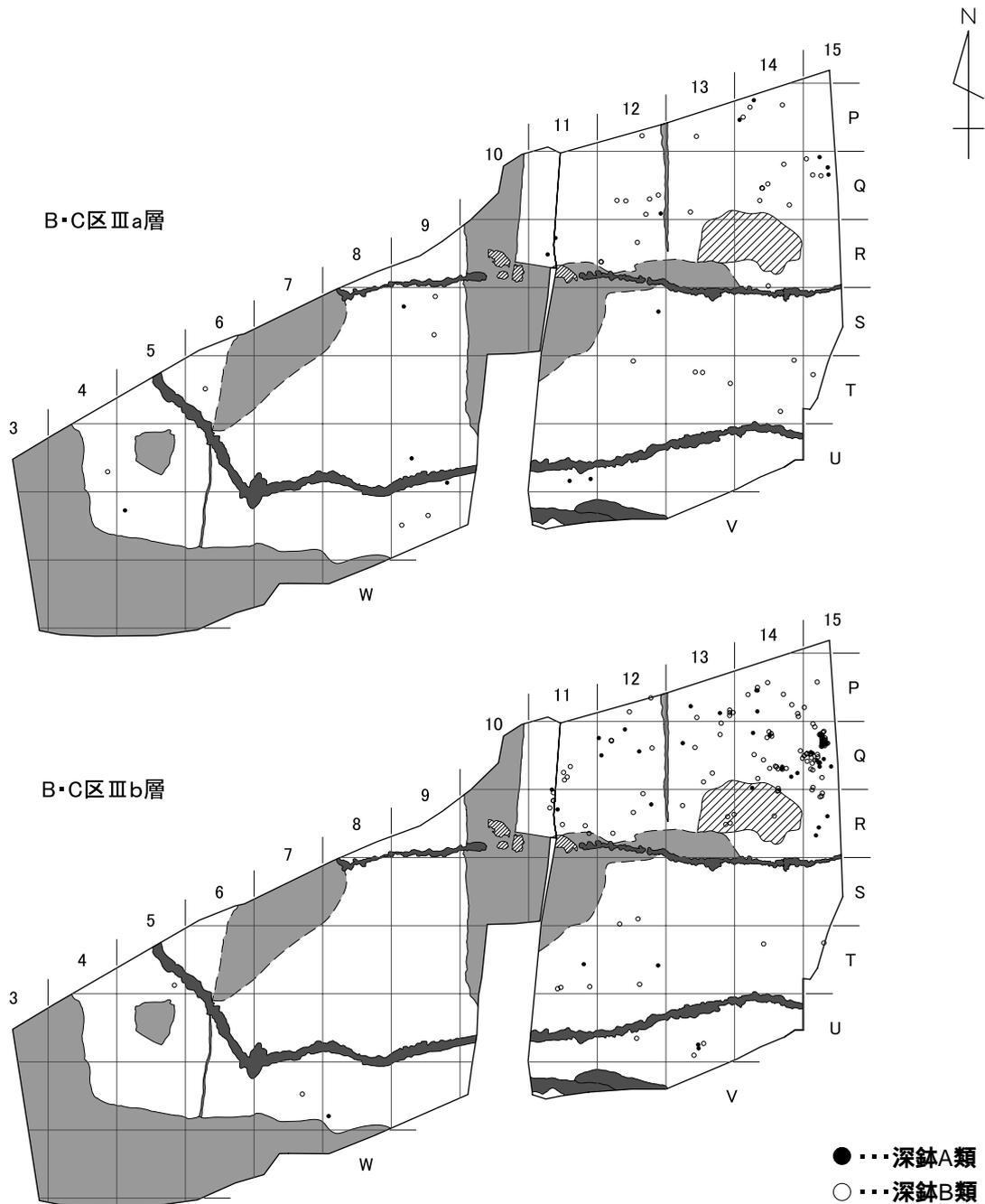
第191圖 A・D区器種別出土数



第192図 B・C区器種別出土層位の比率



第193図 A・D区器種別出土層位の比率

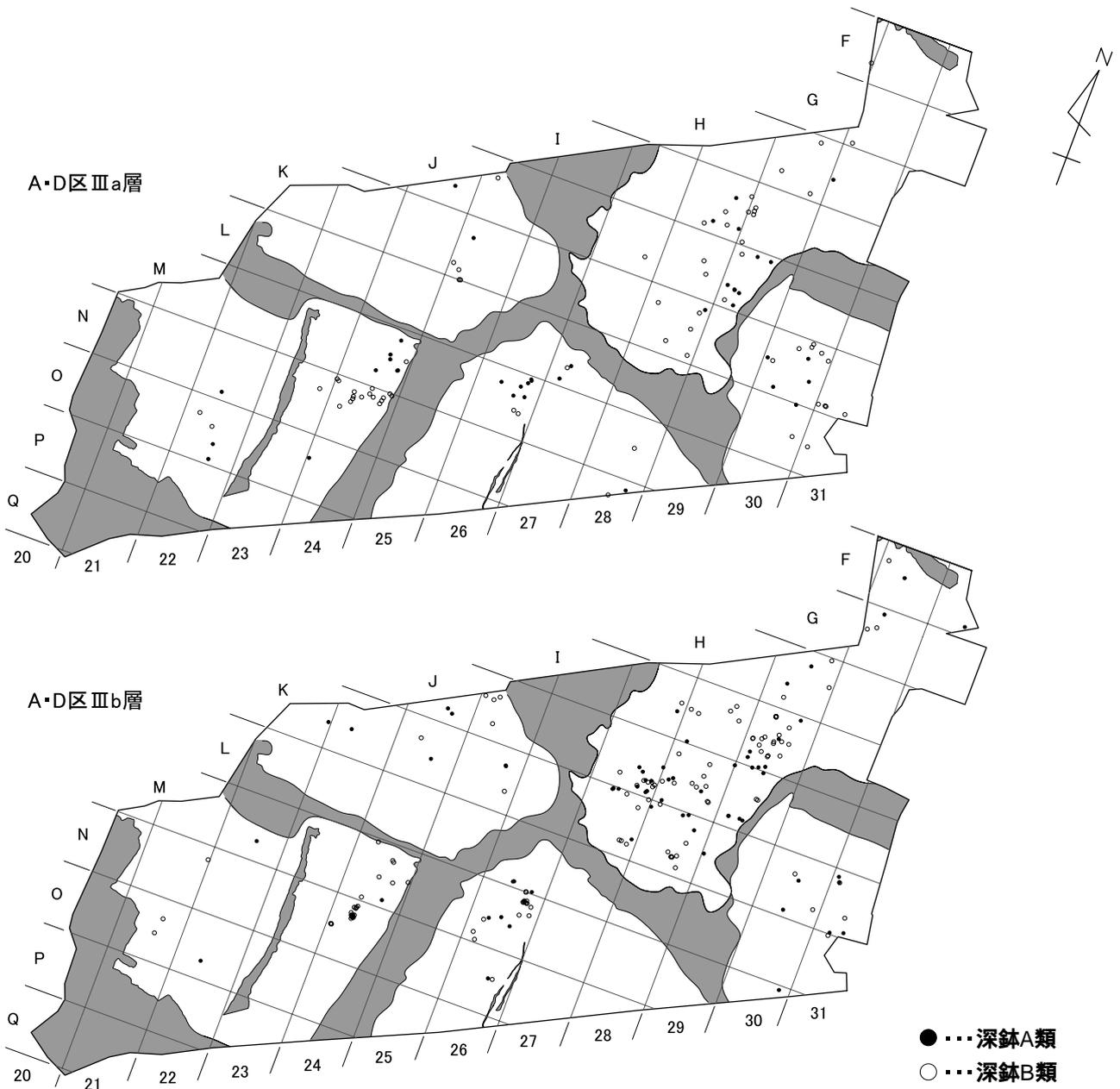


第194図 B・C区深鉢A類・深鉢B類の分布 (S = 1/800)

#### B・C区深鉢A類・深鉢B類の分布

深鉢A類は器種判断の材料となる属性が少ないため、断定できるものがある程度残りの良い口縁部に限られ、量的には少ない。また、口縁部形態が深鉢A類に似る深鉢B類もあるのでそのことも考慮する必要がある。出土はⅢb層からが多く、また、B 1区を中心に分布する。B 2区、B 3区、C区ではほとんど見られない。

深鉢B類の分布も深鉢A類と似る。Ⅲa層よりⅢb層の出土が多くB 1区を中心に分布し、わずかばかりの出土がB 2区、B 3区にある。C区においてはほとんど出土しない。

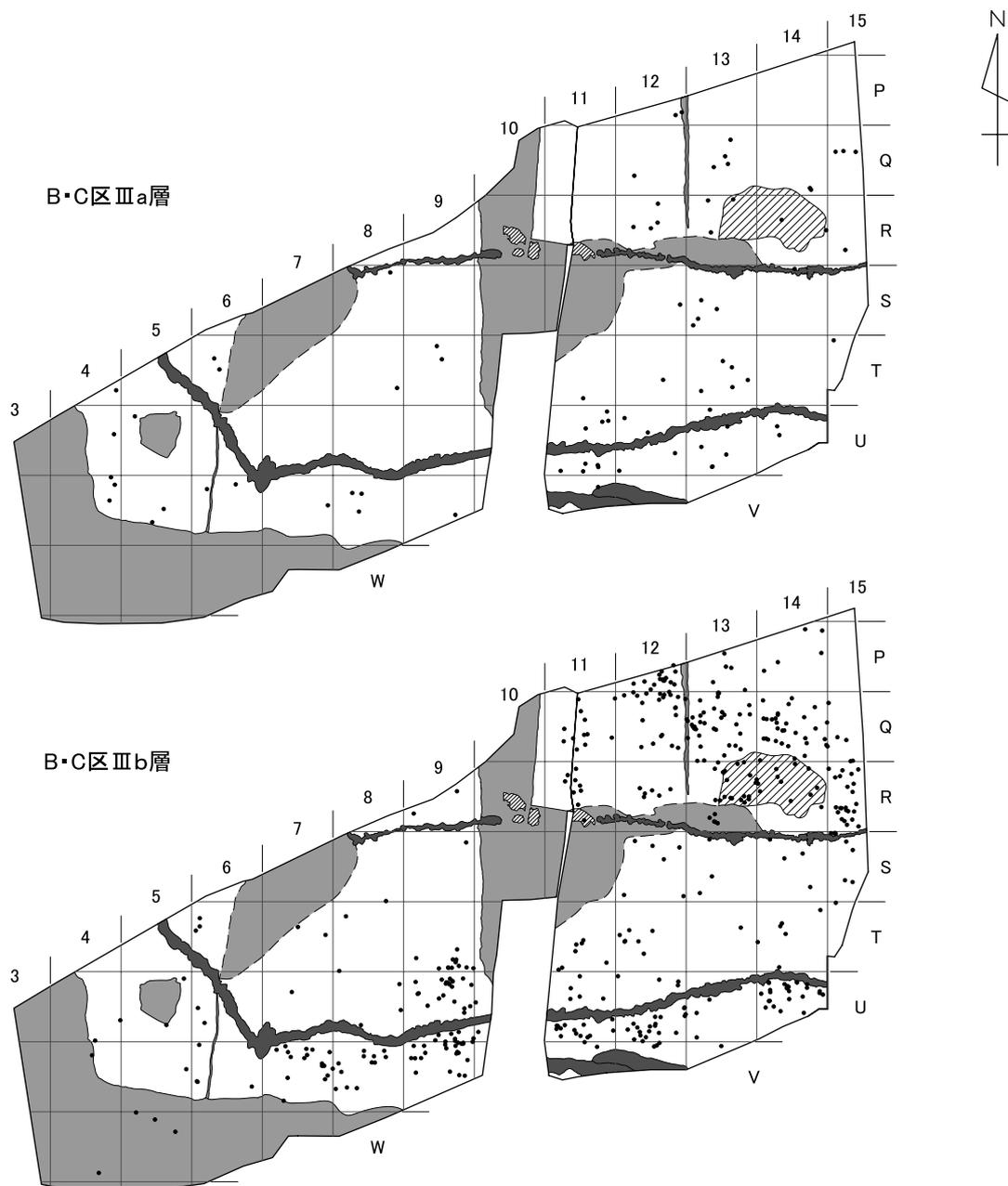


第195図 A・D区深鉢A類・深鉢B類の分布 (S = 1/800)

#### A・D区深鉢A類・深鉢B類の分布

深鉢A類の出土はⅢ a層よりⅢ b層の割合が高い。分布のまとまりは大きく分けて3つある。A 1区, A 3区の北側部分, A 5区の北東部分である。攪乱や削平の影響を考えれば, これらの3つのまとまりは一連のもので弧状に分布すると考えることもできる。

深鉢B類もⅢ b層を主体に出土する。深鉢A類同様, A 1区, A 4区の北側部分, A 5区の北東部分にまとまって分布し弧状の広がりを持つ可能性がある。また, A 2区, A 3区の北側部分, A 5区の東側部分にもわずかながらの分布が見られる。

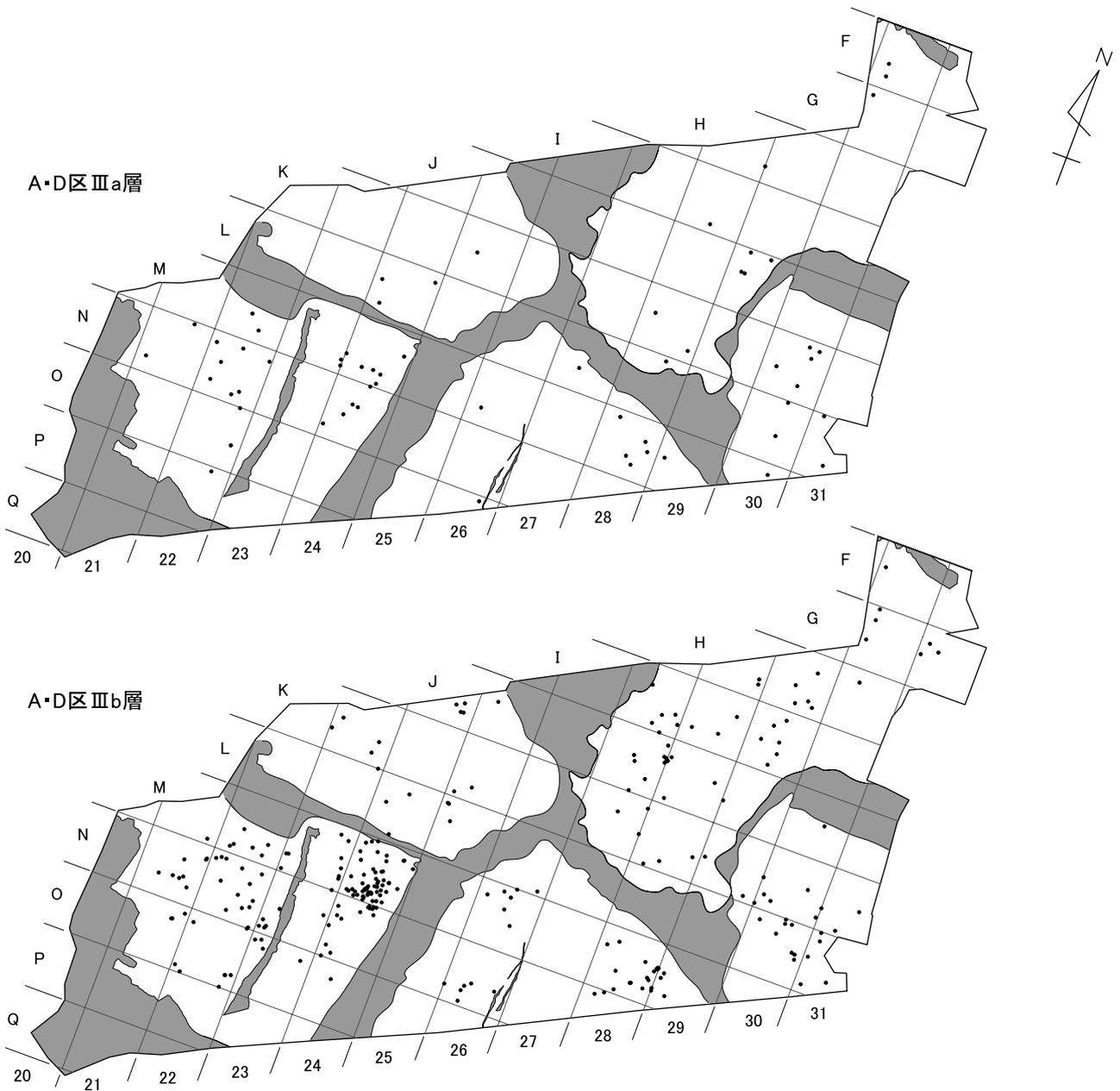


第196図 B・C区深鉢C類の分布 (S = 1/800)

**B・C区深鉢C類の分布**

深鉢C類は圧倒的にⅢa層からの出土よりⅢb層からの出土が多い。深鉢C類は器面の色調が橙色系を呈し、器面調整は貝殻条痕の後ナデもしくは研磨を施すことが多く、他の深鉢類と区別が付きやすい。

分布は大きく二つに分かれる。一つはB・C区を西から東へと走る雨裂1の北側部分であるB 1区である。もう一つはB・C区の南側を東西に走る雨裂2の両岸周辺である。この二つのまとまりはさらに細分が可能であり、口縁部文様帯に施された沈線の本数を基準として後述する。

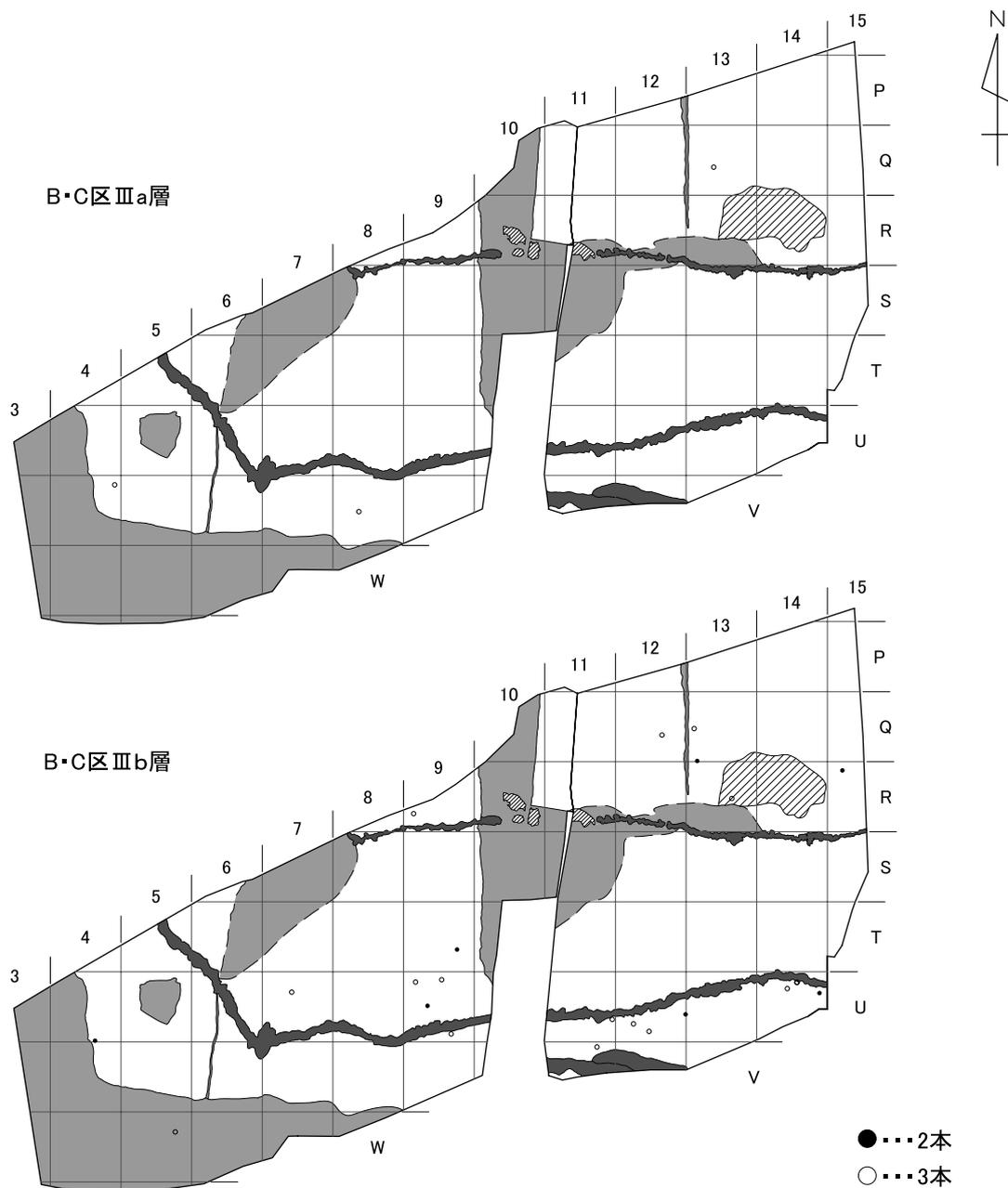


第197図 A・D区深鉢C類の分布 (S = 1/800)

### A・D区深鉢C類の分布

深鉢C類は圧倒的にⅢa層からの出土よりⅢb層からの出土が多い。B・C区でも指摘したように橙色系の赤味の強い器面色調と貝殻条痕の後ナデもしくは研磨を施す外面の器面調整から断定できるものが多い。

出土層位の主体はⅢb層にある。分布は、まずA5区の東側部分が目に付く。A5区の西側やA3区、あるいはA4区の北側の分布についても一つのまとまりとして捉えられるかもしれない。また、A1区では集中は見せないが満遍なく出土し、密度が高い。A2区の南側部分やA4区の南東側部分でも一定の出土がある。口縁部文様帯の沈線の本数を基準として細分を後述する。



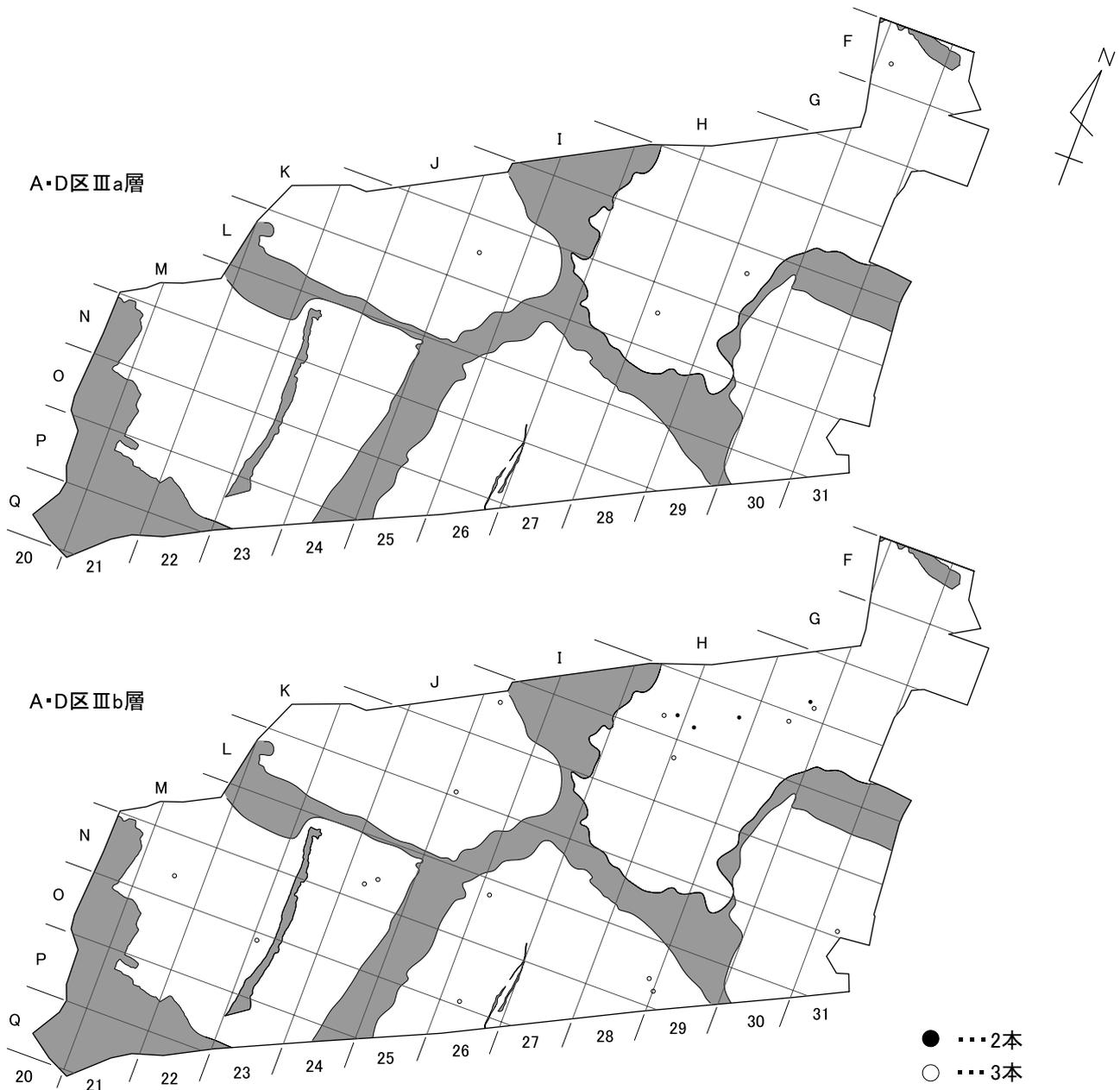
第198図 B・C区深鉢C類口縁部（文様帯沈線2本・3本）の分布（S = 1/800）

**B・C区深鉢C類口縁部（文様帯沈線2本・3本）の分布**

口縁部文様帯に2本の沈線を施すものは、いずれもⅢb層からの出土である。出土点数は少なく、B1区で2点、B3区で2点、C2区で2点、C3区で1点があるのみである。数量的に少ないので断定できないが、B1区と雨裂2周辺という二つのまとまりに分けることが可能か。

口縁部文様帯に3本の沈線を施すものも、やはり出土はⅢb層からの出土がほとんどである。B1区で3点の出土が見られるほかは、すべて雨裂2周辺である。

口縁部文様帯の沈線が2本のものも3本のものも雨裂をまたいで分布している。

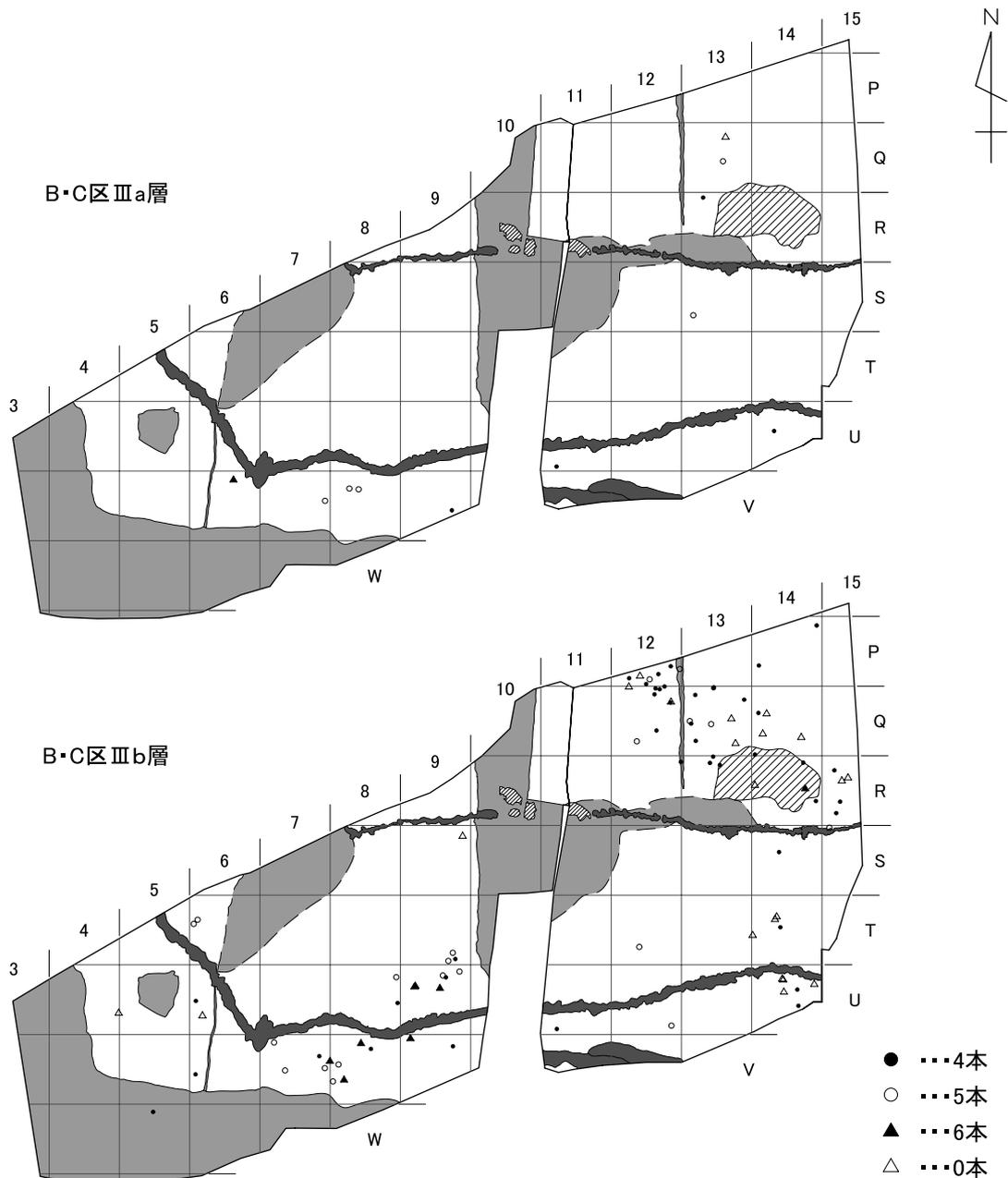


第199図 A・D区深鉢C類口縁部(文様帯沈線2本・3本)の分布(S = 1/800)

**A・D区深鉢C類口縁部(文様帯沈線2本・3本)の分布**

口縁部文様帯に2本の沈線を施すものは、いずれもⅢb層からの出土である。分布はA 1区の北側部分に限られ、そのほかの小区画では認められない。

口縁部文様帯に3本の沈線を施すものは、出土層位の主体はⅢb層にある。各小区画に少数ではあるが点在する状況で、まとまりとして捉えることはできない。



第200図 B・C区深鉢C類口縁部（文様帯沈線4本・5本・6本・0本）の分布（S = 1/800）

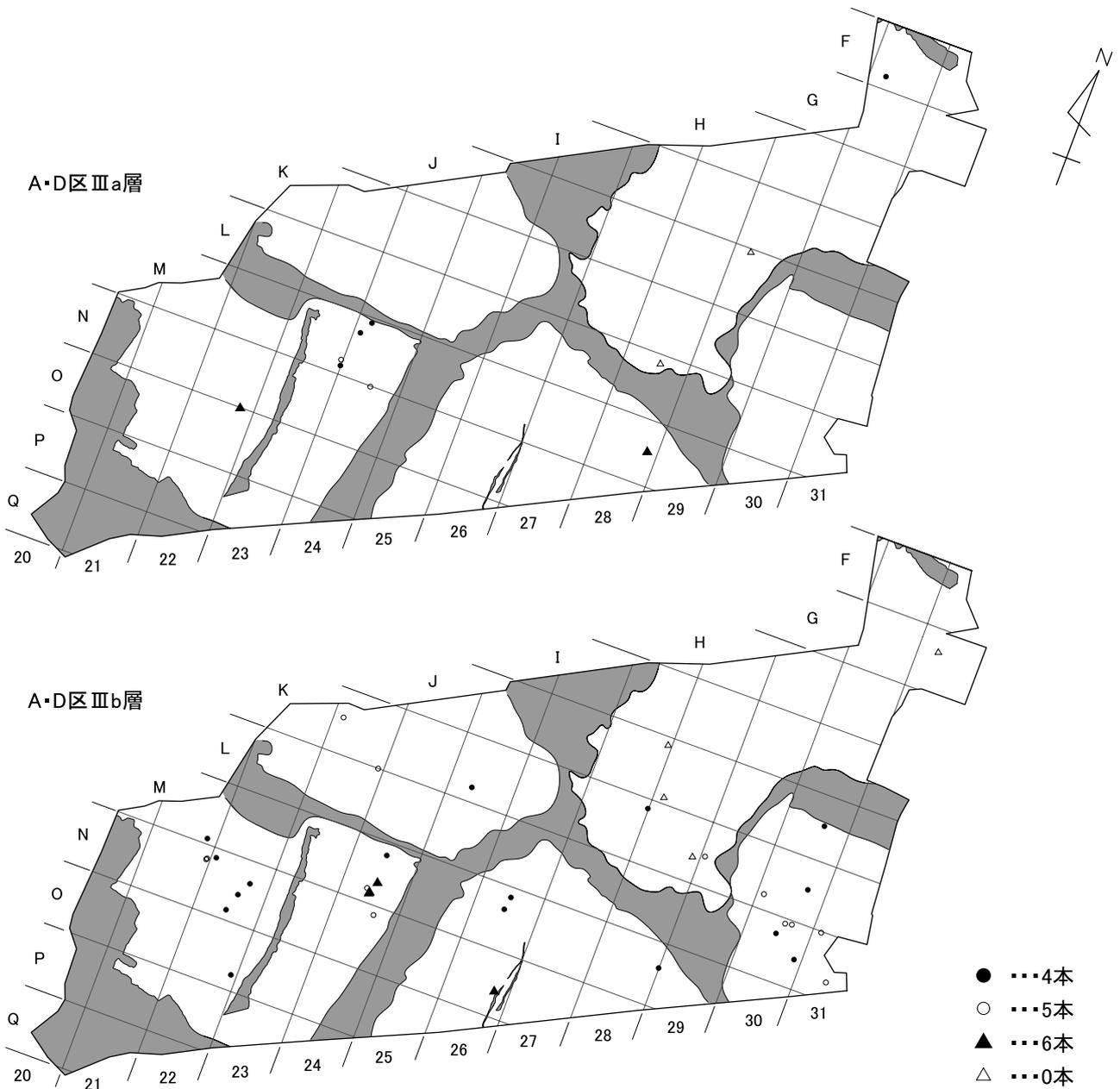
**B・C区深鉢C類口縁部（文様帯沈線4本・5本・6本・0本）の分布**

口縁部文様帯に施された沈線の本数に限らず、いずれもほとんどがⅢb層からの出土で、Ⅲa層からの出土はわずかである。

4本のもは、C区南東部分の雨裂2周辺でわずかに見られ、大部分はB 1区からの出土である。5本のもも4本のものと同様の分布を見せる。

6本のもはC区南東部分の雨裂2周辺でまとまっており、B 1区でも1点が出土する。

0本のもはC区で3点が散在するが、残りは大きく二つのまとまりを見せる。一つはB 1区で、もう一つはB区南東隅の部分である。



第201図 A・D区深鉢C類口縁部（文様帯沈線4本・5本・6本・0本）の分布（S = 1/800）

**A・D区深鉢C類口縁部（文様帯沈線4本・5本・6本・0本）の分布**

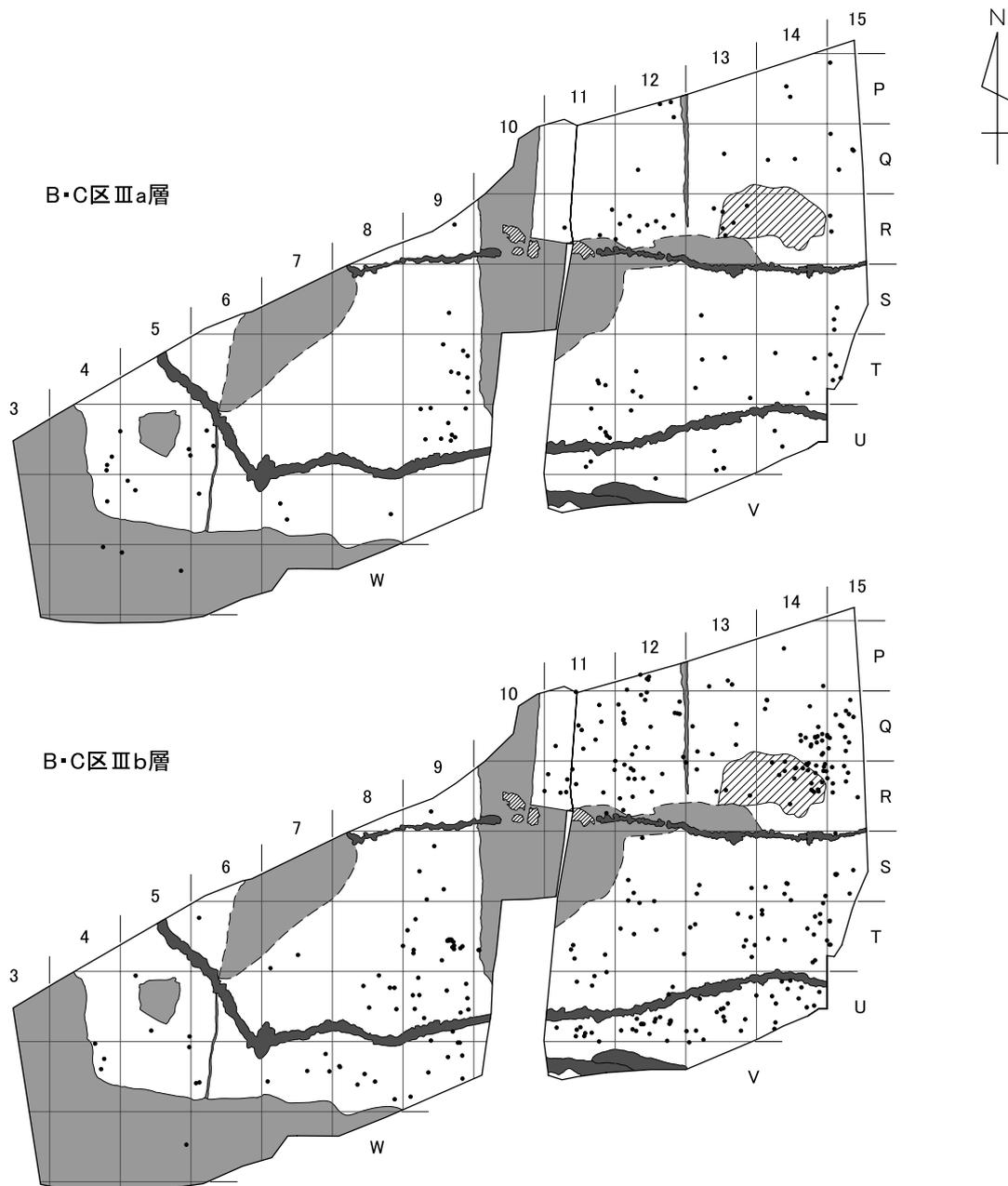
沈線の本数に限らず、いずれもⅢa層よりⅢb層からの出土数が多い。いずれも出土数が少なく分布を追うには不十分なところもある。

4本のものはA 5区の西側部分にややまとまり、ほかは各小区画に点在する。

5本のものはA 4区以外の各小区画に点在するが、A 2区にややまとまる。

6本のものはA 5区東側部分に2点が出土するくらいで、まとまりは捉えられない。

0本のものの出土はA 1区に限られる。

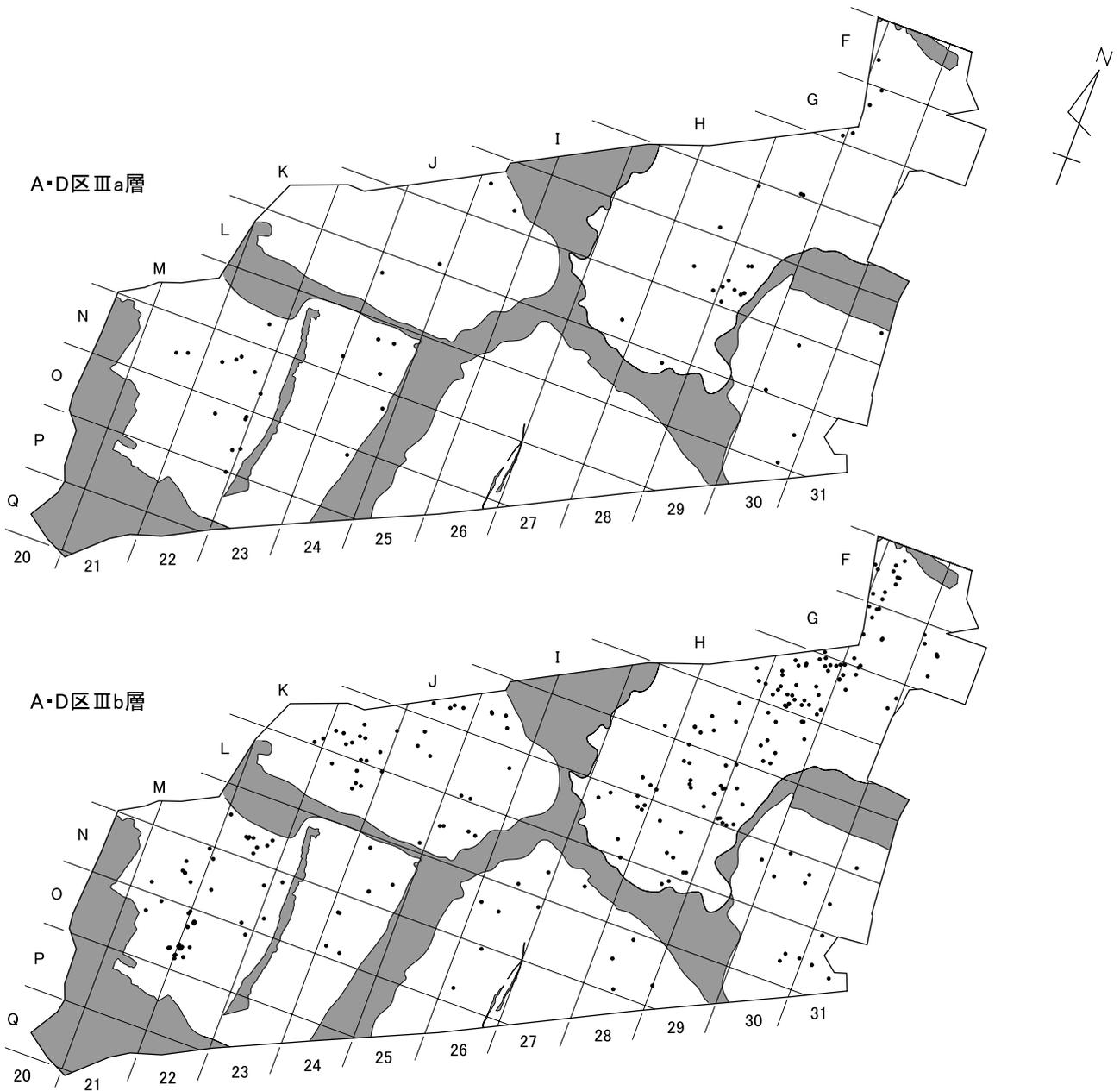


第202図 B・C区深鉢D類の分布 (S = 1/800)

### B・C区深鉢D類の分布

出土層位の主体はⅢ b層にある。深鉢D類は貼り付けを持つものや沈線間の幅が広い平行沈線や弧状沈線を施すものなどがある。また胎土に小礫を多量に含む薄手のものが一定量含まれ、これらは胴部片であっても特定がたやすい。

まとめりとしては大きく3つに分かれる。雨裂1の北側、B 1区でまず二つのまとめりが見られる。東西に分かれるが、特に東側の出土は集中的である。また、B 3区を中心に雨裂2の周辺でも出土が多く、B区のさらに東側へも出土域の広がりがあることを推測させる。C区の西側になると出土は希薄である。

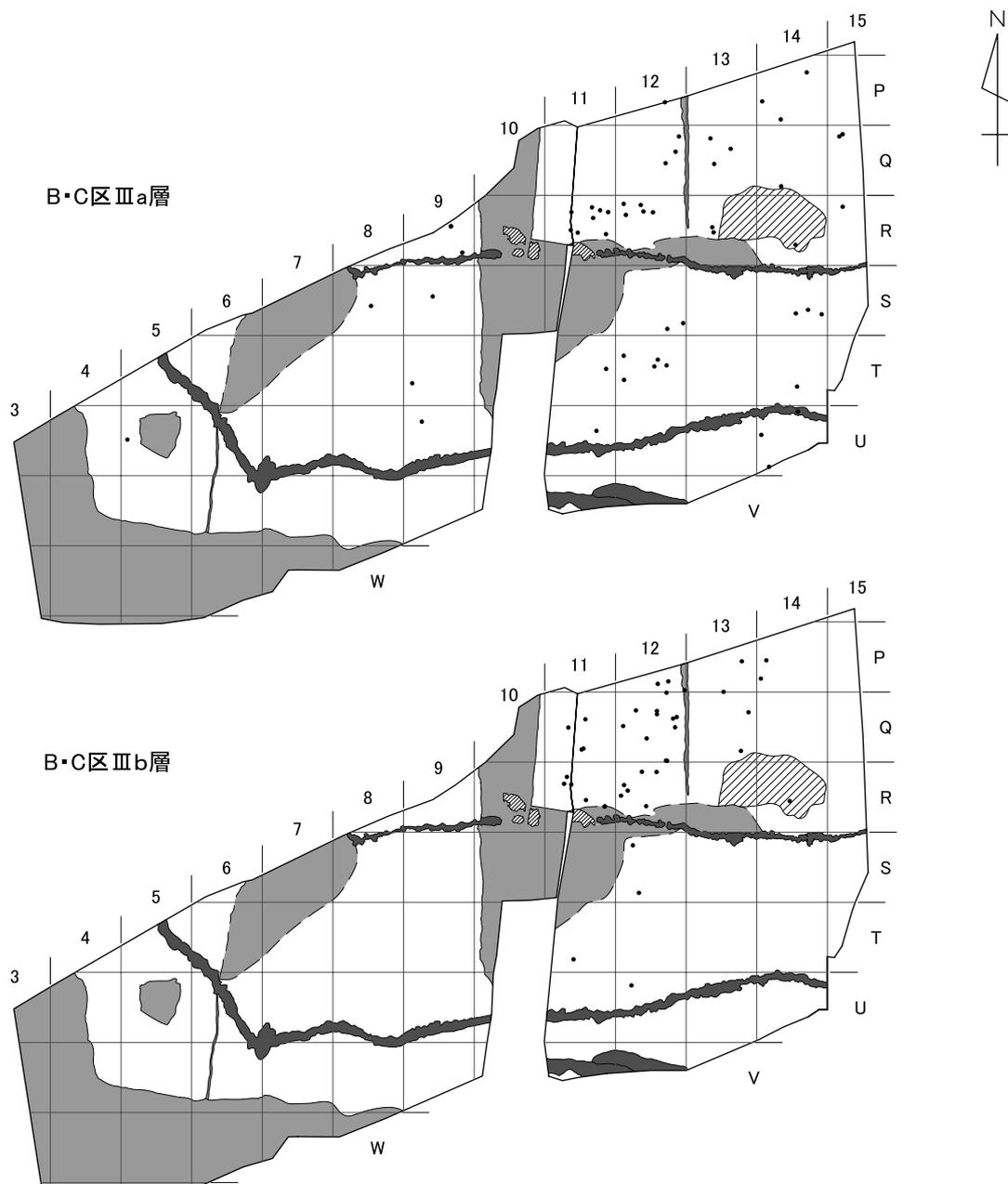


第203図 A・D区深鉢D類の分布 (S = 1/800)

**A・D区深鉢D類の分布**

出土層位の主体はⅢb層にある。

まず、A 1区において帯状に比較的広範囲の出土のまとまりが捉えられる。中でもグリッドH 29付近は集中的である。また、A 3区の西側やA 5区の西側でも比較的まとまった出土が見られる。あるいはこの二つのまとまりは一連のものとして捉えることも可能かもしれない。A 2区、A 4区では散在的である。

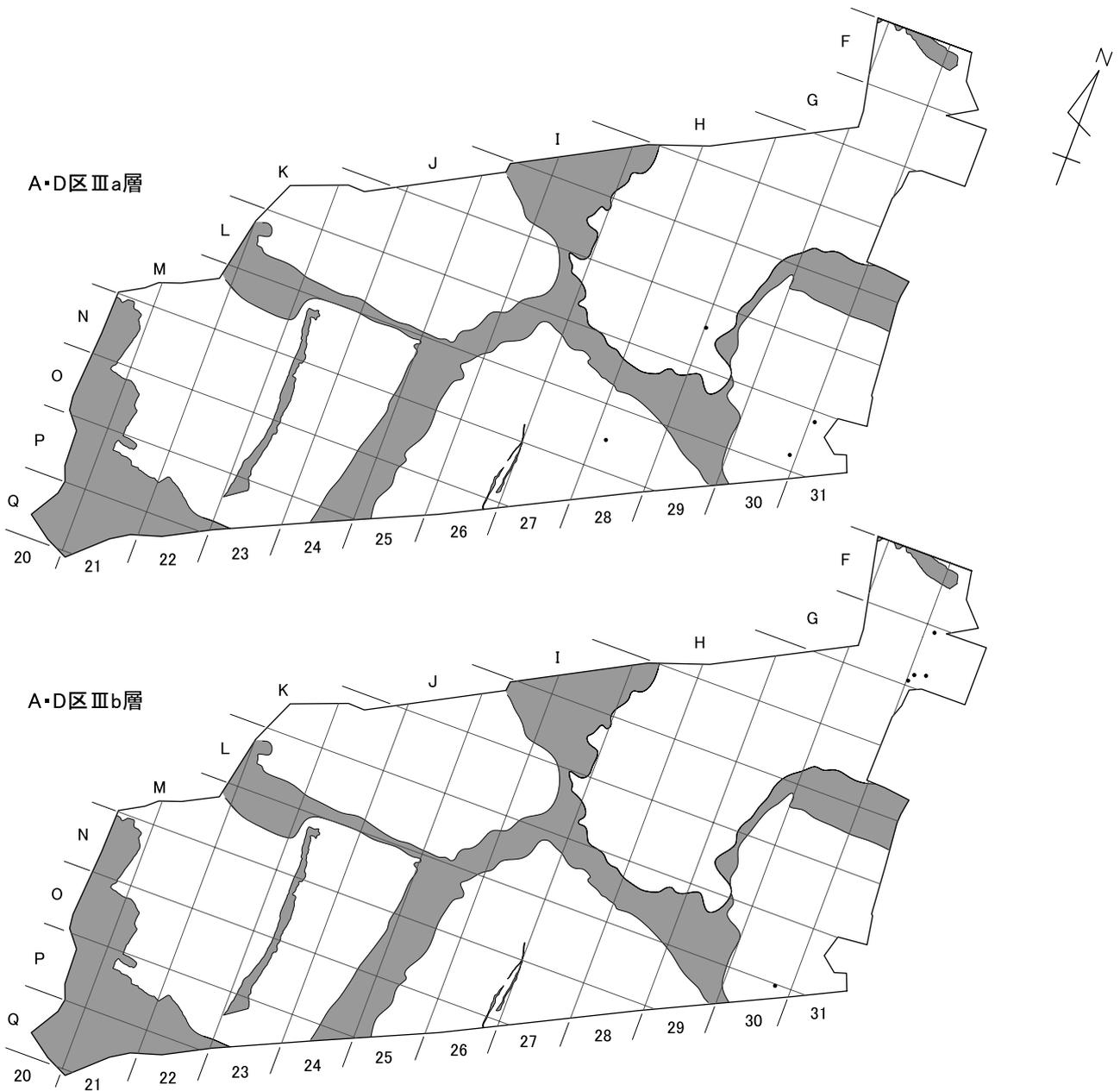


第204図 B・C区深鉢E類（刻目原体・指）の分布（S = 1/800）

#### B・C区深鉢E類（刻目原体・指）の分布

出土層位はⅢ a層の出土数がⅢ b層の出土数をやや上回る。

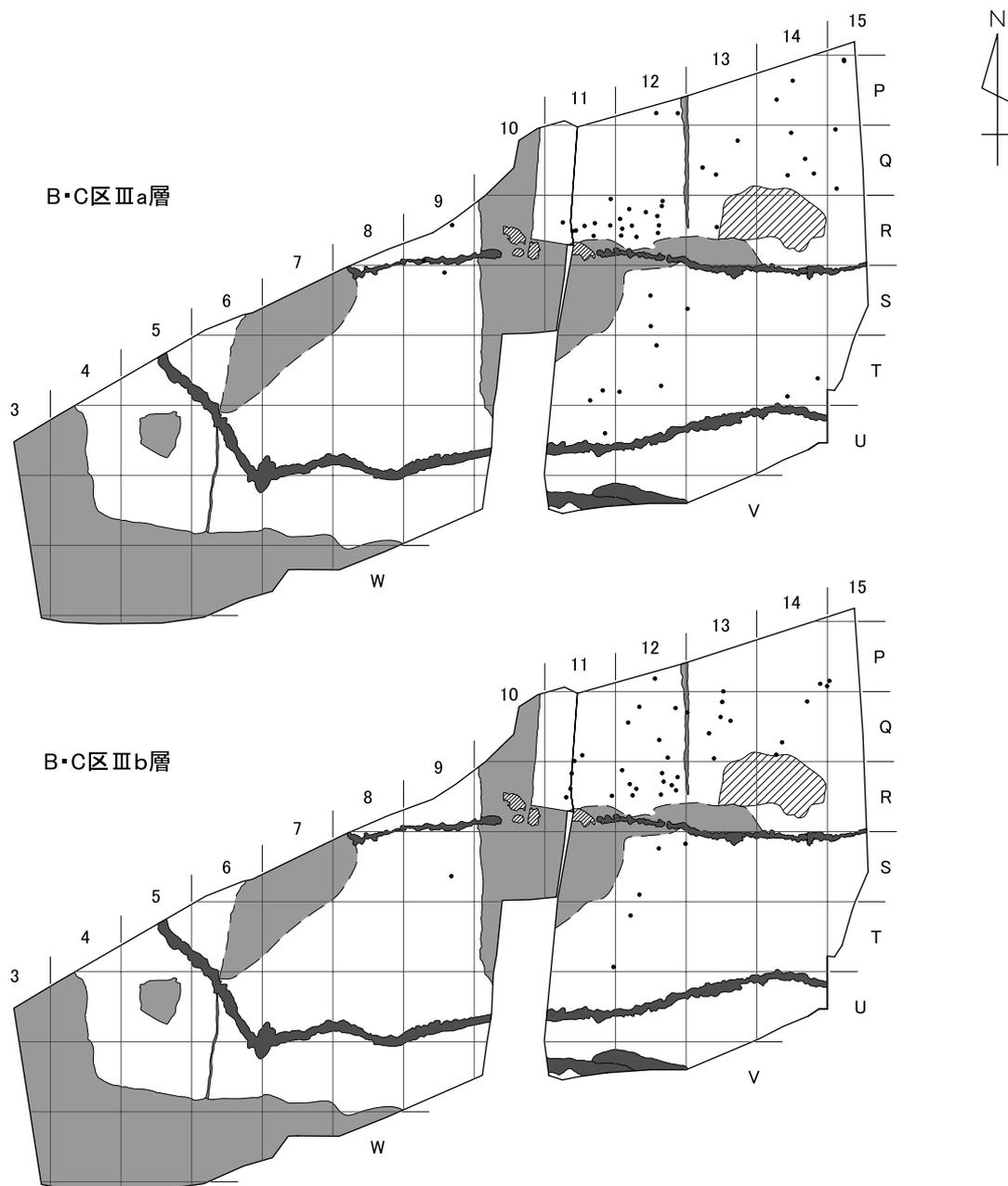
Ⅲ b層の分布はB 1区の西側部分にほぼ限定される。一方Ⅲ a層ではグリッドQ 11付近は削平を受けて出土がないが、Ⅲ b層同様B 1区の西側部分に集中を見せる。しかしⅢ b層に比べ分布域は広い。主にB 1区の東側部分やB 2区に広がりが見られ、Ⅲ b層の出土状況が地形に沿って拡散したような状況である。



第205図 A・D区深鉢E類(刻目原体・指)の分布(S = 1/800)

**A・D区深鉢E類(刻目原体・指)の分布**

B・C区に対して非常に出土量は希薄である。出土はA区の東側に限られ、まとまりとして捉えられるのはA 1区のグリッドG 31の付近があるが、ほかは散在的で、調査区外からの流入と見たほうが良いであろう。

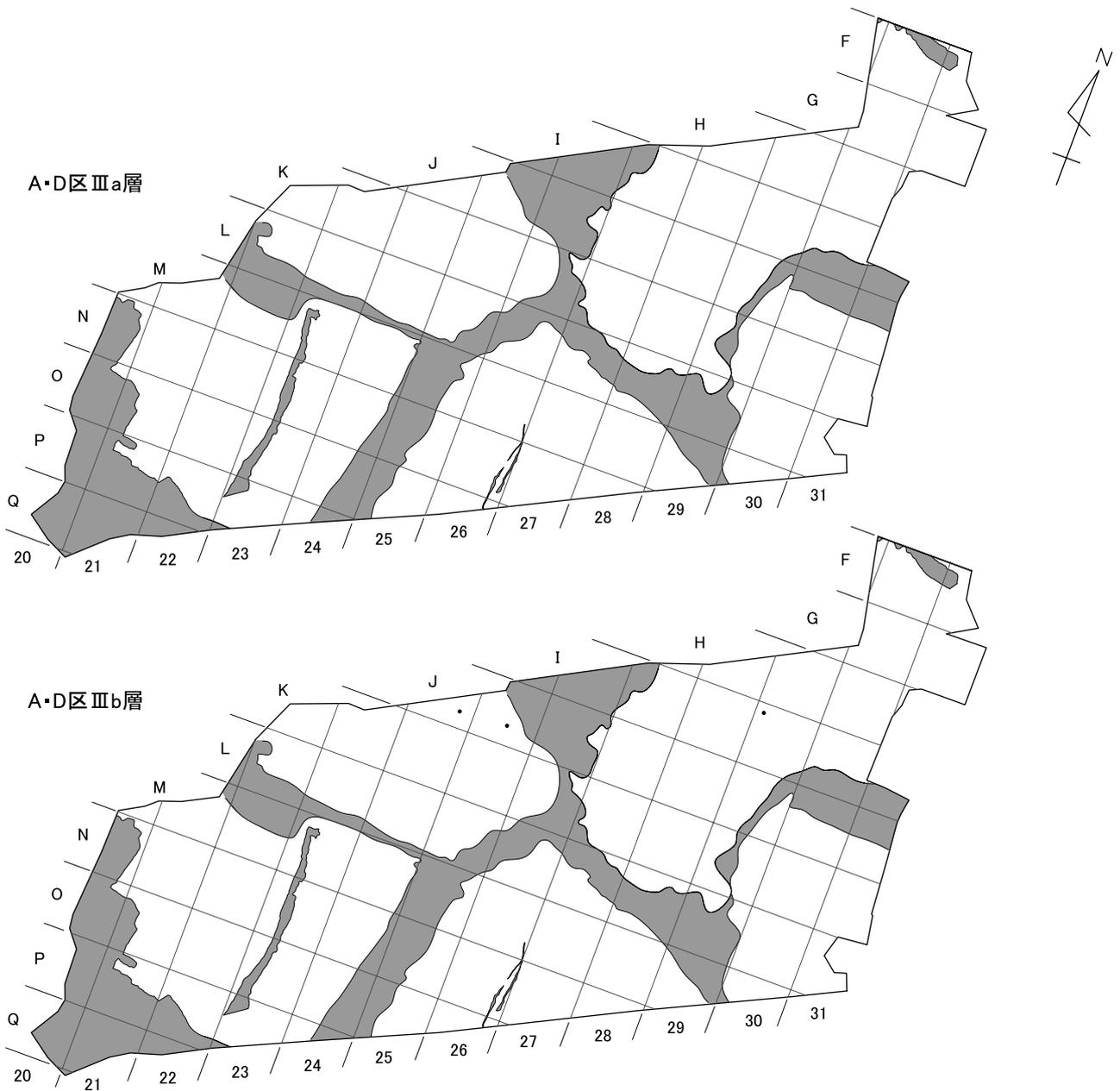


第206図 B・C区深鉢E類 (刻目原体・棒) の分布 (S = 1/800)

**B・C区深鉢E類 (刻目原体・棒) の分布**

出土数はⅢ a層がⅢ b層をやや上回る。

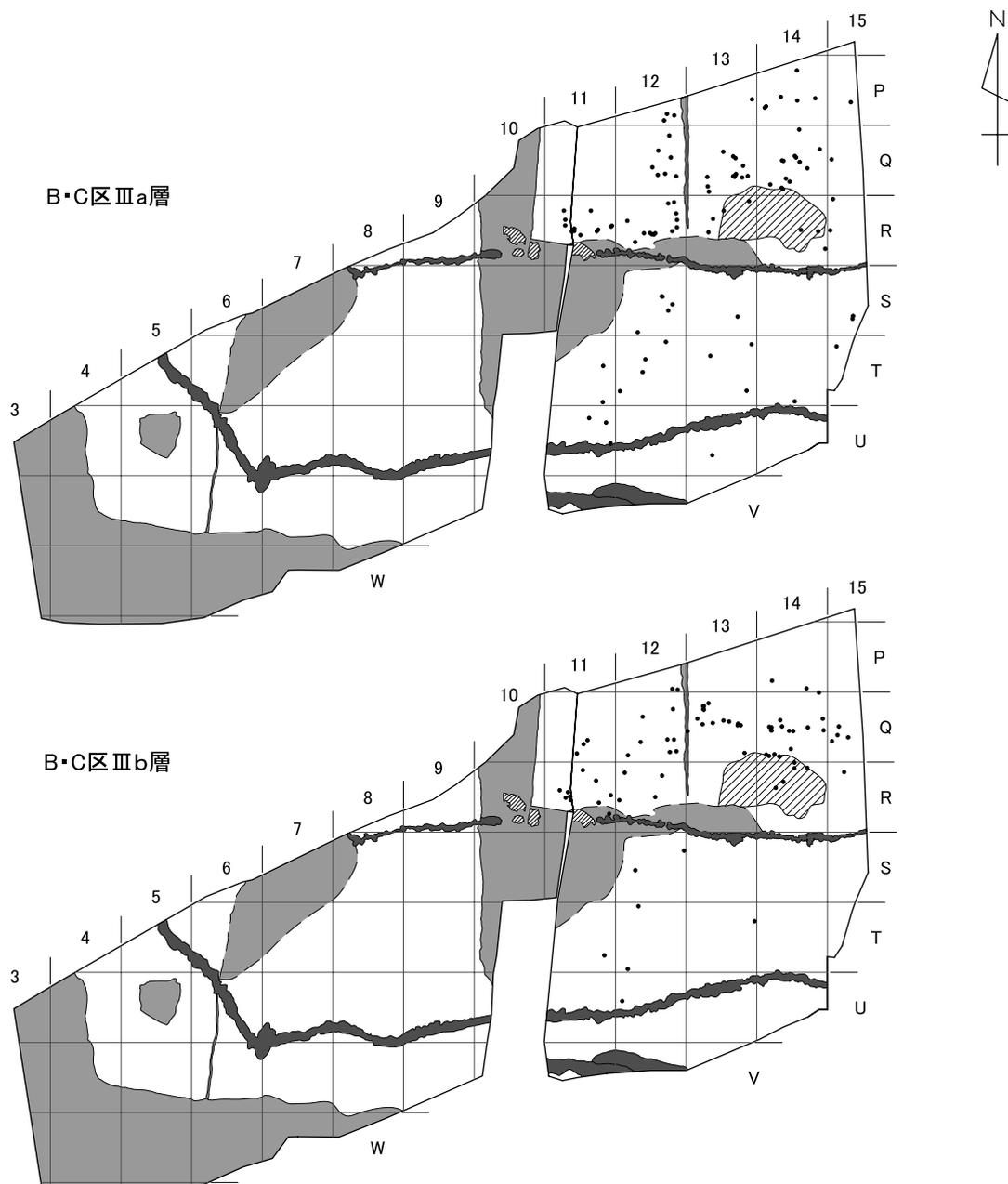
分布状況は指による刻目を施すものと同様で、Ⅲ b層においてはB 1区の西側部分に偏って出土するが、Ⅲ a層ではその分布域に加え、さらに南側と東側に広がりを見せる。原位置からの拡散状況として捉えられよう。



第207図 A・D区深鉢E類（刻目原体・棒）の分布（S = 1/800）

**A・D区深鉢E類（刻目原体・棒）の分布**

B・C区の出土数に対してA・D区での出土数はきわめて少ない。Ⅲb層においてグリッドJ 24, J 25, I 29でそれぞれ1点ずつが出土するのみである。A 2区, A 4区, A 5区での出土はⅢa層, Ⅲb層いずれも皆無である。

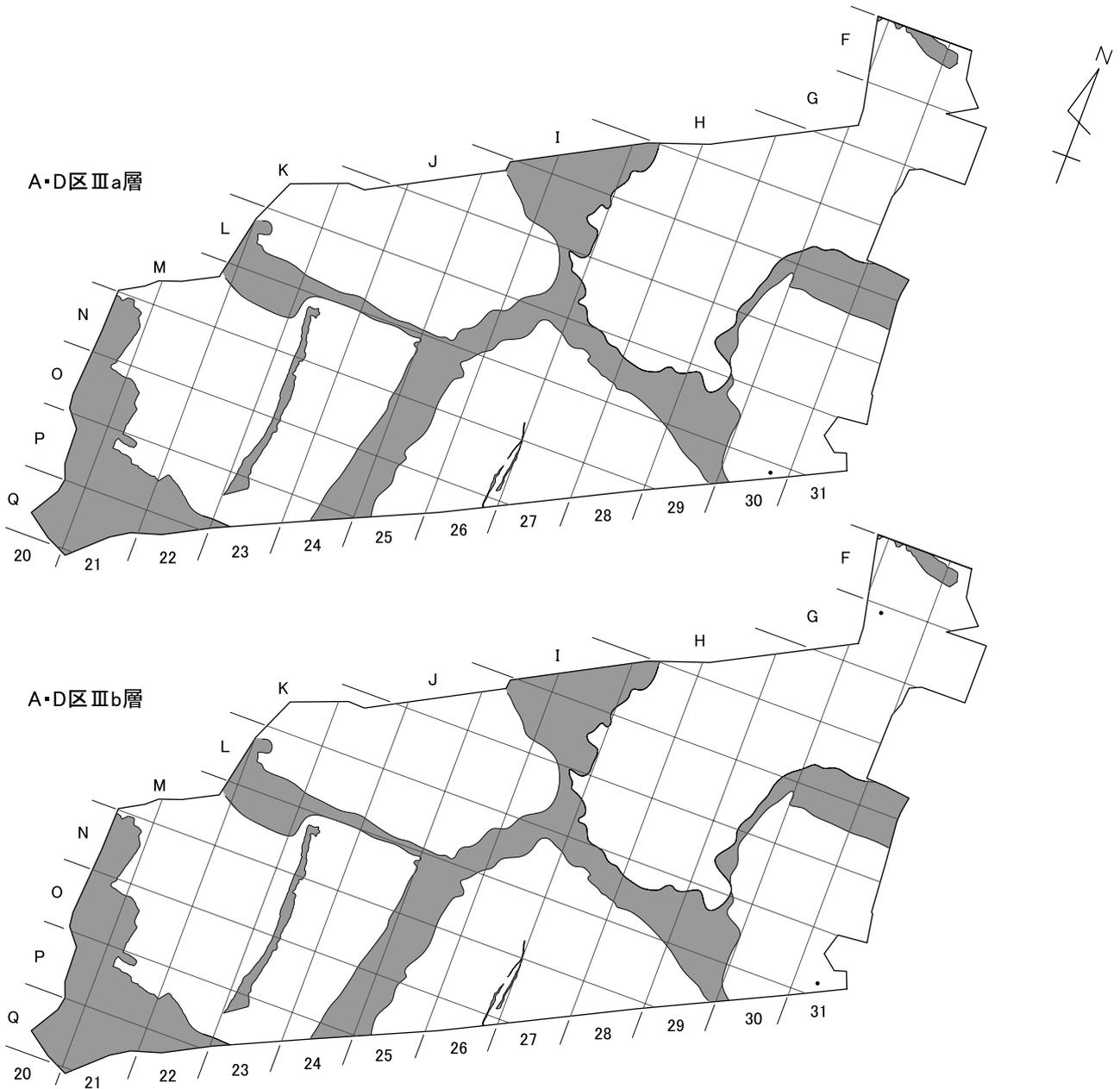


第208図 B・C区深鉢E類（刻目原体・ヘラ）の分布（S = 1/800）

#### B・C区深鉢E類（刻目原体・ヘラ）の分布

出土数はⅢ a層のほうがⅢ b層よりもやや多い。

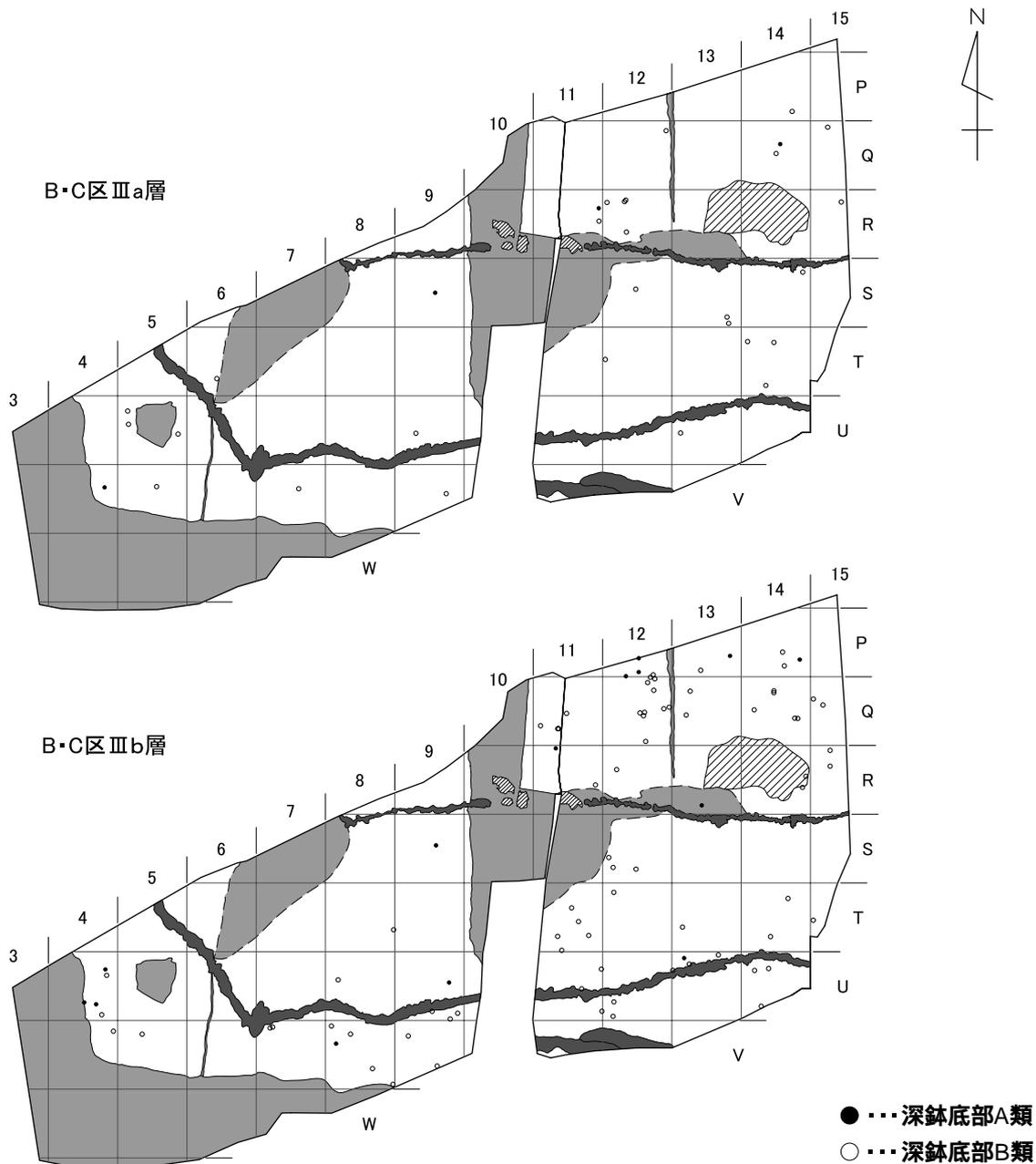
分布状況は指や棒によって刻目を施したものと似ており、雨裂1の北側、B 1区に集中する。ただⅢ b層での分布では指刻みや棒刻みのものがB 1区の中でも西側に偏るのに対して、ヘラ刻みのものはB 1区の東側にも分布を見せる。またⅢ a層ではB 2区にも出土がある程度見られ、原位置からの拡散状況として捉えられよう。



第209図 A・D区深鉢E類（刻目原体・ヘラ）の分布（S = 1/800）

**A・D区深鉢E類（刻目原体・ヘラ）の分布**

Ⅲ a層，Ⅲ b層ともに出土数はきわめて少なく，点在する状況である。分布のまともりは捉えられず，他地点からの流入と考えられる。



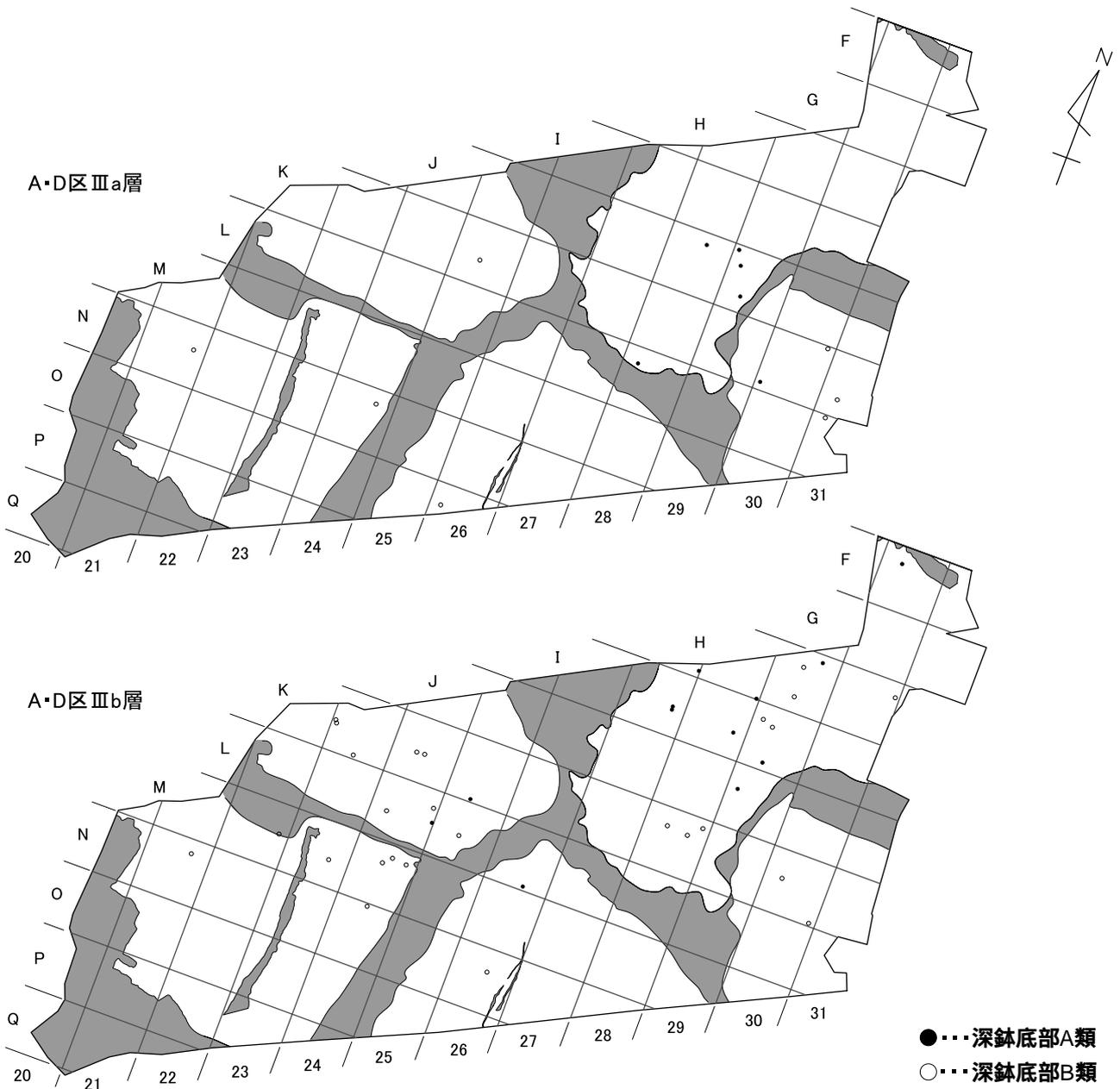
第210図 B・C区深鉢底部A類・深鉢底部B類の分布 (S = 1/800)

#### B・C区深鉢底部A類・深鉢底部B類の分布

いずれもⅢb層からの出土がⅢa層からの出土より多い。器面の色調は、深鉢底部A類が黄色系を呈するものが多く、深鉢底部B類は橙色系の赤味の強いものが多い。いずれも深鉢C類の底部になるものが多いと考えられる。

深鉢底部A類は出度数が少なくまとまりとしては捉えにくいですが、B1区の北側部分にやや集まり、雨裂2の周辺にも点在する。また、C区最西部のグリッドU4でも3点の出土がある。

深鉢底部B類はB1区と雨裂2周辺の二つを大きなまとまりとして捉えることができる。グリッドS12、T11にも比較的まとまっており、これらがどちらかのまとまりに含まれるものかもしれないし、独立したまとまりとして捉えることは可能であろう。



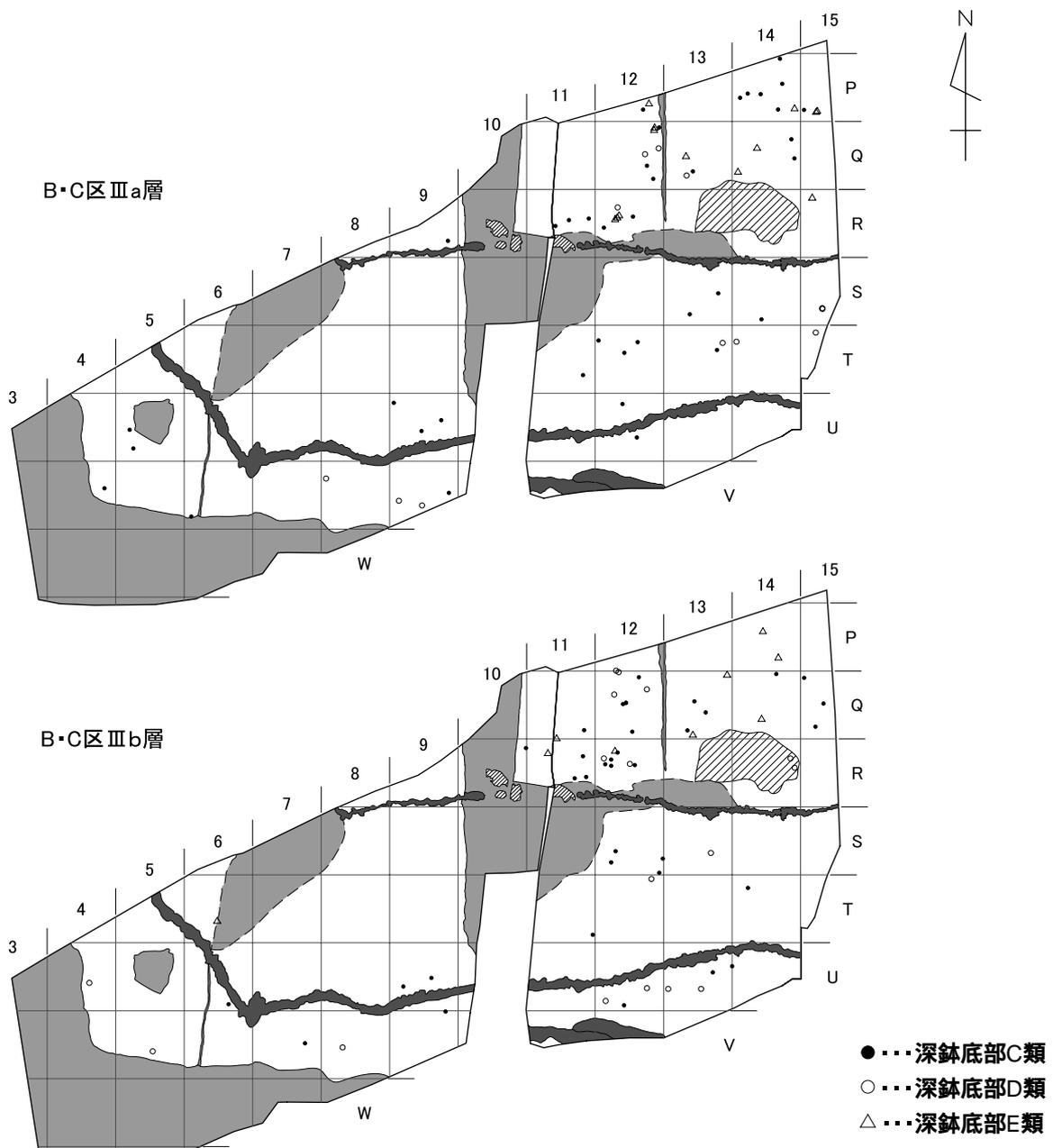
第211図 A・D区深鉢底部A類・深鉢底部B類の分布 (S = 1/800)

#### A・D区深鉢底部A類・深鉢底部B類の分布

いずれもⅢb層からの出土がⅢa層からの出土より多い。器面の色調は、深鉢底部A類が黄色系を呈するものが多く、深鉢底部B類は橙色系の赤味の強いものが多い。いずれも深鉢C類の底部になるものが多いと考えられる。

深鉢底部A類はⅢa層を含め、A 1区からまとまって出土がある。ほかの小区画ではせいぜい1～2点が点在するくらいでA 5区には出土していない。

深鉢底部B類は大きく二つのまとまりが見られる。一つはA 1区で、もう一つはA 3区からA 5区の北東側部分にかけてである。



第212図 B・C区深鉢底部C類・深鉢底部D類・深鉢底部E類の分布 (S = 1/800)

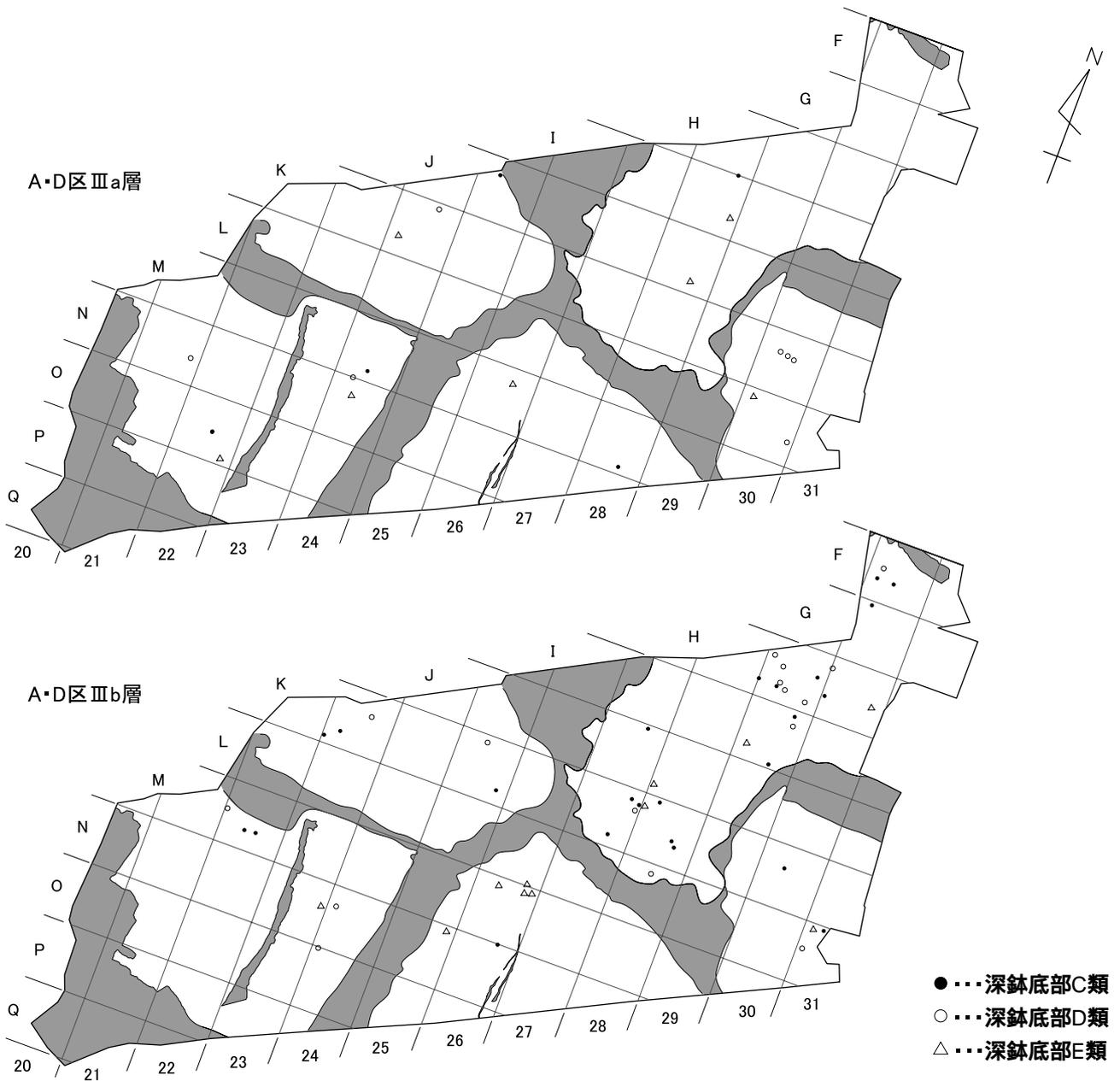
**B・C区深鉢底部C類・深鉢底部D類・深鉢底部E類の分布**

いずれも出土数はⅢb層がⅢa層よりやや多い。

深鉢底部C類は多くがB 1区に集中するが、雨裂2周辺においてもまとまるまではいかないが点在する状況にある。

深鉢底部D類も深鉢底部B類とほぼ同様の分布で、B 1区に多く集まり、雨裂2周辺にも特に雨裂の南側に多く分布する。

深鉢E類の分布はほぼB 1区に限定される。



第213図 A・D区深鉢底部C類・深鉢底部D類・深鉢底部E類の分布 (S = 1/800)

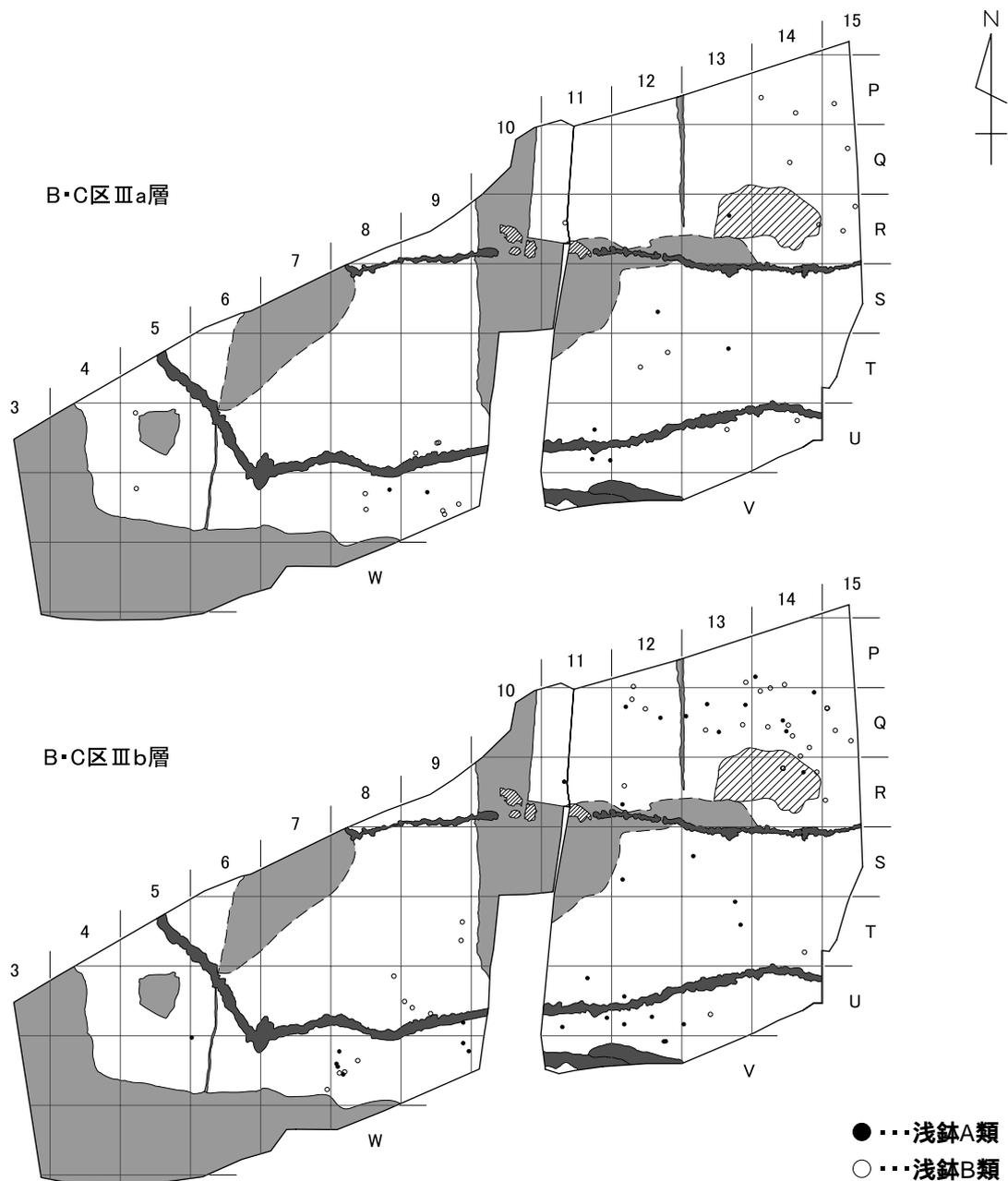
**A・D区深鉢底部C類・深鉢底部D類・深鉢底部E類の分布**

いずれも出土層位の主体はⅢb層にある。

深鉢底部C類は各小区画に点在するが、A 1区で二つのまとまった出土がある。一つはグリッドH 29付近で、もう一つはグリッドK 27・28付近である。

深鉢底部D類は各小区画に点在するが、グリッドH 29付近に一つまとまりが捉えられる。

深鉢底部E類も各小区画に点在するが、グリッドM 26付近にまとまりがある。大きく捉えればA 1区からA 5区の東側までを大きな一つのまとまりとして捉えられるかもしれない。



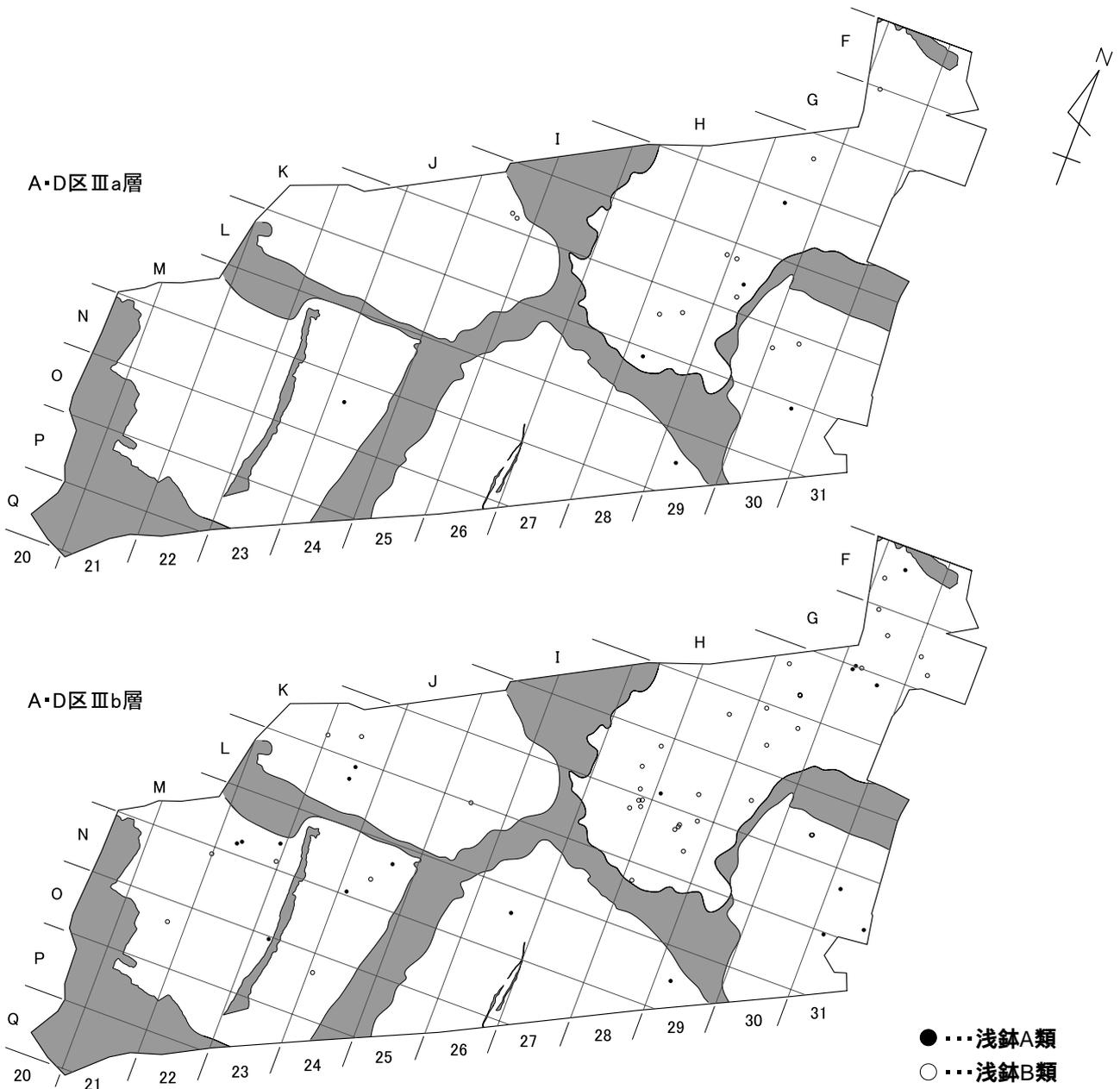
第214図 B・C区浅鉢A類・浅鉢B類の分布 (S = 1/800)

#### B・C区浅鉢A類・浅鉢B類の分布

浅鉢A類，浅鉢B類ともに出土の中心はⅢb層にある。

浅鉢A類は大きく二つのまとまりが認められる。一つはB 1区でQ列付近を中心に東西に帯状の分布を見せる。もう一つは雨裂2の南側に多く出土していることから，分布の中心はB・C区のさらに南側にあると思われる。

浅鉢B類も二つのまとまりが認められる。一つはB 1区のQ列付近で，もう一つはC区南東部分の雨裂2付近で，浅鉢A類に比べると分布が西側に限定される。



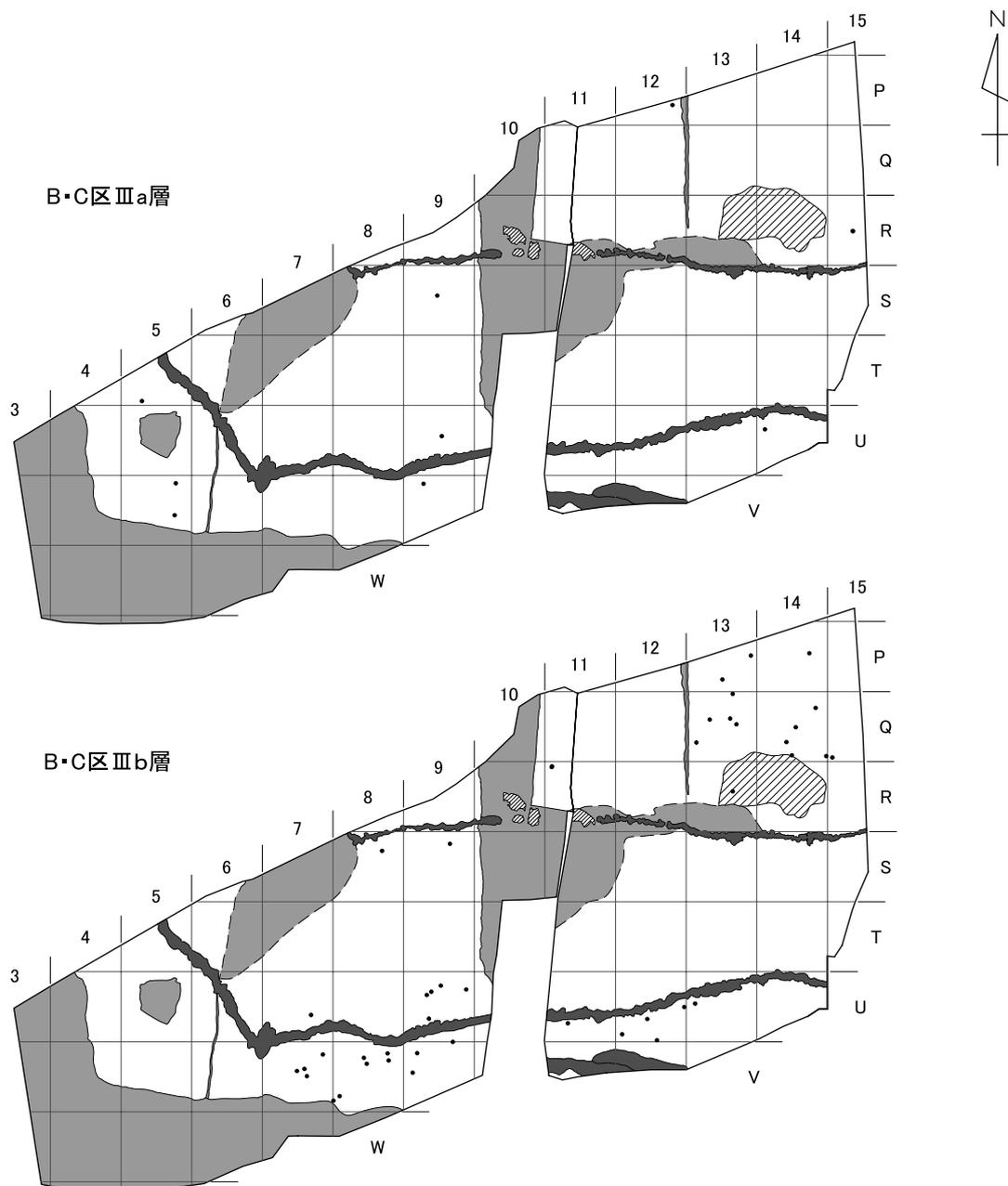
第215図 A・D区浅鉢A類・浅鉢B類の分布 (S = 1/800)

#### A・D区浅鉢A類・浅鉢B類の分布

浅鉢A類，浅鉢B類ともに出土の中心はⅢb層である。

浅鉢A類は出土点数が少なく各小区画に点在するが，A 3区からA 5区にかけて一つのまとまりを持つようである。

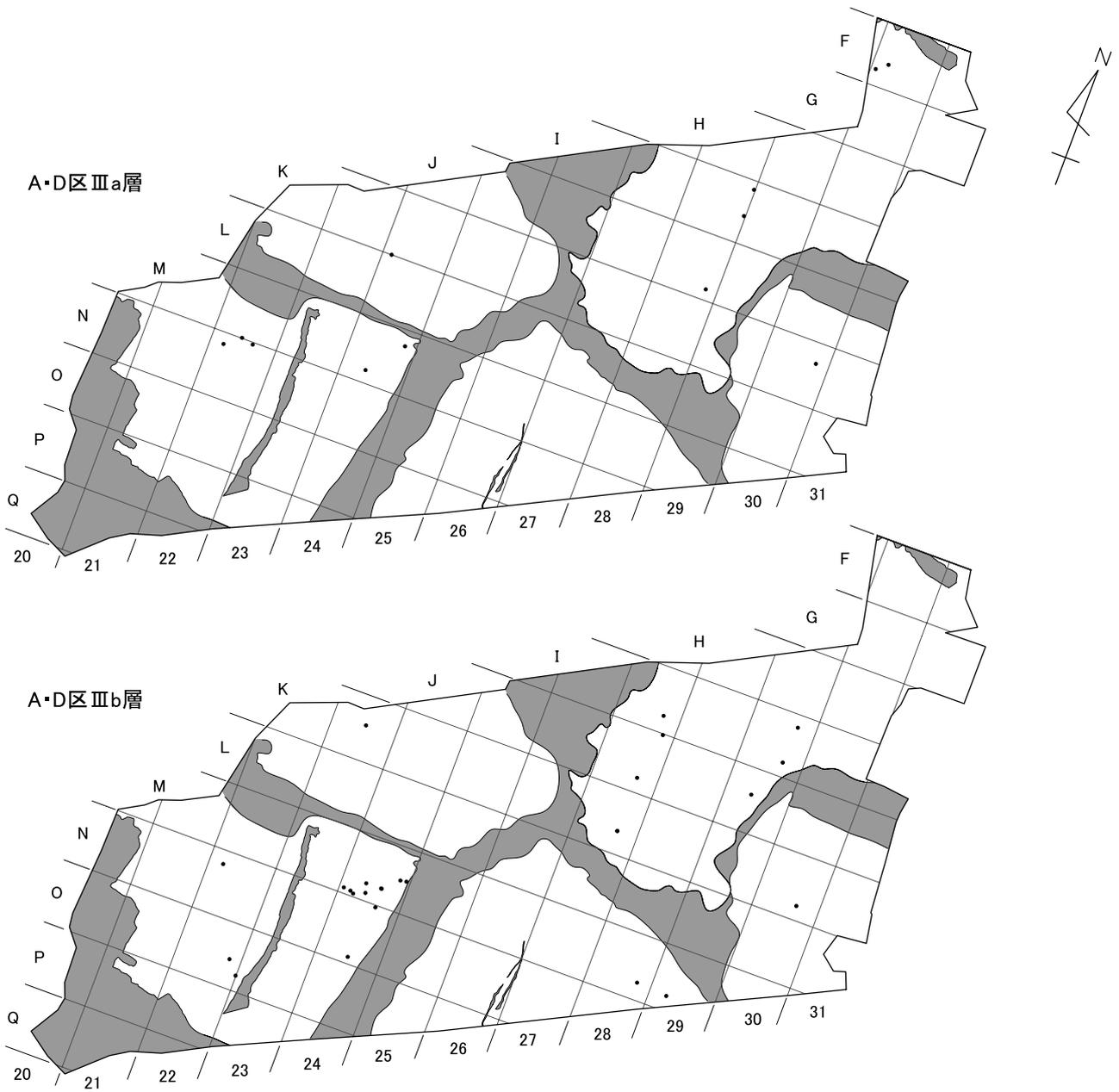
浅鉢B類はA 1区に集中が認められる。最も集中的に出土しているのはA 1区の南西部分であるが，そこからD区南端部にかけて一定の出土を見る。その他の小区画では点在はするが，一定のまとまりとして捉えることはできない。



第216図 B・C区浅鉢C類の分布 (S = 1/800)

**B・C区浅鉢浅鉢C類の分布**

深鉢C類の出土層位はⅢb層に主体を置く。まとまりが大きく二つ認められる。一つはB 1区で、13列より東にまとまる。もう一つは雨裂2の付近で特に雨裂の南側に出土点数が多いことから、こちらのまとまりは分布の中心がB・C区のさらに南側にあるものと思われる。

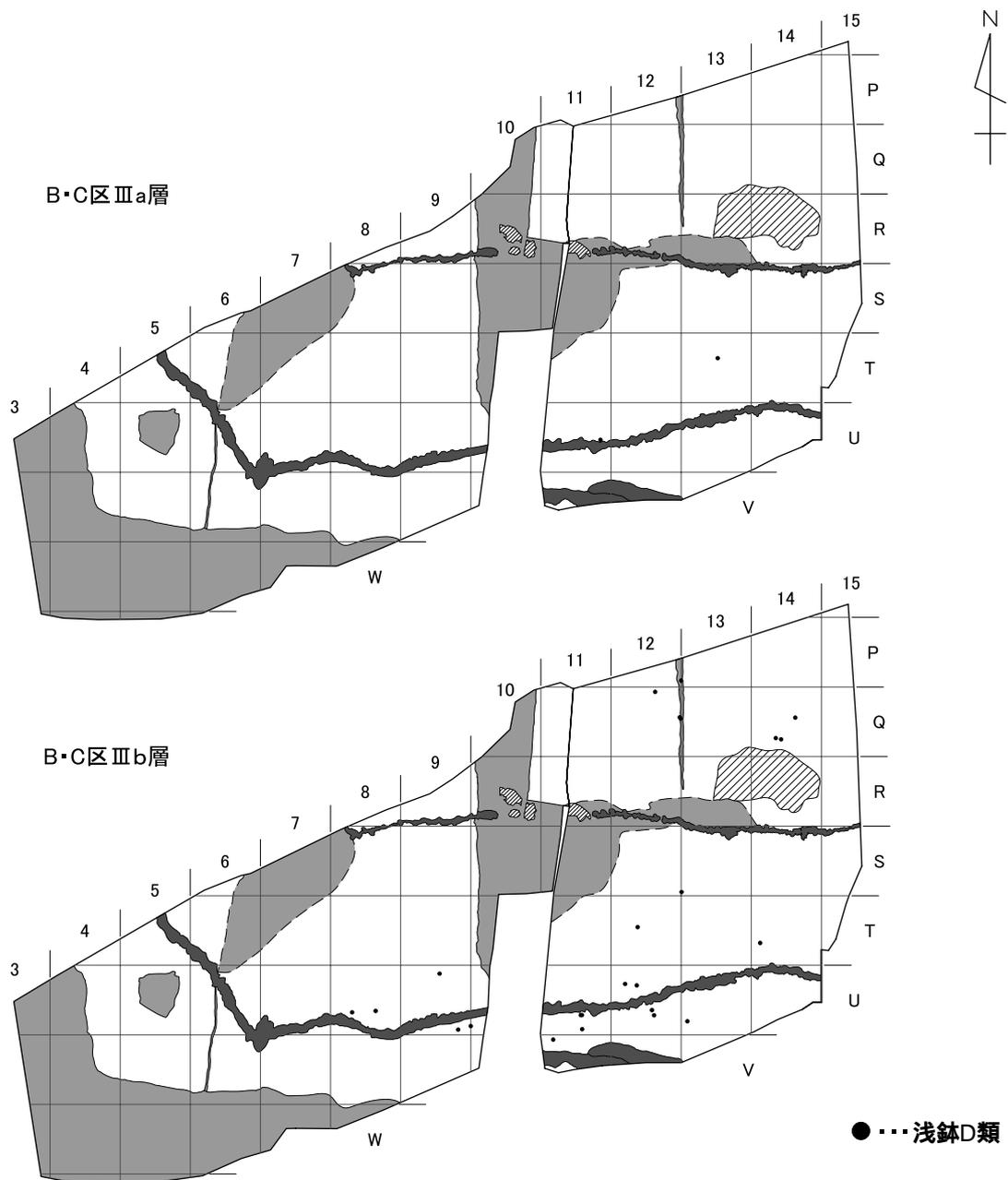


第217図 A・D区浅鉢C類の分布 (S = 1/800)

#### A・D区浅鉢C類の分布

浅鉢C類の出土層位の主体はⅢb層にある。

二つのまとまりが捉えられる。一つはA 1区でやや密度は低い。もう一つはA 5区の北東部分で、特にグリッドM 24付近に集中した出土が見られる。



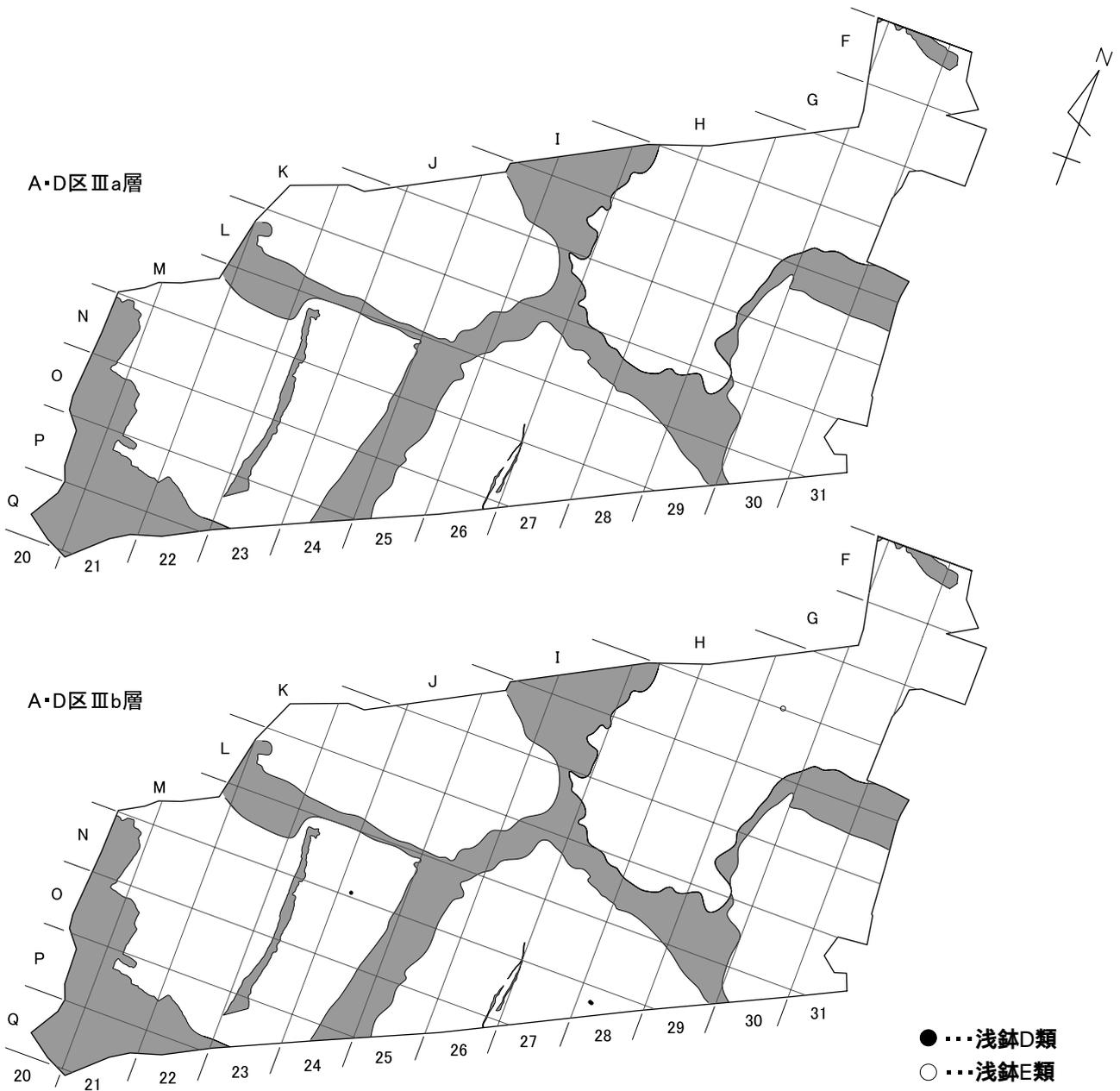
第218図 B・C区浅鉢D類・浅鉢E類の分布 (S = 1/800)

### B・C区浅鉢D類・浅鉢E類の分布

浅鉢D類の出土層位はほぼⅢb層に限られる。

分布域は雨裂2の周辺にほぼ限られ、C区の西側部分での出土はなく、B区の北半部分でも出土は希薄である。

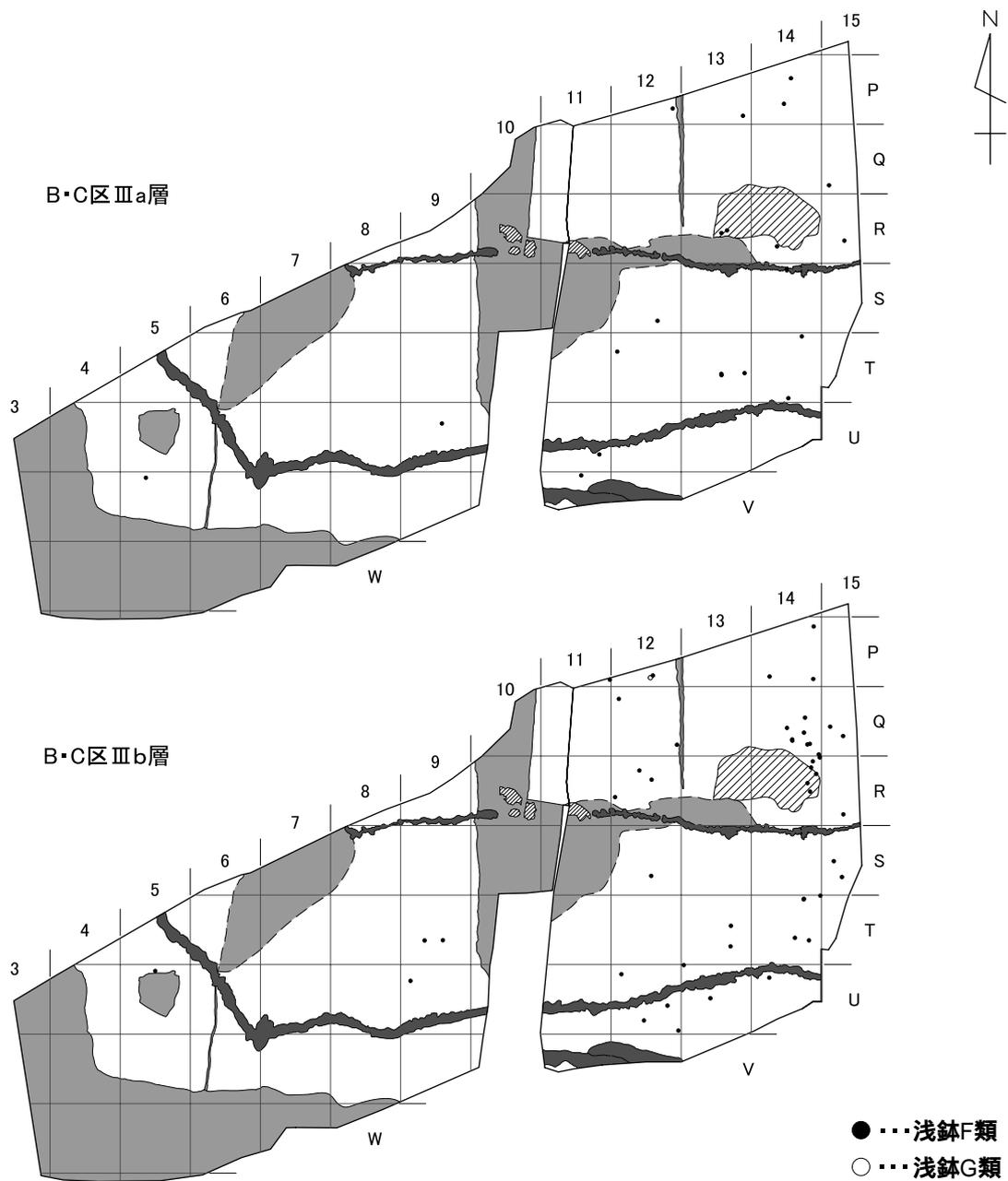
B・C区での浅鉢E類の出土は出土位置記録分においては見られない。一括取り上げ資料の中にわずかに認められるのみである。



第219図 A・D区浅鉢D類・浅鉢E類の分布 (S = 1/800)

**A・D区浅鉢D類・浅鉢E類の分布**

浅鉢D類，浅鉢E類ともに出土はⅢb層に限られる。散発的な出土でまとまりは捉えられない。

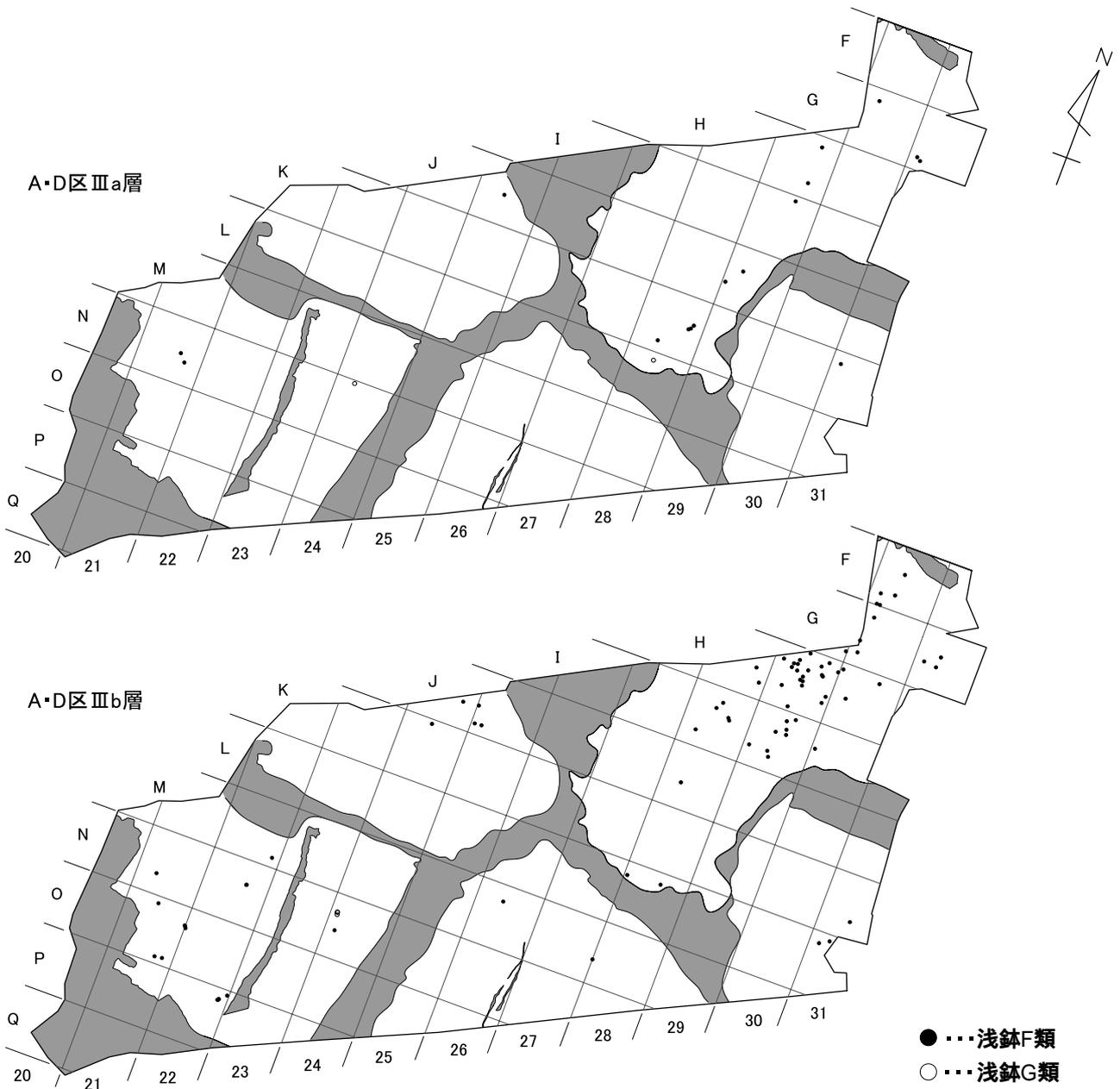


第220図 B・C区浅鉢F類・浅鉢G類の分布 (S = 1/800)

### B・C区浅鉢F類・浅鉢G類の分布

浅鉢F類はⅢ b層において主体的に出土している。分布の状況は大きく二つのまとまりに分かれる。一つはB 1区で、特にグリッドQ 14, R 14に集中が認められる。もう一つのまとまりはB区の雨裂2の周辺で、C区の出土は少ない。

浅鉢G類については、B・C区において出土位置を記録したものはなく、一括取り上げ資料にわずかに認められる。

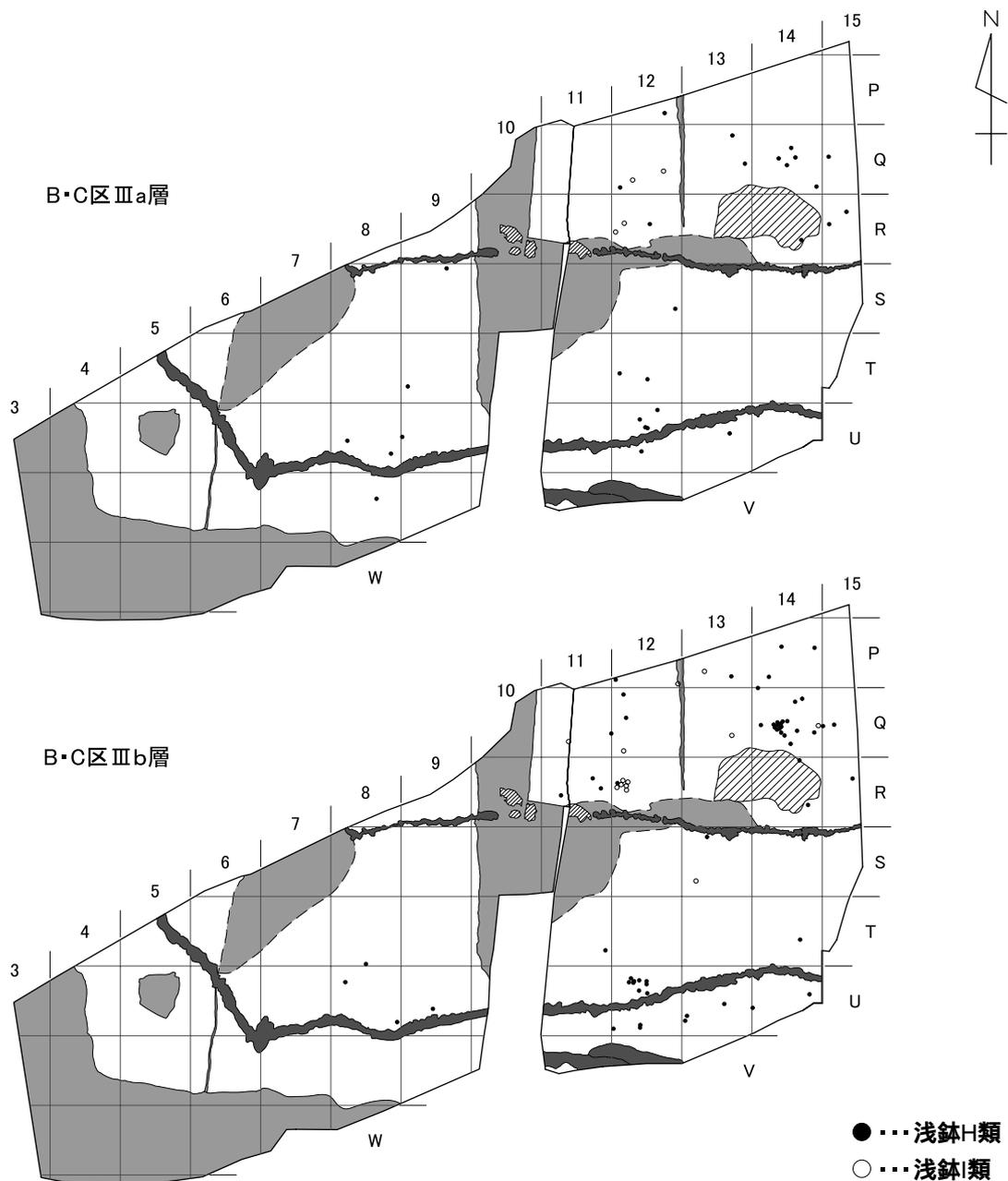


第221図 A・D区浅鉢F類・浅鉢G類の分布 (S = 1/800)

#### A・D区浅鉢F類・浅鉢G類の分布

浅鉢F類の出土層位の主体はⅢb層にある。分布はまとまりとして二つが捉えられる。最も集中して出土しているのはD区からA1区の北側部分であり、グリッドH 29付近を中心として分布する。グリッドJ 24・25付近にも一定数のまとまりがあるが、これはA1区との間が攪乱と削平を受けている事を考えれば一連のものとして捉えるべきかもしれない。また、もう一つのまとまりとしてA5区の西側部分がある。

浅鉢G類についてはグリッドN 24においてⅢa層で1点、Ⅲb層で2点の出土があるが、同一個体である。

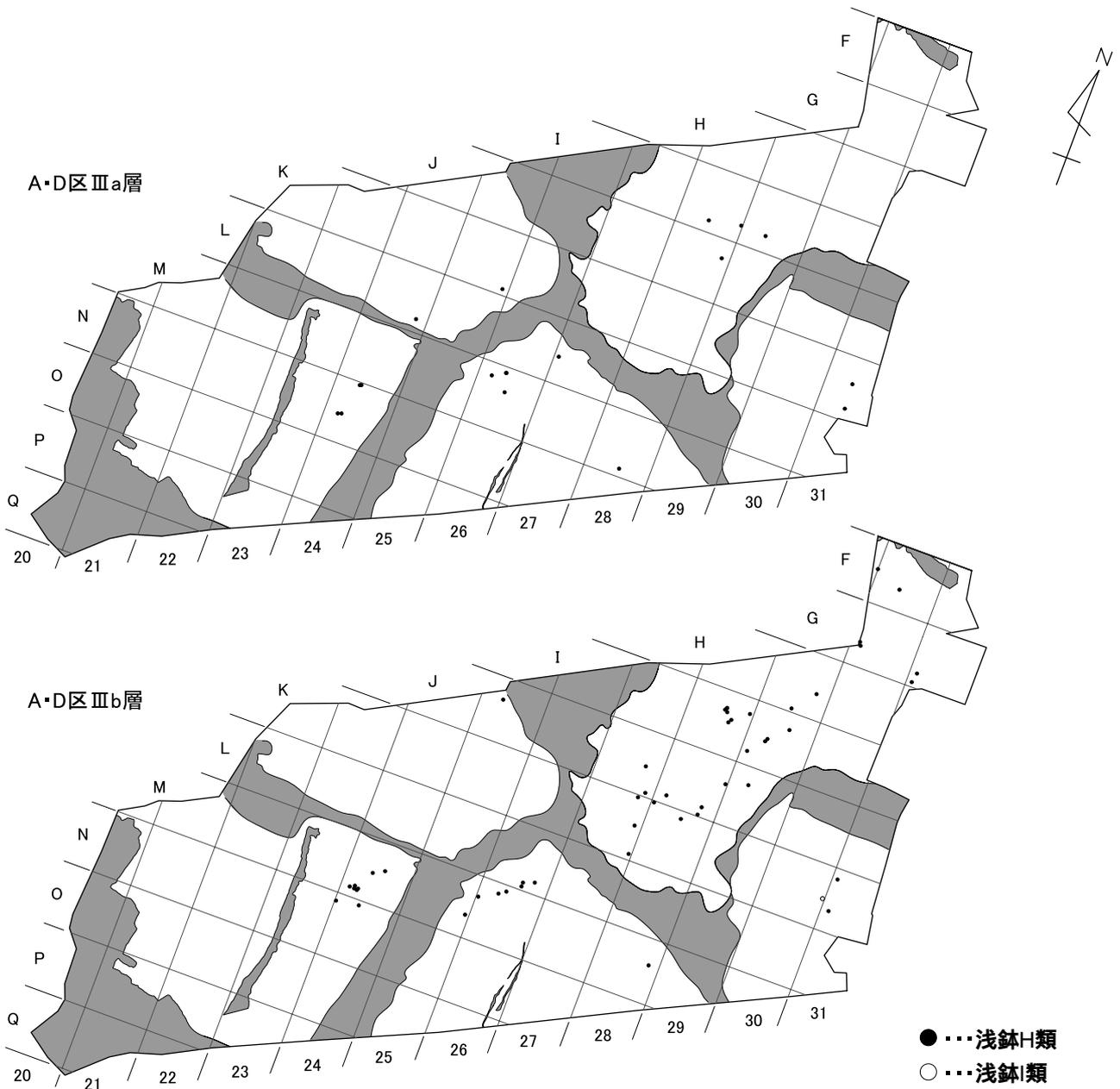


第222図 B・C区浅鉢H類・浅鉢I類の分布 (S = 1/800)

### B・C区浅鉢H類・浅鉢I類の分布

浅鉢H類の出土層位の主体はⅢb層である。大きく二つのまとまりが認められる。一つはB 1区で、グリッドQ 14を中心として東側に偏る。もう一つは雨裂2の周辺である。こちらはもしかするとC区部分とB区部分とに分かれるかもしれない。

浅鉢I類はⅢb層出土のものがⅢa層出土のものより多い。出土域はほぼ雨裂1の北側、B 1区にほぼ限定され、B 1区の中でも西側に出土数が多い。深鉢E類同様、雨裂1が生活領域に影響を与えていた可能性がある。

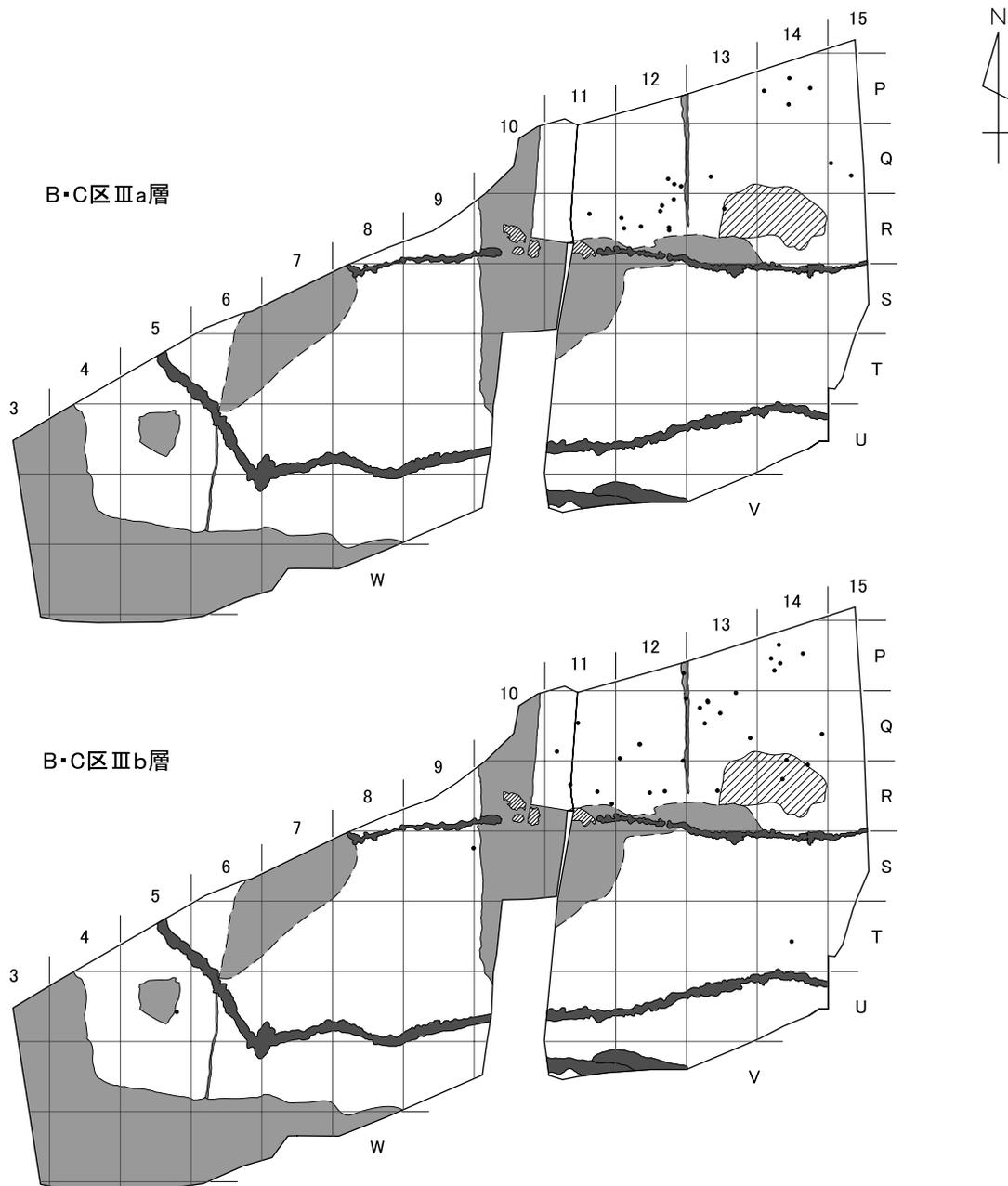


第223図 A・D区浅鉢H類・浅鉢I類の分布 (S = 1/800)

#### A・D区浅鉢H類・浅鉢I類の分布

浅鉢H類の出土層位の主体はⅢb層にある。D区の南側部分からA1区，A4区の北西部分，A5区の北東部分にかけて帯状に分布する。その他の部分ではほとんど出土していない。

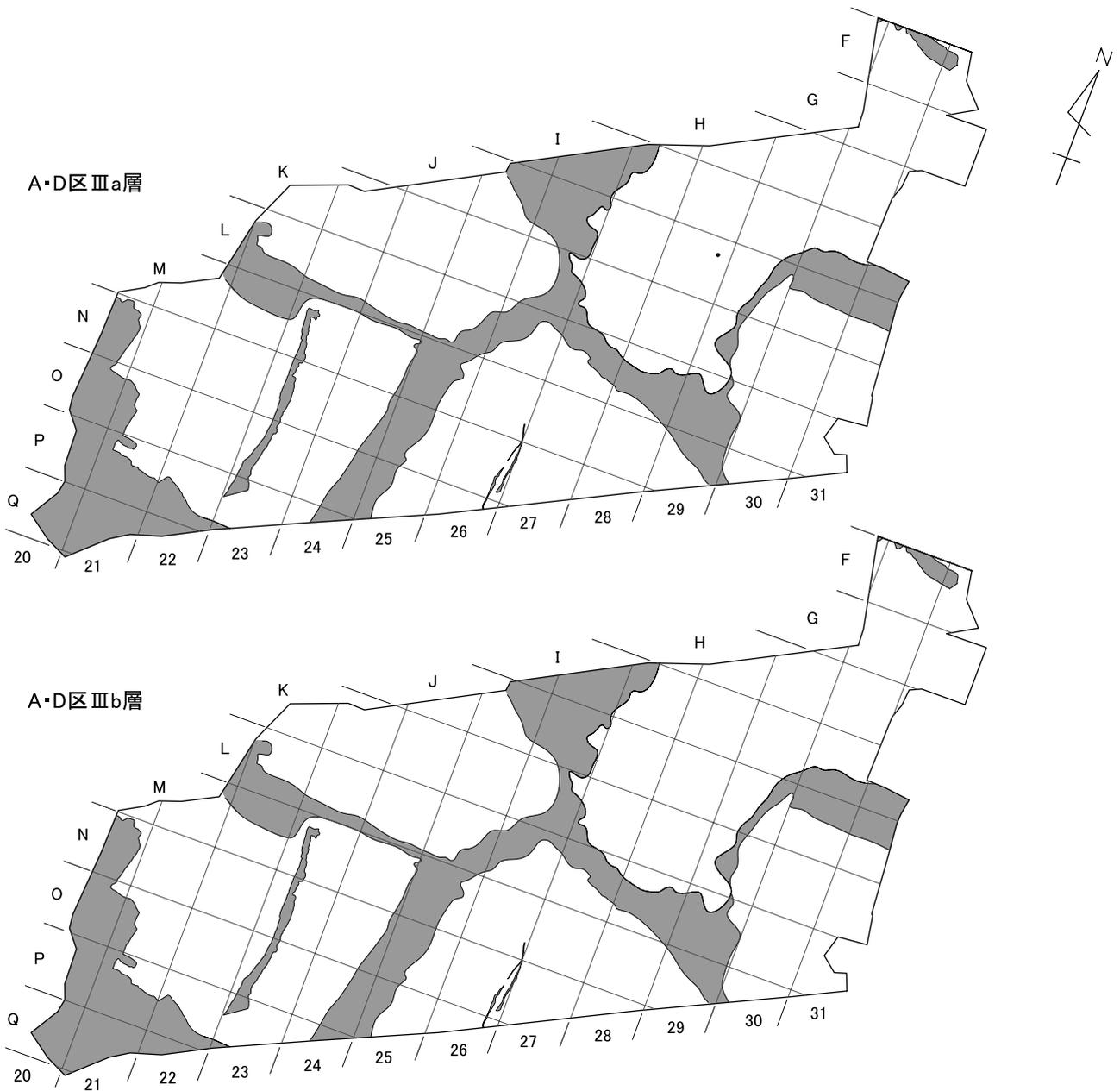
浅鉢I類についてはⅢb層においてグリッドK30より1点が出土しているのみであり，深鉢E類と同様にA・D区の出土は少ない。



第224図 B・C区浅鉢K類の分布 (S = 1/800)

**B・C区浅鉢K類の分布**

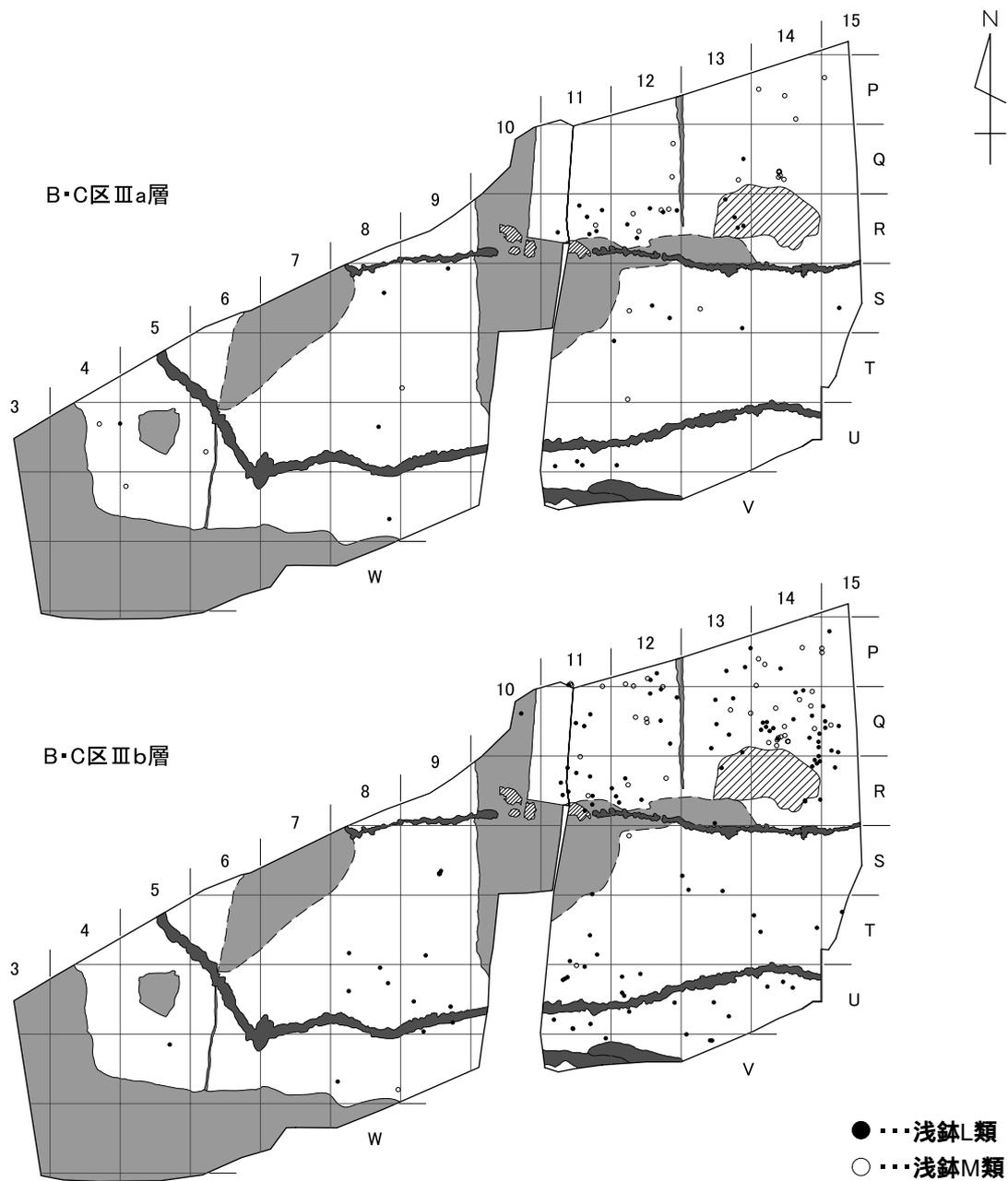
浅鉢K類の出土層位の主体はⅢb層であるが、Ⅲa層からの出土の割合も高い。出土域はB区の雨裂1北側部分、B1区にほぼ限定され、B区の他の部分やC区からの出土は非常に少ない。深鉢E類や浅鉢I類の出土状況と同様のあり方である。



第225図 A・D区浅鉢K類の分布 (S = 1/800)

#### A・D区浅鉢K類の分布

A・D区における浅鉢K類の分布はB区の場合と対照的で、Ⅲb層からの出土はない。わずか1点がⅢa層で出土しているのみである。この1点も出土状況を考えれば流入と考えるべきであろう。

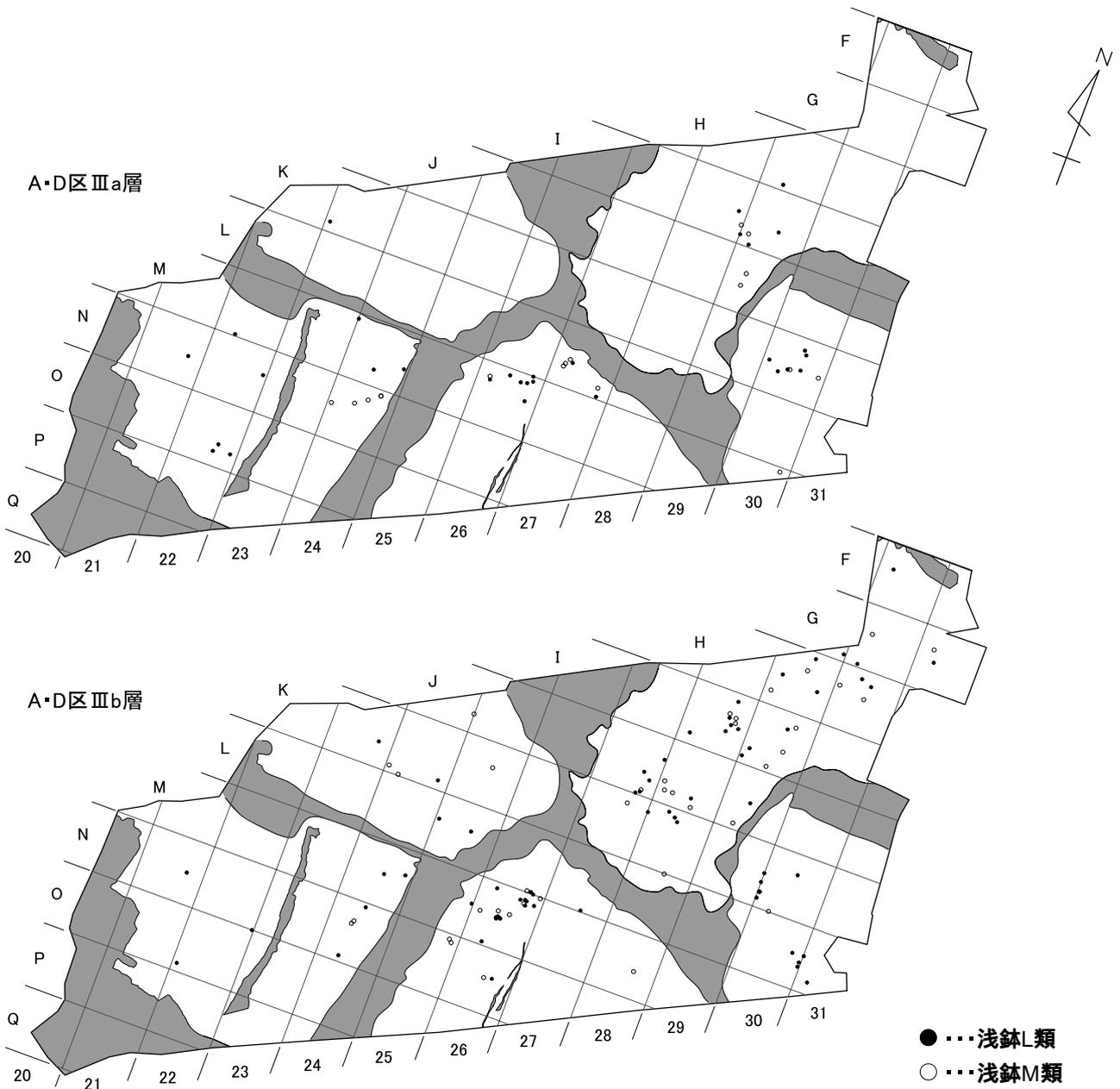


第226図 B・C区浅鉢L類・浅鉢M類の分布 (S = 1/800)

### B・C区浅鉢L類・浅鉢M類の分布

浅鉢L類はⅢb層を主体に出土する。分布は大きく二つに分かれる。一つは雨裂1より北側のB1区である。もう一つは雨裂2の周辺である。こちらのまとまりは、8列付近までで、それより西にはほとんど分布しない。

浅鉢M類も出土層位の主体はⅢb層にあるが、Ⅲa層からの出土数も多い。分布は雨裂1の北側、B1区にほぼ絞られ、B2区、B3区、C区での出土はほとんどないといつて良い。

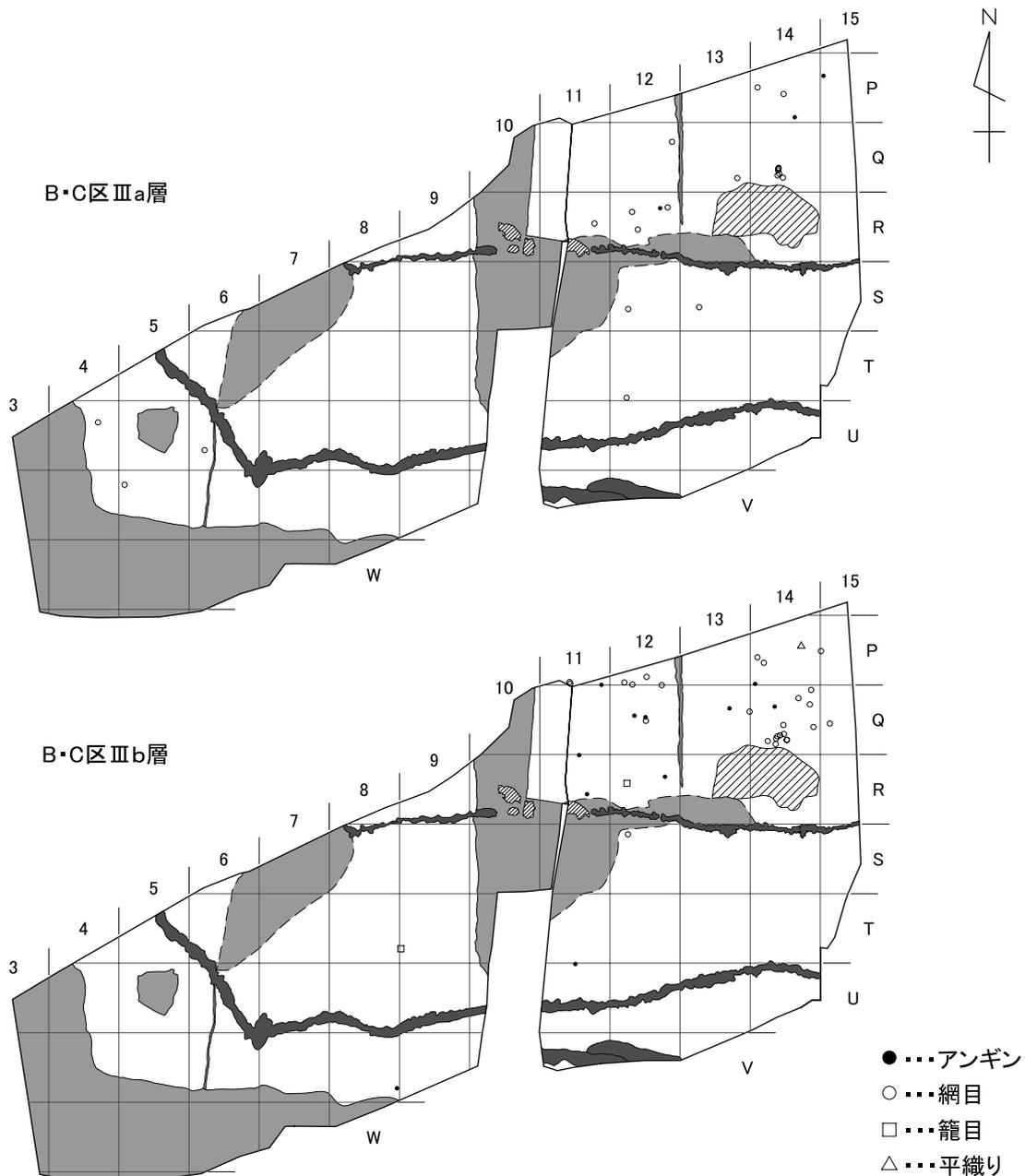


第227図 A・D区浅鉢L類・浅鉢M類の分布 (S = 1/800)

**A・D区浅鉢L類・浅鉢M類の分布**

浅鉢L類はA 1区の北部からA 5区の北東部にかけて帯状に分布し、また、A 2区のグリッドK 30, L 30付近にもまとまる。A 3区, A 5区においては散在して出土する程度である。

浅鉢M類もA 1区の北部からA 5区の北東部にかけて帯状に分布する。また、A 2区, A 3区に数は少ないが散在する。



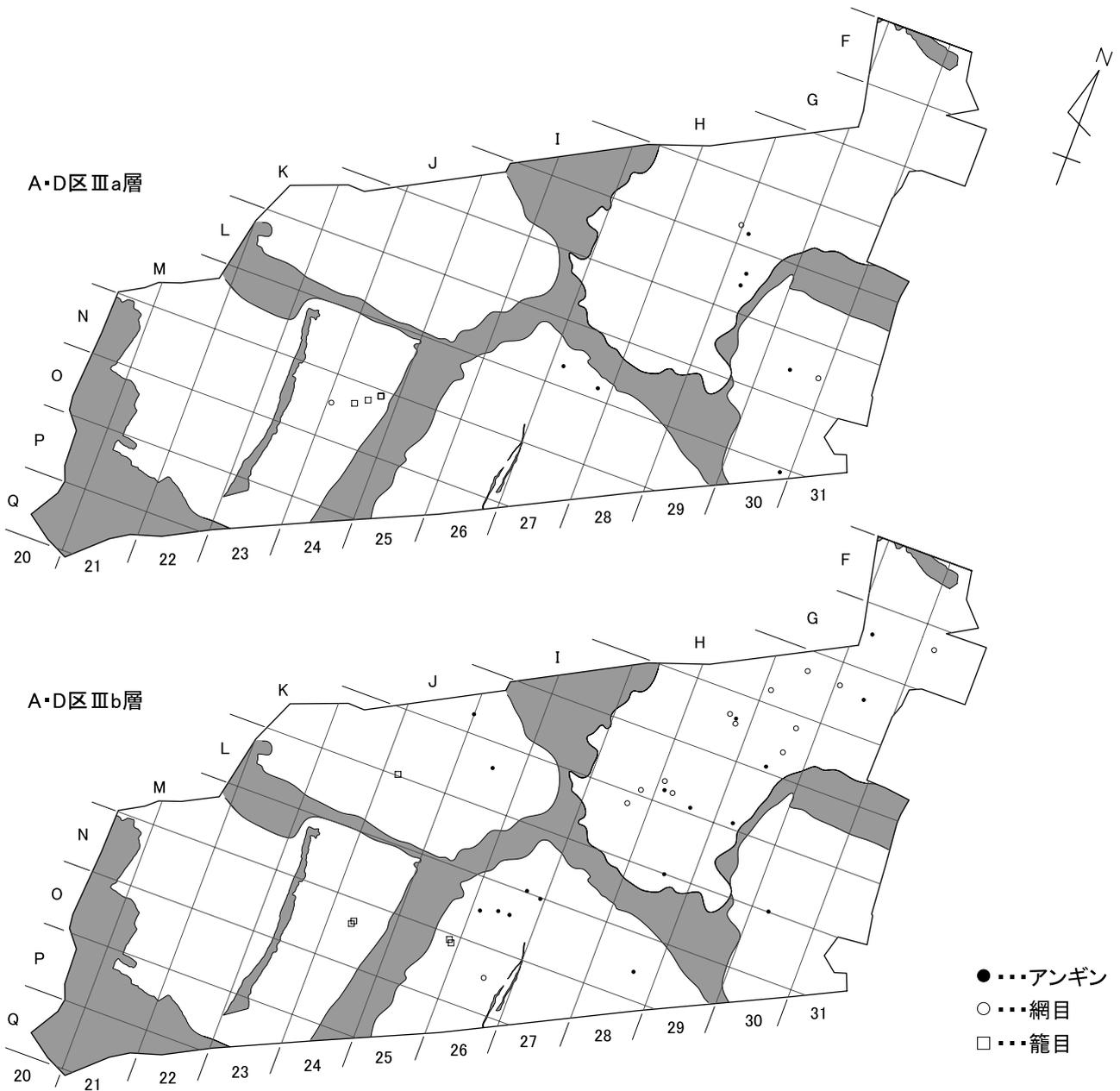
第228図 B・C区浅鉢M類(種類別)の分布 (S = 1/800)

### B・C区浅鉢M類(種類別)の分布

アンギンは雨裂より北側のB 1区にまとまるが、そのなかでも山手側の11列、12列部分への偏りが若干認められる。

網目はB・C区では組織痕の種類として最も出土数が多く、その分布は雨裂1の北側、B 1区にほぼ限られる。なかでもグリッドQ 14付近での集中が顕著である。

籠目・平織りについては出土数が少なく、まとまりを追うことはできないが、アンギンや網目に伴出するものか。



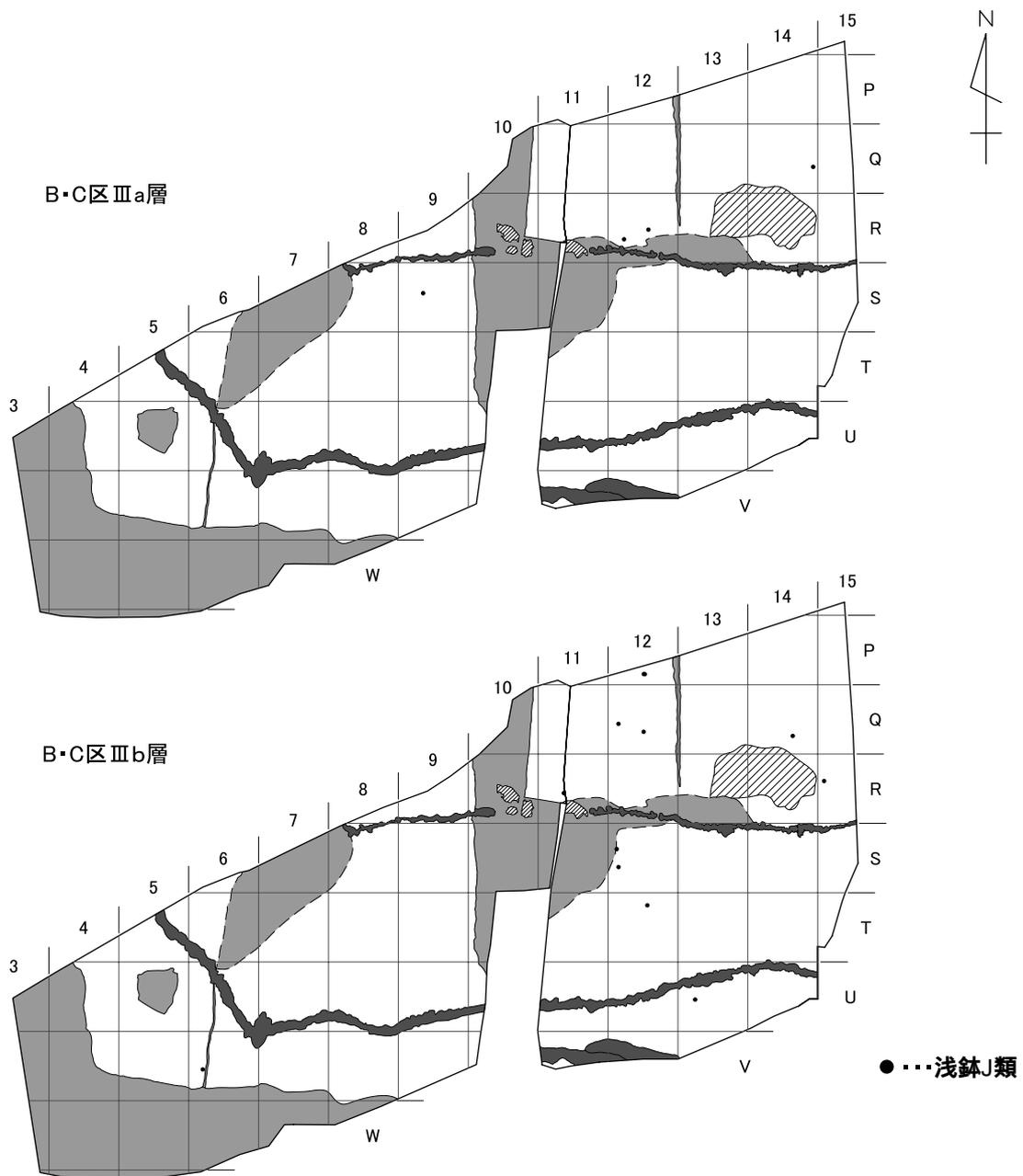
第229図 A・D区浅鉢M類（種類別）の分布（S = 1/800）

### A・D区浅鉢M類（種類別）の分布

アンギンは浅鉢M類のなかでは最も出土数が多い。A 1区からA 4区北西部にかけて帯状に分布が認められる。A 2区やA 3区においてもわずかに散在するが、A 5区での出土はない。

網目もアンギンに次ぎ出土数が多いが、分布はほぼA 1区に限られ、その他の小区画ではほとんど出土がない。

籠目はグリッドN 24・25付近に数は少ないがまとまる。平織りについてはドットで取り上げたものはなかった。



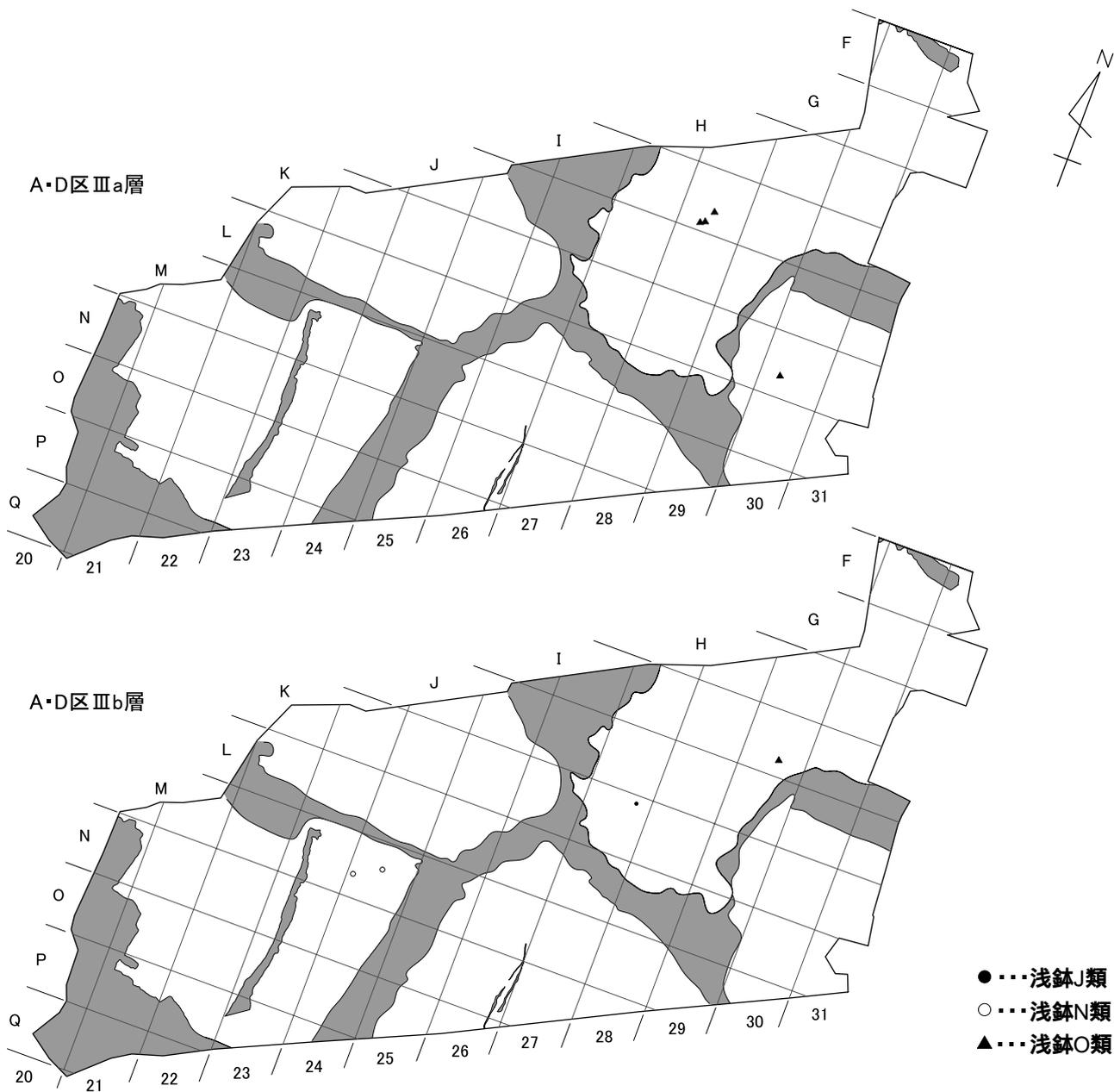
第230図 B・C区浅鉢J類・浅鉢N類・浅鉢O類の分布 (S = 1/800)

**B・C区浅鉢J類・浅鉢N類・浅鉢O類の分布**

浅鉢J類は、点数は少ないが出土域はB 1区・B 2区にほぼ限定される。

浅鉢N類の出土は見られない。

浅鉢O類の出土は見られない。



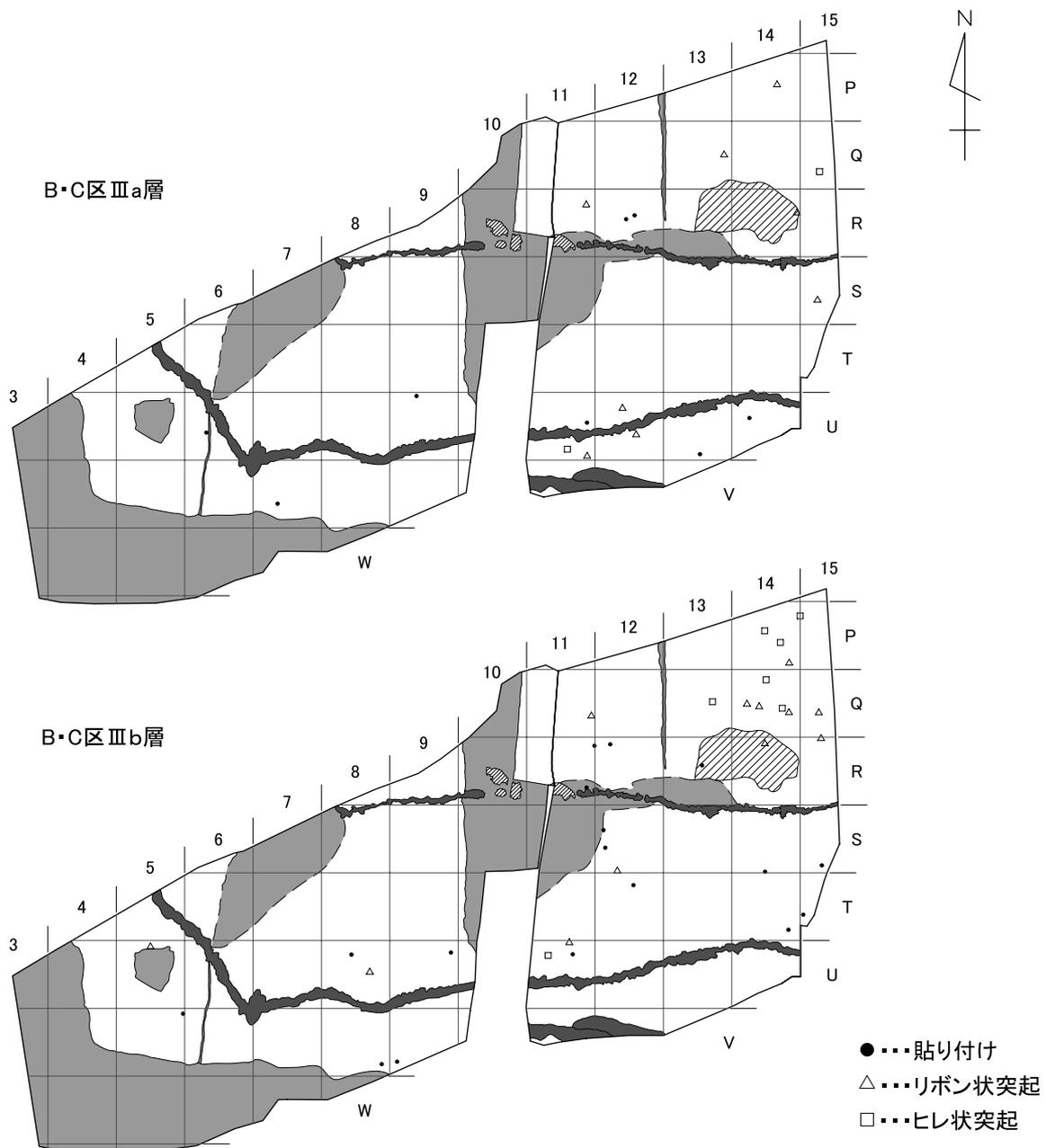
第231図 A・D区浅鉢J類・浅鉢N類・浅鉢O類の分布 (S = 1/800)

**A・D区浅鉢J類・浅鉢N類・浅鉢O類の分布**

浅鉢J類はA 1区に1点認められるのみである。

浅鉢N類はA 5区での出土がわずかに認められるが、他の小区画での出土はない。

浅鉢O類はA 1区での出土がわずかに認められるが、他の小区画での出土はない。



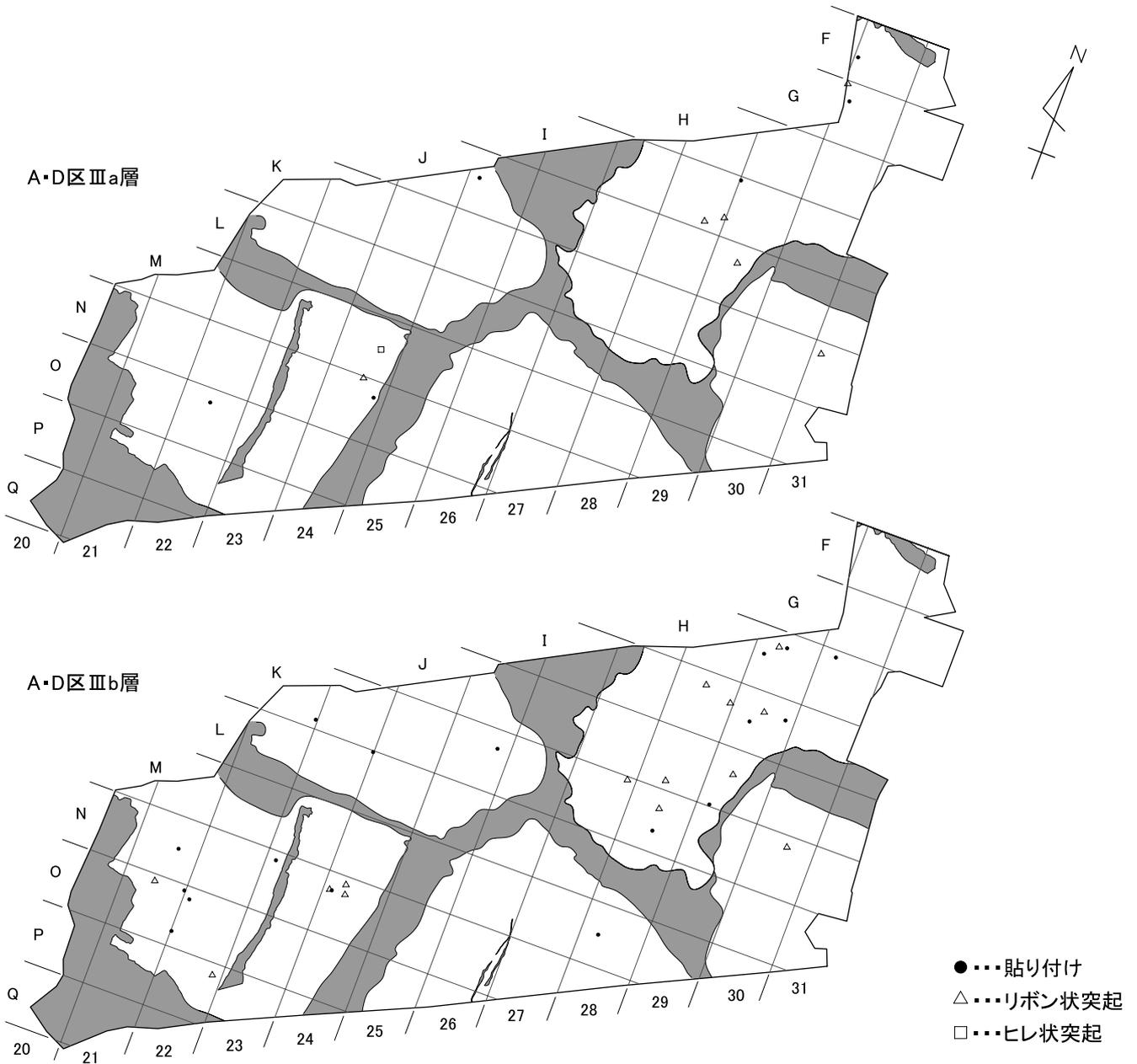
第232図 B・C区貼り付け・リボン状突起・ヒレ状突起を持つ土器の分布 (S = 1/800)

**B・C区貼り付け・リボン状突起・ヒレ状突起を持つ土器の分布**

出土層位の主体はいずれもⅢb層である。

粘土紐や粘土塊の貼り付けは基本的に深鉢D類に施される。よって深鉢D類の分布に重なるが、散在する状況で、まとまりとしては捉えづらい。B 2区の東側にややまとまるか。

リボン状突起・ヒレ状突起の分布は雨裂1の北側B 1区の東側部分に限定される。



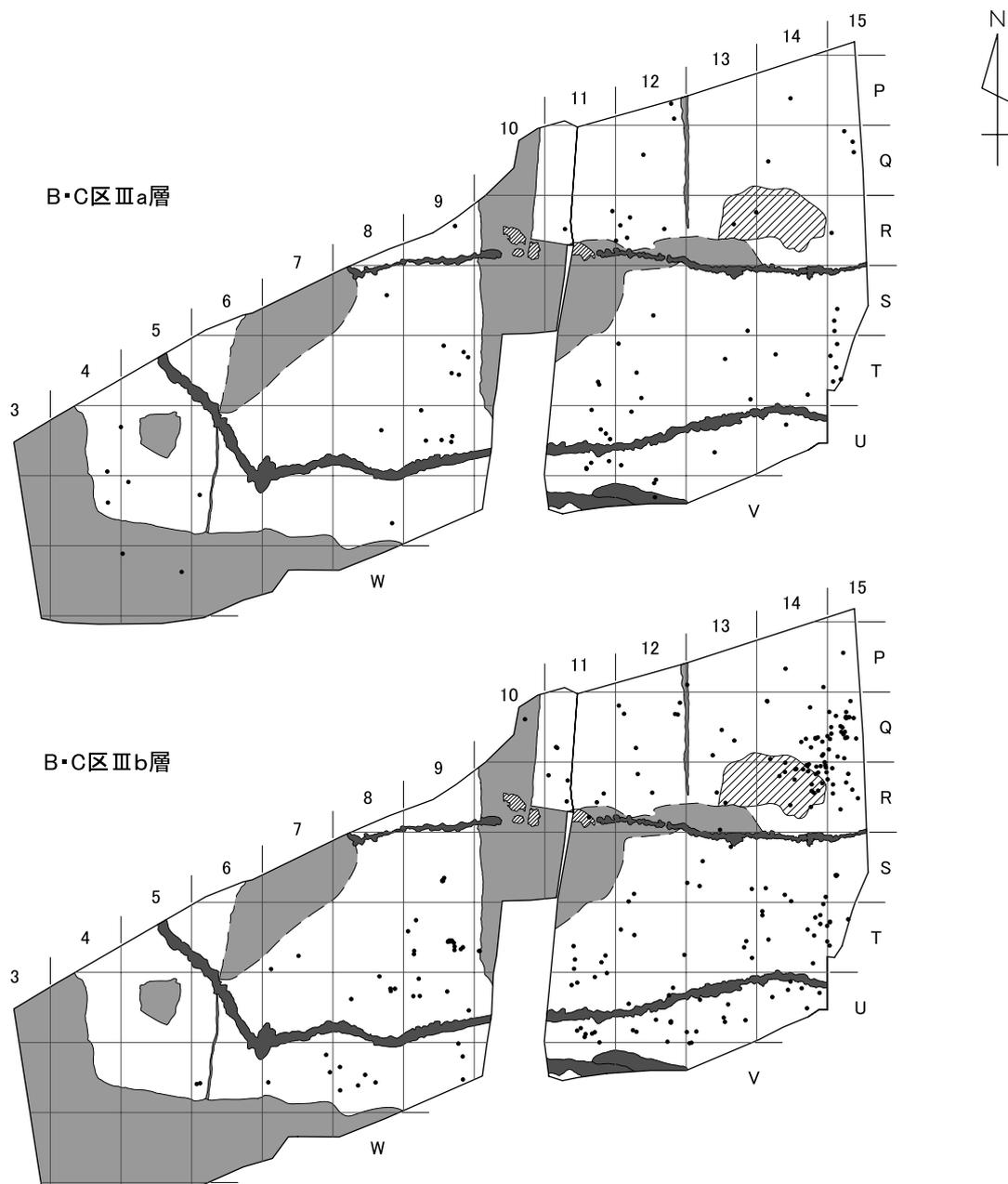
第233図 A・D区貼り付け・リボン状突起・ヒレ状突起を持つ土器の分布 (S = 1/800)

**A・D区貼り付け・リボン状突起・ヒレ状突起を持つ土器の分布**

いずれも出土層位の主体はⅢb層である。

深鉢D類に見られる粘土紐や粘土塊の貼り付けはA 1区とA 5区西側部分にまとまりが認められる。

リボン状突起・ヒレ状突起を付すものはA 1区において比較的まとまった出土が見られる。また、A 5区のグリッドN 24にも出土が見られるが、貼り付けの分布するA 5区西側部分からの出土は1点のみで、分布が異なる。

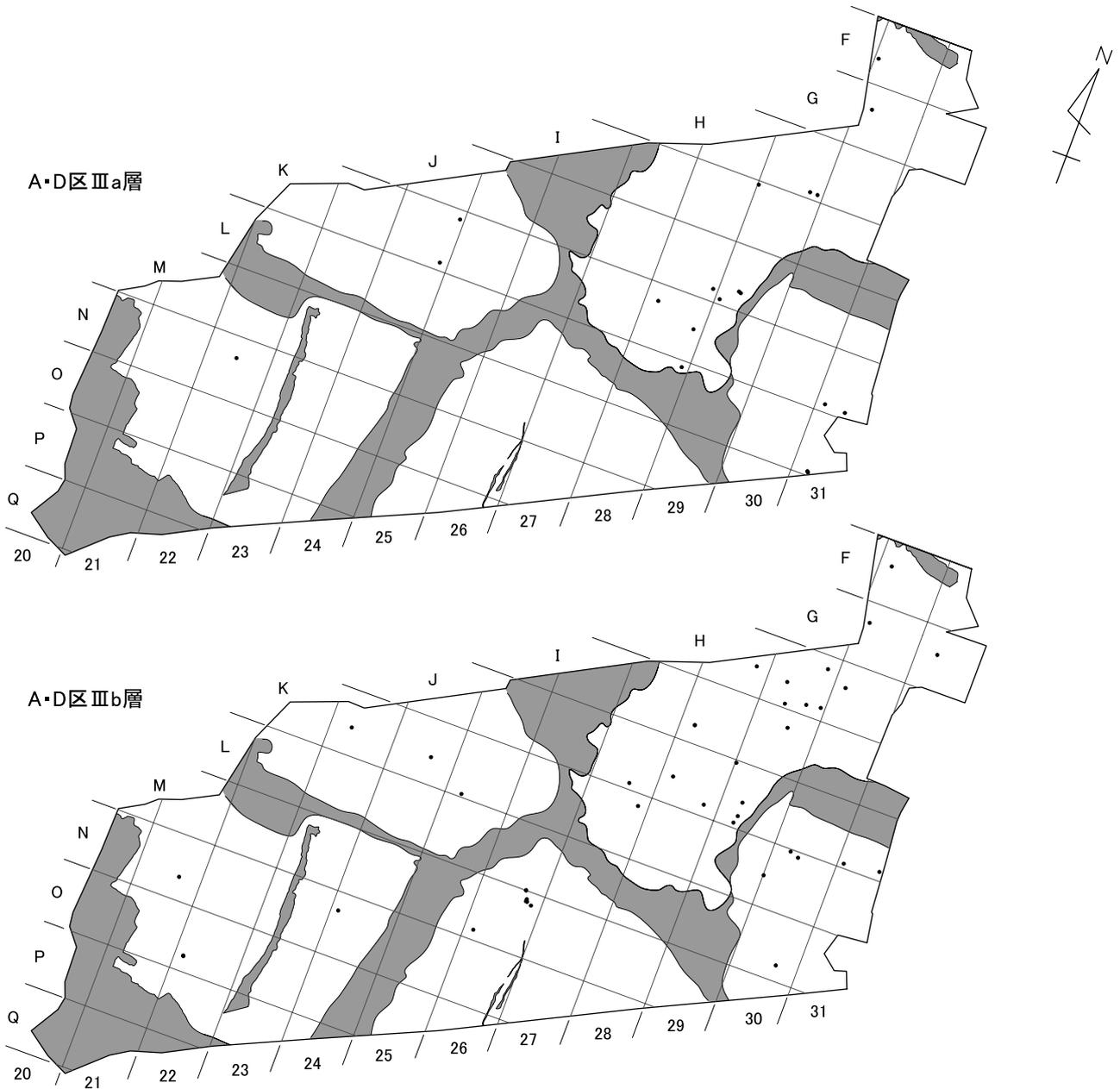


第234図 B・C区胎土に小礫を多量に含む土器の分布 (S = 1/800)

#### B・C区胎土に小礫を多量に含む土器の分布

深鉢D類の中で胎土に多量の小礫を含むものが見られる。多くが薄手の作りで、外面は貝殻条痕調整、内面はナデ調整を施す。

出土層位の主体はⅢb層にある。B 1区の特に東側で集中的に出土が見られる。また、C区南東部分からB区南側部分にかけて雨裂2の周辺でまとまった出土が見られる。C区西側部分の出土は希薄である。

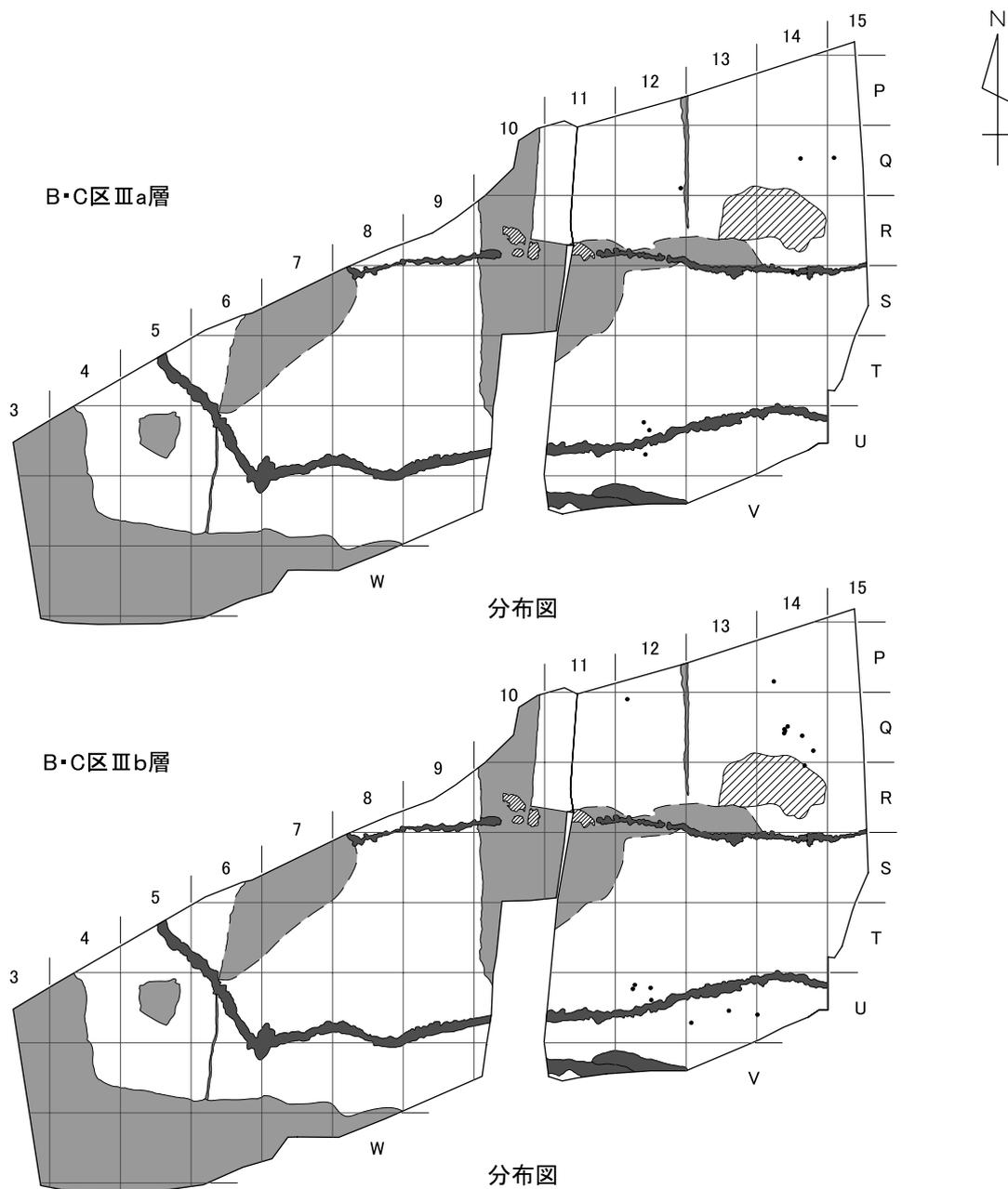


第235図 A・D区胎土に小礫を多量に含む土器の分布 (S = 1/800)

**A・D区胎土に小礫を多量に含む土器の分布**

出土層位の主体はⅢb層である。

B・C区に対して出土が希薄である。A 1区においてある程度まとまった出土が見られるが、ほかの小区画では散在的である。

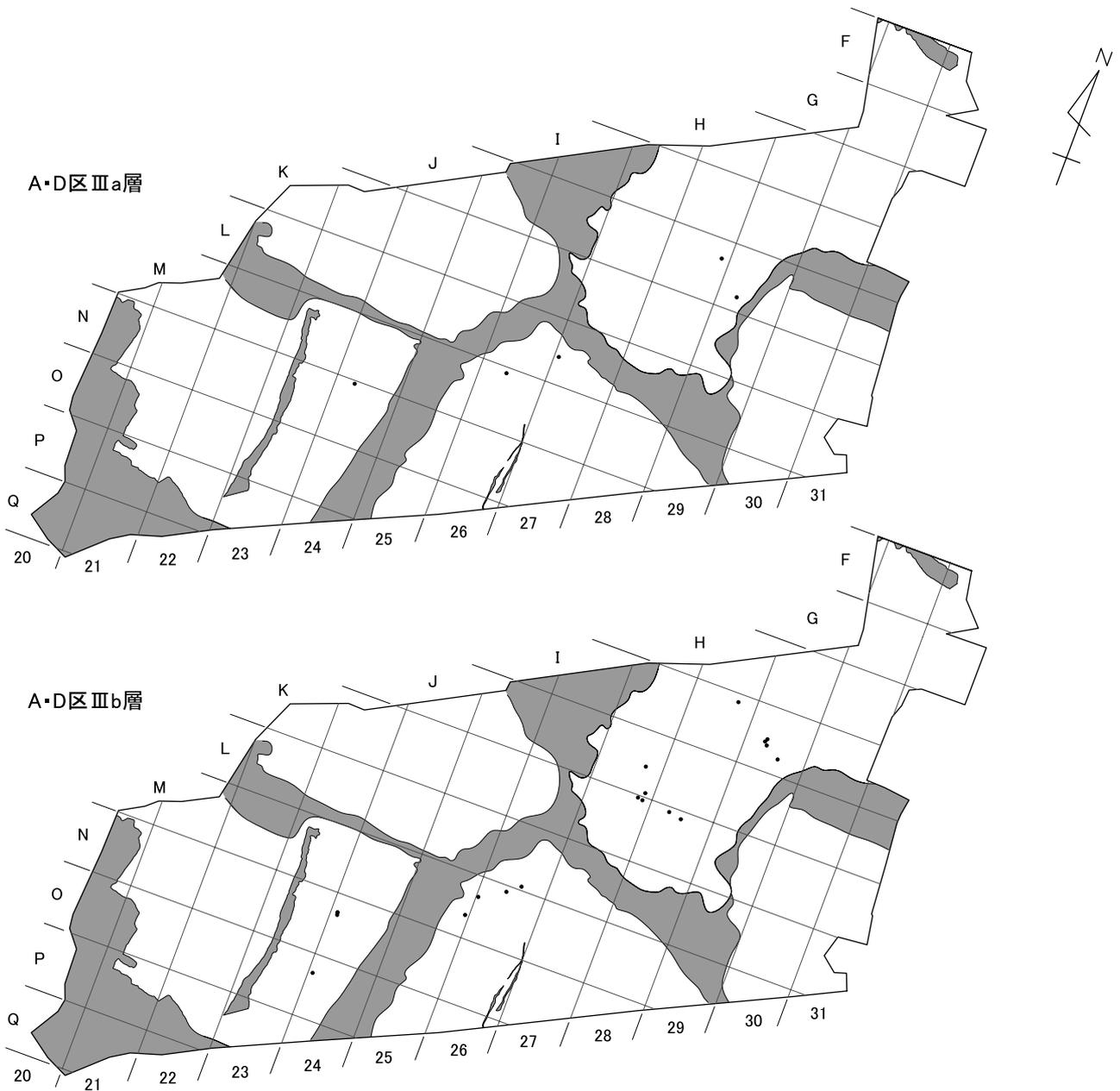


第236図 B・C区彩色土器の分布 (S = 1/800)

**B・C区彩色土器の分布**

出土層位の主体はⅢ b層にある。

まとめりとして二つが捉えられる。一つは雨裂1の北側，B 1区のグリッドQ 14付近である。もう一つは雨裂2の周辺で，グリッドU 12・13に集中する。C区における出土はない。

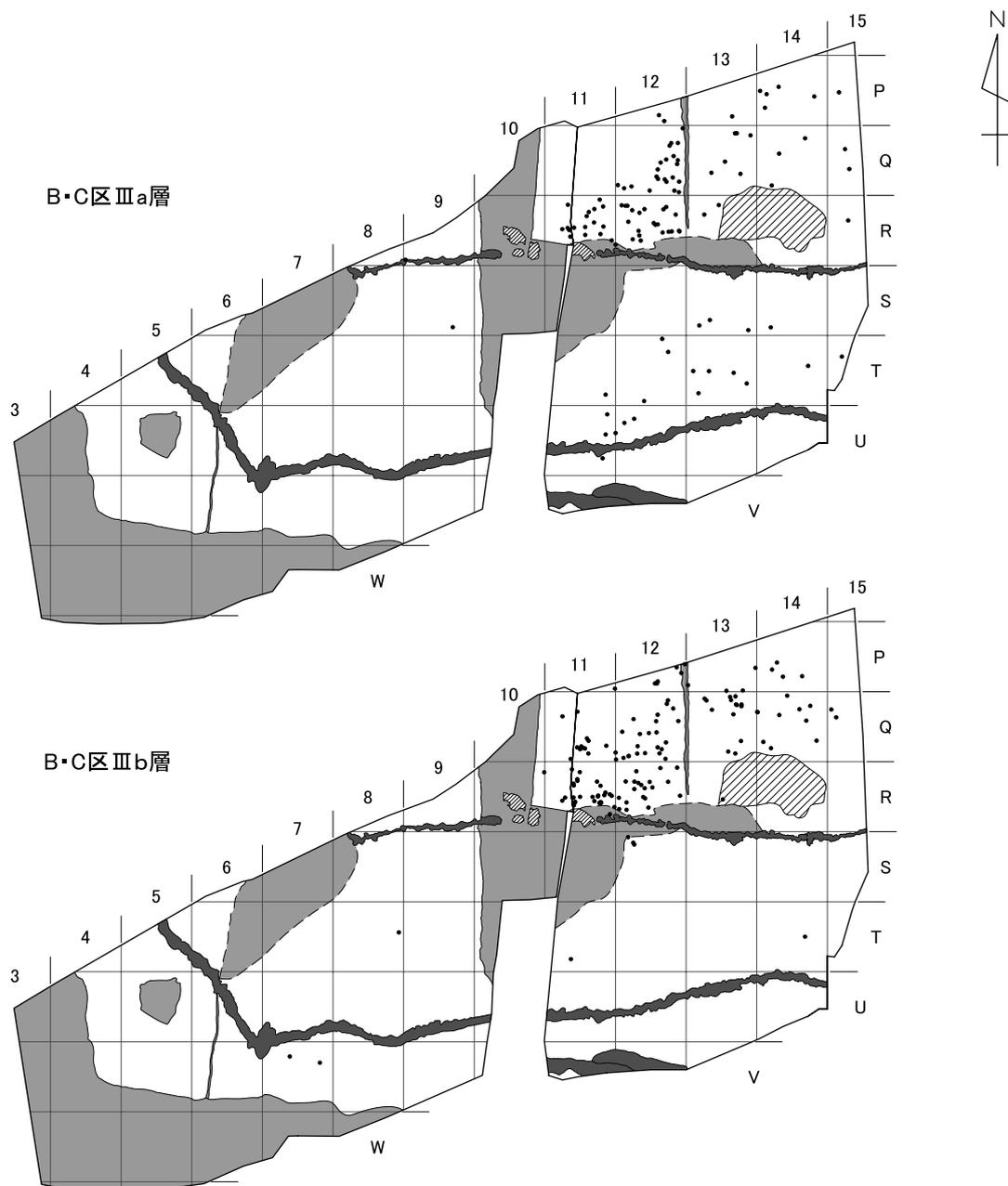


第237図 A・D区彩色土器の分布 (S = 1/800)

#### A・D区彩色土器の分布

赤色顔料を塗付する土器の分布である。しかしここで扱う彩色土器に丹塗りの壺は含めない。

出土層位の主体はⅢb層である。A 1区からA 4区の北西部分、A 5区の東部分にかけて帯状の大きなまとまりが捉えられる。A 2区、A 3区、A 5区の西側部分での出土は見られない。

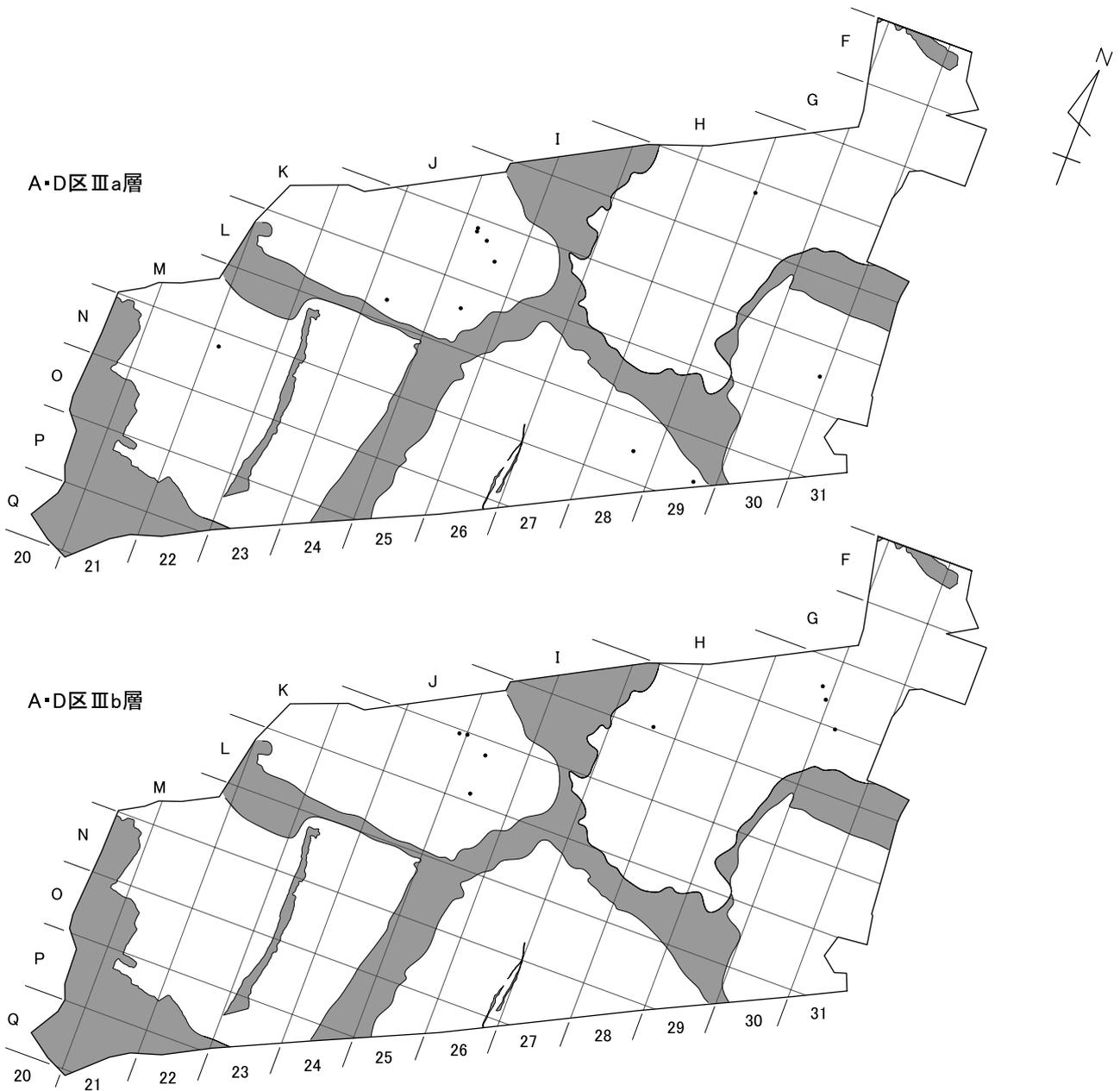


第238図 B・C区壺の分布 (S = 1/800)

**B・C区壺の分布**

出土層位はややⅢb層出土数がⅢa層出土数を上回る。

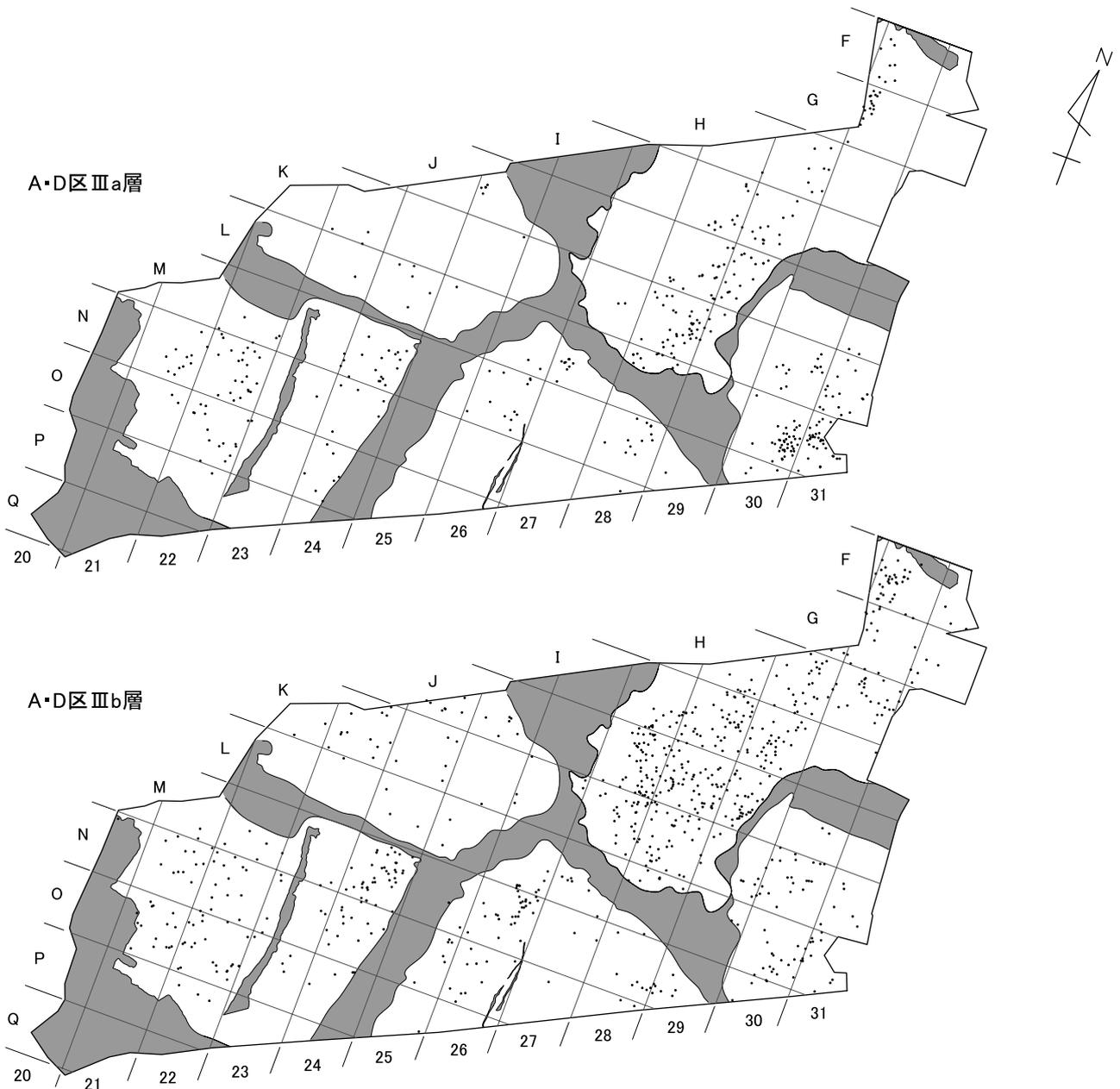
分布はⅢb層ではほぼB1区に限定される。Ⅲa層ではB1区において集中するがB2区においても一定の出土が見られる。B1区での出土は特に西側の11列, 12列付近で集中を見る。分布域がⅢa層で広がることは, 深鉢E類と同様, 遺物が地形に沿って拡散したものとして捉えられよう。



第239図 A・D区壺の分布 (S = 1/800)

### A・D区壺の分布

出土数はⅢ a層，Ⅲ b層ともに極めて少ない。深鉢E類の状況と同様である。散在的な出土ではあるが，調査区の北側であるA 1区，A 3区に偏る。調査区の北西部からの流入として考えられるかもしれない。

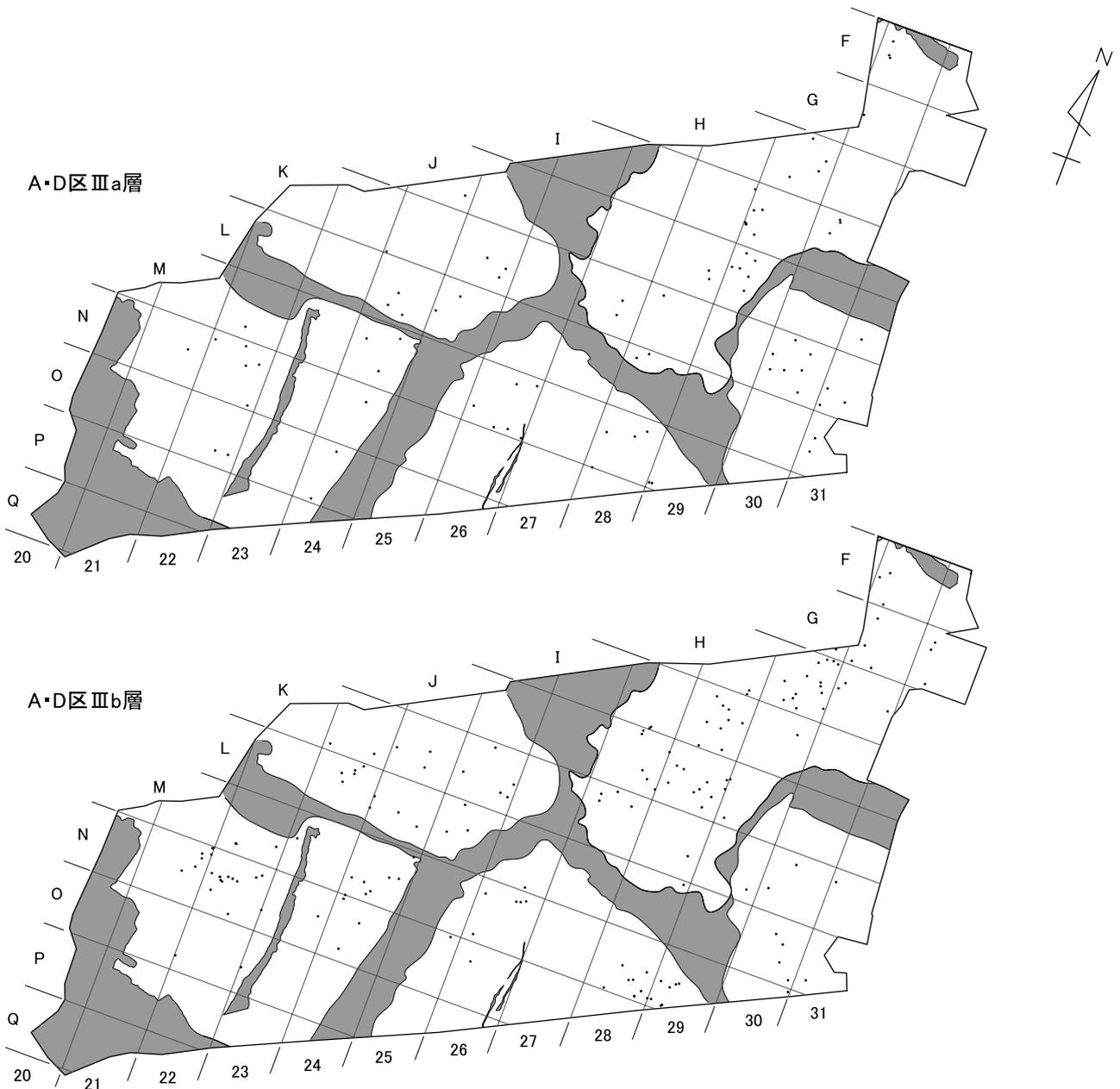


第240図 A・D区剥片素材石器群の分布 (S = 1/800)

### 3. 石器の分布 剥片素材石器群

Ⅲ a層ではA 1・2・5区で分布密度が高く、A 3・4区ではやや密度の低い分布となっている。A 1区では地区の中央を南北軸に沿って分布し、G 30、K 28では高密度の分布が見られた。A 2区では地区全域に分布し、L 30・31では高密度に分布している。A 3・4区は分布の希薄な地区であるが、4区では地区東側のM 28と西側のL 27の2ヶ所で偏在して分布する。A 5区は地区全域に密度の高い分布が認められた。

Ⅲ b層ではA 1区の全域に分布が広がり、特にJ 27周辺やF 30では密度の高い分布が見られる。A 2区はⅢ a層で集中したL 30の分布密度が低くなり地区全域で散在的な分布となっている。A 3区では地区北側に分布域を広げるが散在的な分布である。A 4区はⅢ a層の分布と同じく地区の東西2ヶ所で偏在的に分布し、M 26は特に密度の高い分布となっている。A 5区では地区全域で散在的な分布となるが、M 24でやや密度の高い分布が認められた。

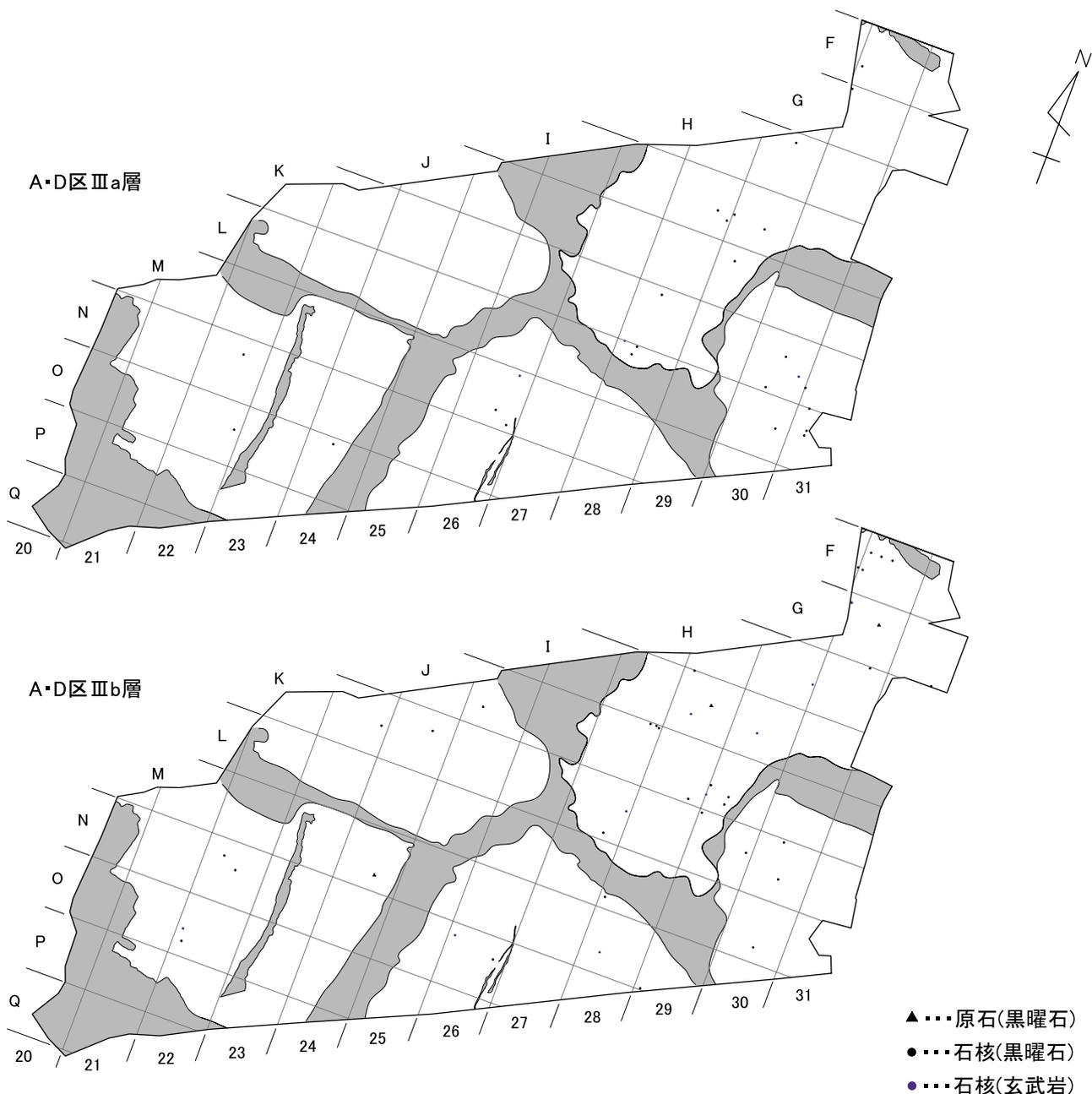


第241図 A・D区礫・岩片素材石器群の分布 (S = 1/800)

### 礫・岩片素材石器群

Ⅲ a層では剥片素材石器群の分布と同じくA 1区は、地区の中央を南北軸に沿って分布しており、I・J 29周辺ではやや密度の高い分布が見られた。A 2区では剥片素材石器群が集中するL 30より北側で散在的に分布している。A 3区では地区のやや南側に分布が広がっており、A 4区ではM 26・28の2ヶ所で密度は低いが偏在した分布が見られた。A 5区では地区全域で散在的な分布となっている。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土量が増加し、各区で分布域の広がりが見られる。A 1区ではⅢ a層での分布域より西側まで分布が広がり、H 29やJ 28周辺では分布密度がやや高くなっている。A 2区では地区の南側に分布の中心が移っている。A 3区では地区の中央まで分布が広がるが、散在的な分布である。A 4区では地区の東西2ヶ所で偏在的に分布した。特にM 28・29では高密度に分布する。A 5区では地区北側のM 24周辺とN 22周辺の2ヶ所でやや密度の高い分布が見られた。



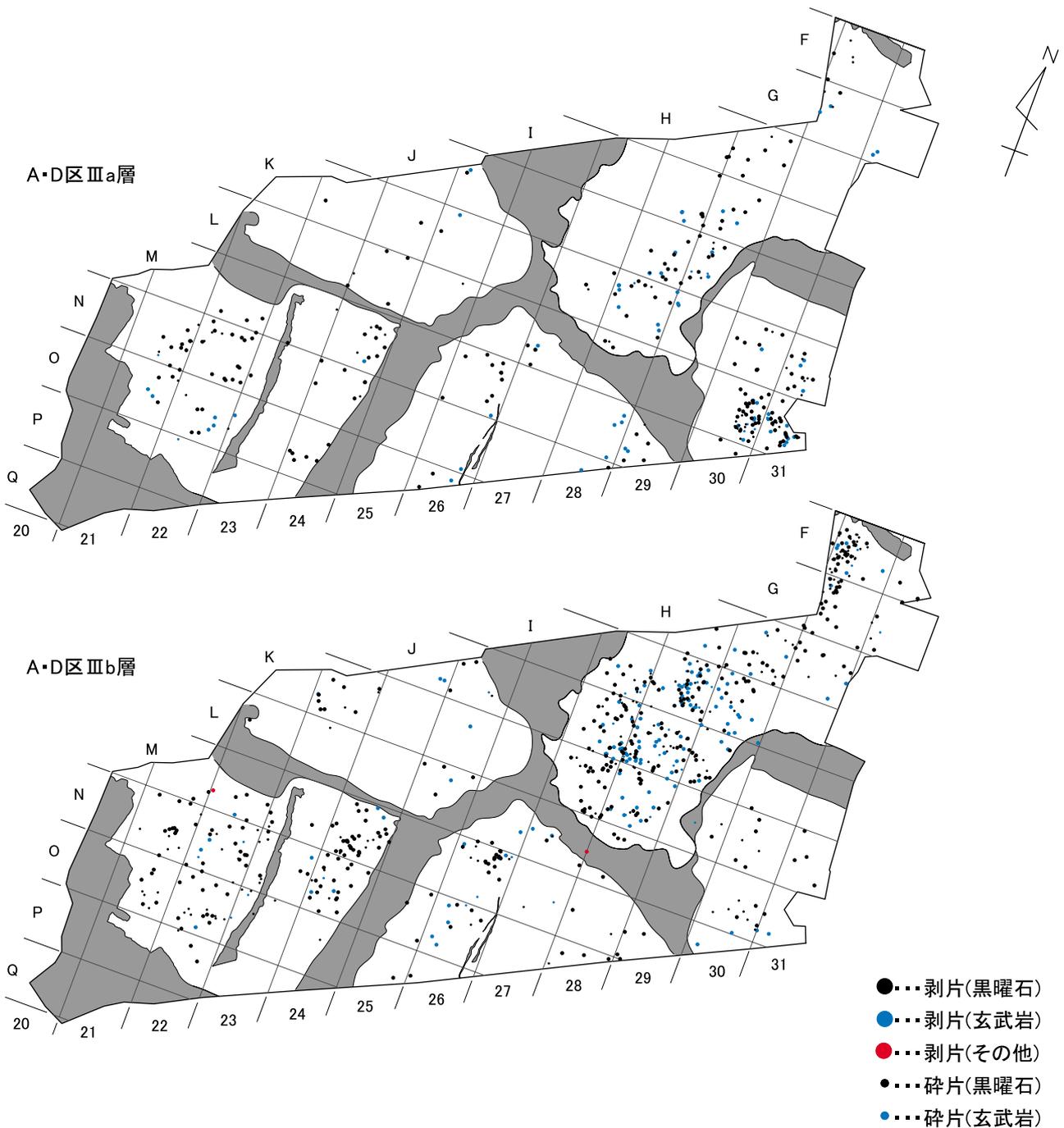
第242図 A・D区原石・石核の分布 (S = 1/800)

### 原石・石核

Ⅲ a層では原石の出土はなく、石核はA区東側の1・2区で偏在的に分布する。A 1区では地区の中央を南北軸に沿って分布し、I・L 28の2ヶ所で3点ずつの近接した分布が見られた。A 3・4・5区ではそれぞれ散在的に分布している。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加し、原石の出土も見られた。石核はA 1区全域に分布が広がっており、F 30、J 27北側、J・K 28・29中央付近の3ヶ所では高密度の分布が見られた。原石は石核の集中域では、出土していない。A 2～4区では原石の出土はなく、石核は散在的に分布している。A 5区では2ヶ所で偏在した分布が見られた。

原石・石核の分布域は、剥片・碎片との分布域の重なりがⅢ a層ではA 2区のL 30周辺、Ⅲ b層ではF 30、M 24で認められる。

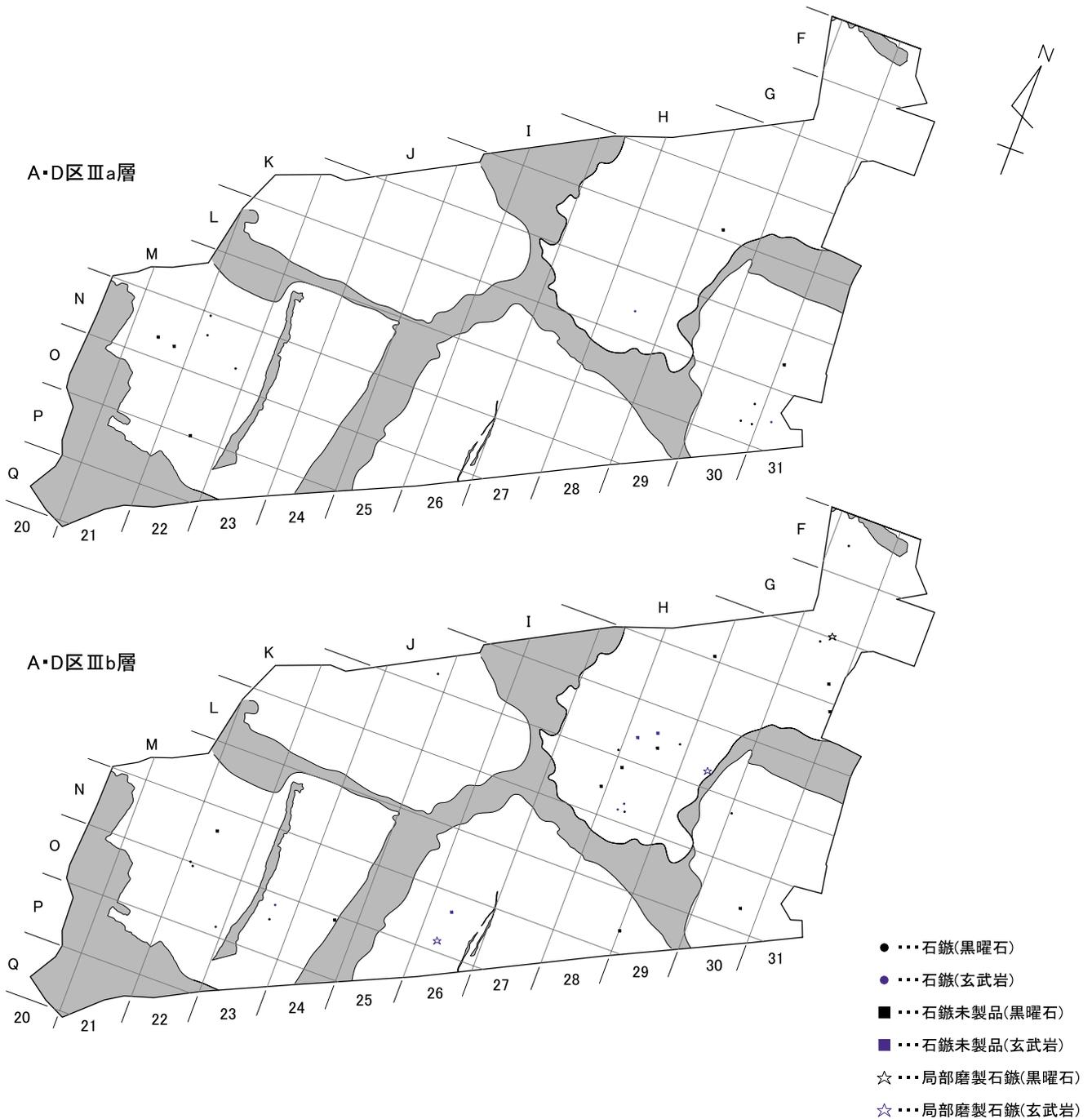


第243図 A・D区剥片・碎片の分布 (S = 1/800)

### 剥片・碎片類

Ⅲ a層ではA 1区の中央を南北軸に沿って分布しており、J・K 28・29周辺では剥片・碎片ともに高密度の分布が見られる。A 2区では地区全域に分布し、特にL 30・31周辺では剥片・碎片が高密度に分布している。A 3・5区では地区全域に広く分布しているが、散在的な分布となっている。A 4区は地区東側のM 26、地区西側のM 28・29の2ヶ所で偏在して分布している。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加しA区全域で分布が広がる。A 1区では地区全域での分布となり、特にF 30、I・J 28の3ヶ所では高密度に分布している。A 2区はⅢ a層で集中したL 30で出土数が減少し、地区全域で散在的な分布となる。A 3区は他の地区と比べて分布密度は低いものの地区西側のK 23でやや密度の高い分布が見られた。A 4区ではM 26でやや密度の高い分布が見られるものの全域で散在的な分布となっている。A 5区では中央の雨裂を挟んで東側のM 24周辺で高密度の分布が見られた。



第244図 A・D区石鏃・局部磨製石鏃・石鏃未製品の分布 (S = 1/800)

### 石鏃未製品

Ⅲ a層では出土数が少ない。A 5区ではN 21で2点が近接して分布する。

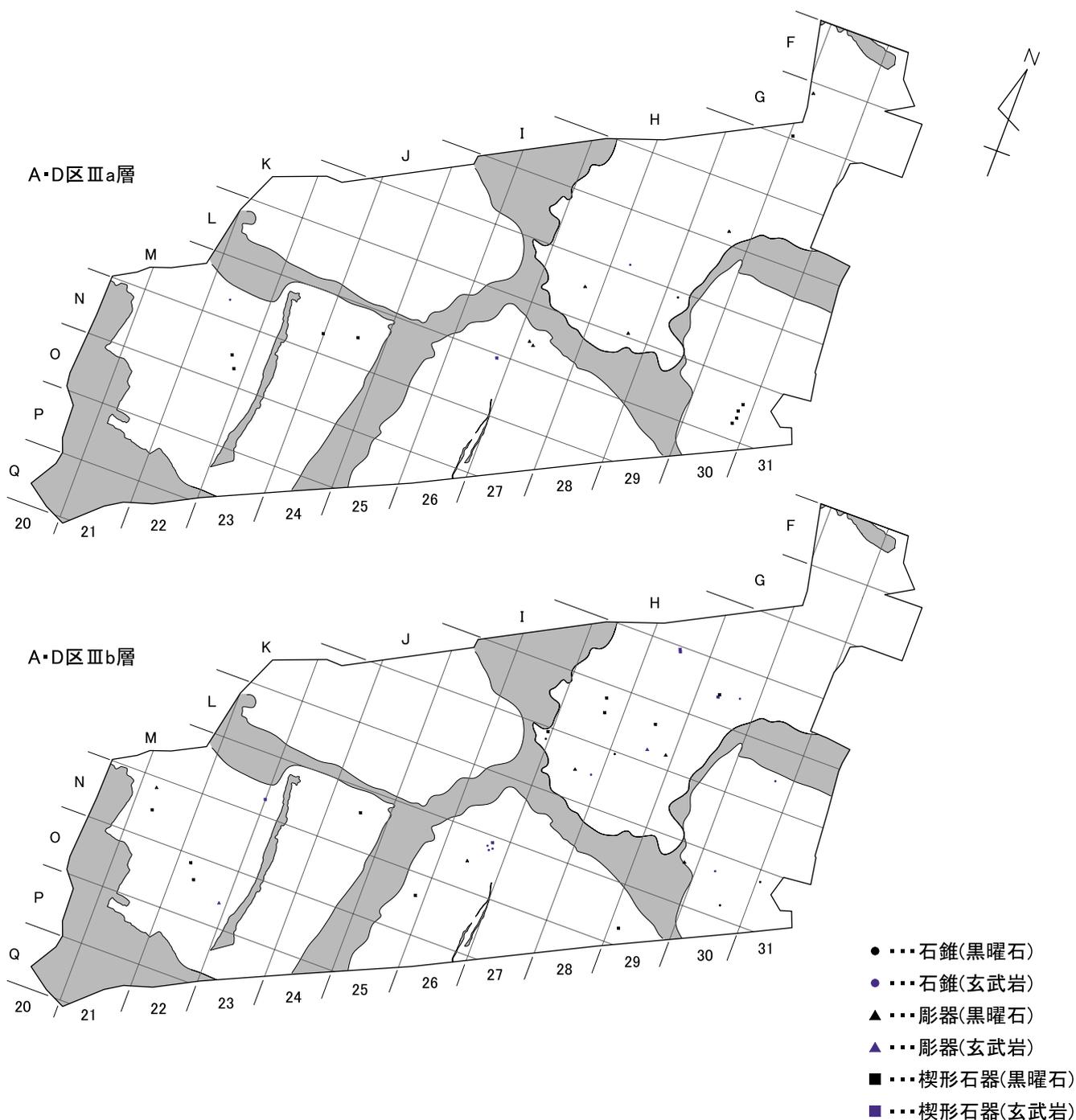
Ⅲ b層ではA 1区の南側で5点が分布しており、特にJ 28では3点が近接して分布する。

### 石鏃

Ⅲ a層ではA 1・2・5区に分布している。A 1区では1点のみの出土であり、A 2区のL 30、A 5区のN 22の2ヶ所に偏在した分布が見られる。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べてA 1・5区で出土数が増加し、A 2区では減少する。A 1区ではK 28で3点が近接して分布する。A 5区ではⅢ a層で地区の北側に集まっていた分布が地区の中央から南側に分布域が移る。散在的な分布であるが、O 22では2点の近接した分布が見られた。

局部磨製石鏃はⅢ b層のA 1・4区に分布するが、近接はしておらず、打製石鏃の分布域とも重なりが認められない。



第245図 A・D区石錐・彫器・楔形石器の分布 (S = 1/800)

**石錐**

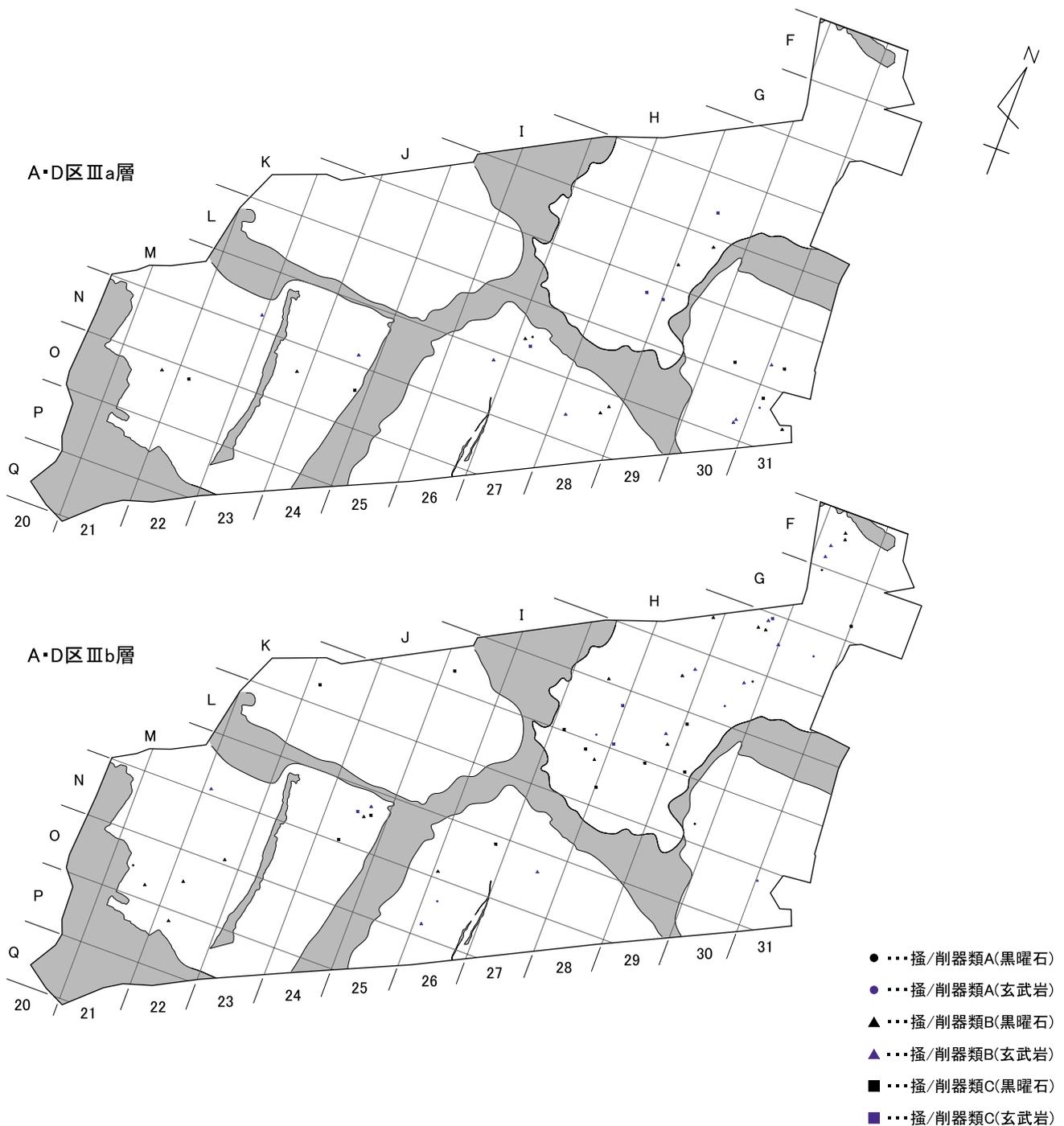
Ⅲ a層ではA 1区でのみ2点が出土した。Ⅲ b層ではA 1区に加え2・4区に分布が広がっている。A 1・2区では分布密度は低いが偏在的な分布となっている。A 4区ではM 26北側で密度の高い分布が認められる。

**彫器**

石錐と同じくⅢ a層では出土数が少ない。A 1区では地区の南側で散在的に分布し、A 4区では地区北側のL 27で2点が近接して分布する。Ⅲ b層はⅢ a層と比べて出土数が増加する。A 1区ではJ 28で2点が近接している。A 4・5区では散在的な分布である。

**楔形石器**

Ⅲ a層ではA 2区のL 30で4点が近接して分布し、A 5区ではN 22で2点が近接して分布する。Ⅲ b層ではA 1区で2点ずつが近接して分布し、A 5区ではO 22で2点が近接して分布する。



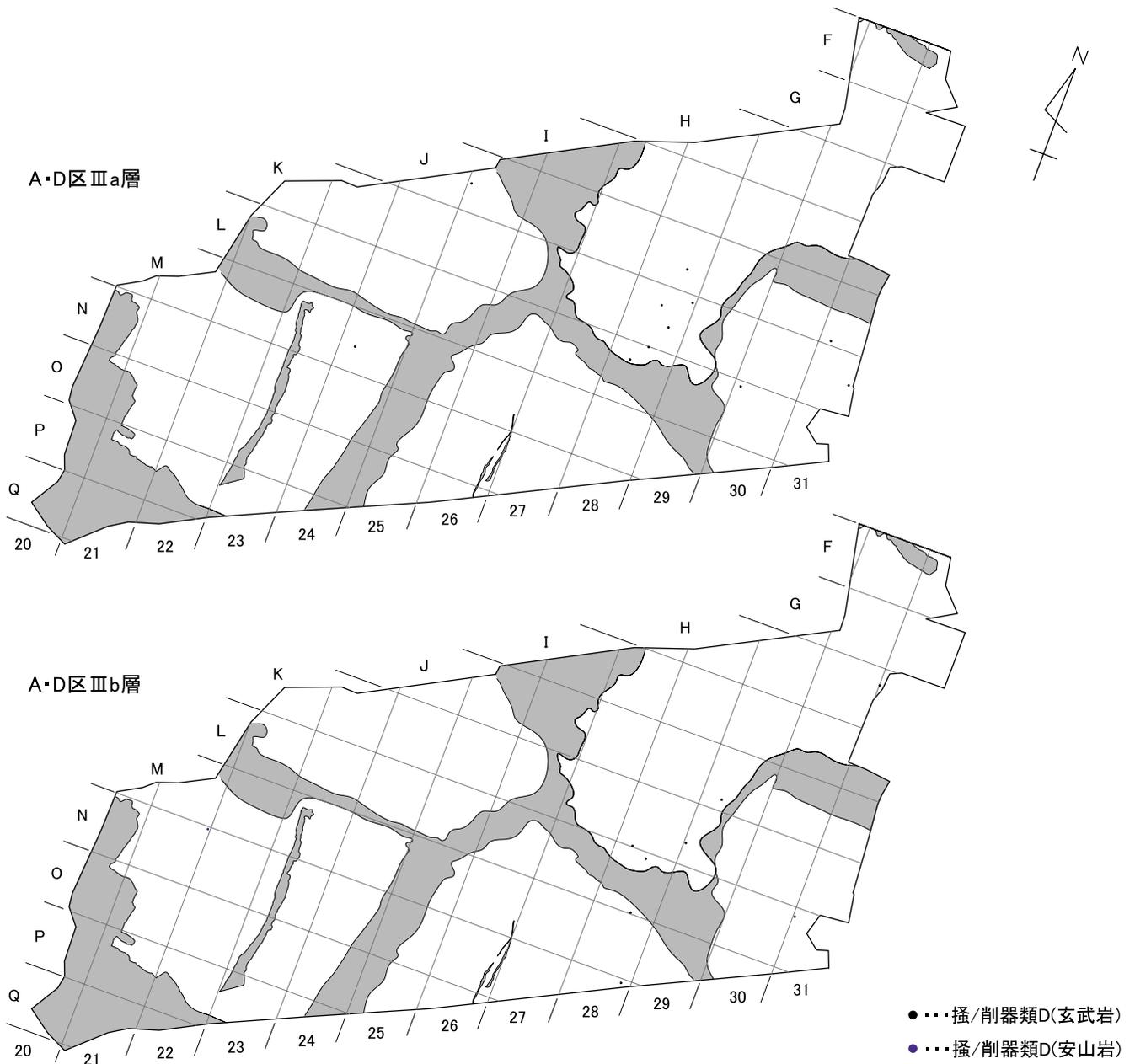
第246図 A・D区Ⅲa層Ⅲb層の分布 (S = 1/800)

### Ⅲa層 Ⅲb層

切削具として考えられるA～C類はⅢa・b層で分布域が異なる。

Ⅲa層ではA区南側のA2・4区に分布の中心があり、偏在する傾向が見られる。A2区ではL31周辺にA～C類が高密度に分布し、A4区ではL27・M28に偏在して分布する。A1区でも南東側に、A5区では全域に分布するが散在的である。

Ⅲb層ではⅢa層で分布が希薄であったA1・5区に分布の中心が移る。A1区ではA～C類が地区全域に分布を広げ、F30とH29ではB類を中心とする高密度の分布が見られた。A2～4区では密度が低く散在的に分布している。A5区では地区北東側のM24でB・C類がやや高密度に分布するが、地区南西側に黒曜石製のB類が散在的に分布している。



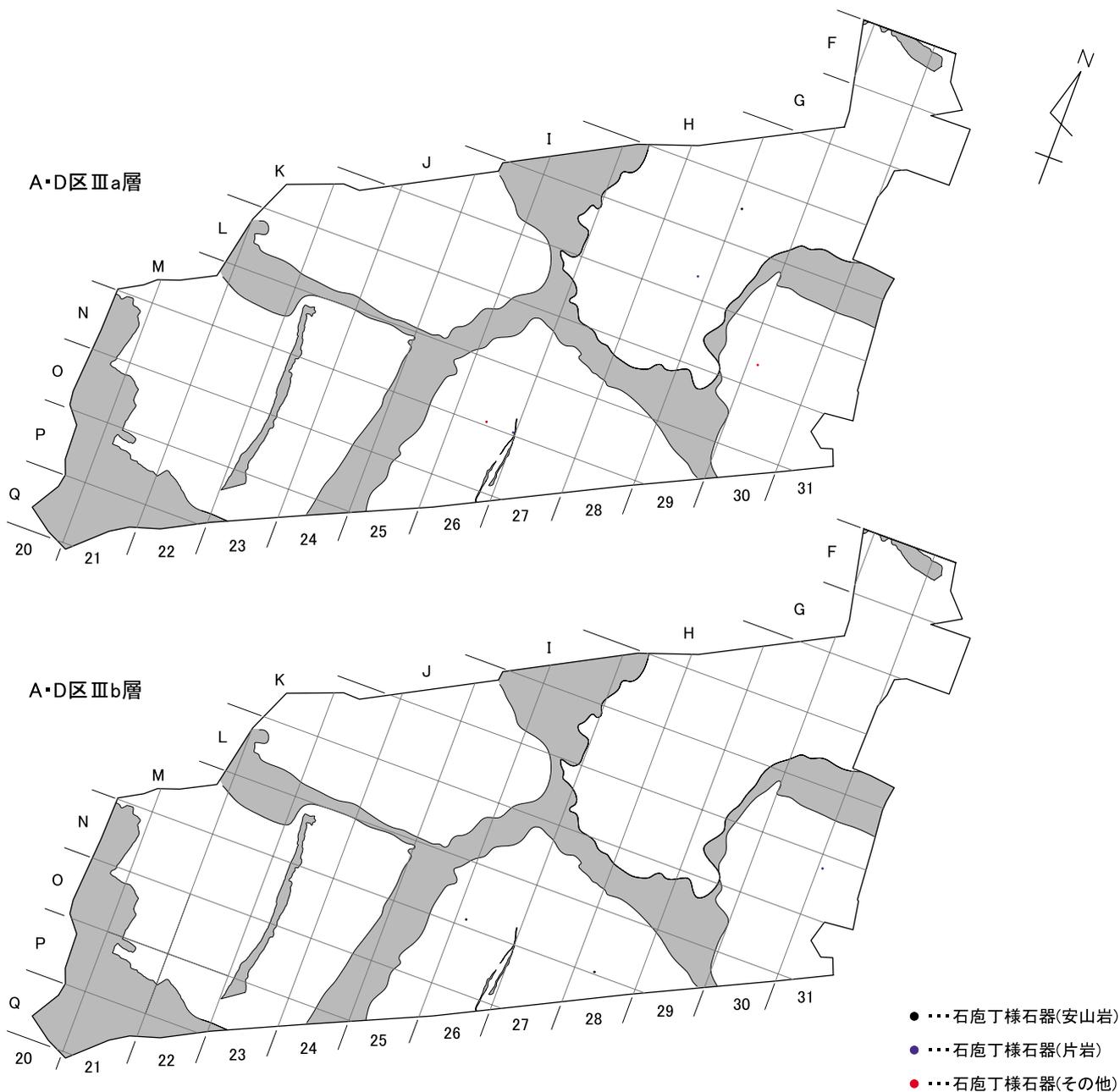
第247図 A・D区掻/削器D類の分布 (S = 1/800)

### 掻/削器D類

収穫用として考えられるD類は、Ⅲ a層のA 1区では地区南側に偏在しており、K 28を中心に分布している。A 2～5区では分布密度が希薄で散在的に分布している。

Ⅲ b層でもⅢ a層と同様にA 1区の南側に偏在しておりA 4区北側の攪乱を挟んでL 28周辺に分布が見られた。その他の地区では出土数が少ないが、A 5区に安山岩製が1点出土している。

Ⅲ a・b層ともに出土量は少ないが、A 1区南側のK 28を中心に偏在的に分布しており、機能差があると考えられる掻/削器A～C類とはJ・K 28周辺で分布域に重なりが見られた。これに対しD類と同様の機能を有すると考えられる石庖丁用石器はⅢ a層ではJ 28で1点のみの出土であり、Ⅲ b層ではJ 28及びその周辺の出土はなかった。



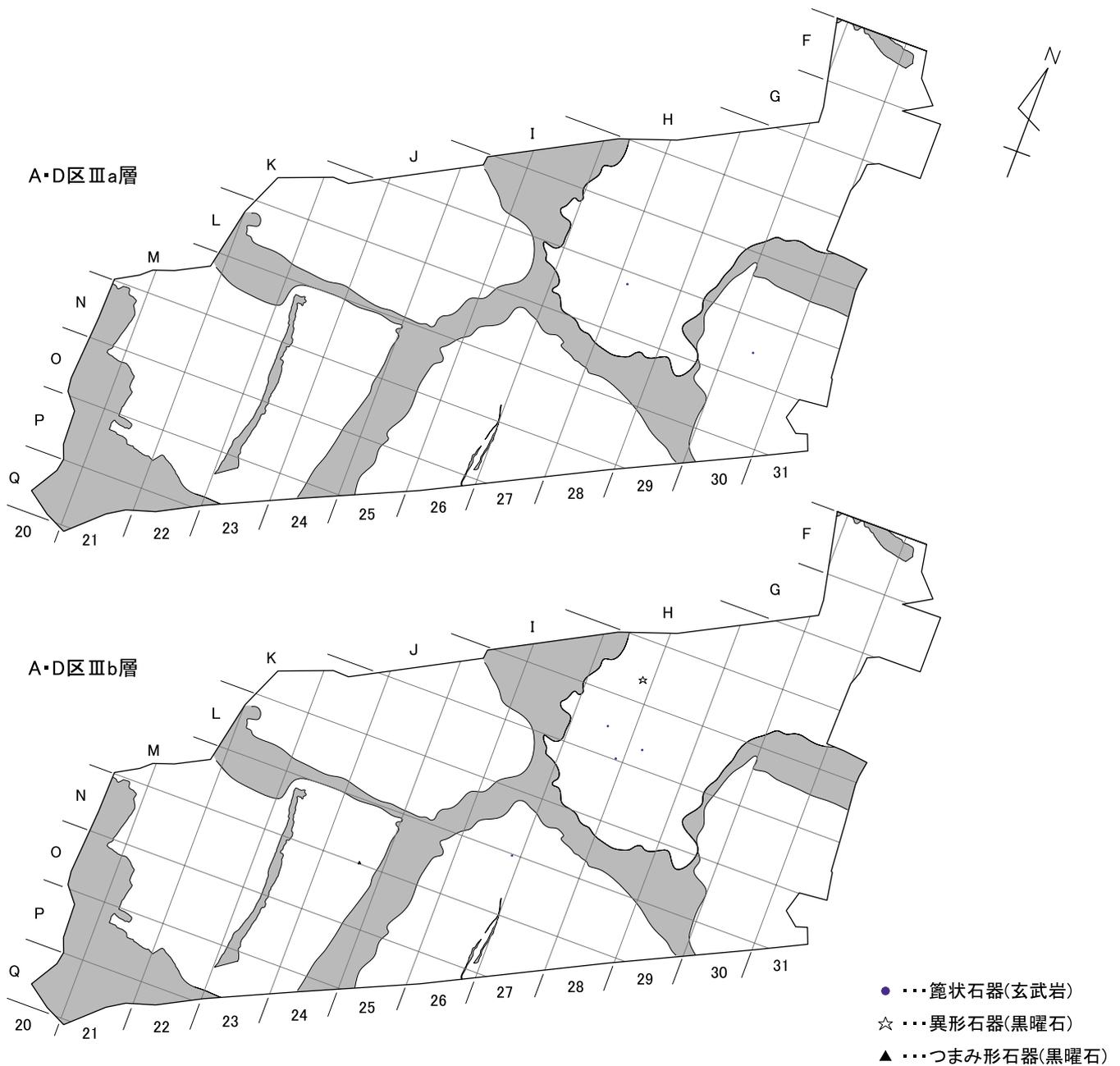
第248図 A・D区石庖丁様石器の分布 (S = 1/800)

### 石庖丁様石器

Ⅲ a層では5点が出土し、A 1・2区では、散在的に分布し、A 3区ではM 26で2点が同一グリッド内から出土している。

Ⅲ b層では3点が出土した。A 1・3・5区からは出土せず、A区南側のA 2・4区から出土するが、散在的に分布している。

前頁でもふれたが、収穫用としての機能が考えられる掻ノ削器D類は、K 28周辺で出土しており、同様に収穫用として考えられる石庖丁様石器は、集中域を形成せずに広範に散在し分布している。



第249図 A・D区籠状石器・異形石器・つまみ形石器の分布 (S = 1/800)

**籠状石器**

Ⅲ a層ではA 1・2区で各1点ずつ出土した。

Ⅲ b層ではA 1・4区で計4点が出土した。A 1区ではJ 27周辺で3点が近接して分布している。

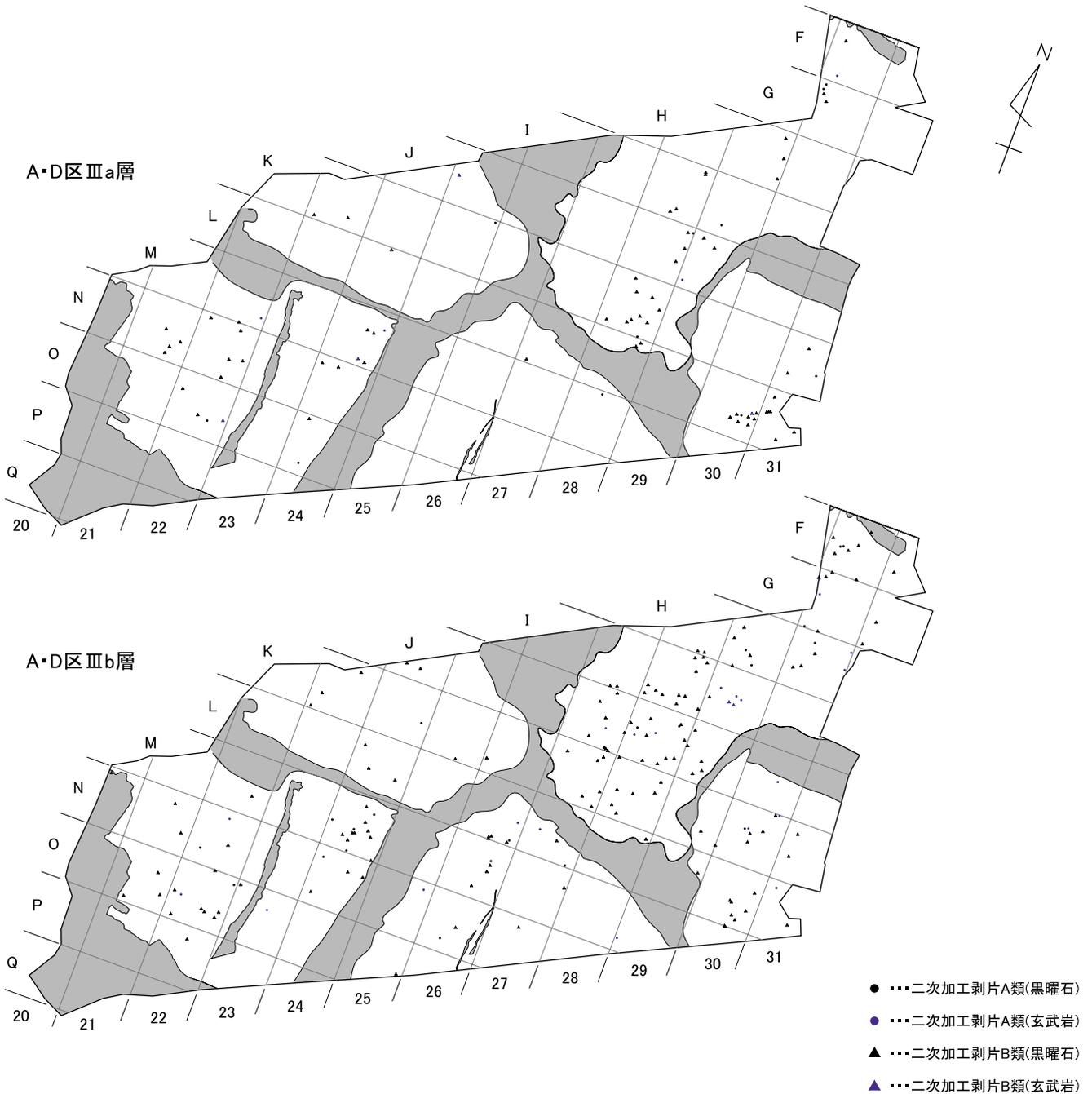
刃付けの方法や整形など類似した形態をもつ打製石斧の分布域とは重なりは見られなかった。

**つまみ形石器**

Ⅲ a層では出土せず、Ⅲ b層ではA 5区のM 24から1点のみ出土した。形態的に類似する搔ノ削器C類はM 24を中心として高密度に分布しており、同一グリッドからの出土である。

**異形石器**

Ⅲ b層ではA 1区のI 27で1点のみ出土した。I 27は剥片素材石器群の分布域の北端に位置し、他の石器の出土も希薄な地点である。

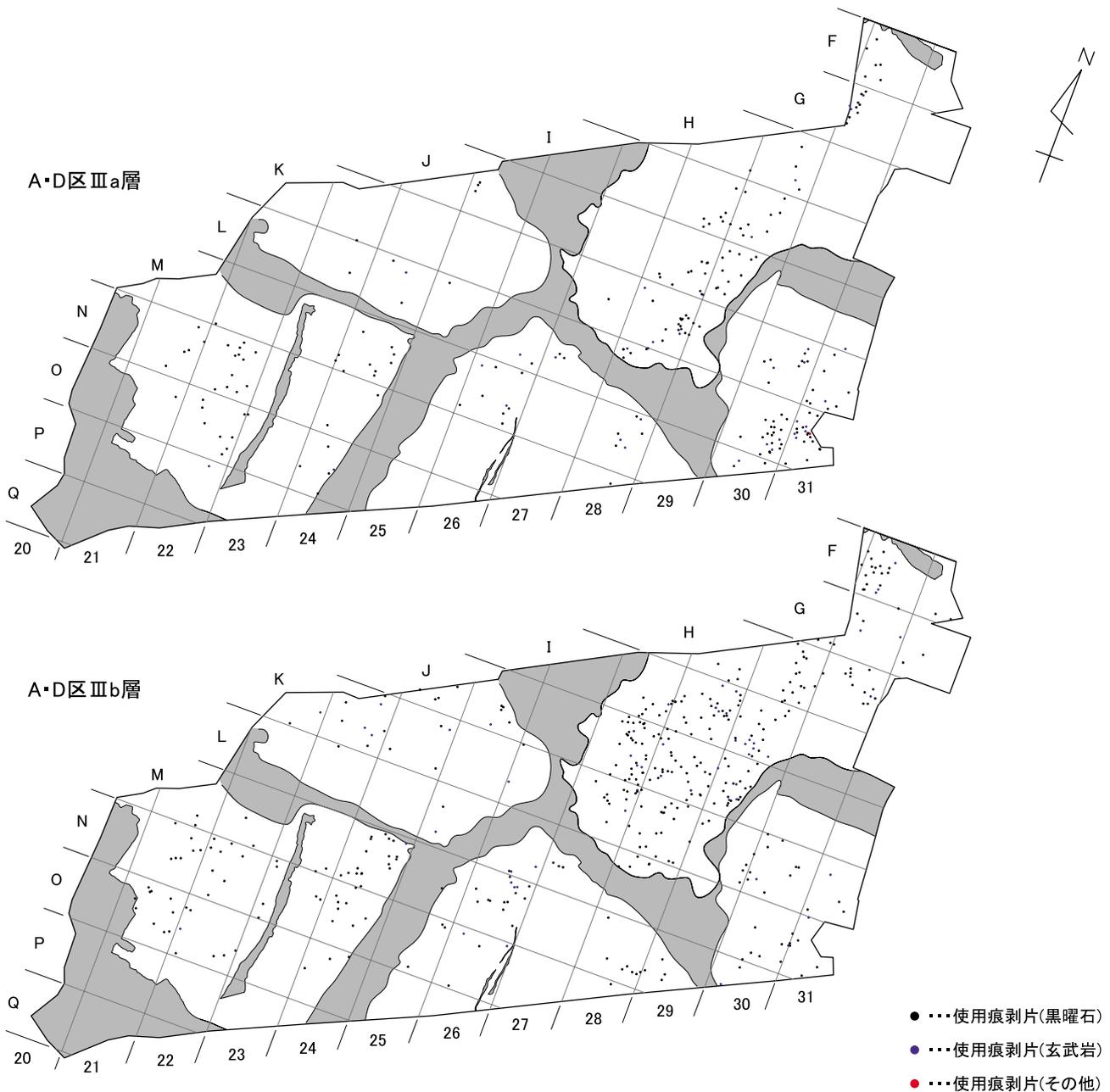


第250図 A・D区二次加工剥片A・B類の分布 (S = 1/800)

### 二次加工剥片A・B類

Ⅲ a層ではA 1・2・5区に分布の中心が見られ、A 3・4区の分布は希薄である。A 1区では地区の中央を南北軸に沿って分布し、地区南側のK 28周辺では高密度に分布している。A 2区では偏在的に分布し、L 30ではB類が高密度に分布している。A 5区では地区全域に分布が見られ出土数も多いが、A 2区のL 30のような集中域は見られない。

Ⅲ b層ではⅢ a層に比べて出土数が増加する。A 1区では地区の中央より東西に分布の広がりが認められ、特にJ 28周辺ではB類を中心とする高密度の分布が見られた。A 2区では地区全域に分布が広がり、A 3区では出土数は増えるものの全体的に散在している。A 4区では特に26列の中央に高密度に分布している。A 5区でも出土量は増加し、M 24では高密度の分布となる。

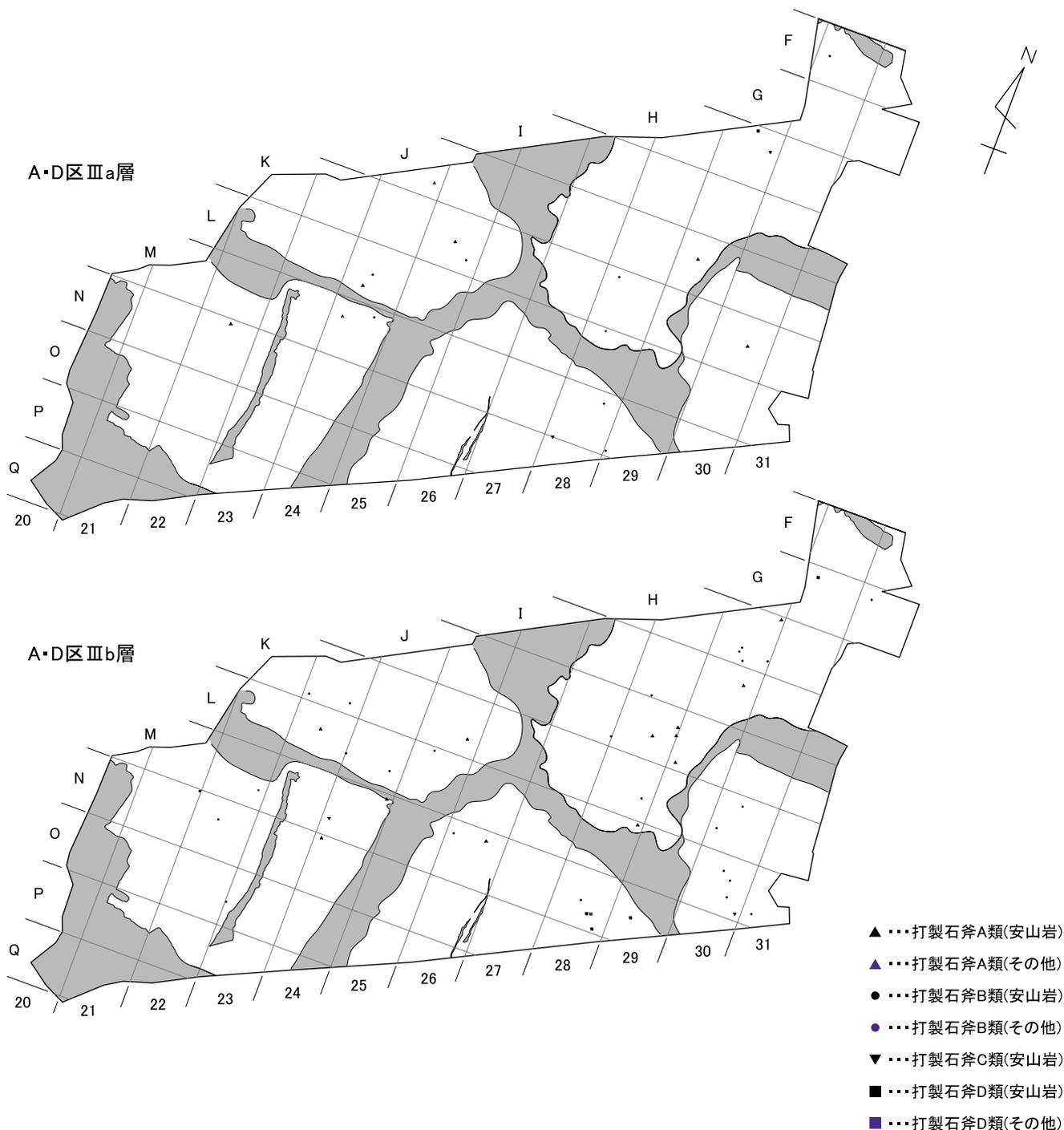


第251図 A・D区使用痕剥片の分布 (S = 1/800)

### 使用痕剥片

Ⅲ a層ではA 1区の中央を南北軸に沿って偏在的に分布し、地区南側のK 28周辺で高密度の分布が見られる。また、F 30周辺にも高密度の分布が認められる。A 2区ではL 30を中心に高密度の分布が認められた。A 3・4区では出土数が少なく分布は希薄であるが、4区は北側の攪乱に沿ってやや偏在して分布している。A 5区では地区全域に散在するが、地区北東端のM 24ではやや高密度の分布が認められる。

Ⅲ b層ではⅢ a層に比べて出土数が増加する。A 1区では地区の西側まで分布を広げ、特にJ 27周辺に高密度に分布している。A 2区では地区全域に散在的な分布となり、A 3区では地区の北側に出土が増えるが散在的に分布する。A 4区ではⅢ a層と同様にM 26・28周辺の2ヶ所で高密度の分布が見られた。A 5区ではⅢ a層同様の分布であるが、M 24周辺でより分布密度が高くなる。

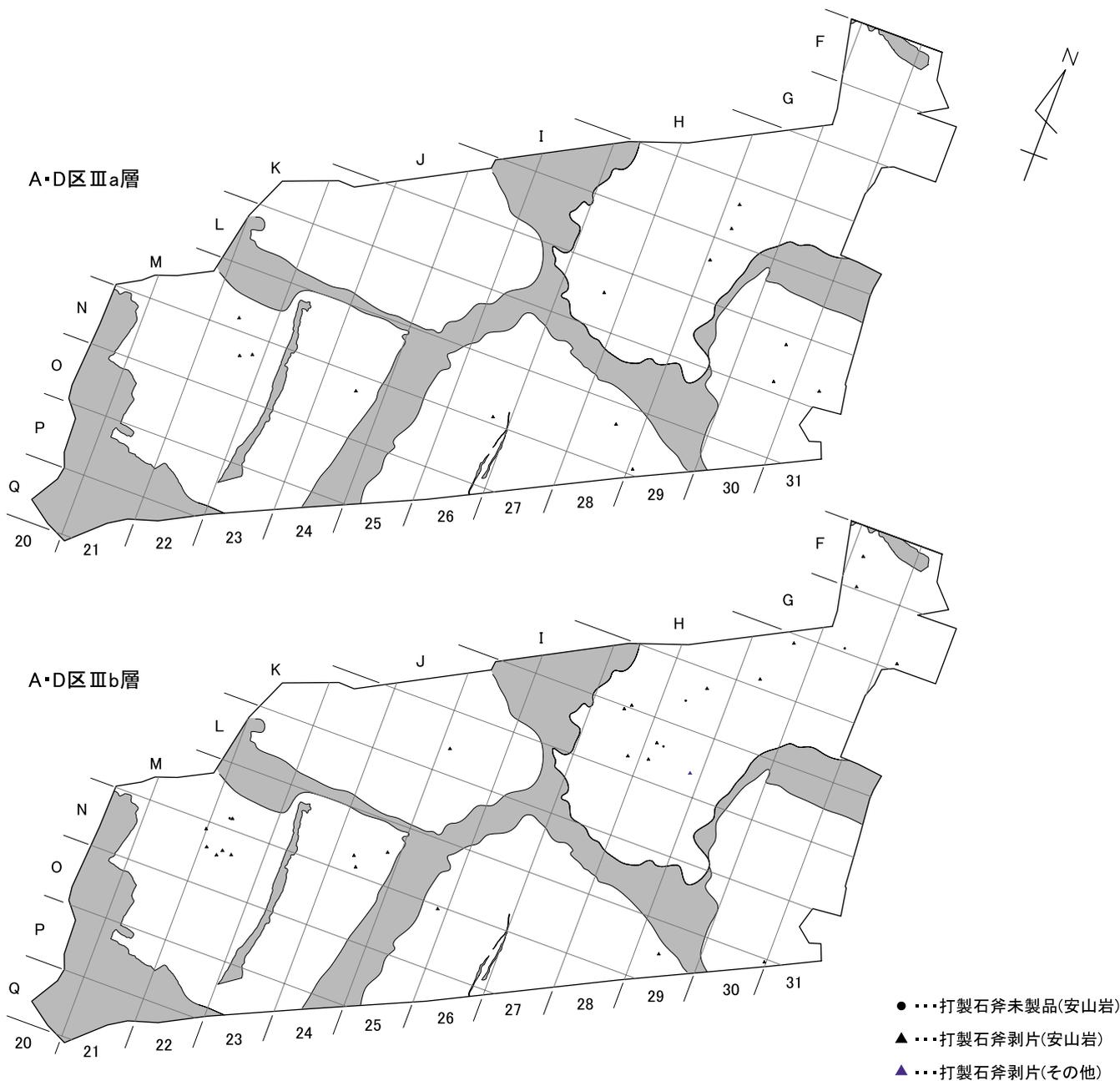


第252図 A・D区打製石斧A～D類の分布 (S = 1/800)

### 打製石斧A～D類

Ⅲ a層は出土数が少なく各地区において散在的に分布しているが、A 3区の南側のK 25・L 24では2点ずつが同一グリッド内で出土している。また、A 3区のL 24とA 5区北側のM 24では攪乱を挟んで安山岩製と結晶片岩製がやや近接して分布している。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加し、偏在する傾向が見られた。A 1区はJ 28周辺とH 29を中心として分布が認められる。A 2区では安山岩製がL 30周辺に集中して分布している。A 3区は地区の南側で散在的に分布している。A 4区では地区の北西端のM 26と南東端のM 28周辺で偏在的な分布となっており、特にM 28では安山岩製と結晶片岩製のD類が集中して分布している。A 5区では地区のやや北側に偏在する傾向が見られるが、散在的な分布である。



第253図 A・D区打製石斧未製品・打製石斧剥片の分布 (S = 1/800)

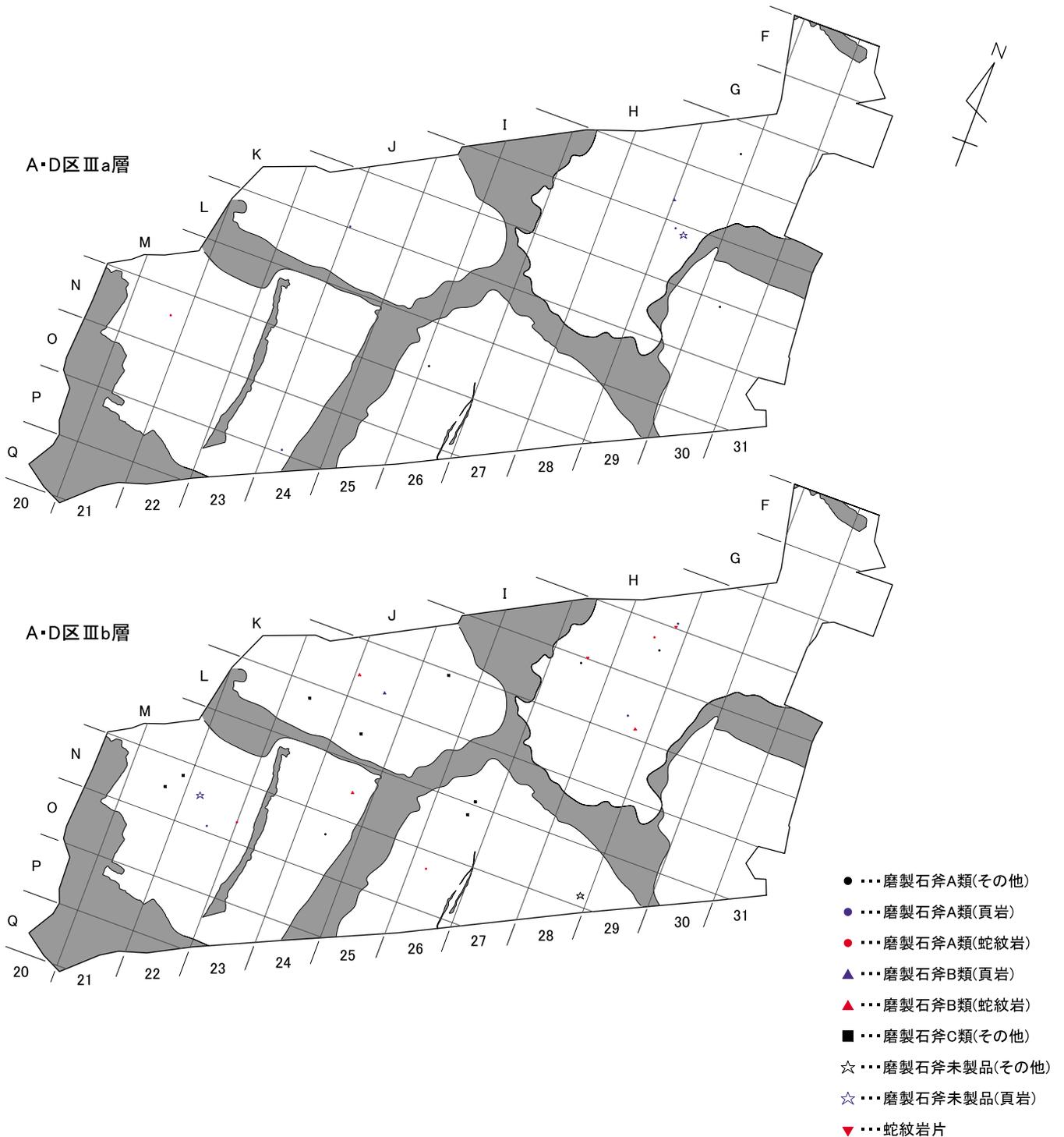
#### 打製石斧未製品

Ⅲ a層からは出土せず、Ⅲ b層では5点が出土した。A 1区ではJ 28周辺で打製石斧の分布域とやや近い位置から出土している。A 3・5区では各1点ずつの出土であるが、打製石斧の分布域と近い位置に出土している。

#### 打製石斧剥片

Ⅲ a層では分布が希薄で、散在的に分布している。

Ⅲ b層ではA 1・5区でⅢ a層と比べて出土数が増加する。A 1区ではJ 28を中心に未製品を含む偏在的な分布が認められる。A 5区では2ヶ所で偏在した分布が認められる。N 22では北側に集中した分布となり、M 24では未製品は見られないが3点が同一グリッド内から出土している。A 1区のJ 28周辺やA 5区のN 22周辺では未製品、剥片、製品が同一グリッド内から重なって出土しており、打製石斧の調整場としての空間利用が考えられる。



第254図 A・D区磨製石斧A～C類・磨製石斧未製品・蛇紋岩片の分布 (S = 1/800)

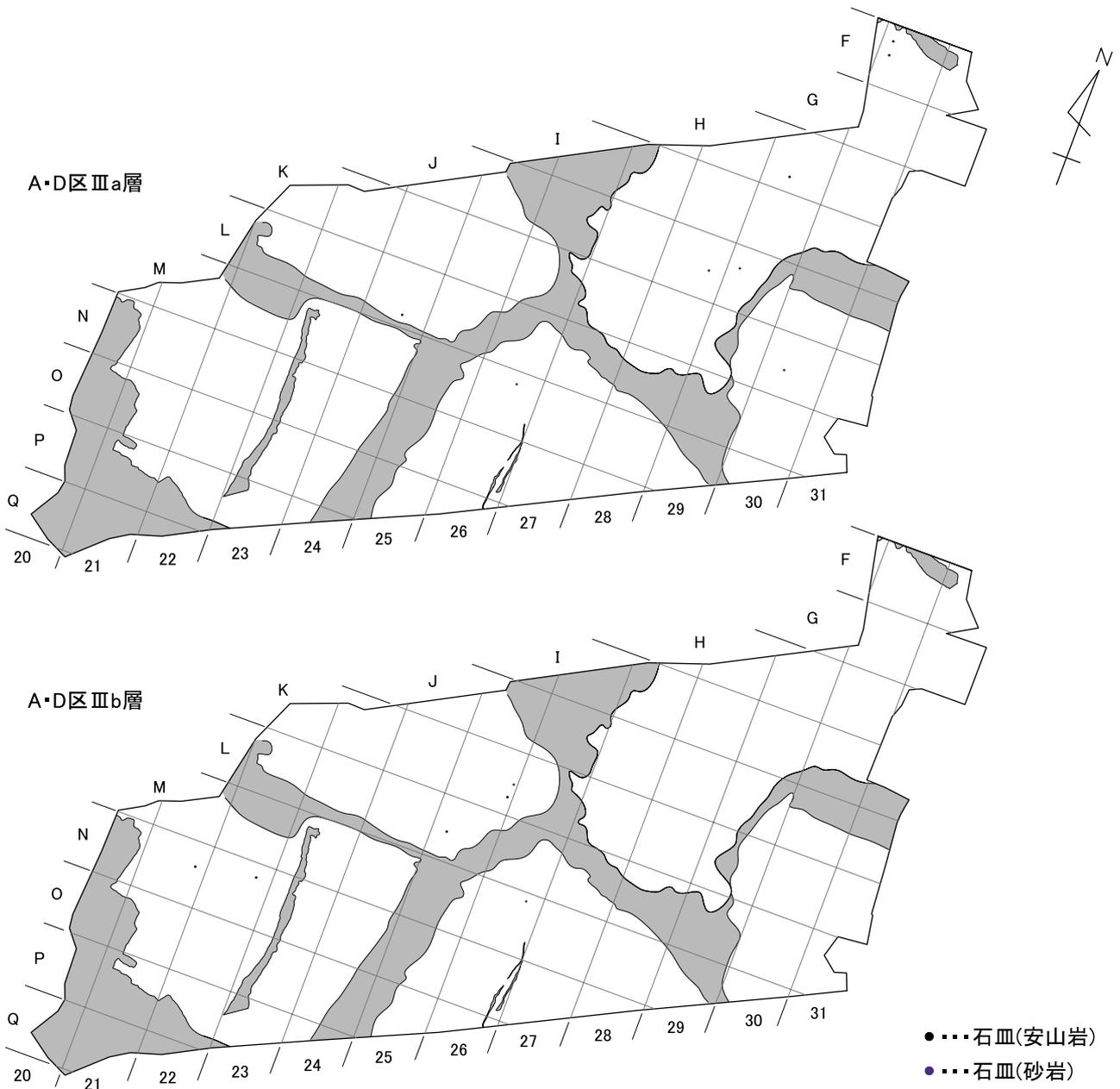
**磨製石斧A～C類**

Ⅲ a層ではA 1区の中央で頁岩製が近接して分布し、A 5区で蛇紋岩製が1点出土している。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加する。A 1区では地区の中央で2ヶ所の偏在した分布が認められる。石材に偏りは認められない。A 3区では主に安山岩製が出土し、地区全体で散在的な分布となる。A 4区では地区の北側に安山岩製が近接して分布する。A 5区は地区中央の攪乱より西側のN 21・22で2点ずつの近接した分布が認められた。Ⅲ a層で1点のみの出土であった蛇紋岩製はⅢ b層では出土数が増加し安山岩製と共に主として利用されるようになるが、安山岩製と異なり蛇紋岩製のみで分布域は形成していない。

**磨製石斧未製品・蛇紋岩片**

Ⅲ a層ではA 1区から頁岩製の未製品が1点のみ出土した。Ⅲ b層ではA 1区で蛇紋岩片が出土した。A 4区のM 28では結晶片岩製の未製品が出土し、M 29では結晶片岩の岩片が高密度に分布している。



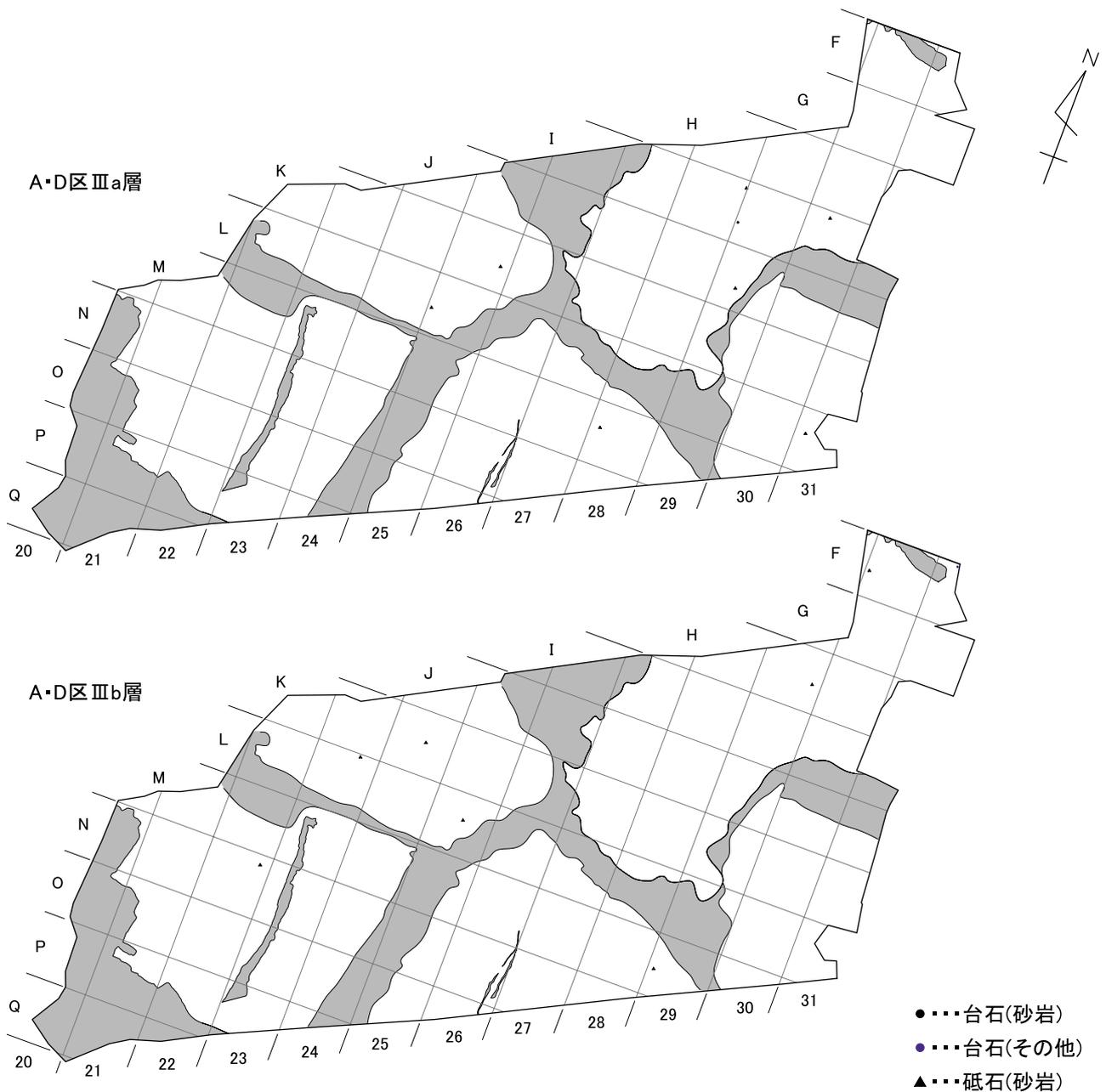
第255図 A・D区石皿の分布 (S = 1/800)

### 石皿

Ⅲ a層では主にA 1区に分布し、A 2～4区にも分布する。A 1区ではF 30で安山岩製2点が近接して分布し、J 28・29では砂岩製が近接して分布している。A 2～4区では各1点ずつの出土で、A 5区では出土しなかった。

Ⅲ b層ではA 1区では出土せず、A 3区に出土が増え、Ⅲ a層では出土のなかったA 5区にも分布が見られる。A 3区では地区の南東端で攪乱沿いに分布しており、K 25では石材の異なる2点が近接して分布している。A 5区では散在的に分布する。

Ⅲ a層A 1区のF 30では剥片・碎片、原石・石核、剥片素材石器群が集中するが、Ⅲ b層のA 3区では剥片・碎片、原石・石核の分布は希薄である。このように石皿の分布密度の高い地域では、他の石器群との分布の重なりに差違が見られた。本遺跡出土の石皿はダメージを有する資料が少なくないことから、分布域の空間利用の性格により機能を変えていた可能性も考えられる。



第256図 A・D区台石・砥石の分布 (S = 1/800)

### 台石

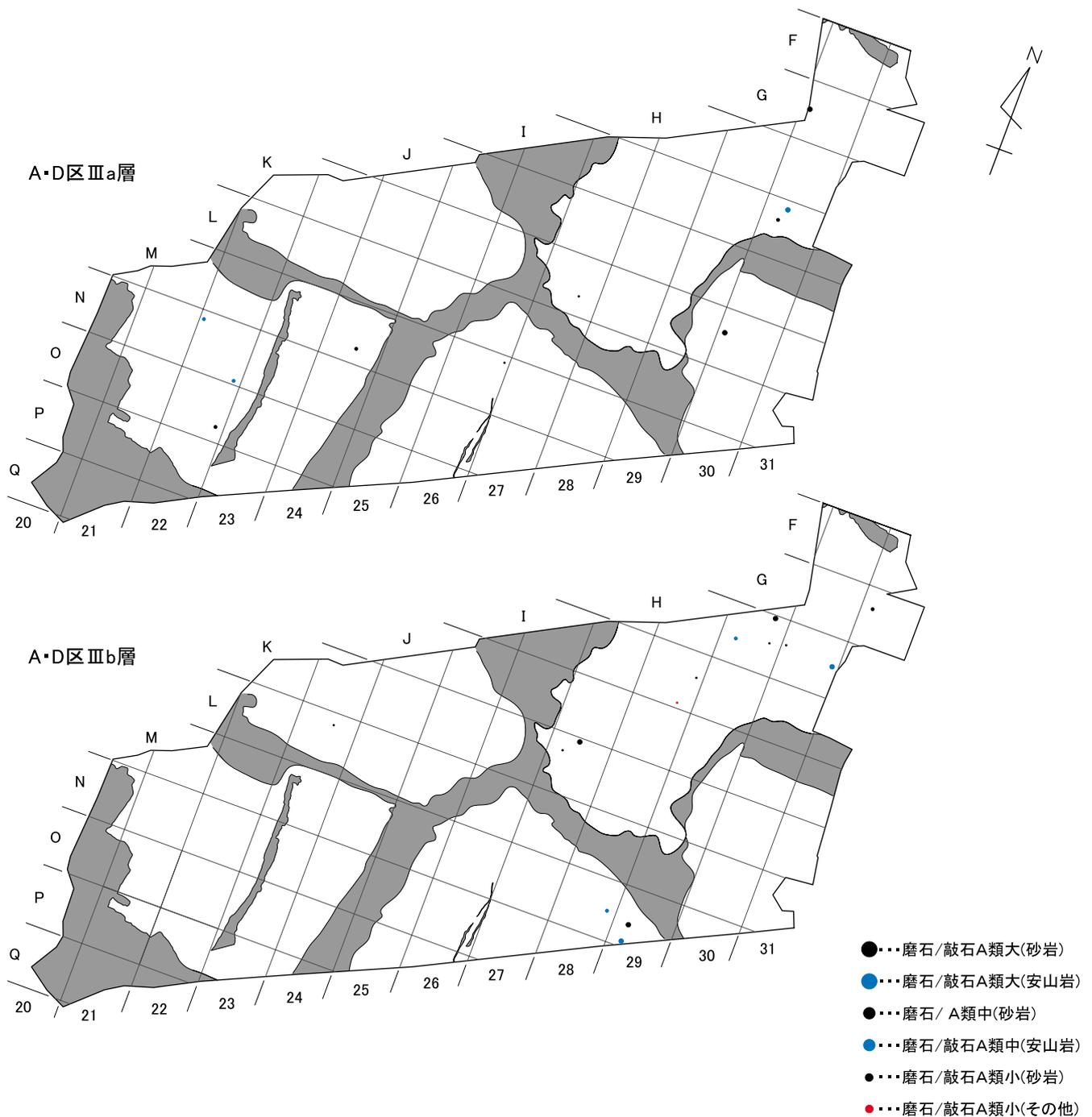
Ⅲ a層ではA 1区のI 29から1点のみ出土した。I 29は玄武岩製の石核、剥片・碎片、剥片素材石器群が高密度に分布している。また、黒曜石製では剥片素材石器群、石鏃未製品が分布している。台石は石器加工時の作業台としての機能を有すると考えられることから、この地点は石器製作場としての空間利用の可能性が高いと思われる。

### 砥石

Ⅲ a層ではA 5区を除いてA区全域に散在的に分布している。

Ⅲ b層ではA 1区の地区北側のF 30, H 29で各1点ずつ出土し、A 2区での出土はなかった。A 3区では3点が散在して分布している。A 4・5区は各1点ずつの出土であった。

磨きを伴う石器群との関係では局部磨製石鏃や異形石器とは分布域に重なりが見られないものの、磨製石斧とはⅢ a層のI 29とⅢ b層のK 24, N 22で分布の重なりが認められた。



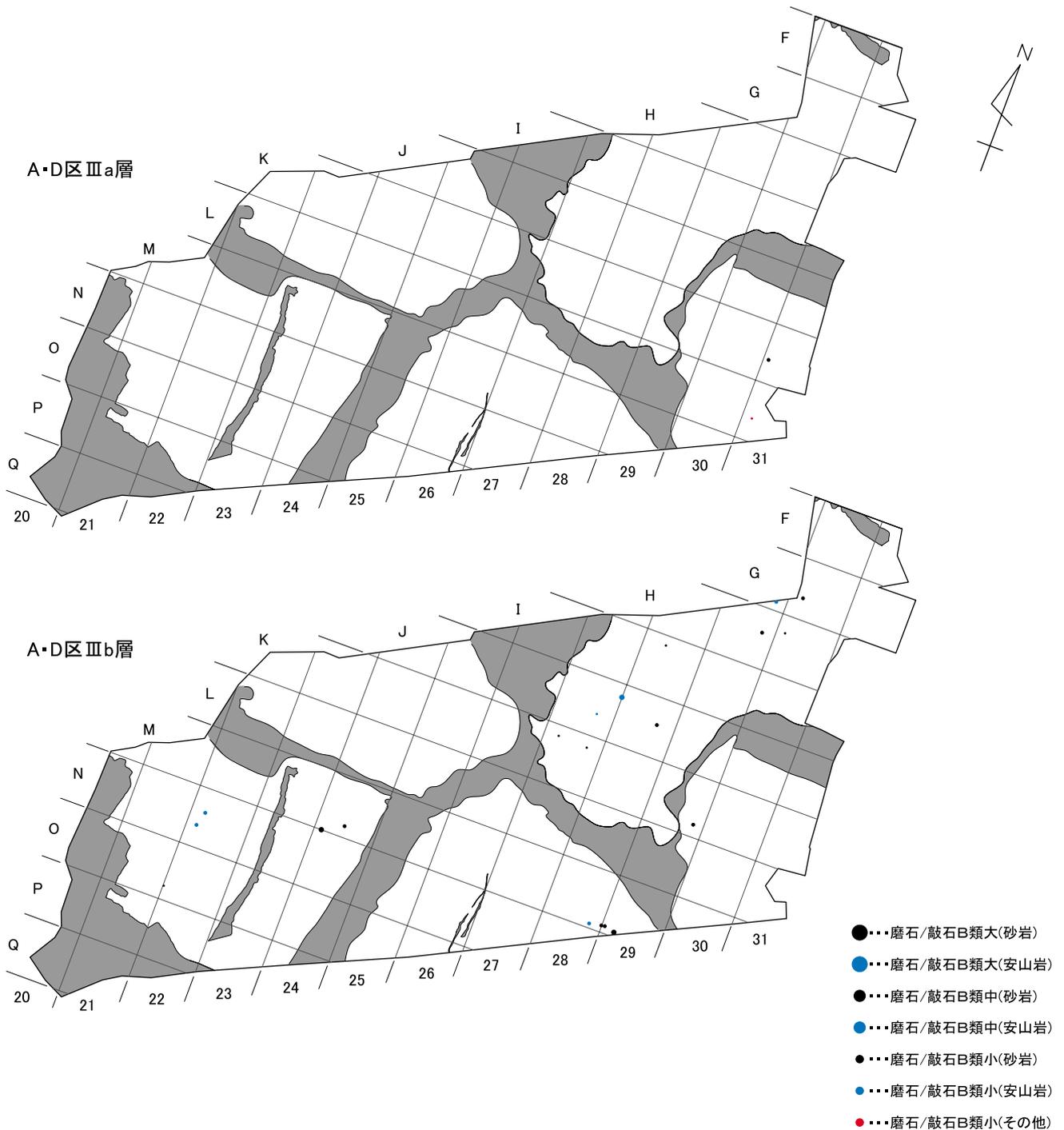
第257図 A・D区磨石/敲石A類(サイズ大・中・小)の分布(S = 1/800)

### 磨石/敲石A類

Ⅲ a層ではサイズにより分布域に差異が認められる。大型品は主としてA区の東端域の30列に沿って分布し、中型品はA 5区に散在的に分布している。また、小型品はA区のほぼ中央付近で分布するが、いずれの地区でも散在的な分布で密度の高い分布は認められなかった。

Ⅲ b層ではⅢ a層で分布が広がっていたA 5区からの出土は見られなくなる。小型品はA 1区の中央でやや近接した分布が認められ、大・中型品はA 4区南東端のM 29を中心として偏的に分布している。

A類は第4節2で示したとおり滑面のみを有する磨石である。このことから石皿とのセット関係が考えられたが、分布域の重なりは認められなかった。



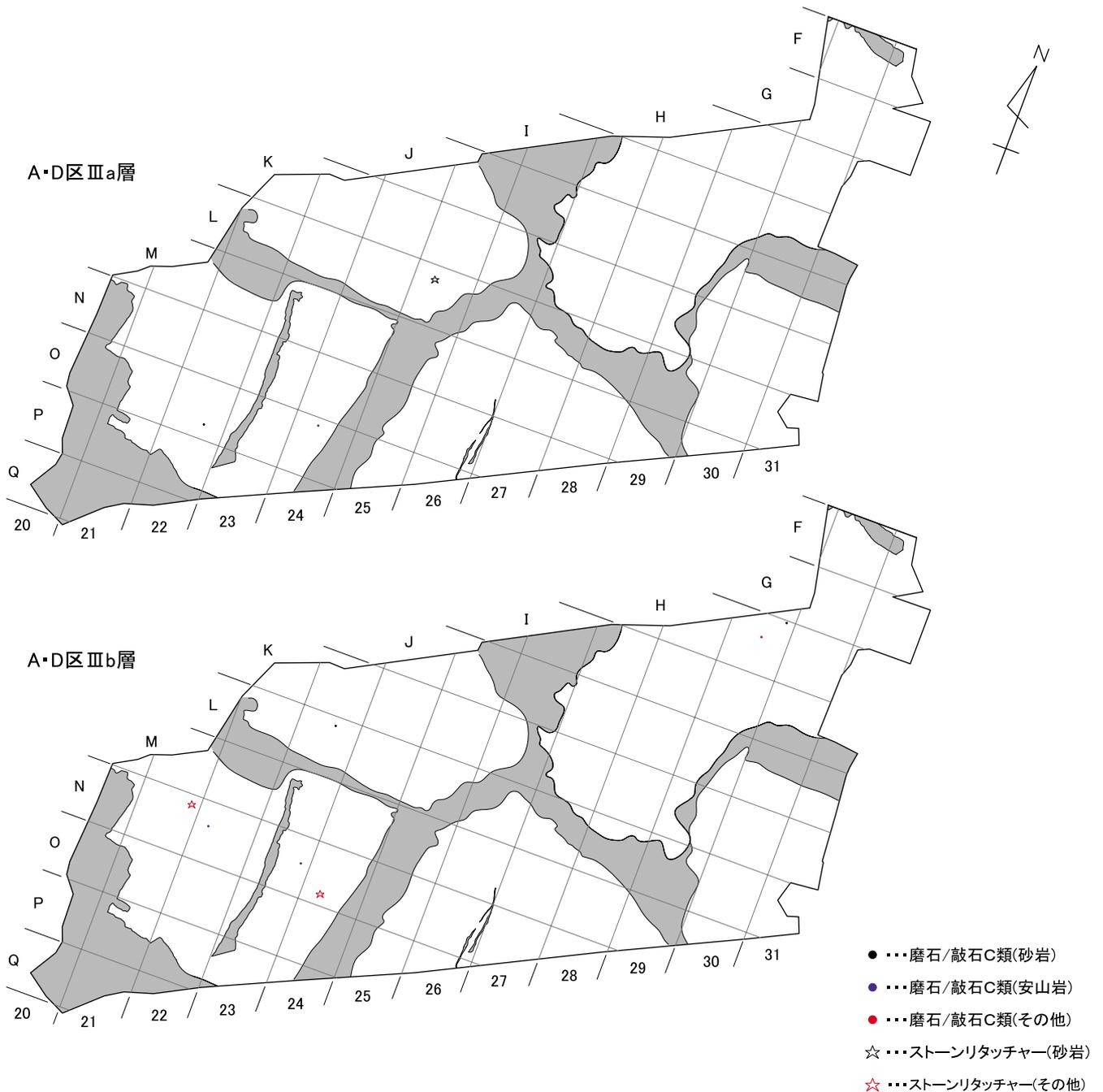
第258図 A・D区磨石/敲石B類(サイズ大・中・小)の分布(S = 1/800)

### 磨石/敲石B類

Ⅲ a層ではA 2区でのみ2点の出土が見られる。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加し、A 3区を除く全区に分布が見られる。A 1区では中・小型品が主に出土し、地区全域に散在している。A 4区では地区南東端のM 28・29で大・中型品を主とする偏在的な分布が認められた。A 5区では雨裂の東側で砂岩製や安山岩製の大・中型品が近接して出土し、雨裂の西側では安山岩製の中型品が近接して分布している。

B類は第4節2で示したとおりダメージと滑面を有する磨石である。同様な滑面を有するA類とはA 4区のM 28・29で分布域の重なりが認められた。また、B類も石皿とのセット関係を考えてが、分布域は重ならなかった。



第259図 A・D区磨石/敲石C類・ストーンリタッチャーの分布 (S = 1/800)

### 磨石/敲石C類

Ⅲ a層ではA 1～4区では出土せずA 5区から2点出土した。

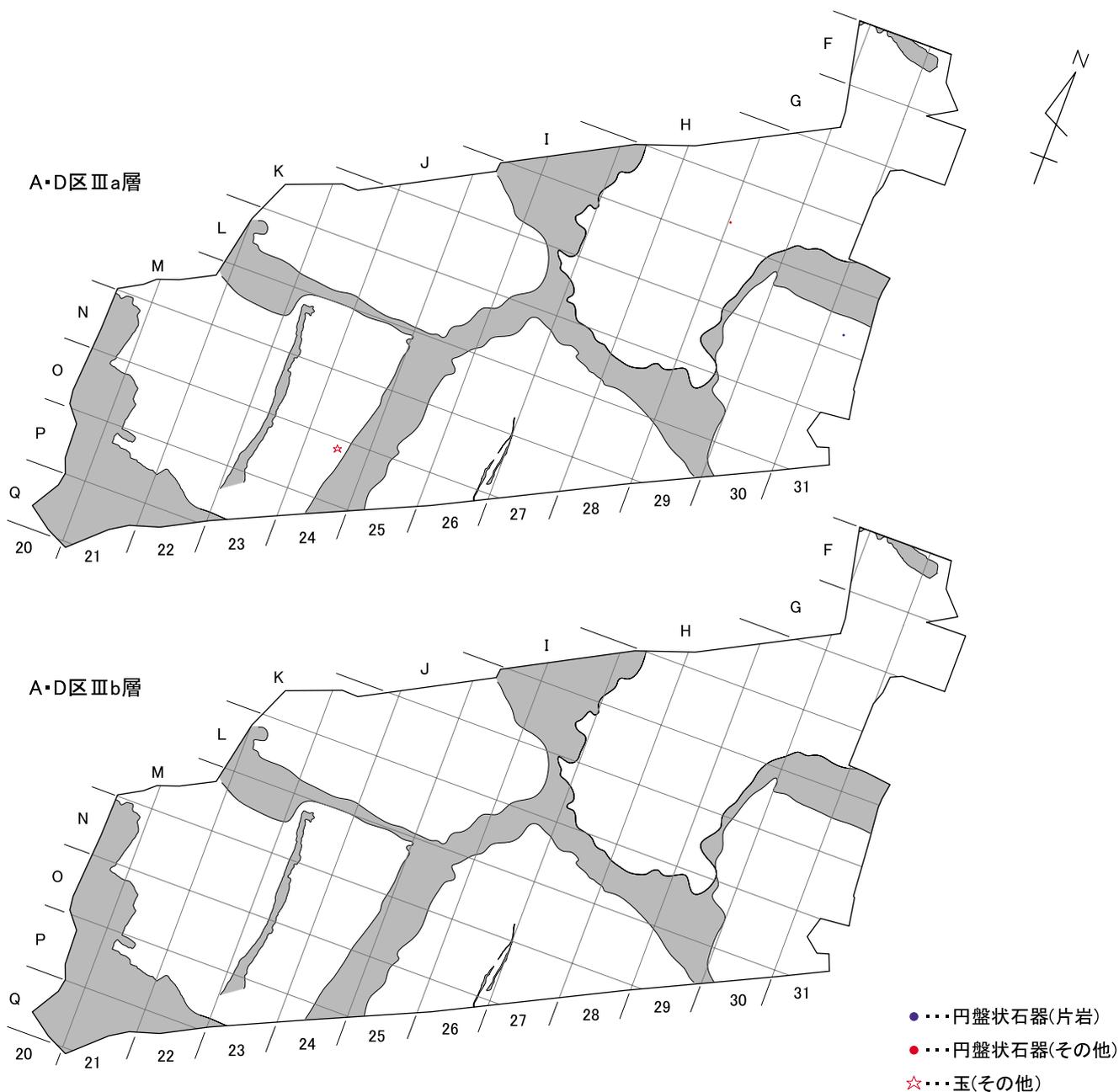
Ⅲ b層ではA 1区のH 29で2点が近接している。A 5区では雨裂を挟んで2点出土した。

### ストーンリタッチャー

Ⅲ a層ではA 3区で1点出土した。

Ⅲ b層ではA 5区で頁岩製が2点出土するが近接はしていない。

磨石/敲石C類は第4節2で示したとおり、敲石としての機能を有している。C類とリタッチャーの分布ではA 5区のN 22周辺で安山岩製のC類と頁岩製のリタッチャーが近接して出土している。N 22周辺は打製石斧剥片や打製石斧未製品、石鏃や石鏃未製品も分布しており、剥片・碎片の分布密度も高いことからこの地域が二次加工の場として空間利用されたことが考えられる。



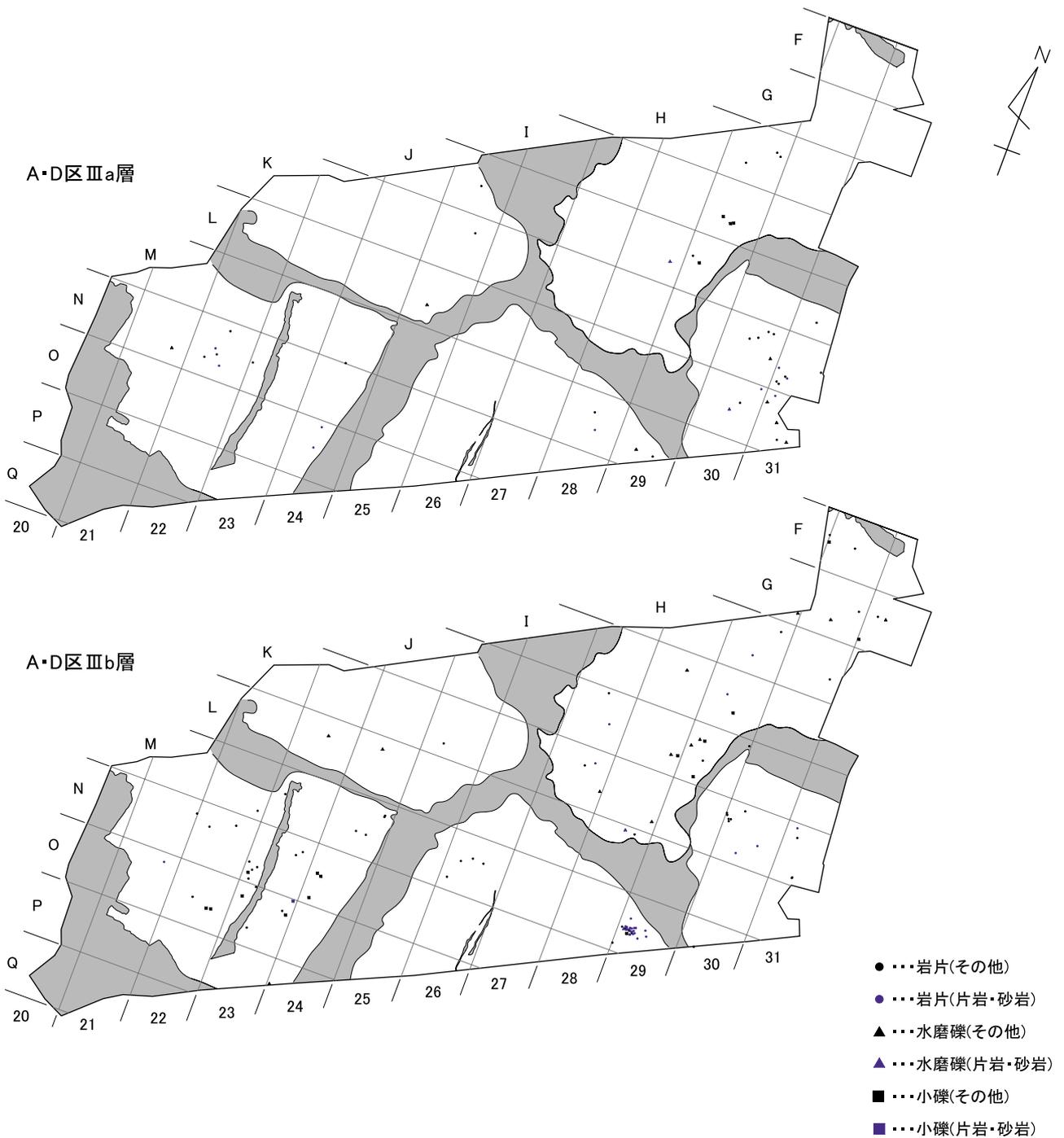
第260図 A・D区円盤状石器・玉の分布 (S = 1/800)

### 円盤状石器

Ⅲ a層ではA 1区のI 29, A 2区のJ 31で各1点ずつ出土した。円盤状石器は礫・岩片を素材とする用途不明の石器群である。I 29は同一グリッド内で剥片素材石器群や礫・岩片素材石器群が比較的高密度に出土しているが, J 31は全体的に遺物出土量の希薄な地点である。Ⅲ b層では出土していない。

### 玉

Ⅲ a層のA 5区のO 24で1点のみが出土した。O 24は他器種の分布も希薄な地域であることから他の石器群との関連性は分布からは見いだせなかった。

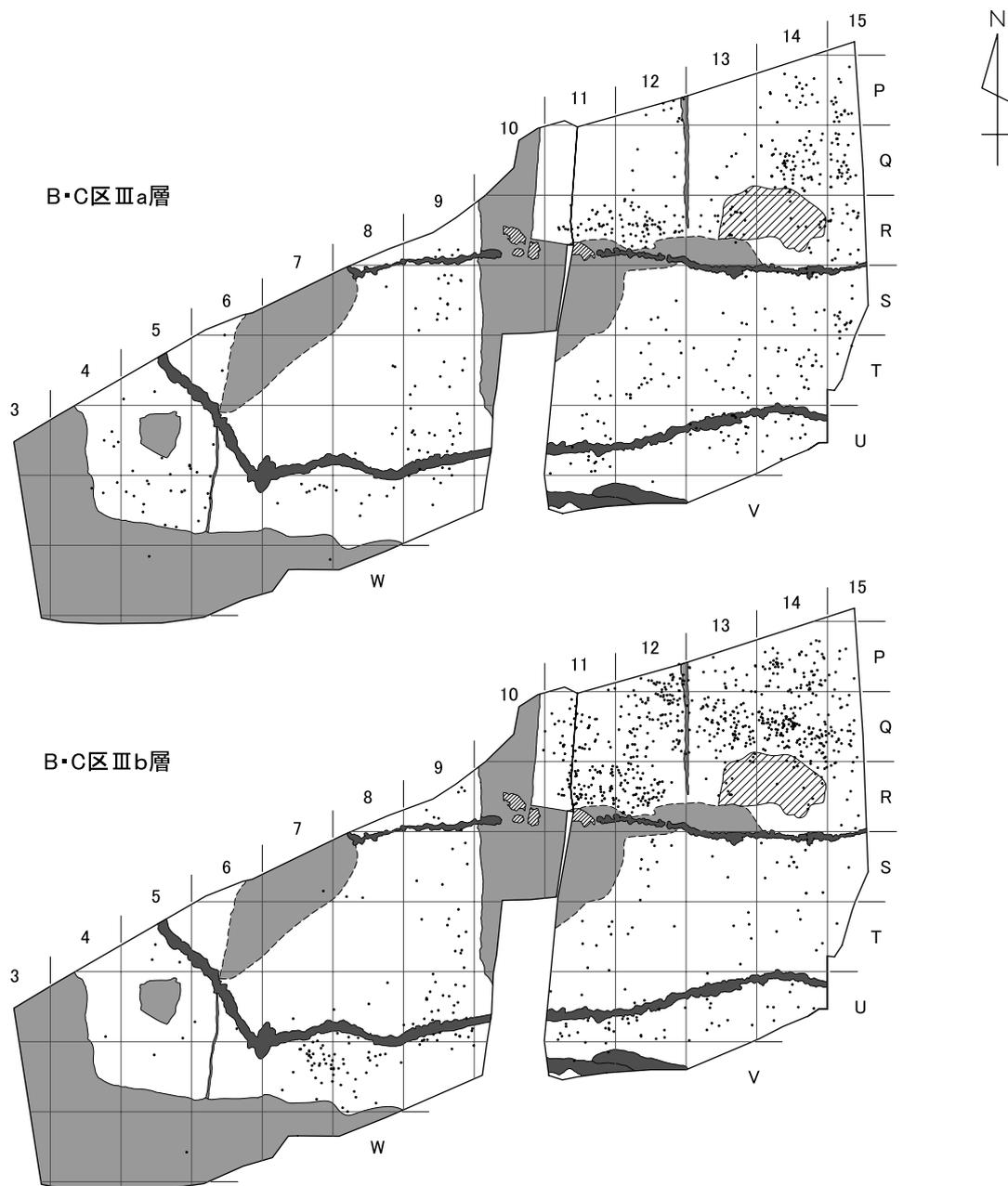


第261図 A・D区岩片・水磨石・小礫の分布 (S = 1/800)

### 岩片・水磨石・小礫

Ⅲ a層では地区全体に分布し、A 1・2・5区に偏在した分布が認められた。A 1区では地区中央の南北軸に沿う形で分布域が広がり、I 29では小礫がやや高密度に分布している。A 2区では地区の中央から南側に岩片を主とするやや密度の高い分布が認められる。A 3・4区は地区の東側に散在している。A 5区では雨裂より西側の地区のN 22周辺に偏在が見られ、東側では散在して分布している。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加し、より偏在した分布が見られる。A 1区では岩片、小礫に加え水磨石も一定量出土する。分布は散在的であるが、J 29周辺ではやや集中する分布が認められる。A 4区ではM 26・29の2ヶ所に偏在して分布する。特にM 29では結晶片岩の岩片が高密度に集中している。A 5区では全域に散在するが、N 23周辺にやや集中した分布が認められた。

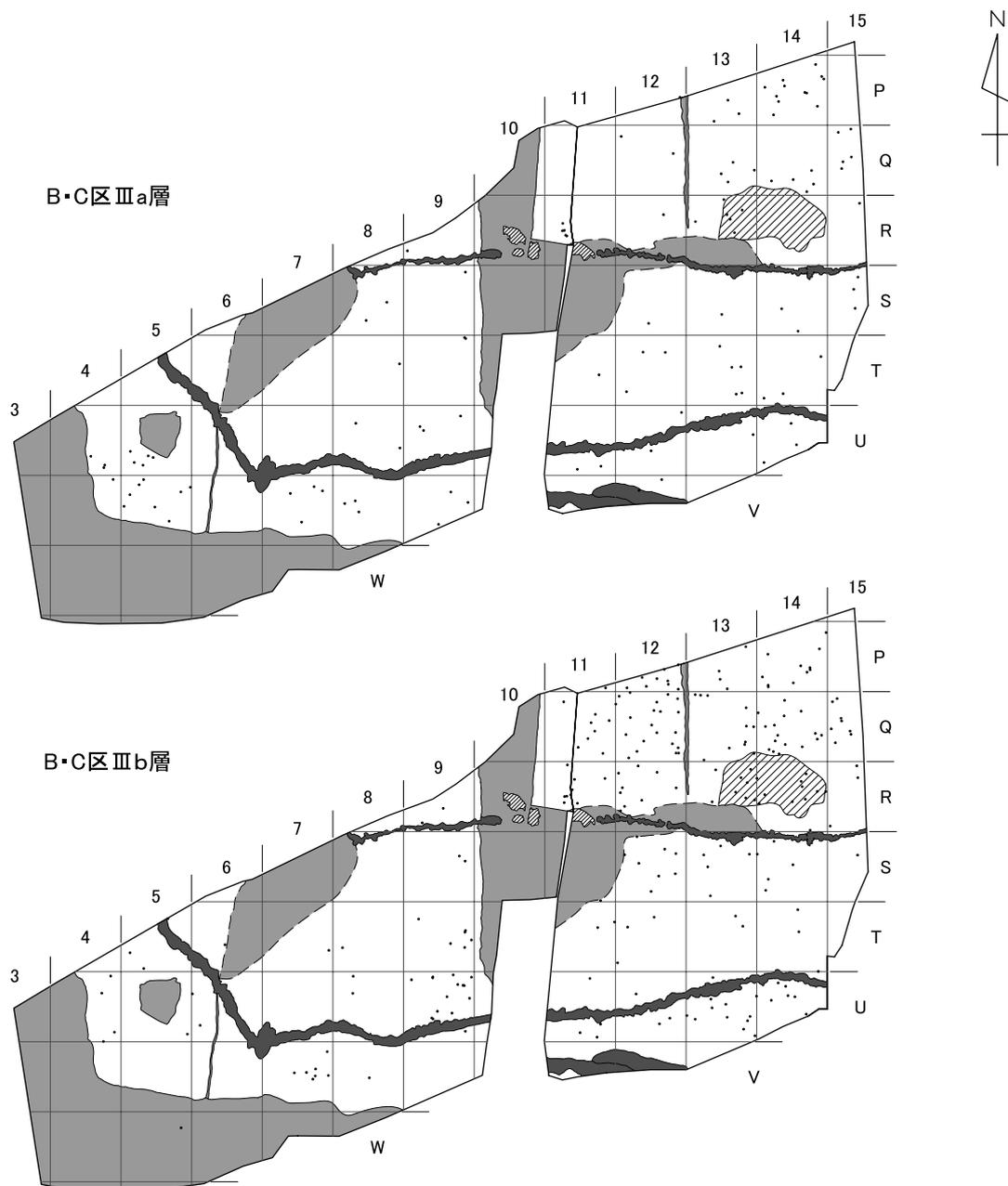


第262図 B・C区剥片素材石器群の分布 (S = 1/800)

**剥片素材石器群**

Ⅲ a層ではB 1区の地区東側と南側に偏在して分布し、地区東側のQ 14周辺と南西側のR 11・12周辺の2ヶ所で密度の高い分布が見られた。B 2・3区は地区全域に散在的に分布するが、3区では雨裂に沿って偏在が見られる。C区では1～3区東側のR～V 9に分布し、3区ではさらに雨裂2に沿って分布する。C 3区中央の攪乱西側にも広く分布しているが、散在的な分布である。

Ⅲ b層ではⅢ a層に比べて出土数が増加している。B 1区では分布が希薄であったQ 12・13に分布域が拡大し、地区全域で密度の高い分布となっている。特にⅢ a層で密度の高かったQ 14周辺とR 12周辺ではより広範囲で高密度の分布となっており、P 12周辺でも高密度の分布が見られた。C 2・3区では雨裂2沿いのU 9とV 7の2ヶ所で高密度に偏在した分布となるが、3区中央の攪乱西側の地区では、出土数が減りより散在的となる。

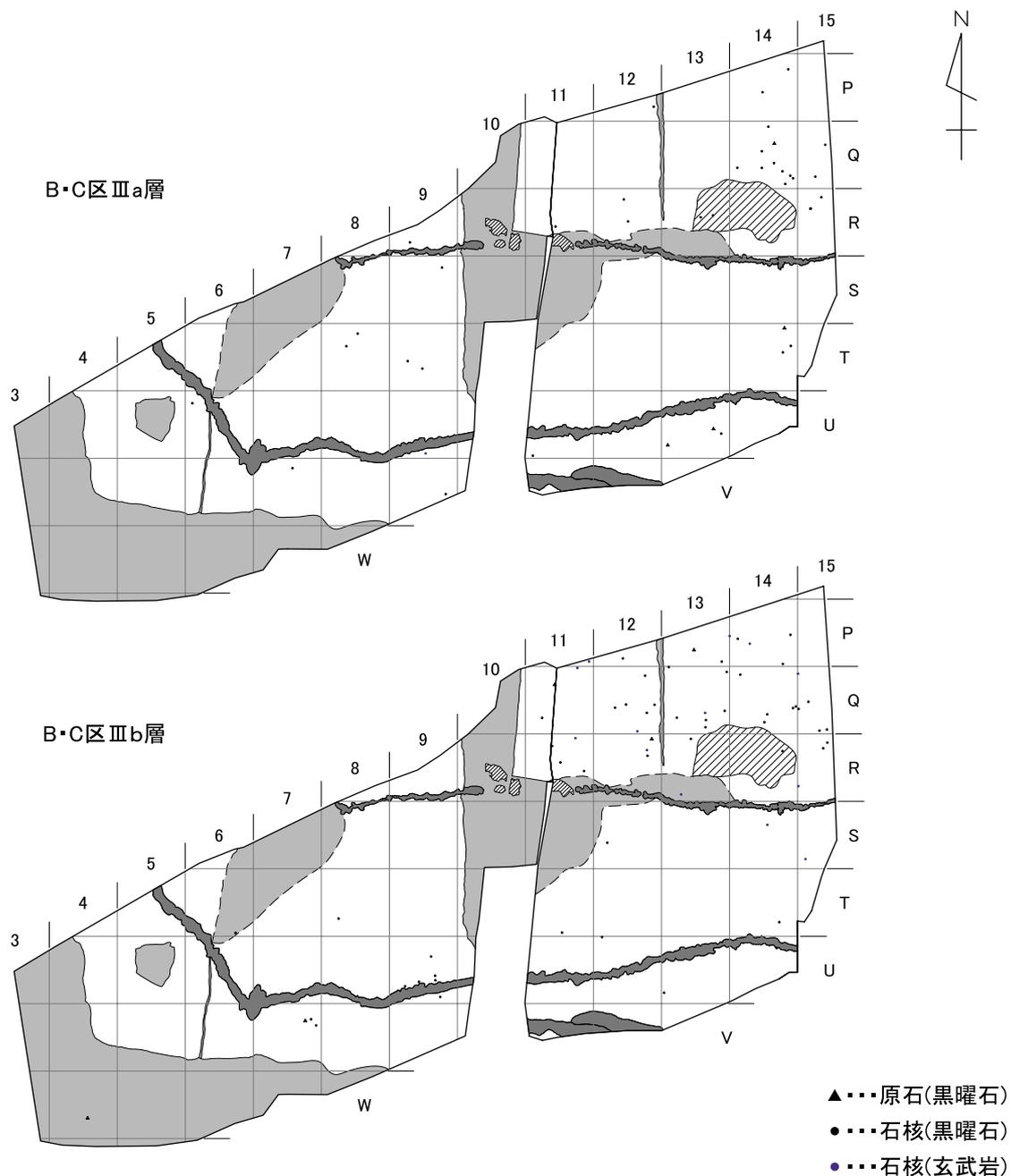


第263図 B・C区礫・岩片素材石器群の分布 (S = 1/800)

**礫・岩片素材石器群**

Ⅲ a層ではB 1区中央の攪乱より東側で散在的に分布するが、P 14ではやや密度が高くなる。B 2・3区、C 1～3区では地区全域に散在的に分布するが、3区のT・U 4・5中央付近ではやや密度の高い分布が見られる。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加している。B 1区ではⅢ a層で出土が認められなかった中央の攪乱より西側の地区まで分布が広がるが、特に高密度の分布は見られない。B 2区では地区の中央からやや北側で散在的に分布している。B 3区では雨裂2に沿って分布密度が高くなる。C 1区は分布密度が希薄である。C 2区では地区南東側に分布密度が高くなり、U 9ではその傾向が強くなる。C 3区はⅢ a層では全体的に散在した分布であったが、Ⅲ b層では偏在が見られ、V 7ではやや集中する分布が見られる。また中央の攪乱西側の地区では北側に分布が移るが、より散在的になっている。

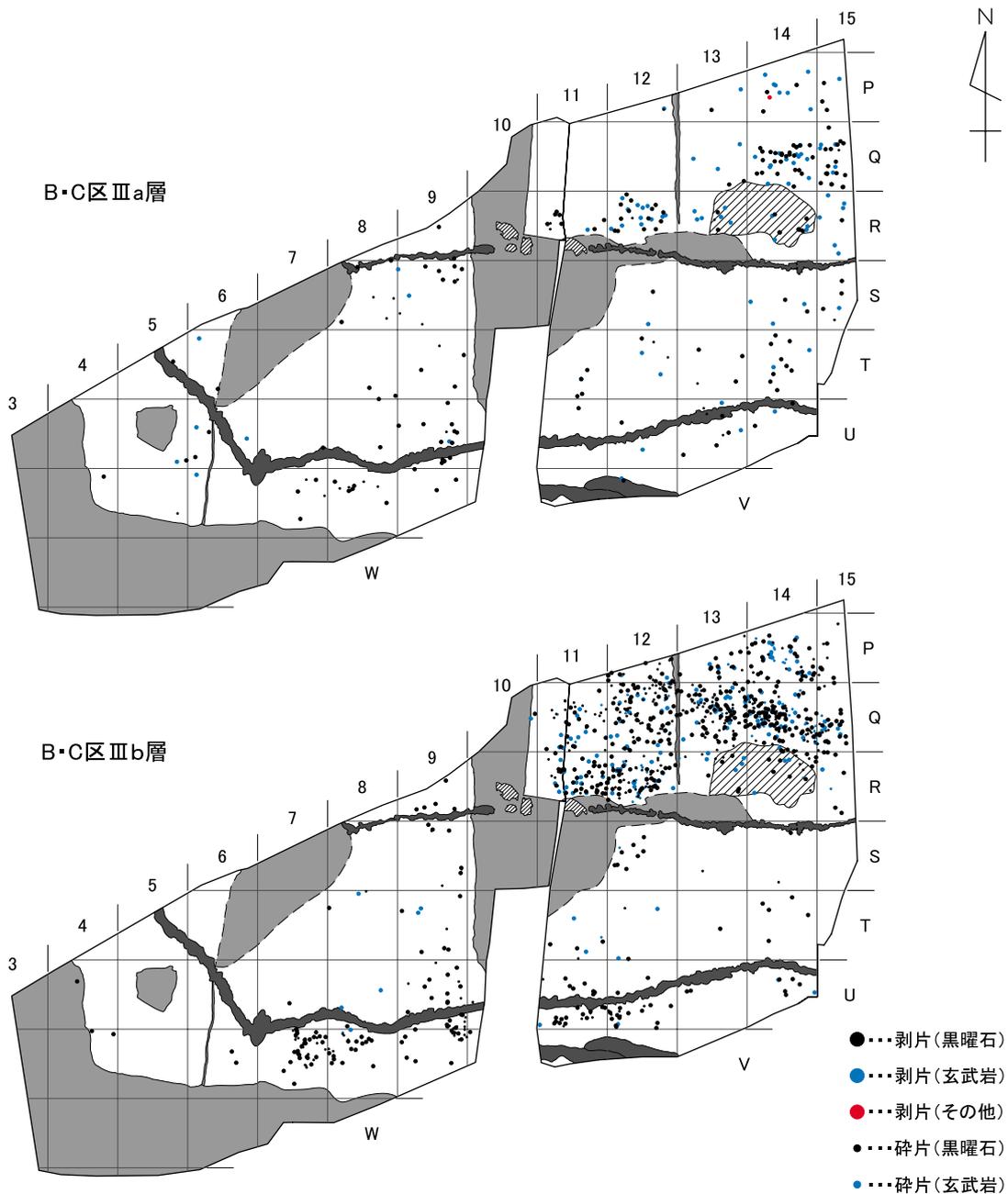


第264図 B・C区原石・石核の分布 (S = 1/800)

### 原石・石核

Ⅲ a層では原石・石核ともに各区で偏在的な分布が見られた。B 1区では地区東側のQ 14を中心として黒曜石製の原石・石核が高密度に分布している。Q 14以外の地区では分布密度は希薄である。B 2区では地区東側のT 14で石核が近接している。B 3区では原石・石核が近接して出土し、C 2区では石核が2点ずつ同一グリッド内から出土した。C 3区は雨裂2に沿って散在的に分布している。

Ⅲ b層では玄武岩製石核の出土数がⅢ a層と比べて増加する。B 1区では中央の攪乱より西側で分布の広がりが認められた。Q 12・13周辺では原石・石核がやや高密度に分布しており、Q 14やR 15では近接した分布が見られた。B 2・3区では地区の外側周辺に散在的に分布している。C 2・3区は雨裂2に沿ってU 9、V 7の2ヶ所で偏在して分布している。U 9では雨裂を挟んで石核が近接し、V 7では原石・石核が近接して分布している。

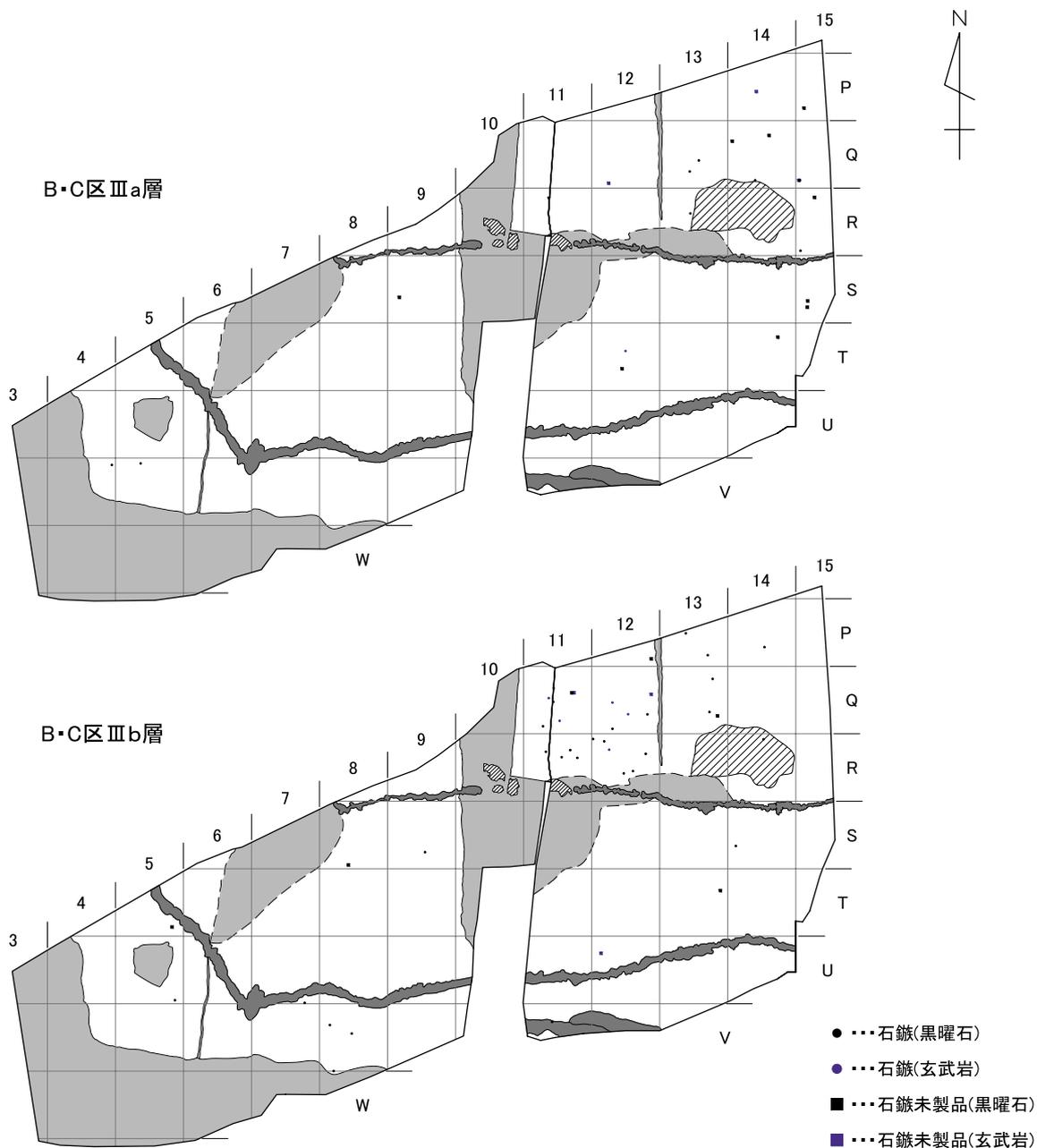


第265図 B・C区剥片・碎片の分布 (S = 1/800)

### 剥片・碎片

Ⅲ a層ではB 1区のQ 14・R 12周辺に偏在し、地区北西側のQ 12・13では分布密度が希薄である。R 12では玄武岩製剥片が高密度に分布している。B 2区では地区全域に分布し、東側のS・T 14周辺で密度が高くなる。B 3区は雨裂2に沿って散在的に分布している。C 2区は雨裂1・2沿いのS 9, U 9の2ヶ所でやや密度の高い分布が見られた。C 3区では雨裂2沿いのV 8の北東付近にやや集中して分布し、中央の攪乱より西側にもやや偏在して分布が見られる。

Ⅲ b層では剥片・碎片ともに出土量が増加し、特にB 1区では全域に分布が広がる。B 1区では中央の攪乱周辺のQ 13・14, R 11・12, Q 12周辺の3ヶ所で高密度の分布が見られた。B 2区では分布の中心が地区北西端に移り、S 12周辺では高密度に分布している。B 3区では雨裂2に沿って分布し、U 12周辺で密度の高い分布が見られた。C 2・3区は雨裂2沿いのU 9, V 7・8の2ヶ所で高密度に分布している。



第266図 B・C区石鏃・石鏃未製品の分布 (S = 1/800)

**石鏃未製品**

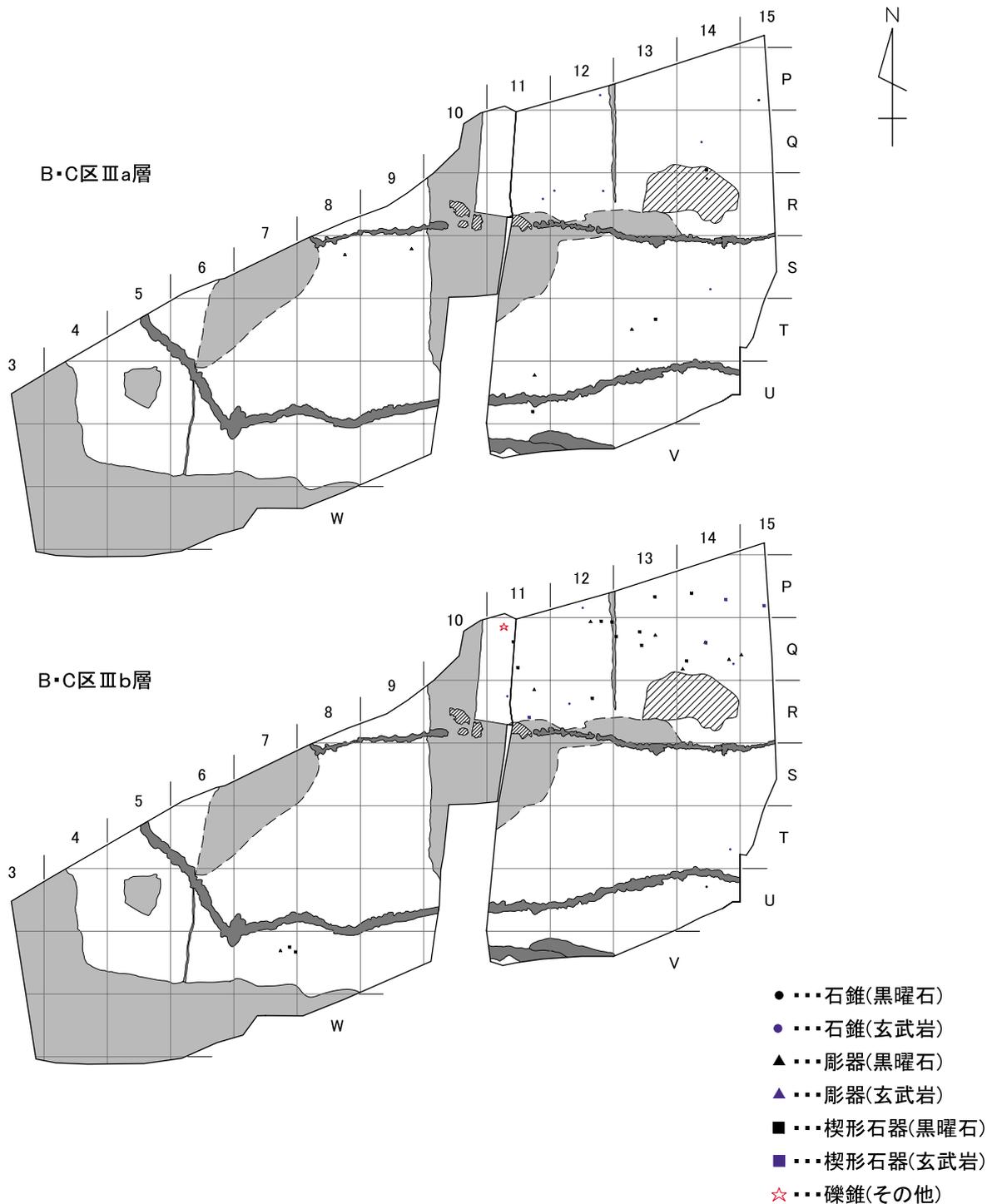
Ⅲ a層ではB 1区中央の攪乱より東側の地区で散在的に分布する。B 2区では地区東側のS 15で黒曜石製2点が近接して分布する。また、T 12では製品と未製品ではあるが、同一グリッド内から石材の違う2点が出土した。C区では2区で1点のみの出土である。

Ⅲ b層ではB 1区中央の攪乱より西側で石鏃の分布の北側に出土している。他の地区では、散在的に分布している。

**石鏃**

Ⅲ a層ではB 1区中央の攪乱より東側に分布が広がっているが散在的である。B 1区以外の地区では少量の出土であった。

Ⅲ b層ではB 1区中央の攪乱より西側に分布が集中している。B 2・3区、C 1～3区では出土数が少なく散在的な分布であるが、V 8周辺にやや出土が多い。



第267図 B・C区石錐・礫錐・彫器・楔形石器の分布 (S = 1/800)

**石錐**

Ⅲ a層ではB 2区の1点を除くとB 1区でのみ出土である。R 11・12の境界付近で2点が近接して分布している。

Ⅲ b層でも同様にB 1区に分布が集中するが散在的である。B 2区からはT 14で1点のみ出土した。礫錐はⅢ b層のQ 11から1点のみ出土したが石錐との分布の重なりは認められなかった。

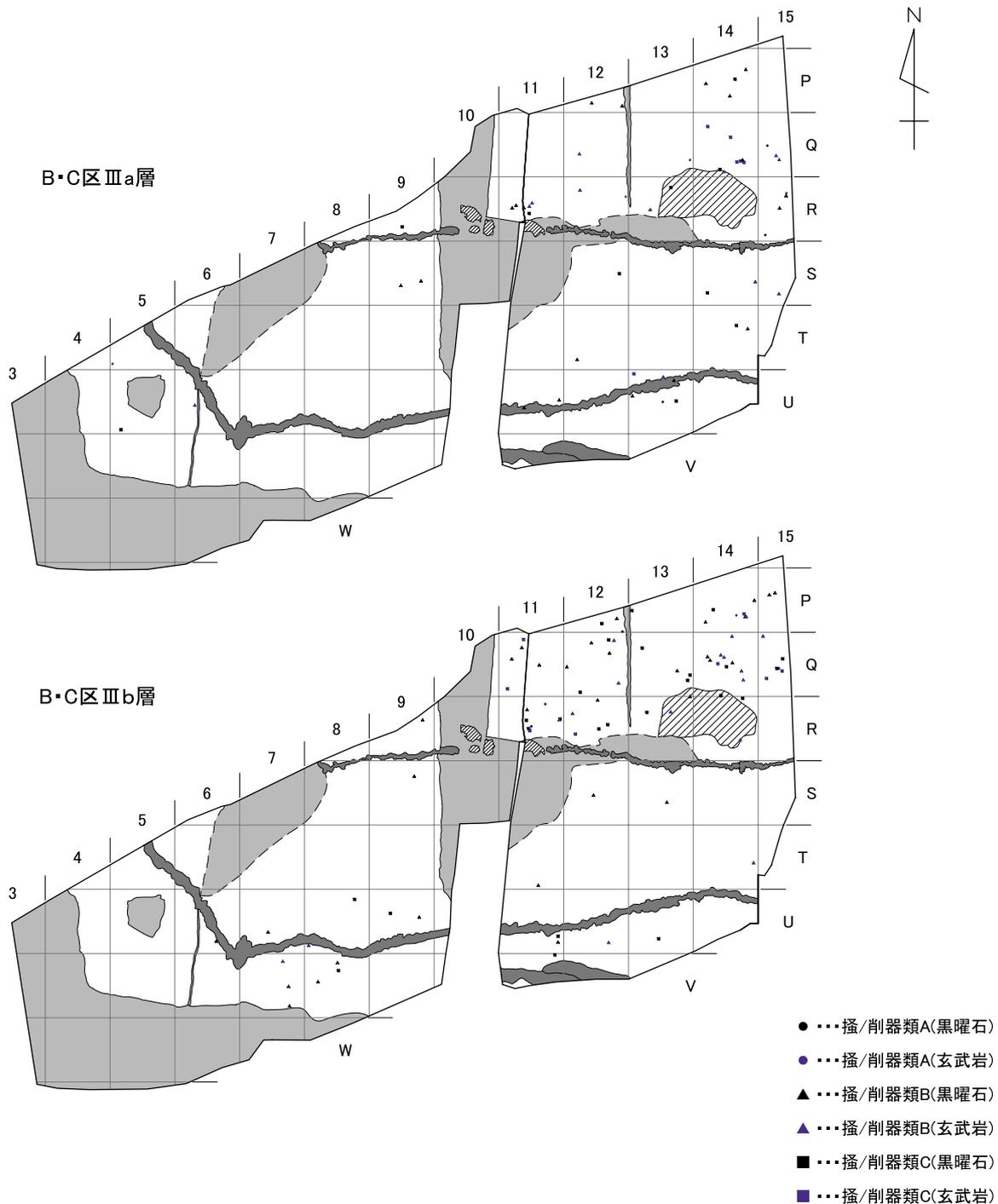
**彫器**

Ⅲ a層ではB 2区で3点が散在した分布となっている。C 2区では北側の雨裂付近に分布している。Ⅲ b層では分布の中心はB 1区に移り、Q 14では近接した分布となる。

**楔形石器**

Ⅲ a層からは3点出土したが散在的に分布する。

Ⅲ b層ではB 1区中央の攪乱より東側に分布の中心が見られる。Q 13では近接した分布が認められた。C 3区では2点が近接した分布となっている。



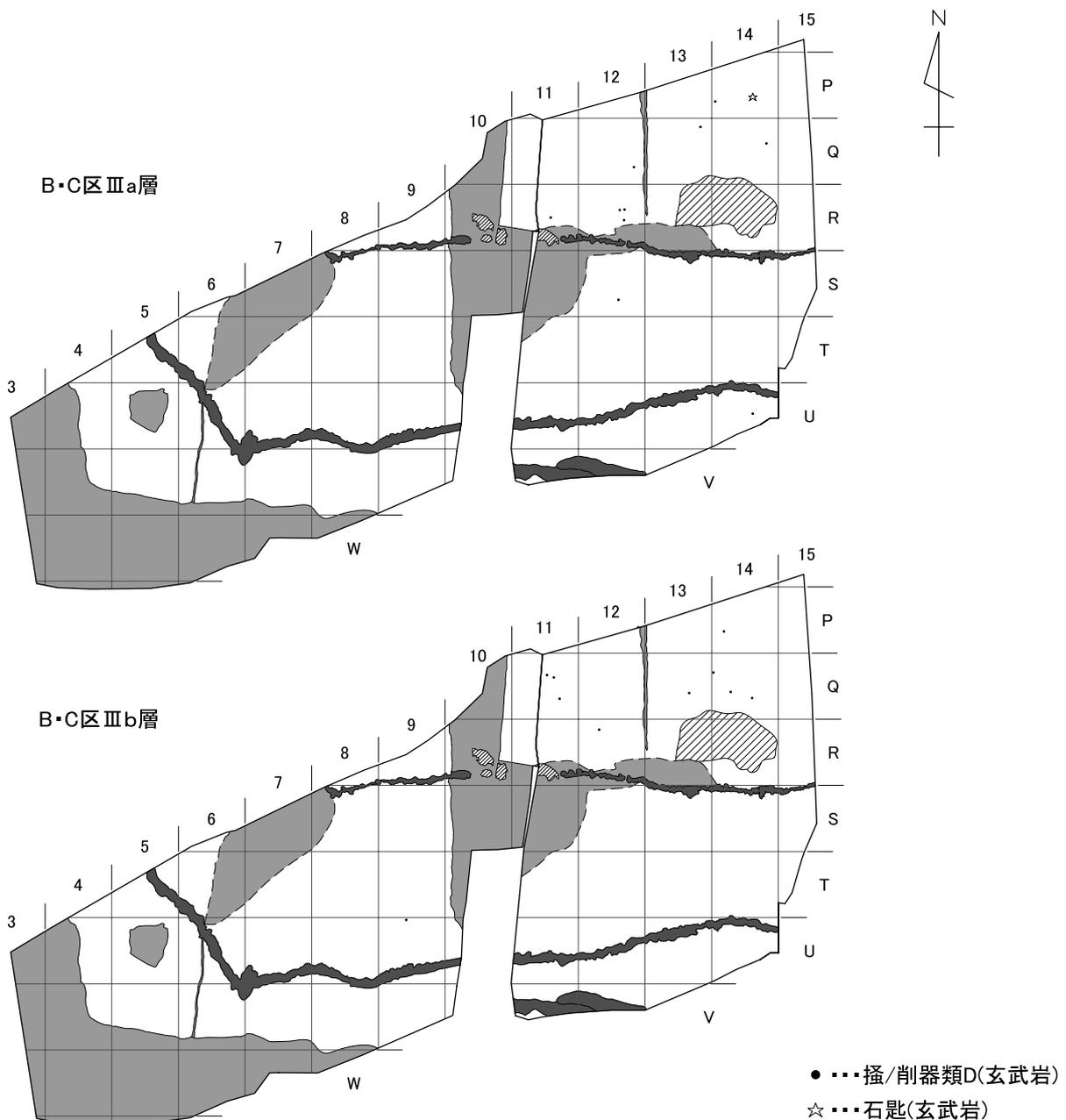
第268図 B・C区搔/削器A～C類の分布 (S = 1/800)

### 搔/削器類A・B・C類

切削具と考えられるA～C類は大半がB区に分布し、C区では少量の出土であった。

Ⅲ a層ではB 1区東側と南西側に偏った分布となっている。R 11ではB類を主体とする高密度の分布が認められ、Q 14ではC類を主体としてやや密度の高い分布が認められた。B 2・3区C 1～3区では出土数が少なく散在的な分布となっている。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加し、特にB 1区では地区全域に分布が広がる。Q 14ではB類を主体とする高密度の分布が見られ、P・Q 12やR 11ではA～C類がやや高密度に分布している。B 2区、C 1・2区では出土数が少なく、B 3区ではU 11でB・C類が近接して分布している。また、C 3区ではV 7・8付近にB類が偏在して分布している。



第269図 B・C区搔/削器D類・石匙の分布 (S = 1/800)

### 搔/削器類D類

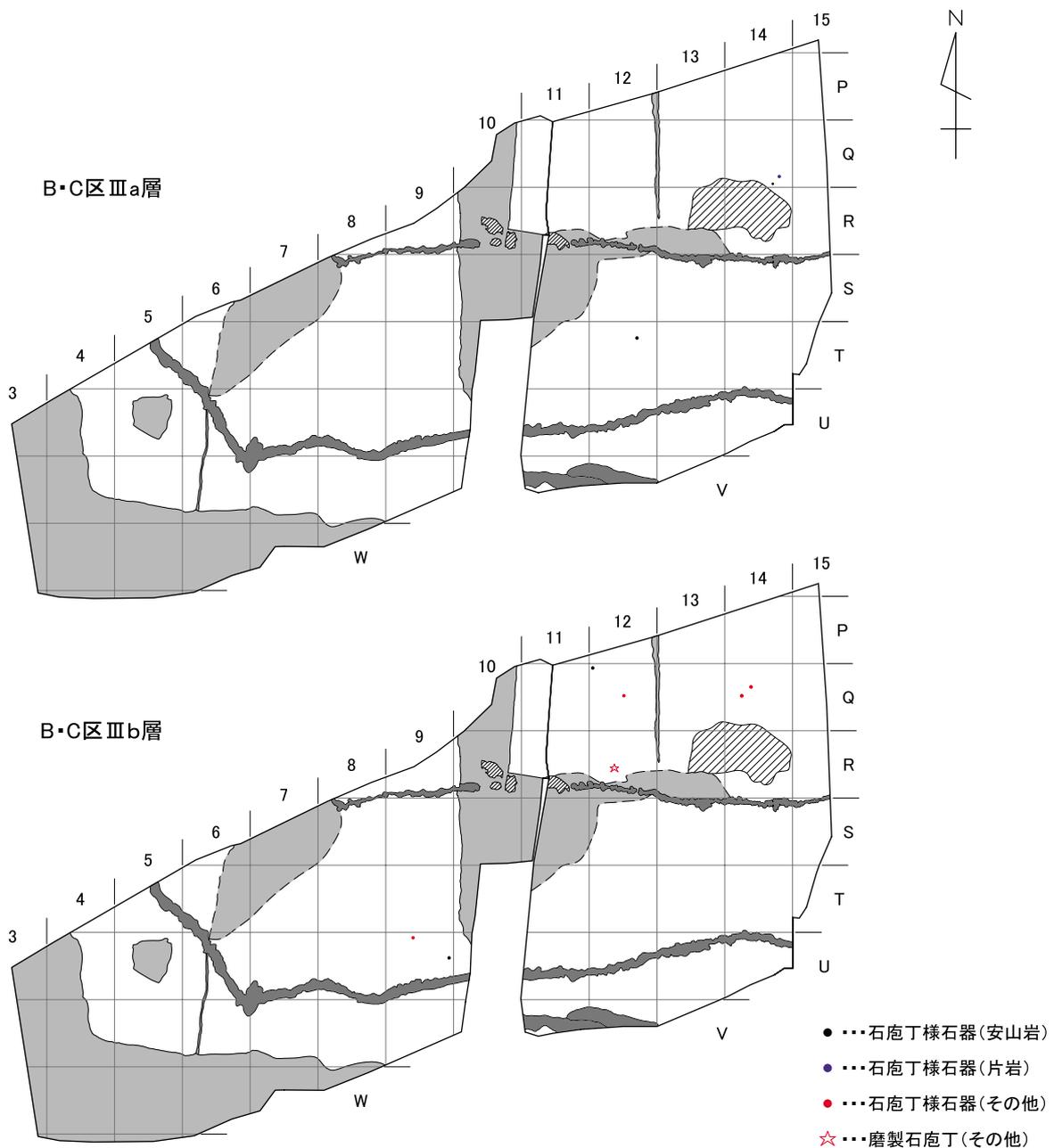
収穫用と考えられるD類はⅢ a・b層ともにB 1区に偏在して分布している。

Ⅲ a層のB 1区では地区北東側で散在的に分布し、攪乱より西側ではR 12で3点が近接して出土している。その他の地区ではB 2・3区で1点ずつ出土するが、C区からは出土していない。

Ⅲ b層ではB 1区中央の攪乱より東側でQ 14周辺に散在的に分布する。また、攪乱の西側では北西端のQ 11で3点が出土し、近接して分布している。B 1区以外ではC 2区で1点のみの出土である。搔/削器A・B・C類の分布と比較すると、B 1区に偏在する点では同じであるが、Ⅲ a・b層ともに分布域に若干の違いが見られる。

### 石匙

Ⅲ a層ではB 1区のP 14から1点のみ出土し、Ⅲ b層では出土しなかった。搔/削器類の分布域とは重なりは見られない。



第270図 B・C区石庖丁様石器・磨製石庖丁の分布 (S = 1/800)

### 石庖丁様石器

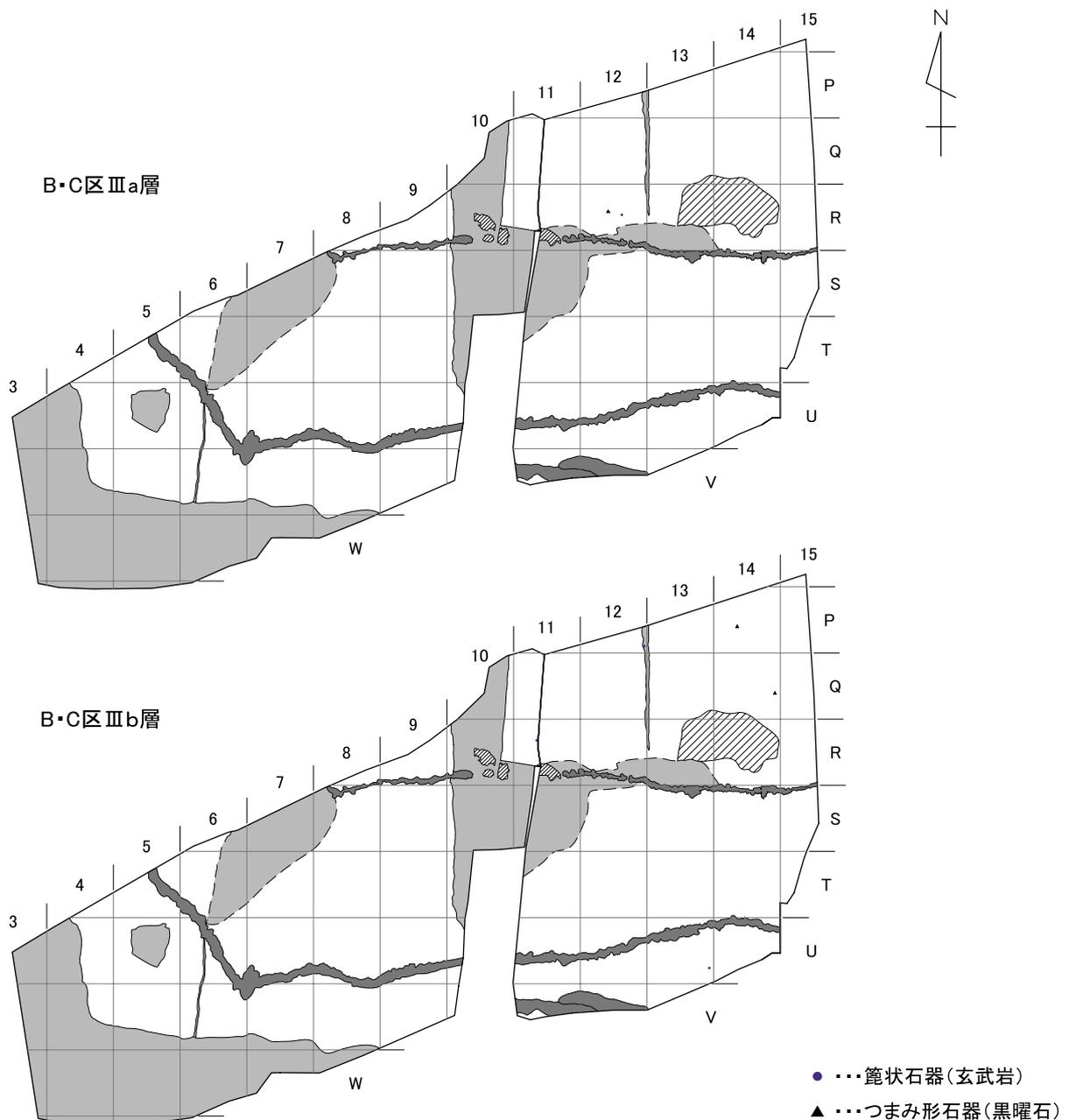
Ⅲ a層では3点が出土した。B 1区ではQ 14で安山岩製と結晶片岩製が近接して分布する。B 2区では安山岩製が1点出土した。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加する。B 1区ではQ 14で2点が近接して分布し、Q 12では同一グリッド内から2点出土した。C 2区ではU 9から2点出土した。

Ⅲ a層では安山岩を主とし結晶片岩も石材に利用されるが、Ⅲ b層では砂岩が主に利用され結晶片岩は用いられなくなり、層位で利用石材の違いが見られた。

### 磨製石庖丁

Ⅲ a層では出土せずⅢ b層のB 1区のR 12から1点のみ出土した。同様に収穫用としての機能を有すると考えられる搔/削器D類や石庖丁様石器とはⅢ層全体で見ると後者とは分布の重なりが見られないが、前者とはⅢ a層ではあるがR 12において3点が近接して出土しており重なりが見られる。



第271図 B・C区筒状石器・つまみ形石器の分布 (S = 1/800)

### 筒状石器

Ⅲ a層ではB 1区のR 12から1点のみ出土した。

Ⅲ b層ではB 1区のR 11, P 12で各1点ずつ出土し, B 3区のU 13でも1点出土した。C区からの出土は認められない。

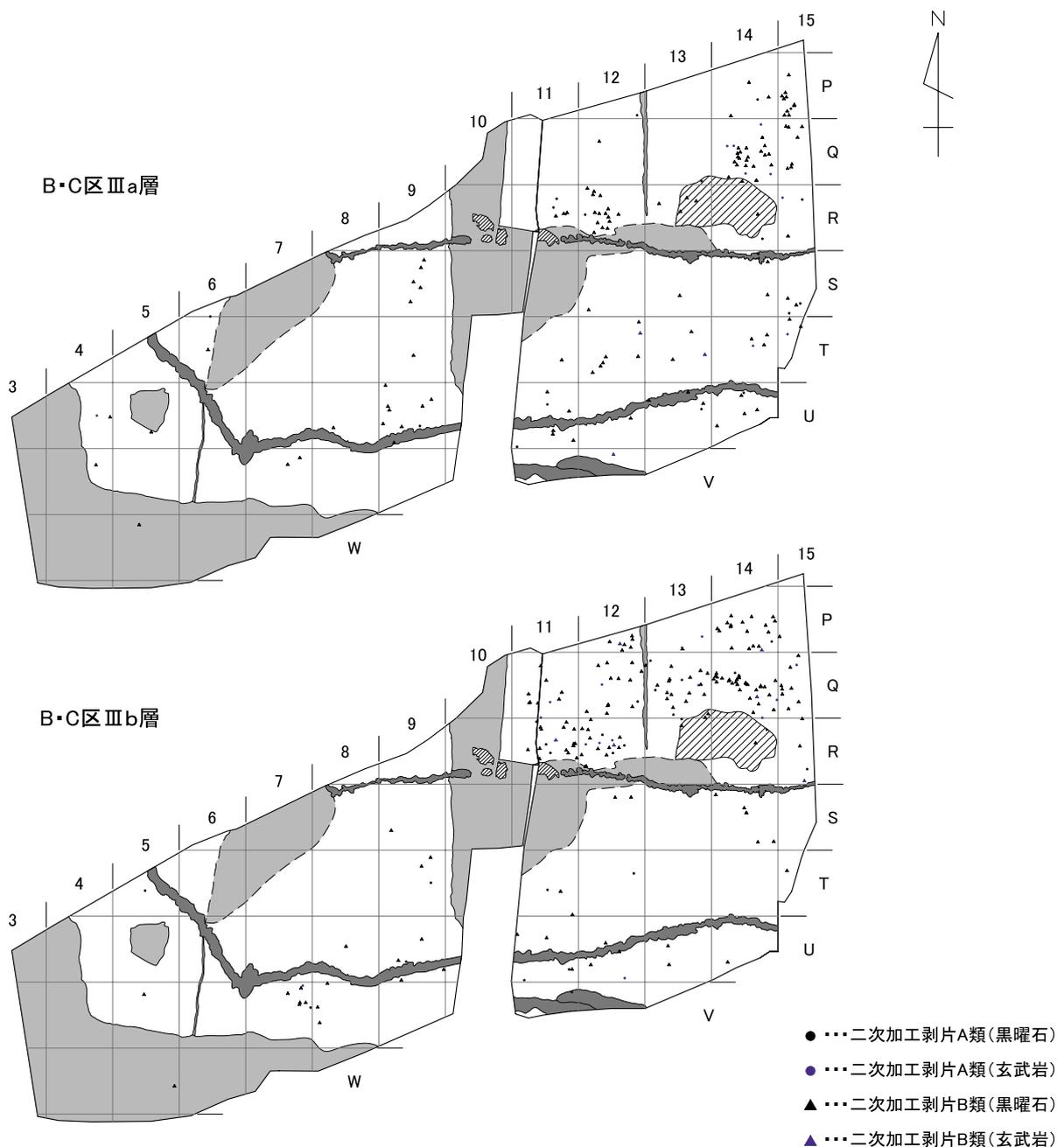
素材に差異はあるものの形態が類似する打製石斧との関連性は分布からは認められず, 筒状石器は剥片素材石器群の集中域からの出土となっている。

### つまみ形石器

Ⅲ a層ではB 1区のR 12から1点のみ出土した。

Ⅲ b層ではB 1区のP 14, Q 14から各1点出土した。C区からの出土は認められない。

形態的に類似する搔/削器C類とは, Ⅲ a層では分布域を異にするが, Ⅲ b層では分布域に重なりが認められる。

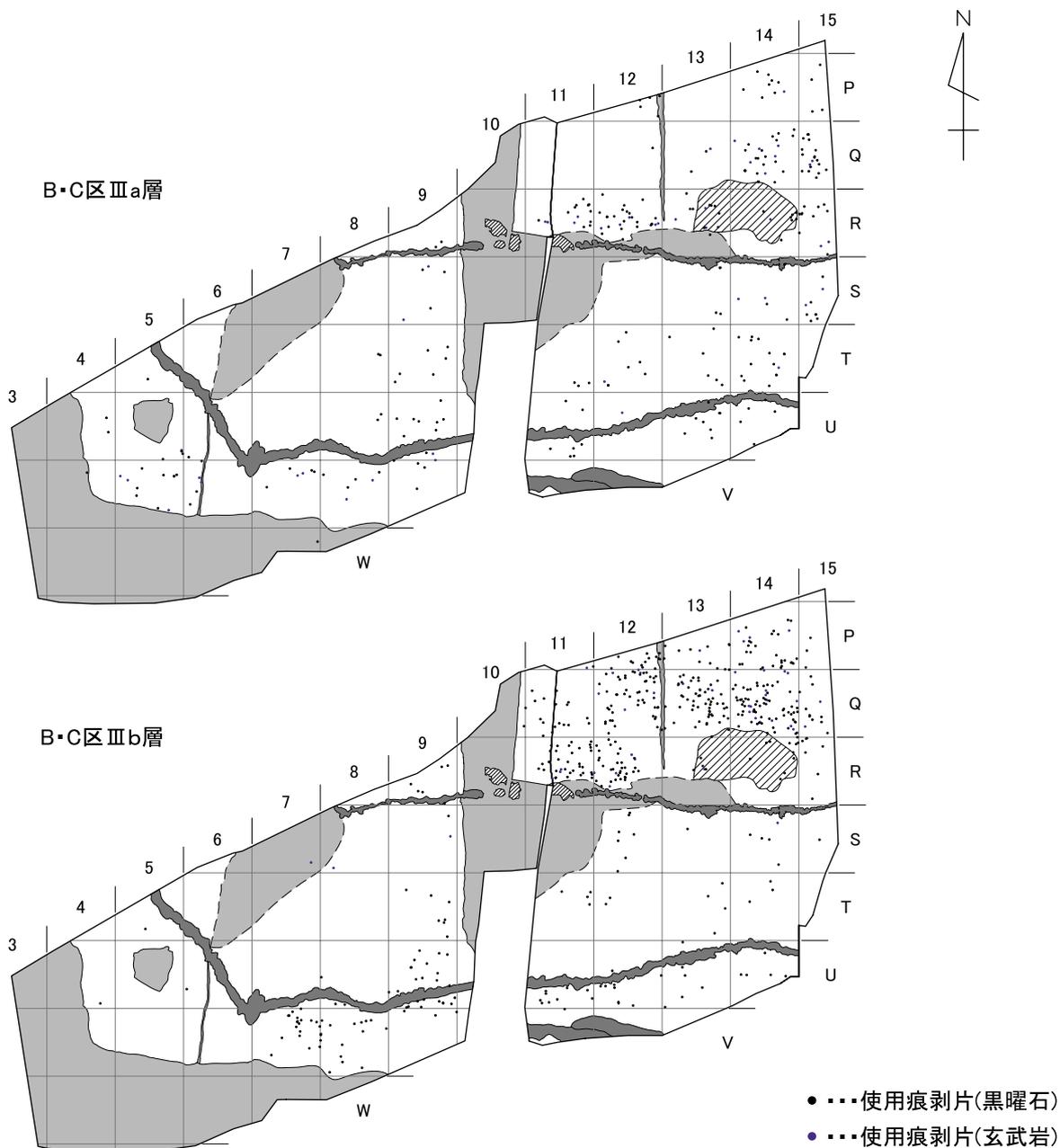


第272図 B・C区二次加工剥片A・B類の分布 (S = 1/800)

### 二次加工剥片A・B類

Ⅲ a層ではB 1区のP 15, Q 14, R 12の3ヶ所で高密度に偏在した分布が見られた。いずれも黒曜石製のB類を主体とする分布である。B 2区では地区東端のS 15でやや密度の高い分布となるが、東端以外の地区では散在的に分布している。B 3区, C 3区では散在的に分布しており, C 2区では地区の東側に分布が偏在し, S 9とU 9ではやや密度が高くなる。

Ⅲ b層ではB 1区の全域に分布が広がり密度も高くなり、偏在した分布が認められる。特にR 11・12, Q 13・14, P 14の3ヶ所では広範で高密度の分布が認められた。B 2では北東端と南西端周辺に分布が偏在し, B 3区では雨裂に沿って散在的に分布する。C 2区ではⅢ a層と比べ東側の分布密度が低くなるが, C 3区ではV 7北東側に黒曜石製のB類を主体とする分布が認められた。

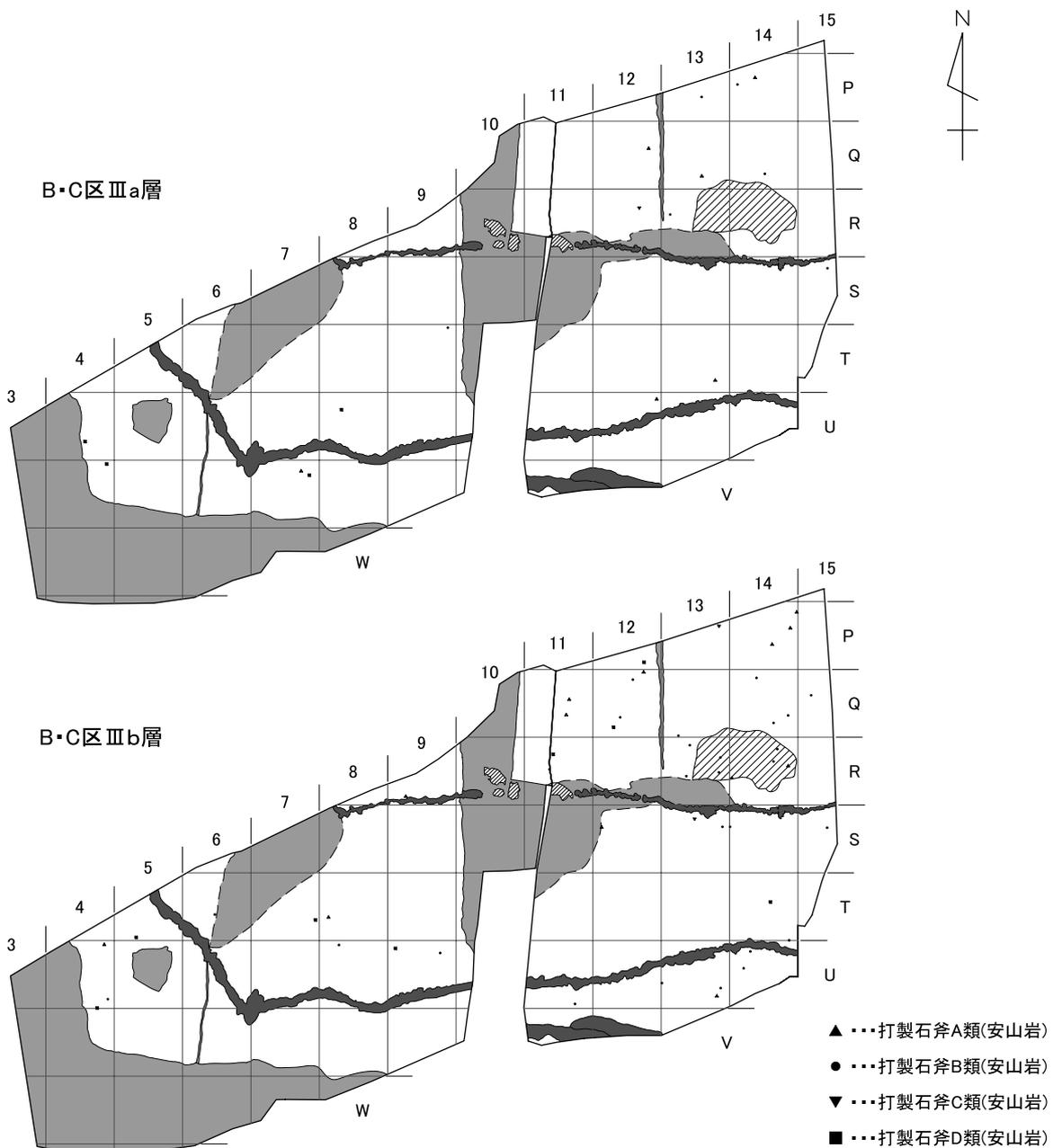


第273図 B・C区使用痕剥片の分布 (S = 1/800)

### 使用痕剥片

Ⅲ a層では二次加工剥片と同様の分布が認められる。B 1区中央の攪乱より西側ではR 12, 東側ではQ 14を中心とした高密度の分布が認められる。B 2区では地区中央から南側に分布し, 北西側では希薄となる。C 2区は東側にやや偏った分布が見られた。C 3区では中央の攪乱より東側で雨裂2に沿って分布が見られるが, 散在的な分布である。

Ⅲ b層ではB 1区の全域に分布が広がり, R 12, Q 12~14では高密度に分布している。B 2区では北西側と南東側に偏在した分布が認められる。B 3区では雨裂2に沿って散在的に分布している。C - 2区はⅢ a層同様に東側に偏在している。C 3区ではⅢ a層と同様に雨裂2に沿って分布密度が高くなり, 特にU 9・V 7の2ヶ所では高密度に分布している。中央の攪乱より西側では, ほとんど出土しなくなる。

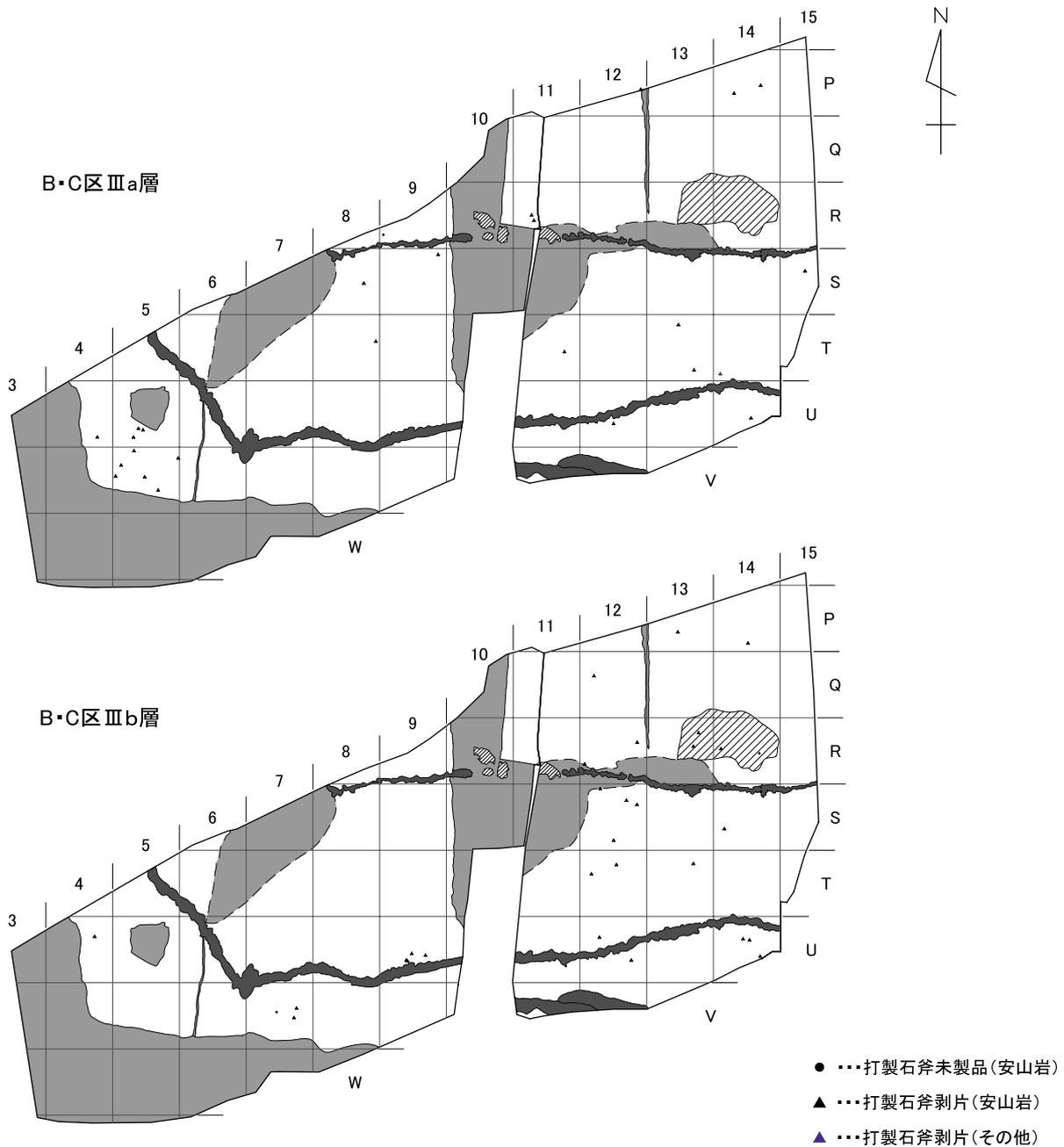


第274図 B・C区打製石斧A～D類の分布 (S = 1/800)

### 打製石斧A～D類

Ⅲ a層では各地区において散在的な分布となる。B 1区では出土数は多いが散在的である。C 3区ではV 7でA・D類が近接し出土している。

Ⅲ b層では全体的にⅢ a層と比べて出土数が増加する。B 1区では地区全体に散在的に分布が広がるが、中央の攪乱より西側の地区では2点ずつの近接した分布が認められる。攪乱より東側のP 14ではA類3点が比較的近接して出土している。B 2区では雨裂1付近で主に分布する。B 3区にも出土数が増え、U 13でB類とC類が近接して出土している。C 1区では1点の出土であった。C 2区ではT 7・8の境界付近でA・D類が近接して出土している。C 3区では中央の攪乱から東側では出土せず、西側のU 4でB・D類が近接して出土している。

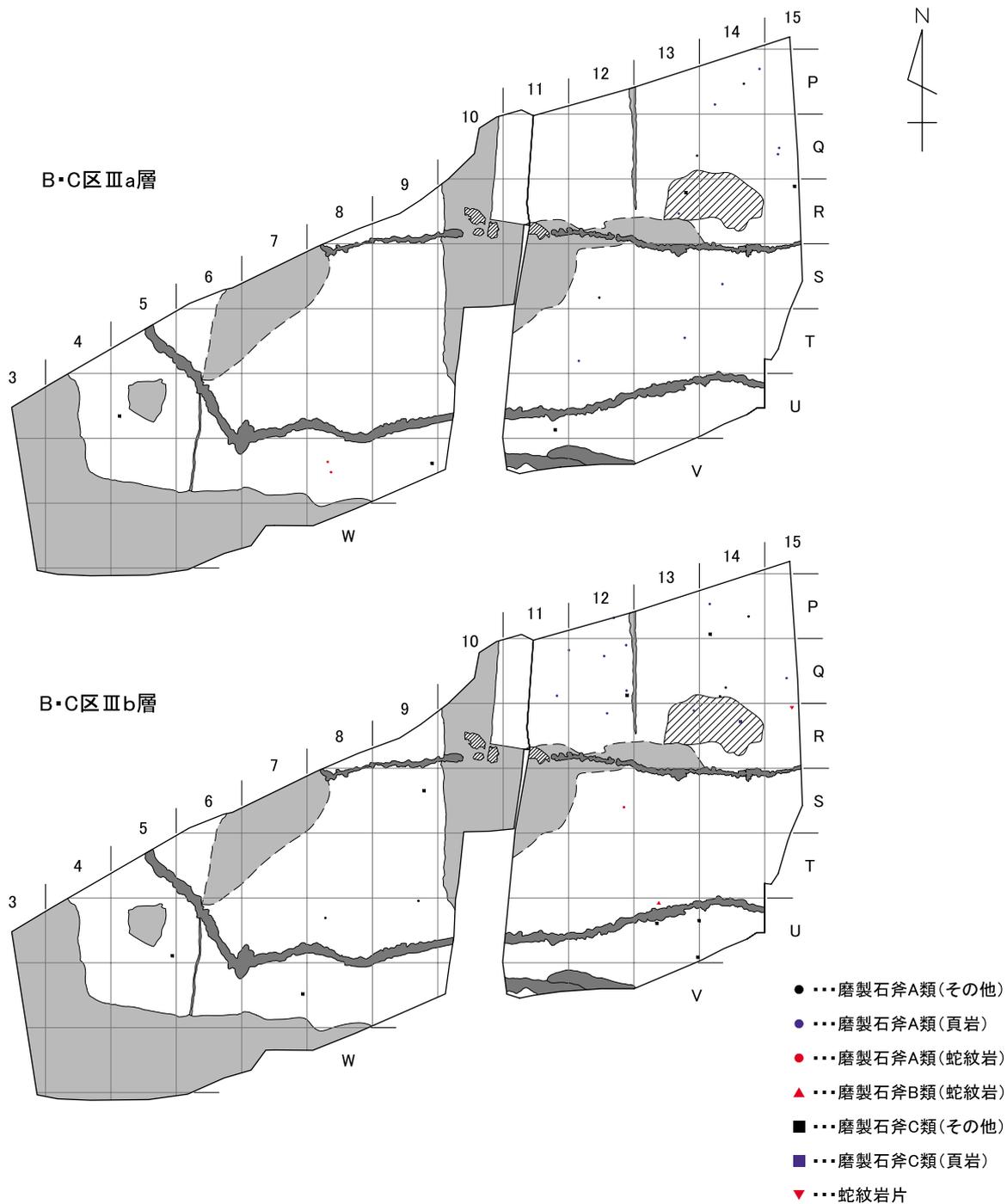


第275図 B・C区打製石斧未製品・打製石斧剥片の分布 (S = 1/800)

### 打製石斧未製品・剥片

Ⅲ a層では打製石斧未製品は1点のみの出土でありC 1区のR 9から出土している。打製石斧剥片(以下剥片)は、B区・C 1・2区では出土数も少なく分布も散在的であるが、C 3区の中央の攪乱より西側に偏在し密度の高い分布が見られた。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べてB区では出土数が増加し、C区では減少する。B 1区のR 14で未製品が出土し、その周辺では剥片が近接して分布している。B 2区では地区の北西側に剥片がやや偏在している。B 3区では雨裂2沿いに打製石斧未製品・剥片が分布する。C 2・3区ではそれぞれ出土数は少ないが偏在した分布となる。C 2区ではU 9で剥片が近接し、C 3区ではV 7で未製品に剥片が近接して分布しているが、攪乱の西側ではほとんど出土が見られなくなる。



第276図 B・C区磨製石斧A～C類・蛇紋岩片の分布 (S = 1/800)

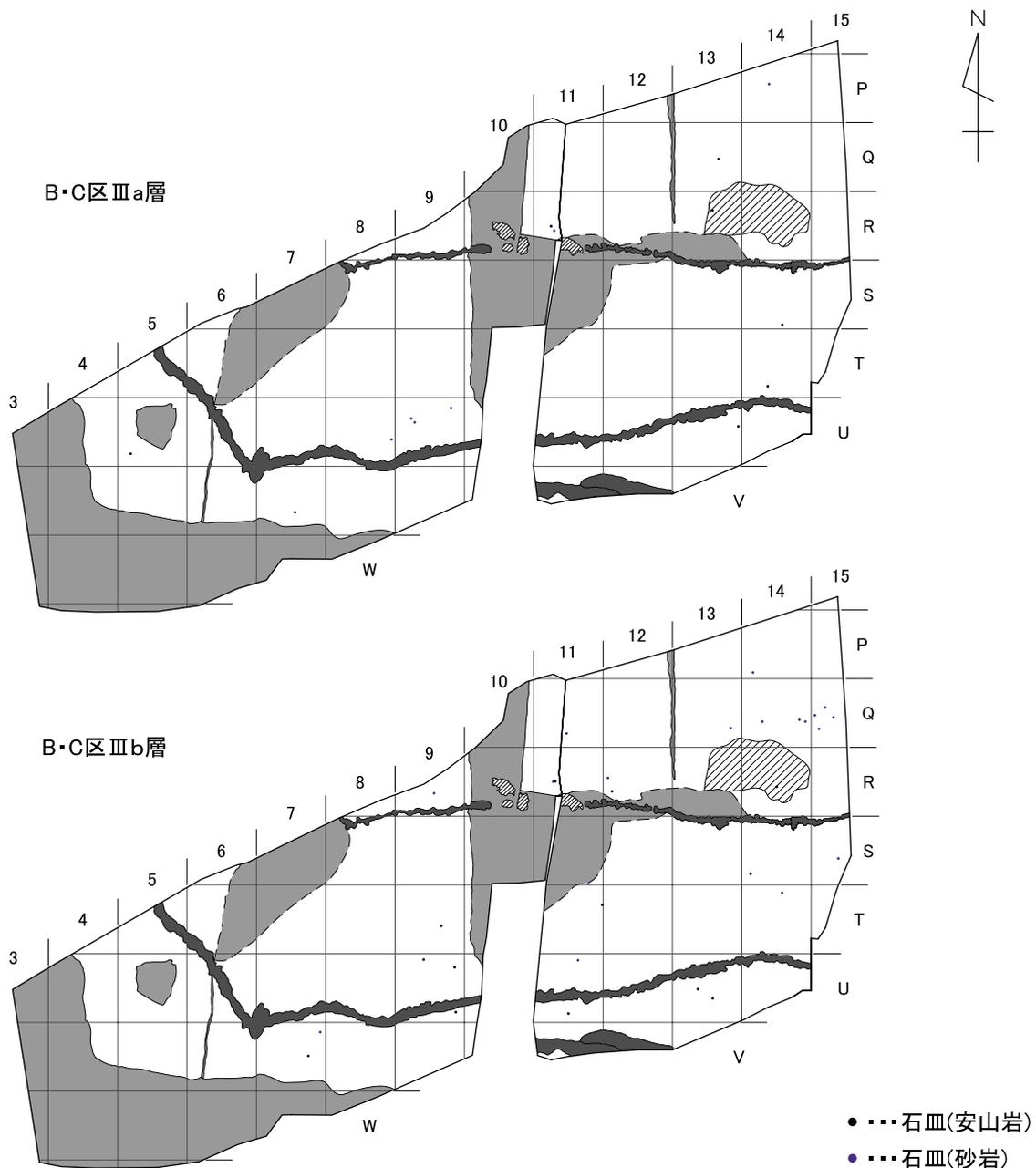
### 磨製石斧A～C類

Ⅲ a層ではB 1区の中央の攪乱より東側に偏在して分布する。Q 15では頁岩製が近接して出土した。B 2区では散在して分布する。C 3区ではV 8で蛇紋岩製の2点が近接して出土した。磨製石斧は石材に関係なく地区全域で散在的な分布となるが、V 8の蛇紋岩製のように特定の石材で近接して分布する例も認められる。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加する。B 1区では中央の攪乱より西側に頁岩製の高密度の分布が見られるが、攪乱より東側の地区では安山岩製と頁岩製が混在する散在的な分布である。B 2区では蛇紋岩製2点が散在して分布する。C区では安山岩製が広範囲に散在して分布している。

### 磨製石斧未製品・蛇紋岩片

未製品はⅢ a・b層ともに出土せず、蛇紋岩片はⅢ b層のB 1区東端で1点のみ出土した。



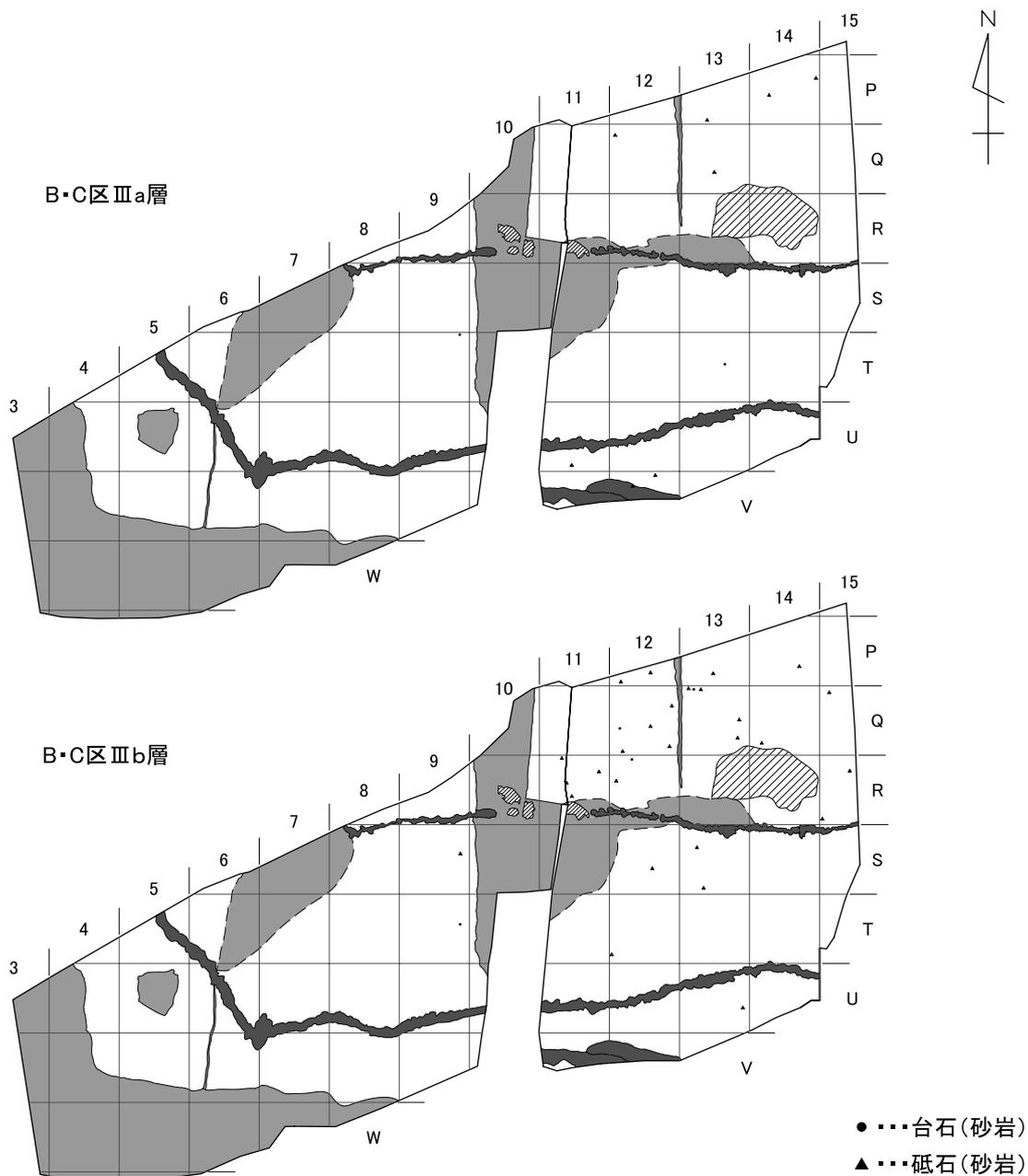
第277図 B・C区石皿の分布 (S = 1/800)

### 石皿

Ⅲ a層ではB 1～3区で散在的に分布している。B 1区では地区の中央付近では散在し、R 11では2点が近接して出土している。B 2・3区では地区の東側に分布する。C 2区では地区南側のU 9で高密度の分布が見られた。石材はB区では安山岩製が、C区では砂岩製が主に出土している。

Ⅲ b層では地区全体に分布が広がる。B 1区では地区中央の攪乱の東側でQ 14・15の境界付近に密度の高い分布が認められる。西側のR 11でも石材の異なる2点が近接している。B 2・3区ではⅢ a層と比べて出土数は増加するが、ほぼ全域に散在的な分布となっている。C 2区ではU 9で安山岩製が近接して分布する。

C 2区ではU 9でⅢ a・b層ともに高密度に分布しているが、利用石材に差異が認められた。



第278図 B・C区台石・砥石の分布 (S = 1/800)

**台石**

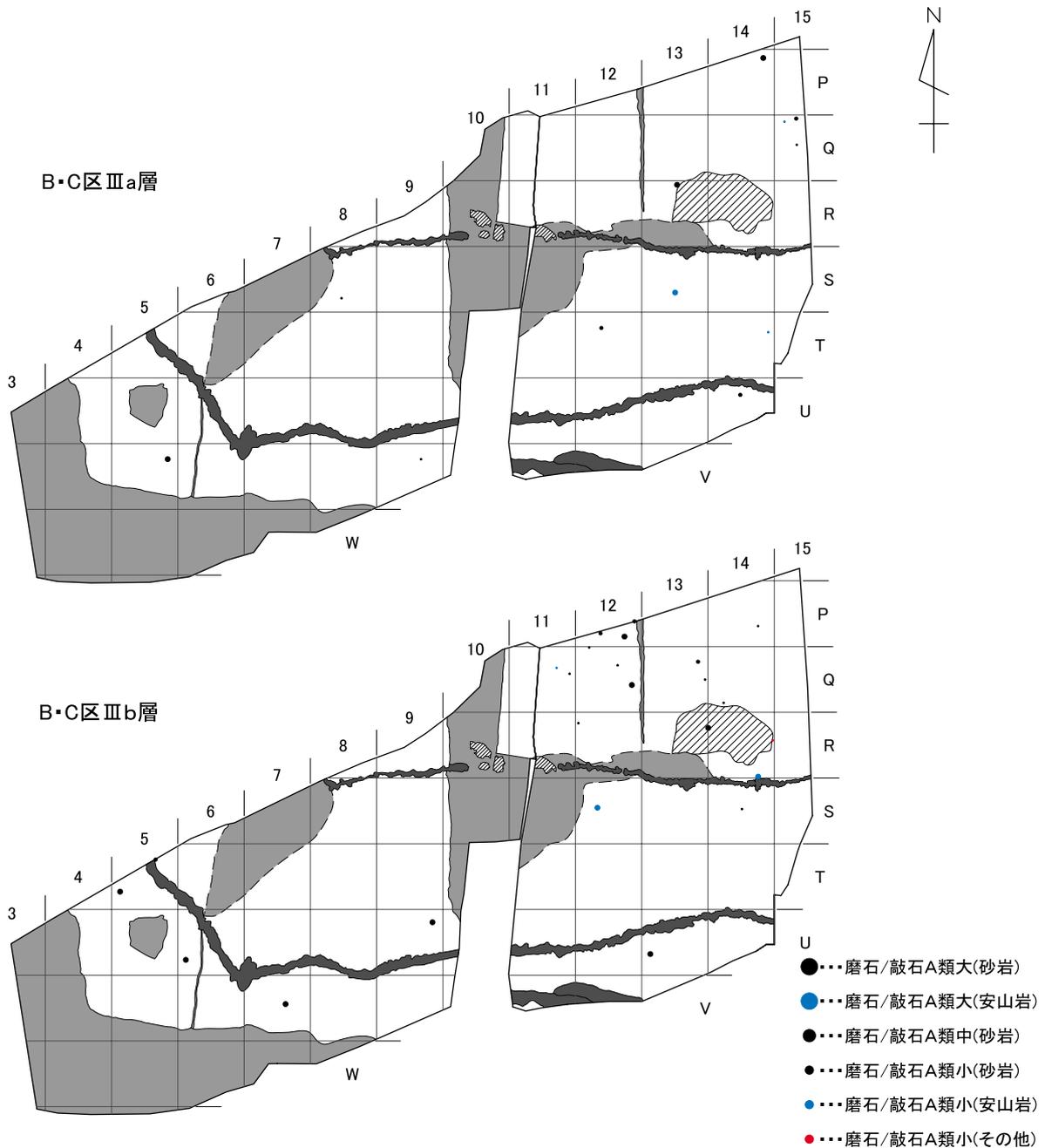
Ⅲ a層ではB 2区・C 2区で各1点ずつ出土している。

Ⅲ b層ではB 1区で出土が認められ、Q 12、Q 13で各1点ずつが出土し、Q 12では砥石と近接して出土している。C 2区ではⅢ a層と同様T 9からの出土である。

**砥石**

Ⅲ a層では出土量が少なく散在的な分布である。B 1区では地区のやや北側で散在的に分布し、B 3区では地区の西側に分布している。C区での出土は認められなかった。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加し、B 1区では中央の攪乱より東側の地区に分布が広がる。Q 13では台石と砥石が近接した分布となっている。攪乱より西側の地区ではR 12周辺でやや密度の高い分布が見られた。B 2区では出土量は増加するが、散在的な分布となる。B 3区、C 2区からは各1点ずつの出土であった。他の地区からは出土していない。

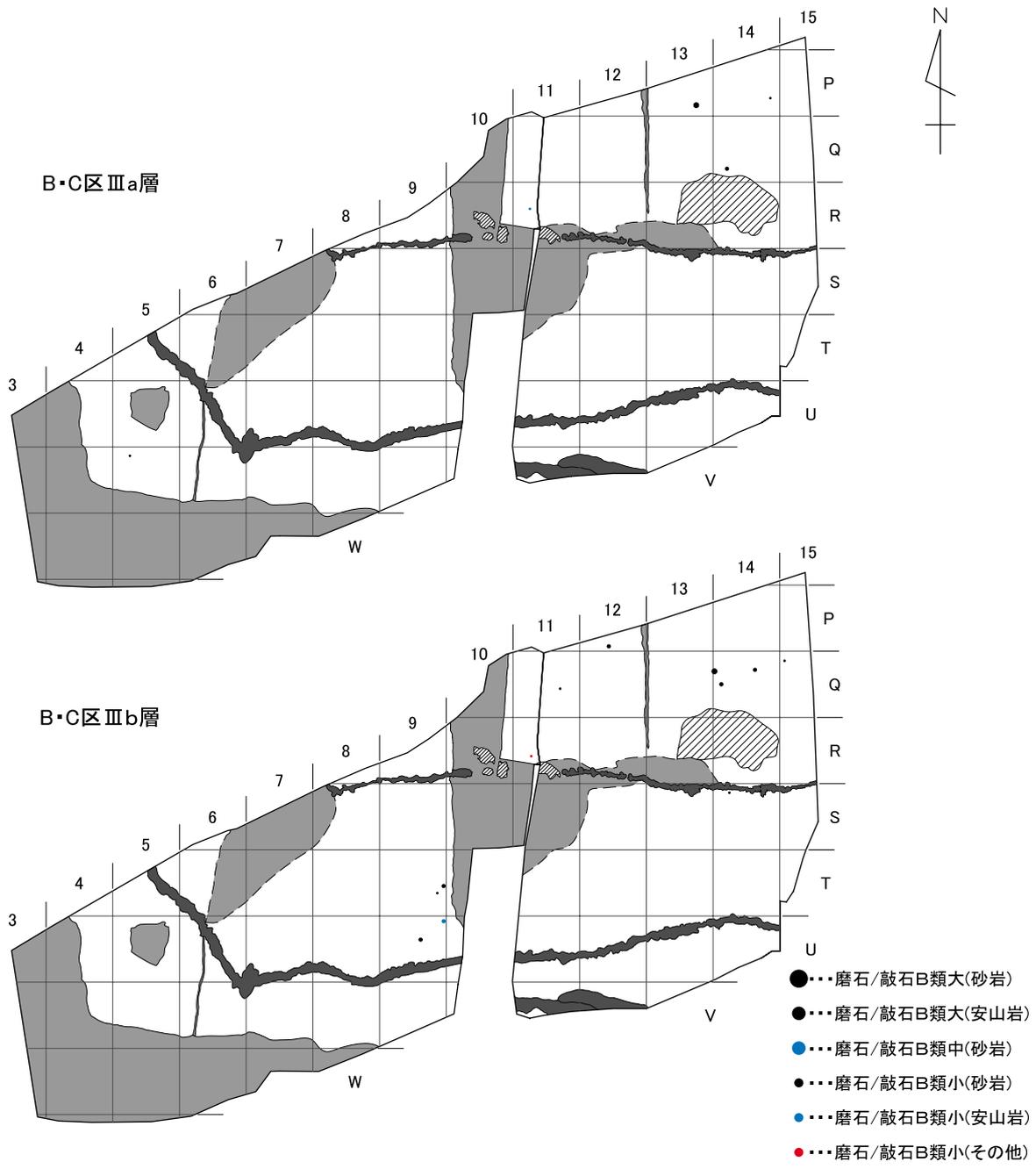


第279図 B・C区磨石/敲石A類(サイズ大・中・小)の分布(S = 1/800)

### 磨石/敲石A類

Ⅲ a層ではB 1区で大型品2点が散在的に分布する。中・小型品も出土数は少ないが、分布はB区の東端に偏在しており、B 1区のQ 15でやや密度の高い分布が見られた。B 1区以外の地区からは数点ずつ出土するが散在的な分布である。

Ⅲ b層ではサイズにかかわらずB 1区でⅢ a層と比べて出土数が増加する。大型品はP・Q 12周辺で近接した分布となり、中・小型品もまたその周辺に分布が認められる。B 1区以外の地区では散在的な分布である。中・小型品もB 1区以外の地区では散在的な分布となっている。A類は石皿とのセット関係が考えられたが、Ⅲ a・b層ともに分布域の重なりは認められなかった。



第280図 B・C区磨石/敲石B類(サイズ大・中・小)の分布(S = 1/800)

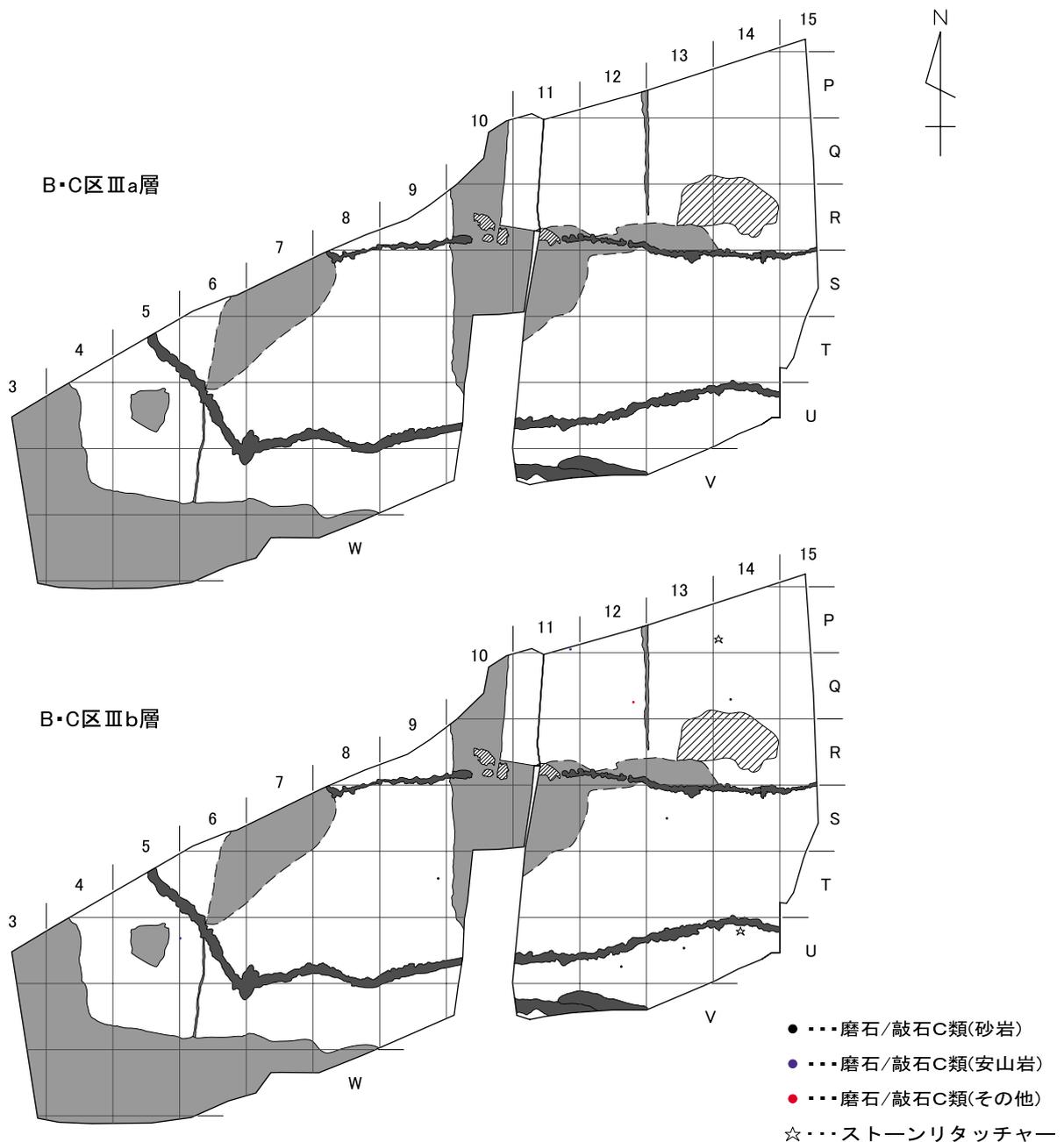
### 磨石 / 敲石B類

Ⅲ a層では出土数が少ない。B 1区では大・中・小の3タイプが1点ずつ出土している(R 11出土分を含めると小は2点)が散在している。他の地区からの出土はC 3区に1点の出土がある。

Ⅲ b層ではⅢ a層と比べて出土数が増加する。B 1区ではQ 14より東側で大・中型品が偏在する分布が見られた。中央の攪乱より西側では散在的な分布となっている。C 2区では地区東端のT・U 9で中・小型品が近接し偏在する分布が見られる。C区他の区では、出土していない。

B類の中・小型品の分布を見てみると、Ⅲ b層ではQ 14, T・U 9周辺で近接した分布が認められ、石核、剥片・碎片の集中域と重なりが認められる。

A・B類ともにB 1区に分布の中心が見られるが、A類は地区中央の攪乱より西側に、B類は東側に分布域を形成しており、分布域に相違が認められる。石皿との関係ではB類はU 9で分布の重なりが認められた。



第281図 B・C区磨石/敲石C類・ストーンリッターの分布 (S = 1/800)

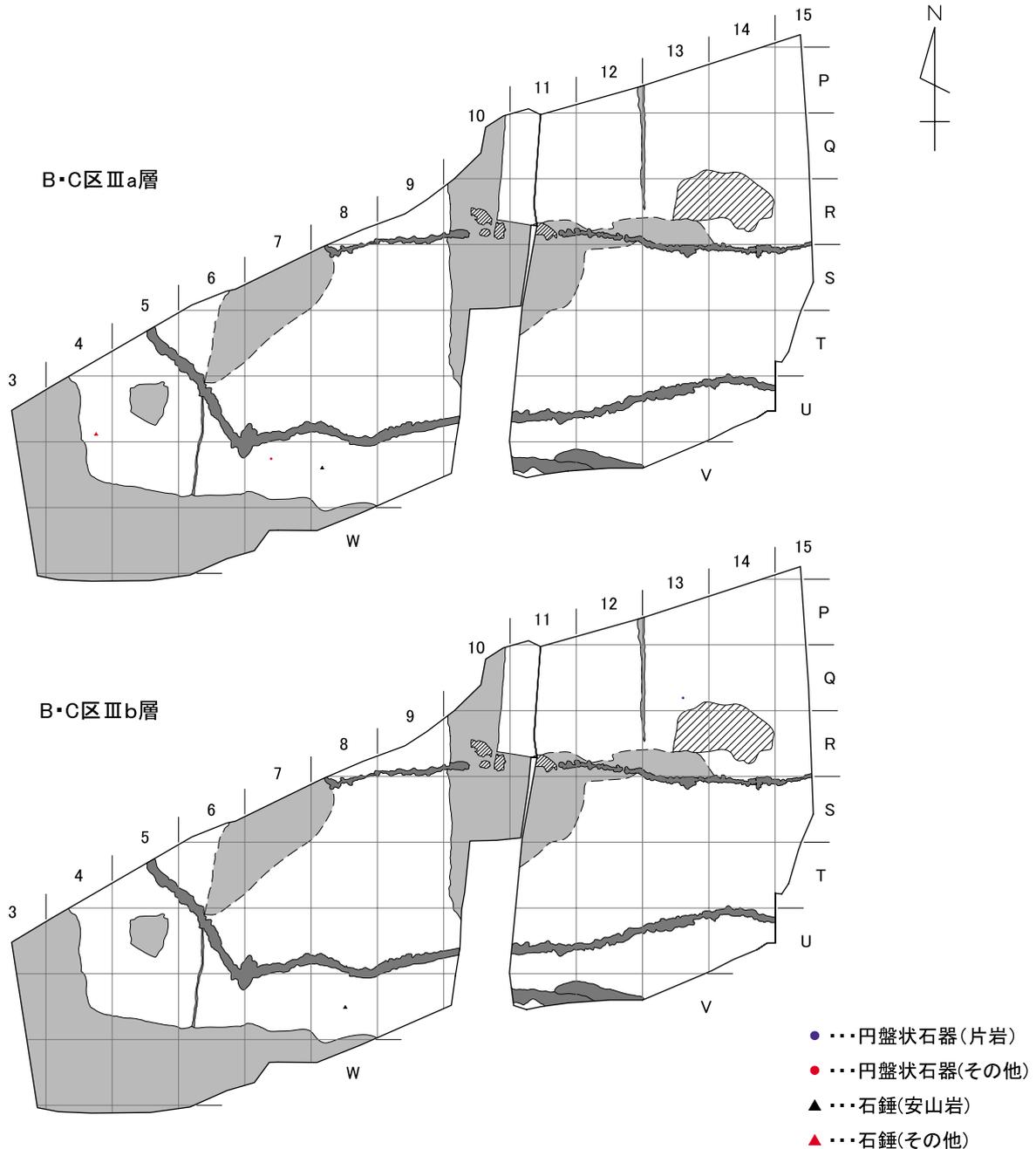
### 磨石 / 敲石C類

Ⅲ a層では出土していない。Ⅲ b層では各地区で出土が認められる。B 1区では、Q 12・14で各1点ずつ出土した。B 2区は1点のみの出土である。B 3区では北側の雨裂2に沿って出土するが散在的な分布であった。C区では、2・3区で各1点ずつ出土している。

### ストーンリッター

Ⅲ a層では出土せず、Ⅲ b層ではB 1・3区で各1点ずつ出土した。B 1区では地区の北側に分布し、B 3区では磨石 / 敲石C類と同じく雨裂2沿いに分布する。

C類、ストーンリッターは剥片石器製作に関連する礫・岩片素材石器と考えられ、Ⅲ b層の分布では原石・石核、剥片・碎片といった剥片剥離時の石器群の集中と重なる分布が認められた。P・Q 14では磨石 / 敲石B類も集中域を形成しており、この地点が剥片石器製作場として利用されていた可能性は高いと思われる。



第282図 B・C区石錘・円盤状石器の分布 (S = 1/800)

### 石錘

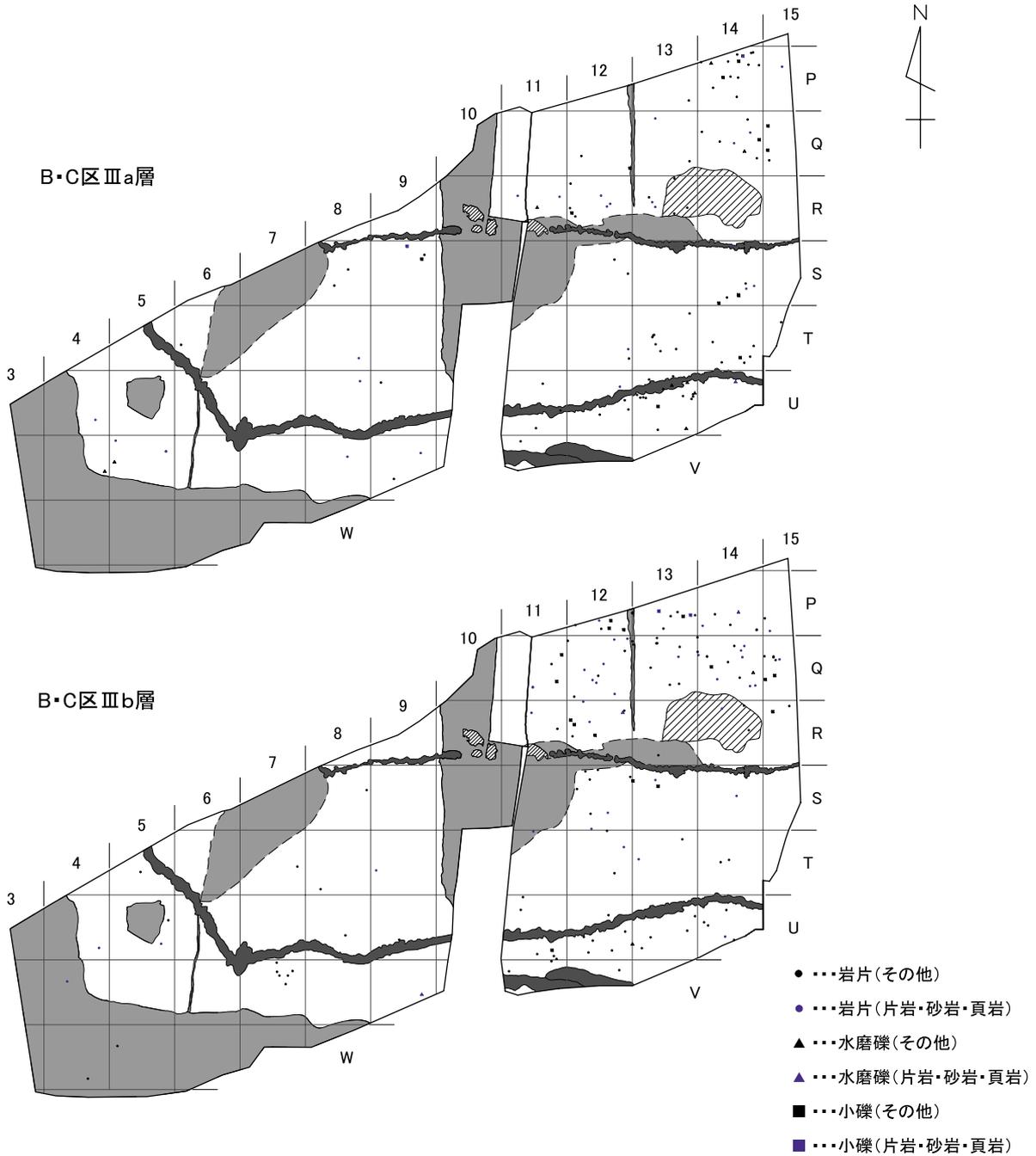
Ⅲ a・b層ともにB区での出土はなく、C区でのみ出土している。C 2区ではV 8で安山岩製のⅢ a・b層と層位に違いがあるものの近接して出土している。また、C 3区では地区南西隅のU 4区で1点の出土があった。

### 円盤状石器

Ⅲ a層ではB区での出土はなく、C 3区のV 7で1点のみ出土した。

Ⅲ b層ではC区での出土はなく、B 1区のQ 13で1点のみ出土した。

円盤状石器は岩片を素材としているが、Ⅲ a層のV 7とⅢ b層のQ 13は礫・岩片素材石器群及び剥片素材石器群ともに分布密度は比較的高い地点である。



第283図 B・C区岩片・水磨礫・小礫の分布 (S = 1/800)

### 岩片・水磨礫・小礫

Ⅲ a層ではB区に分布の中心があり、C区では密度が希薄である。B 1区ではP 14, Q 14, R 12の3ヶ所に偏在している。P 14, Q 14では岩片・小礫が高密度に分布しており、R 12では密度は低いものの岩片・小礫が近接して分布している。B 2区では地区の中央から西側の地区に分布しており、雨裂2周辺のT 13・14でやや密度の高い分布となっている。B 3区では雨裂2に沿って高密度に分布する。C 1～3区は分布密度が低い、S 9のように近接して分布している地区もある。

Ⅲ b層ではB 1区でⅢ a層と比べて出土数が増加し、地区中央の攪乱より西側の地区で分布域が広がる。P 12やP・Q 13・14の中央付近ではやや密度が高くなる。B 2区では地区北側に分布の中心が移っている。B 3区では地区全域に分布が広がり、U 11では密度の高い分布が見られた。C区では出土数はⅢ a層と同様に少ないものの、C 3区のV 7で岩片が集中して分布している。

## 第Ⅳ章 ま と め

### 第 1 節 縄文時代後期～弥生時代前期の土器について

#### 時期設定

権現脇遺跡の後期から弥生時代前期にかけての土器群を先学の研究と調査結果をふまえてⅠ期～Ⅷ期の8期に区分し、各期の変遷を追いたい。主に島原半島・肥後地方との併行関係から、Ⅰ期を御領式、Ⅱ期を天城式、Ⅲ期を古閑式、Ⅳ期を礫石原式、Ⅴ期を山ノ寺式、Ⅵ・Ⅶ期を原山式、Ⅷ期を原山式に後続する土器群として対応させる。

#### 各器種の変遷

##### 深鉢

深鉢A類は器面に貝殻条痕調整を施すものが多く、Ⅳ期に位置付けられるものと考えられ、突帯文期に残る可能性もある。

深鉢B類については深鉢D類の肩部の消滅によって成立したものと考えられ、Ⅳ期に位置付ける。深鉢D類に比べると器壁はやや厚くなり、内面のナデ調整も粗くなる。口縁部には突起を持つもの(第53図35等)が見られるようになる。深鉢A類同様貝殻条痕調整を施すものが多い。

深鉢C類は頸部と口縁部文様帯を持つ土器であるが、権現脇遺跡で出土した縄文時代後期以降の土器群の中では最も古い時期から登場する。Ⅰ期～Ⅲ期に位置付けられる。器面の調整は貝殻条痕の後丁寧なナデ調整か研磨調整を施すものがほとんどである。全体的な器形まで判断できる資料は少ないが、口径に対して器高の比較的低い鉢形のを一定量含んでいるものと考えられる。Ⅰ期においては外反する頸部に内傾・内湾する口縁部が付く(第85図536・538)。Ⅱ期においては口縁部文様帯が直立する様になり、沈線は3～4本を施す。Ⅲ期になると口縁部文様帯は幅を広くし、沈線は4～6本となる。Ⅱ期までの深鉢C類とⅢ期の深鉢C類の大きな違いは頸部の作りで、Ⅱ期までは頸部上位を外反させて口縁部文様帯をのせるのに対し、Ⅲ期になると頸部は直線的に内傾して立ち上がり、頸部上端を外側へ折り曲げるか別に粘土紐を貼り付けて外側に張り出させ、そこへ口縁部文様帯を取り付けるようになる。これは口縁部文様帯が長大化し外傾することによって起こる製作段階での型崩れを防ぐ方法として採用された製作技術として理解でき、このことにより頸部と口縁部文様帯の境では内面に稜や段が作られる。一方Ⅰ～Ⅲ期において共通する点として、口縁部文様帯に施される沈線の最下位のものは多くが頸部と口縁部文様帯の境部分に引かれており、装飾としてだけでなく製作過程での粘土紐を積み上げる際の接合という目的もあったものと考えられる。

深鉢D類は深鉢C類からの変化が考えられ、Ⅳ期に位置付けられる。口縁部文様帯は極度に発達し、間隔の広い平行沈線や弧状沈線が施されるようになる。深鉢C類に見られた頸部と口縁部文様帯の境の部分は形骸化してわずかな段を残すのみか完全に消失する。また、深鉢C類において頸部であった部分は肩部に変わり、その肩部も次第に形骸化してゆるい「S」字状をなして立ち上がる胴部へと変容するものと考えられる。胎土・色調・調整においても深鉢C類とは大きな差がある。胎土には小礫を多量に含むものが一定量見られるようになり、色調は深鉢C類に見られた赤味の強いものが数を減らし、黄色味の強いものが増える。調整については外面には貝殻条痕調整を多用し、内面は丁寧なナ

デ調整を施すものが多く見られる。

突帯文土器である深鉢E類は、多くが胴部と口縁部に突帯を貼り付ける。一部口縁部の突帯がないものが見られるが、胴部で屈曲せず口縁部のみに突帯を持つものは少ない。突帯に施される刻目原体は指、棒状工具、ヘラ状工具が多く見られ、まれに貝殻腹縁を使ったものや棒状工具による刺突なども見られる。器面調整としては貝殻条痕調整や擦過調整を明瞭に残すもの、胴部突帯より上位のみその調整をなで消すもの、全体をナデ調整するものが見られる。

V期においては胴部突帯部分での屈曲が強く、刻目は指先によって爪痕を残す大振りの刻目が主体を占める。器面には貝殻条痕を残すものが多く、器壁が厚い。口縁部突帯は口唇部から1.0cm前後下がった位置に貼り付けられる。VI期では刻目原体の主体がヘラ状工具に変わり、また棒状工具の側面を押し当てて刻むものが新たに登場する。胴部突帯部分での屈曲はV期と変わらないものもあるが、明確な屈曲部を持たず内湾するもの（第100図829等）が見られる。器面にはナデ調整を行うものが多くなるが、器壁はV期と変わらず厚い。口唇部と口縁部突帯の間隔はV期に比べると縮まり、口唇部に接するものも見られるようになる。VII期においては刻目原体の主体はヘラ状工具で変わらないがさらにその比率は高まり、一方棒状工具の比率が下がる。器面は丁寧なナデ調整を行うものがほとんどである。器壁はV・VI期に比べると薄くなり、土器自体の大きさもV・VI期に比べると小振りなものが多くなるものと思われる。胴部突帯と口縁部突帯の間に線刻を施すものが出現する。VIII期ではVII期までの胴部突帯部分での屈曲がなくなり、口縁部は内傾・内湾することなく立ち上がる。刻目原体の主体はヘラ状工具で、刻目は小刻みになり、押し引くのではなく切るように施すものが多くなる。B区検出の埋嚢についても当期に含まれる。

深鉢底部に関しては胴部・口縁部との接合する資料が乏しい。深鉢底部A類はI・II期の深鉢C類に伴うものであろう。深鉢底部B類は深鉢底部C類の張り出し底へとつながる兆しが見受けられ、II・III期の深鉢C類の伴うものと考えられる。深鉢底部C類は深鉢底部B類から張り出し部分が発達したものと捉えられる。第50図1に見られる様に深鉢A類に伴う例があり、第109図1021のように刻目突帯を付すものも見られる。深鉢A類、深鉢B類、深鉢D類、深鉢E類に伴うものと思われる。深鉢底部D類は器面調整などからIV期以降のものと考えられるが、判然としない。深鉢底部E類はやはりIV期以降と考えられ、突帯を付すもの（第66図262）もあることから下限は突帯文期まで考えられる。

### 浅鉢

浅鉢A類は頸部が下位では内傾し上位で強く外反するもの（第67図267・276、第111図1046等）と、頸部が下位で外反し大きく開くもの（第67図265、第111図1055等）がある。前者をI・II期に、後者をIII期に位置付ける。

浅鉢B類は頸部が大きく開いて口縁部へと至るが、頸部は緩やかに外反するものと直線的に伸びるものがある。口縁部外面に沈線一条を引くものが見られ、浅鉢A類に見られた口縁部文様帯が消滅し、沈線のみが残ったものと考えられ、口縁部外面に沈線を持たないものは後出的である。口縁部には突起を持つもの（第68図288・303、第112図1068）があり、また頸部の基部には肩部を作り出すもの（第112図1070等）が見られる。II期～IV期に位置付けられるものと考えられる。

浅鉢C類は頸部の作りにおいて外反させることを意識したものと直線的なものとがあり、外反させ

るものは浅鉢A類・浅鉢B類に見られる外反して大きく開く頸部を意識してのものと考えられ、浅鉢C類の中では先出的なものとする。大部分がⅢ期に位置付けられようが、口縁部に突起を持つもの(第69図307)は、頸部内面の段が不明瞭で間延びしており、Ⅳ期に位置付けられるであろう。

浅鉢D類は多くが短い頸部と幅の広い口縁部文様帯を持つが、一部頸部を作らないもの(第114図1121・1122)がある口縁部文様帯には沈線を施すものと施さないものがある。Ⅲ期に位置付けられる。

浅鉢E類については出土例が少なく、今後検討が必要である。

浅鉢F類は大きく張った胴部・肩部を特徴とし、口縁部の内面に段を作る。また、口縁部の外面には沈線を引くものと引かないものがあり、基本的には沈線を引くものから引かないものへと変化するものと考えられ、今後細分が可能かもしれない。Ⅳ期である。

浅鉢G類は口縁部の作りは浅鉢B類と共通するが、丸みを帯びた肩部を持つ点で異なる。Ⅳ期に位置付けられる。

浅鉢H類は波状をなす口縁部を特徴とし、底部には沈線と暗文による装飾を施す。Ⅳ期に属すると考えられる。口縁部に突起を持つもの(第117図1160)も見られ、赤色顔料の塗付が認められるものもある。

浅鉢I類は浅鉢H類に後続するものと考えられ、多くが突帯を貼り付け、刻目を施したものも見られることから突帯文期に伴うものである。

浅鉢K類は屈曲の強いものから屈曲のゆるいものへと変化するものと考えられる。口縁部内面に段を持つもの(第119図1230・1231)は浅鉢F類からの変化が考えられ、浅鉢K類の中では古い位置付けとなろう。突帯文期に位置付けられる。

浅鉢L類は胴部外面に段を持つものと持たないものが見られる。外面には貝殻条痕調整や擦過調整を残し、内面のみ丁寧なナデ調整や研磨調整を施すものが多い。口縁部には突起を持つものがある(第120図1239・1243)。刻目突帯を施すもの(第76図429、第120図1246)も見られることから突帯文期まで見られる器種である。

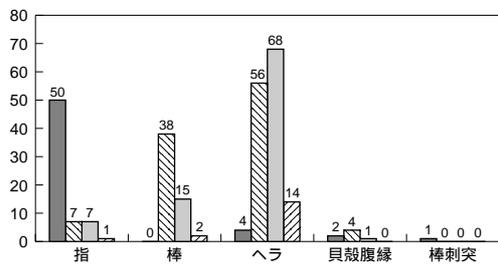
浅鉢M類も浅鉢L類同様外面には貝殻条痕調整や擦過調整を残し、内面は丁寧なナデ調整か研磨調整を施したものが多い。また、浅鉢L類と浅鉢M類はともに外面に厚く炭化物が付着するものも多く見られ、器形的にも似かよっており、製作技法の上では違いが認められるが、機能的には同じ目的で使用され、共存した時期においては補完関係にあったと考えられる。Ⅳ期～突帯文期前半に位置付けられよう。

## 壺

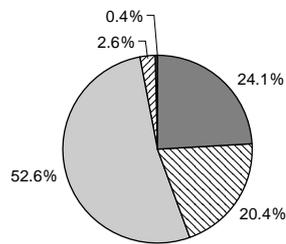
壺については器壁の厚さから大型品と小型品に分かれるようである。口縁部は段を作らず外反するものがほとんどであるが、口縁部外面を肥厚させて段を持つもの(第123図1288)や肩部に羽状文を施すもの(第124図1328)があり、これらはⅦ期以降に位置付けられよう。

	深鉢A類	深鉢B類	深鉢C類	深鉢D類	深鉢E類	深鉢底部A類	深鉢底部B類	深鉢底部C類	深鉢底部D類	深鉢底部E類	浅鉢A類	浅鉢B類	浅鉢C類	浅鉢D類	浅鉢E類	浅鉢F類	浅鉢G類	浅鉢H類	浅鉢I類	浅鉢J類	浅鉢K類	浅鉢L類	浅鉢M類	浅鉢N類	浅鉢O類	壺
期																										
期																										
期																										
期																										
期(突帯文 期)																										
期(突帯文 期)																										
期(突帯文 期)																										
期(突帯文 期)																										

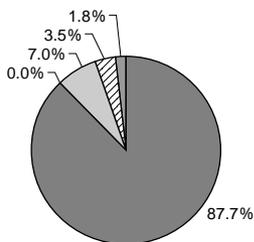
第284図 土器変遷概略図



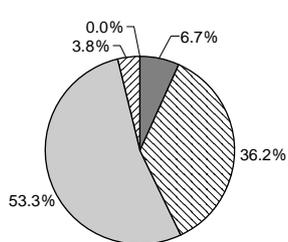
突帯文期 (全体)



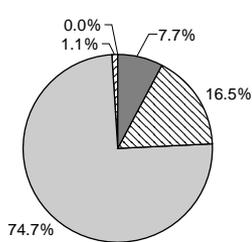
V期 (突帯文I期)



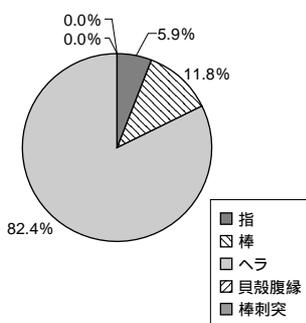
VI期 (突帯文II期)



VII期 (突帯文III期)



VIII期 (突帯文IV期)



第285図 深鉢E類の刻目原体別出土数とその比率 (出土位置記録分)

### (3) 時期別出土状況

A・D区，B・C区それぞれの時期別に土器の出土状況を見る。

#### A・D区

- I期 出土は見られない。
- II期 数量は多くはないが，A 1区を中心に出土が見られる。他の小区画についてもわずかではあるが散在する。
- III期 出土量が急激に増える。各小区画に分布が見られるが，特にA 5区の北東部分に集中的な出土がある。
- IV期 各期を通じて最も出土量が豊富である。分布は各小区画に及ぶが，特にA 1区からA 4区北東部分にかけて特に出土が集中する。
- V期（突帯文I期）以降 遺物の出土はほとんど見られなくなる。

#### B・C区

- I期 B区雨裂2の南側でわずかながら遺物の出土が見られるようになる。
- II期 出土数量はやや増加する。C区での出土は少ない。一方B区ではB 1区と雨裂2周辺のまとまりとして捉えられるようだが，散在的で確定的ではない。
- III期 出土数が急激に増える。分布ははっきりと二つのまとまりを捉えることができる。一つはB 1区で，北西・南東方向にやや細長く分布する。もう一つはC区南東部分からB区南側部分にかけての雨裂2周辺に分布域があり，B・C区のさらに調査区外，南側への広がりを推測させる。
- IV期 III期に引き続き，出土量は豊富である。雨裂1より北側のB 1区において東西に分かれて二つのまとまりが認められる。また，雨裂2周辺においてもまとまった出土が見られる。
- V期（突帯文I期） 分布は雨裂1の北側であるB 1区にほぼ限定され，多くが11列から14列の中に収まる。B区のさらに北側への広がりが予想される。
- VI期（突帯文II期） 分布はV期に引き続きB 1区にほぼ限定され，B区のさらに北側への広がりが予想される。V期に比べ出土数が増大する。
- VII期（突帯文III期） 引き続き分布域はB 1区にほぼ限定され，B区のさらに北側への分布の広がりが予想される。
- VIII期（突帯文IV期） 分布はやはりB 1区に限定されるが，出土数はVII期に比べると大きく減る。

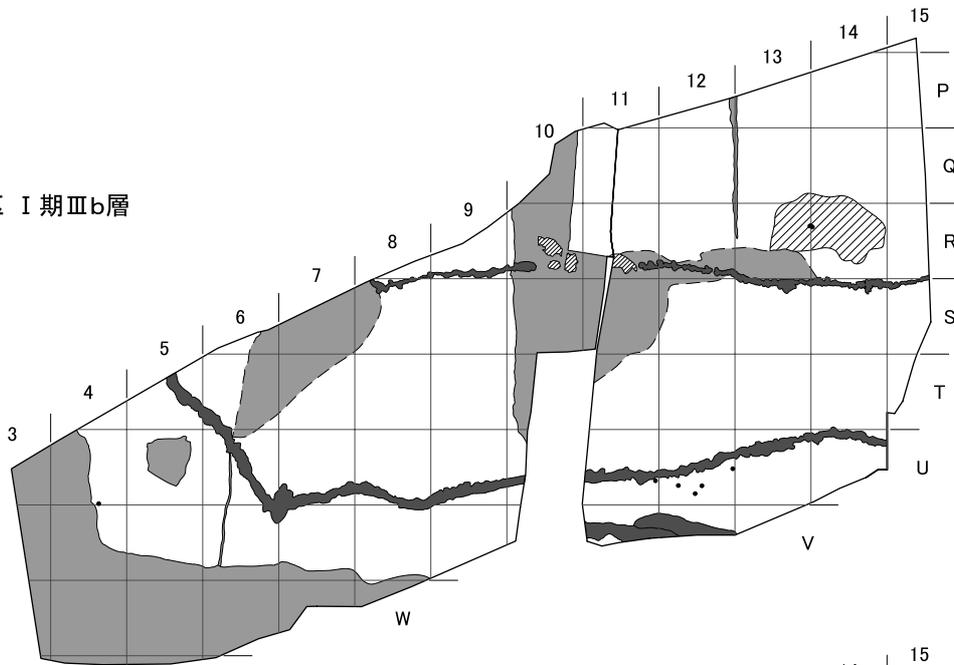
#### 【参考文献】

安楽勉・藤田和裕編 1981『朝日山遺跡』小浜町教育委員会

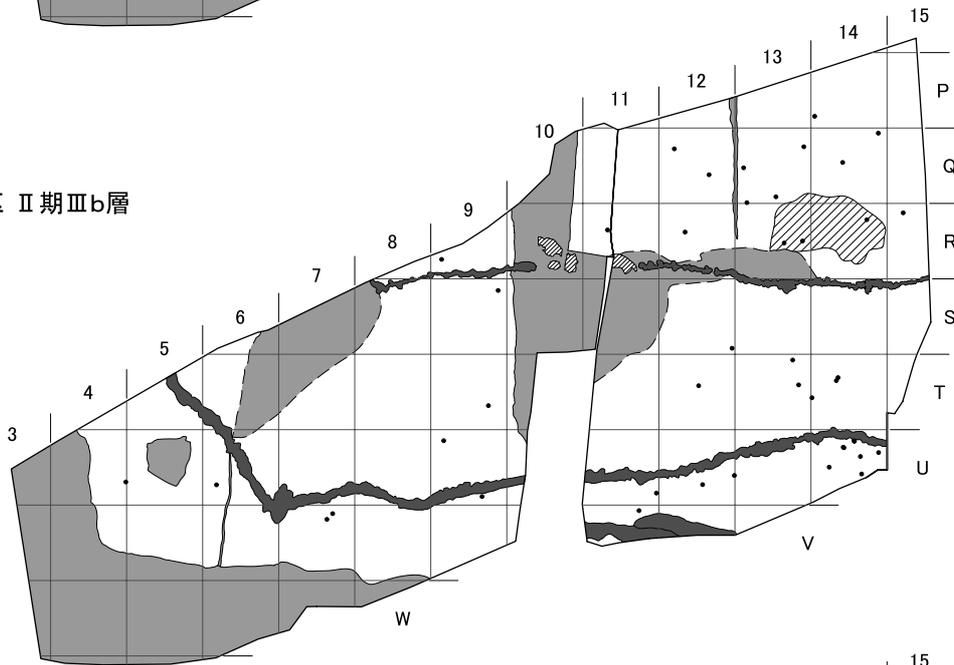
安楽勉 1990「県下における晩期時の編年について」『白井川遺跡( )』東彼杵町教育委員会

- 大野安生 2001「黒丸遺跡沖田地区出土土器の検討 - 黒川式から山ノ寺式までの編年試案 - 」『西海考古』  
4号 西海考古同人会
- 乙益重隆 1965「縄文文化の発展と地域性 九州北西部」『日本の考古学』 縄文時代 河出書房
- 賀川光夫・島津義昭・清田純一他 1980『古保山・古閑・天城』熊本県教育委員会
- 河北毅他 1986『伊坂上原遺跡・石仏遺跡』熊本県教育委員会
- 清田純一 1998「縄文後・晩期土器考 - 中九州の縄文後・晩期土器とのその並行型式について - 」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
- 椎葉文雄他 1985『アンモン山遺跡』人吉市教育委員会
- 下山覚 1988「九州縄文晩期の深鉢形土器の型式変化について - 空間を横断する情報と時間を縦断する情報 - 」『人類史研究』第7号 人類史研究会
- 副島和明・町田利幸 1991『礫石原遺跡』長崎県教育委員会
- 田川肇編 1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 竹中哲朗 2001『稗田原遺跡』長崎県教育委員会
- 堂込秀人 1997「南九州縄文晩期土器の再検討・入佐式と黒川式の細分」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会
- 富田紘一 1986「西山南麓の未紹介遺跡」『戸坂遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
- 中島直幸 1982「初期稲作期の凸帯文土器」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』森貞次郎博士古希記念古文化論集刊行会
- 中村友博 1977「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会
- 日本考古学協会特別委員会 1960「島原半島」『九州考古学』10号 日本考古学協会
- 橋口達也編 1984『石崎曲り田遺跡』福岡県教育委員会
- 橋口達也編 1985『石崎曲り田遺跡』福岡県教育委員会
- 福田一志 1999「山の寺梶木遺跡」『県内主要遺跡内容確認調査報告書』長崎県教育委員会
- 藤尾慎一郎 1990「西部九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民族博物館研究報告』第26集 国立歴史民族博物館
- 古門雅高編 1995『国崎遺跡』南串山町教育委員会
- 古門雅高編 2001『東鷹野遺跡』有明町教育委員会
- 古城史雄編 1996『沖松遺跡』熊本県教育委員会
- 古田正隆 1970『山ノ寺梶木遺跡』百人委員会
- 古田正隆 1977『礫石原遺跡』百人委員会
- 古森政次・島津義昭 1994『ワクド石遺跡』熊本県教育委員会
- 本田秀樹編 1994『中木場遺跡』長崎県教育委員会
- 町田利幸・浦田和彦 1988『礫石原遺跡』島原市教育委員会
- 町田利幸 1997『黒丸遺跡』長崎県教育委員会
- 丸山伸二・濱田彰久 1993『大原天子遺跡』熊本県教育委員会
- 水ノ江和同 1997「北部九州の縄紋後・晩期土器」『縄文時代』8 縄文時代文化研究会
- 村川逸郎編 1994『畑中遺跡』島原市教育委員会
- 村川逸郎編 1997『稗田原遺跡』長崎県教育委員会
- 村川逸郎編 1998『稗田原遺跡』長崎県教育委員会
- 森貞次郎 1966「弥生文化の発展と地域性 九州」『日本の考古学』 弥生時代 河出書房
- 山崎純男 1980「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古希記念古文化論叢』
- 山崎純男・島津義昭 1981「晩期の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 吉田正一編 1994『大久保遺跡』熊本県教育委員会
- 渡辺誠 1991「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』肥後考古学会
- 和田好史 1993『中堂遺跡』人吉市教育委員会

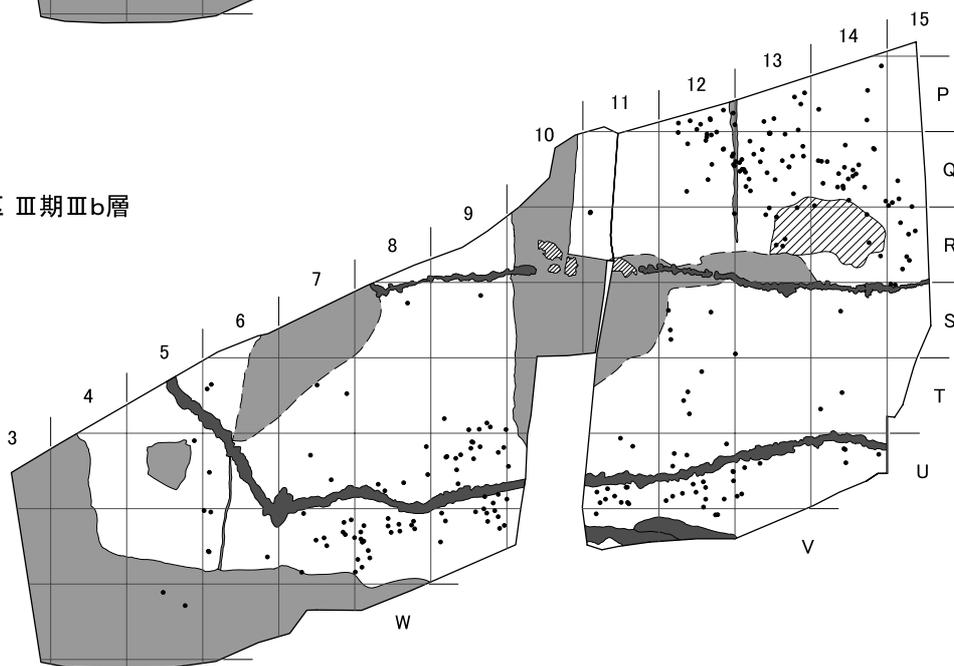
B·C区 I期Ⅲb層



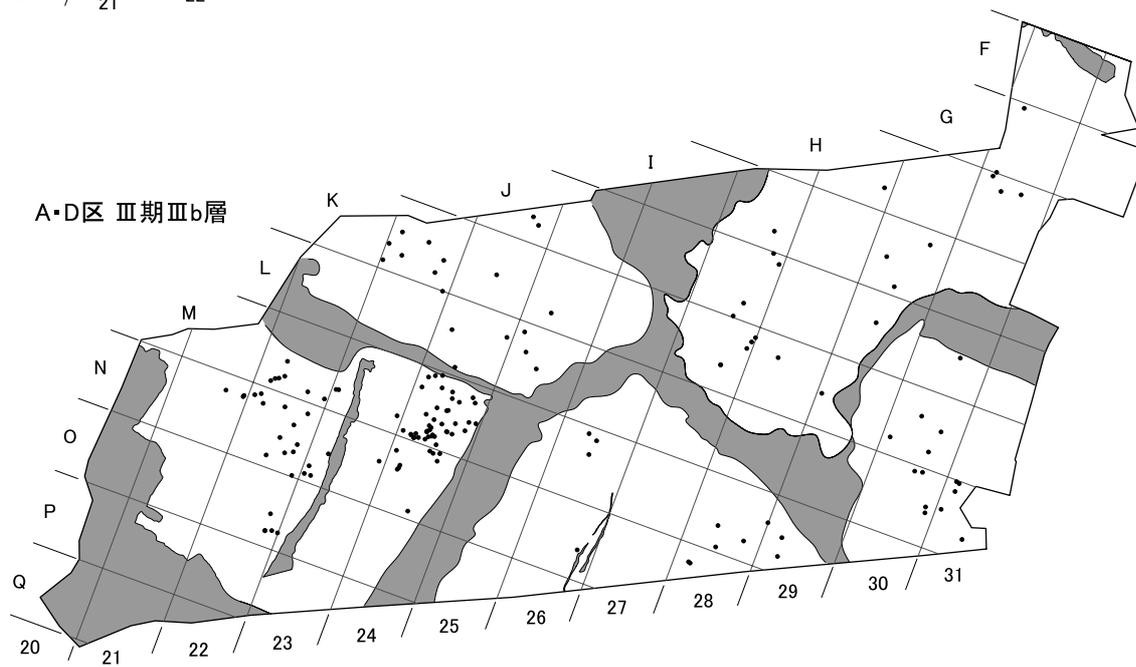
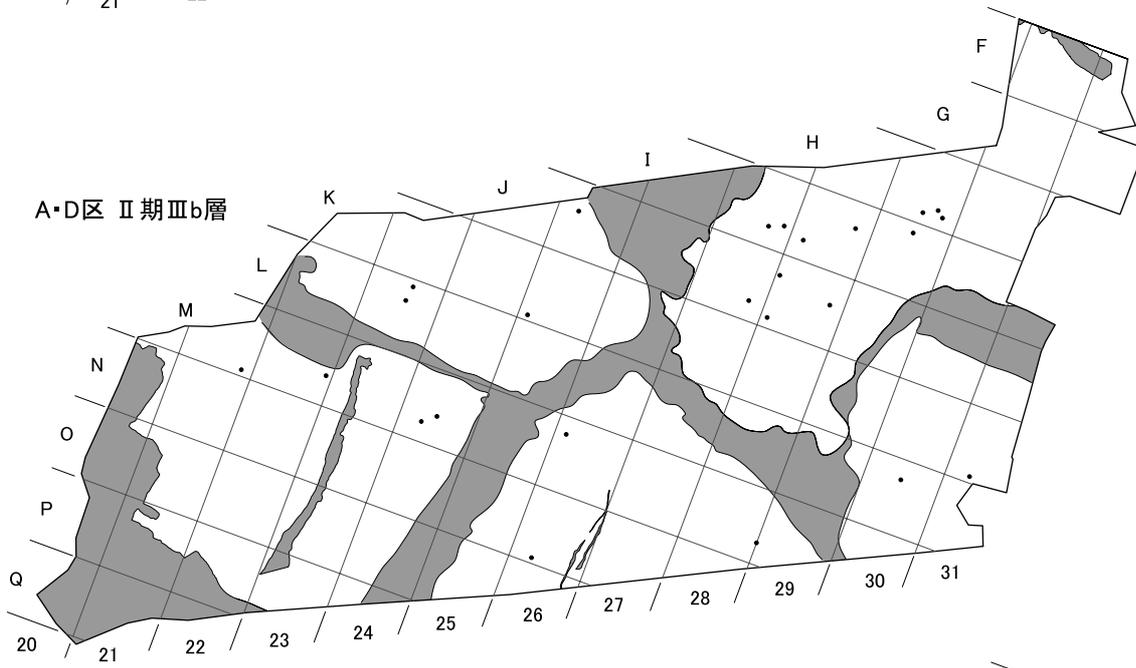
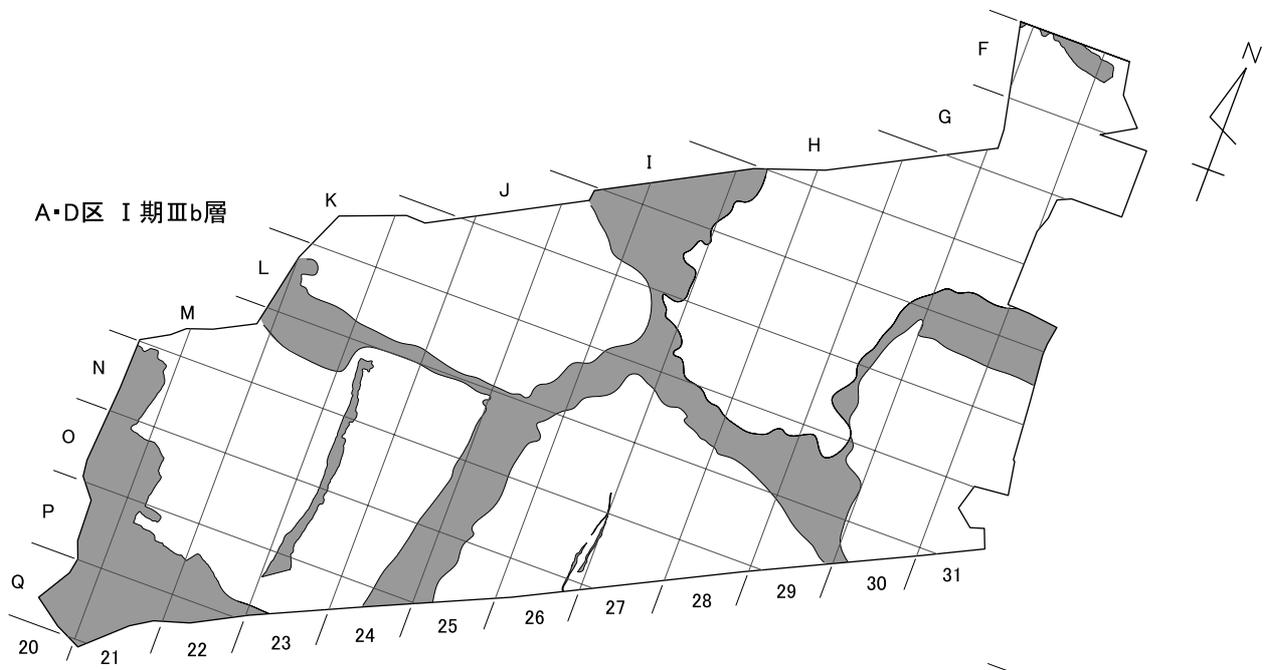
B·C区 II期Ⅲb層



B·C区 III期Ⅲb層

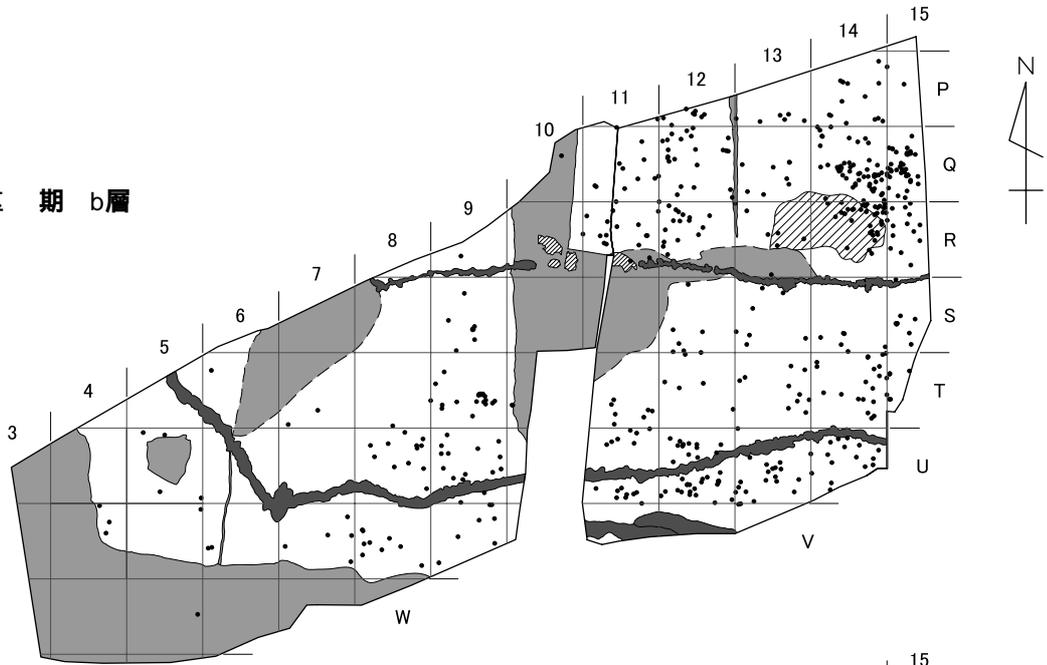


第286图 B·C区时期别分布① (S = 1/800)

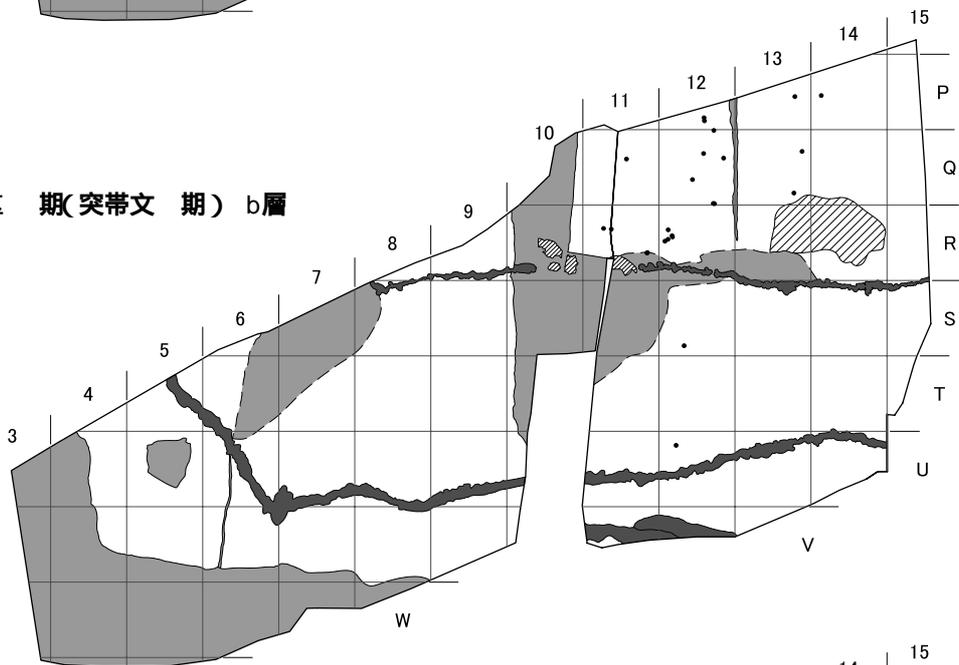


第287图 A·D区时期别分布① (S = 1/800)

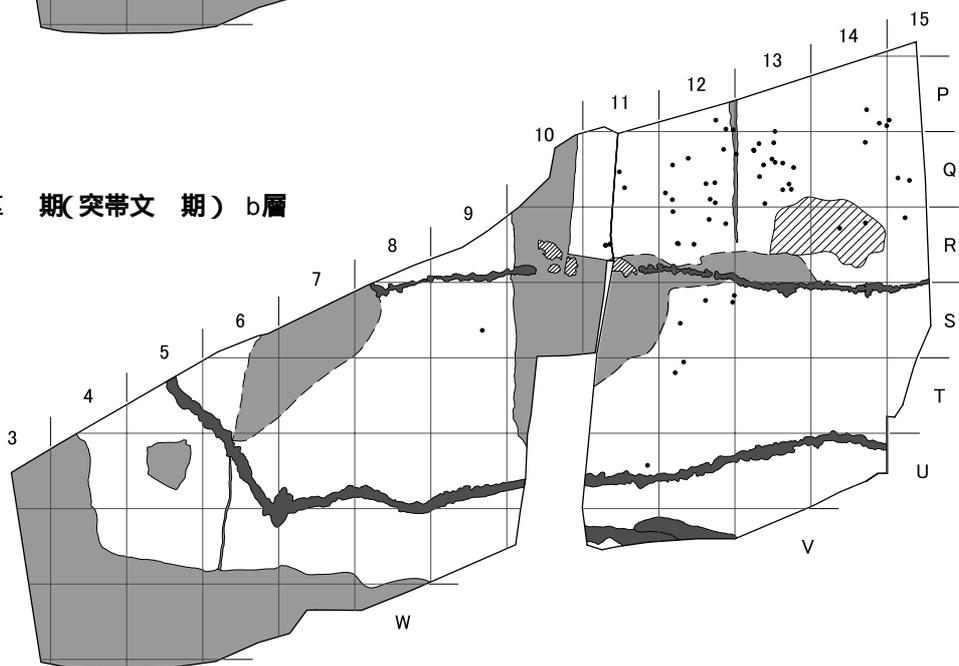
B·C区 期 b層



B·C区 期(突带文 期) b層

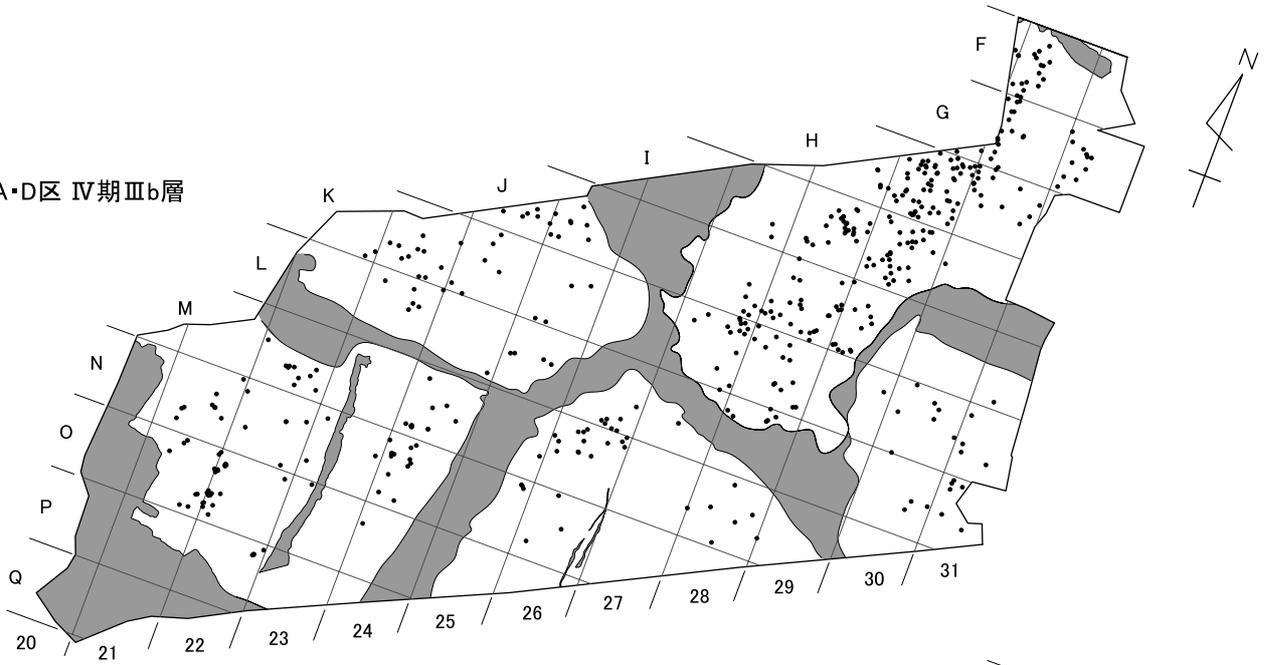


B·C区 期(突带文 期) b層

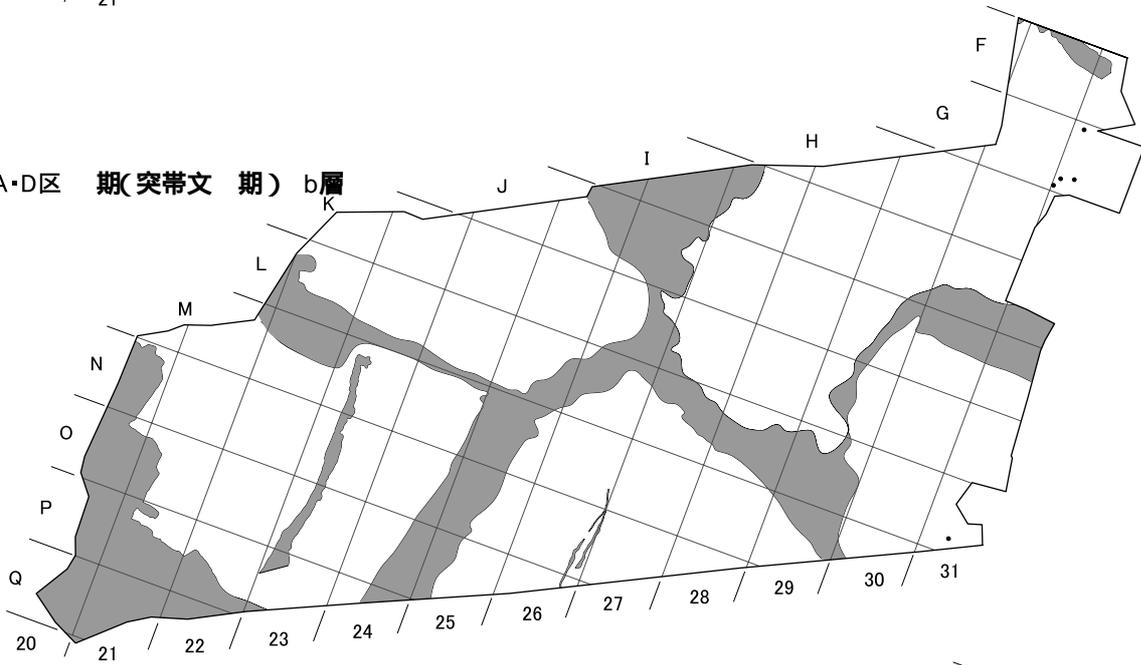


第288图 B·C区时期别分布② (S = 1/800)

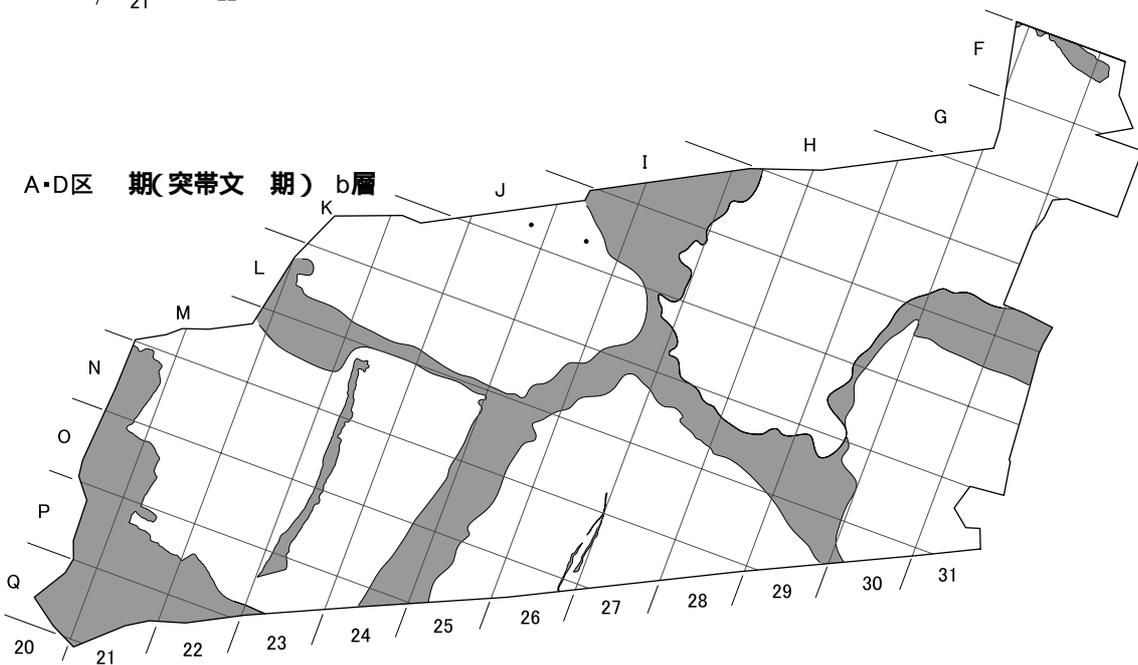
A・D区 IV期Ⅲb層



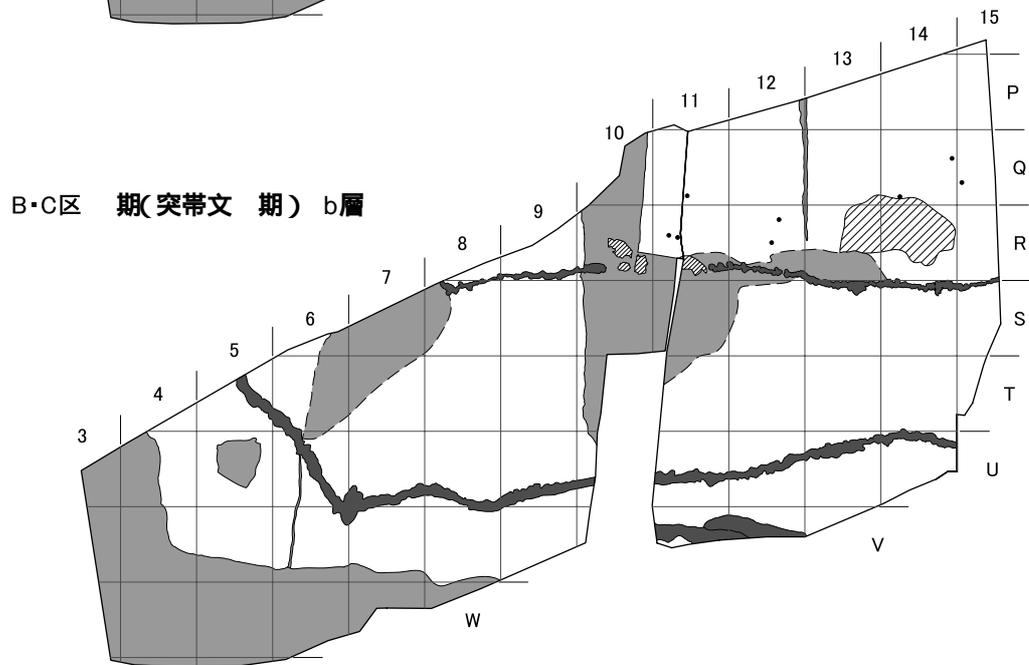
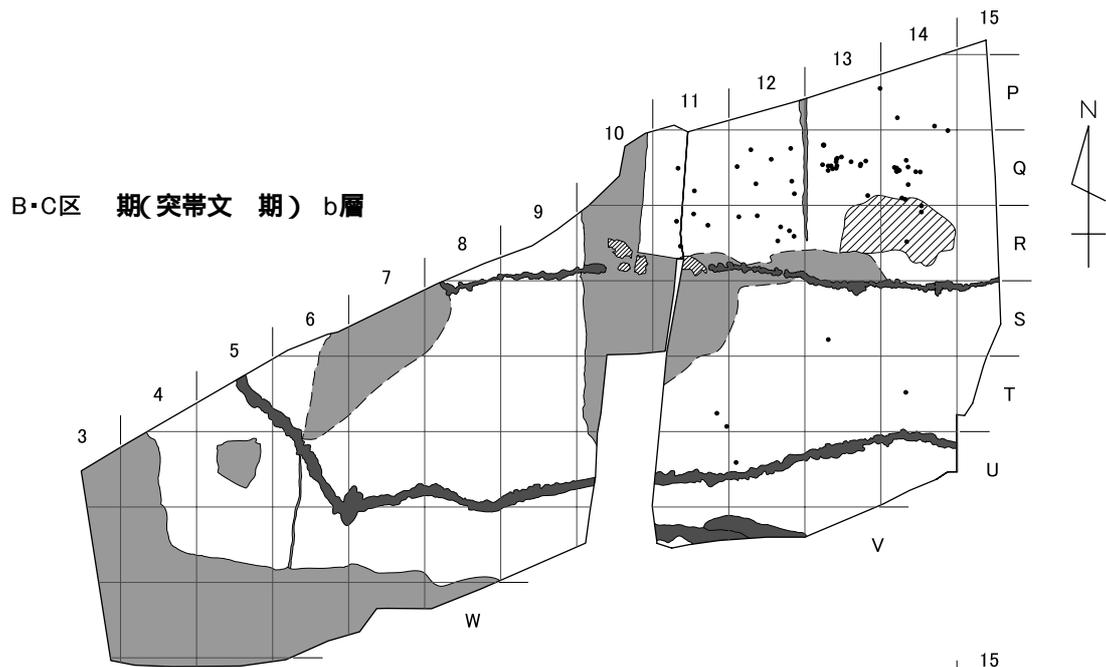
A・D区 期(突帯文 期) b層



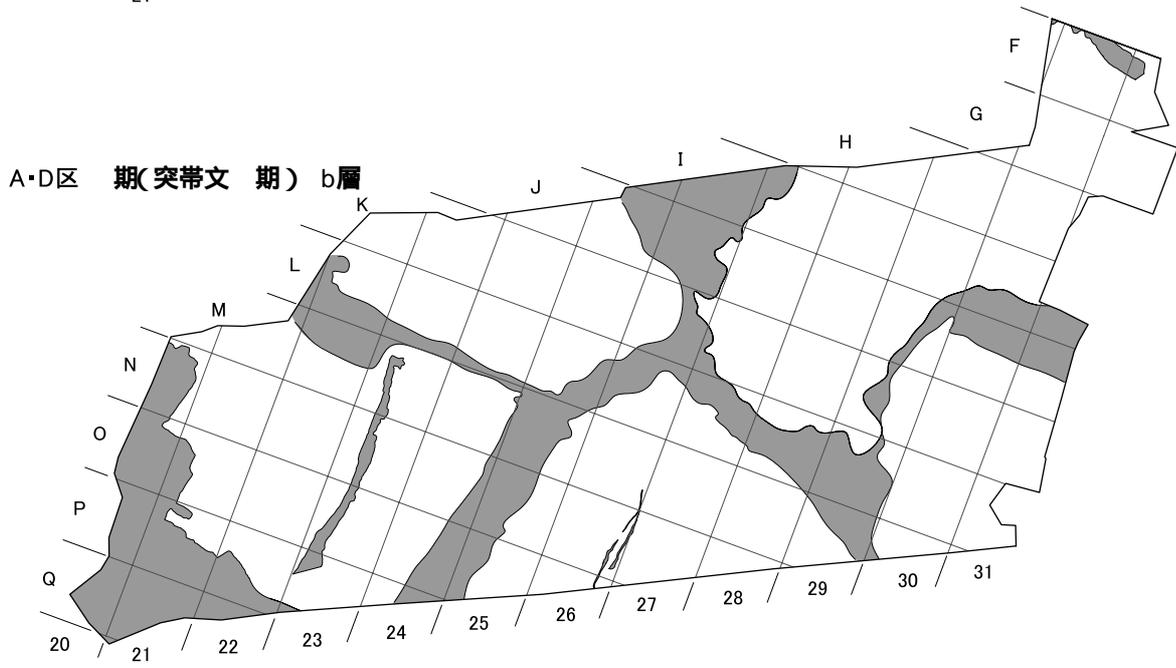
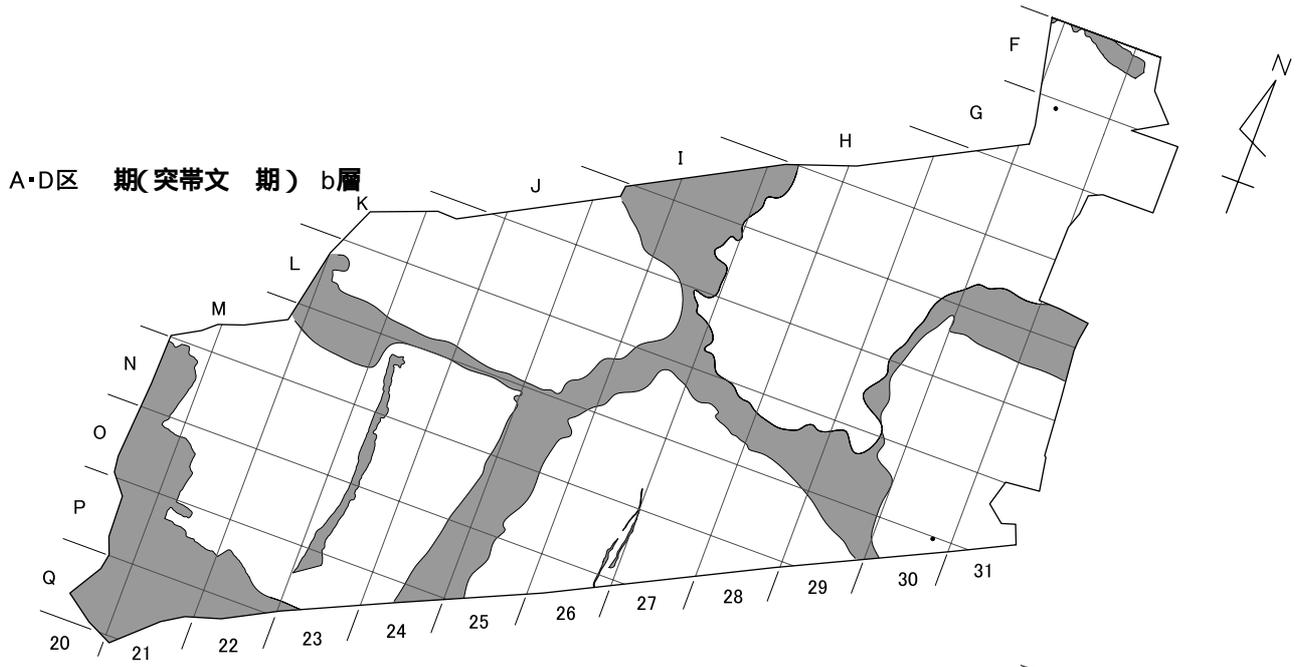
A・D区 期(突帯文 期) b層



第289図 A・D区時期別分布② (S = 1/800)



第290図 B・C区時期別分布③ (S = 1/800)



第291图 A·D区时期别分布③ (S = 1/800)

## 第2節 石器について

権現脇遺跡では、Ⅴ b層から縄文時代早期中葉～後葉の石器群が、Ⅲ a層・Ⅲ b層から縄文後期～弥生早期にかけての石器群が発見された。以下では、本遺跡の主体であるⅢ a層・Ⅲ b層出土石器群の組成を中心に、調査成果を整理しておきたい。

### 縄文時代早期の石器群について

縄文早期の土器に伴う石器群は主にD区のⅤ b層から出土した。器種的には基部に逆「U」字状の深い抉りを施した長身形の鍬形鍬が多く、柏原型石核・石匙・台形状削器など該期に特徴的な器種が見られる。石材は黒曜石と無班晶質玄武岩を用いているが、黒曜石は暗灰色の針尾島系と考えられるものが大半で、黒色黒曜石を多用するⅢ a層・Ⅲ b層の石器群とは対照的である。

分布の中心はD区で、Ⅴ b層が残っていないA～C区では断片的な遺物が確認されたに過ぎない。資料数が少ないため詳細は不明だが、石鍬と削器類を主体とする石器組成で、器種的偏在が強いことから定住の様相は考えにくい。狩猟場など一時的な利用の痕跡を示しているようである。早期として報告した資料には旧石器的なものも見られたが、ナイフ形石器などの定型石器は確認できなかった。

### 縄文時代後期～弥生時代早期の石器群について

Ⅲ a層・Ⅲ b層の出土資料は、権現脇遺跡の主体をなすものである。大部分は縄文時代晩期を中心とする時期と考えられるが、伴出土器を考慮すると縄文時代後期末～弥生時代早期の時間幅で捉える必要がある。Ⅲ a層・Ⅲ b層出土の石器群は、第Ⅲ章第4節で述べたように大半をドットマップ遺物として取り上げており、その地区別・層位別数量は第55～59表に示した通りである。以下では集計表とグラフに基づいて、石器群の全体像を簡単にまとめておきたい。

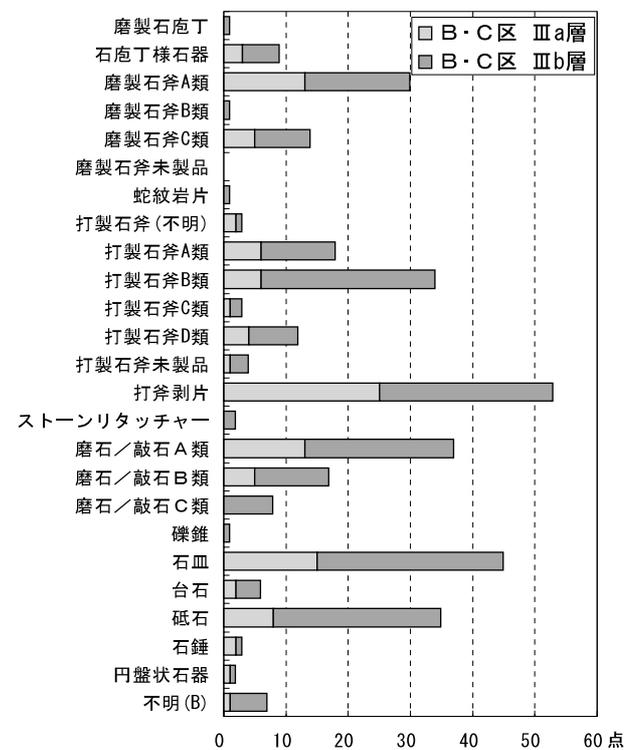
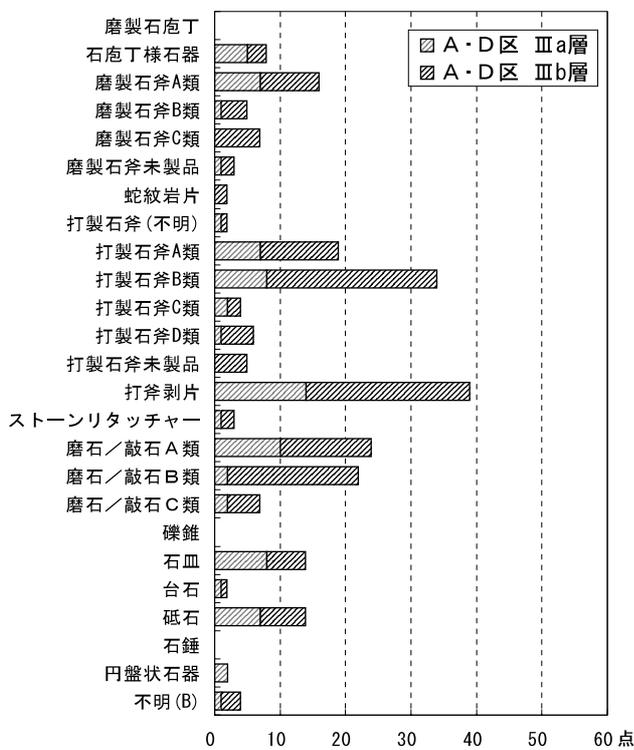
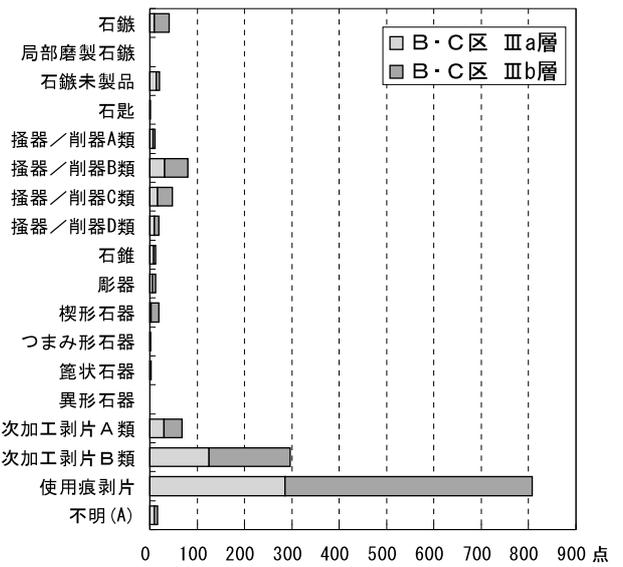
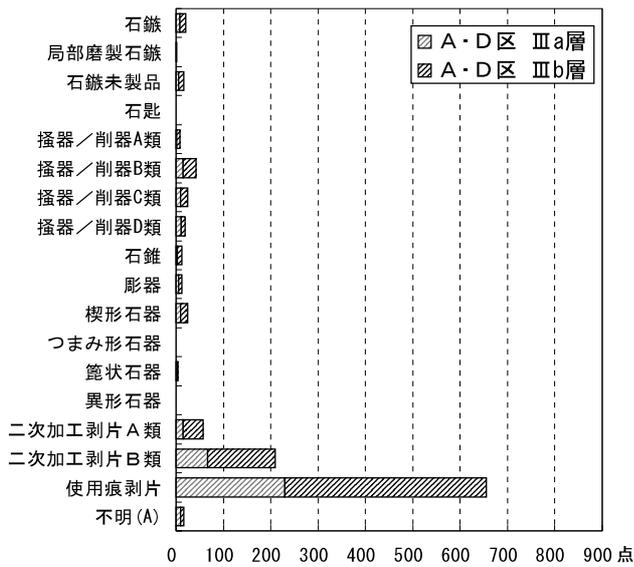
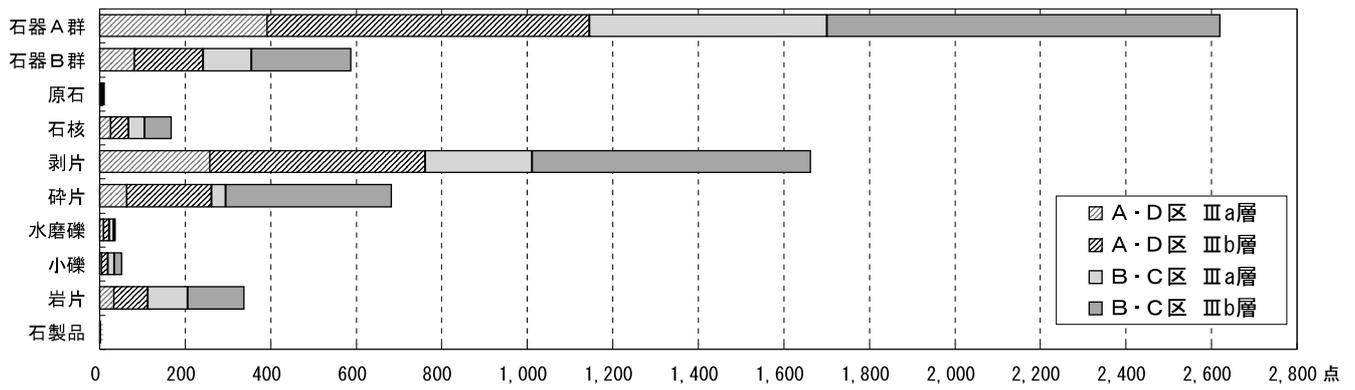
第292図は第57表から作成した石器組成グラフで、上段が大別器種、中段が剥片素材石器群(A群)の各器種、下段が礫・岩片素材石器群(B群)の各器種の構成を示している。左はA・D区、右はB・C区である。このグラフは全器種を対象としているため全体の傾向は把握しやすいが、逆に100点以下の器種では差異が現れにくい。この問題を回避するために作成したグラフが第293図である。同図中段は、剥片素材石器群(A群)から使用痕剥片・二次加工剥片B類・不明(A)を除外したもので、下段は礫・岩片素材石器群(B群)から打製石斧剥片と不明(B)を除外している。上段のグラフは、基本的に中段・下段のデータと同一だが、剥片素材石器群(A群)から数量の多い二次加工剥片B類と使用痕剥片を独立させて追加し、水磨礫・小礫・岩片・石製品を除外したものである。

### 全体の石器組成について

まず第292図の上段から全体を概観しておこう。量的に最も多いのは、剥片素材石器群(A群)で、計2,621点を数える。原石・石核・剥片・砕片を加えると5,148点で、全体(6,166点)の83.49%を占める。石材別では黒曜石A類4,031点、黒曜石B類80点、黒曜石C類11点、無班晶質玄武岩1,020点、その他6点で圧倒的に黒曜石A類の利用が多く、無班晶質玄武岩との比率は約4:1となる。

礫・岩片素材石器群(B群)の総数は588点で、全体に占める比率は9.54%、水磨礫・小礫・岩片を加えた場合でも1,017点で、総数に対する比率は16.49%に留まる。

このように権現脇遺跡の石器群は、黒色良質の黒曜石A類を多用した剥片素材石器群とそれに関連する原石・石核・剥片・砕片が全体の8割強を占めている点に特徴がある。



第292図 権現脇遺跡の石器組成グラフ① (全器種)

## 剥片素材石器群について

権現脇遺跡における剥片剥離は「十郎川型剥片剥離技術」(橘1978)と呼ばれるもので、打面転移を頻繁に繰り返しながら中型～小型の不定形剥片を大量に生産している。それは黒曜石製の石核で顕著に認められ、残核というべき状態に至るまで徹底的に剥離されている例が多い。剥片石器や剥片には長さ5cmを超えるものも見られるが、このような比較的大型の縦長剥片に対応するような剥離面を残す石核は皆無に近い。剥片剥離の進行に伴って初期段階の作業面が失われているからである。接合資料に乏しいため石核の検討から剥片剥離作業のプロセスを復元することは困難だが、残された剥片や剥片石器の状態に基づき、ある程度の推察は可能である。簡単に整理しておこう。

黒曜石の場合、鶉卵～鶏卵～拳大の原石が使用されているようである。第128図22は長さ6cmを超える縦長剥片を素材とする彫器で、背面側に先行する数枚の縦長剥離痕が残されていることから、原石は8～10cmを超えるサイズであったと推定される。背面には粗雑ながらもクレストッド調整が施されており、縦長剥片の剥離に先立って誘導稜線を準備したものであると思われる。第153図206・210は、原石の直線的な稜線を活用した例で、縦長剥片の剥離を容易にするための配慮と言えよう。第135図68は背面側に連続的な縦長剥離痕を残しているが、最終的には横位の撃打で剥離されており、90°の打面転移を試みた初期状態の資料と考えられる。こうした資料の存在から、拳大の原石の場合、最初に縦長剥片を剥離し、それが困難になった段階から90°あるいは180°の打面転移を繰り返して不定形剥片の剥離へ移行したものであると思われる。縦長剥片の剥出が可能かどうかは原石のサイズや形状に規制されるが、それが得られた場合には、削器・彫器・使用痕剥片などに利用されることが多い。鶉卵～鶏卵大の場合、第151図194のように細石刃状の縦長剥片を連続的に剥離している例も見られるが、大半は最初から不定形剥片を剥出しているようである。総じて自然面や先行する剥離面を打面とするものが多く、また限界まで剥片剥離を実施しているため小型で最終剥離面の長さが2cmに満たないものも少なくない。

剥片素材石器群のなかで、量的に多いのは使用痕剥片と二次加工剥片B類である。前者は計1,466点(うち黒曜石A類1,254点=85.5%)、後者は計509点(同485点=95.3%)を数える。それぞれを剥片素材石器群+原石+石核+剥片の合算値(計4,465点:碎片を除く)に対する比率で見ると、使用痕剥片=32.83%、二次加工剥片B類=11.40%で両者の合計(計1,975点)は44.00%となる。もちろん微細剥離痕=使用痕という確証はなく、偶発剥離を誤認している例が少なからず含まれている可能性は否定できない。二次加工剥片B類も一部に偶発剥離や使用痕を含んでいる可能性がないわけではないが、その危険率は使用痕剥片に比べて低く、大部分は人為的な二次加工と考えられる。

前述したように剥片素材石器群+原石+石核+剥片の合計は4,465点である。これを[原石+石核]と[二次加工剥片B類・使用痕剥片を含む剥片素材石器群+剥片]に大別して見ると[12+168=180]:[2,621+1,664=4,285]となる。剥片総量である後者の値を石核数(168点)で割ると1:25.51で、石核1点あたり25枚以上の剥片が生産されていることになる。石材別に同様の計算を試みると黒曜石A類では1:23.68、無班晶質玄武岩では1:32.70である。無班晶質玄武岩の数値が高いのは、原石(あるいは石核の素材剥片)が黒曜石に比べて大きいことに起因しているのであろう。

次に代表的な剥片石器である石鏃や削器などの比率を見ておこう。剥片総量(4,285点)を母数とすると[石鏃+局部磨製石鏃+石鏃未製品]=計107点(2.50%)、[石匙+搔器/削器類(A～D類)]

= 計263点 (6.14%), [石錐 + 彫器 + 楔形石器 + つまみ形石器 + 籠状石器 + 異形石器 + 不明(A)] = 計149点 (3.48%), [二次加工剥片A類] = 計127点 (2.96%) となり, 合計でも646点 (15.08%) に過ぎない。一方, 二次加工剥片B類は計509点 (11.88%), 使用痕剥片は計1,466点 (34.21%), 剥片は計1,664点 (38.83%) で, その合計は3,639点 (84.92%) となる。つまり生産された剥片の総量に対して二次加工を施したものが15.08% + 11.88% = 26.96%, 使用痕(と思われる微細剥離痕や摩耗痕)のあるものが34.21%, 剥片のまま残されたものが38.83%という比率である。この数値は, 剥片生産量の多さを示すと同時に, 石鏃や削器など定型石器の素材として有効に活用されていないことを示しているように見える。従来, 西北九州における該期の剥片剥離は, 非効率的・非経済的・乱暴であるといった負のイメージで語られることが多い。たしかに石核は執拗なまでの剥片剥離が行われていることが多く, なかには剥片剥離作業というより原石の破碎としか思えないようなものさえある。その結果生み出された剥片の多くは長さ2~3cm以下の小型・不定形であり, 小型石鏃や石錐などごく一部の器種の素材にしかなり得ない。ここで問題となるのが二次加工剥片B類の存在である。

本遺跡で二次加工剥片B類とした器種は, 縦長剥片や不定形剥片を素材として, 側縁や末端の一部に急角度加工を施したものである。素材は長さ2~3cm以下の小型品が多く, 1cmに満たないものも見られる。二次加工は主要剥離面側から背面側に施されているものが大半を占め, なかにはナイフ形石器のブランディング加工と見紛うようなものもさえある。全体に局部的・限定的な加工例が多く, 注意深く観察しないと見落としてしまいそうなものも少なくない。正確な数量としては示せないが, 使用痕と思われる微細剥離痕が認められるものも多く, 擦痕(線状痕)や摩耗痕が観察される例もある。こうした特徴から考えると二次加工剥片B類が人為的に加工され, 使用された剥片石器であることは確実と思われる。

本遺跡は普賢岳山麓の標高200mを超える火山性扇状地に占地し, 縄文時代晩期~弥生時代早期を中心とする時期に形成されており, 石器組成には一定量の搔器/削器D類・打製石斧・石庖丁様石器・磨石・石皿などがある。搔器/削器D類は, 大部分が無班晶質玄武岩製の大型剥片を素材とするもので, 第131図46腹面のように顕著なポリッシュが認められるものがあることから, 収穫具的な用途に供された可能性を想定することができる。打製石斧や石庖丁様石器なども農耕的色彩を強く示唆する器種である。二次加工剥片B類が権現脇遺跡の石器群のなかでも量的に最も多い剥片石器であることを考えれば, 搔器/削器D類・打製石斧・石庖丁様石器ともに農耕的な生業活動に関与した器種である可能性も想定される。その場合, いかなる用途に供されたのであろうか。

繰り返しになるが, 二次加工剥片B類は黒曜石を多用する1~3cm程度の小型剥片石器である。加工痕を見逃せば碎片に分類されてしまいそうなほど小さなものもあり, 単体での使用は考えにくい。使用痕剥片では, 稜線やバルブ付近に擦痕・摩耗痕が残されている例があることから, 二枚の板の間に挟んで使用された可能性も考えられる。トルコの民族例には櫛状木板の裏面に多量のフリント製石刃を埋め込んだ脱穀具があり, こうした組み合わせ石器としての利用法を想定する必要があるのかも示れない。現状では使用痕分析を実施していないため二次加工剥片B類の機能・用途に言及できない。しかし今回の調査により, 徹底的な剥片剥離より生産された大量の小型・不定形剥片を二次加工剥片B類の素材として活用していることは明らかとなった。このことは西北九州縄文晩期の遺跡で普遍的に見られる徹底的な剥片剥離の背景を理解するうえで, 重要な意味を持つと思われる。

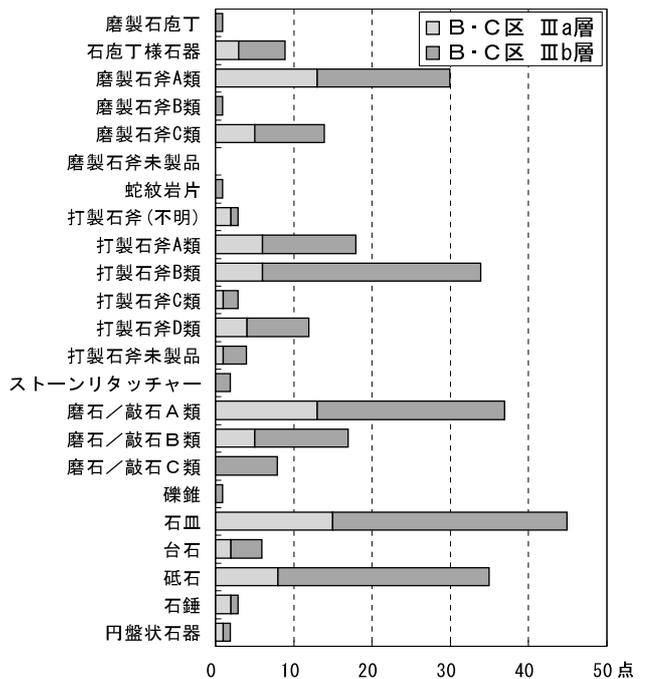
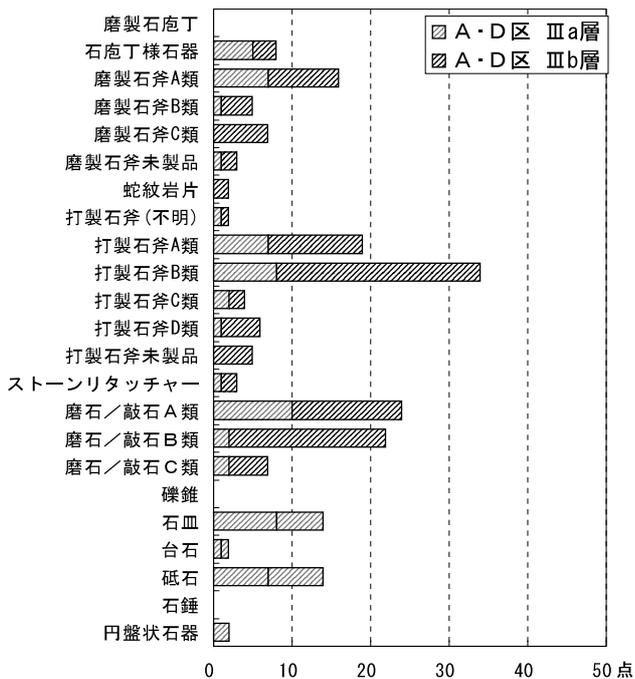
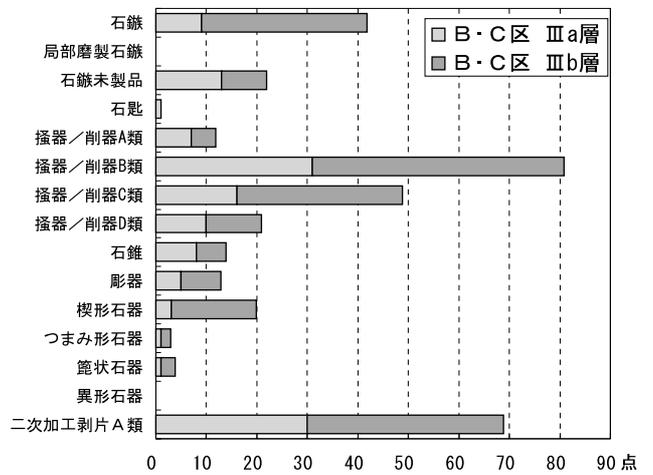
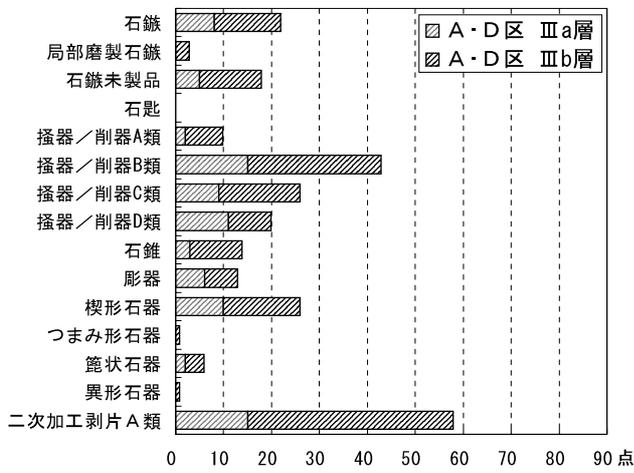
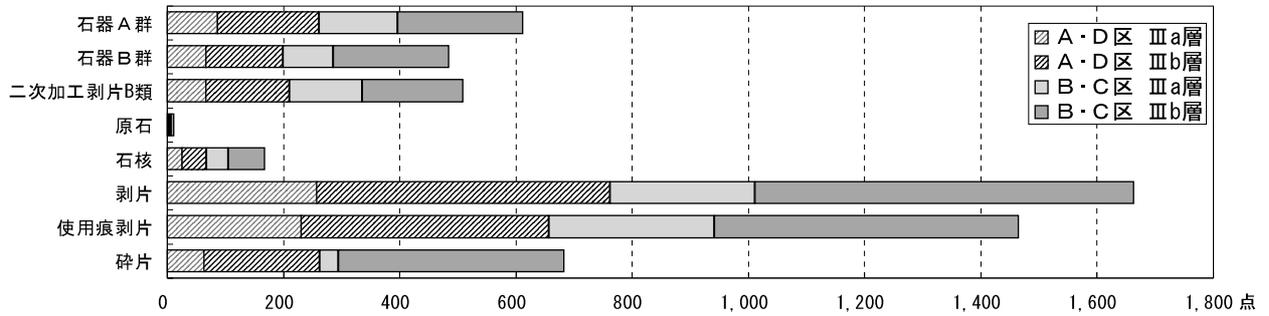
## A・D区とB・C区の差異について

土器から見た場合、A・D区 = 古相、B・C区 = 新相という時間差が想定できることはすでに触れたが、石器ではどうであろうか。両区を比較すると、全体量はB・C区が多いものの組成自体は比較的近似した構成を示している。第292図上段ではB・C区の碎片と岩片が多さが目立つが、これはB区から調査を開始したため、より慎重な取り上げを行ったことによる調査時のバイアスである。

剥片素材石器群の大勢は近似的だが、B・C区では打製石鏃がA・D区の二倍近くに増加している。にも関わらずA・D区で3点出土している局部磨製石鏃がB・C区で全く見られないことは興味深い。両区の時間差を考慮すると、A・D区の時期とB・C区の時期との間に局部磨製石鏃が衰退・消滅した可能性を示唆しているのであろう。搔器/削器類は、A類とD類がほぼ同数であるのに対し、B類・C類は倍増している。搔器/削器B類は緩角度加工の刃部を有する一般的な削器で、解体具とすれば、B・C区での石鏃増加（狩猟活動の活発化）に連動する変化と考えることができる。篋状石器は縄文時代後期後葉を主体とする大野原遺跡（諫見編2001）で70点を超える量が出土しているが、本遺跡ではA・D区でも6点に過ぎず、B・C区は3点とさらに半減している。石匙はB・C区で1点出土したのみで、A・D区では出土しなかった。単なる偶然の可能性もあるが、いずれにせよ石器組成全体のなかで石匙の占める比率は極端に低い。逆に異形石器はA・D区のみ出土でB・C区には見られない。

礫・岩片素材石器群では、B・C区における磨製石庖丁と礫錐の出土が特筆される。磨製石庖丁は擦切穿孔を施したもので、長崎県内では北有馬町原山遺跡と大村市黒丸遺跡に続く3例目となった。礫錐は砂岩製の小型棒状水磨礫を素材とするものでC区から出土したが、加工対象と考えられる円形穿孔タイプの石庖丁は発見されなかった。石庖丁様石器はA・D区 = 8点、B・C区 = 9点とほぼ同数で、両区間に差異は見られない。収穫具的な機能を有すると考えられる搔器/削器D類もA・D区 = 20点、B・C区 = 21点という数値である。磨製石斧はB・C区での変動が目立つ器種である。伐採具と考えられる磨製石斧A類の増加が著しく、扁平幅広で刃部のみを研磨したC類も増加しているが、逆に加工具（ノミ形）と考えられるC類は激減する。磨製石斧未製品はA・D区で3点出土したのに対し、B・C区では皆無であった。打製石斧はB・C区でD類が増加しているものの、全体としては両区ともに近似している。打製石斧未製品や剥片類も同様である。石皿は、A・D区の14点に対してB・C区では45点が出土している。いずれも破片数で個体数での比較ではないが、両区とも同様の石材を利用しており、被熱や凍結で破断したと考えられる資料である。石皿と連動するように磨石/敲石A類（滑面のみを有する磨石）や砥石も同様の増加を示しており、B・C区では砂岩製や安山岩製の大型石器の多さが目立っている。石錘はB・C区だけに見られる器種だが、C区から3点出土したのみで、A・D区とB・C区を比較する上での指標になる器種ではない。

以上述べてきたように、権現脇遺跡A・D区とB・C区の石器群は全体として近似した組成を示すが、B・C区では擦切穿孔の磨製石庖丁や礫錐など、大陸系磨製石器とその工具が新たに出現している点に大きな特徴がある。また第171図307の石材は朝鮮半島産のアマゾナイト（天河石）である可能性が高くB・C区の時期における大陸系文物の流入を示している。B・C区では打製石鏃・搔器/削器B類・磨石・石皿などが増加しており磨製石斧の構成も変化しているが、打製石斧や収穫具と考えられる搔器/削器B類・石庖丁様石器には、大きな変化が見られない。二次加工剥片B類はA・D区の211点からB・C区で298点と増加しているが、両区とも石器組成の首位を占める器種である点は変わらない。



第293図 権現脇遺跡の石器組成グラフ② (一部除外)

## 第 章 総 括

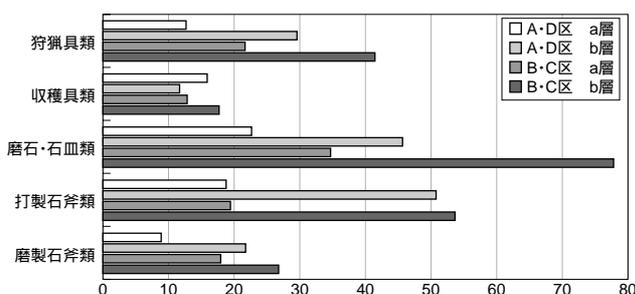
権現脇遺跡は雲仙普賢岳東山麓に営まれた遺跡である。今回の調査において本遺跡は縄文時代早期から現代に至るまで断続的に造営されてきたことが明らかとなった。

島原半島における縄文時代晩期～突帯文期の遺跡は「ハチマキゾーン」とも呼ばれる200m前後の標高域に、広範囲に造営されることがこれまで指摘されてきた。例を挙げれば、礪石原遺跡(島原市)、山ノ寺梶木遺跡(深江町)、原山遺跡(北有馬町)などがある。権現脇遺跡の主体をなす時期も縄文時代晩期を中心とする縄文時代後期から弥生時代前期であるが、比較的長期にわたって、水無川右岸の緩やかな傾斜地に標高190m～280mの間に東西約1.3km、南北200～300mの範囲に広がっており、前述の遺跡と同様の様相を示す。

石器における主要器種を「狩猟具類(打製石鏃+局部磨製石鏃+石鏃未製品)」、「収穫具類(搔器/削器D類+磨製石庖丁+石庖丁様石器)」、「磨石・石皿類(磨石/敲石(A～C類)+石皿+台石)」、「打製石斧類(打製石斧(A～D類)+打製石斧未製品)」、「磨製石斧類(磨製石斧(A～C類)+磨製石斧未製品)」の5つにまとめてグラフ化すると第294図になる。権現脇遺跡の石器組成は、縄文時代を通じて見られる狩猟具類や磨石・石皿類の他に、収穫具類や打製石斧類の出土が豊富であることを特徴とする。これは動物性食糧や根茎類・堅果類などの植物性食糧の利用に加えて、雑穀や穀物の栽培を植物性食糧獲得の手段として持ちえていたことを推察させる。それを裏付けるように土器の器面に残された種子圧痕の中にはイネも確認された。立地から見て水田施設等の存在は考えづらく、焼畑などの形態を採用していたことが考えられる。

また、アマゾナイト(天河石)製勾玉や擦り切り穿孔を施した石庖丁の存在は大陸文化の流入を考えると、注目すべき資料である。

今回の調査では眉山起源の火砕流を起因とする倒木痕も多く検出された。普賢岳の平成噴火の際には、1万回近くの火砕流が普賢岳の東斜面を駆け下り、降雨のたびに水無川・中尾川では土石流が発生した。遺跡周辺のみならず、深江町や隣接する島原市が大きな被害に見舞われたことは記憶に新しい。普賢岳をはじめとする雲仙山系の火山活動はときに近づくことさえ許されないほどの大きな制限を人類に加えたが、権現脇遺跡ではその合間を縫うように脈々と人類活動が営まれた。火山活動によって培われた肥沃な大地は、生活の基盤となって大きな恵みを人類に与えたのである。そういった意味で火山活動と人類活動の交差する地点、それが権現脇遺跡であったといえる。



第294図 権現脇遺跡の石器

### 【参考文献】

- 久原卷二 1994「地理的歴史的環境」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 藤尾慎一郎 1993「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集 国立歴史民俗博物館

# 圖 版



遺跡遠景（西から）

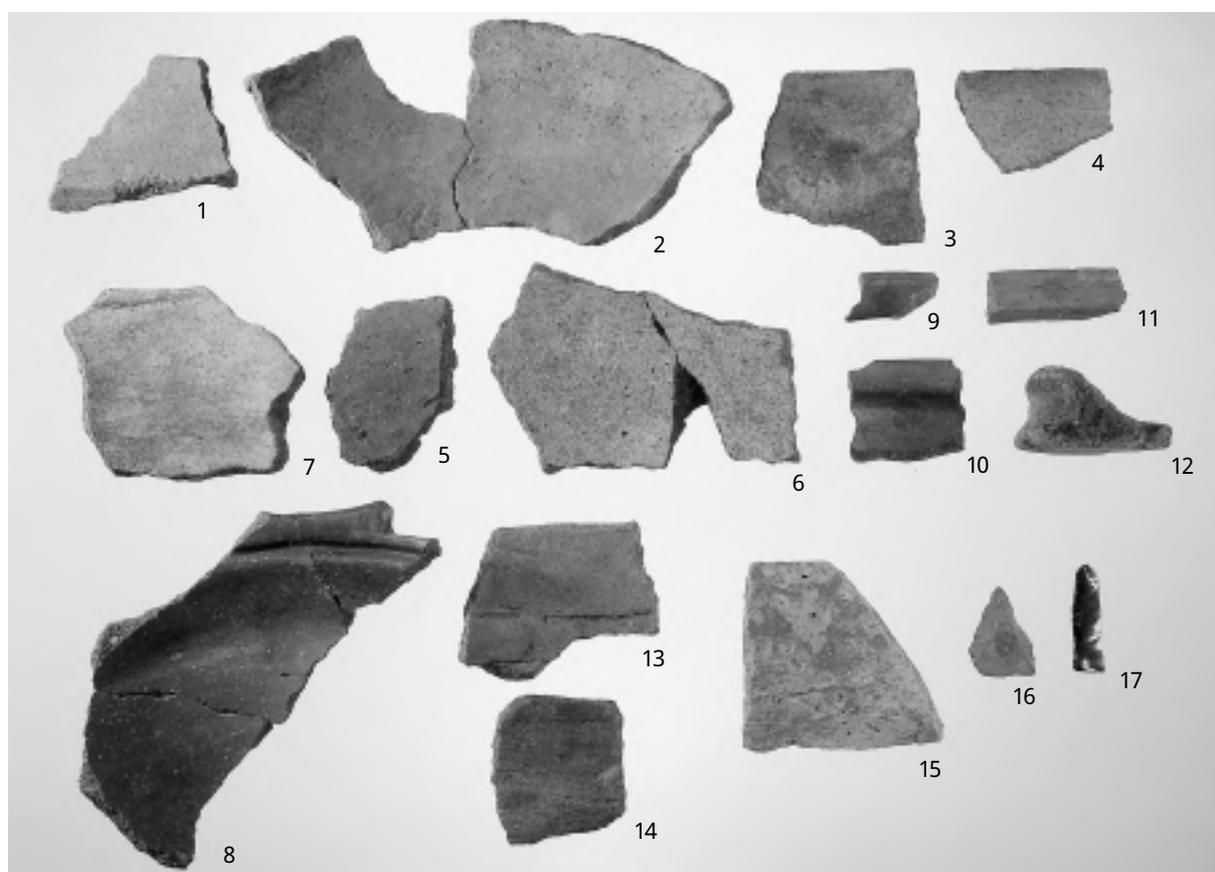
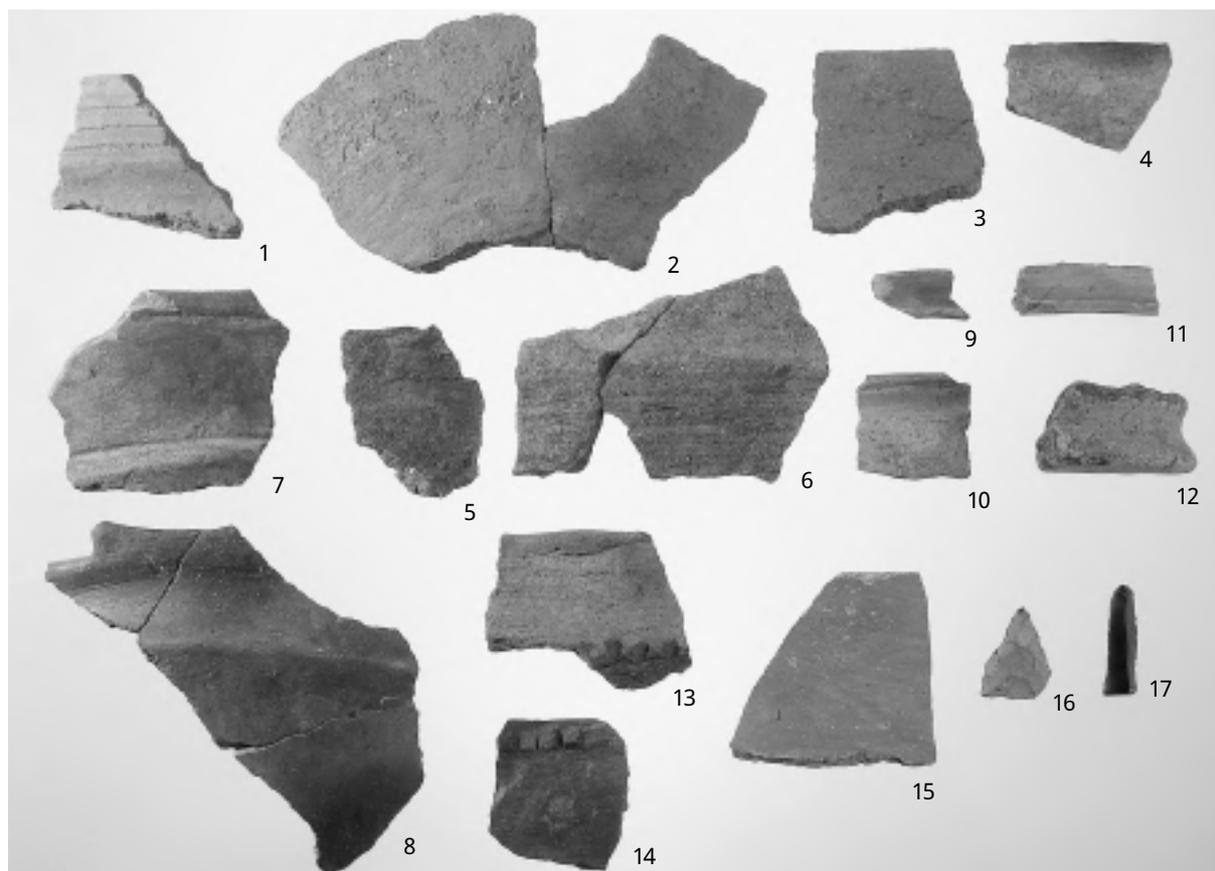


遺跡遠景（北から）

図版 2



調査風景・整理風景



範囲確認調査出土遺物

図版 4



D区G列北壁土層（南から）



D区東側露頭（南東から）



A区(A 5)Ⅳ層上面遺構検出状況(西から)



A区(A 3)Ⅳ層上面遺構検出状況(南から)

図版 6



A区(A 1・2)Ⅳ層上面遺構検出状況(西から)



A区(A 4)Ⅳ層上面遺構検出状況(西から)



A区(A 1)Ⅳ層上面遺構検出状況(南西から)



A区(A 2)Ⅳ層上面遺構検出状況(西から)

図版 8



D区Ⅵ層上面検出状況（南から）



D区Ⅵ層上面検出状況（北から）



C区Ⅳ層上面遺構検出状況（東から）



C区Ⅳ層上面遺構検出状況（西から）



B区Ⅳ層上面遺構検出状況（西から）



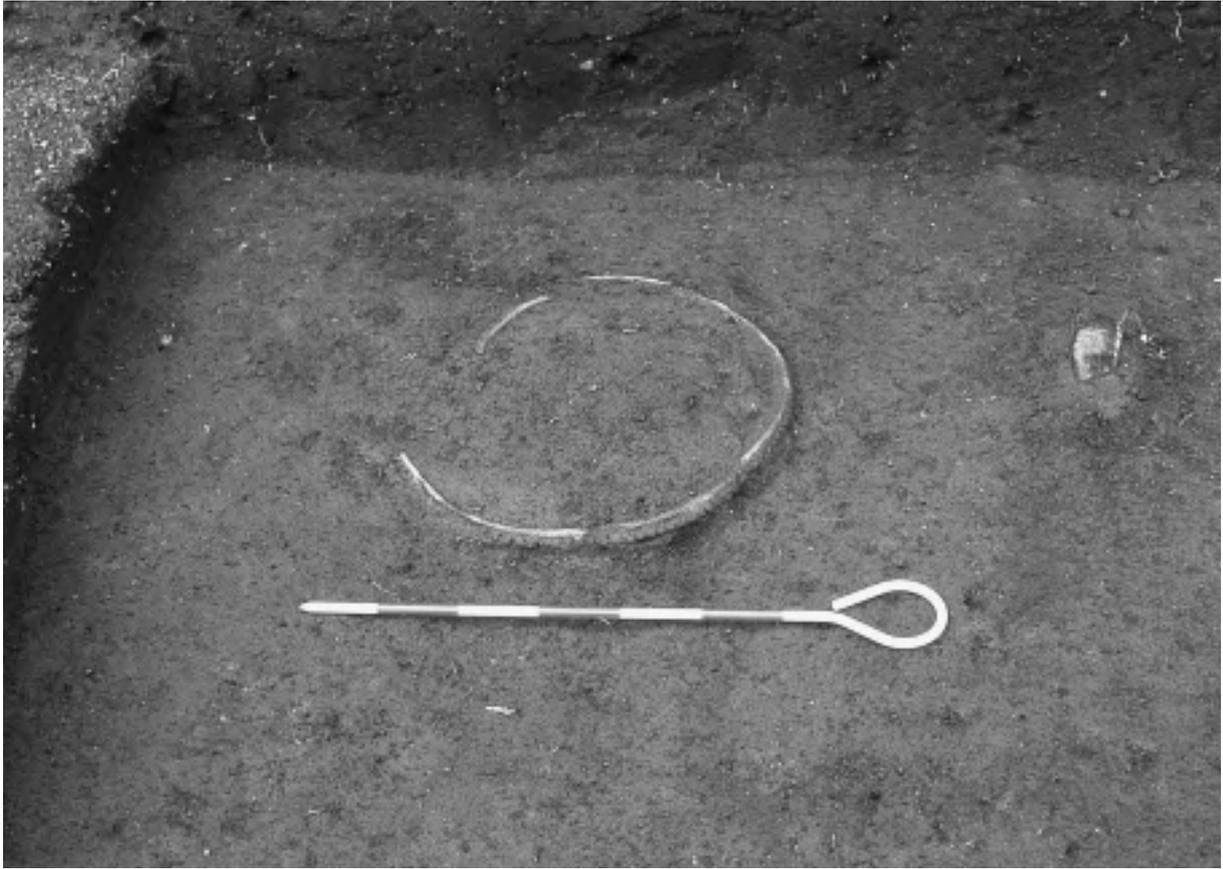
B区Ⅳ層上面遺構検出状況（北東から）



B区Ⅳ層上面遺構検出状況（西から）



B区Ⅳ層上面遺構検出状況（東から）



B区埋甕検出状況（東から）



B区埋甕検出状況（南から）



A区土坑1 検出状況(西から)



A区土坑2 検出状況(北から)



A区土坑墓検出状況（北から）



A区土坑墓検出状況（西から）



A区土坑墓検出状況（北から）



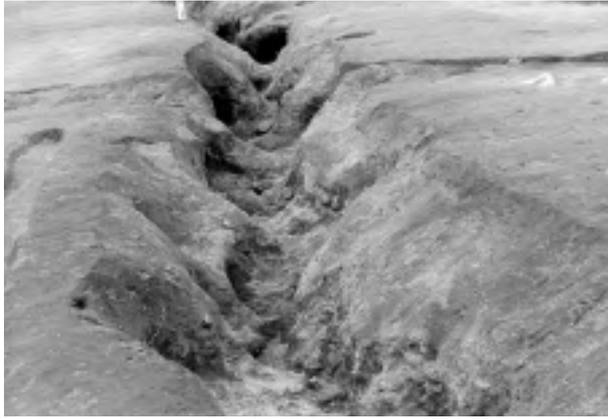
A区土坑墓検出状況（北から）



D区柵状水場遺構（北から）



D区円形状水場遺構（東から）



雨裂1 (東から)



雨裂1 (東から)



雨裂2 (東から)



雨裂2 (北から)



倒木痕



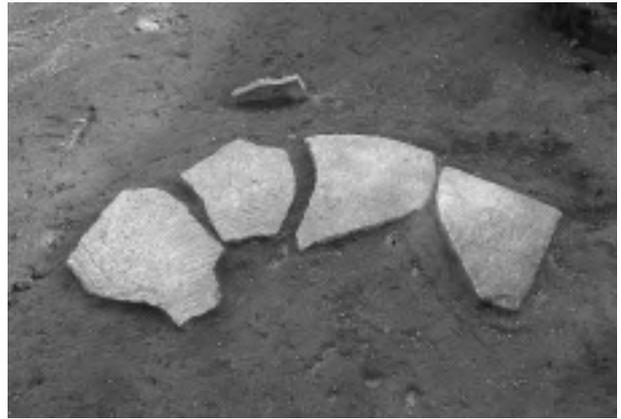
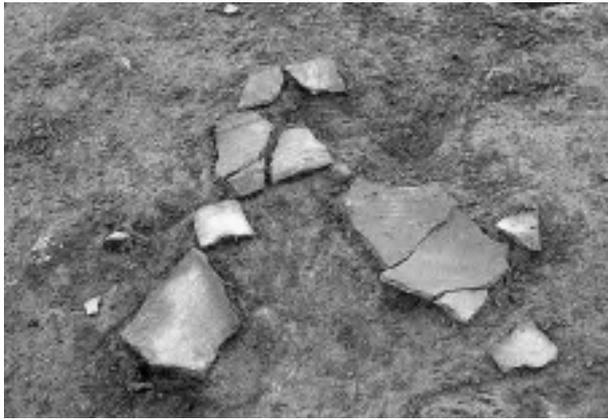
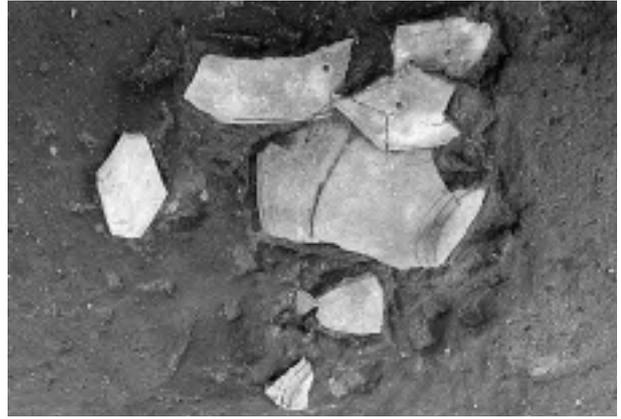
倒木痕



倒木痕



クズの根



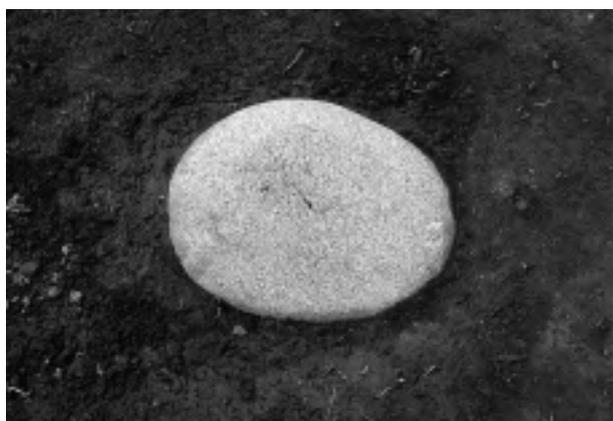
A区土器・土製品出土状況



A区石器出土状况



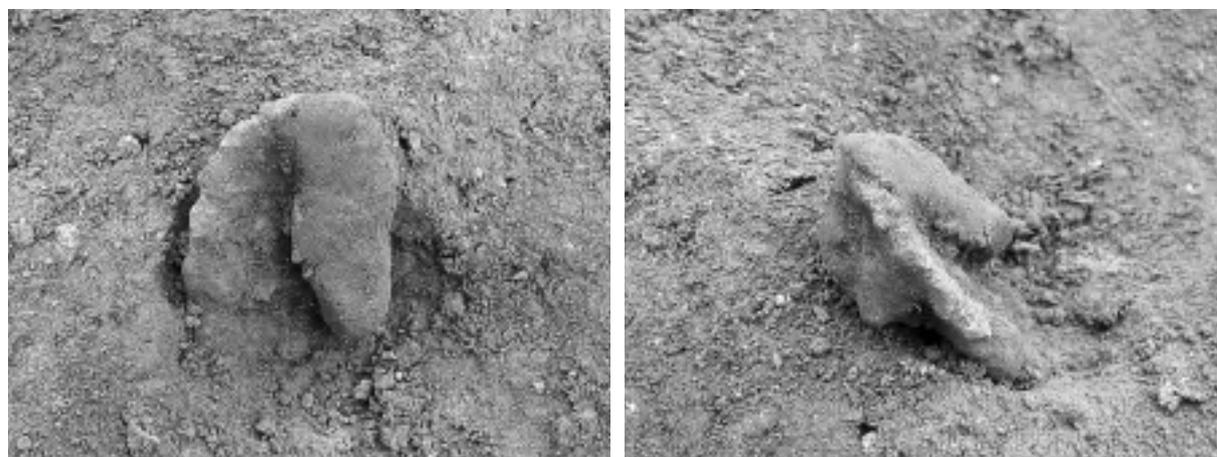
D区土器·石器出土状况



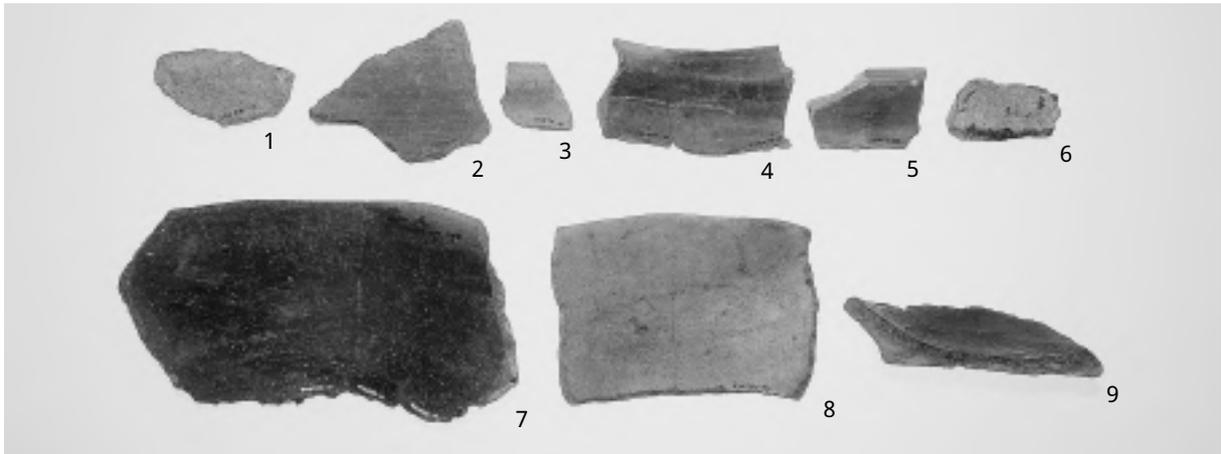
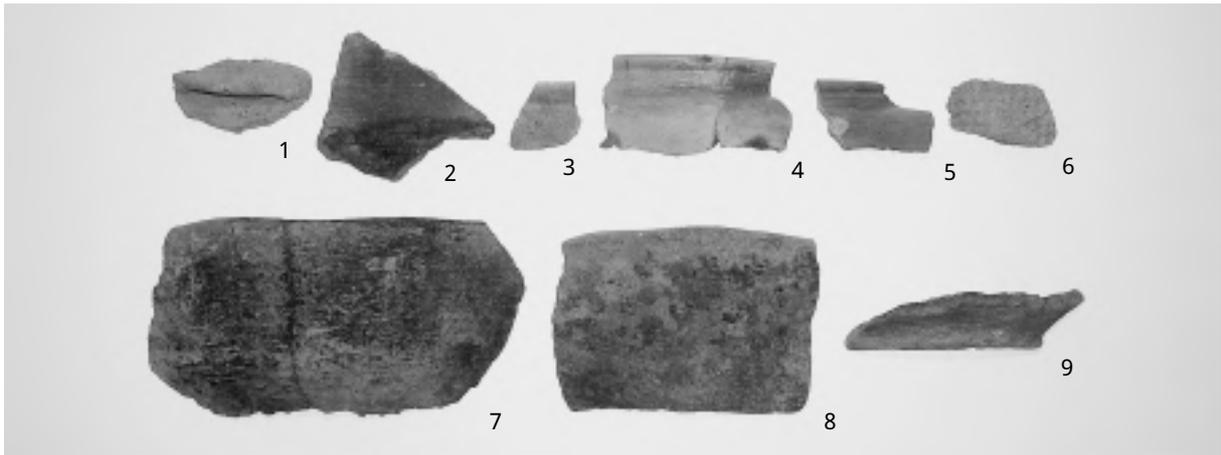
B区土器·石器出土状况



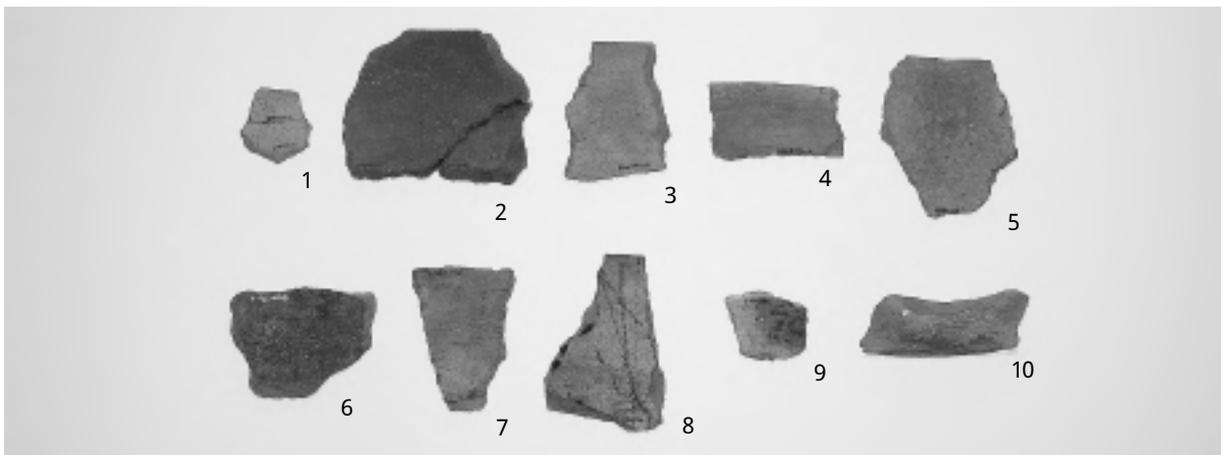
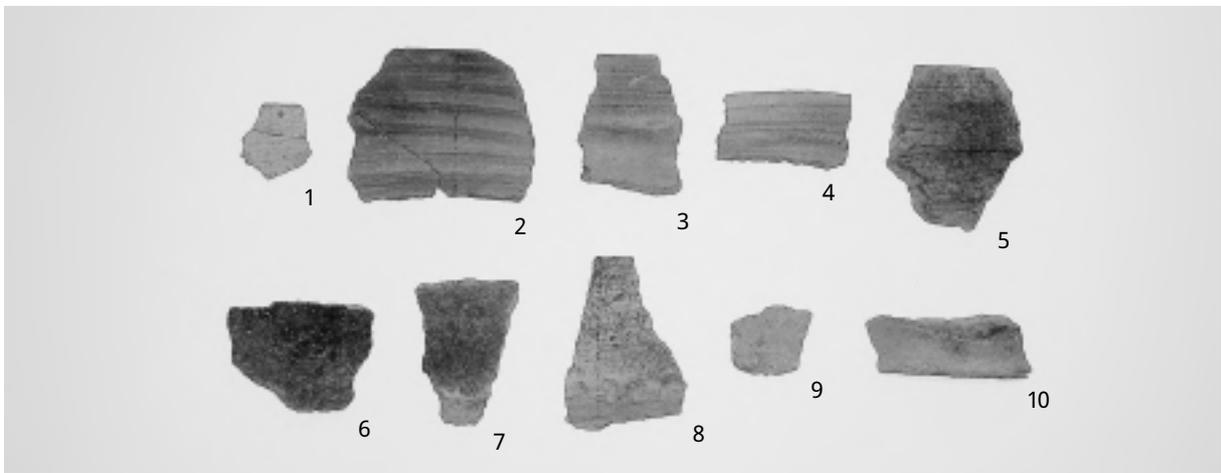
B区鉄器出土地点



B区鉄器出土状況



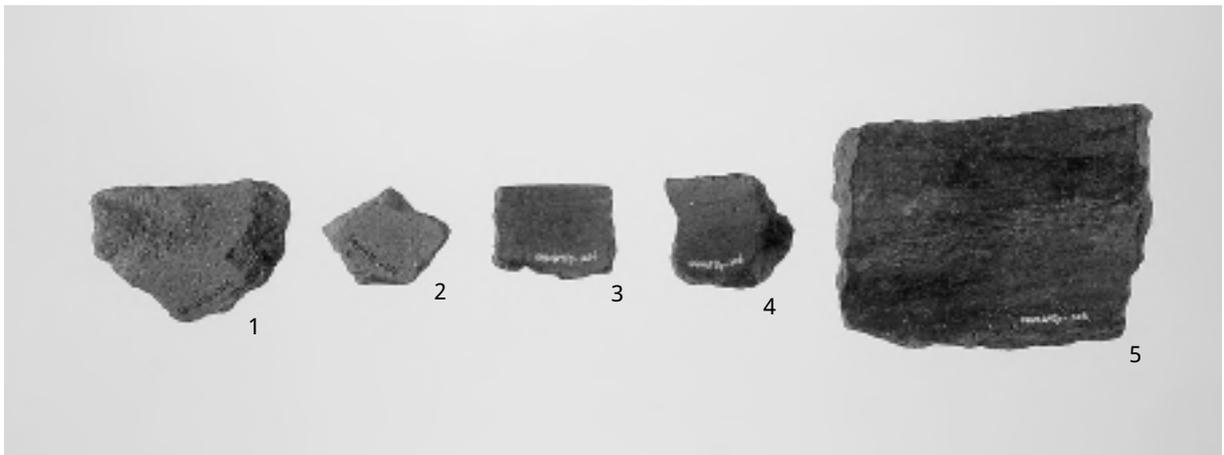
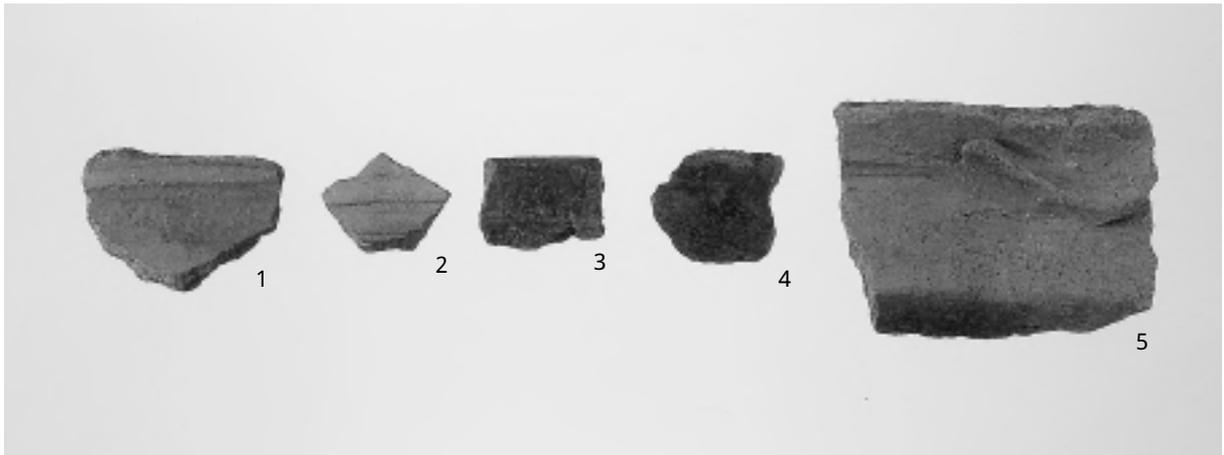
A・D区ピット群出土土器



B・C区ピット群出土土器



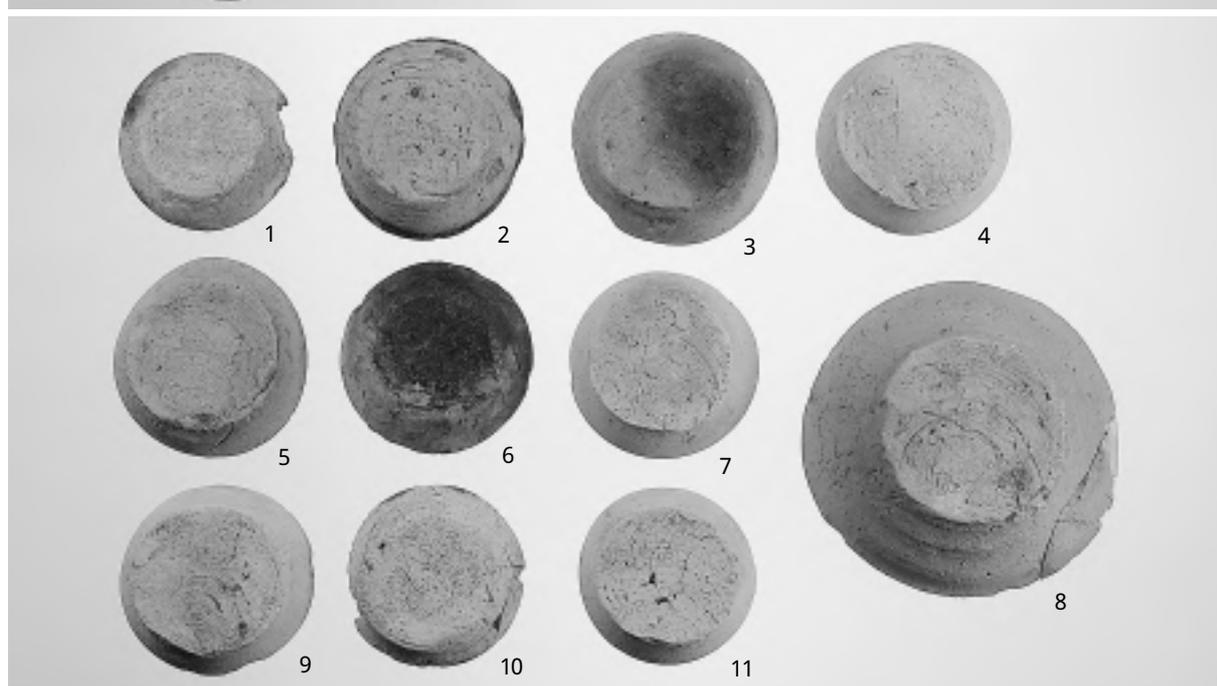
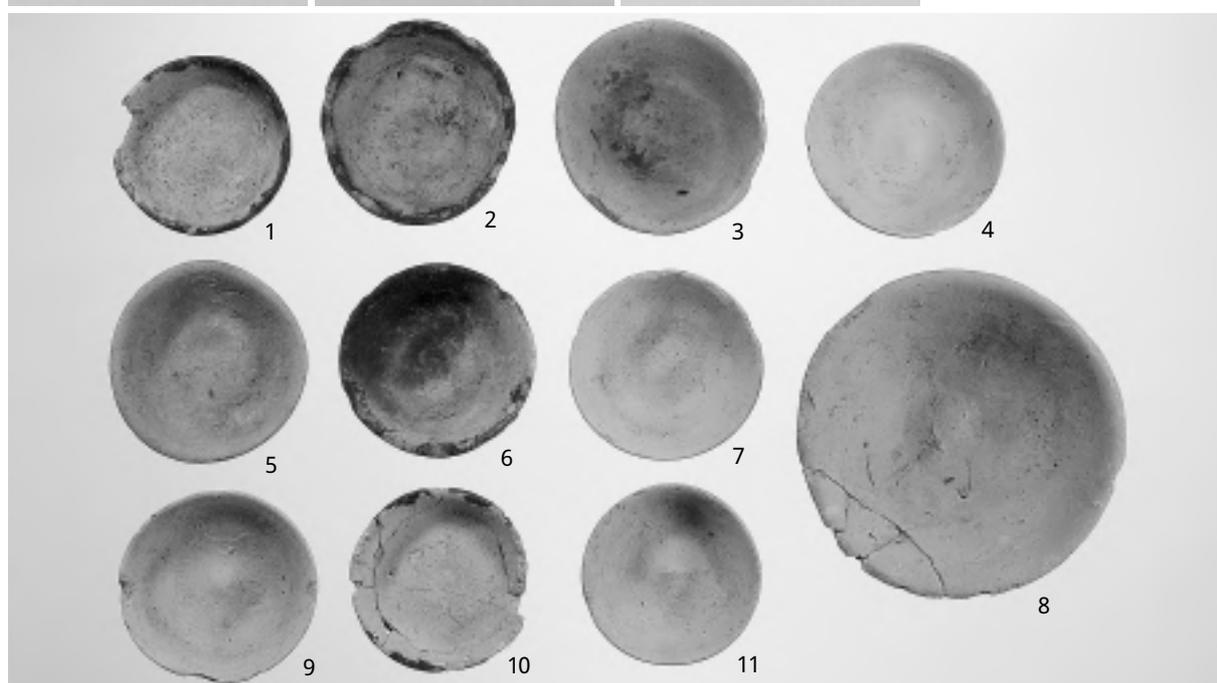
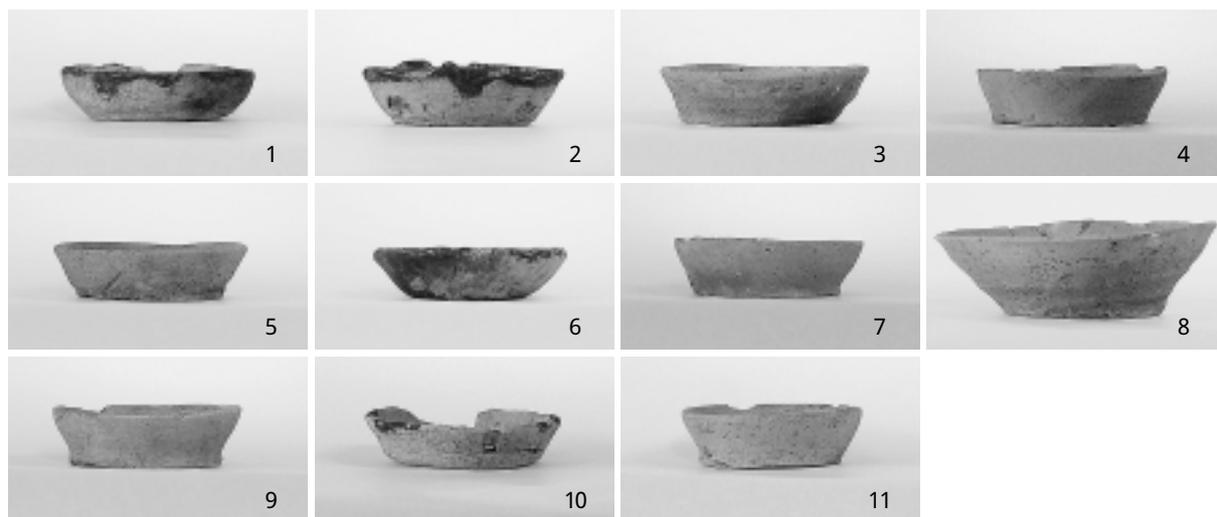
B区埋甗



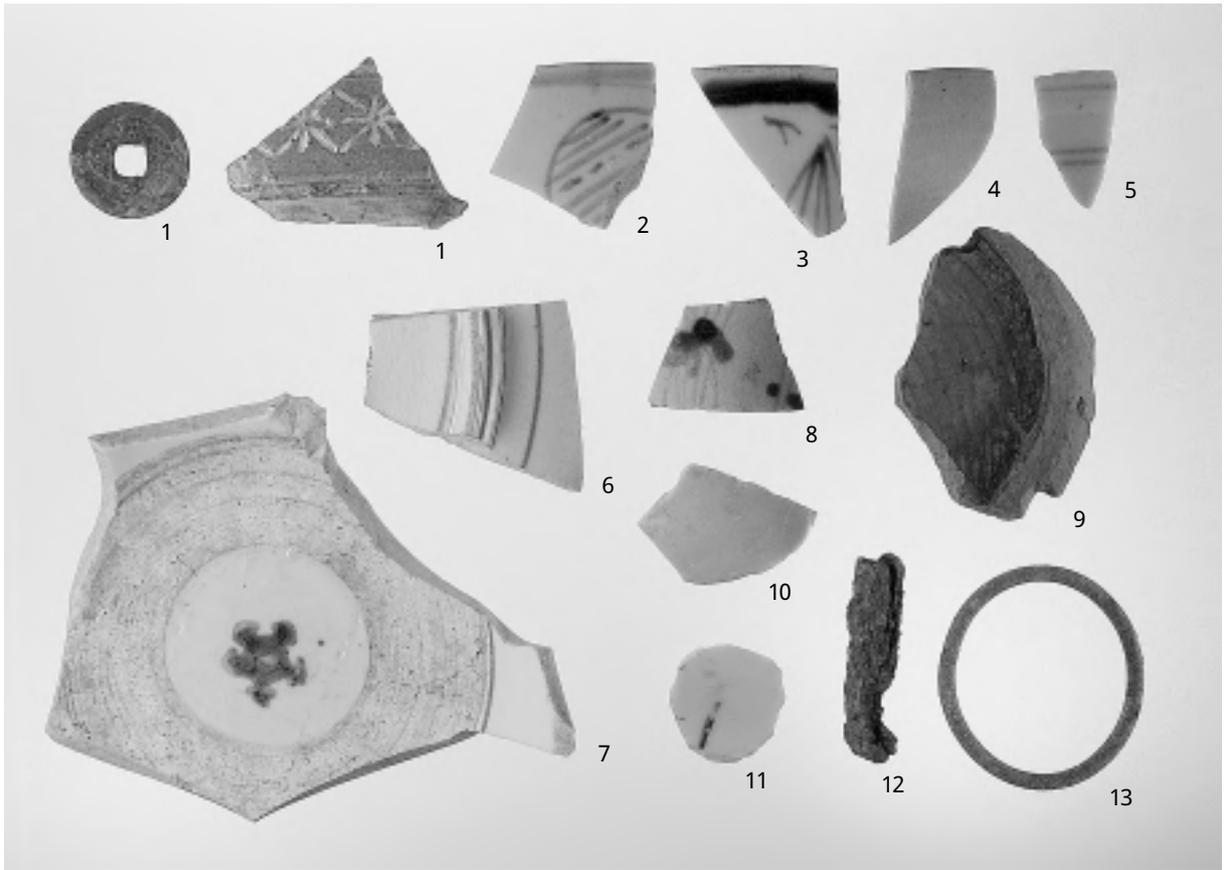
A区土坑 1 内出土石器



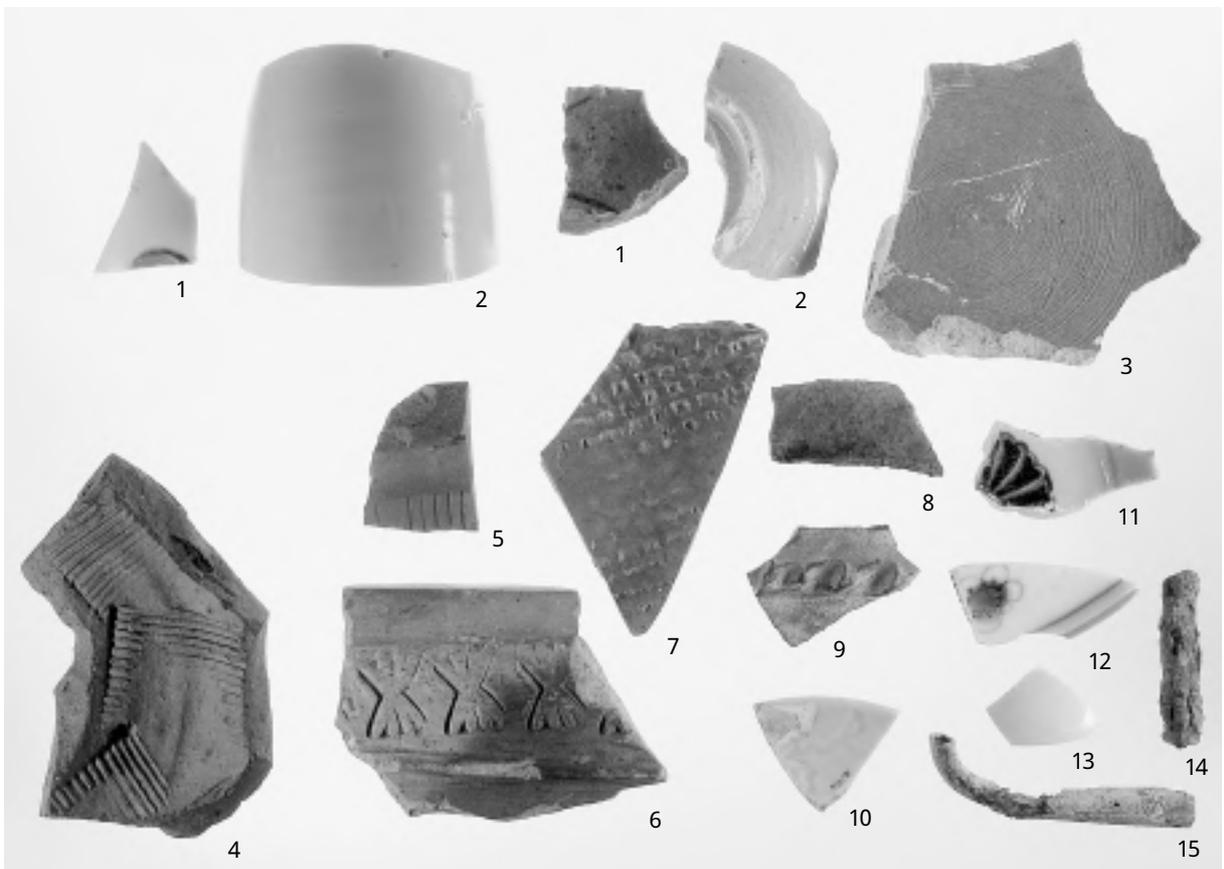
A区土坑 2 内出土石器



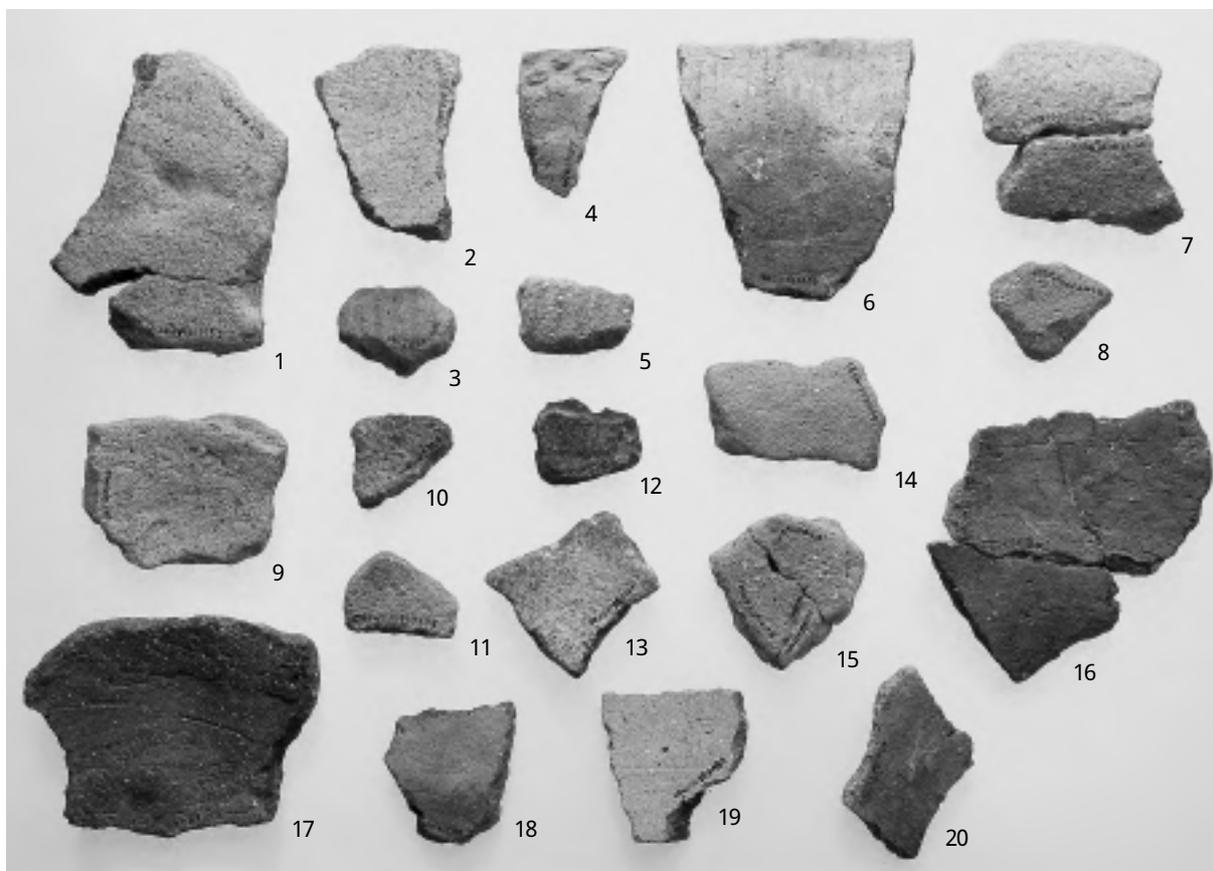
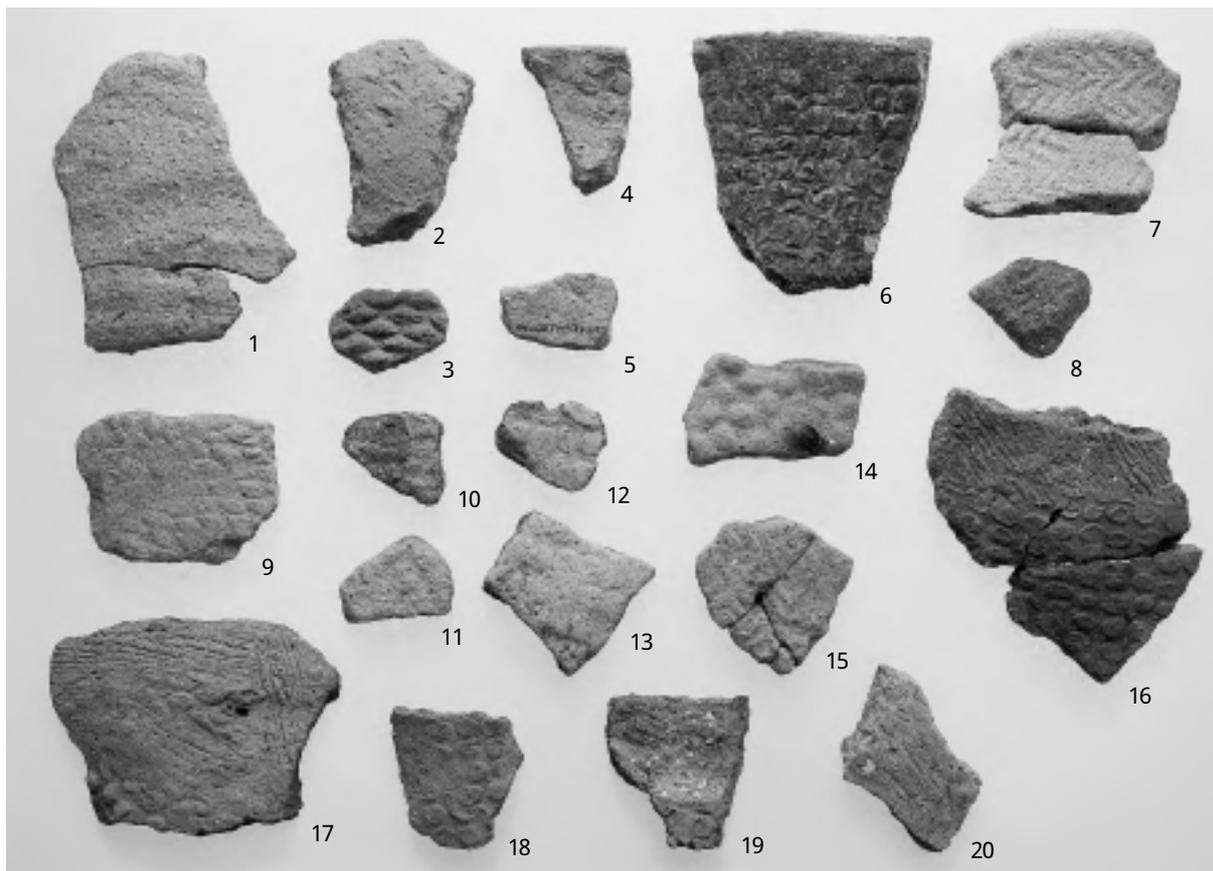
A区土坑墓内出土土师皿



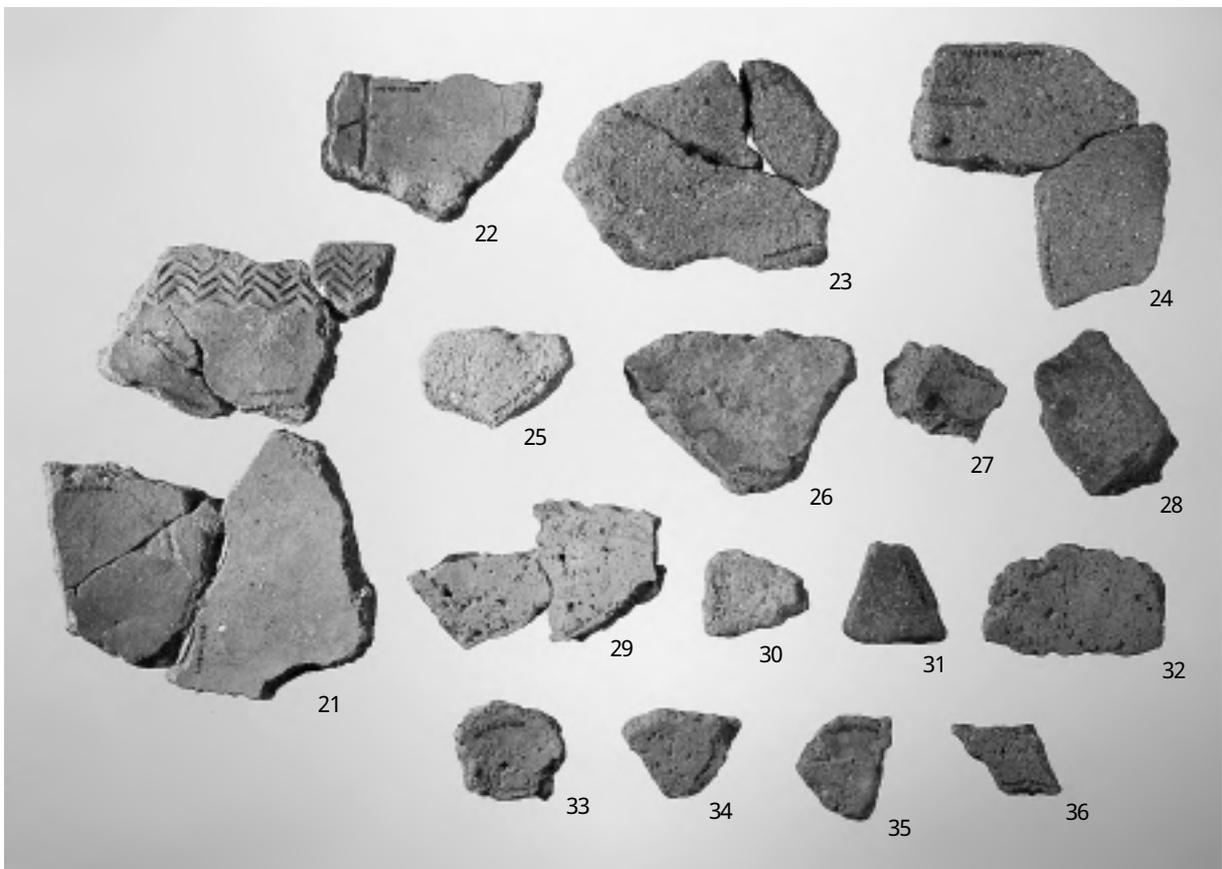
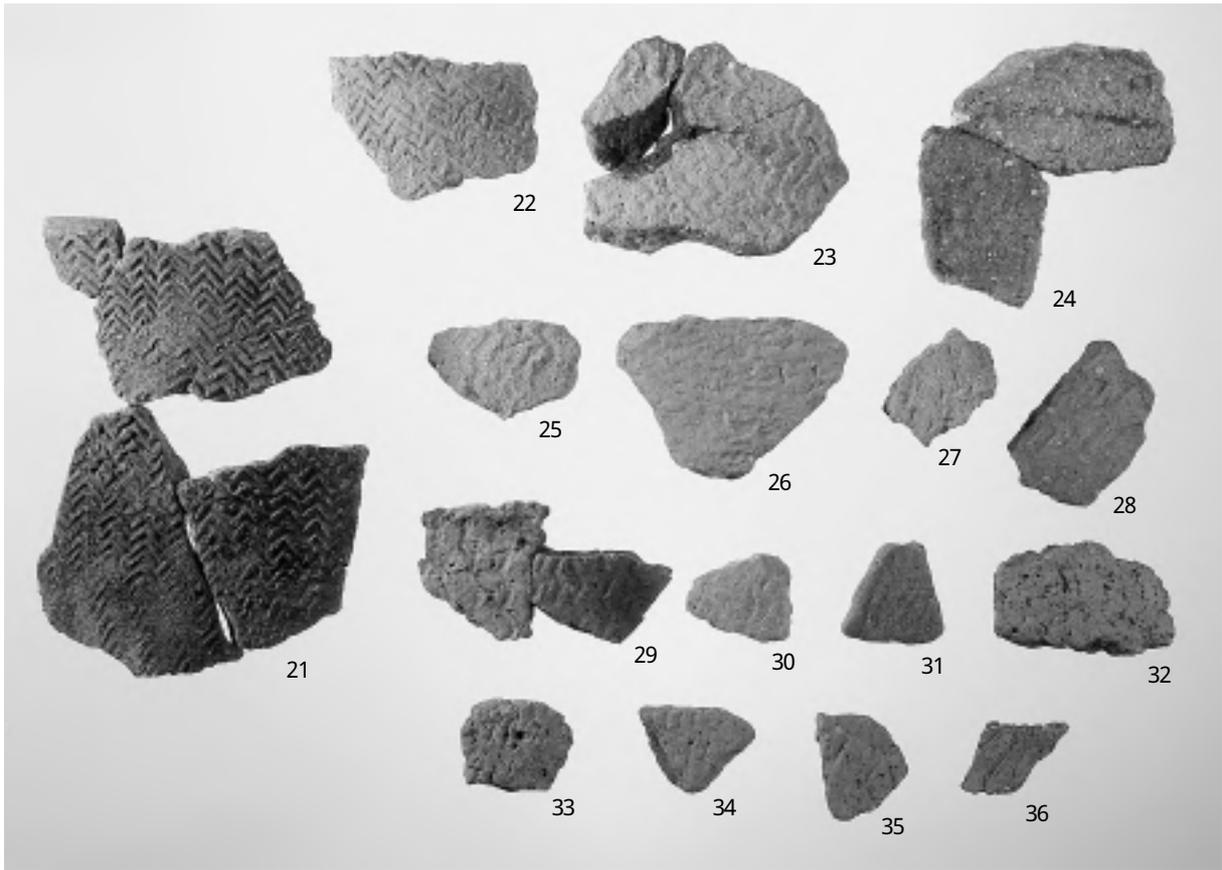
D区柵状水場遺構内出土遺物



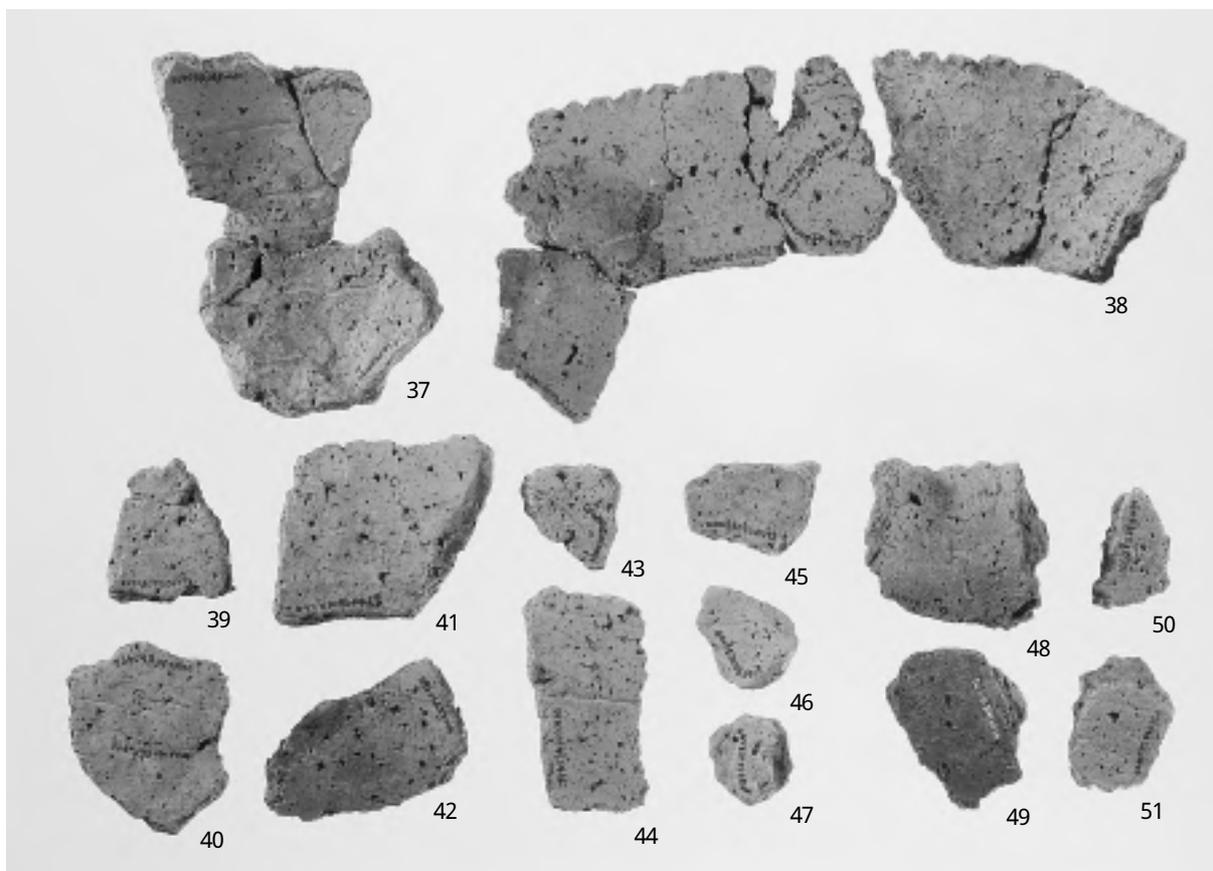
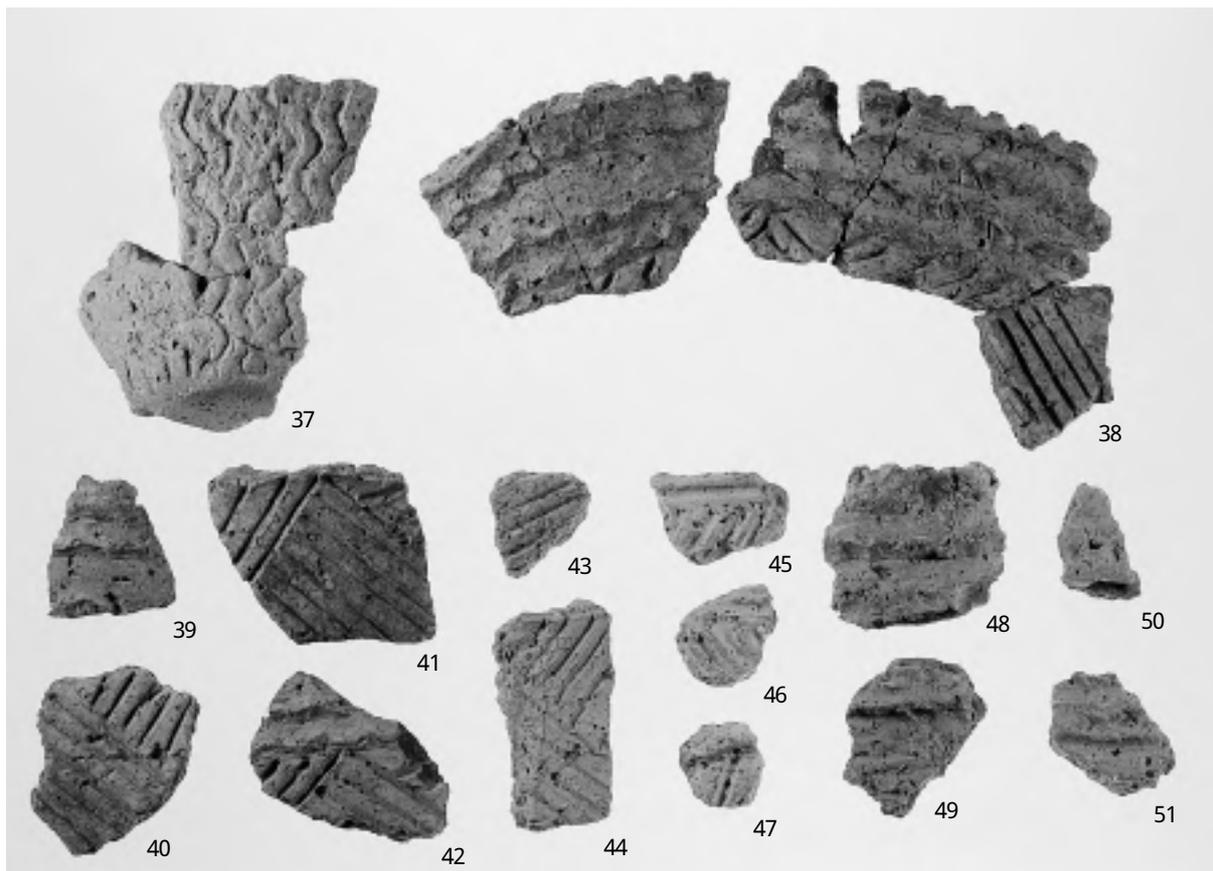
D区円形状水場遺構内出土遺物・水田址内出土遺物



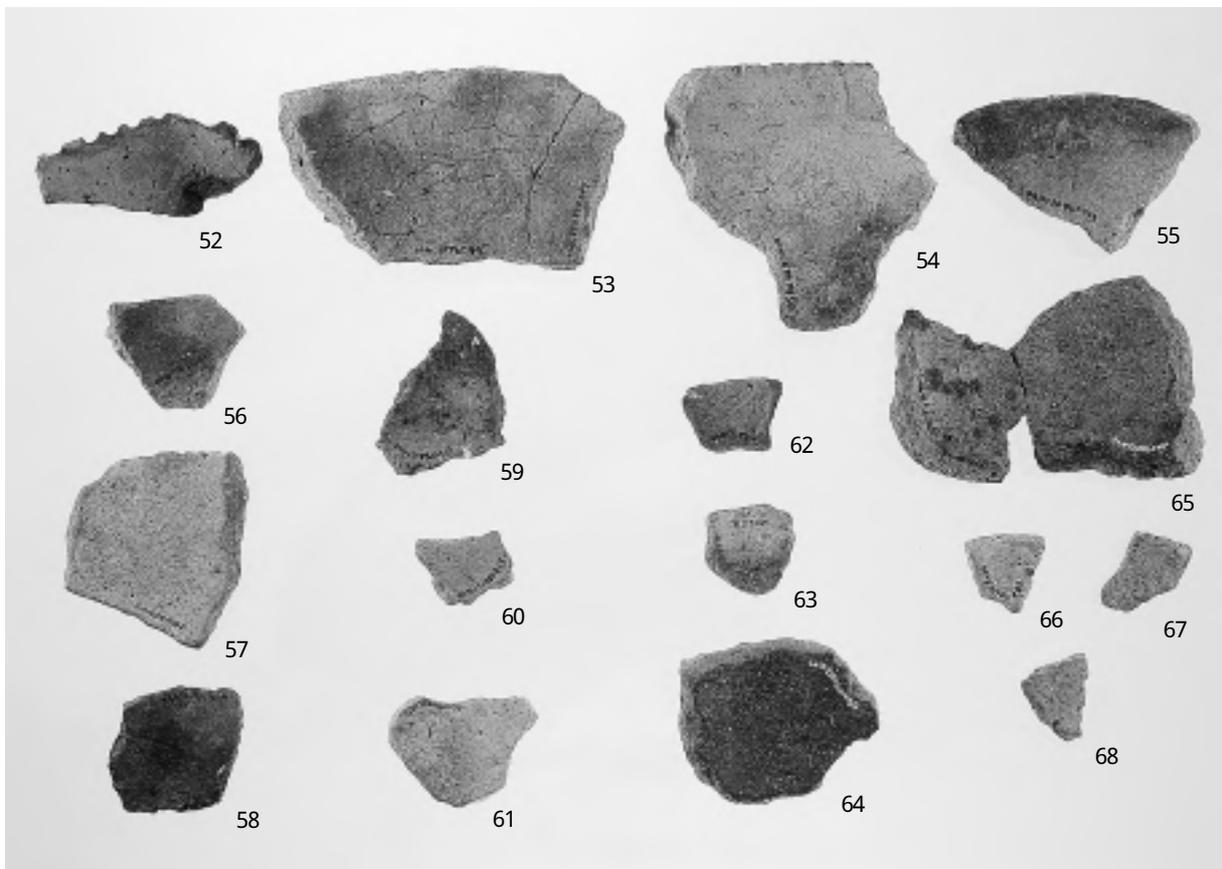
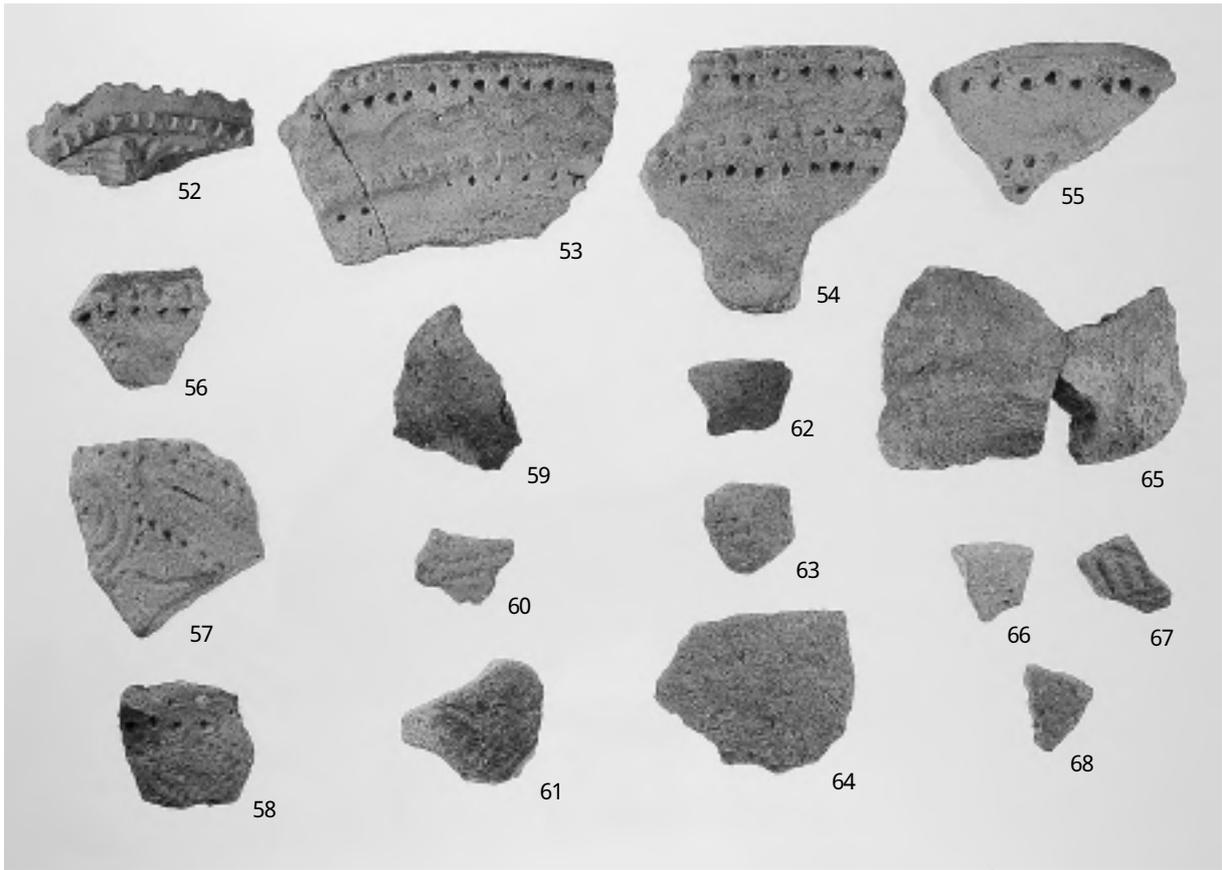
縄文時代早・前期の土器



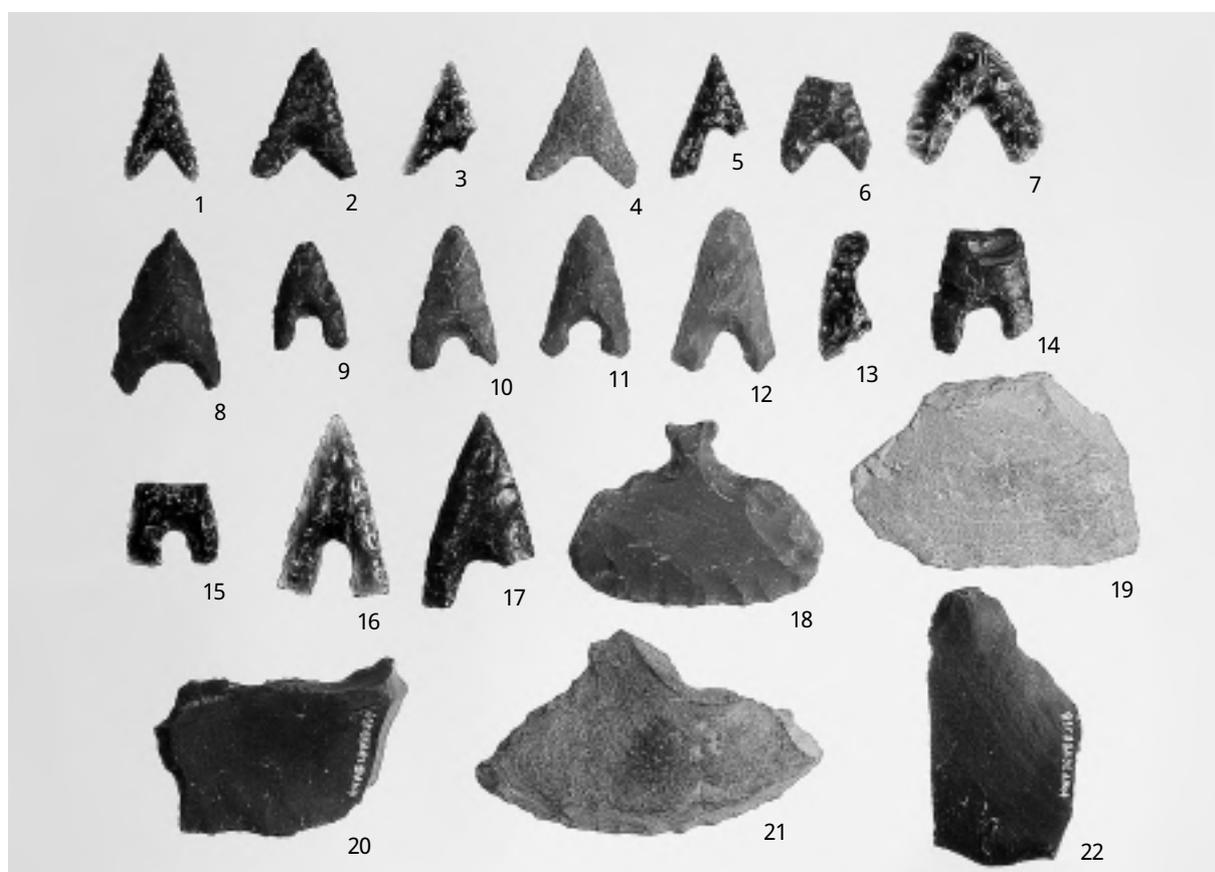
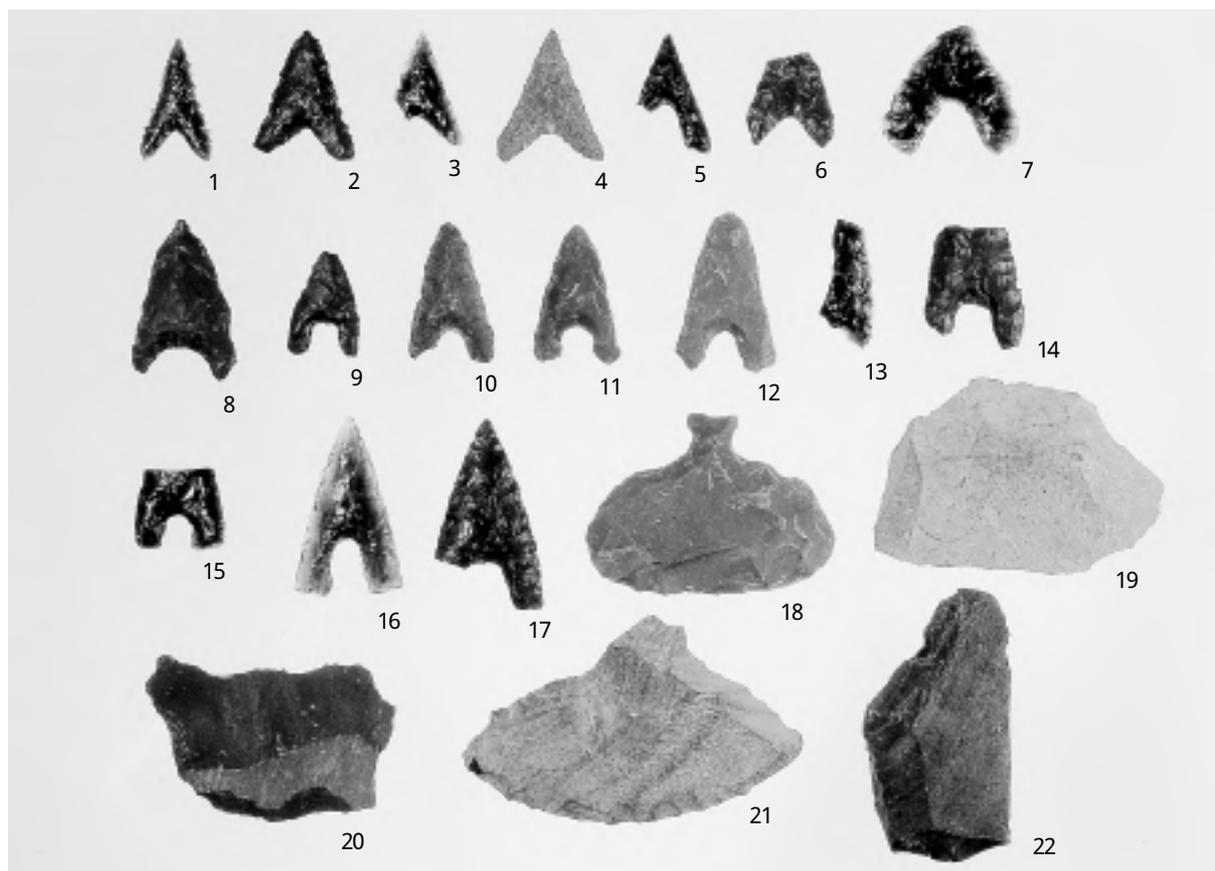
縄文時代早・前期の土器



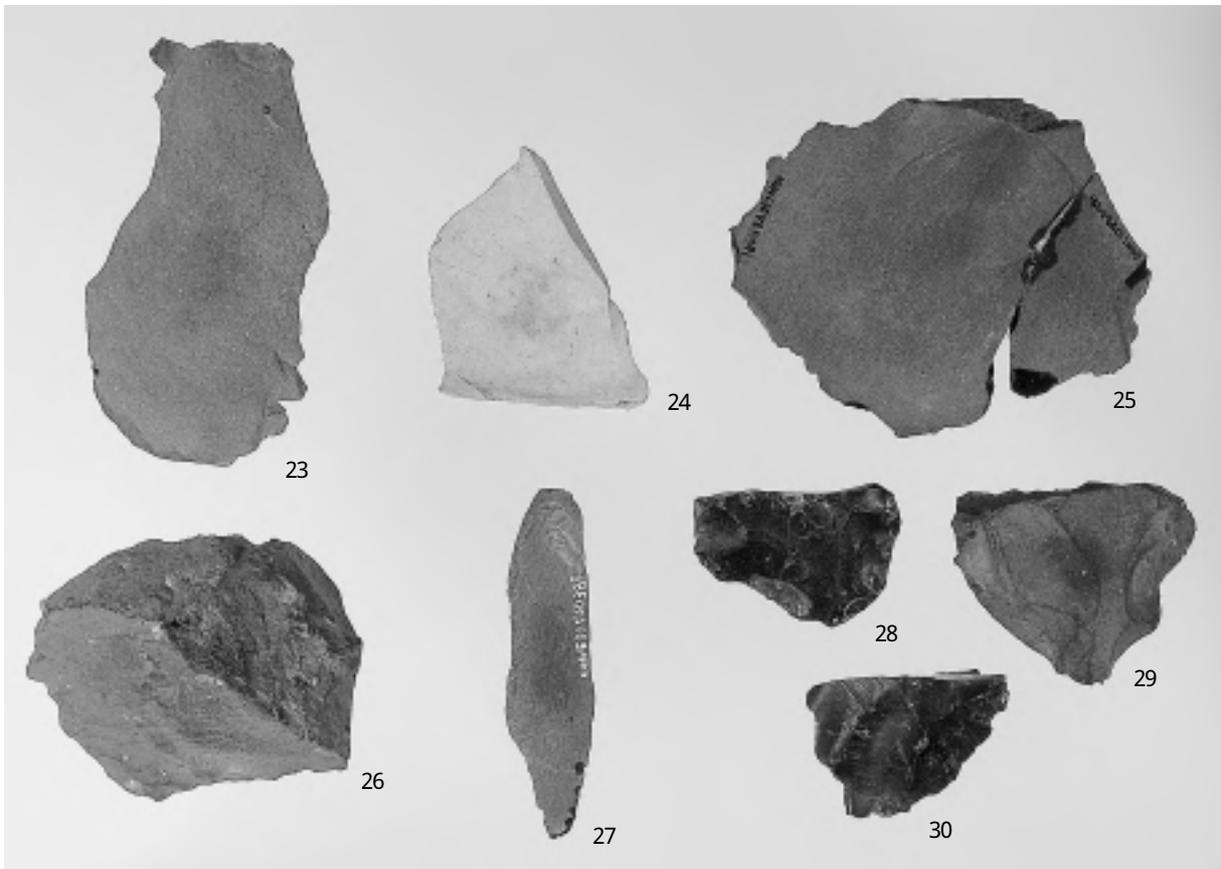
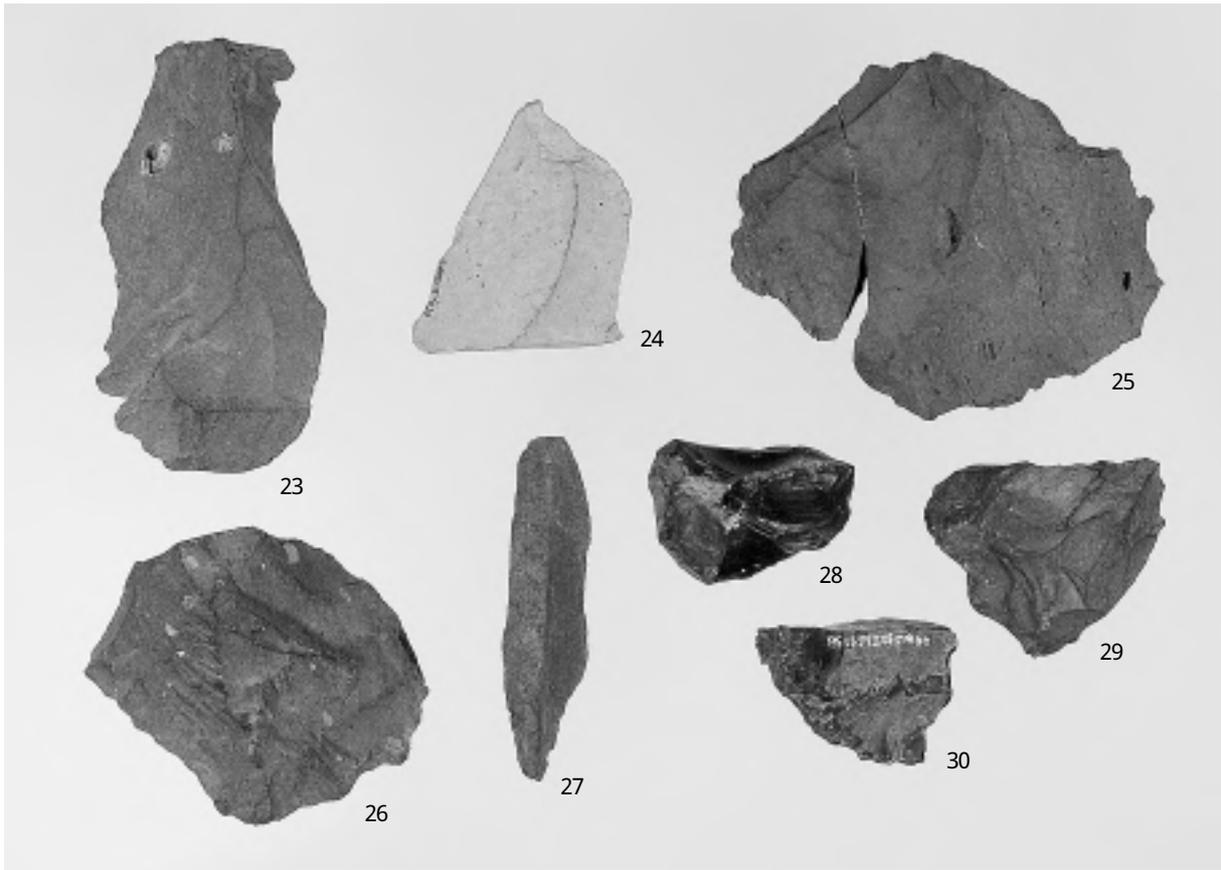
縄文時代早・前期の土器



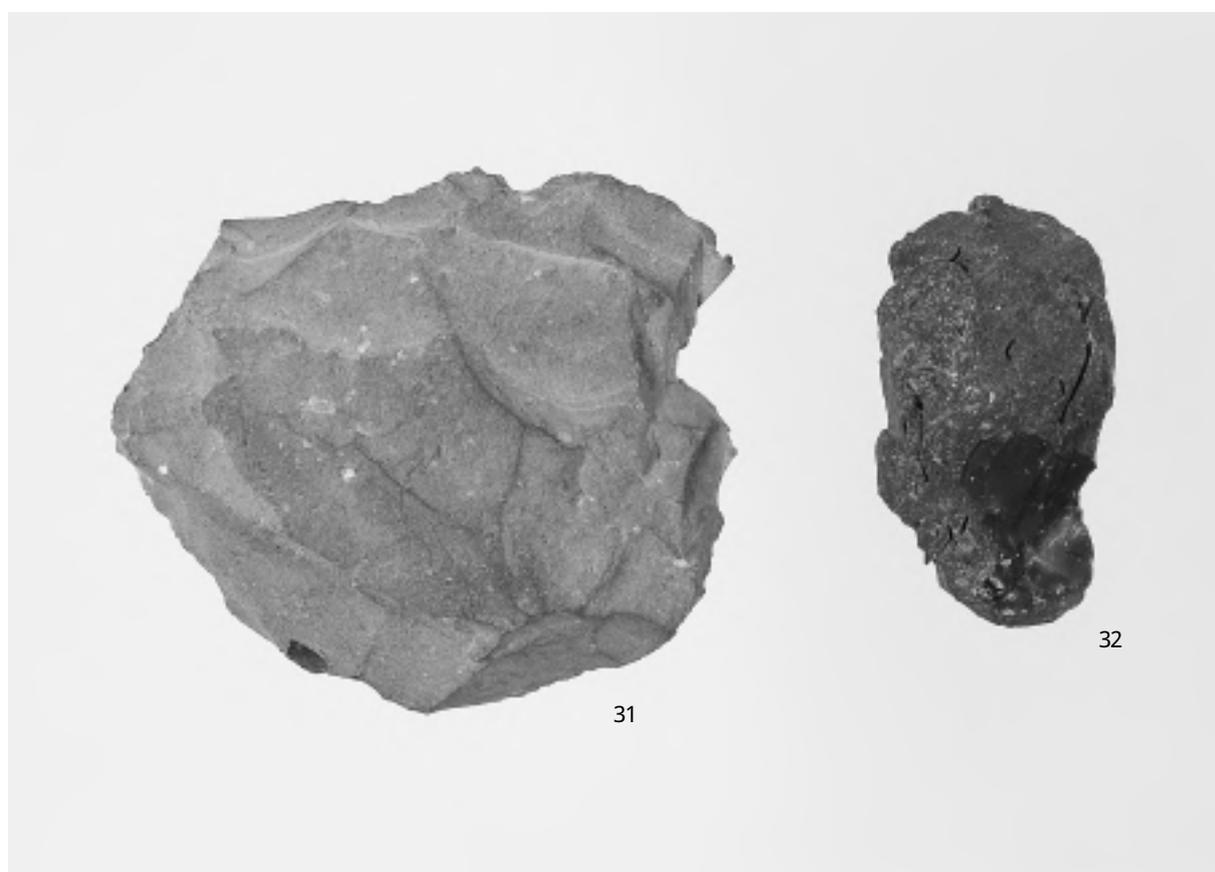
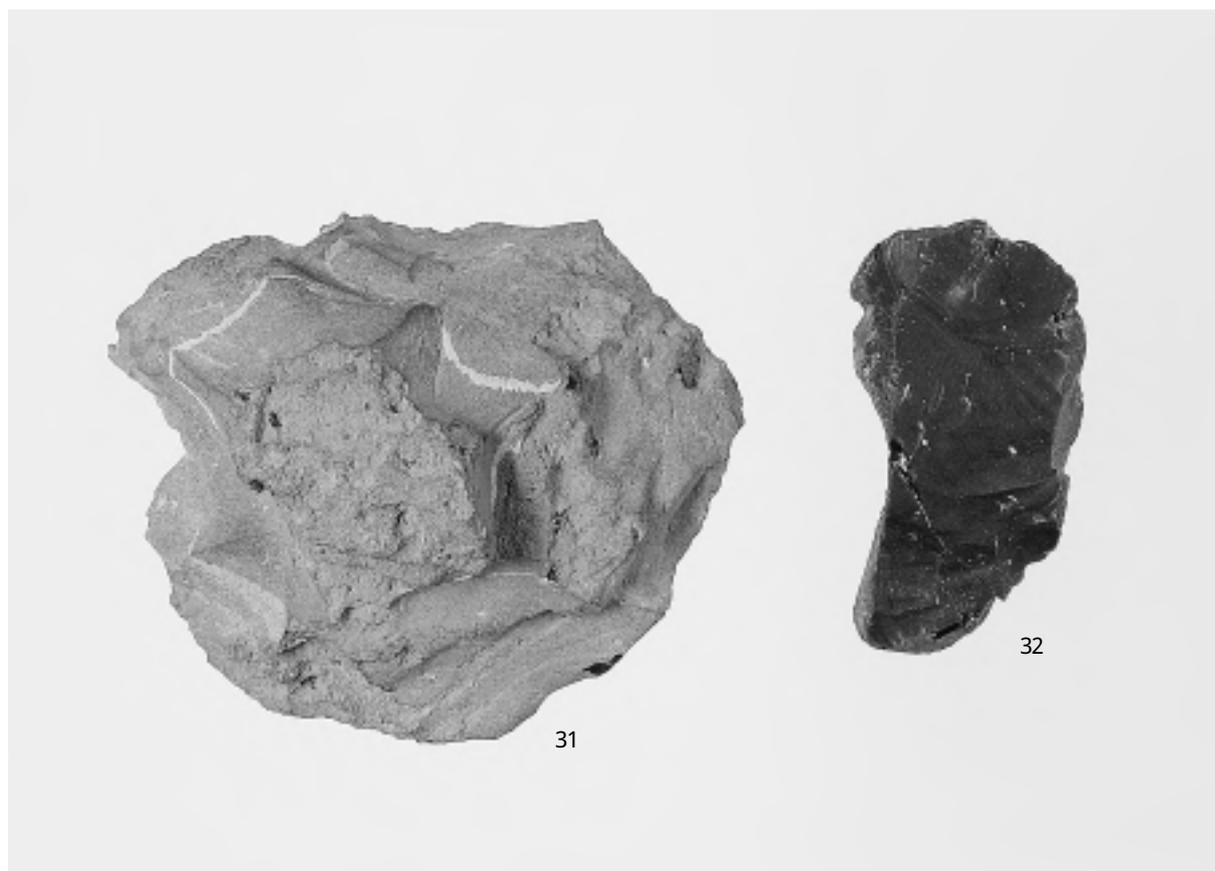
縄文時代早・前期の土器



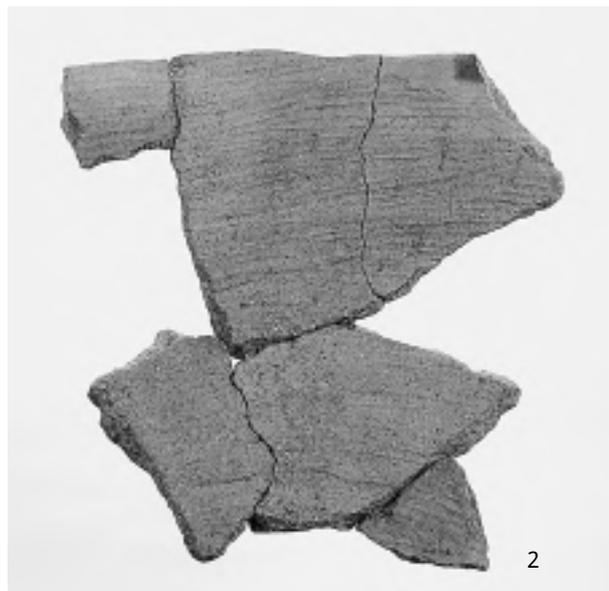
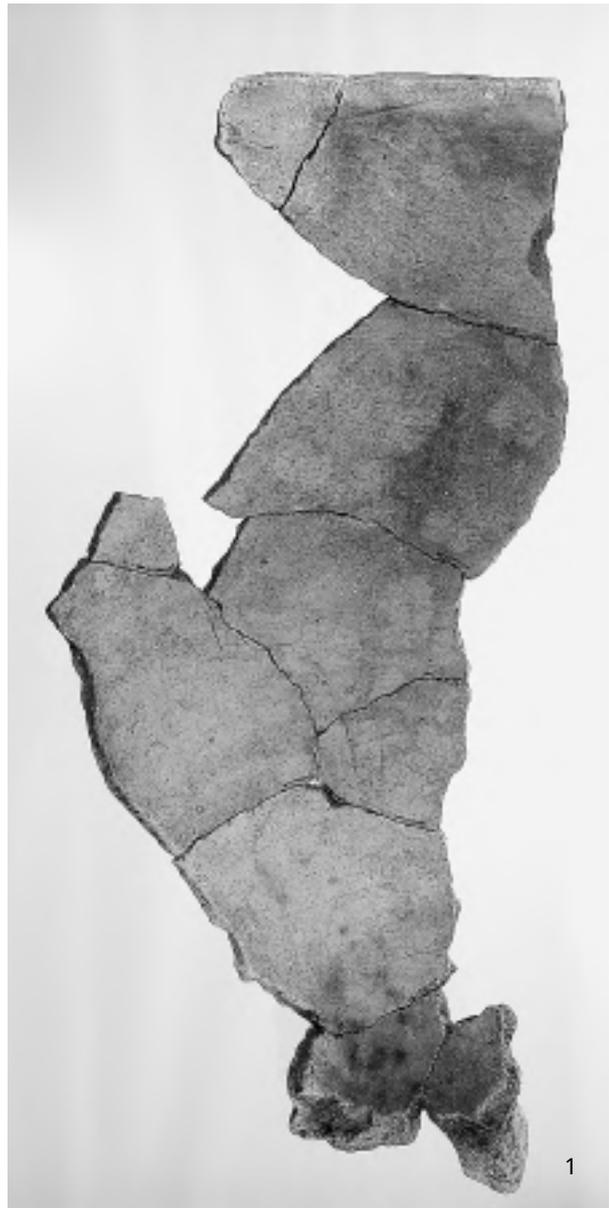
縄文時代早・前期の石器



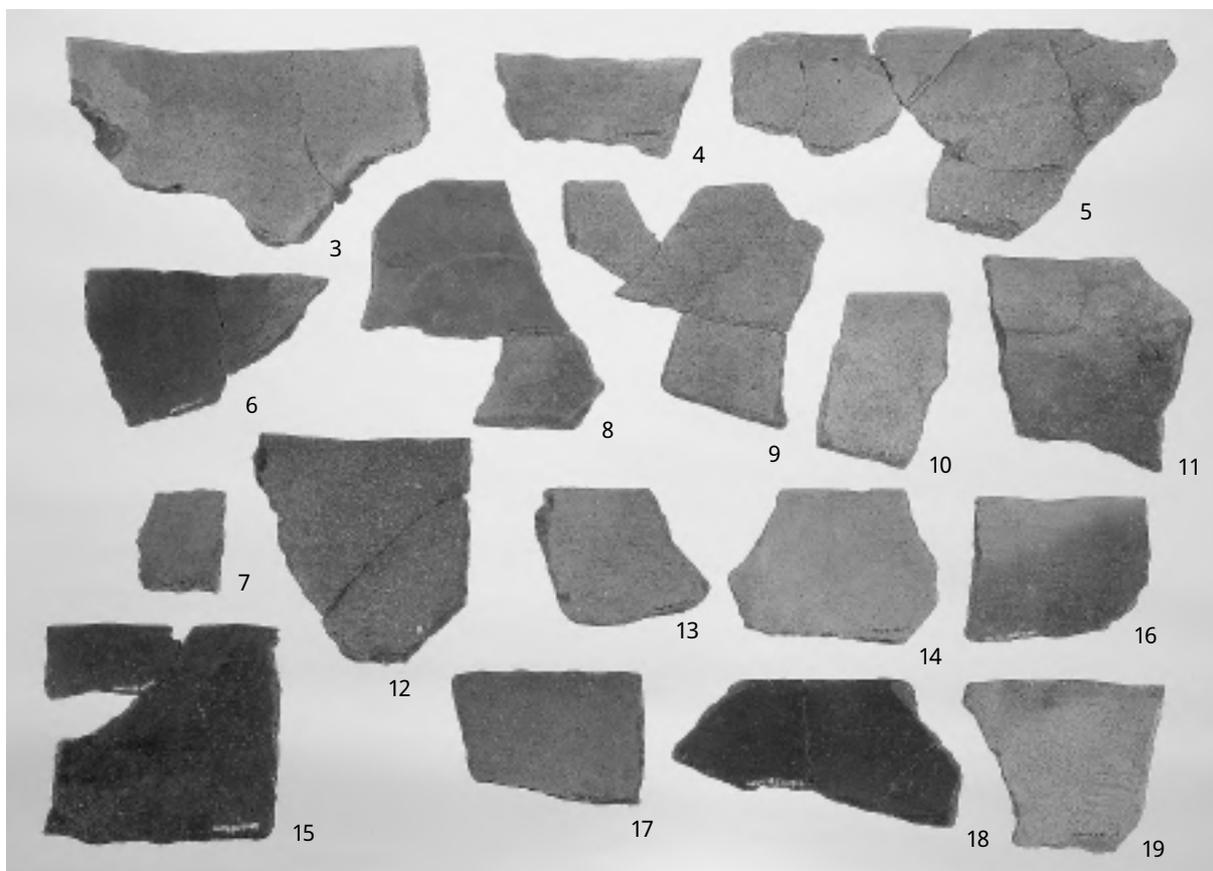
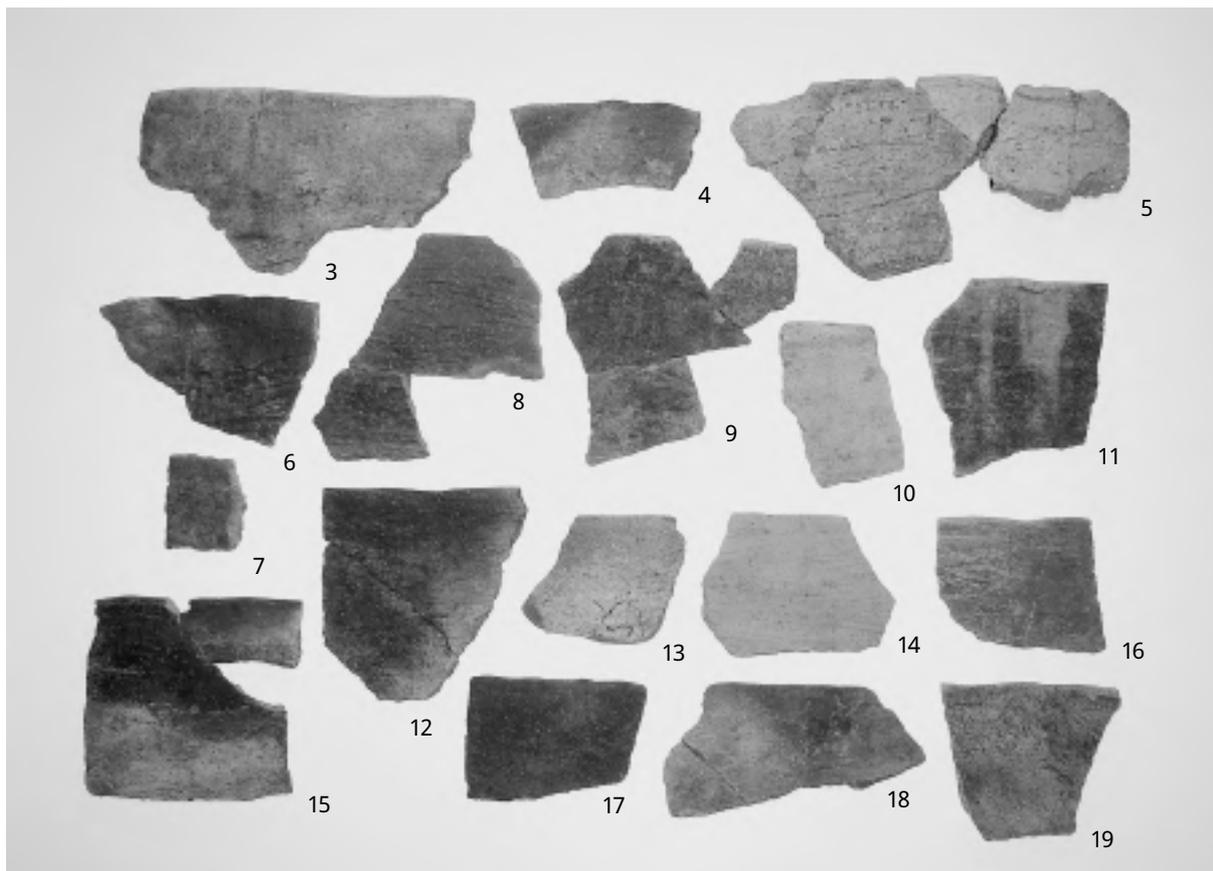
縄文時代早・前期の石器



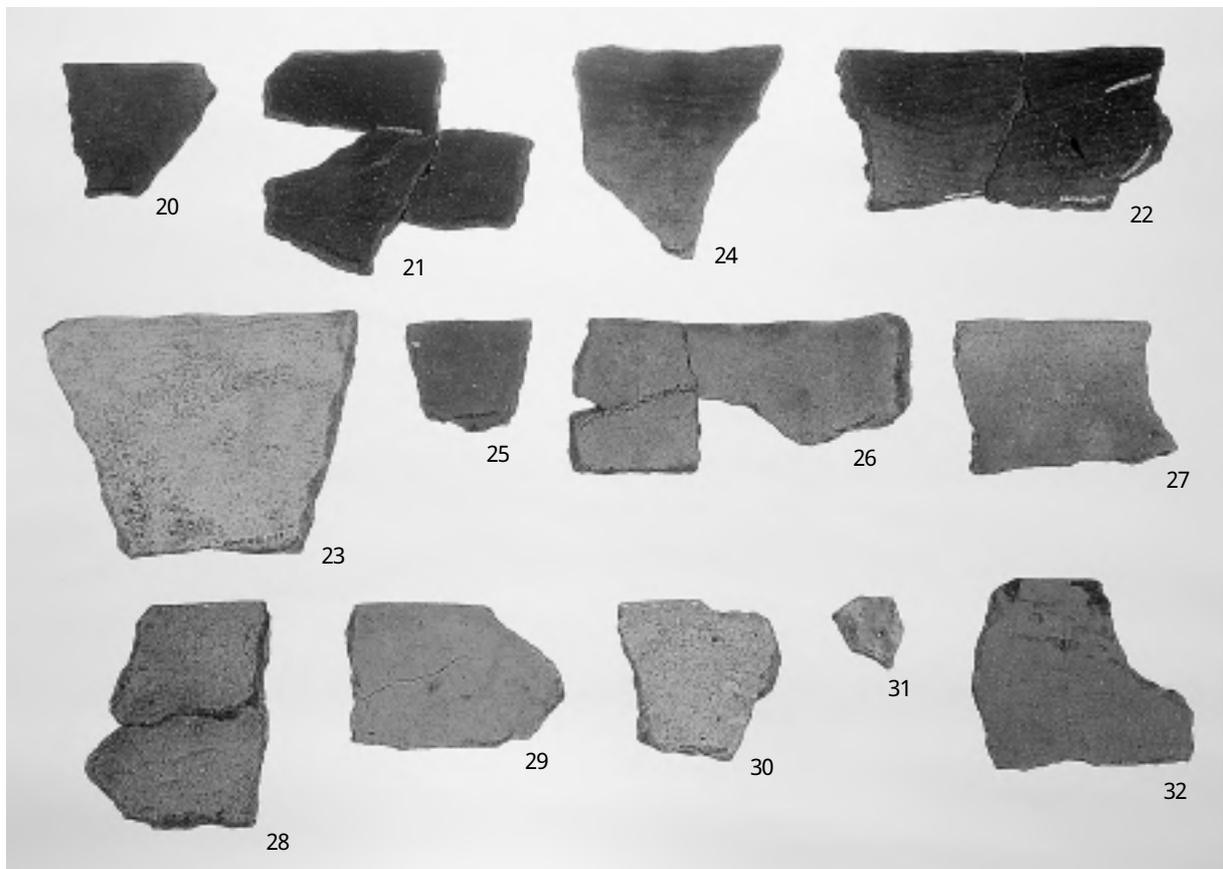
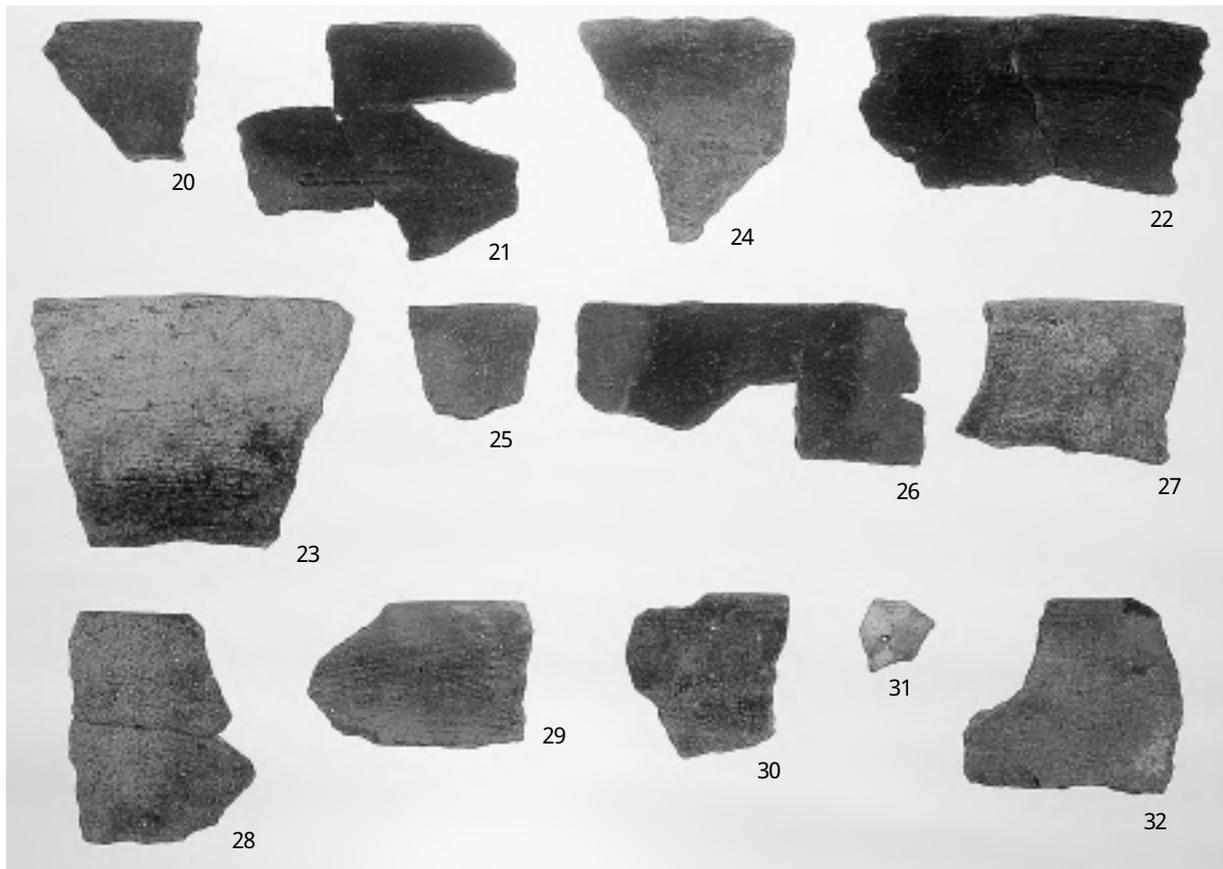
縄文時代早・前期の石器



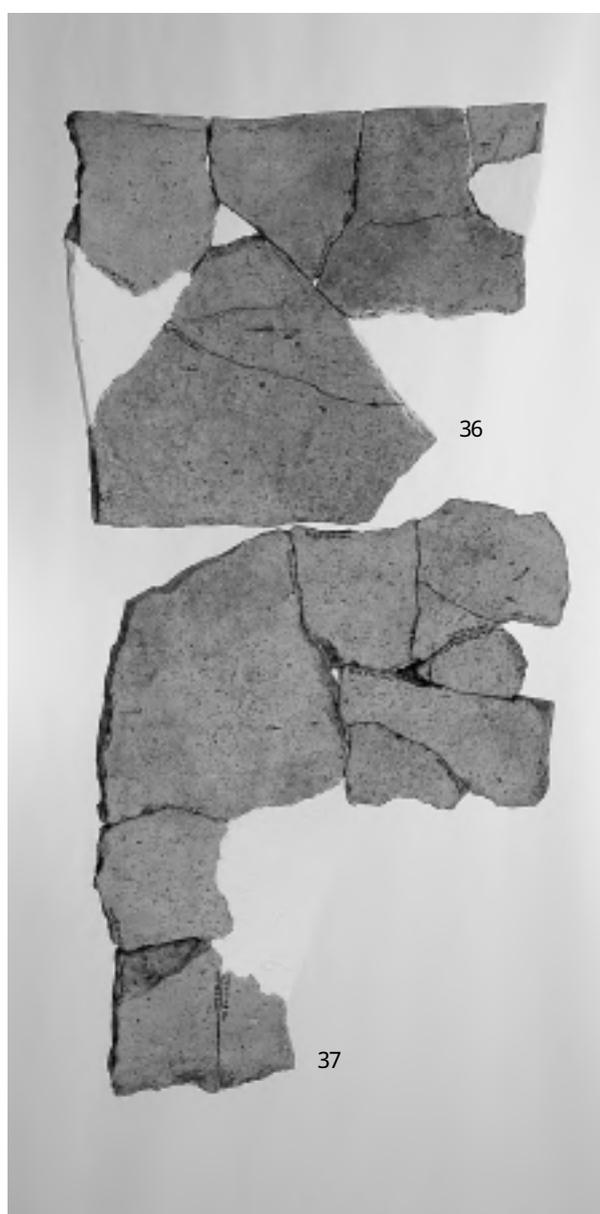
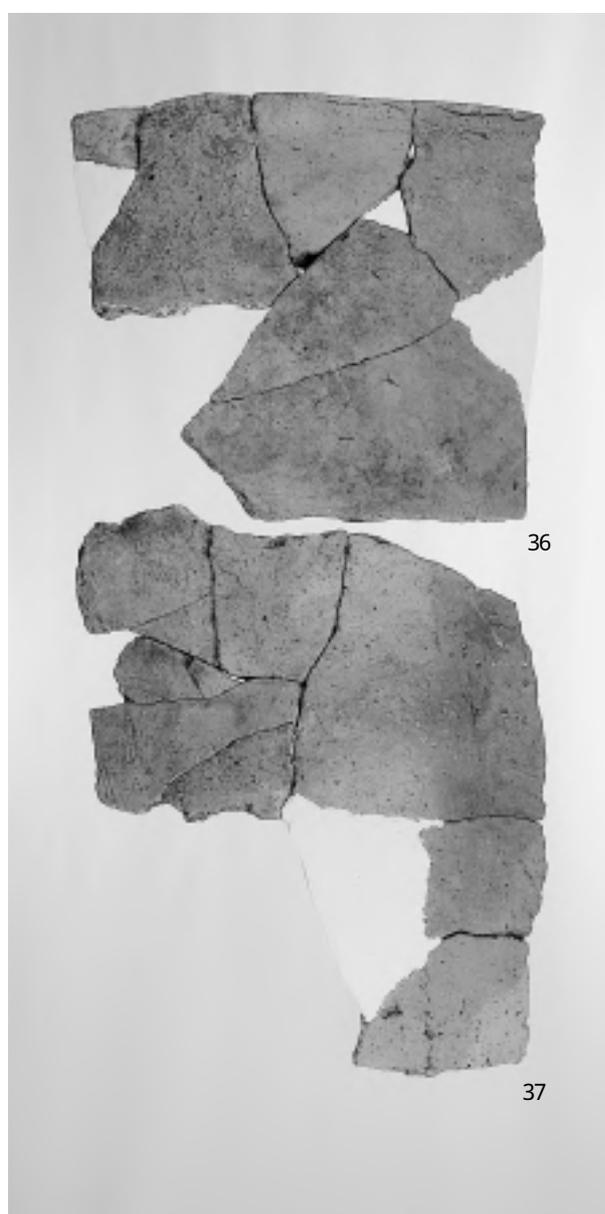
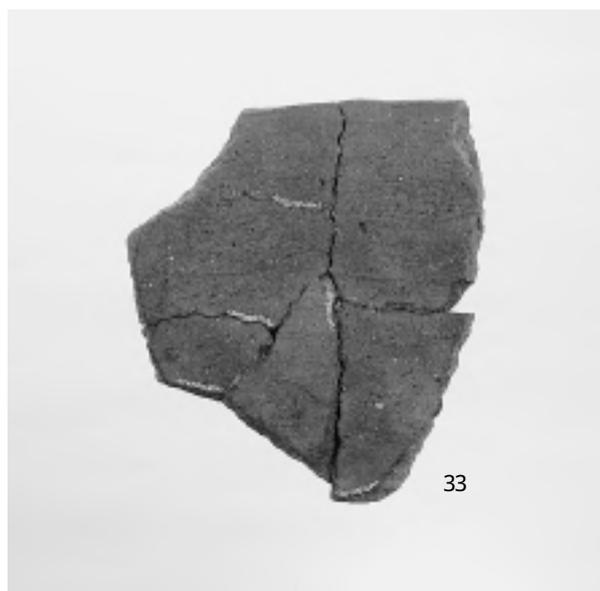
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



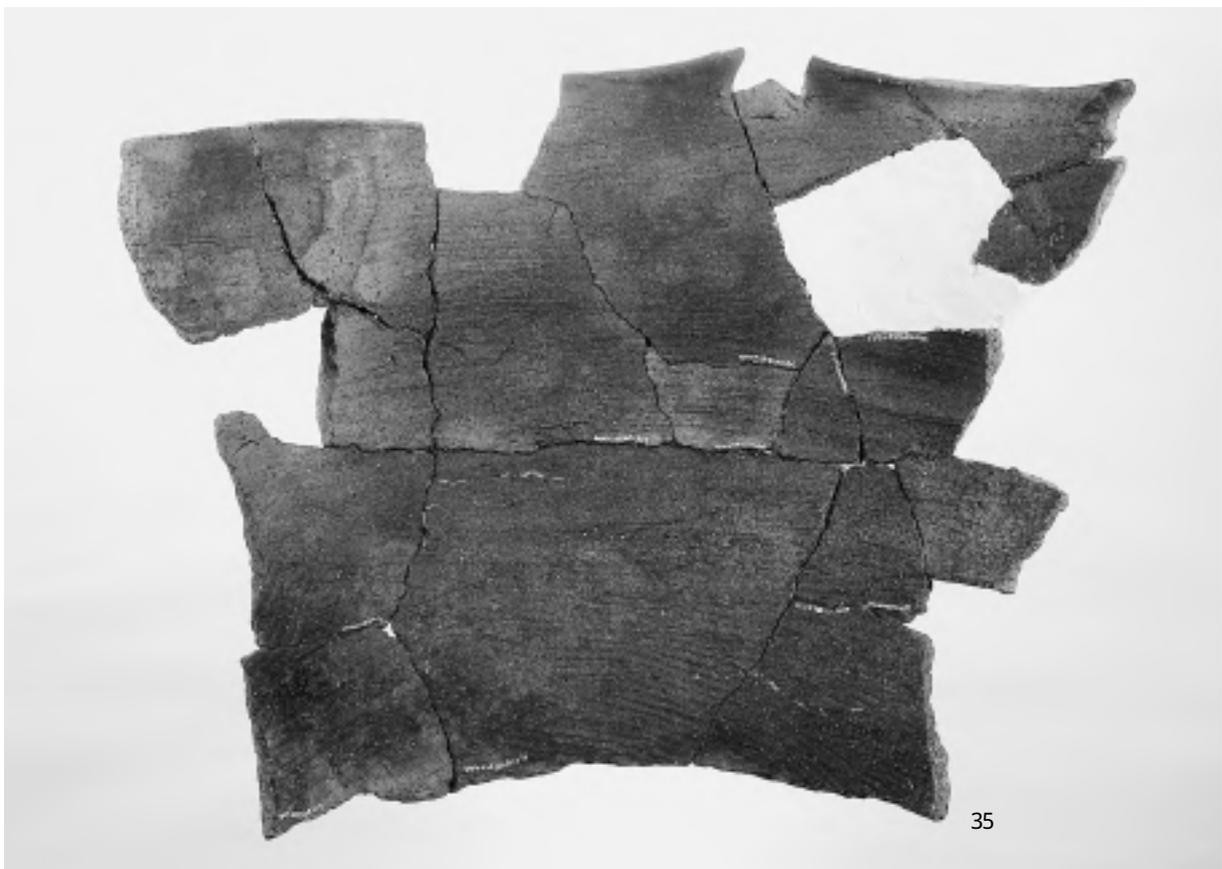
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



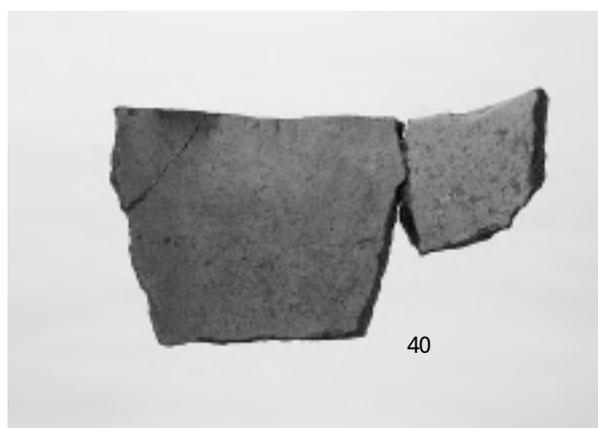
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



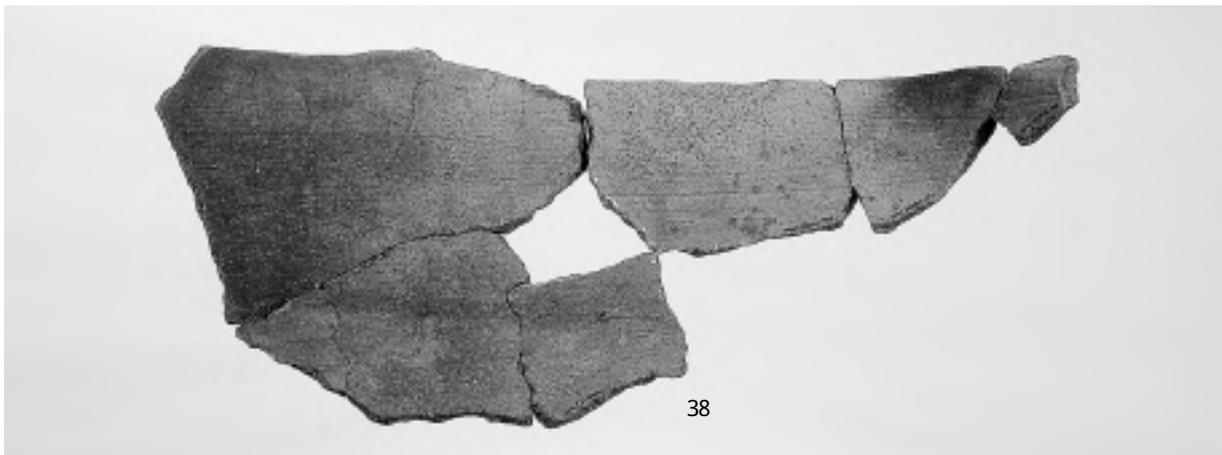
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



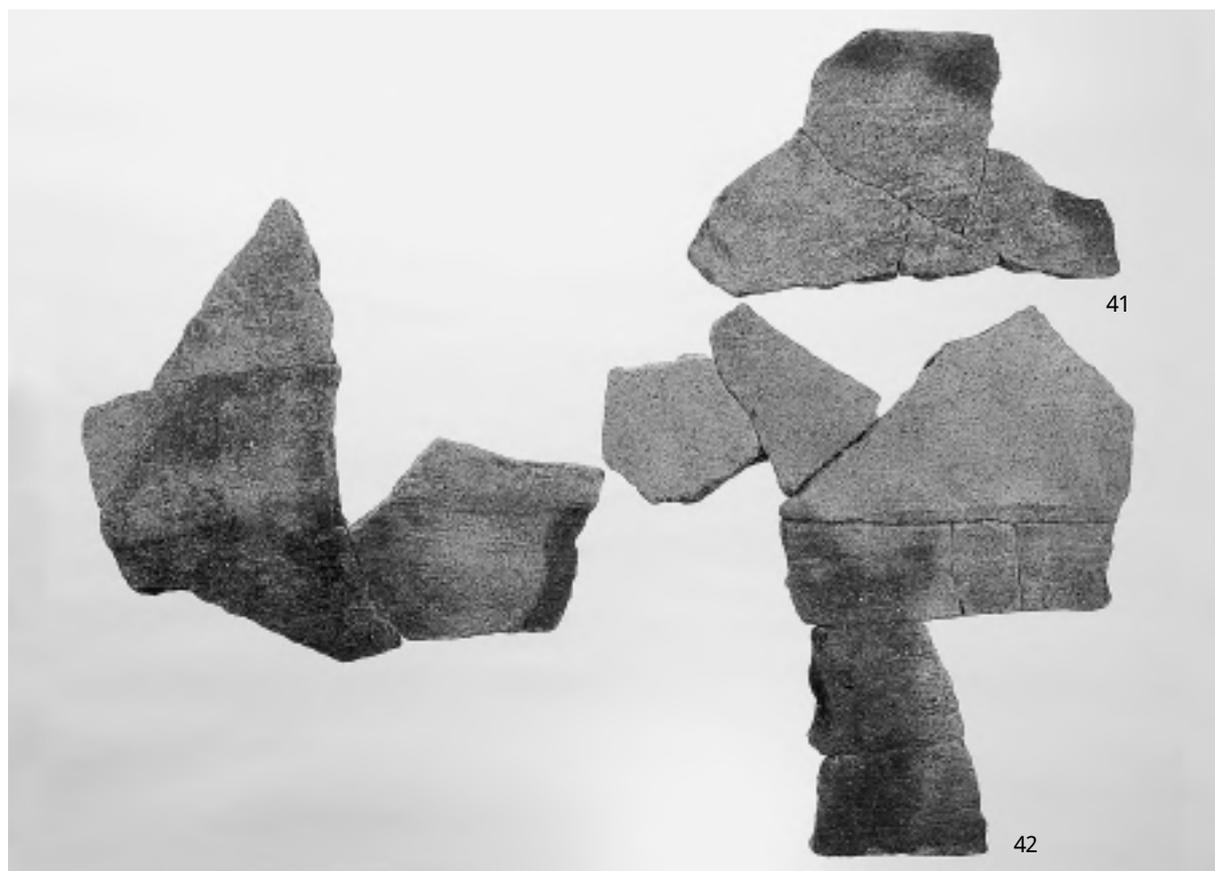
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



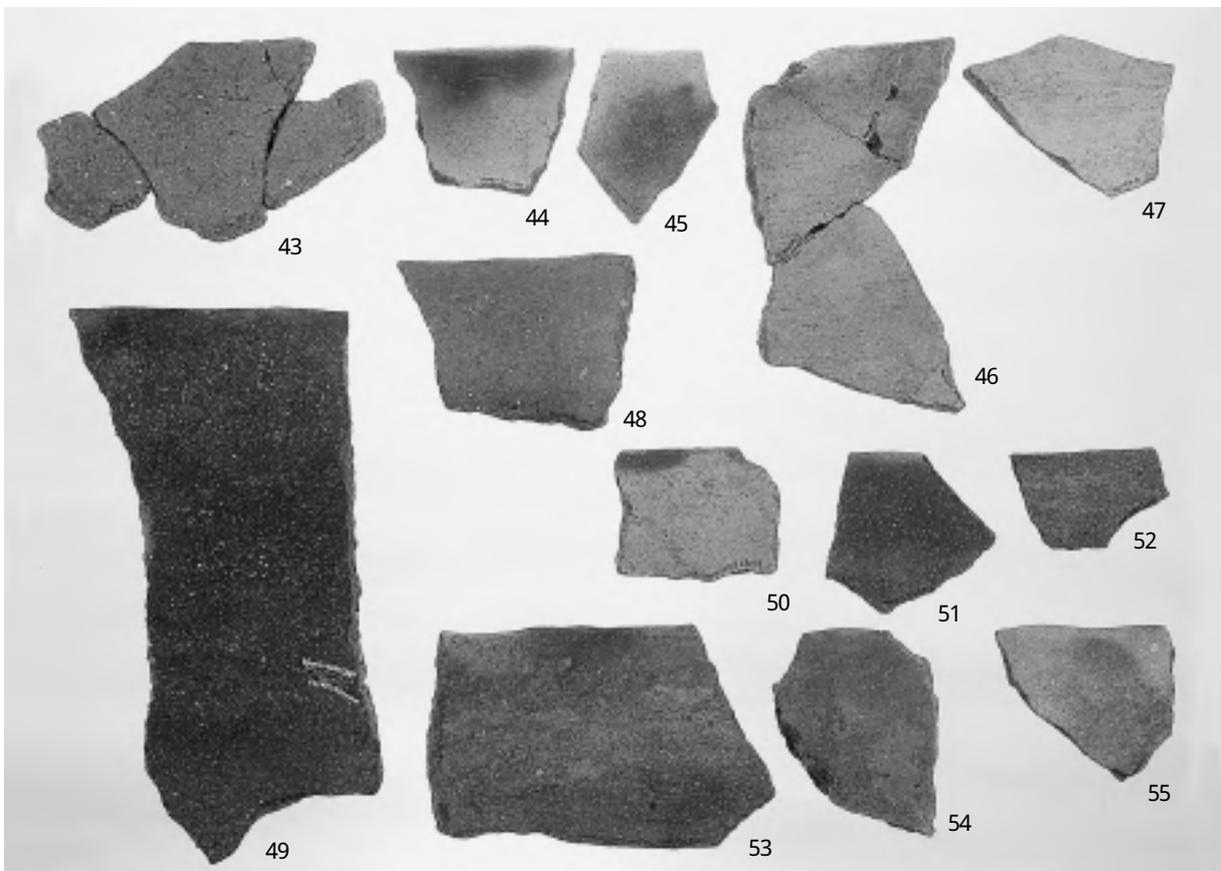
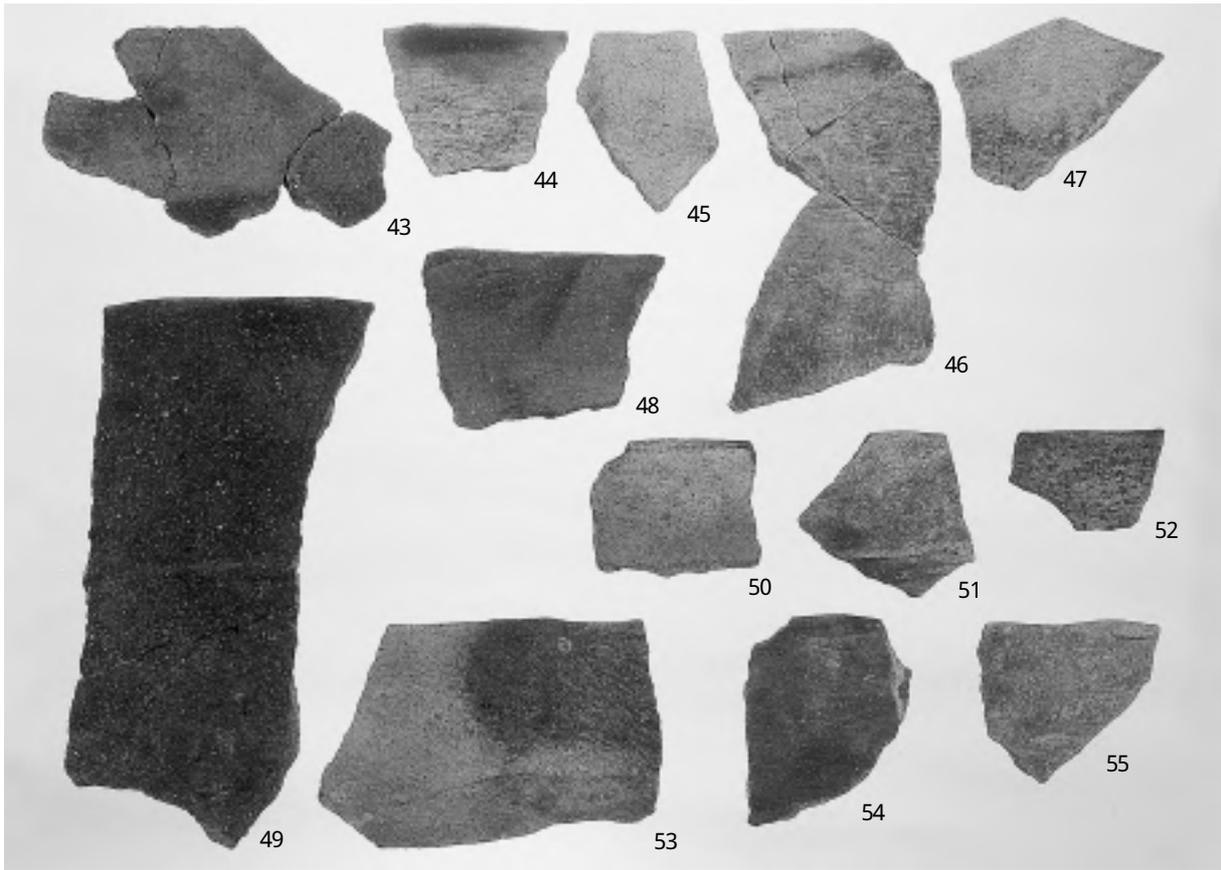
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



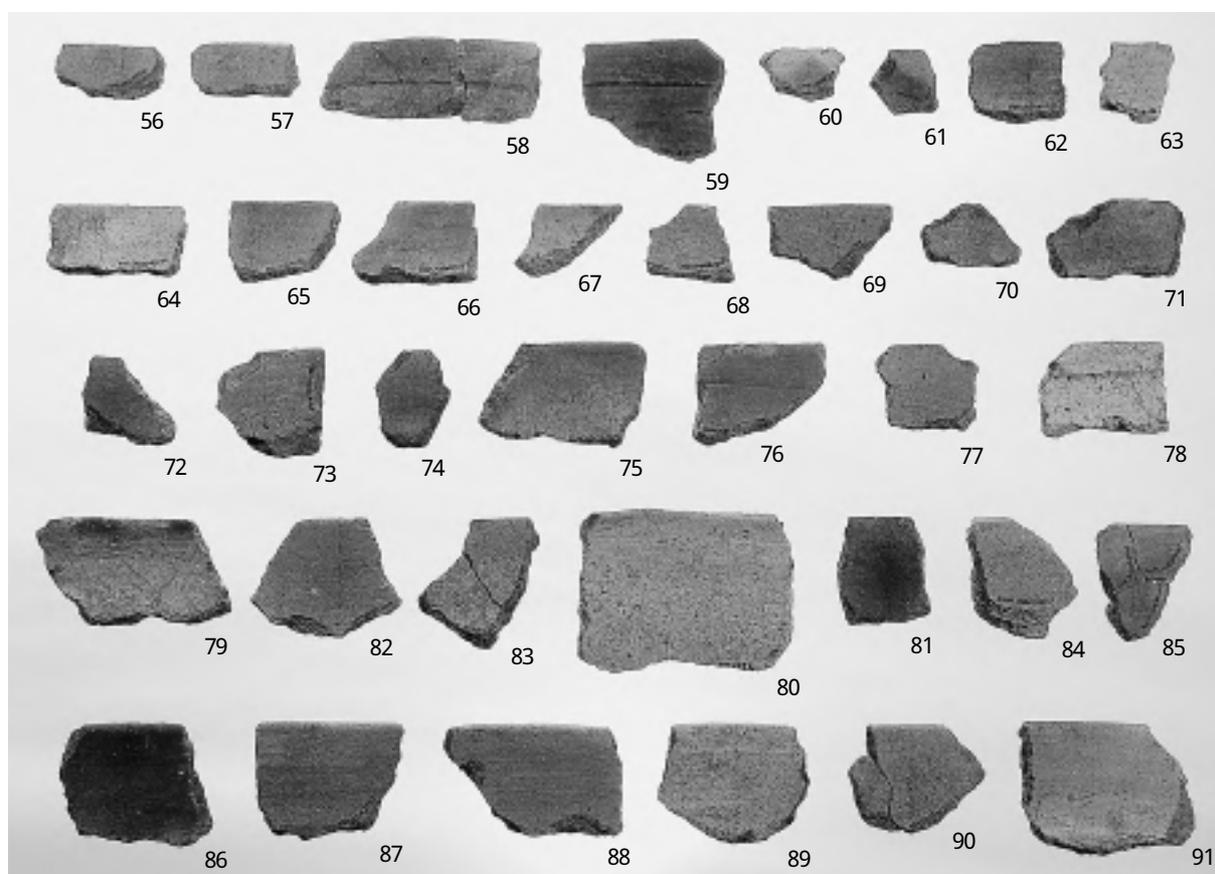
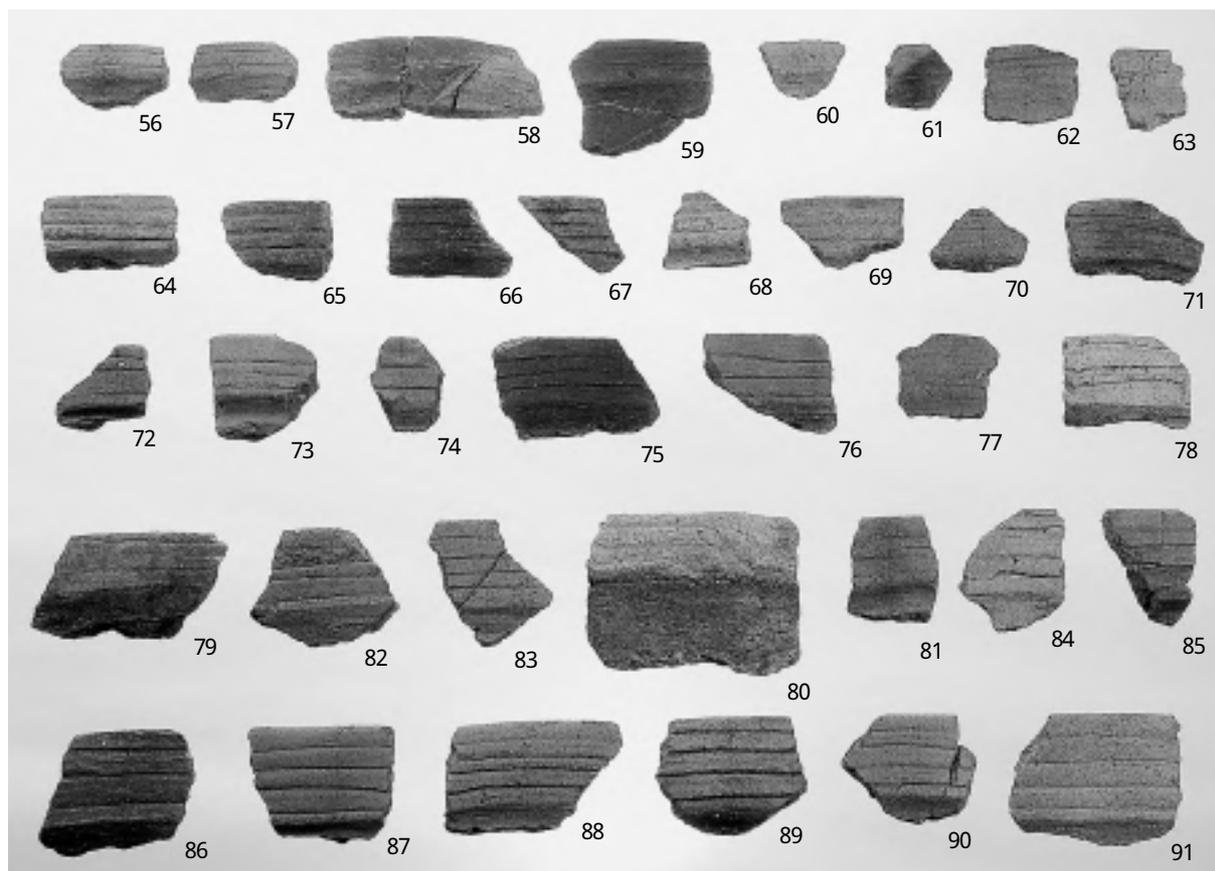
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



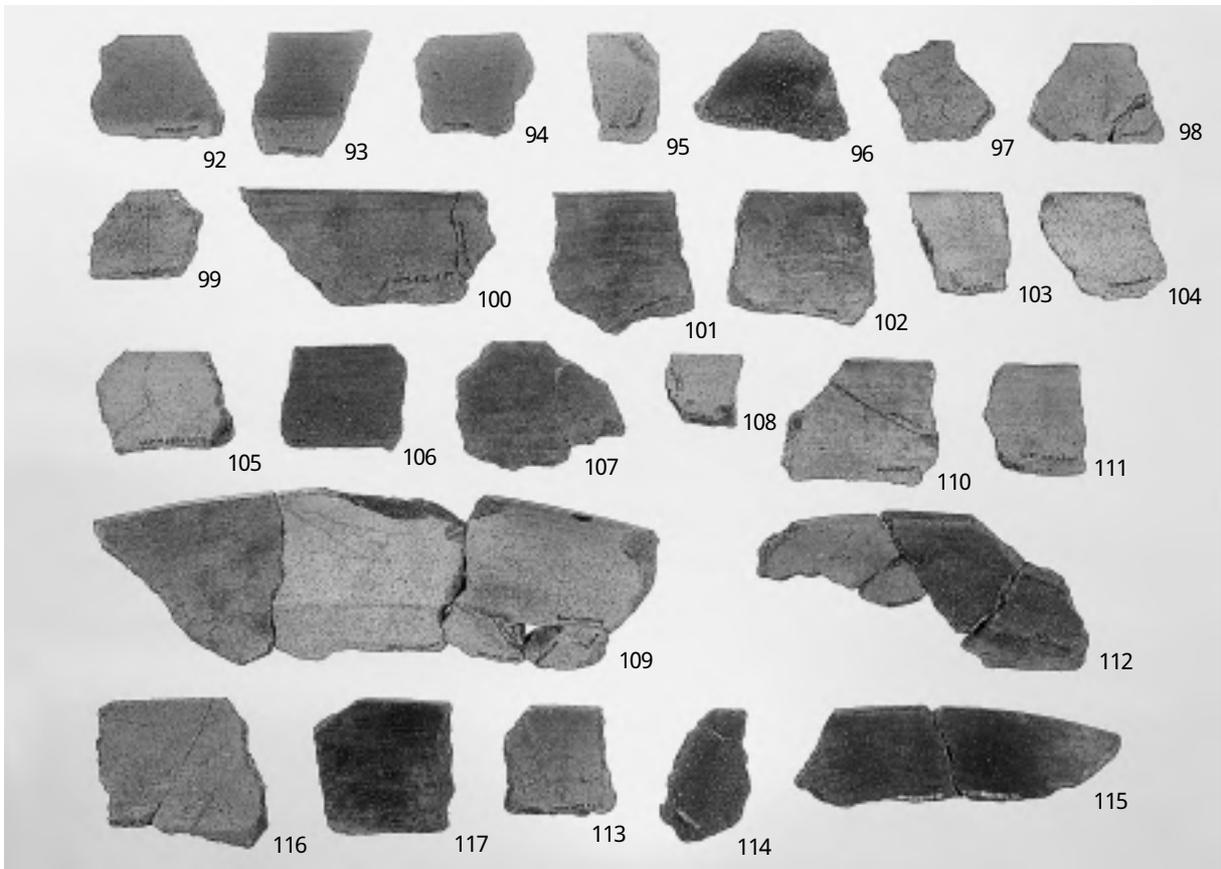
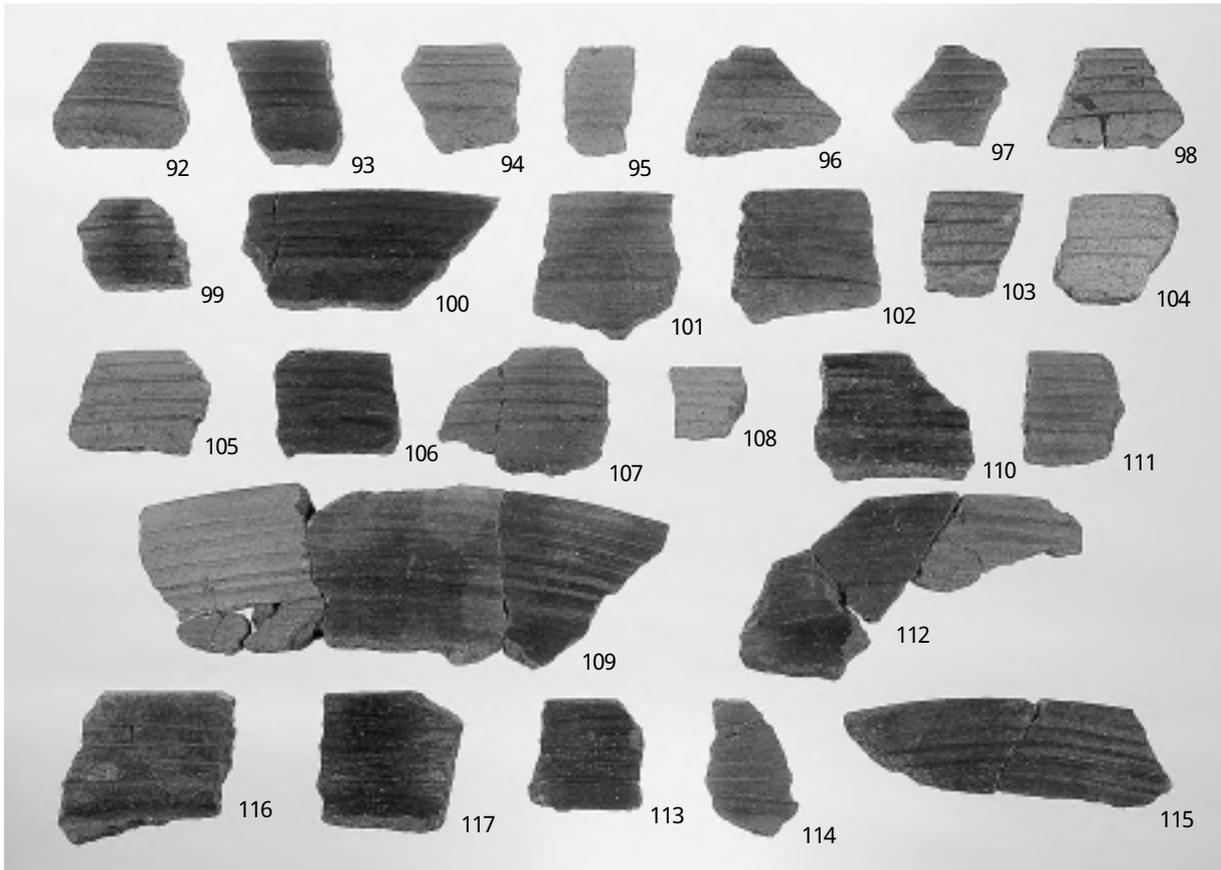
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



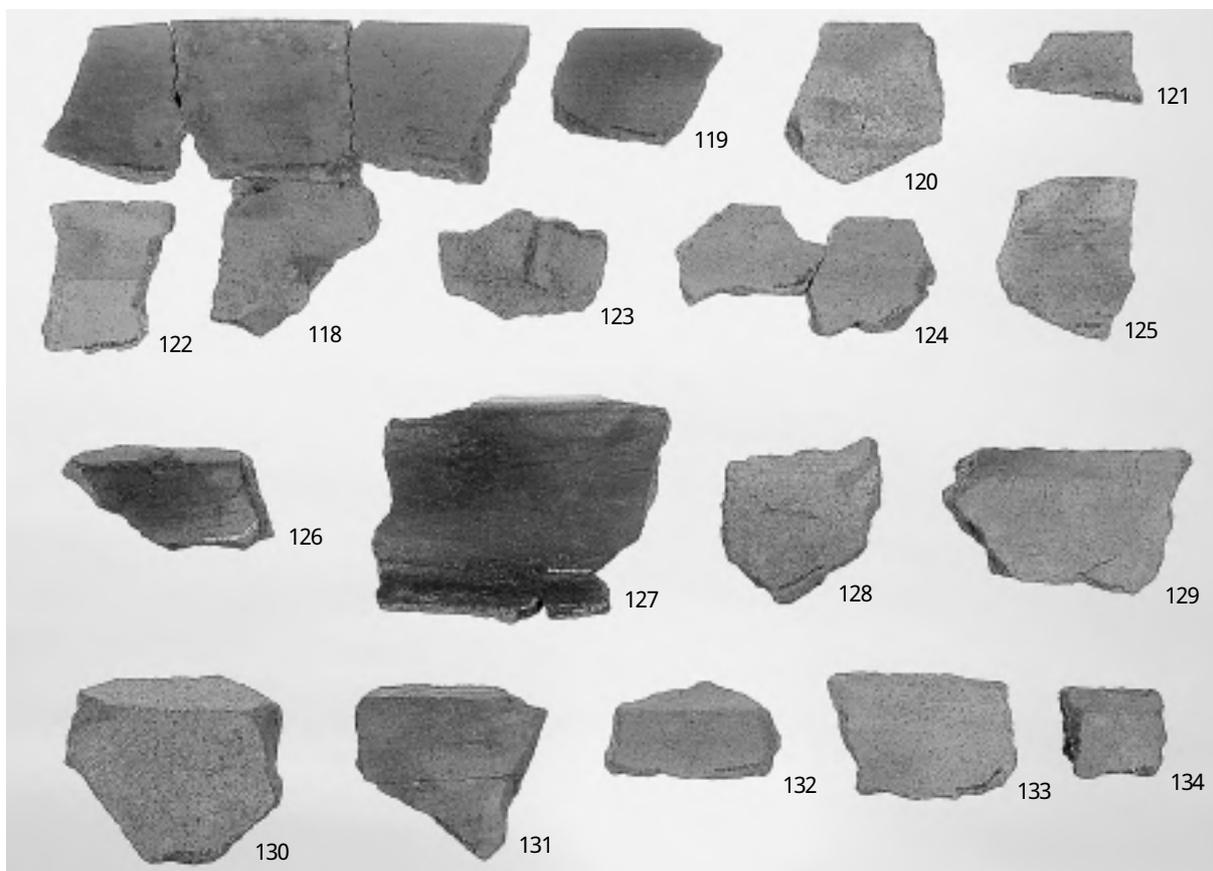
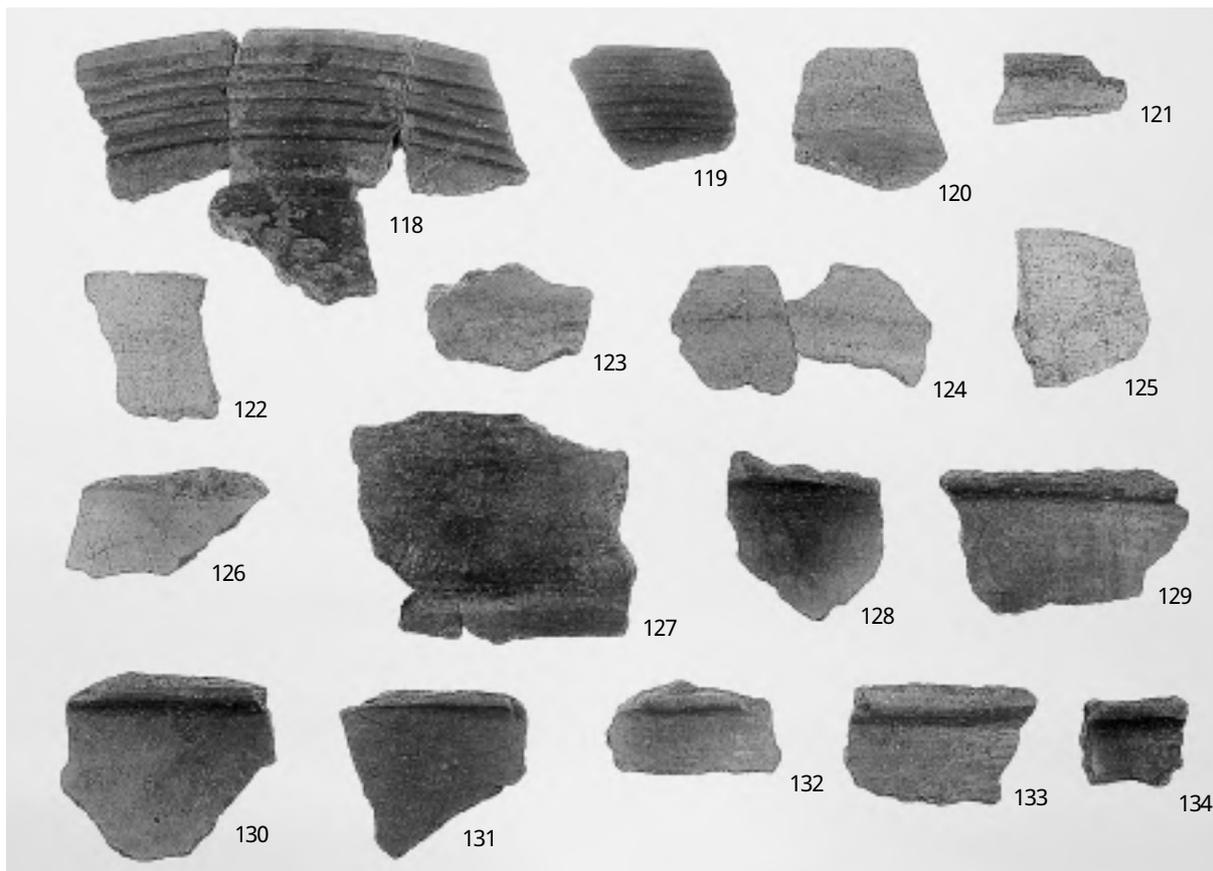
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



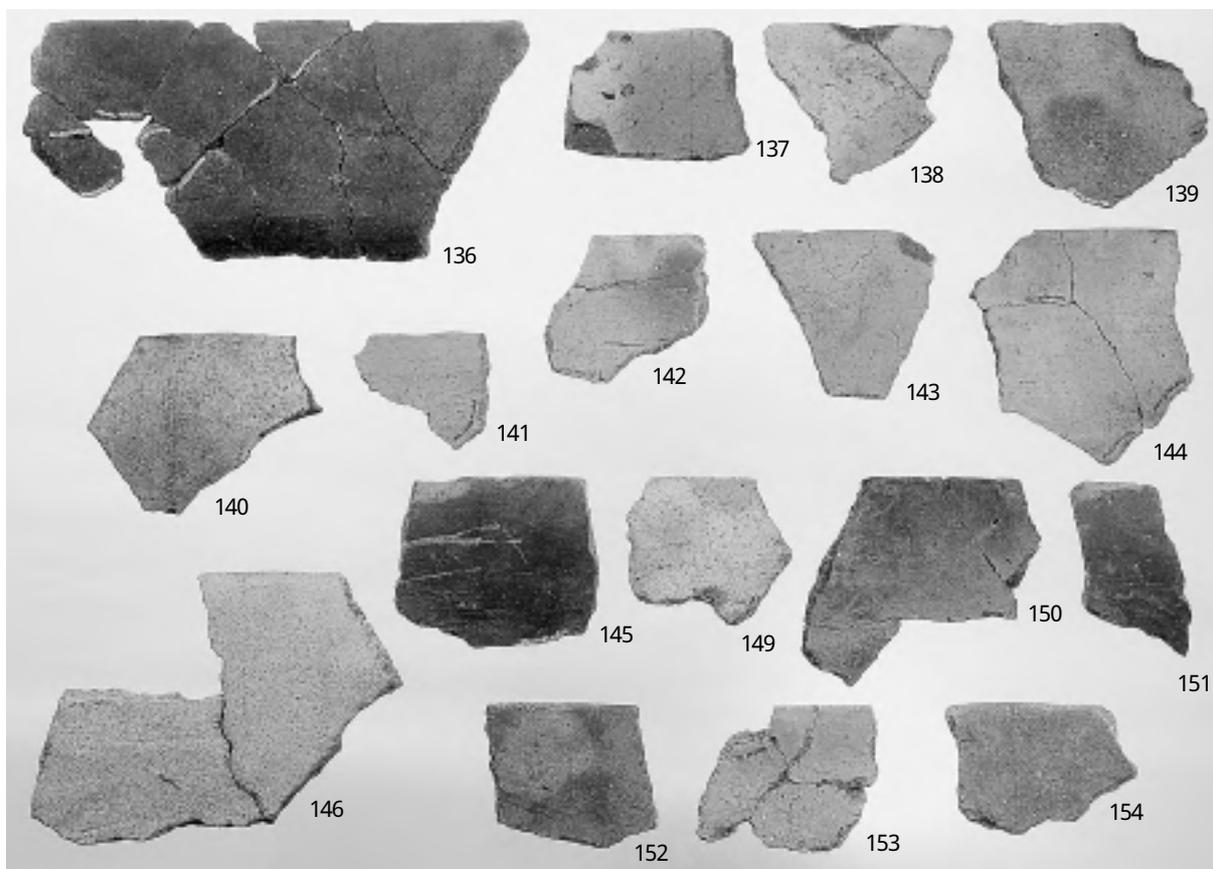
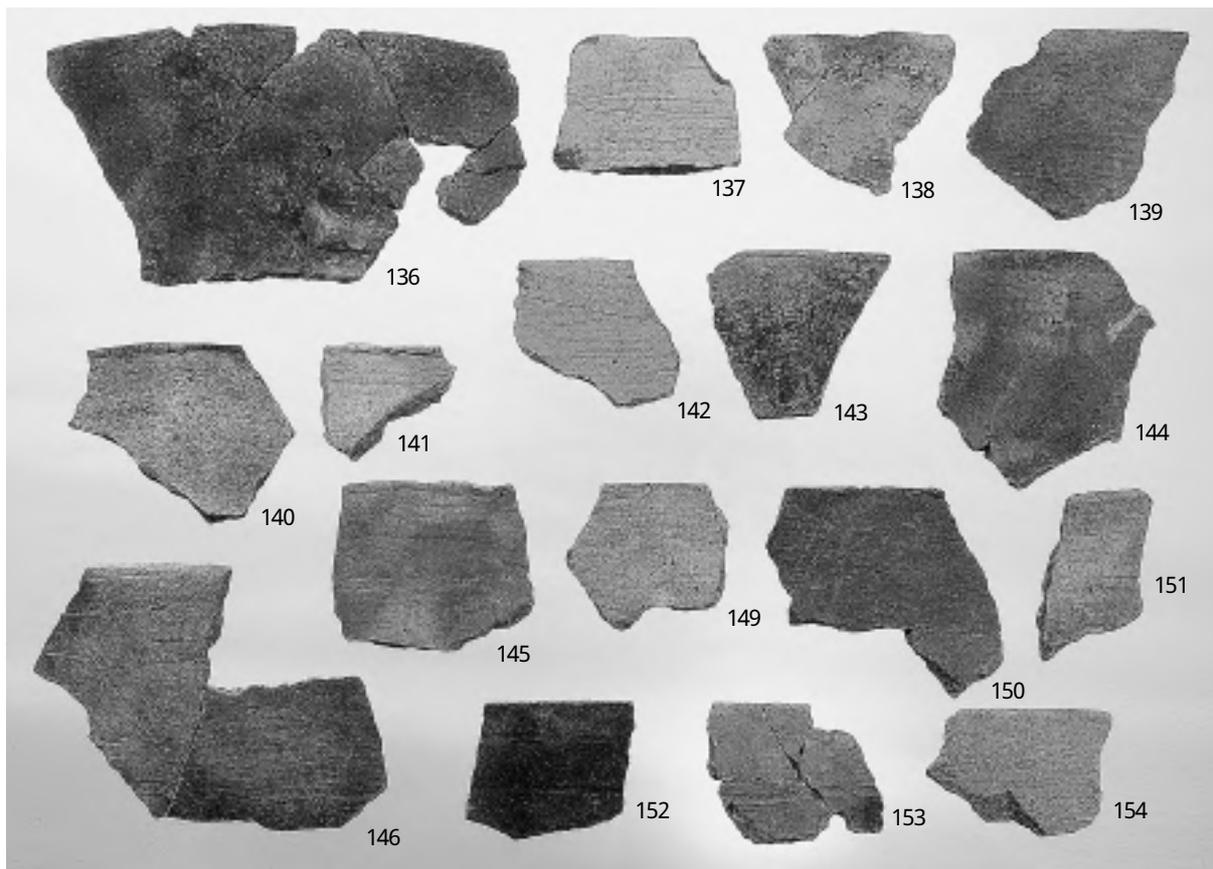
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



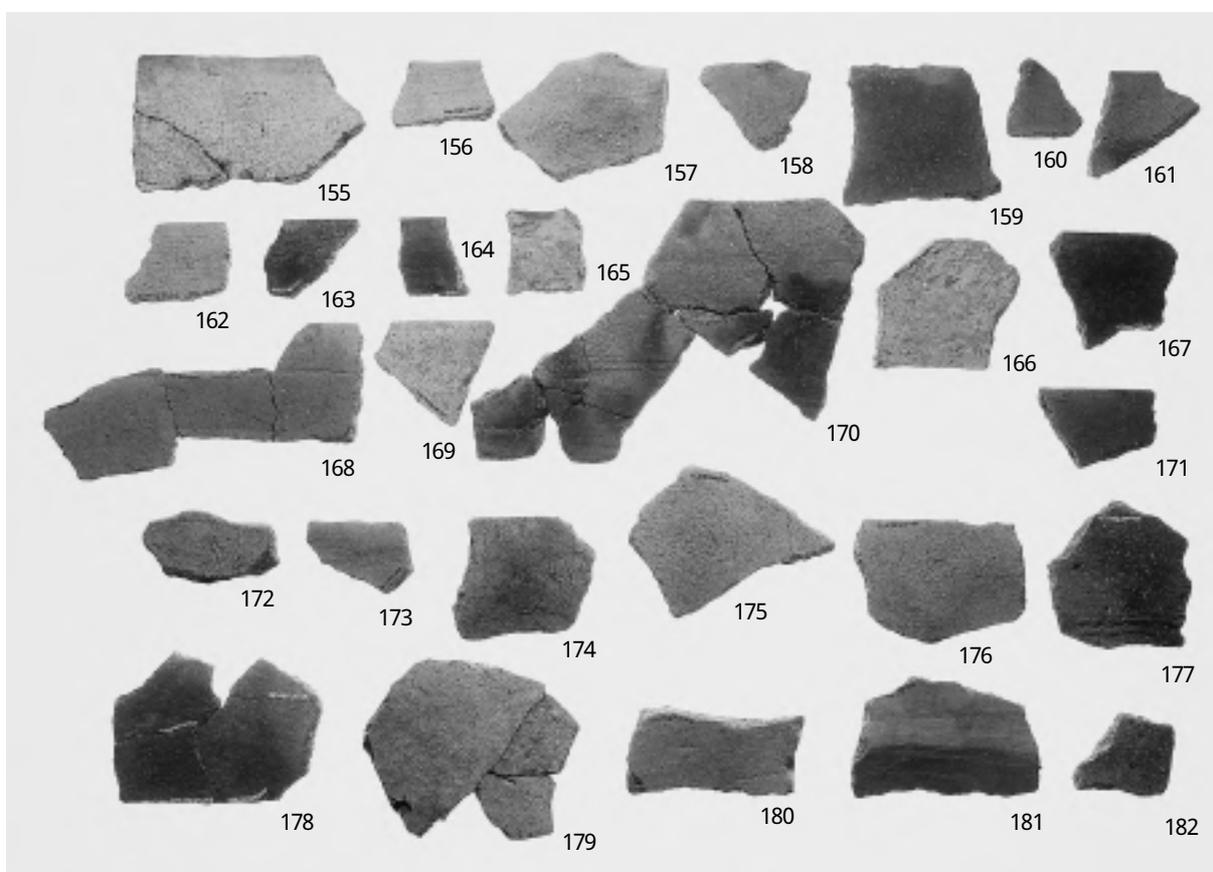
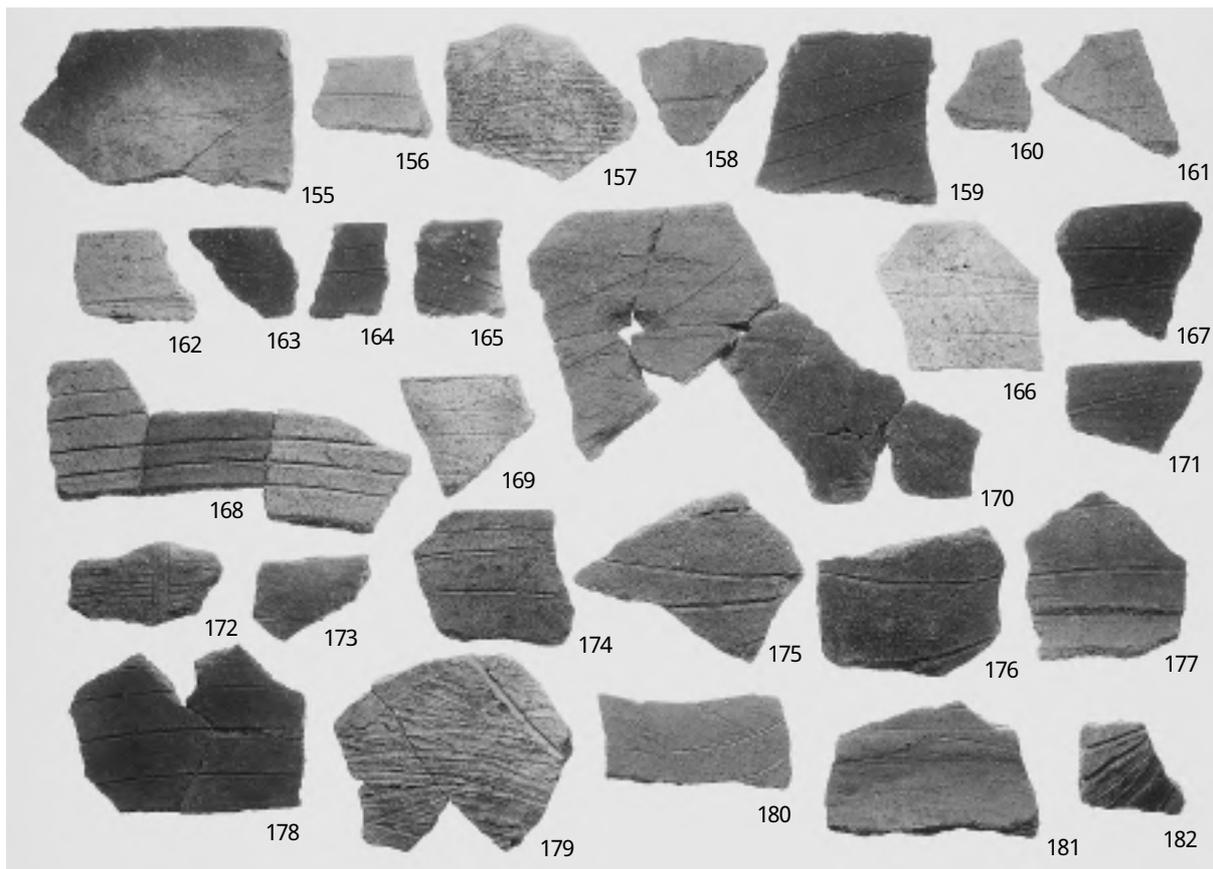
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



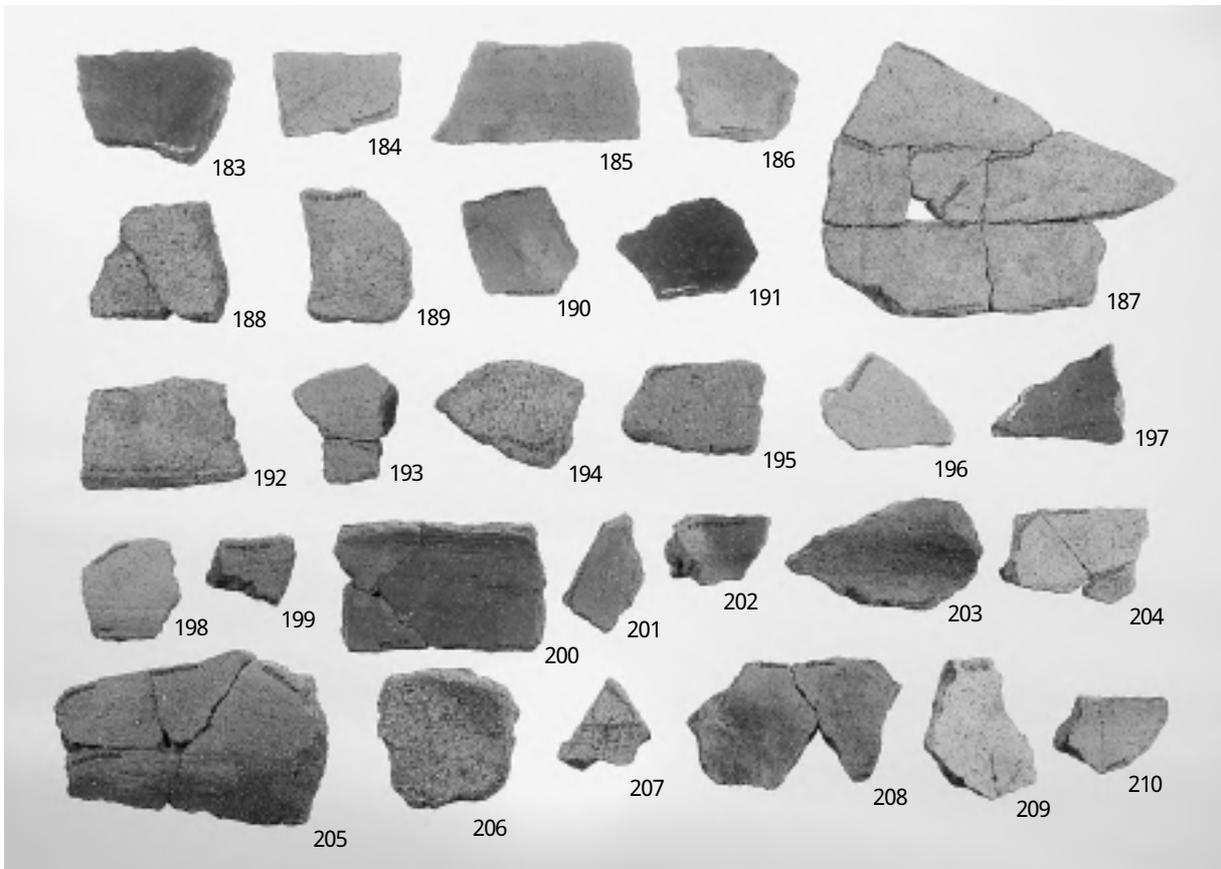
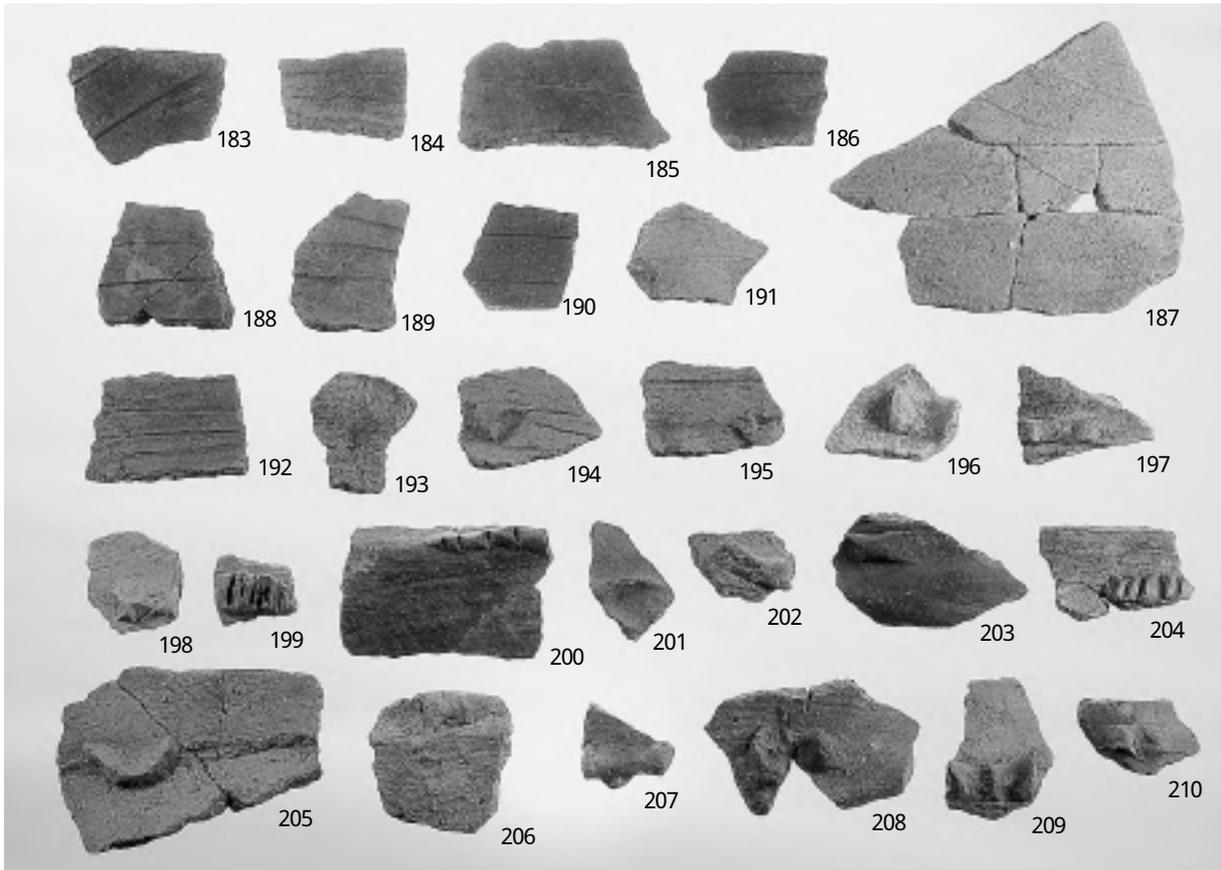
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



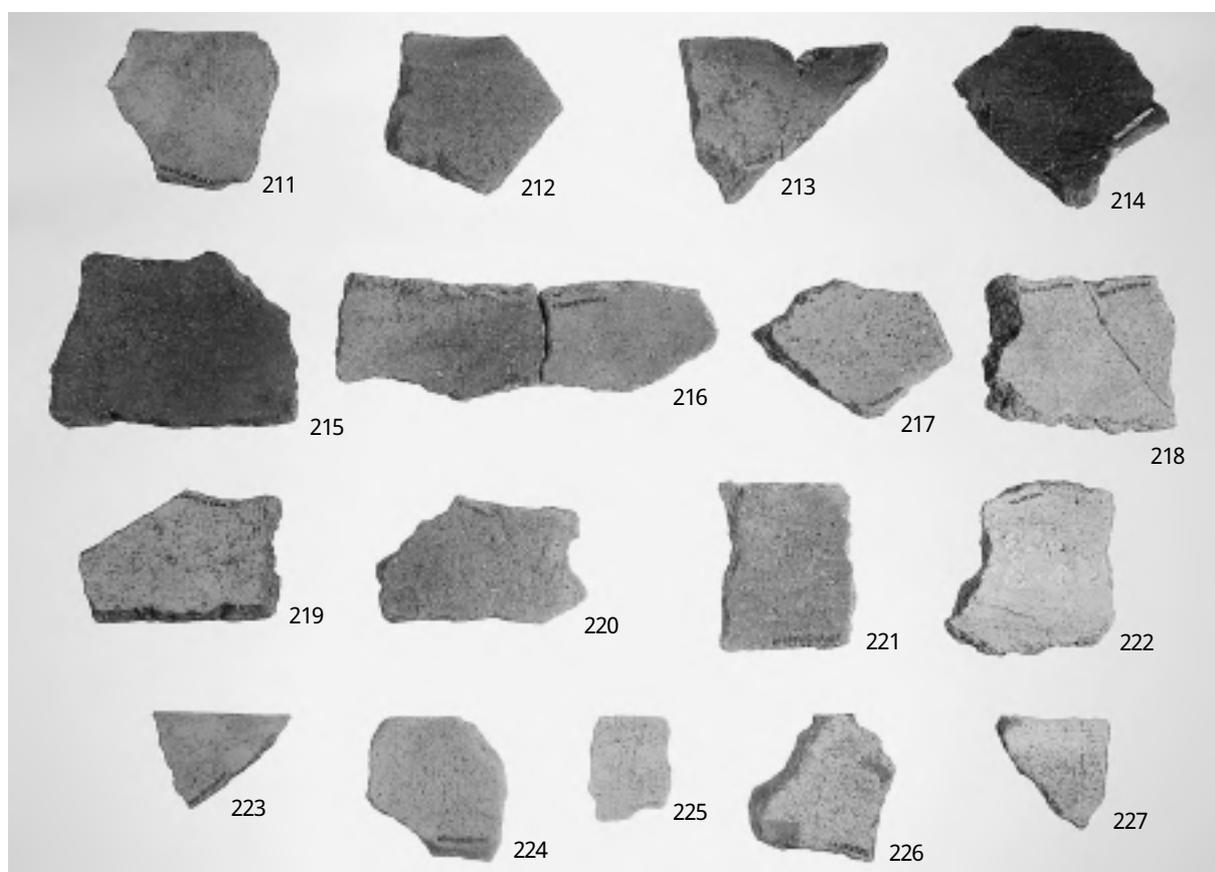
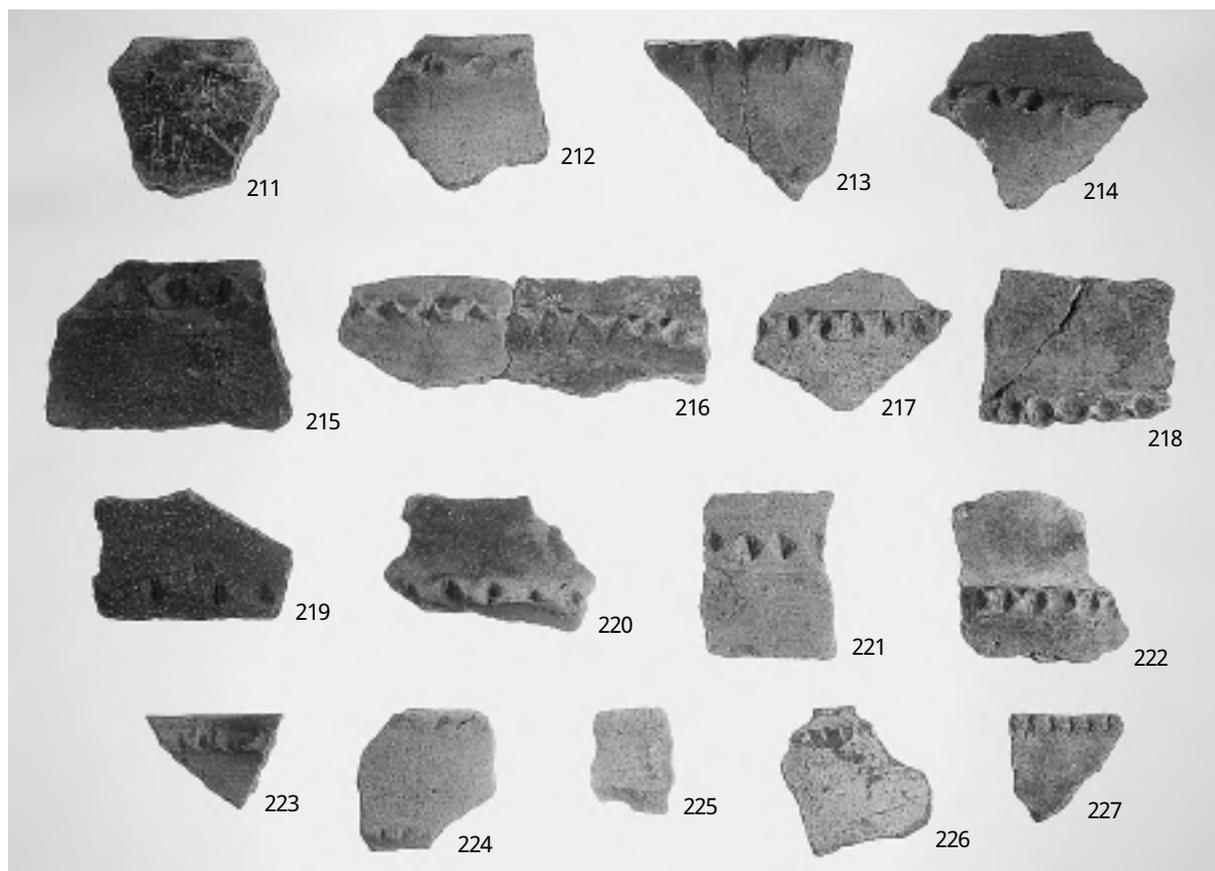
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）

図版52



211 (口縁部)



212 (口縁部)



213 (口縁部)



213 (胴部)



214 (胴部)



215 (胴部)



216 (胴部)



217 (胴部)



218 (胴部)



219 (胴部)



220 (胴部)



221 (胴部)



222 (胴部)



223 (口縁部)



224 (口縁部)



224 (胴部)



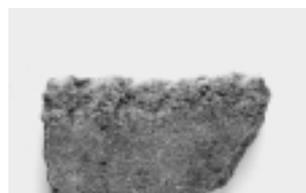
225 (口縁部)



225 (口唇部)



226 (口縁部)



227 (口縁部)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区・刻目突帯文土器拡大)



228



229



230



231



232



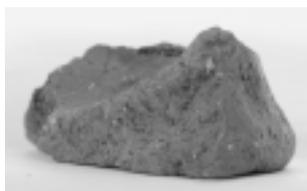
233



234



235



236



237



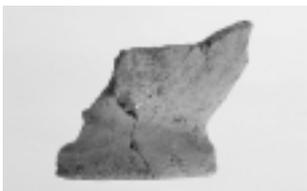
238



239



240



241



242



243



244



245



246



247



248



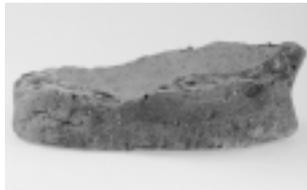
249



250



251



252



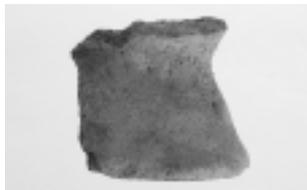
253



254



255



256



257



258



259

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）

図版54



260



261



262



263



264



240 (底面)



257 (底面)



258 (底面)



260 (底面)

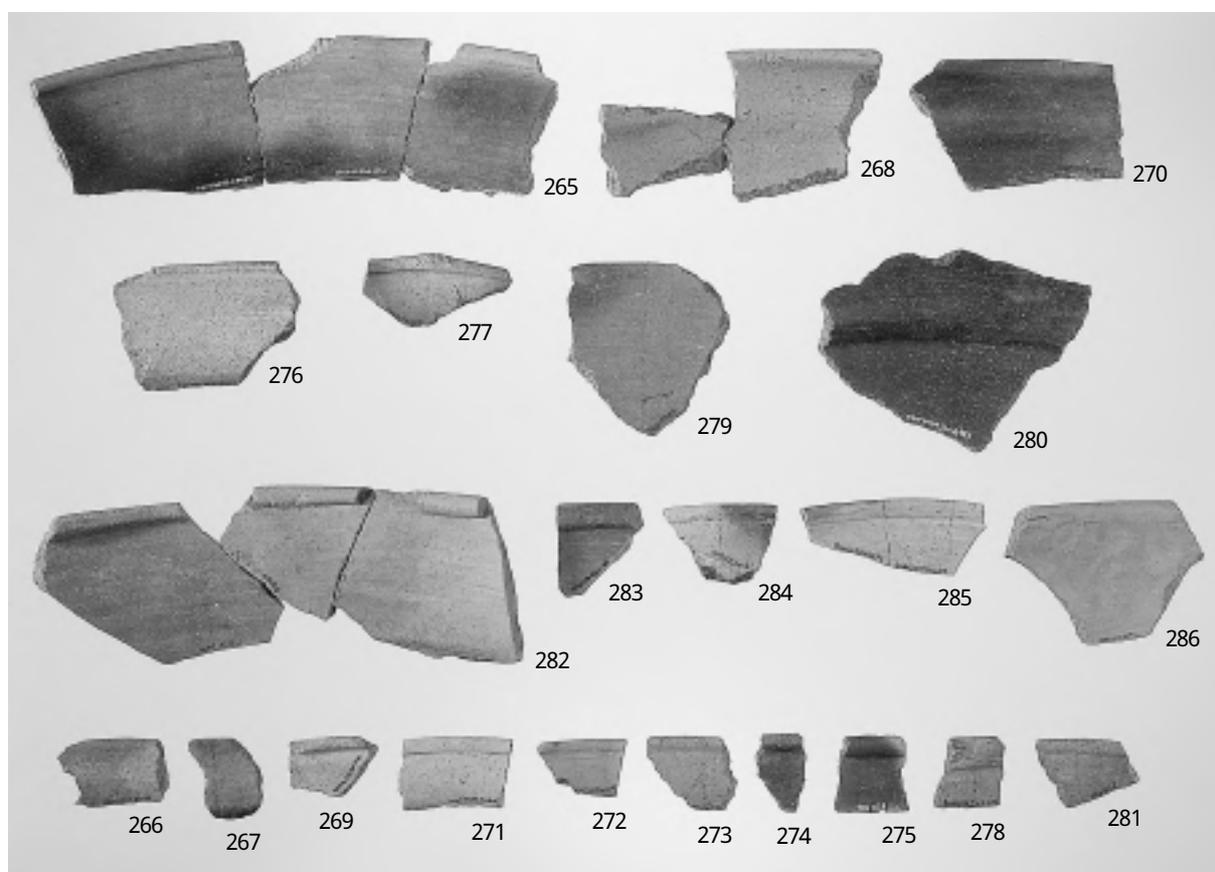
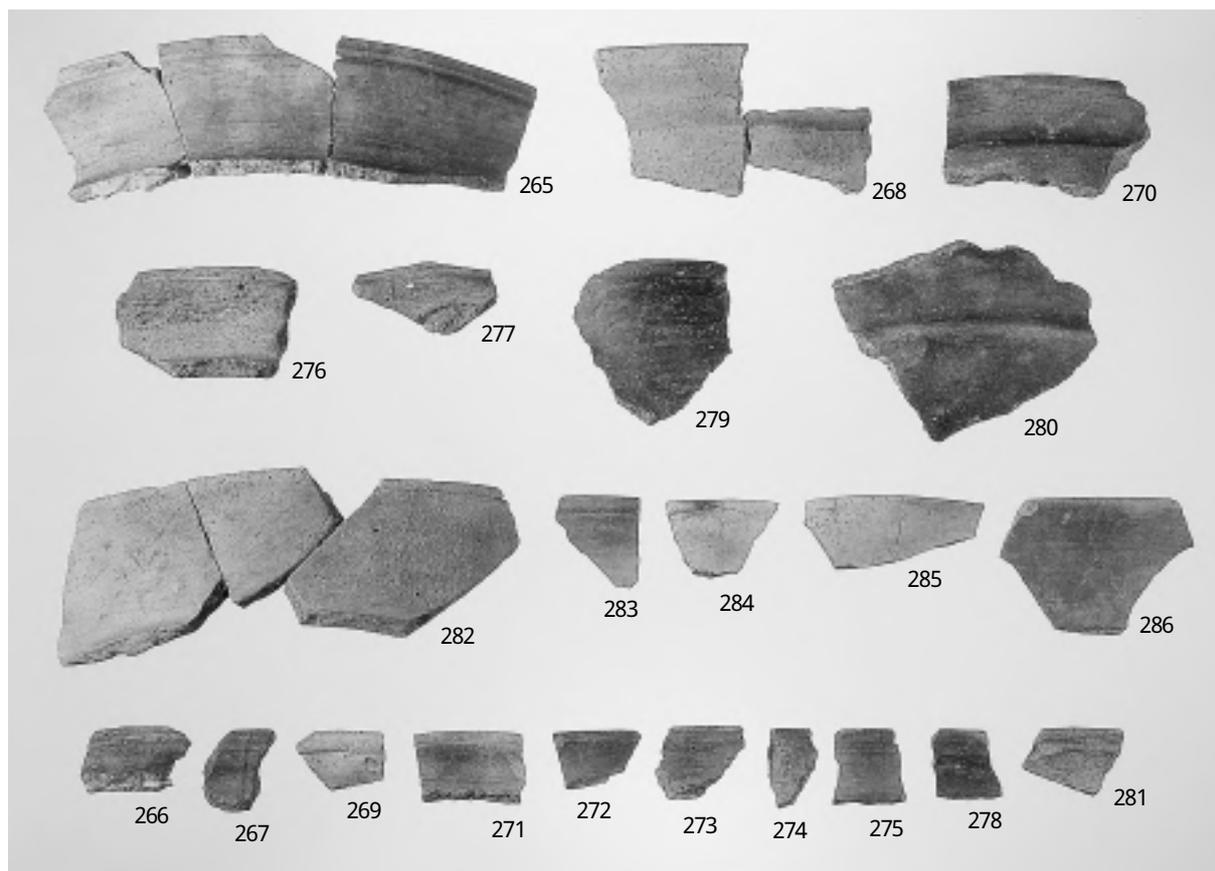


263 (底面)

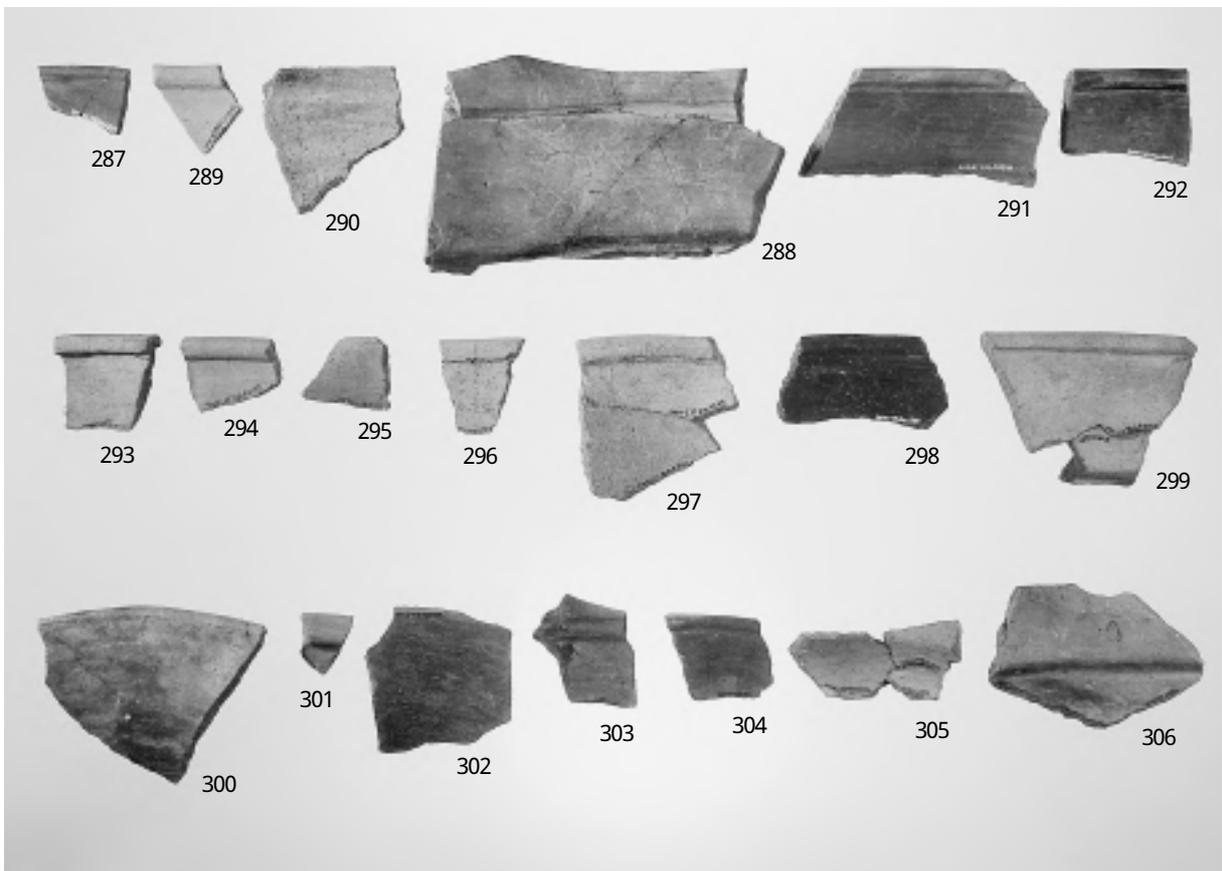
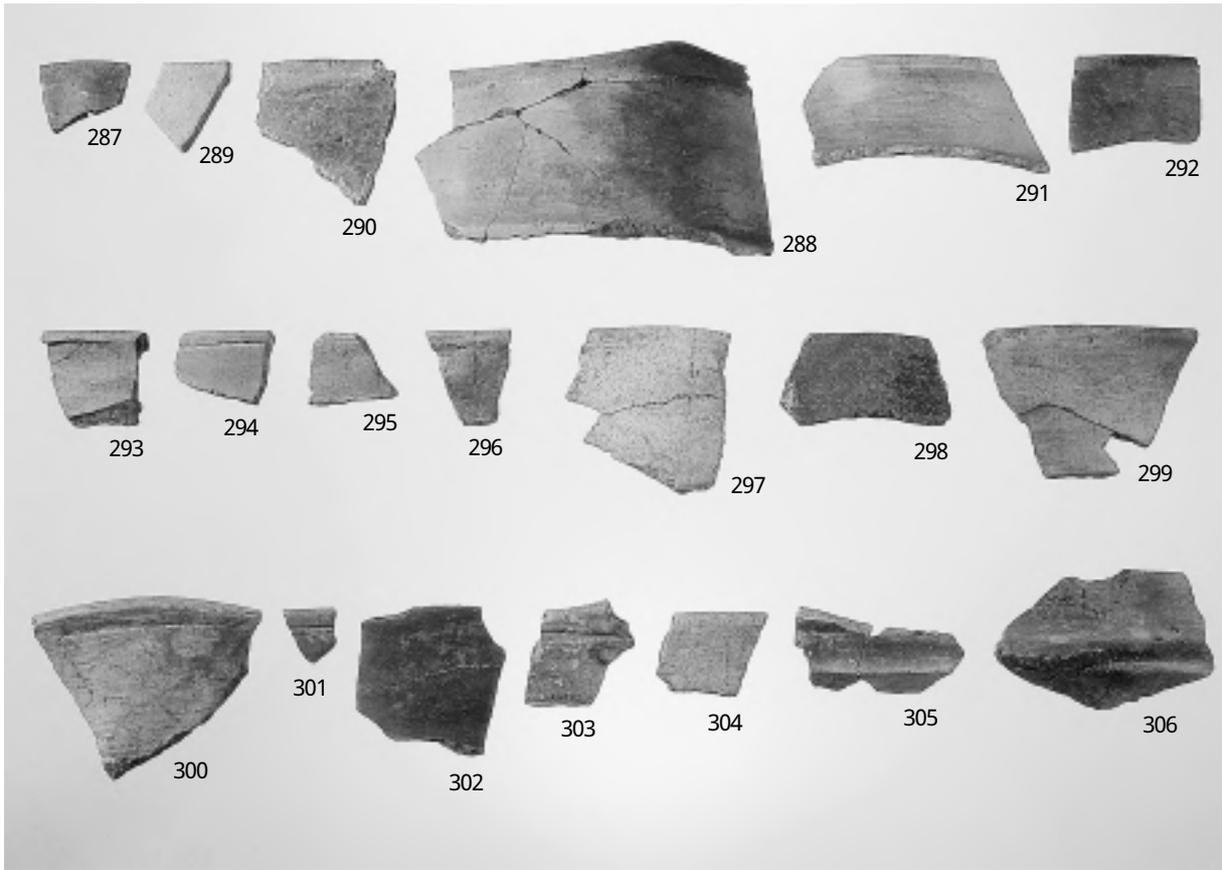


264 (底面)

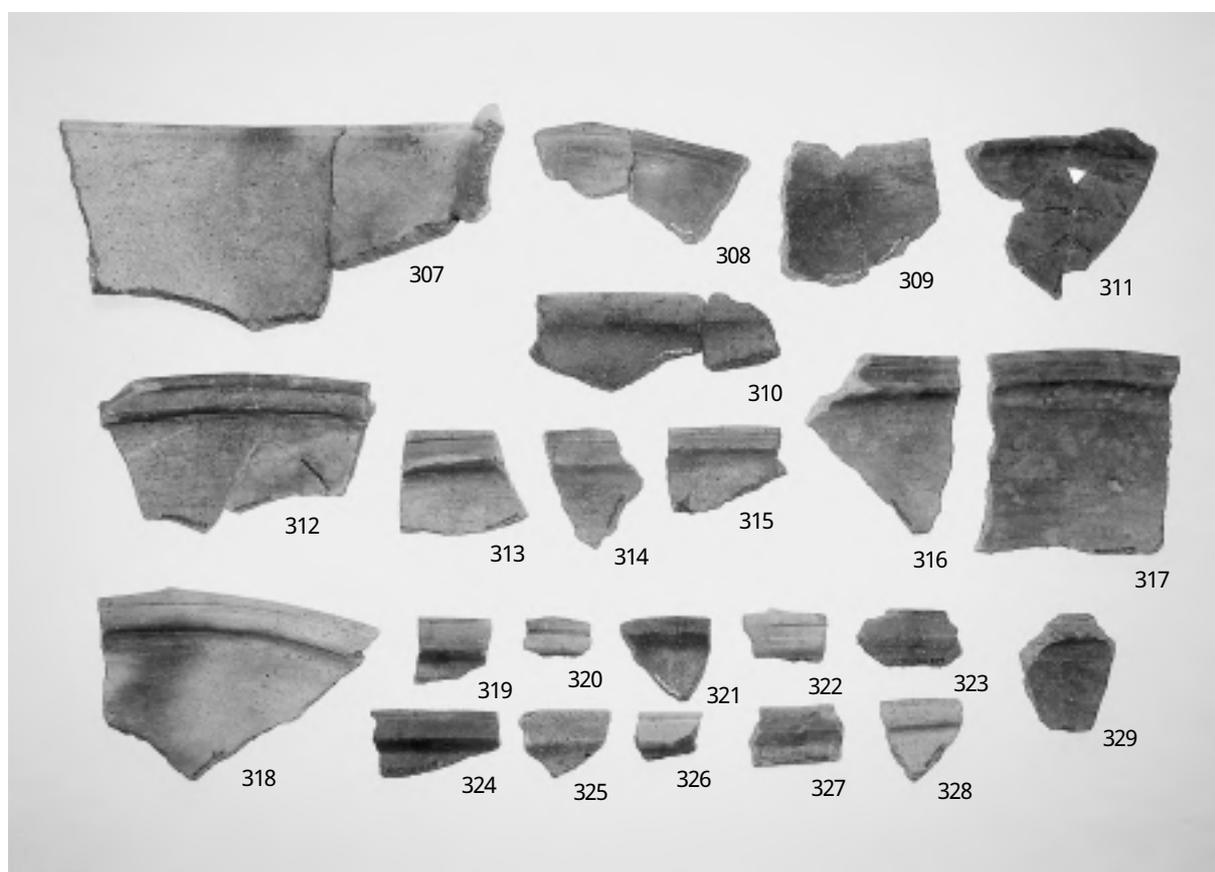
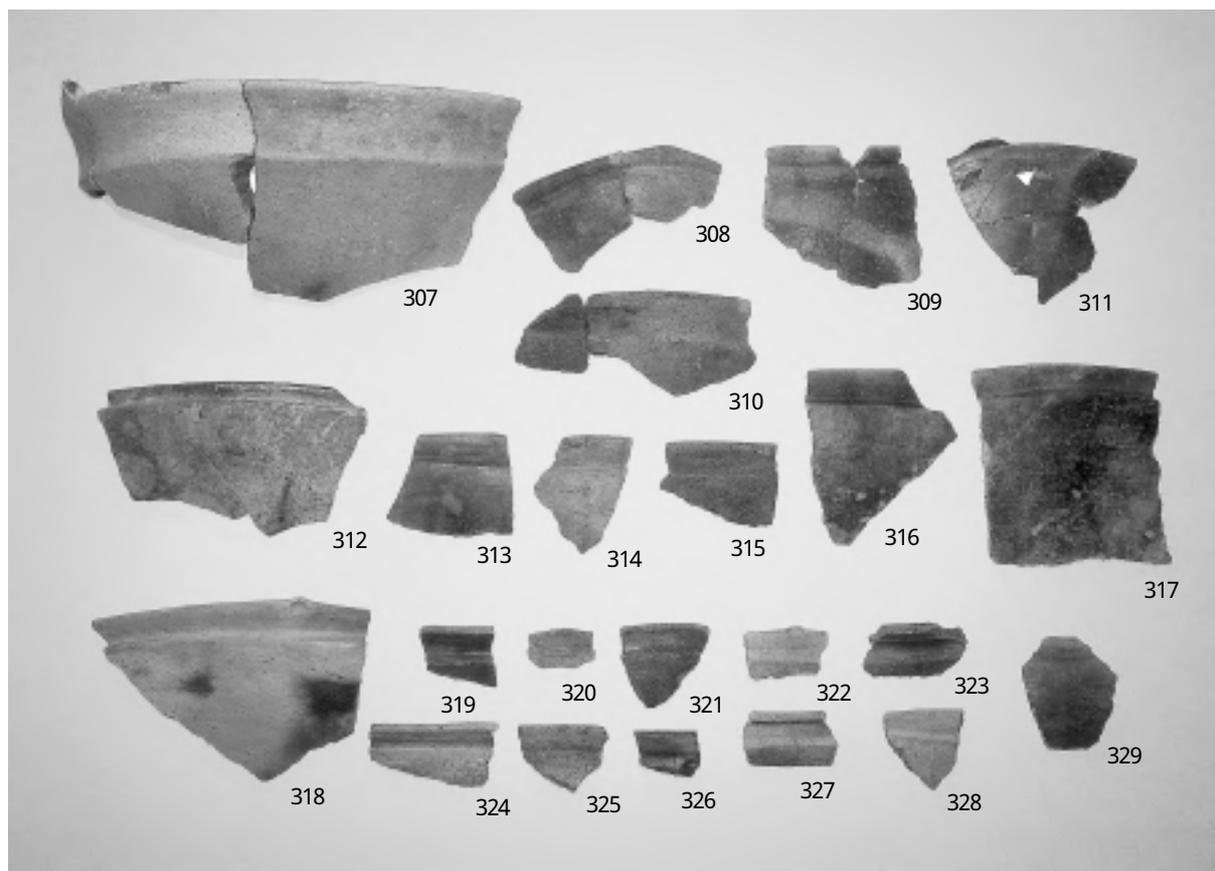
縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)



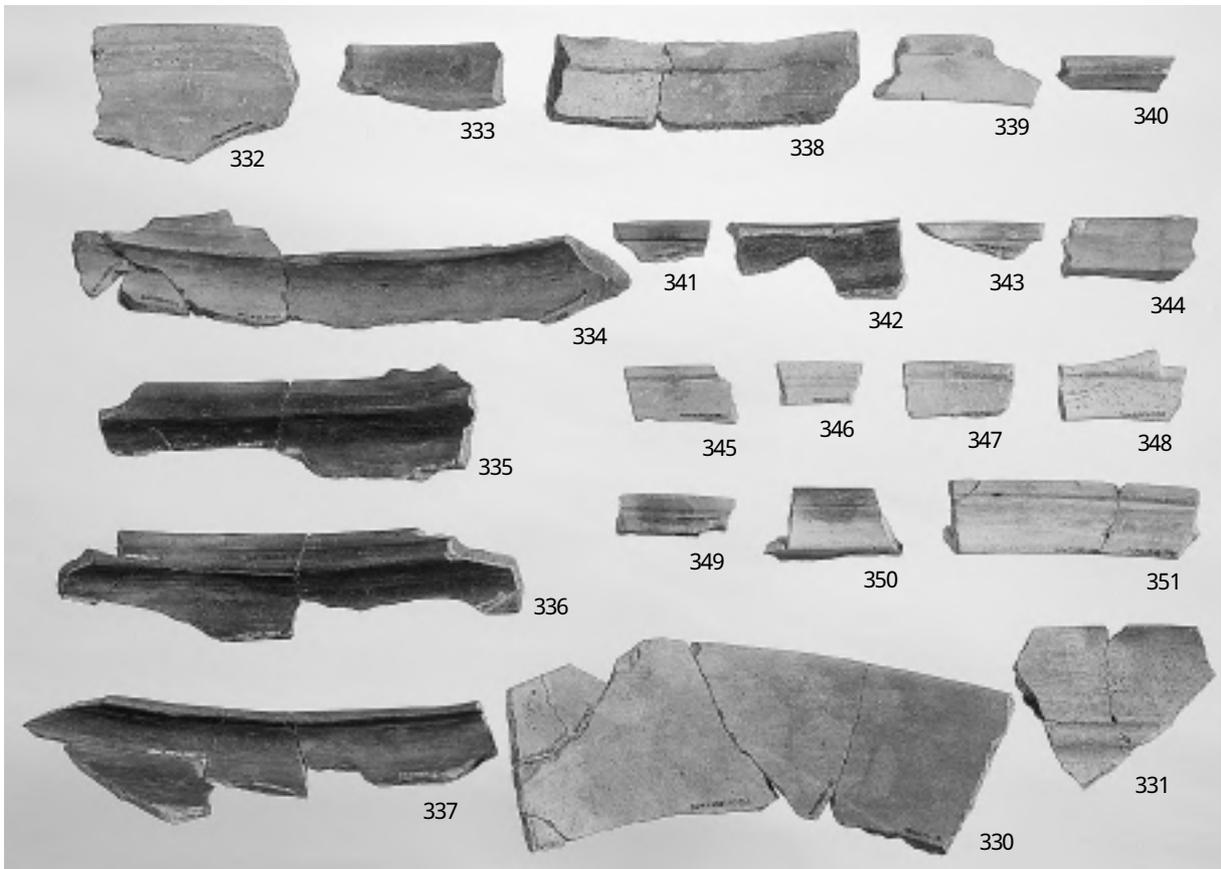
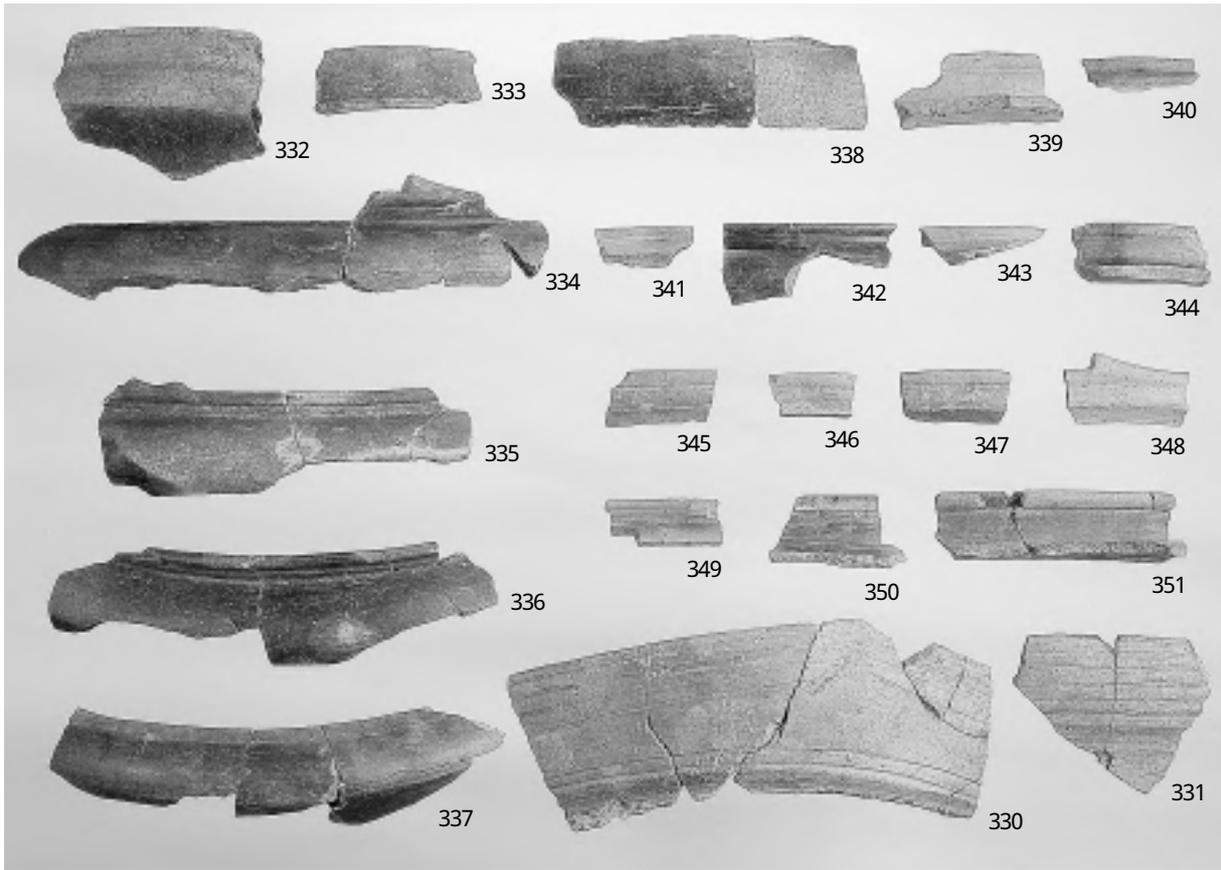
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



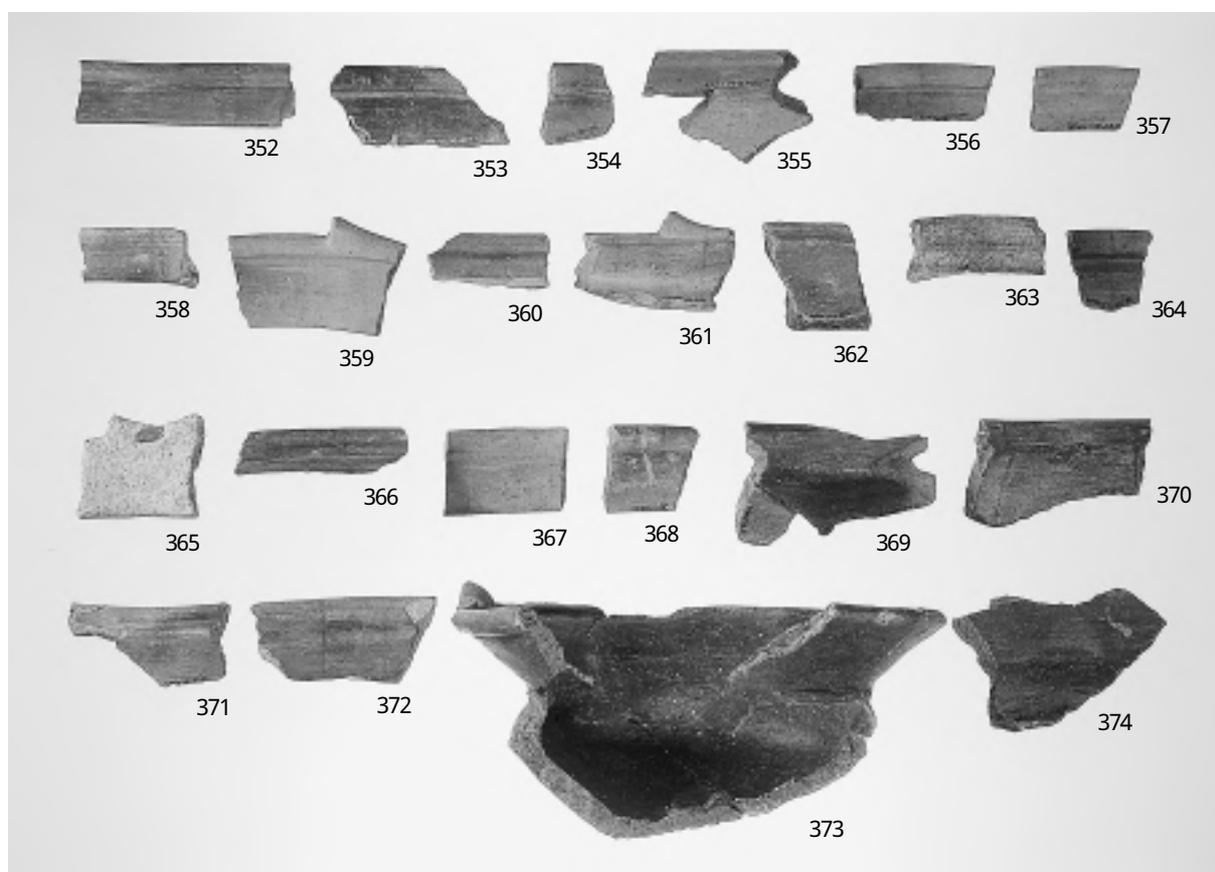
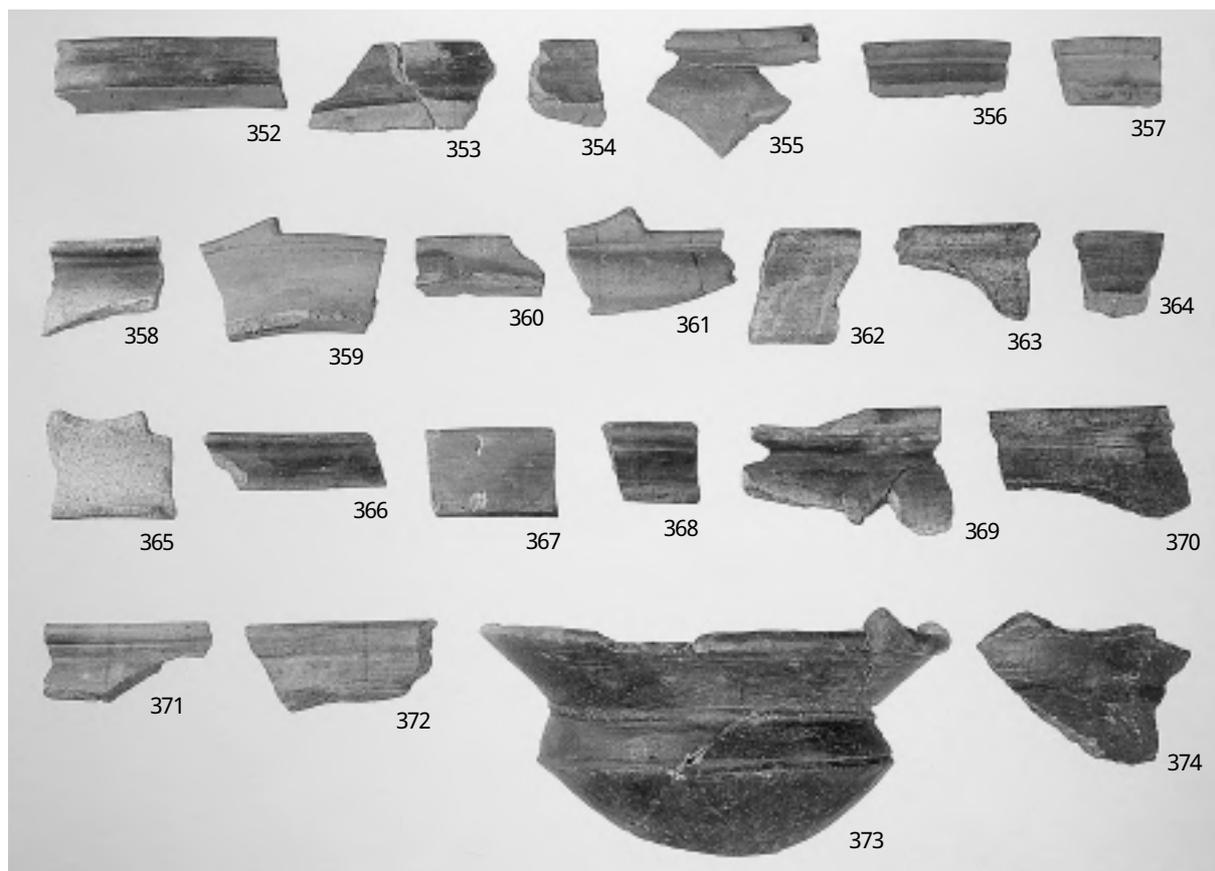
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



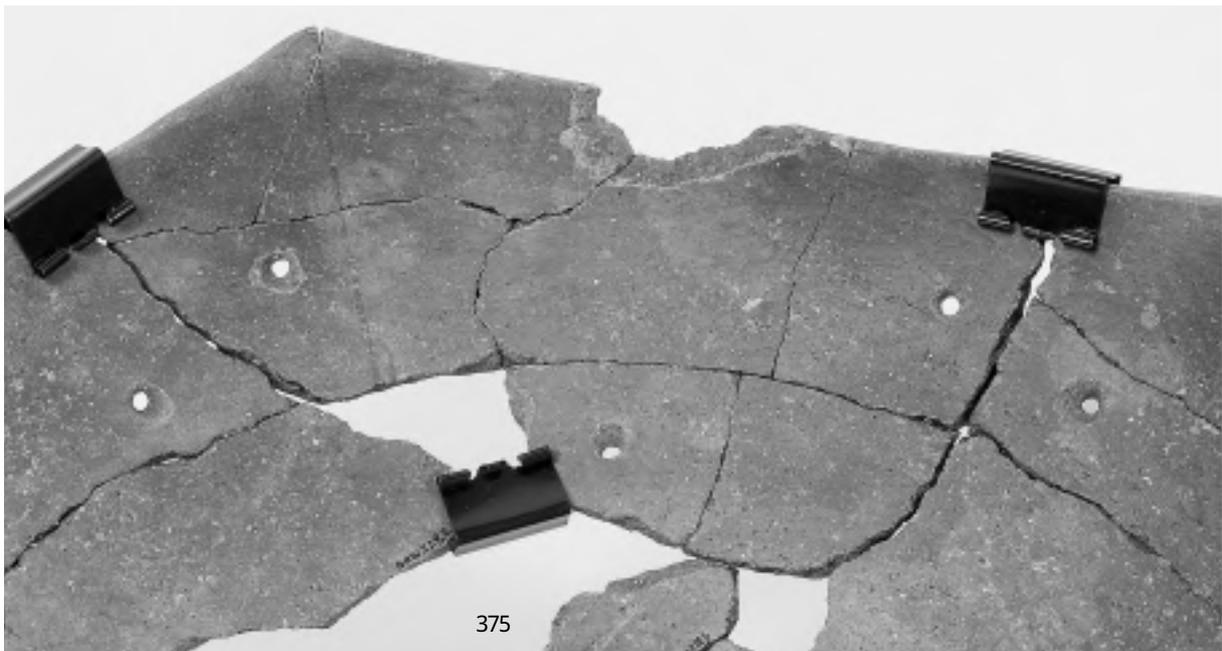
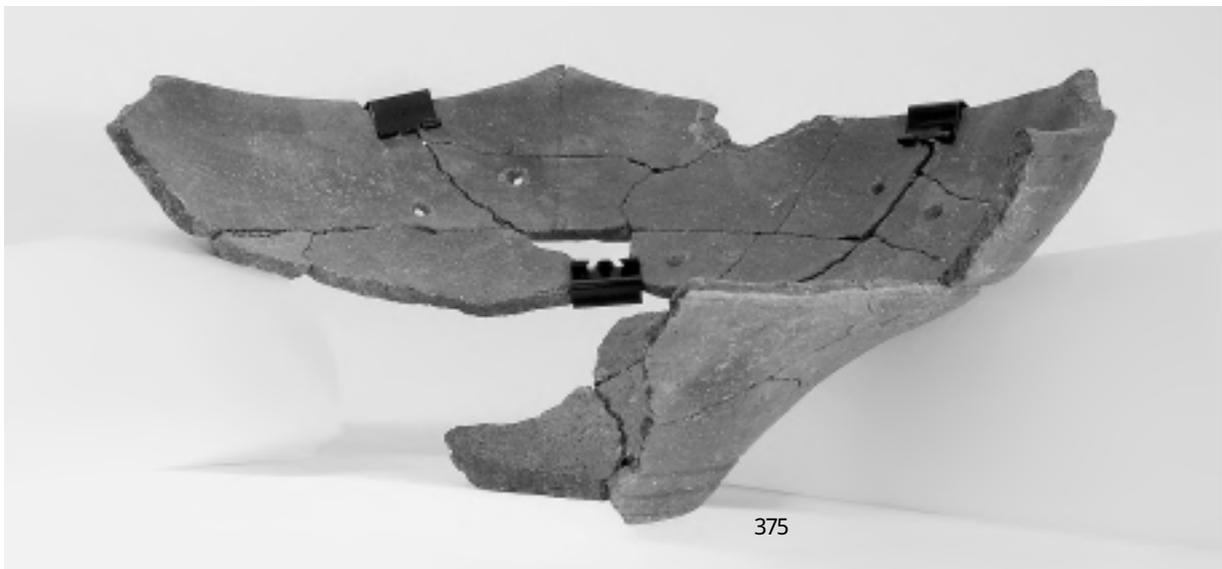
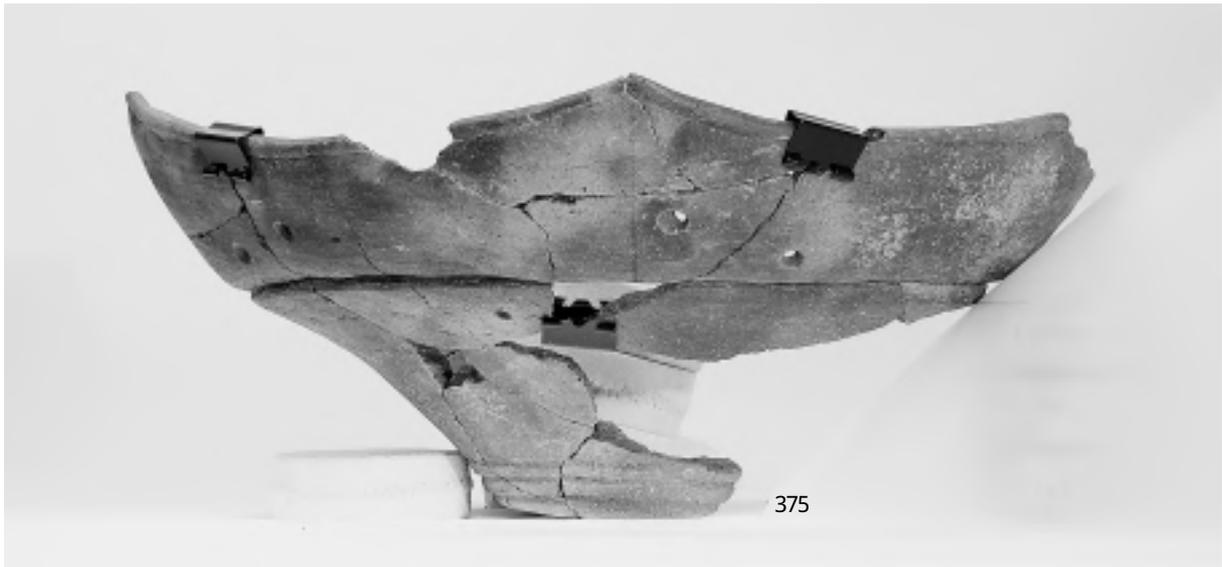
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



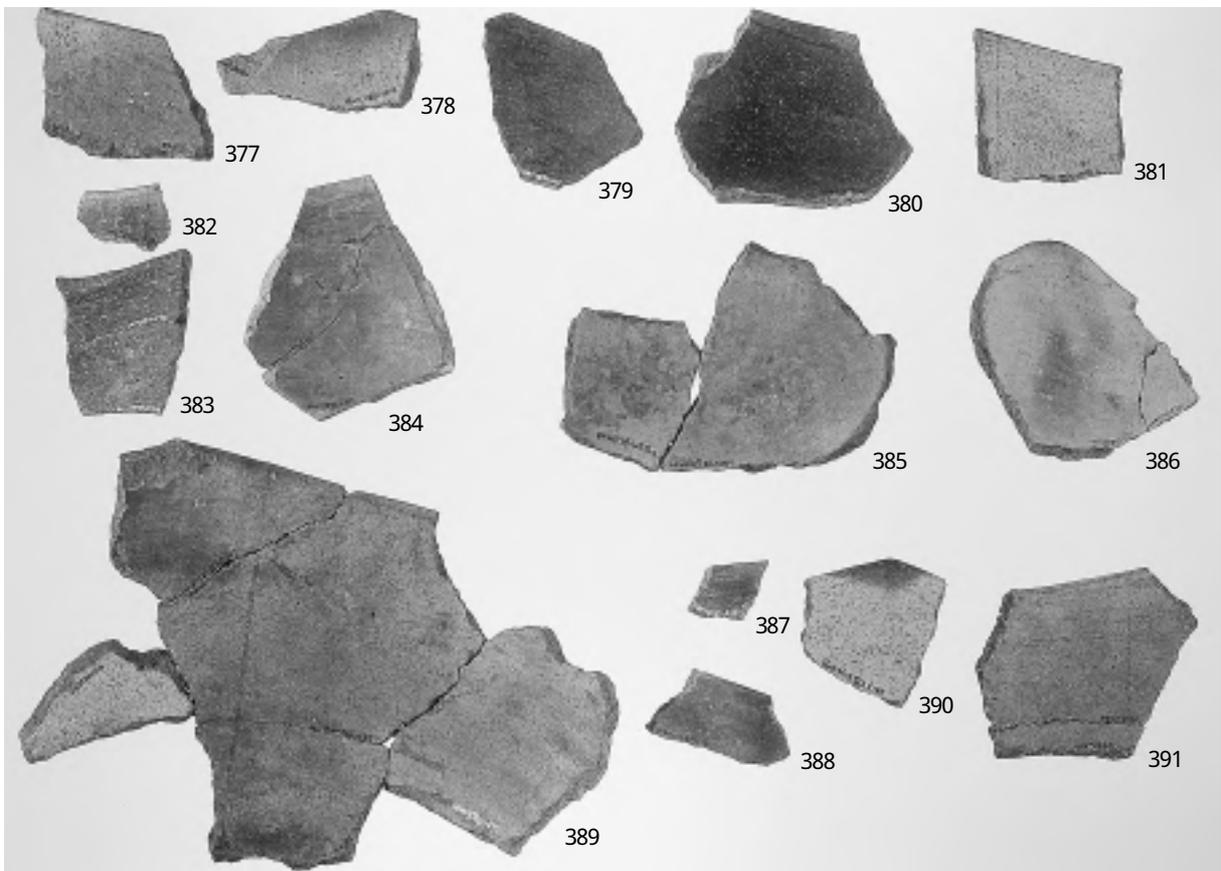
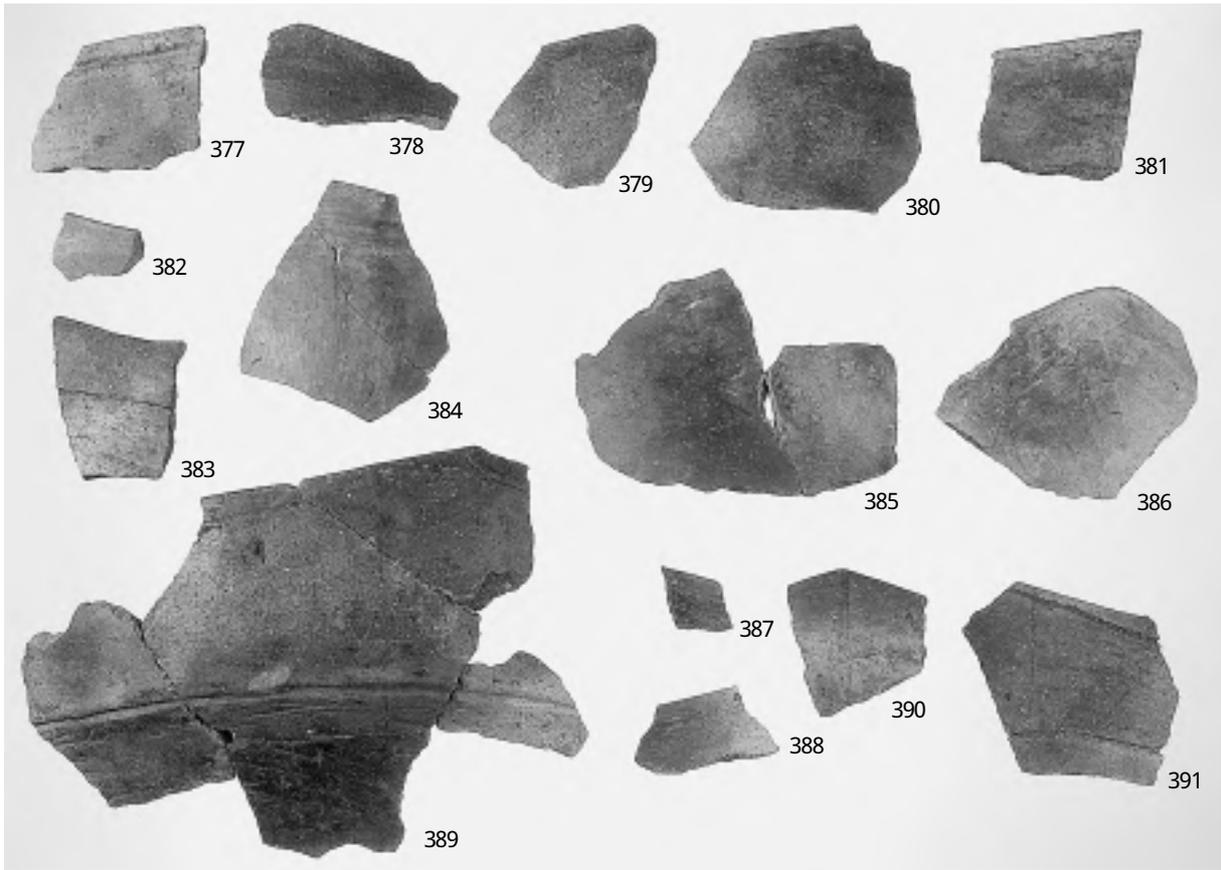
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



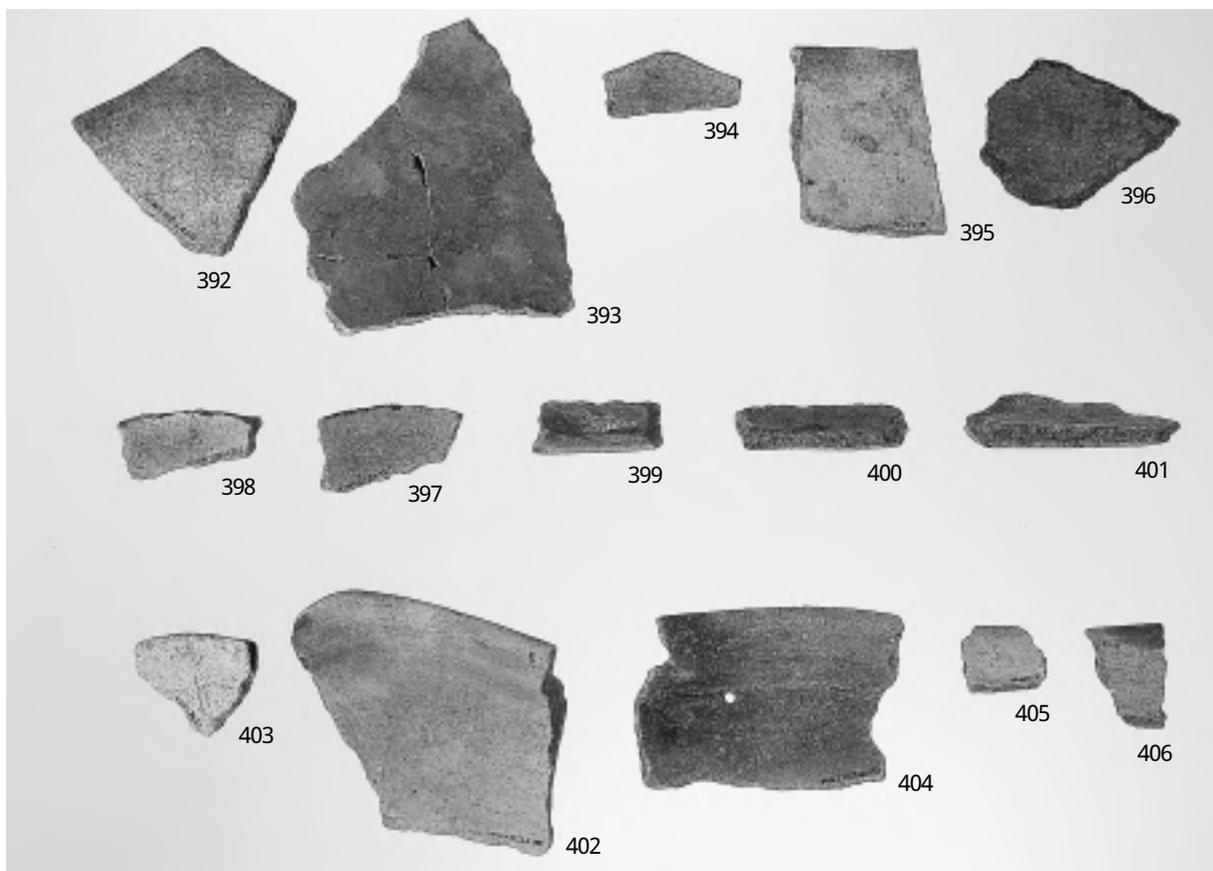
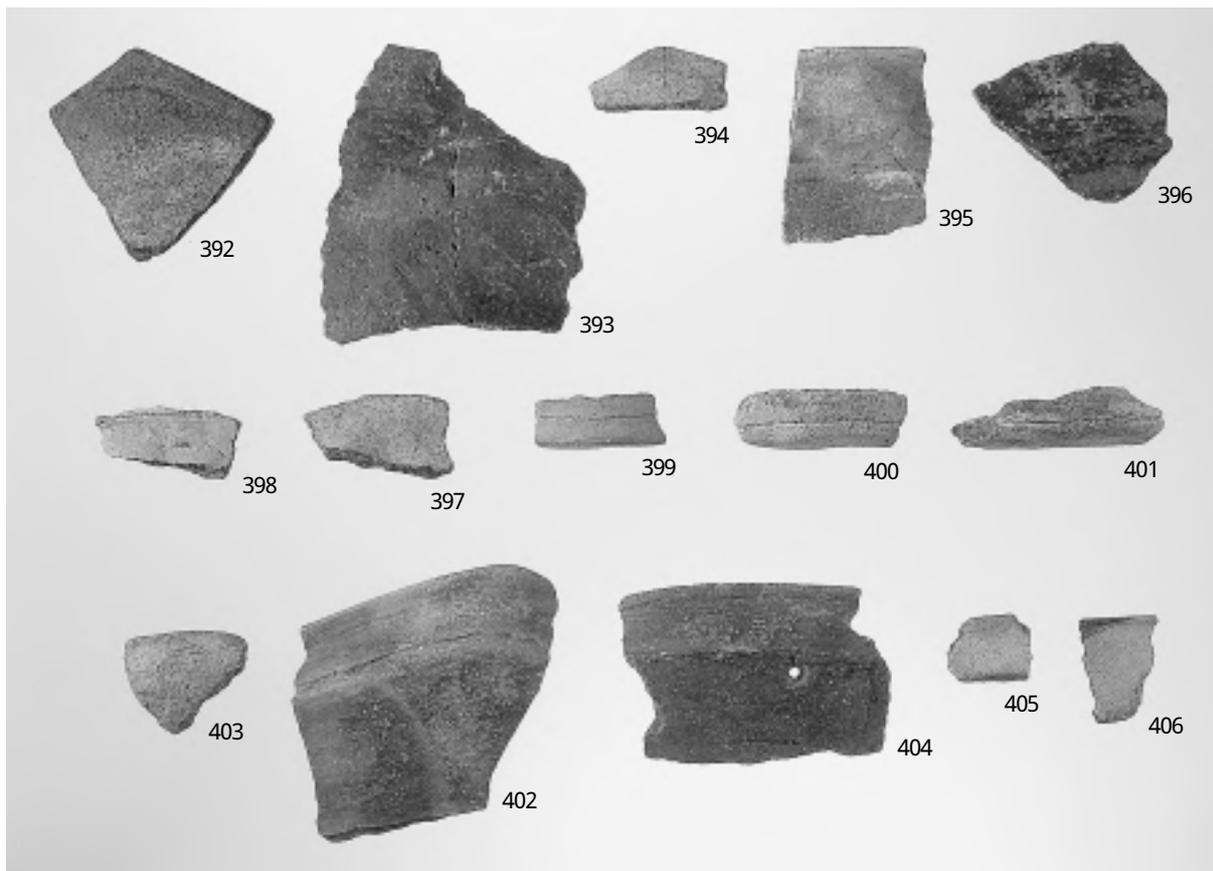
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



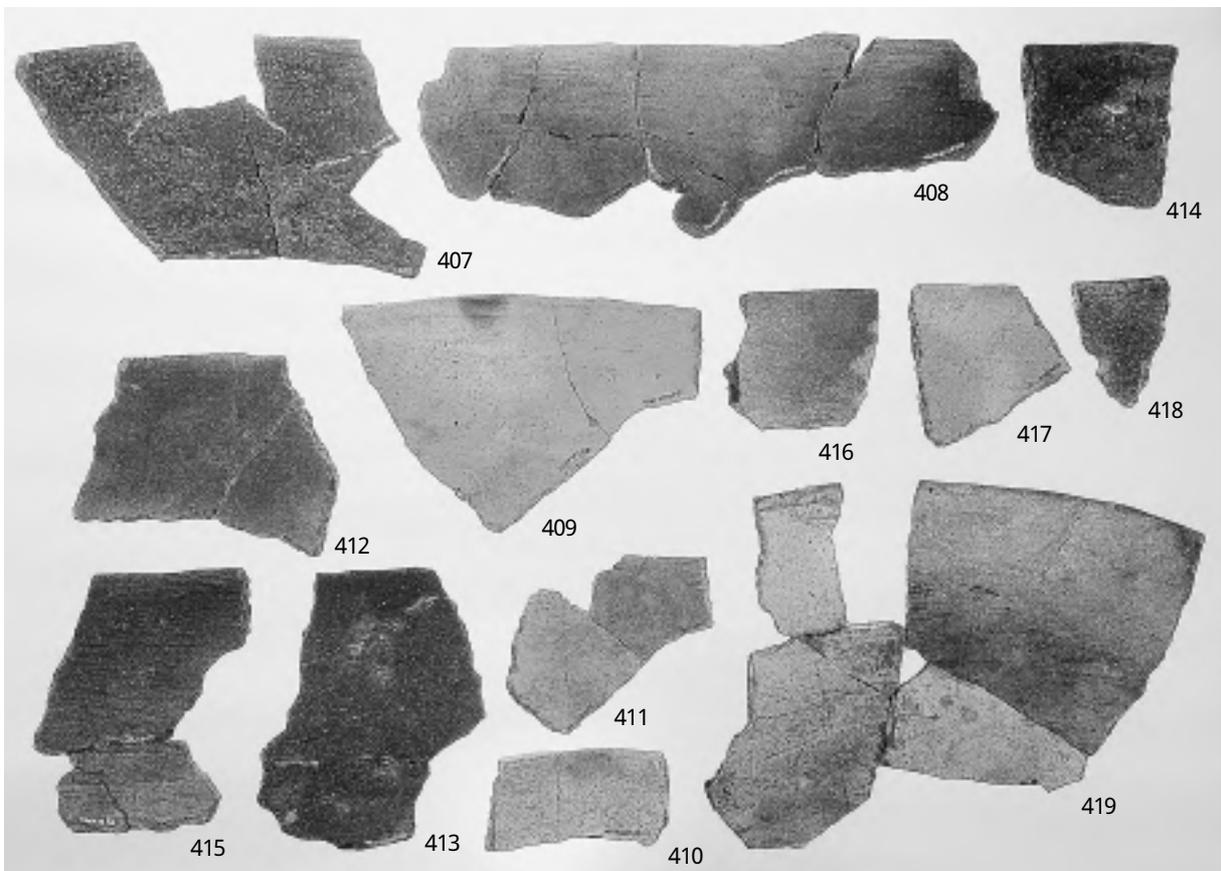
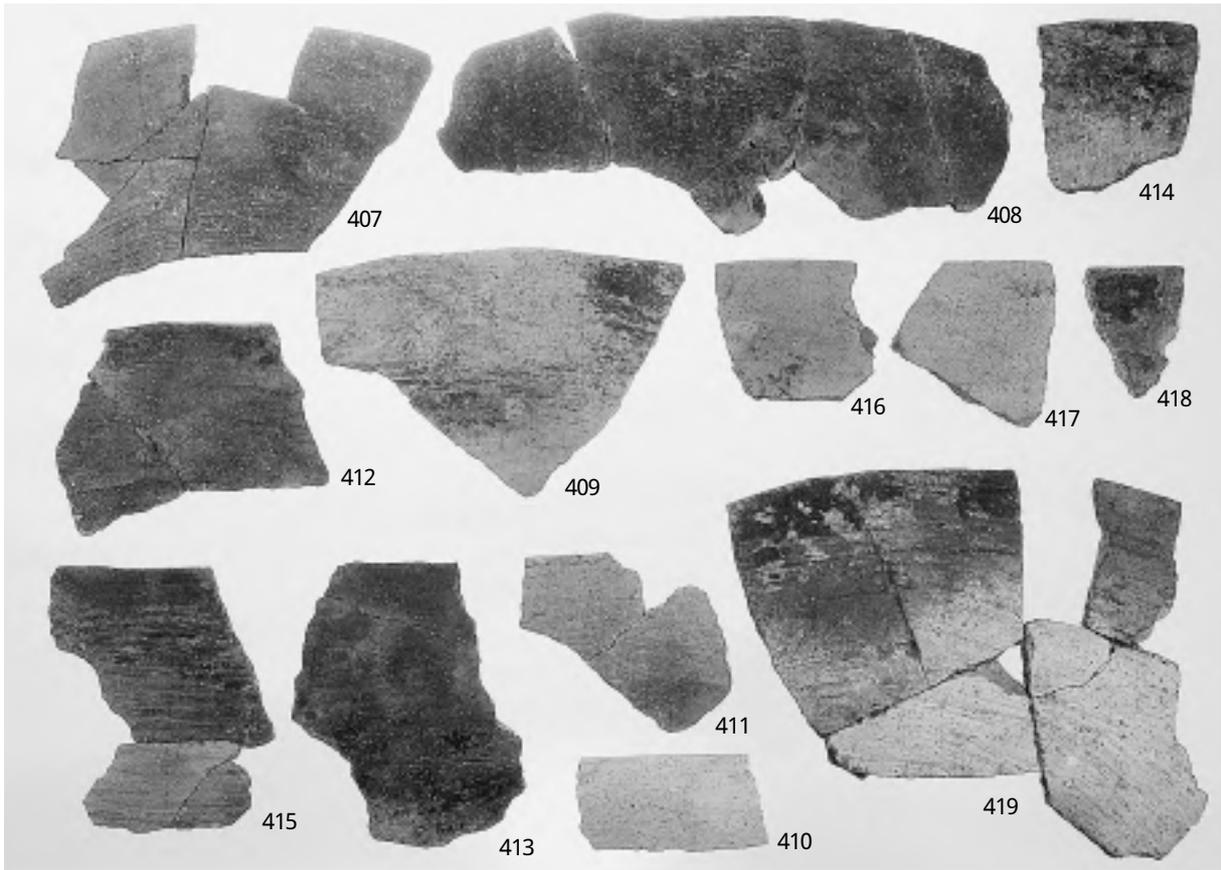
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



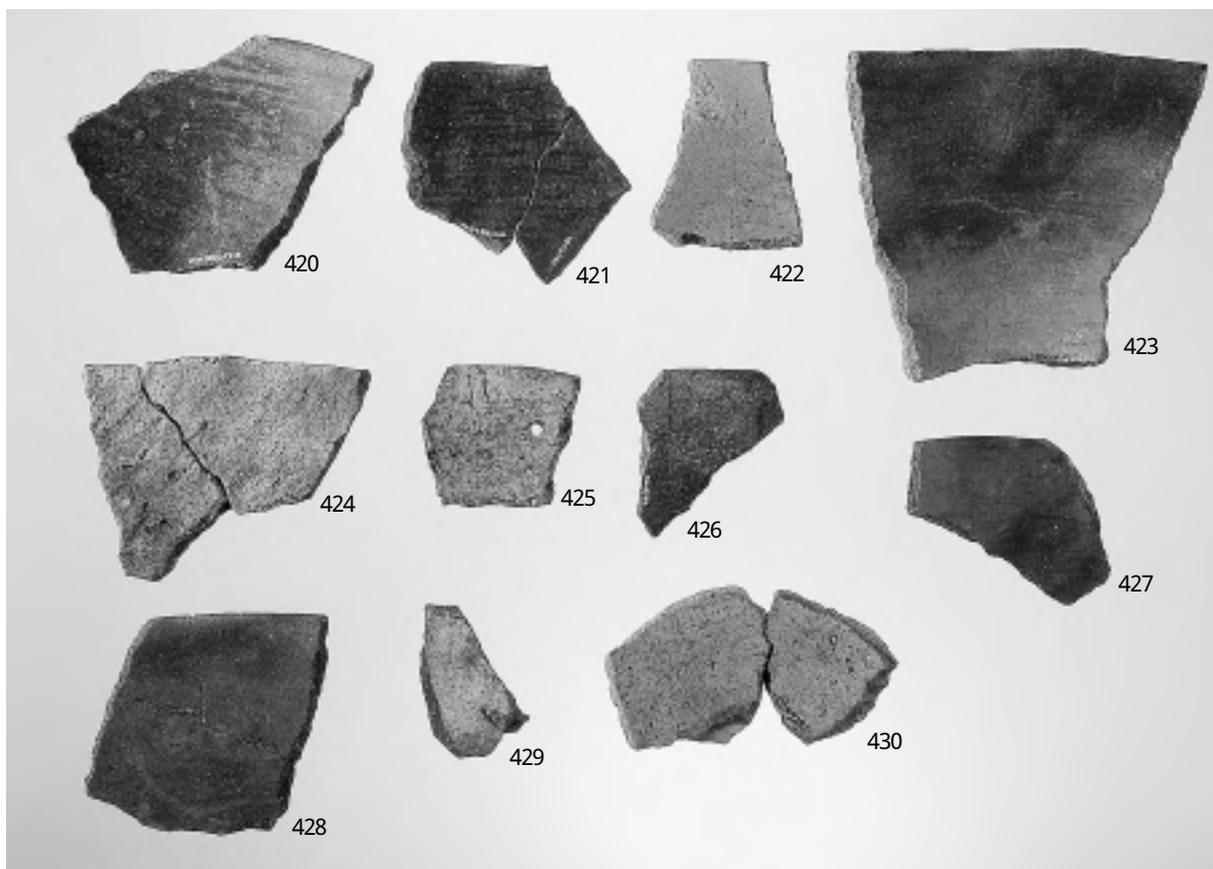
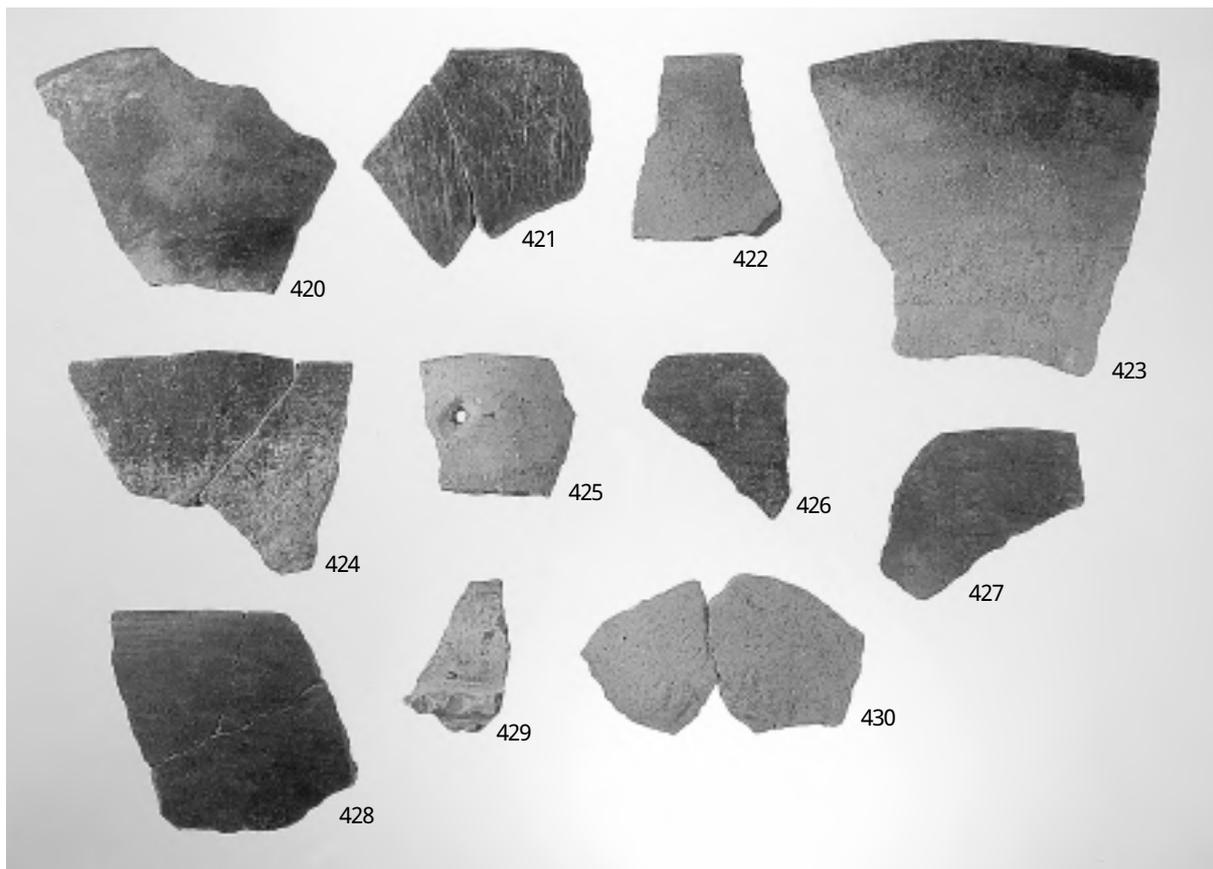
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



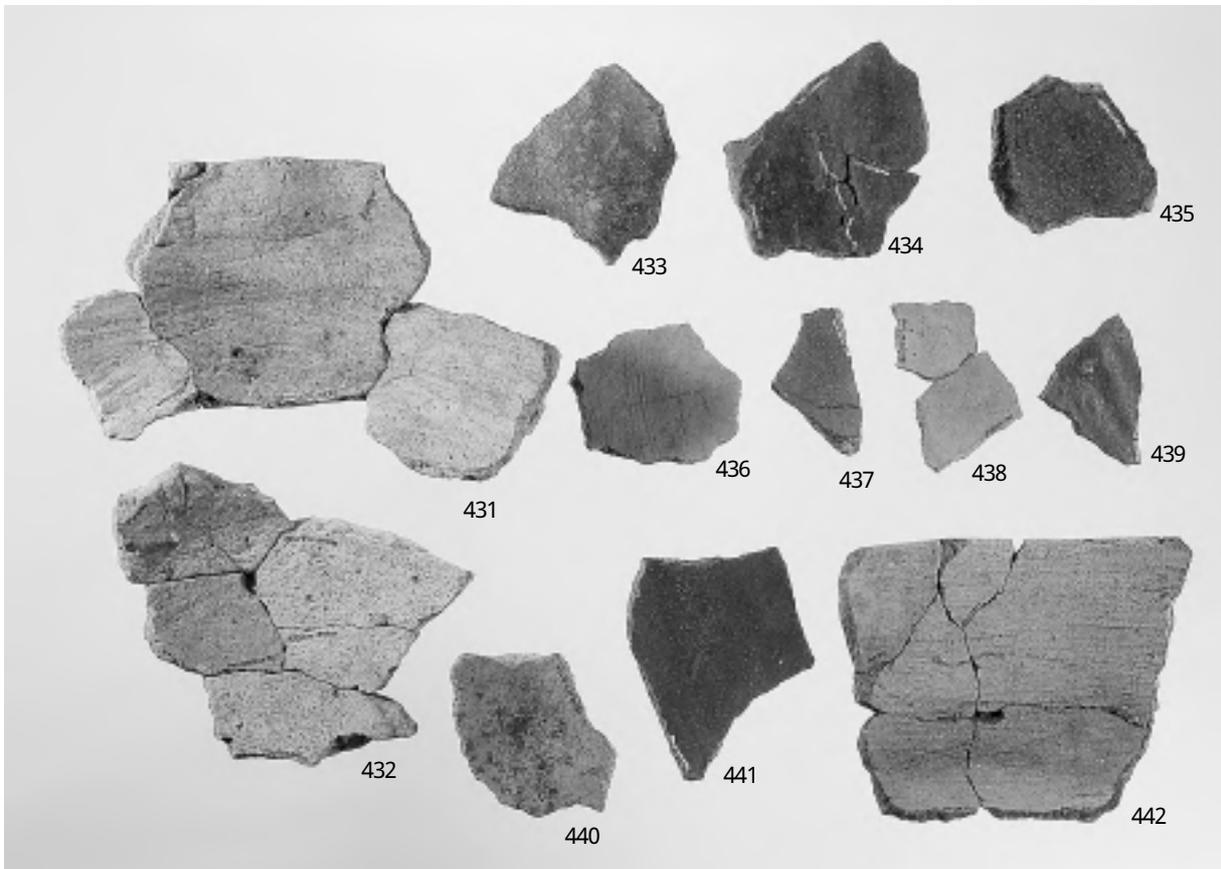
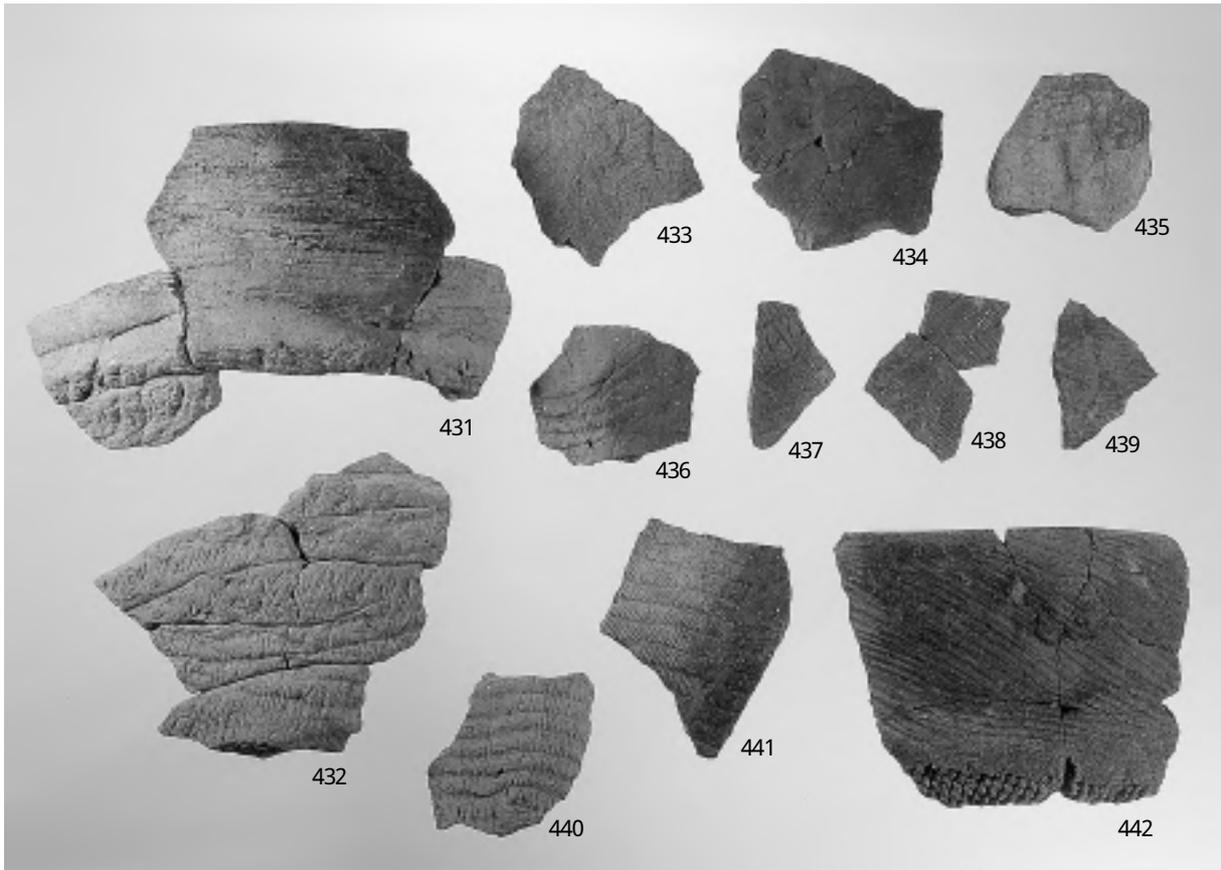
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



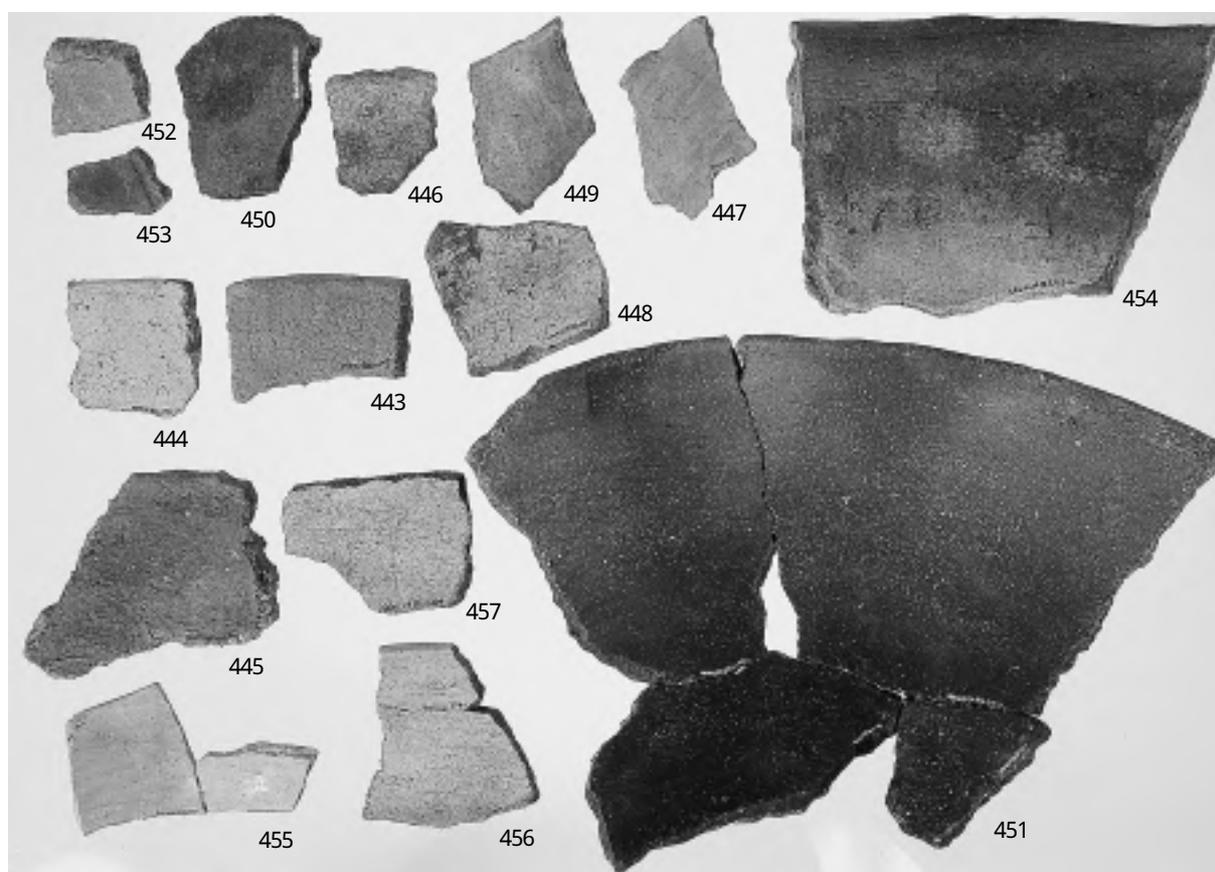
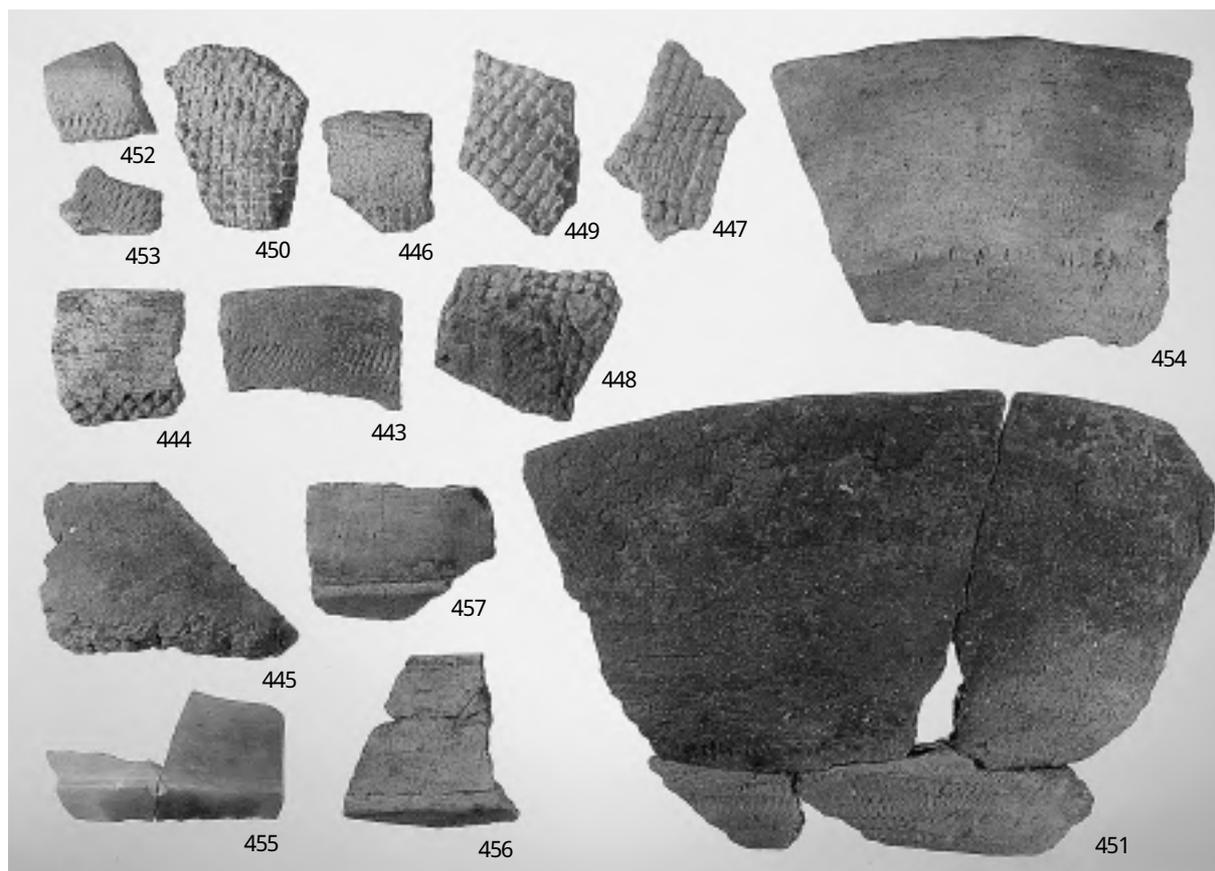
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



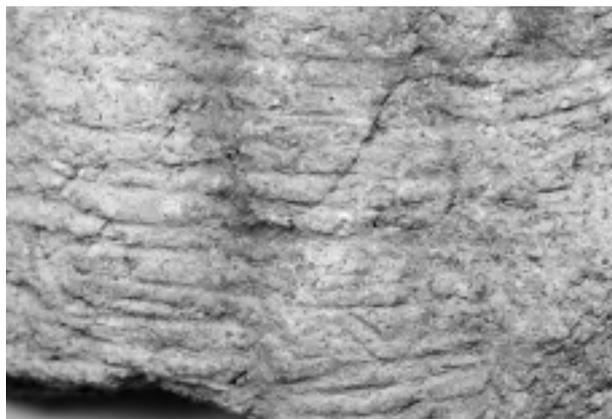
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



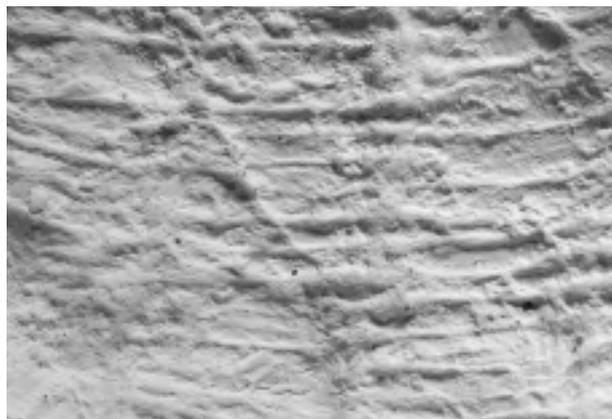
431



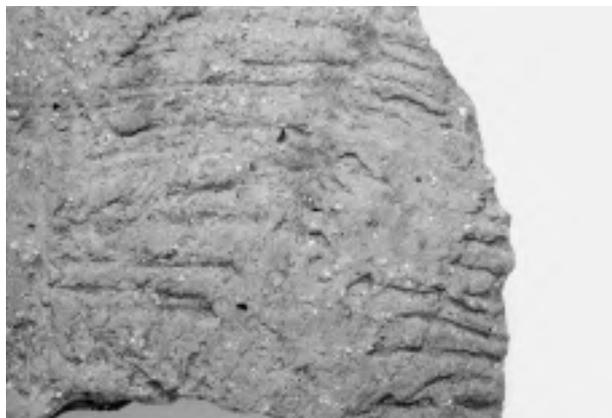
431 (モデリング陽像)



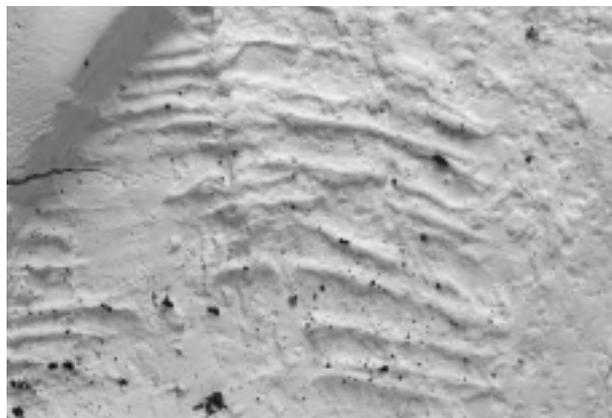
433



433 (モデリング陽像)



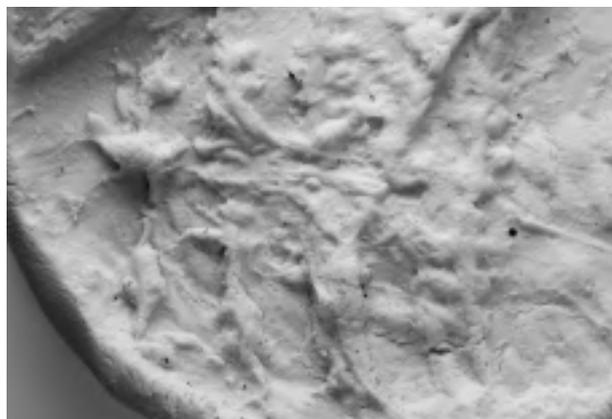
435



435 (モデリング陽像)

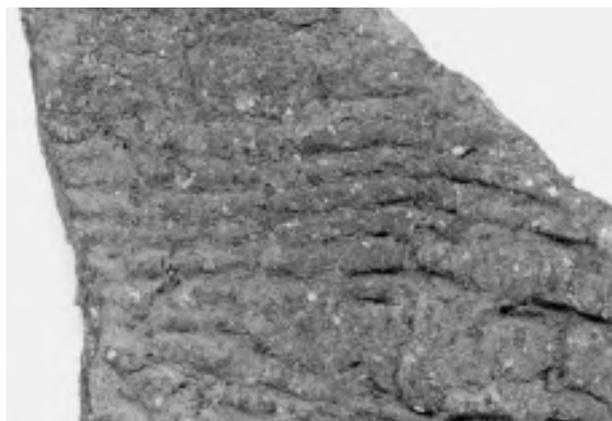


436

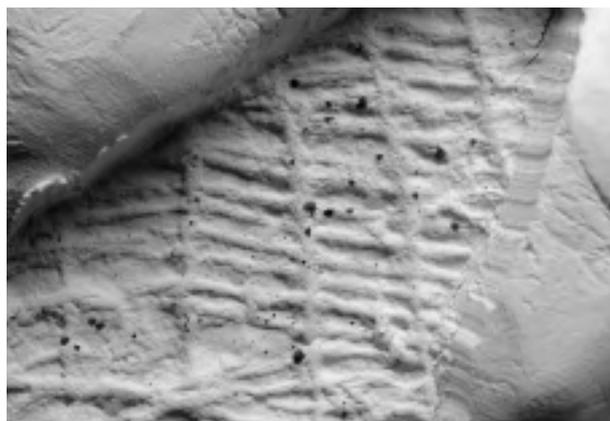


436 (モデリング陽像)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区・組織痕土器拡大）



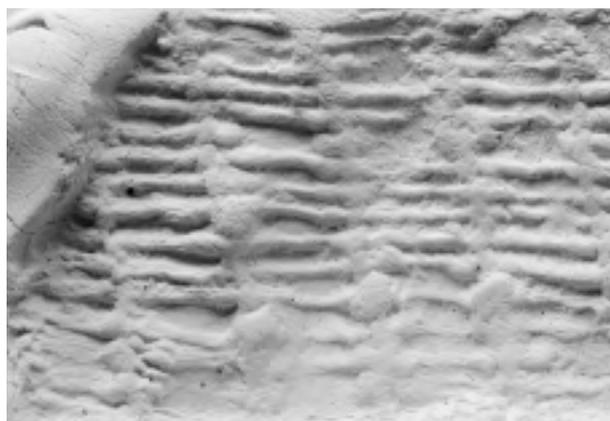
437



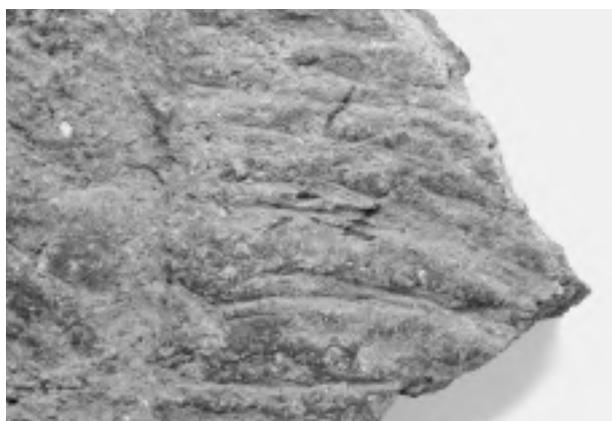
437 (モデリング陽像)



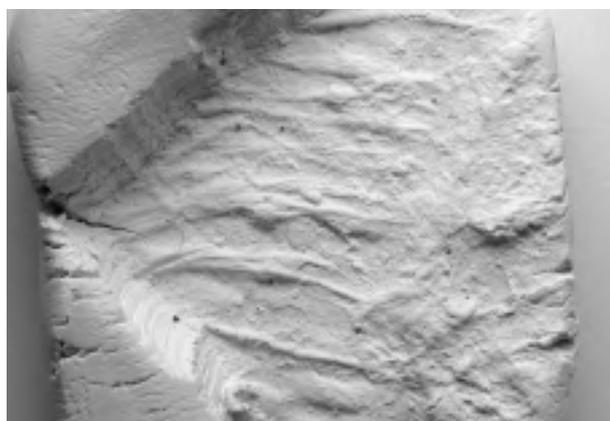
438



438 (モデリング陽像)



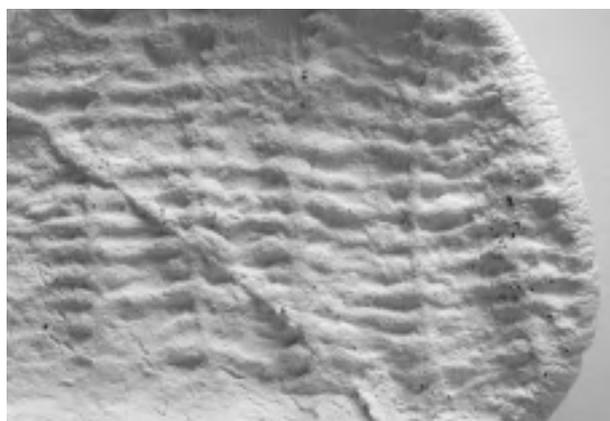
439



439 (モデリング陽像)



440

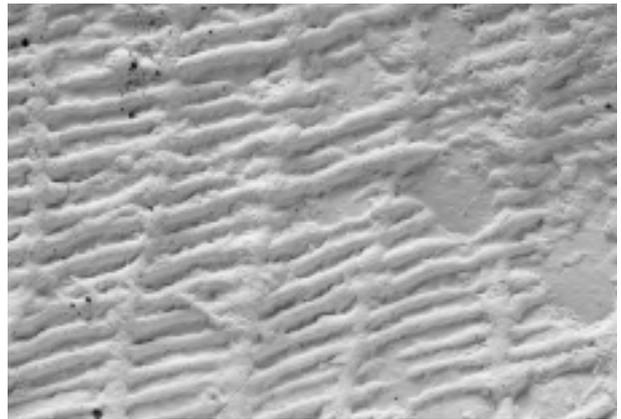


440 (モデリング陽像)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区・組織痕土器拡大)



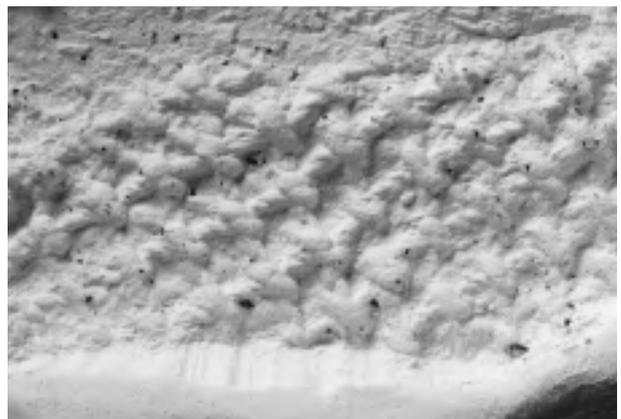
441



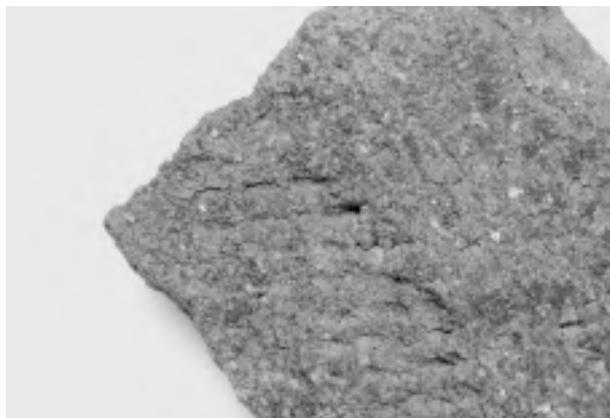
441 (モデリング陽像)



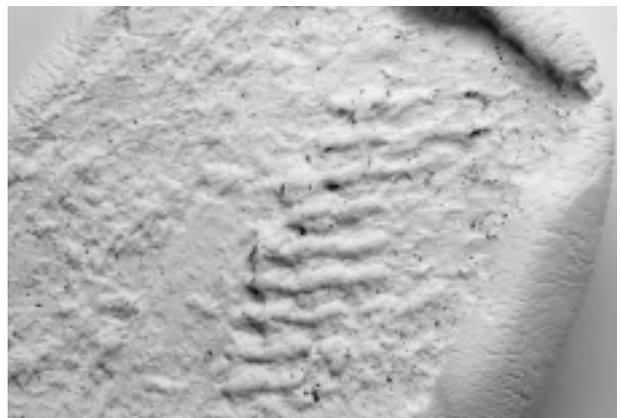
442



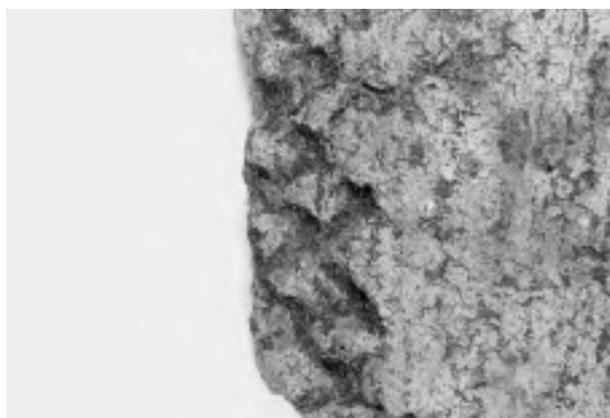
442 (モデリング陽像)



443



443 (モデリング陽像)

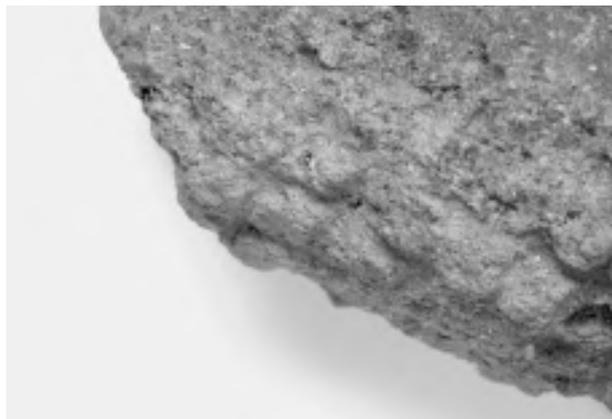


444

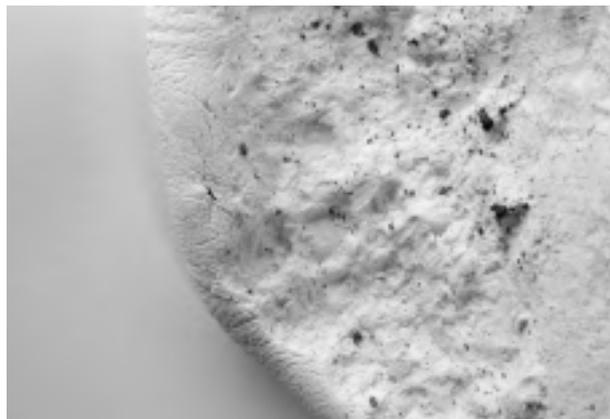


444 (モデリング陽像)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区・組織痕土器拡大）



445



445 (モデリング陽像)



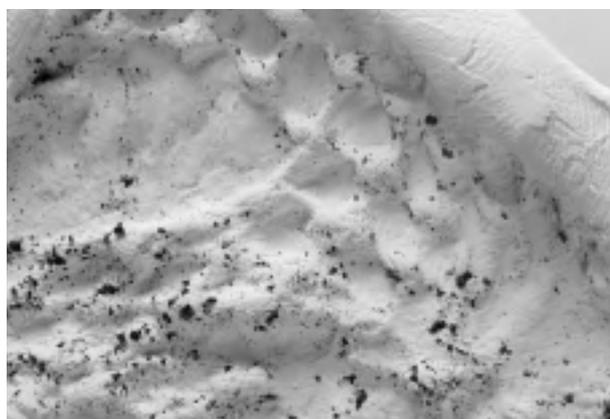
447



447 (モデリング陽像)



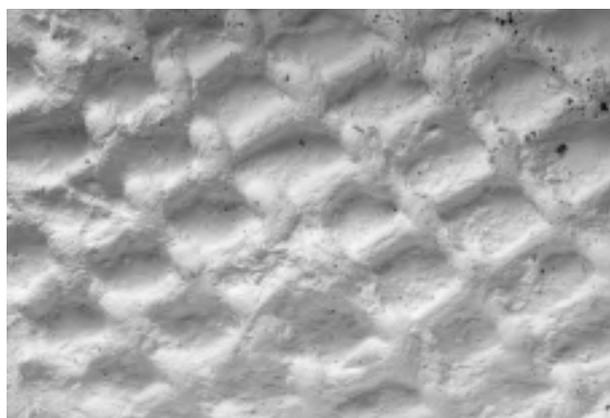
448



448 (モデリング陽像)

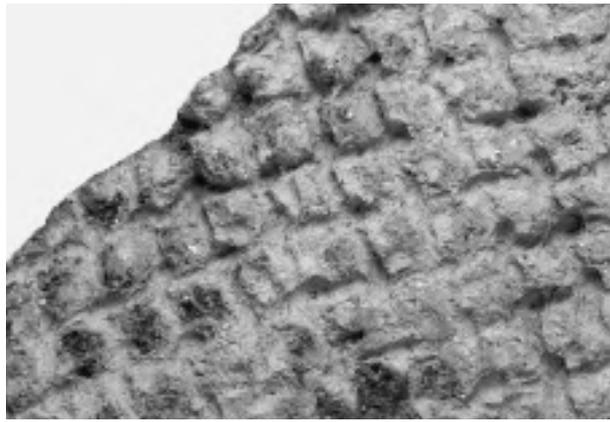


449



449 (モデリング陽像)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区・組織痕土器拡大）



450



450 (モデリング陽像)



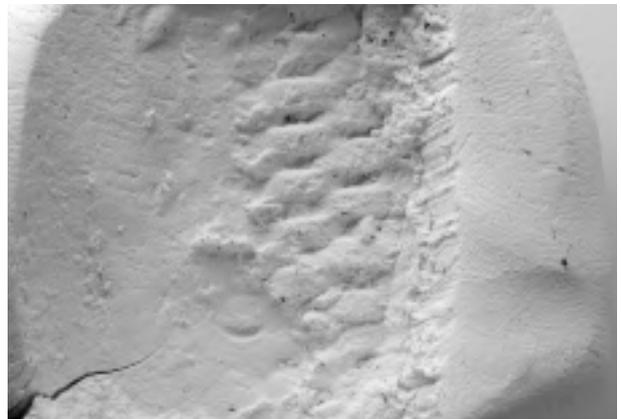
451



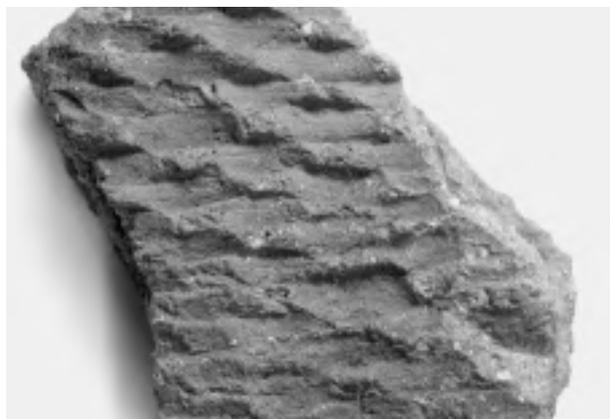
451 (モデリング陽像)



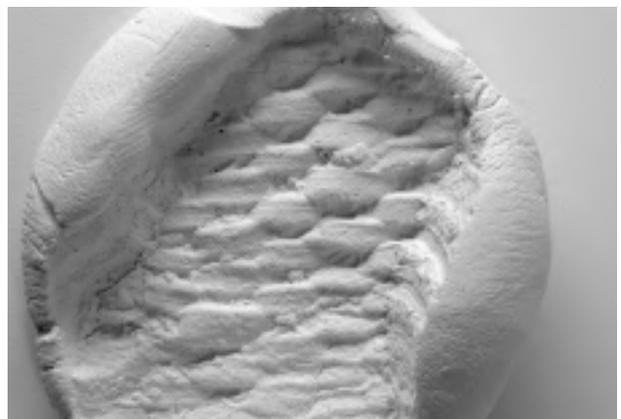
452



452 (モデリング陽像)



453



453 (モデリング陽像)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区・組織痕土器拡大）



458



459



460



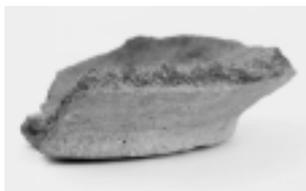
461



462



463



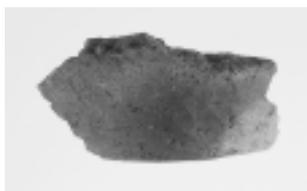
464



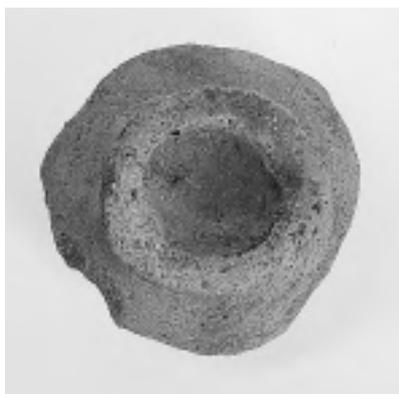
465



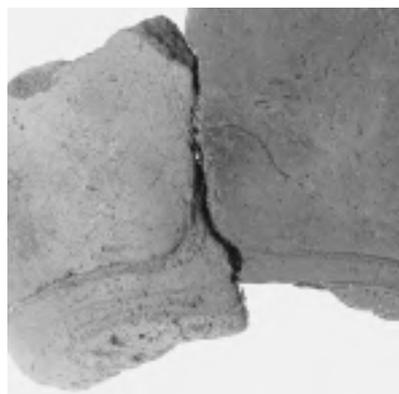
466



467



458 (底面)

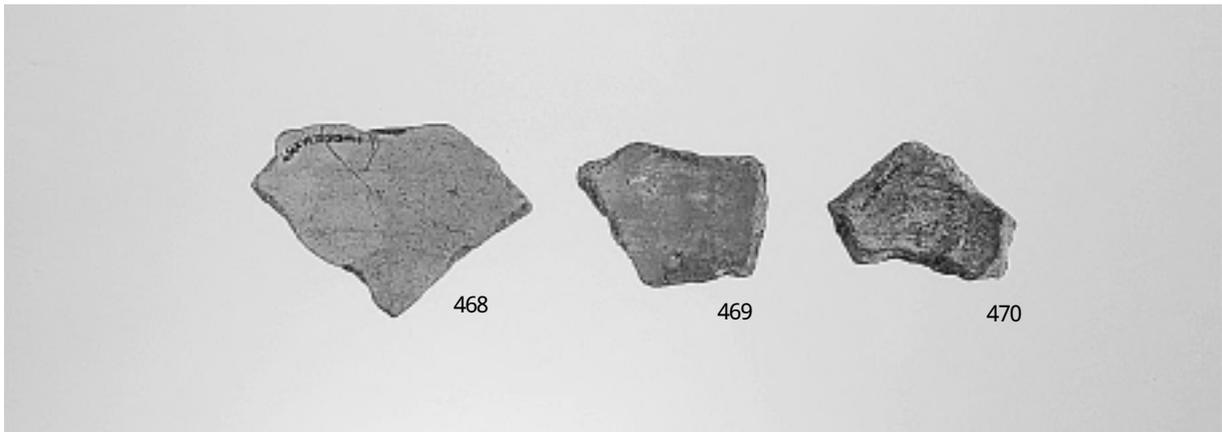
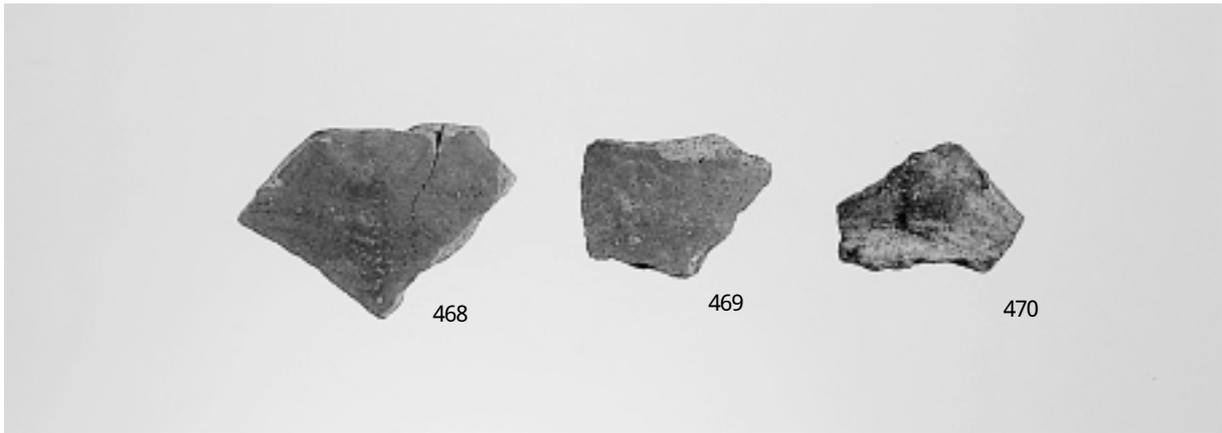


376 (拡大)

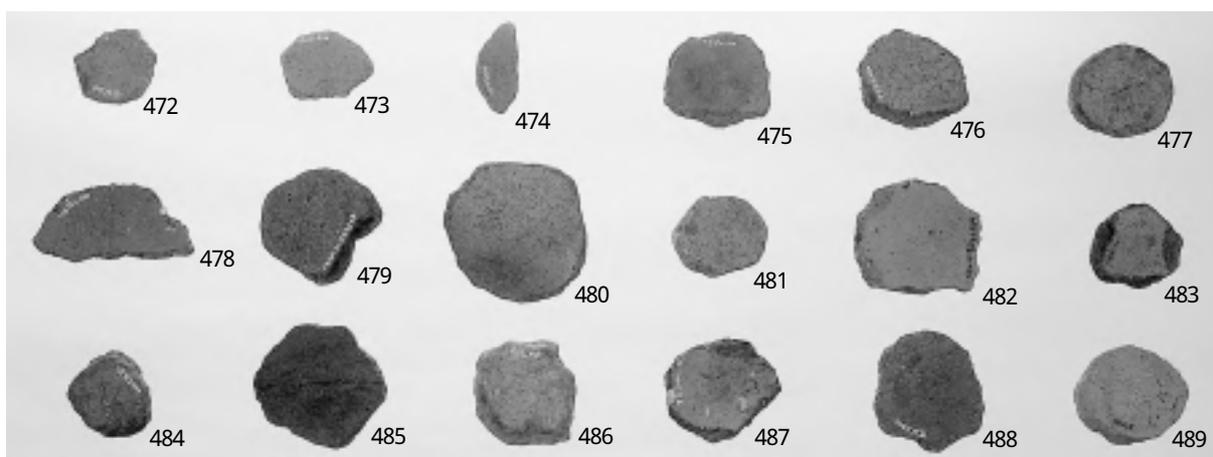
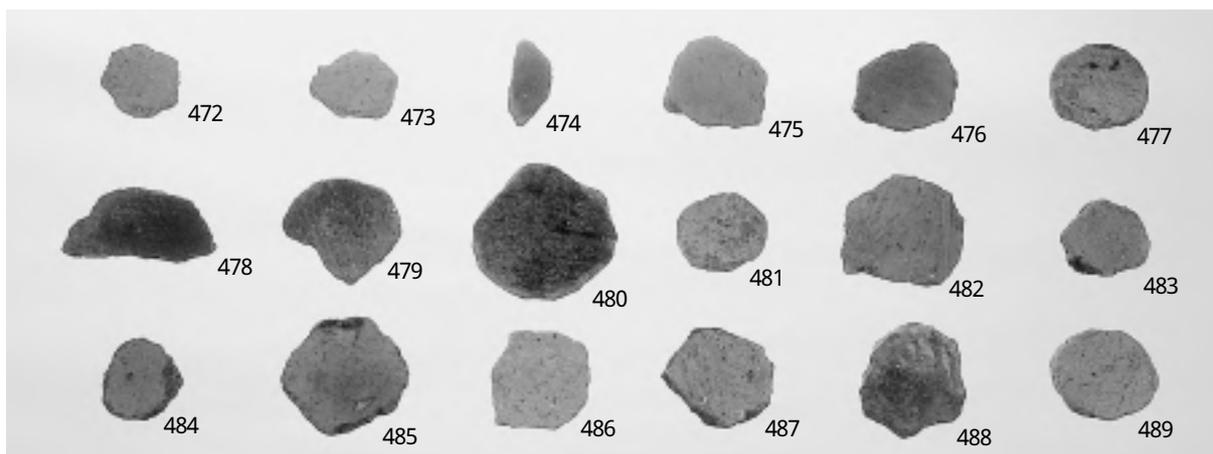


466 (拡大)

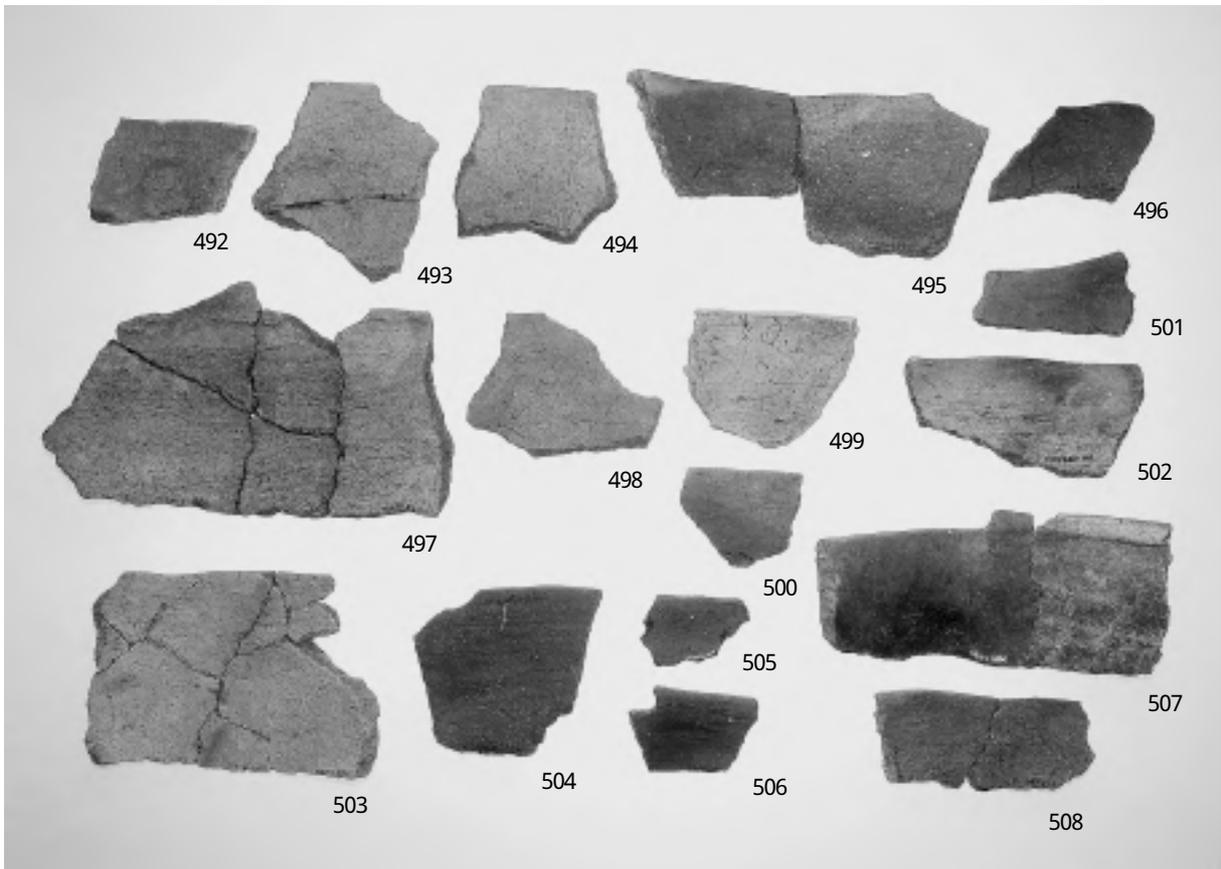
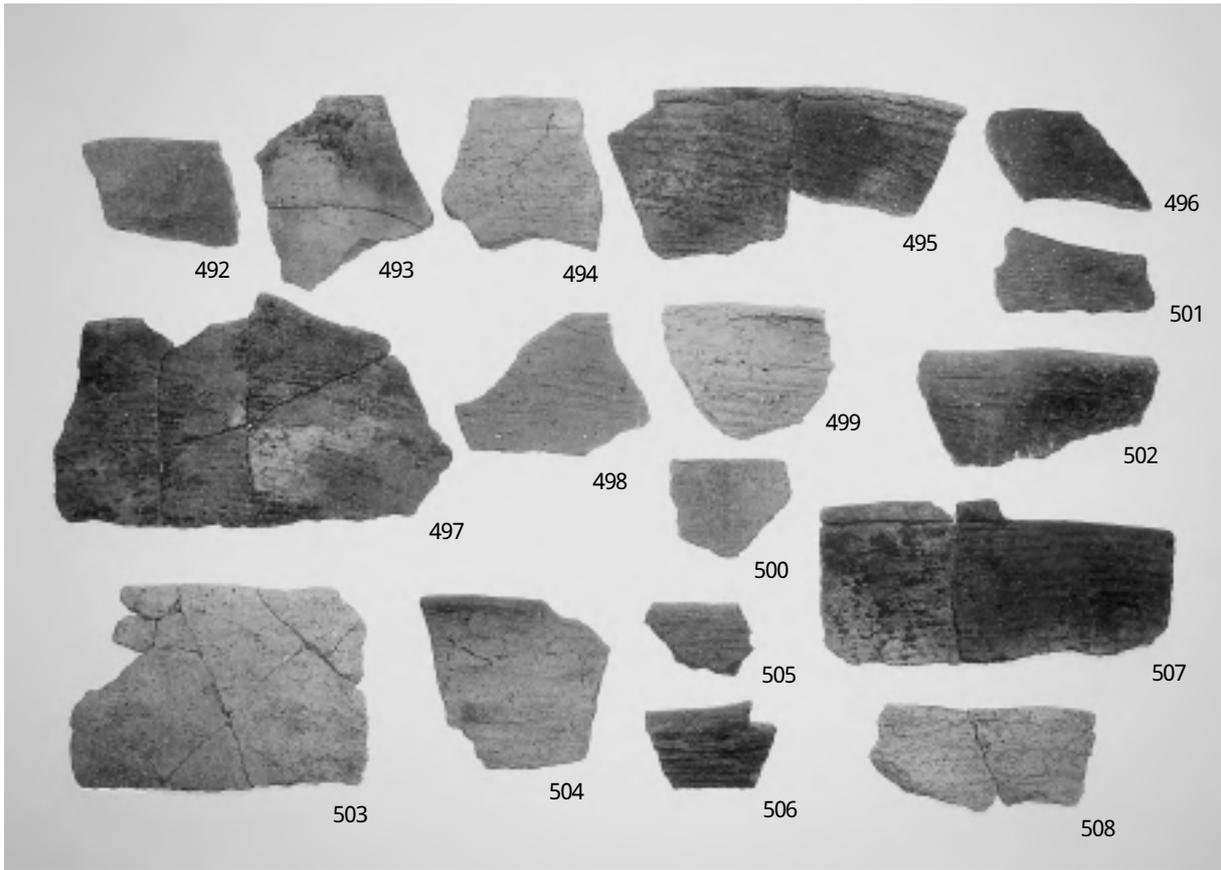
縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (A・D区)



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土製品（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



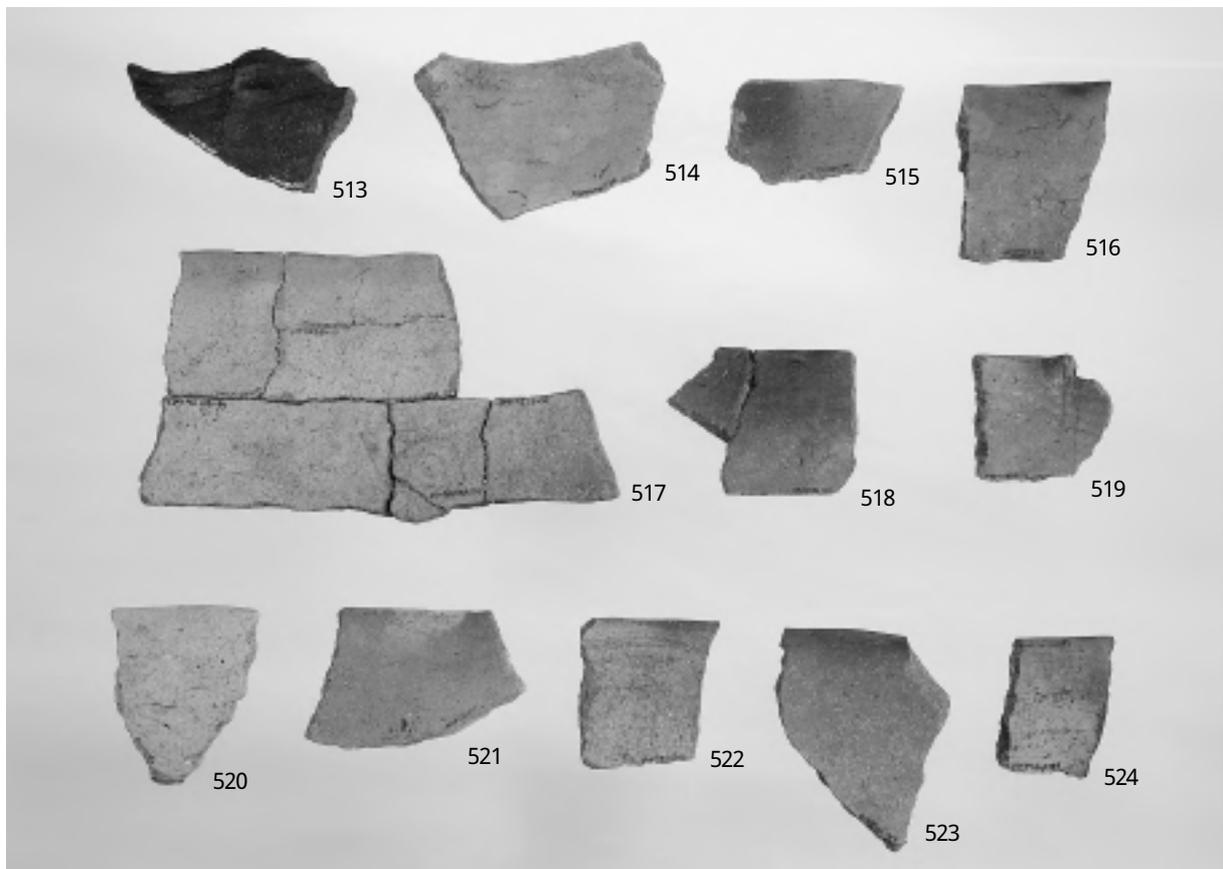
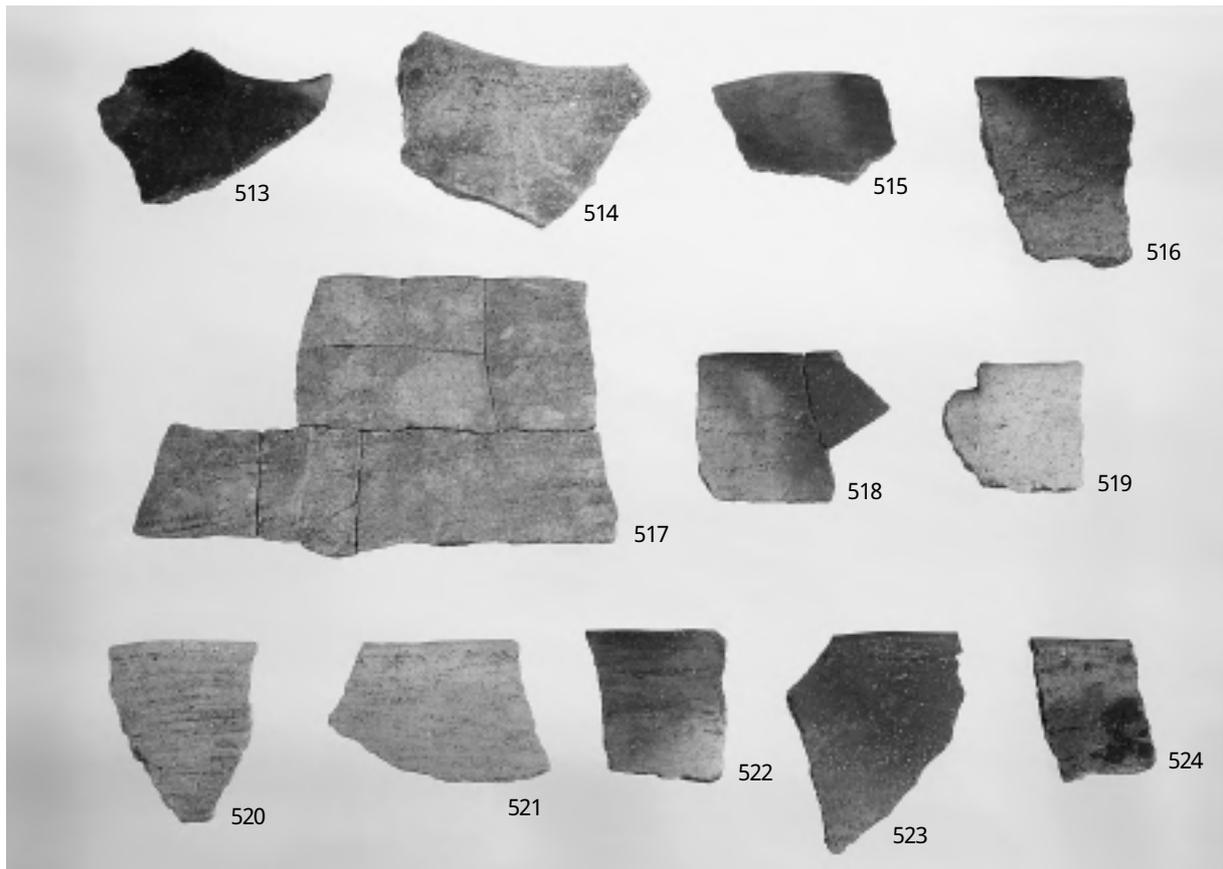
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



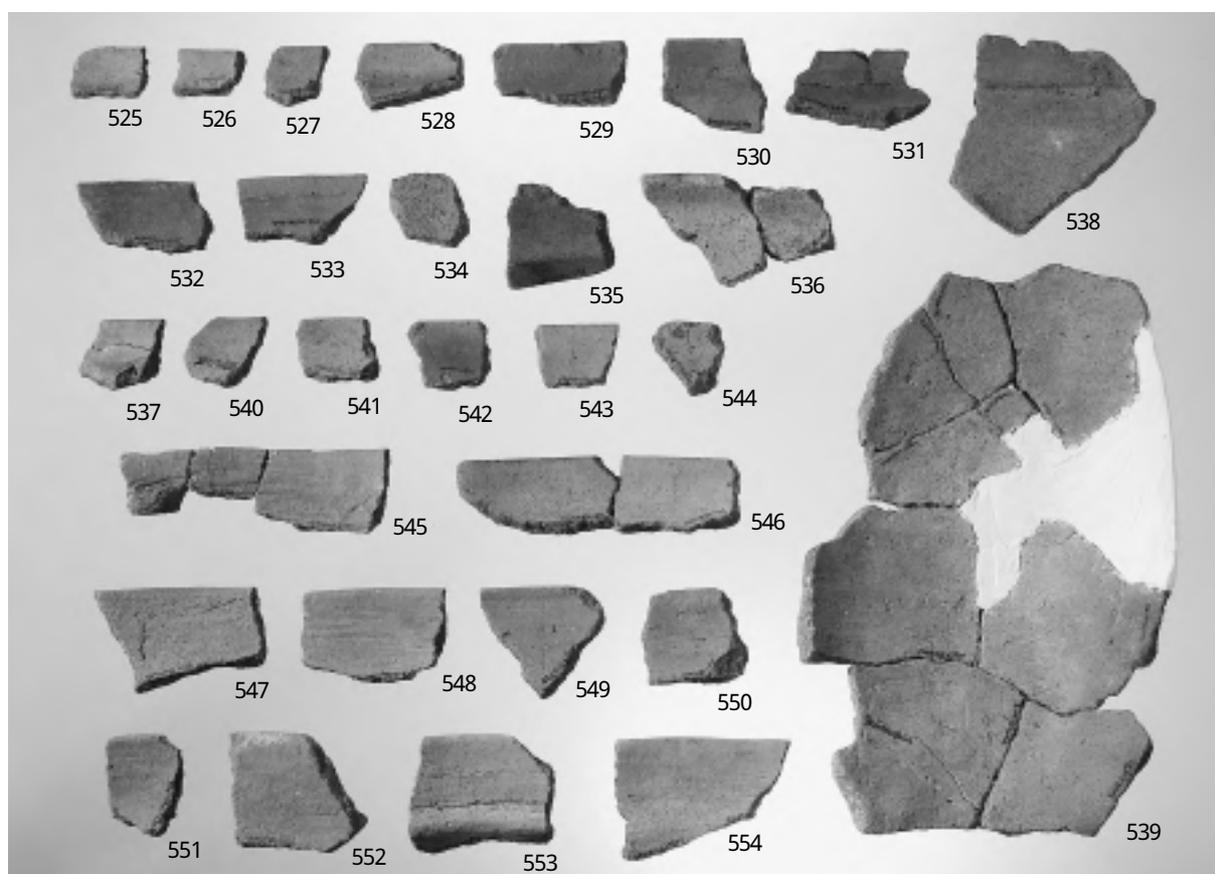
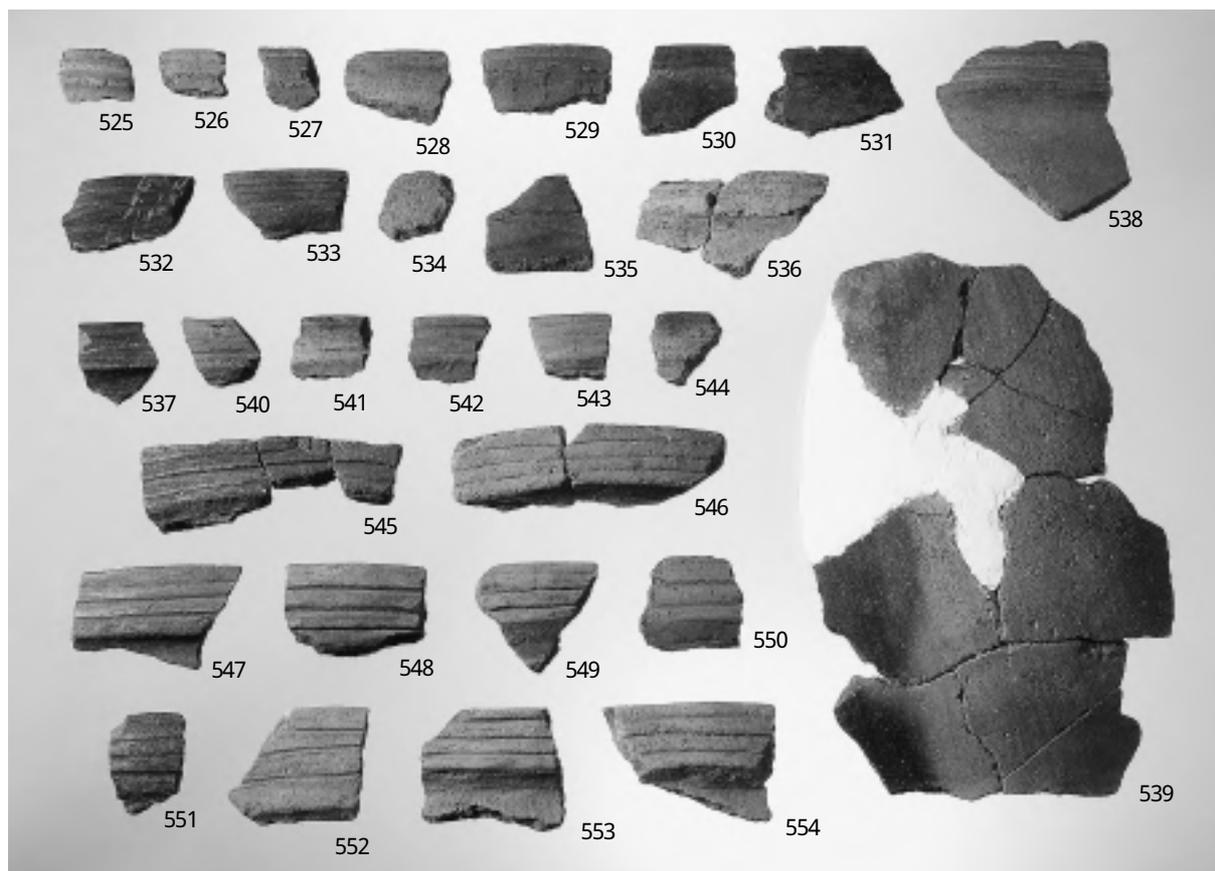
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



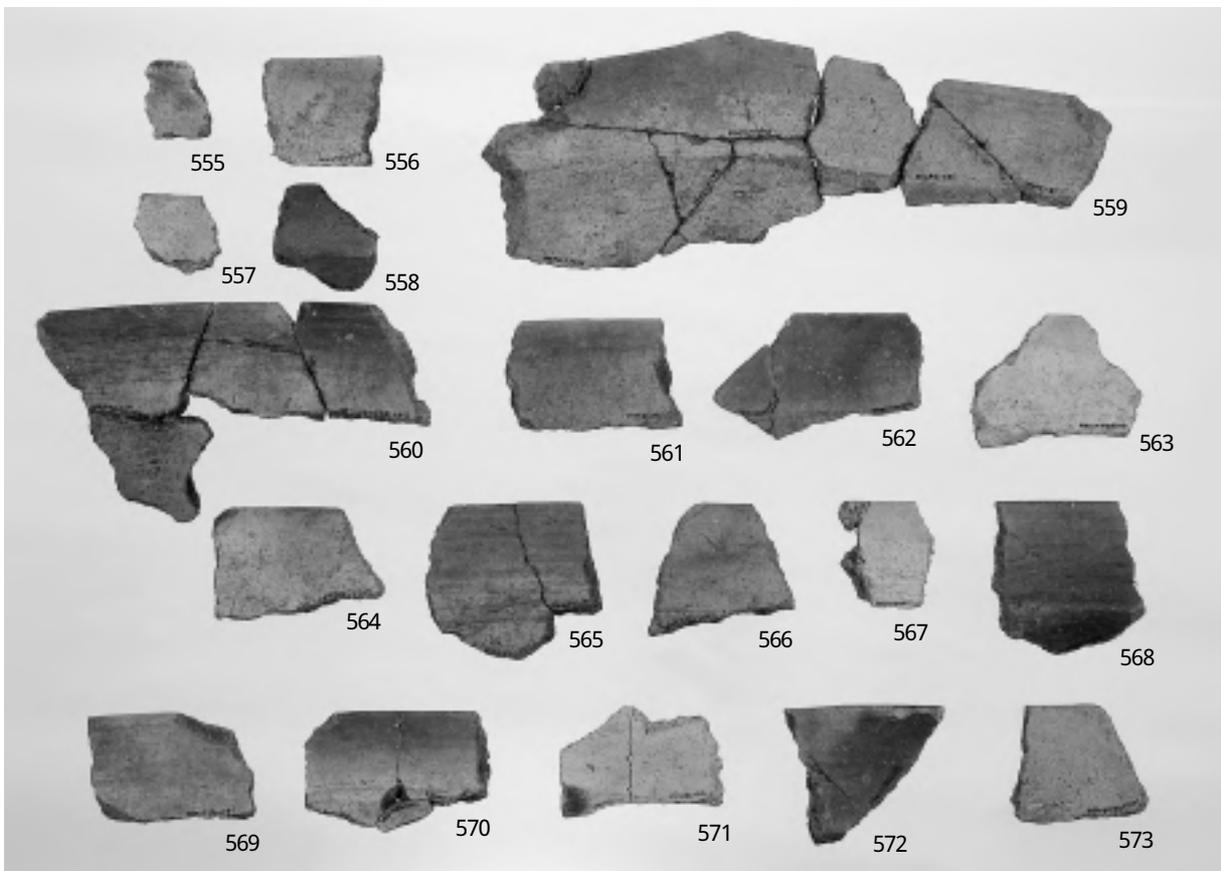
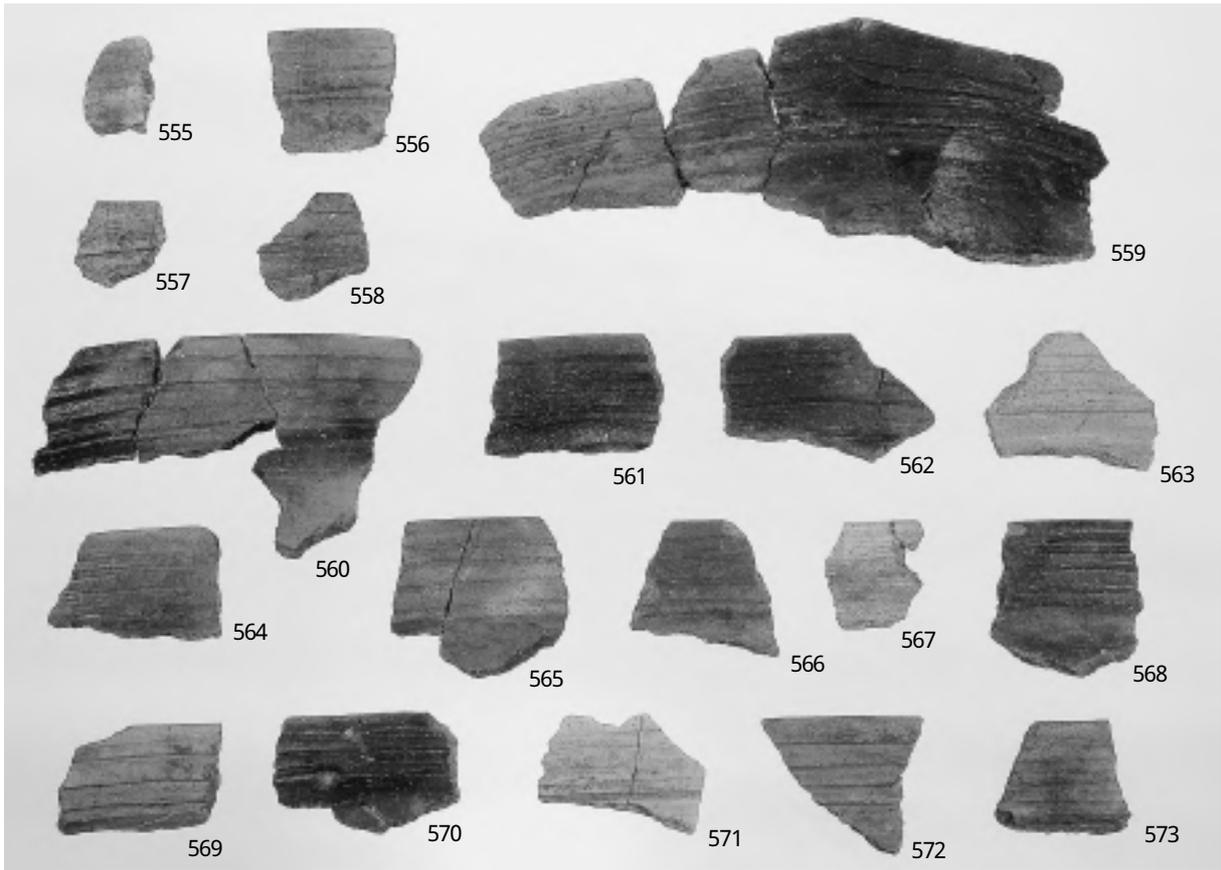
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



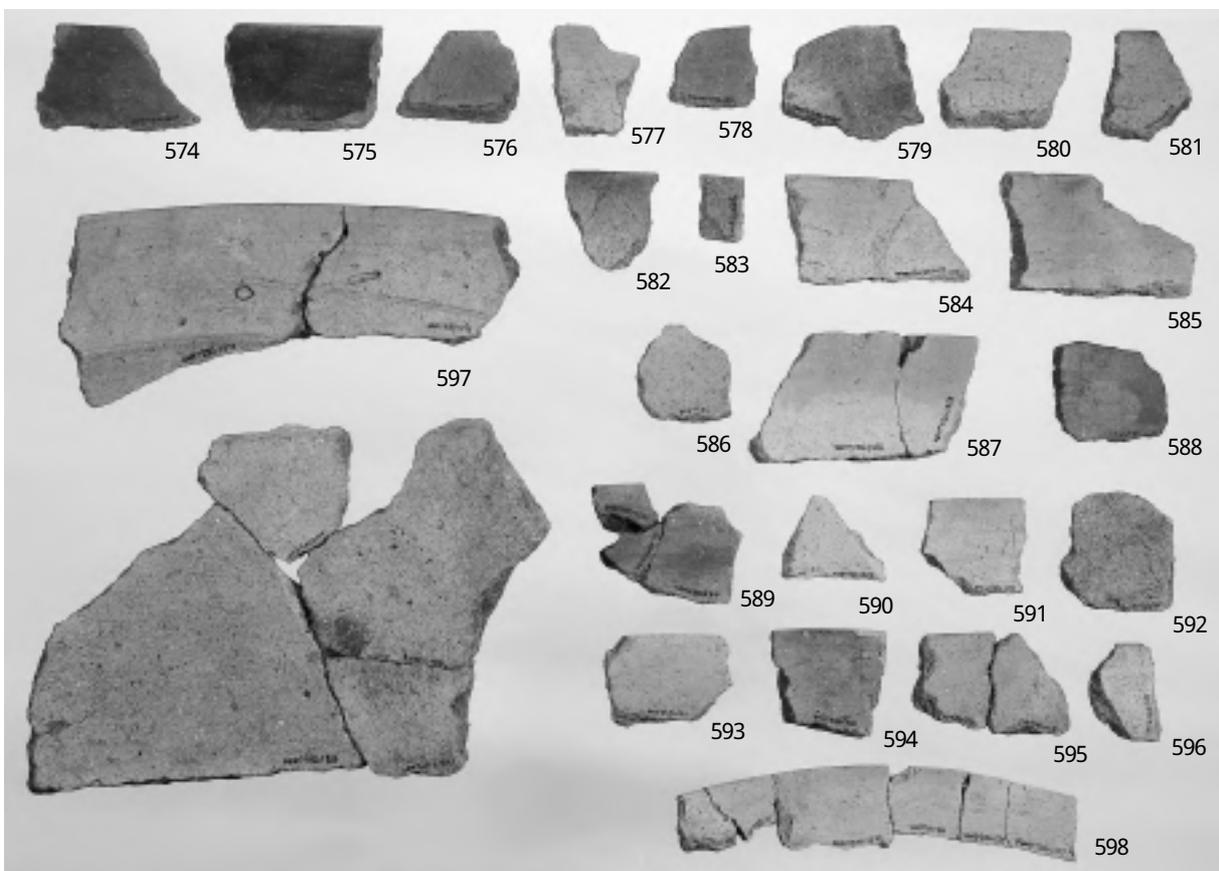
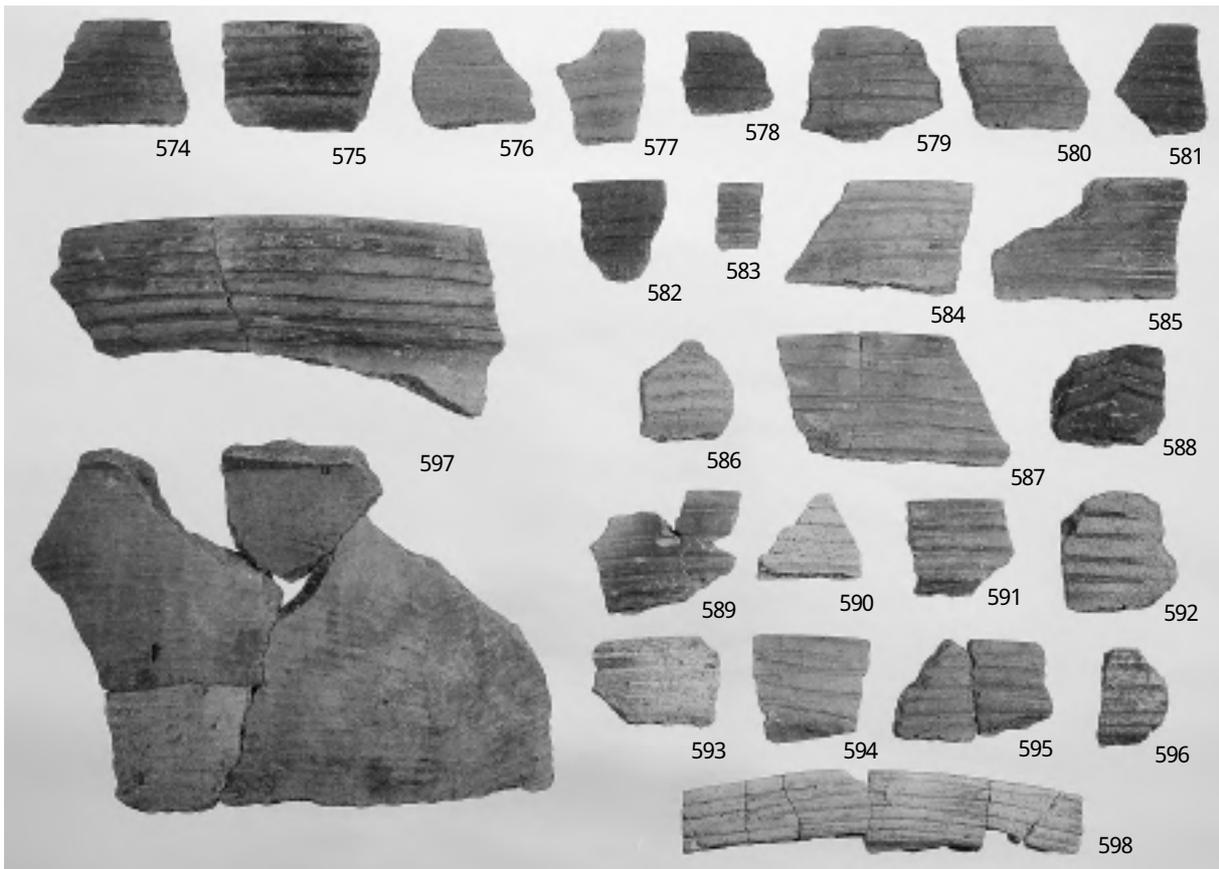
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



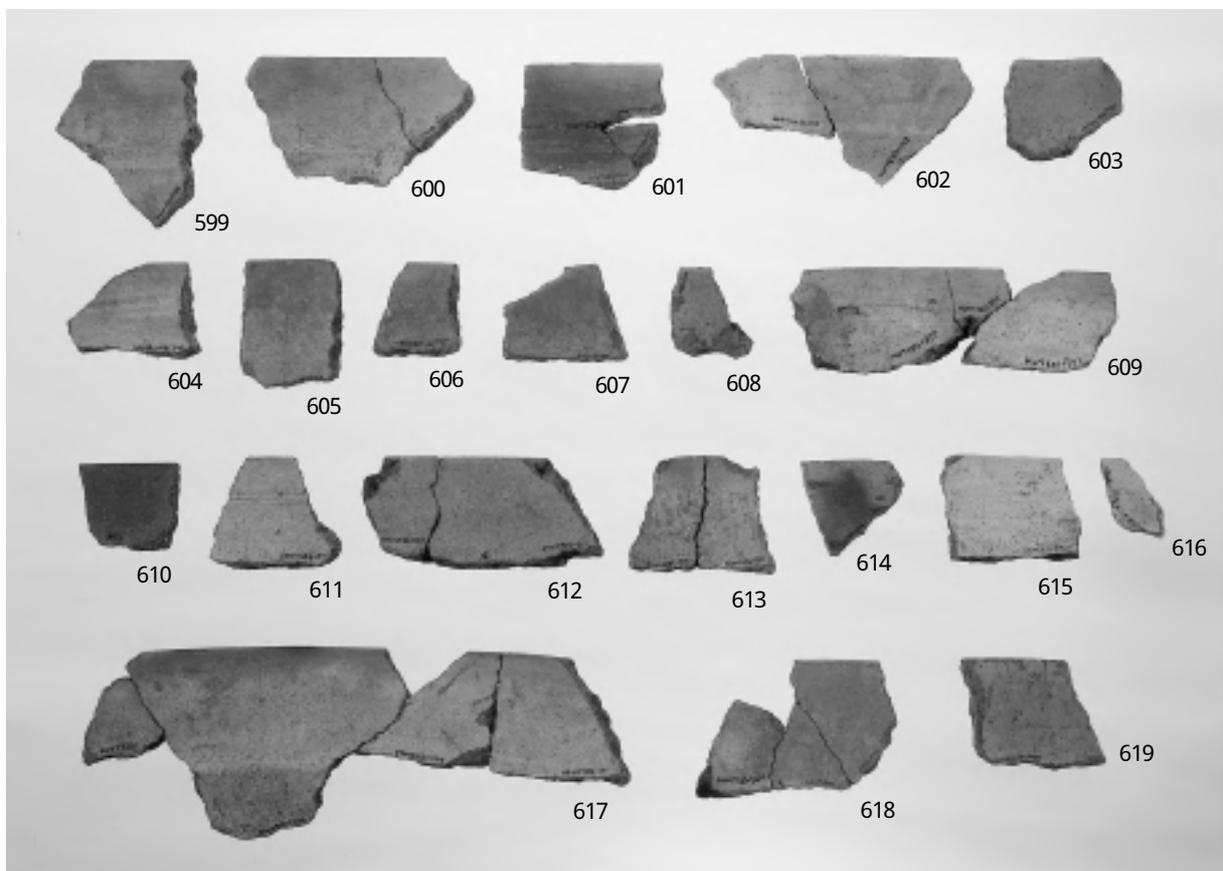
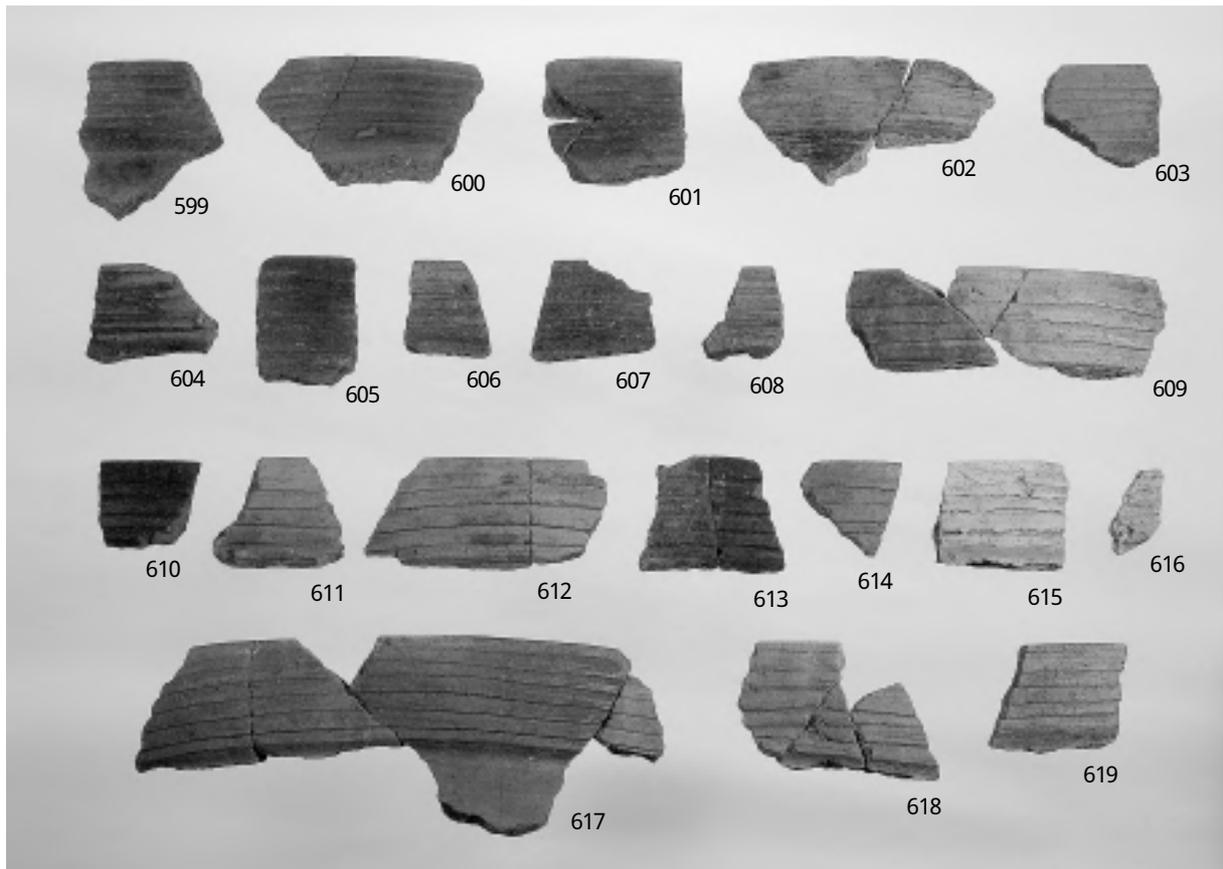
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



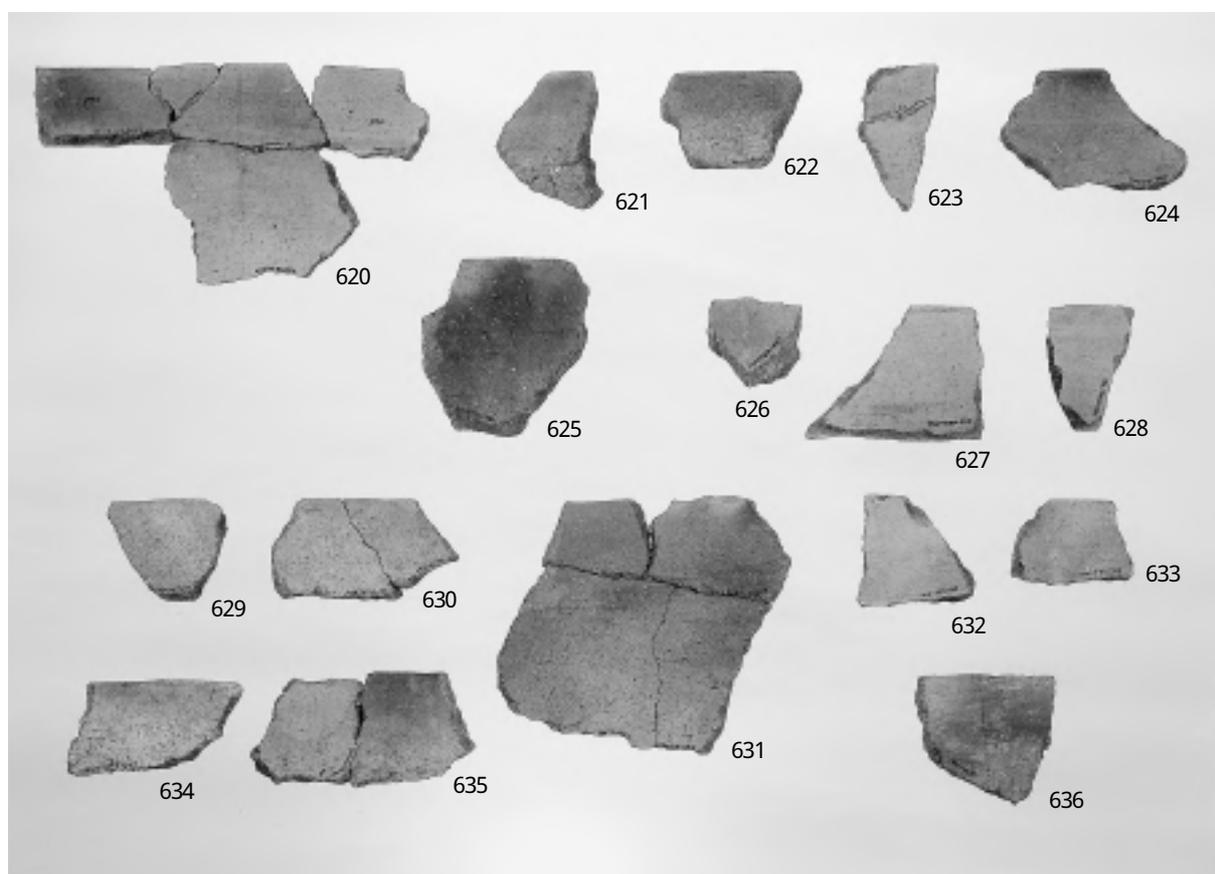
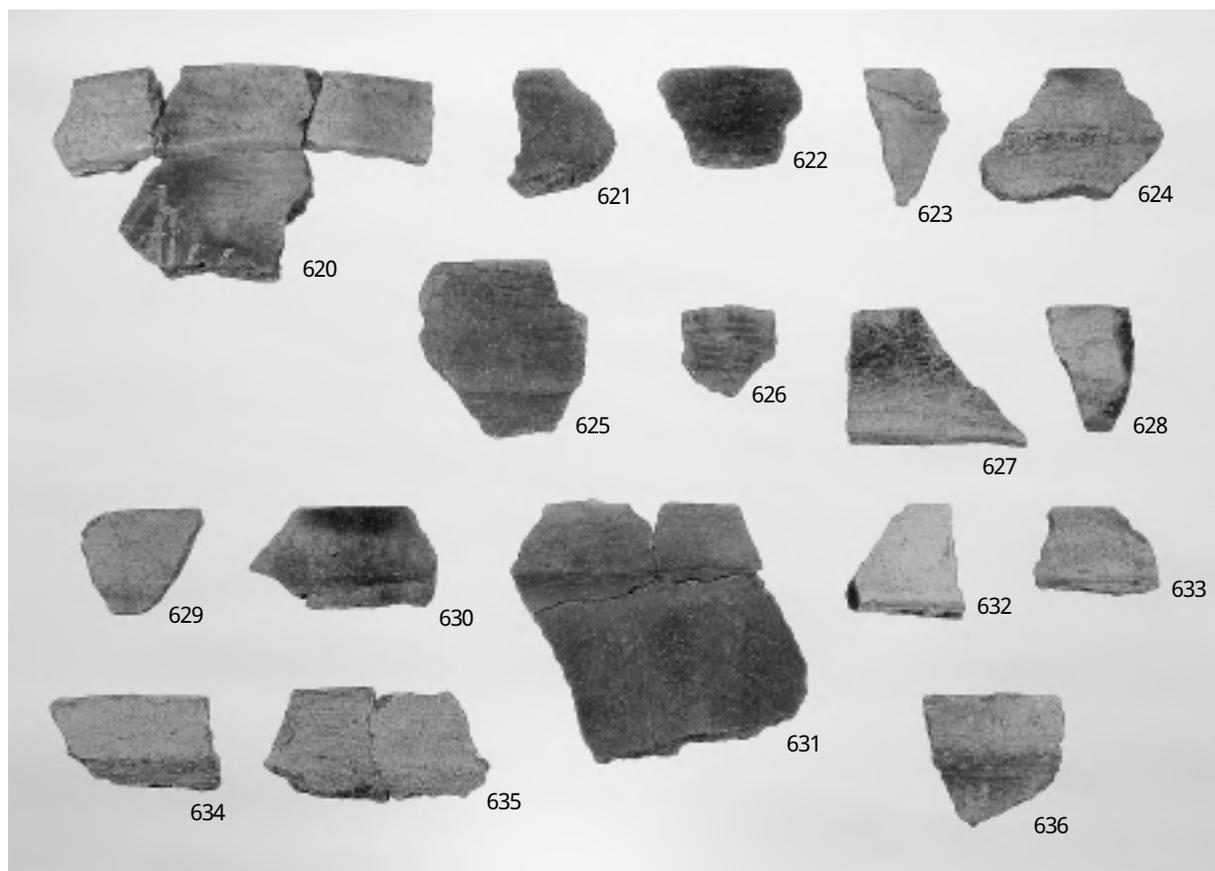
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



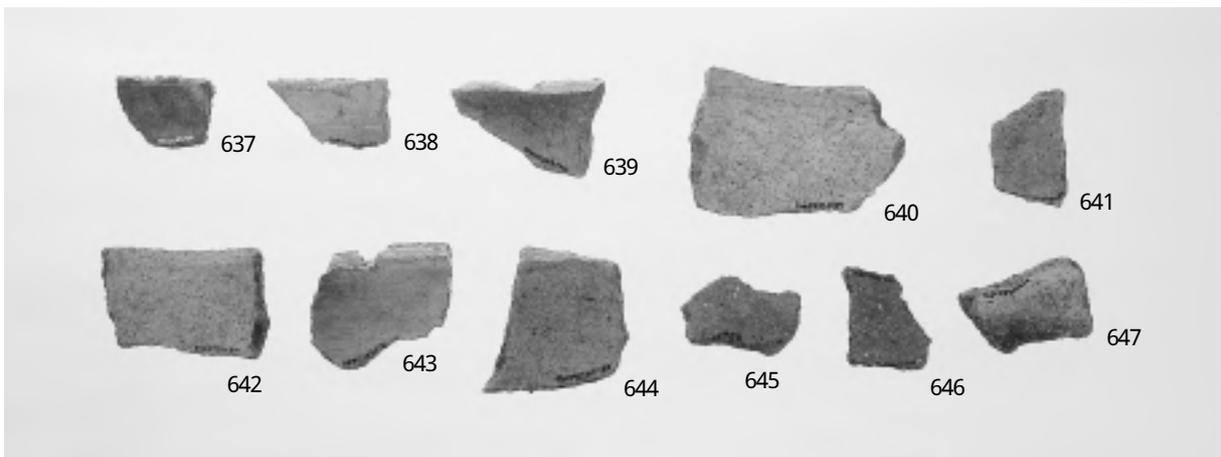
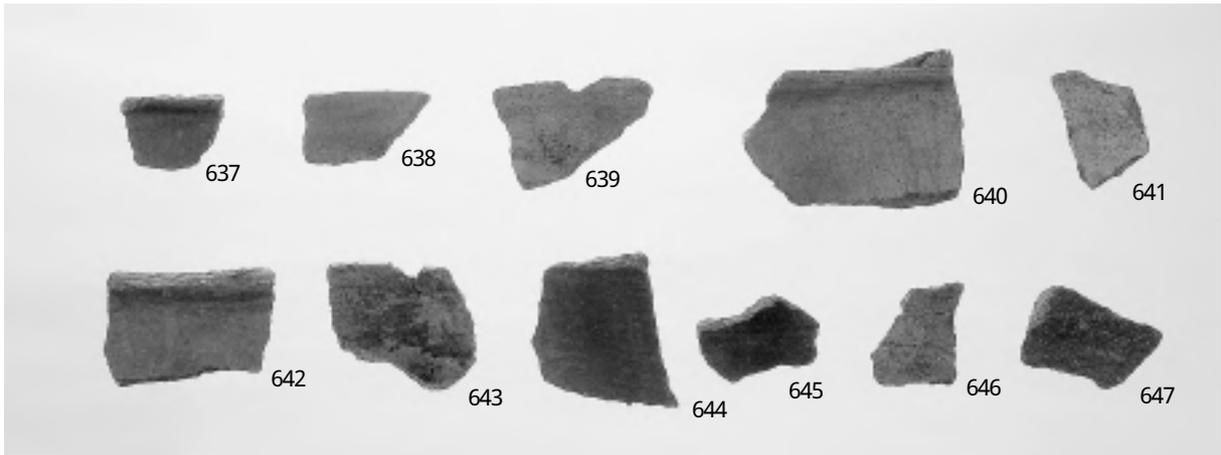
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



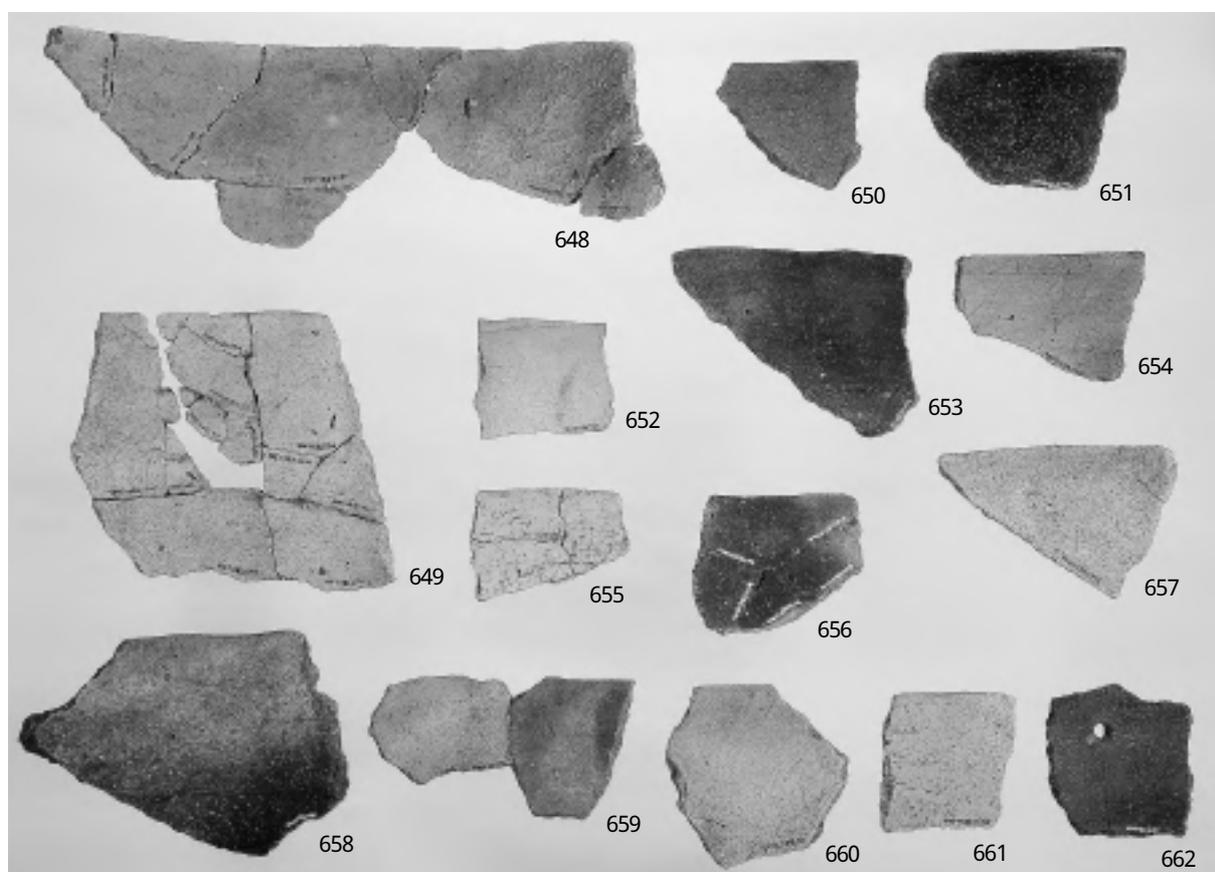
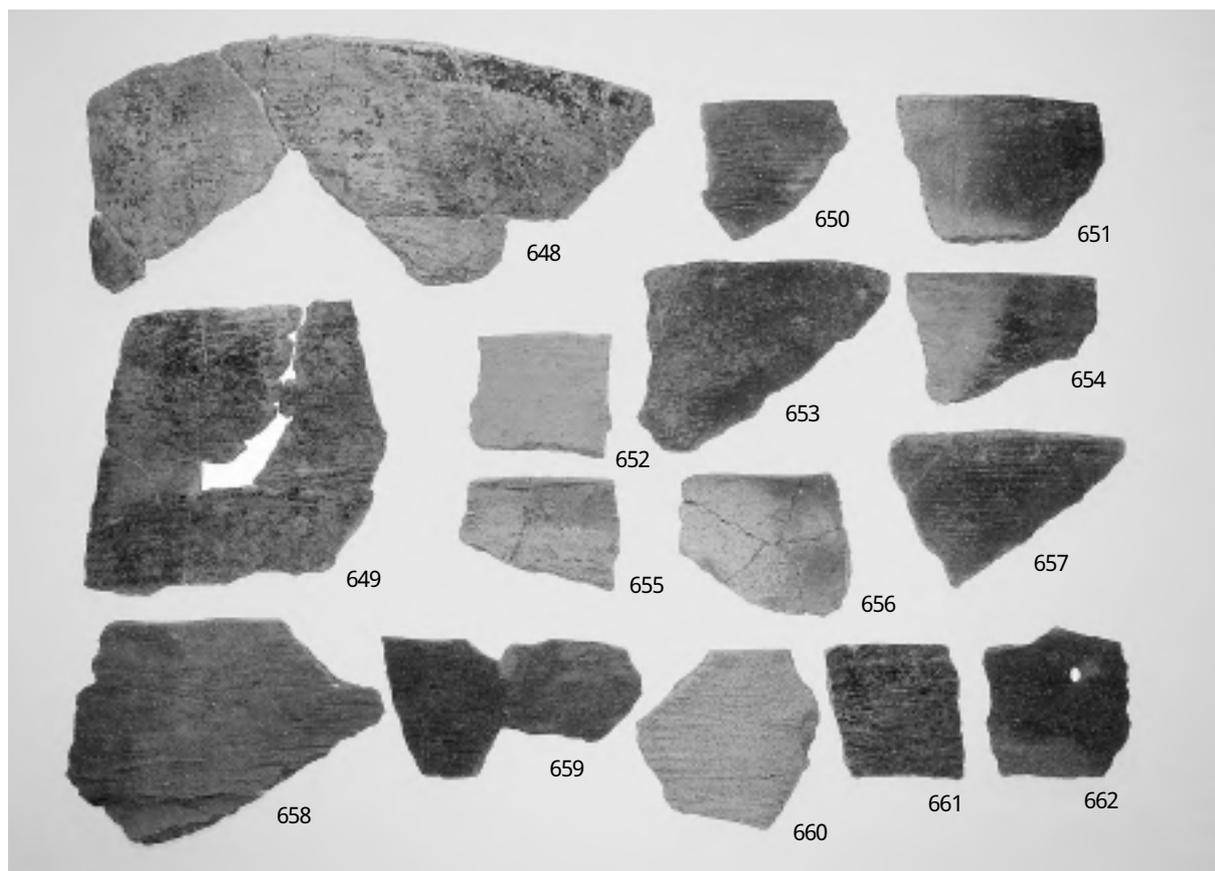
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



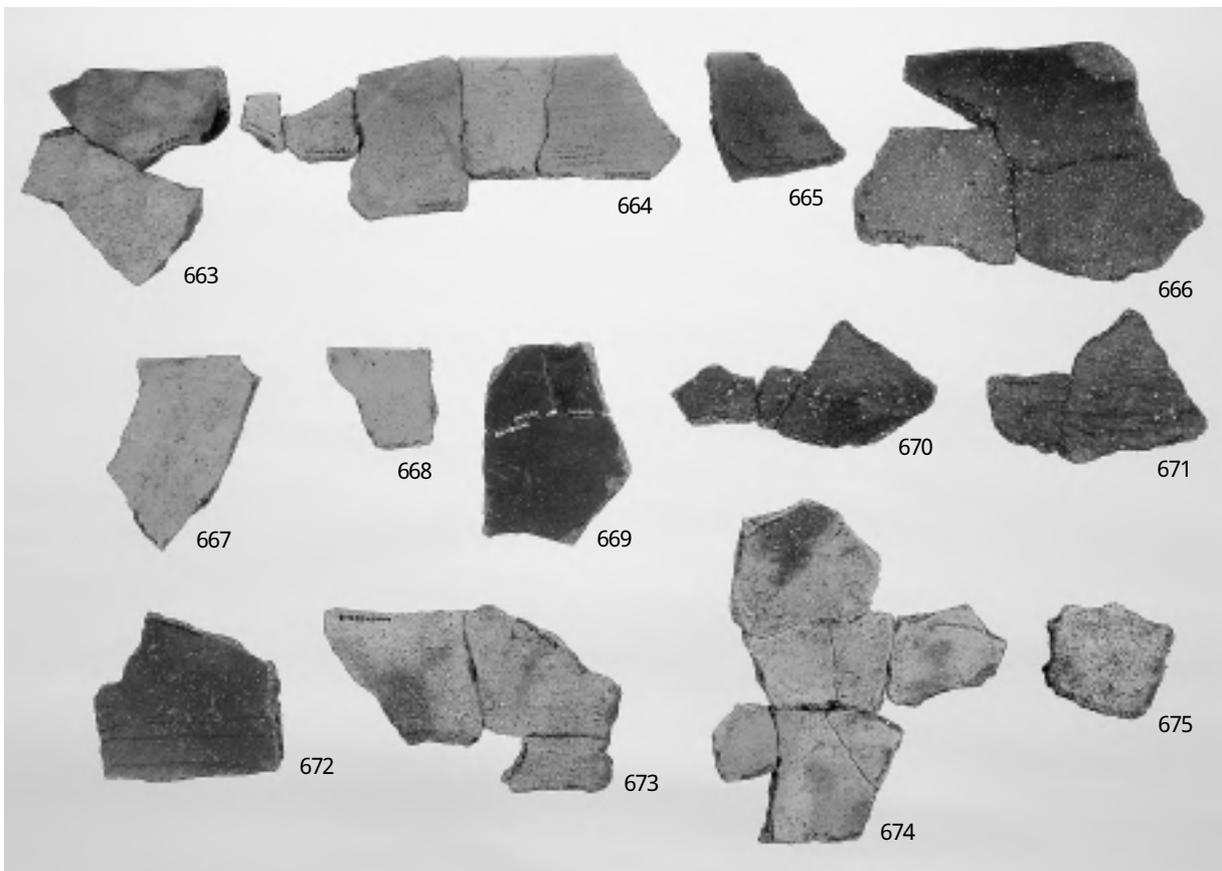
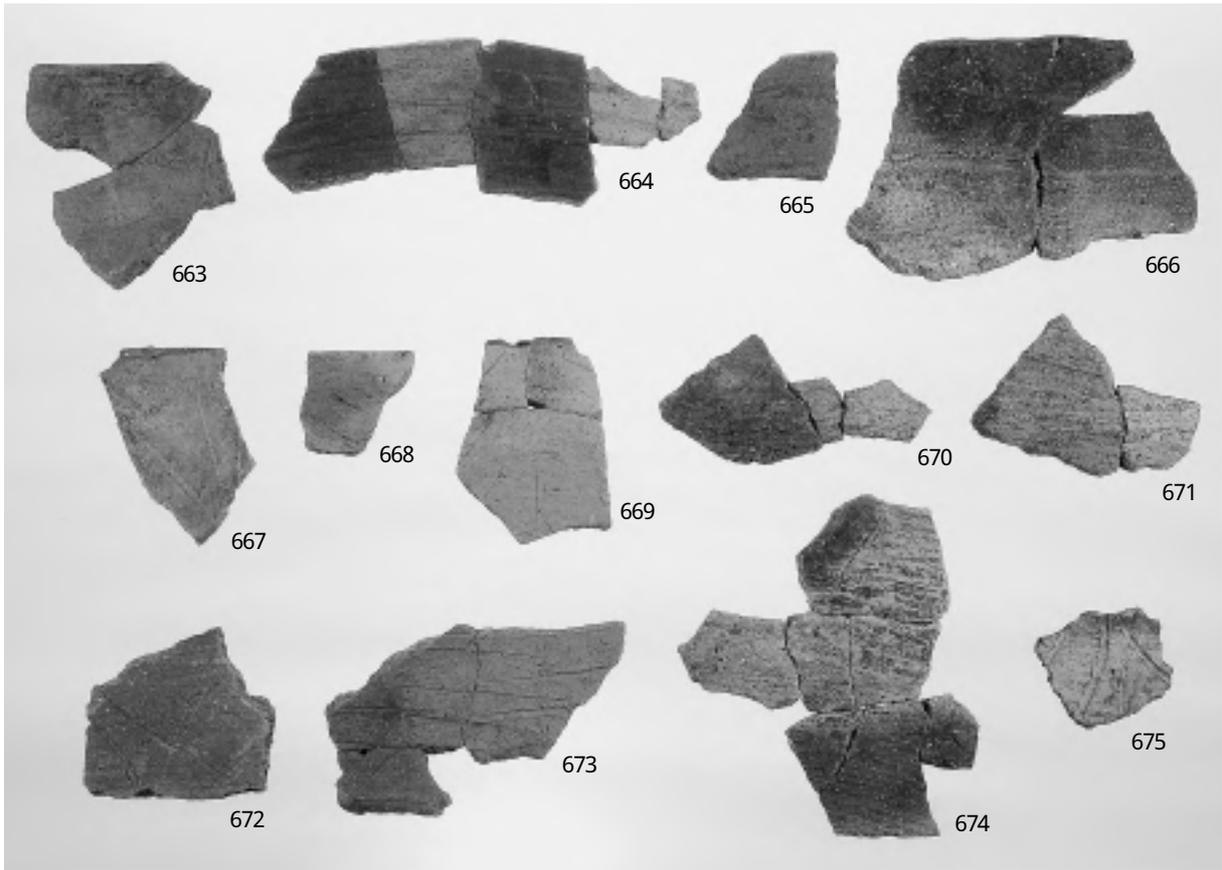
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



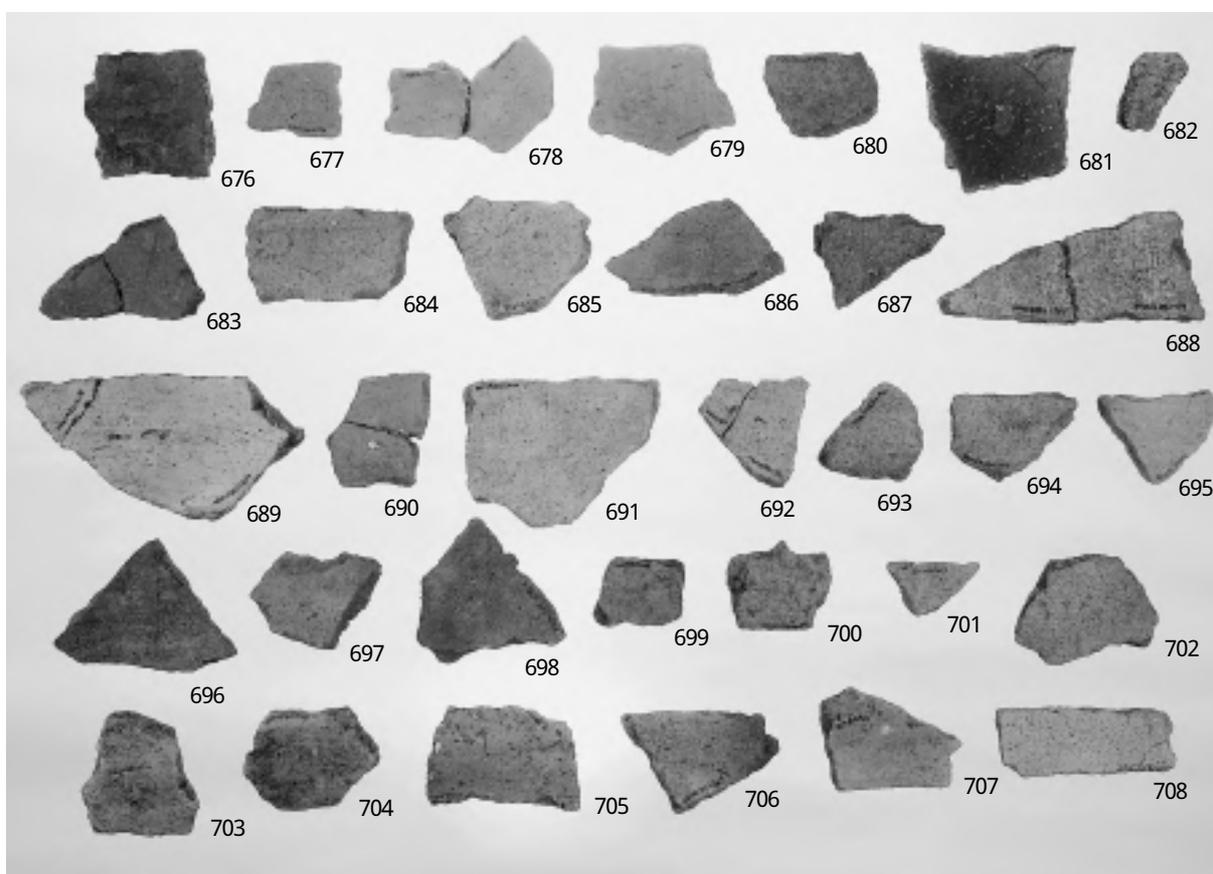
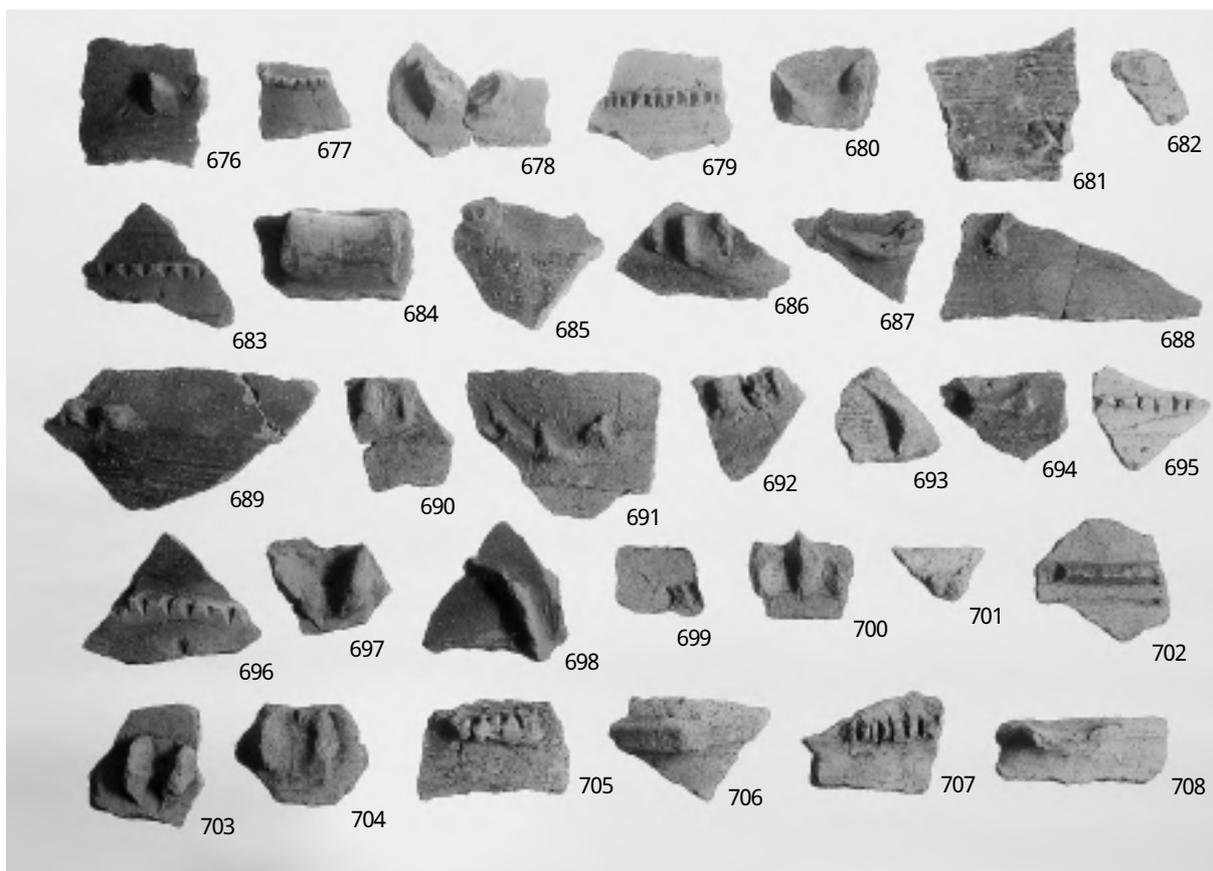
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



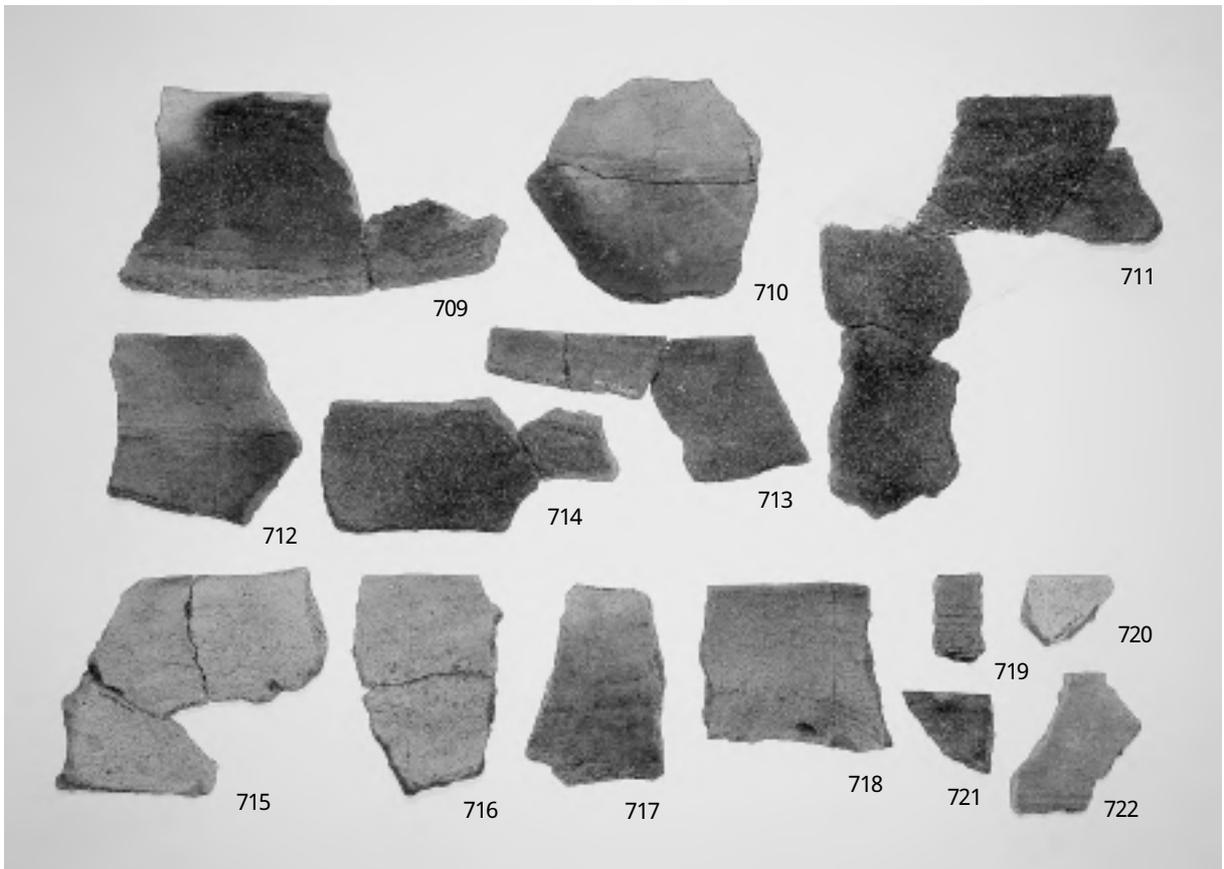
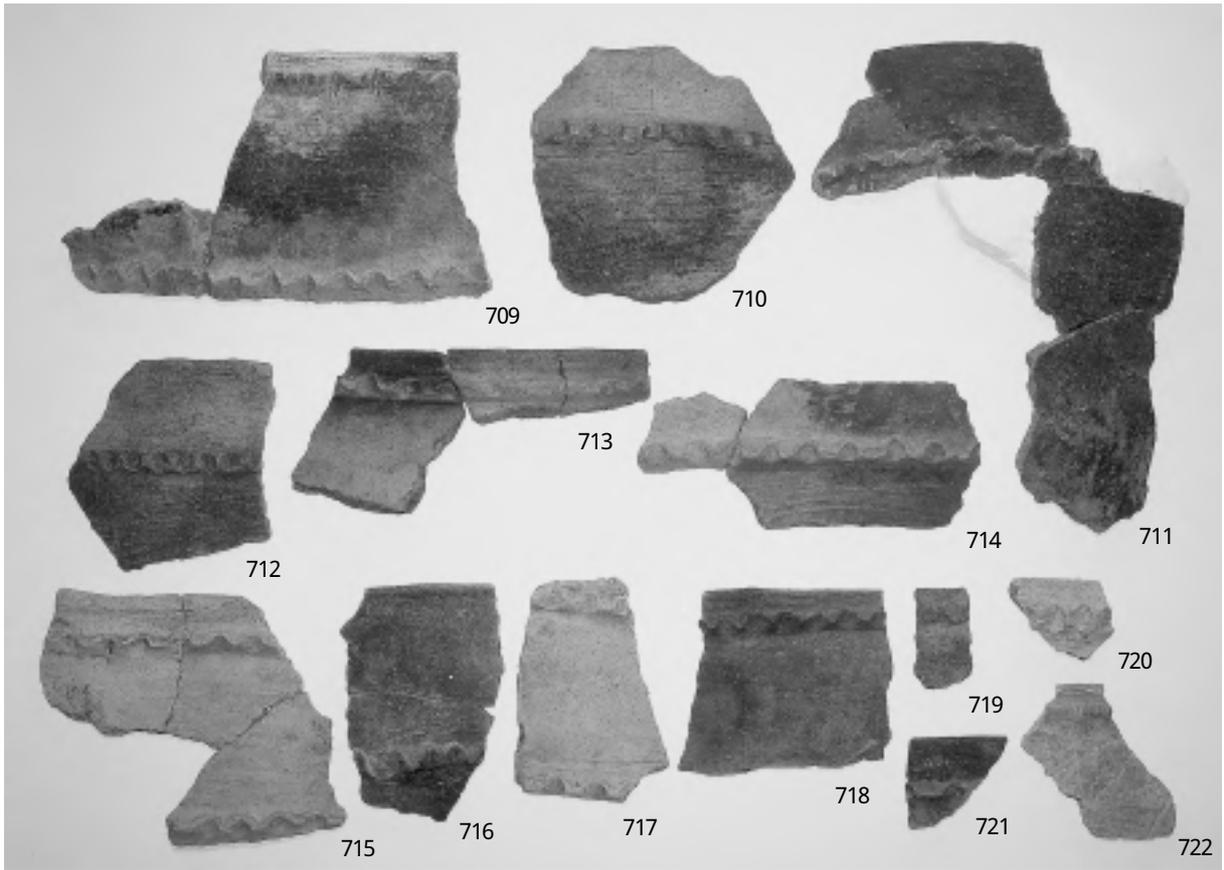
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



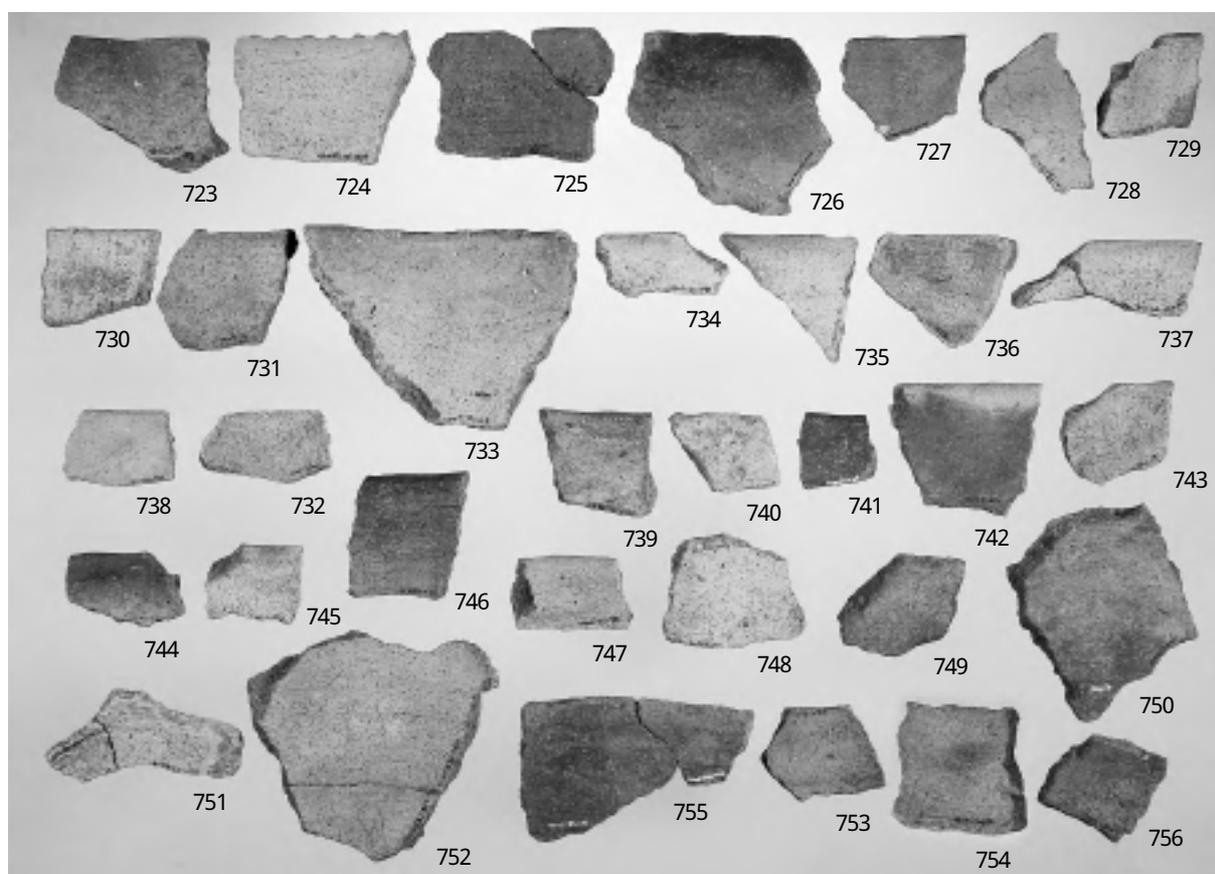
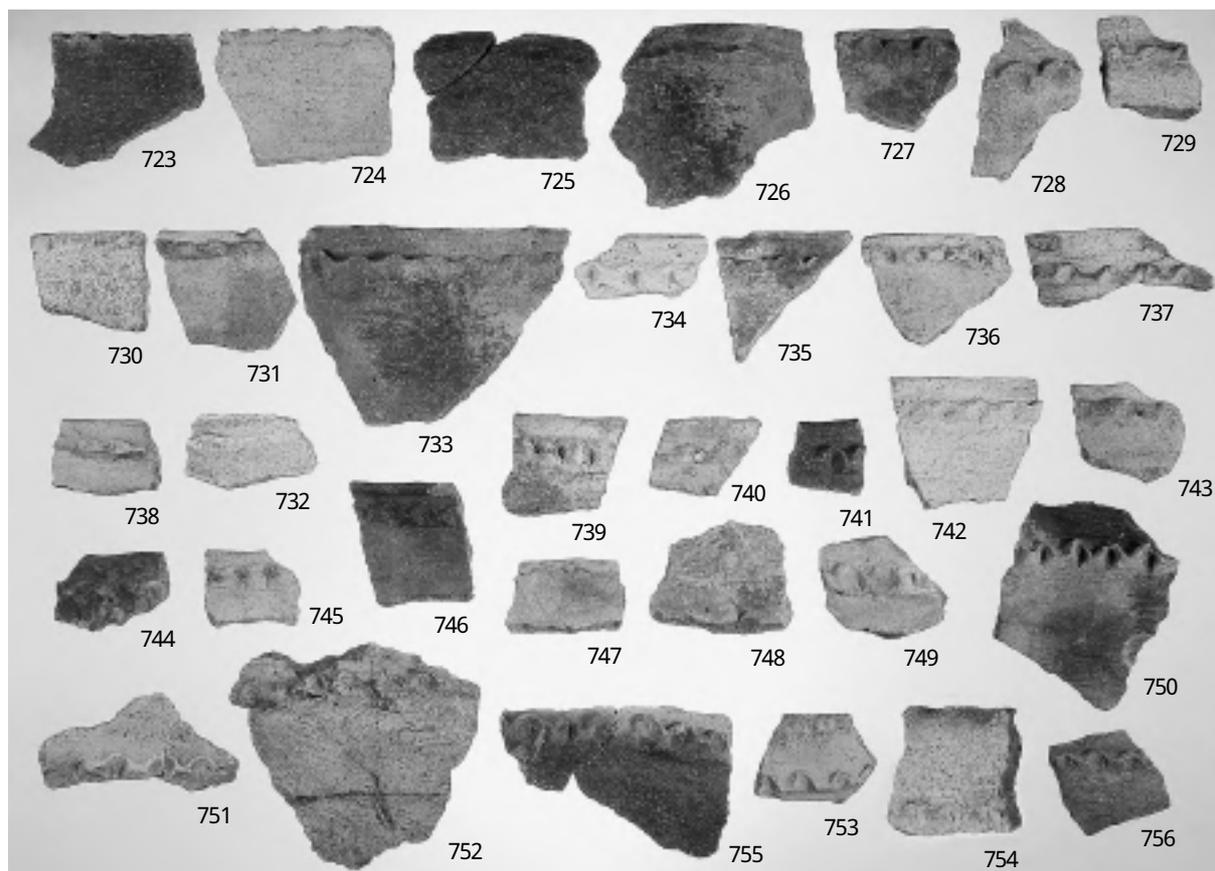
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



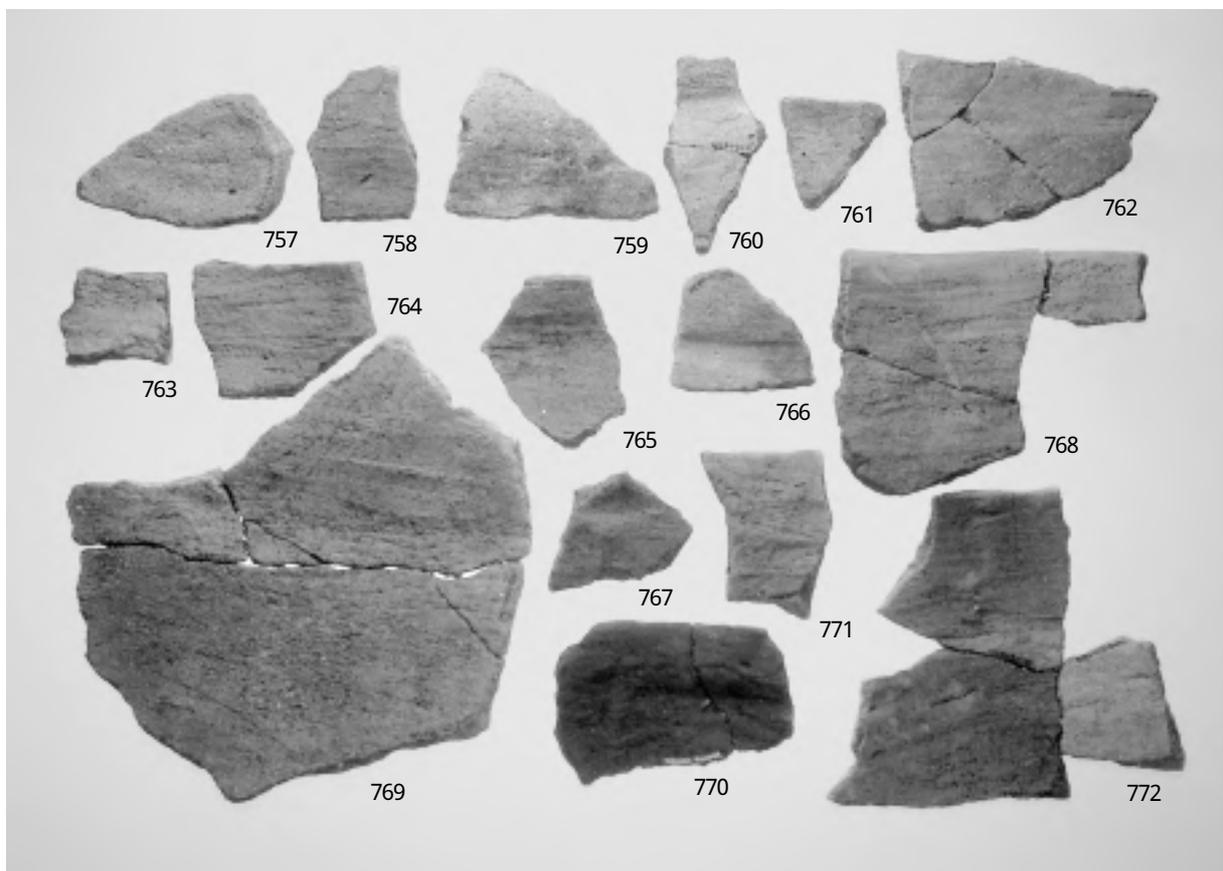
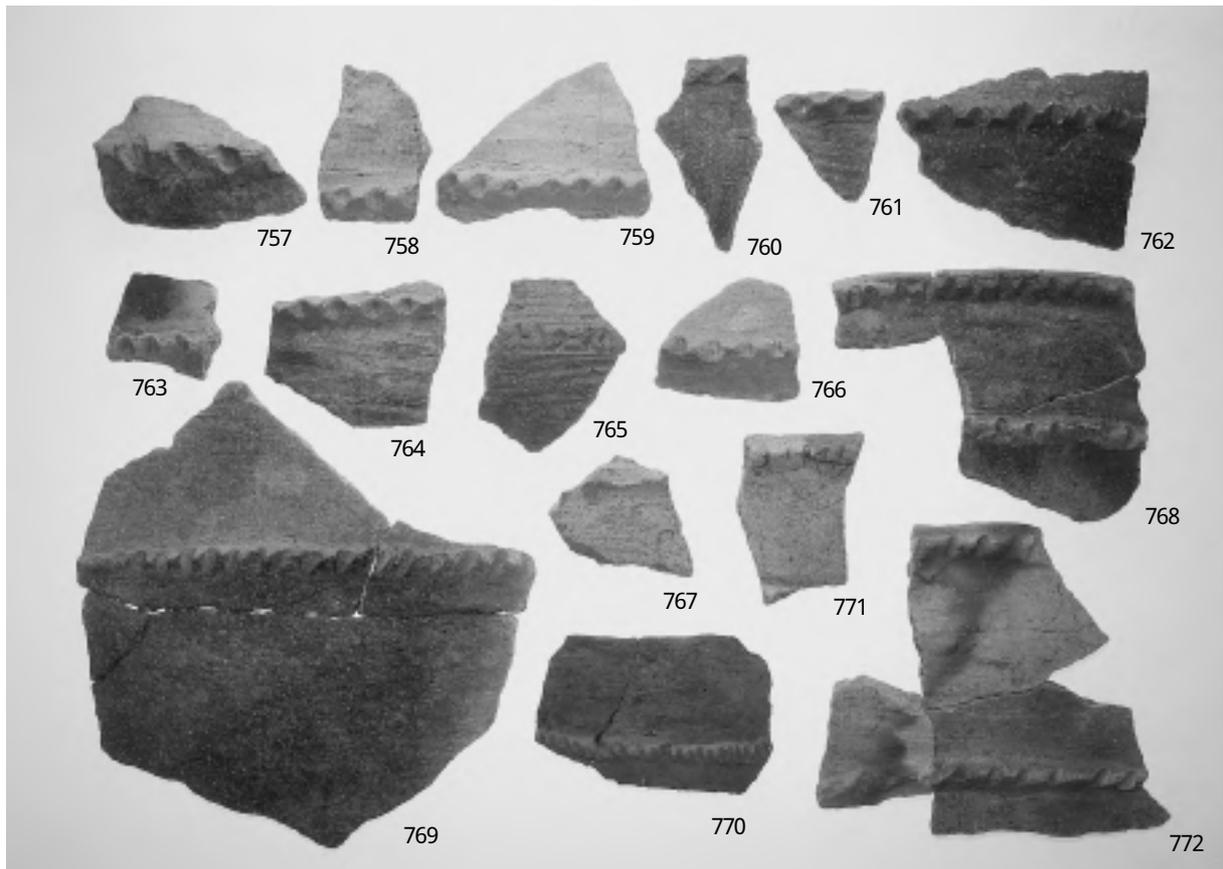
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



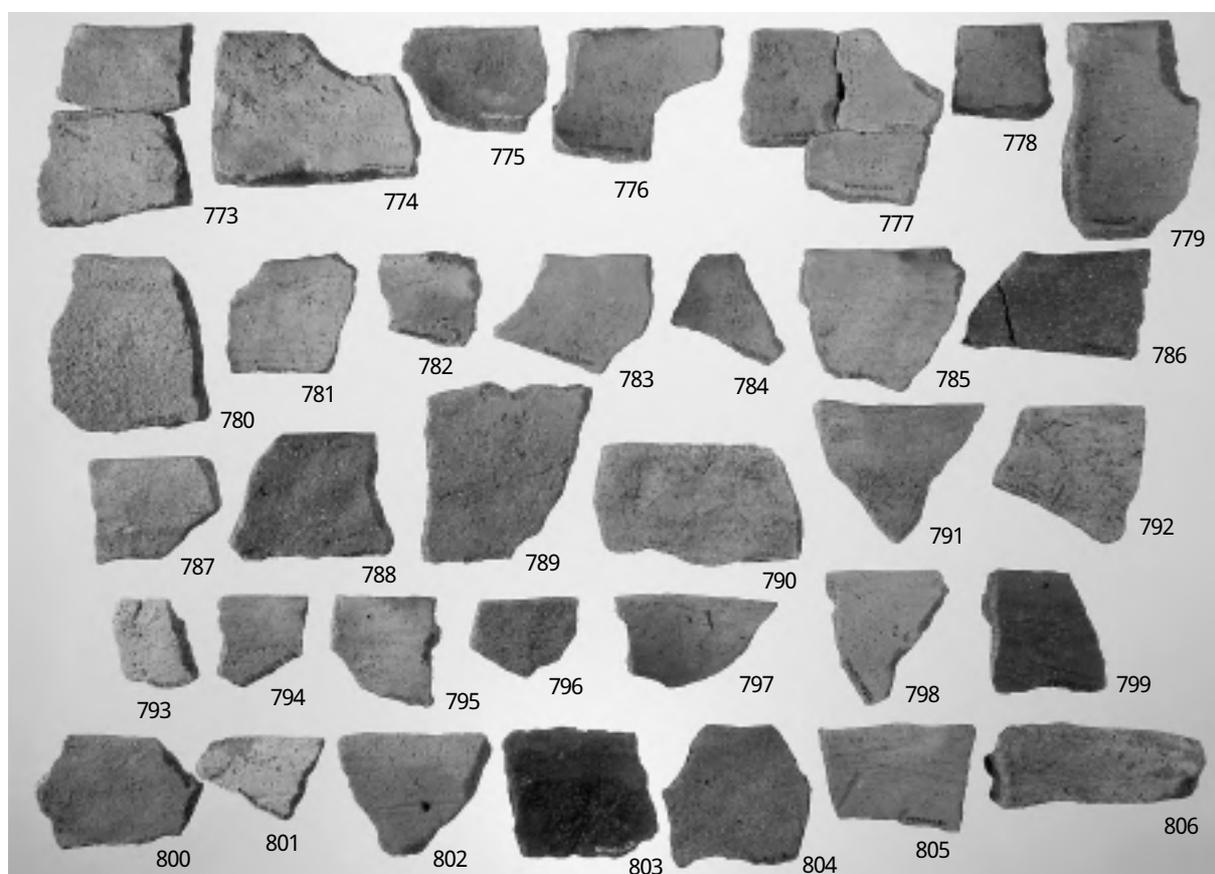
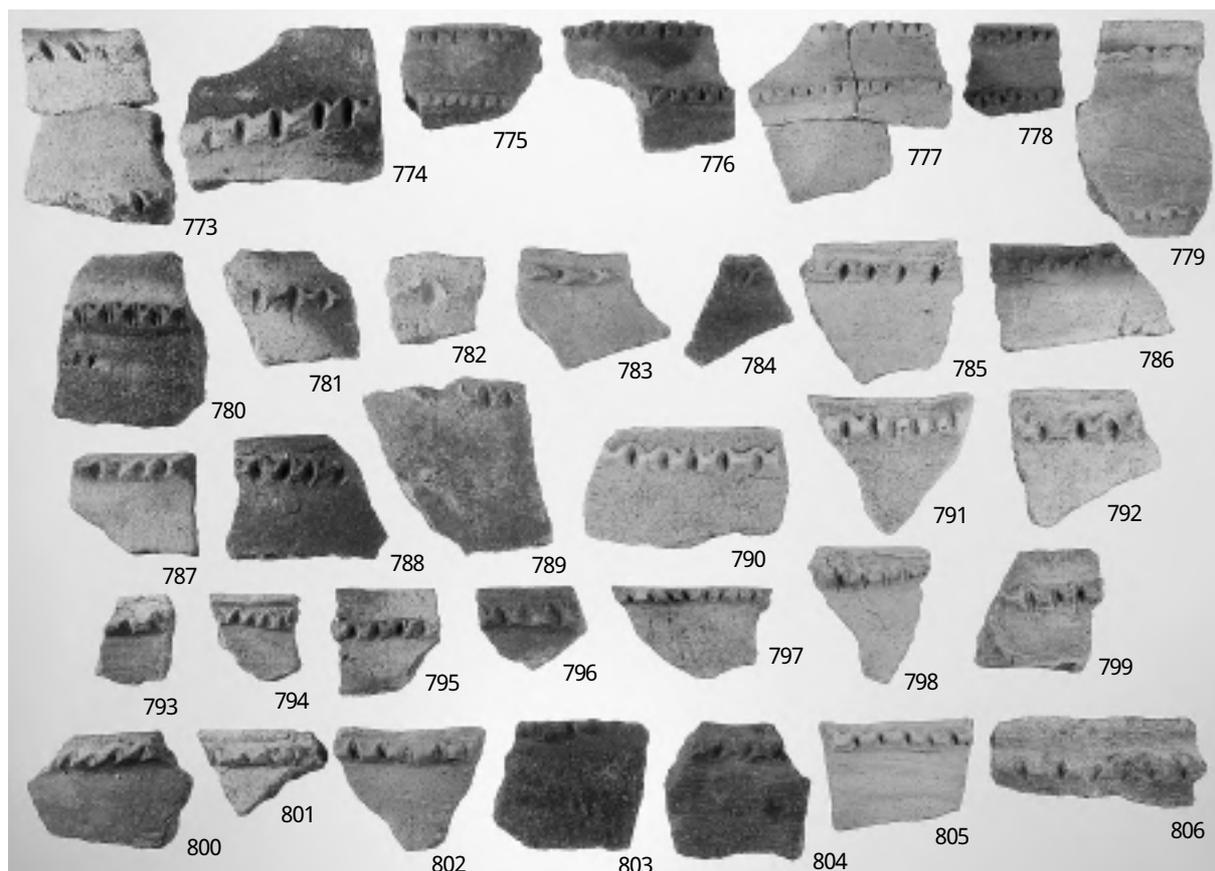
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



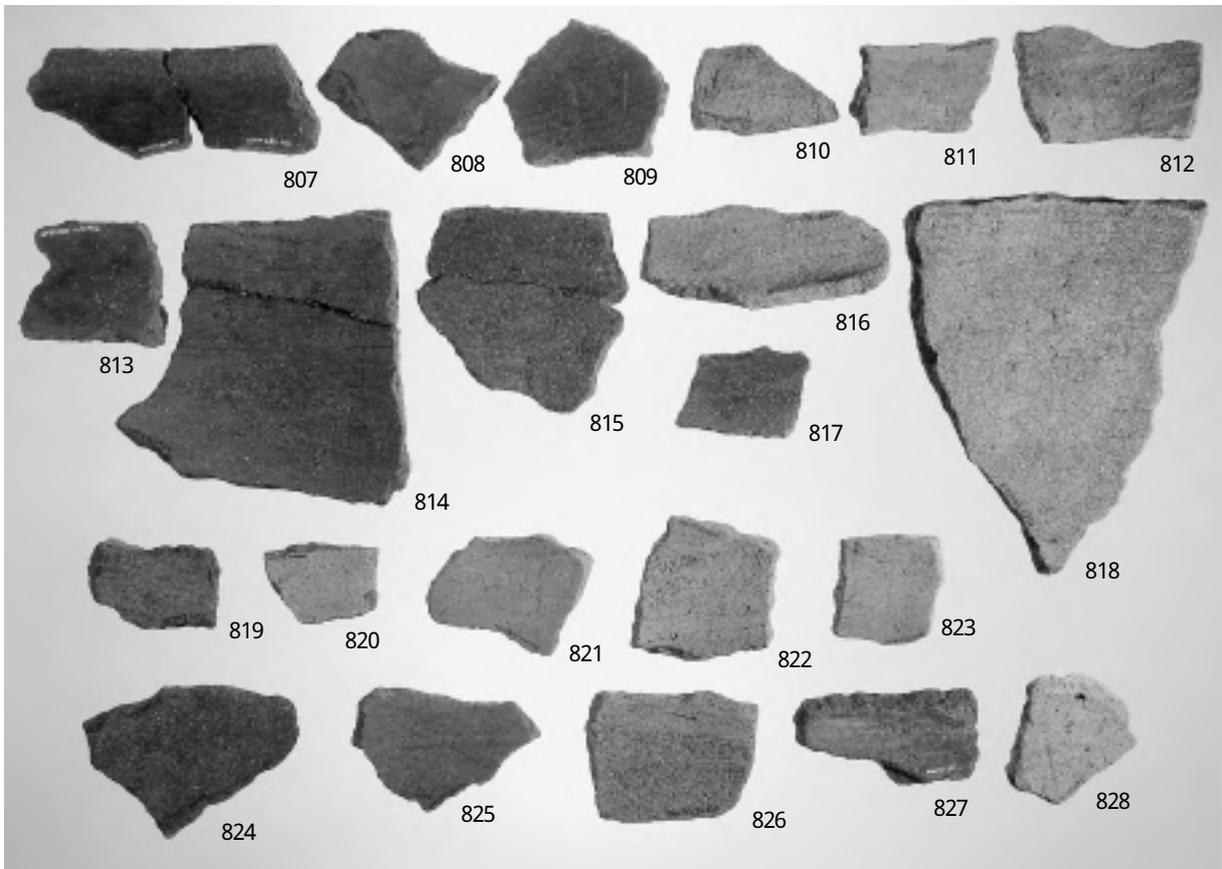
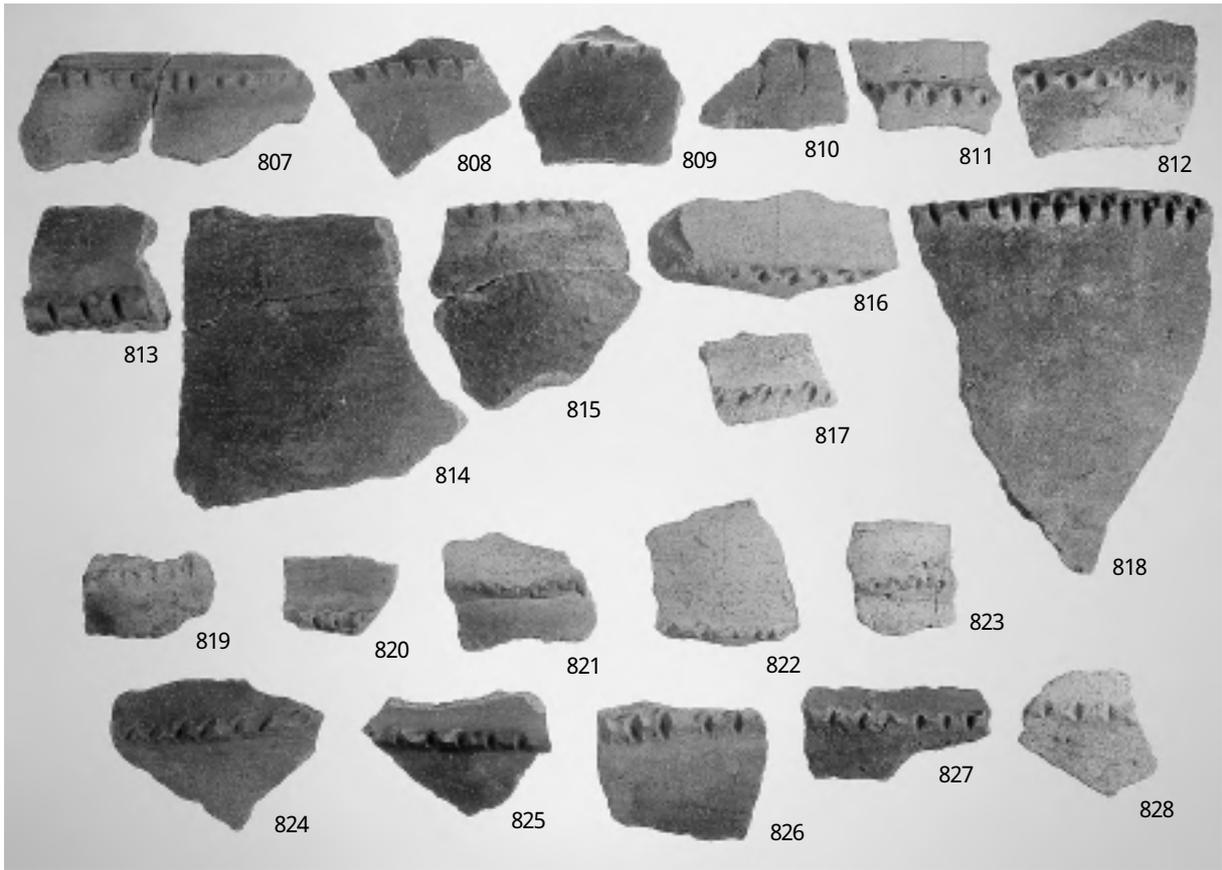
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



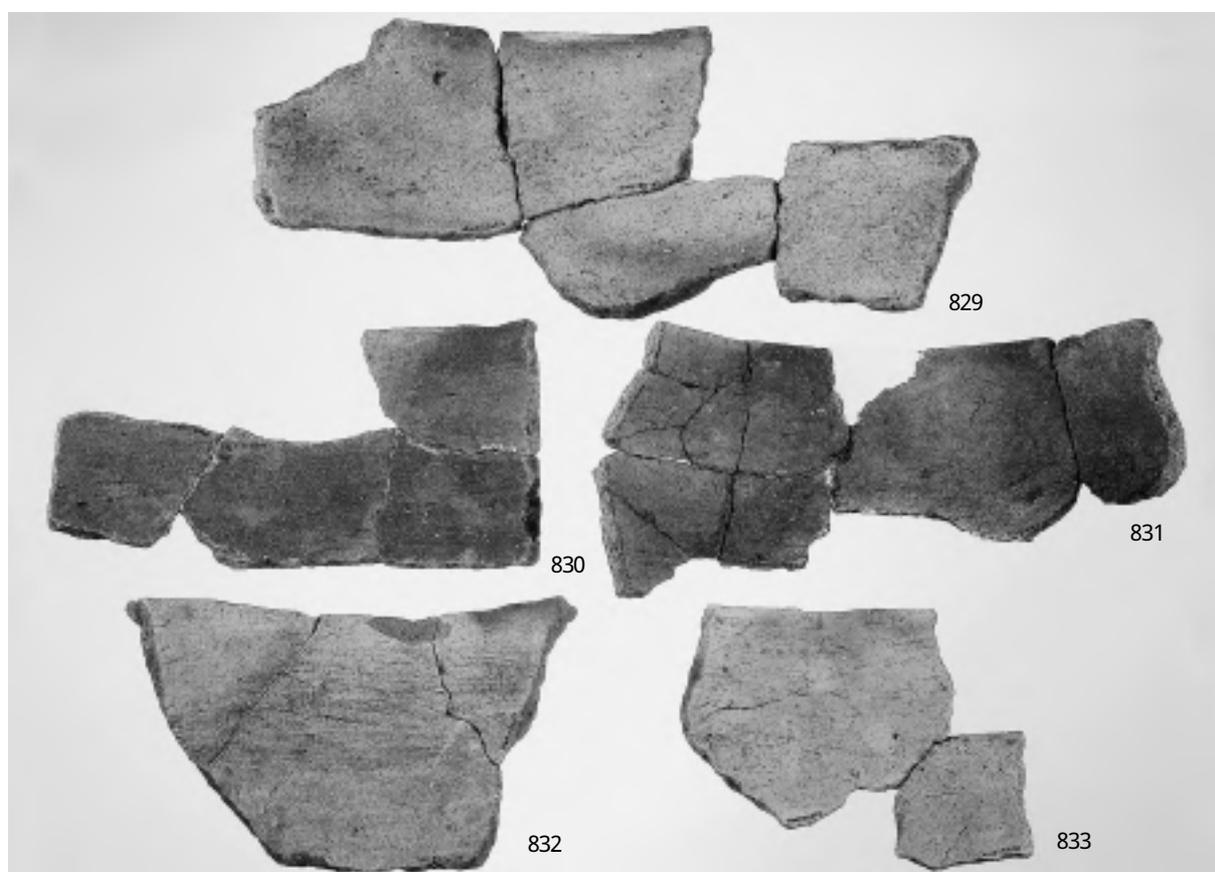
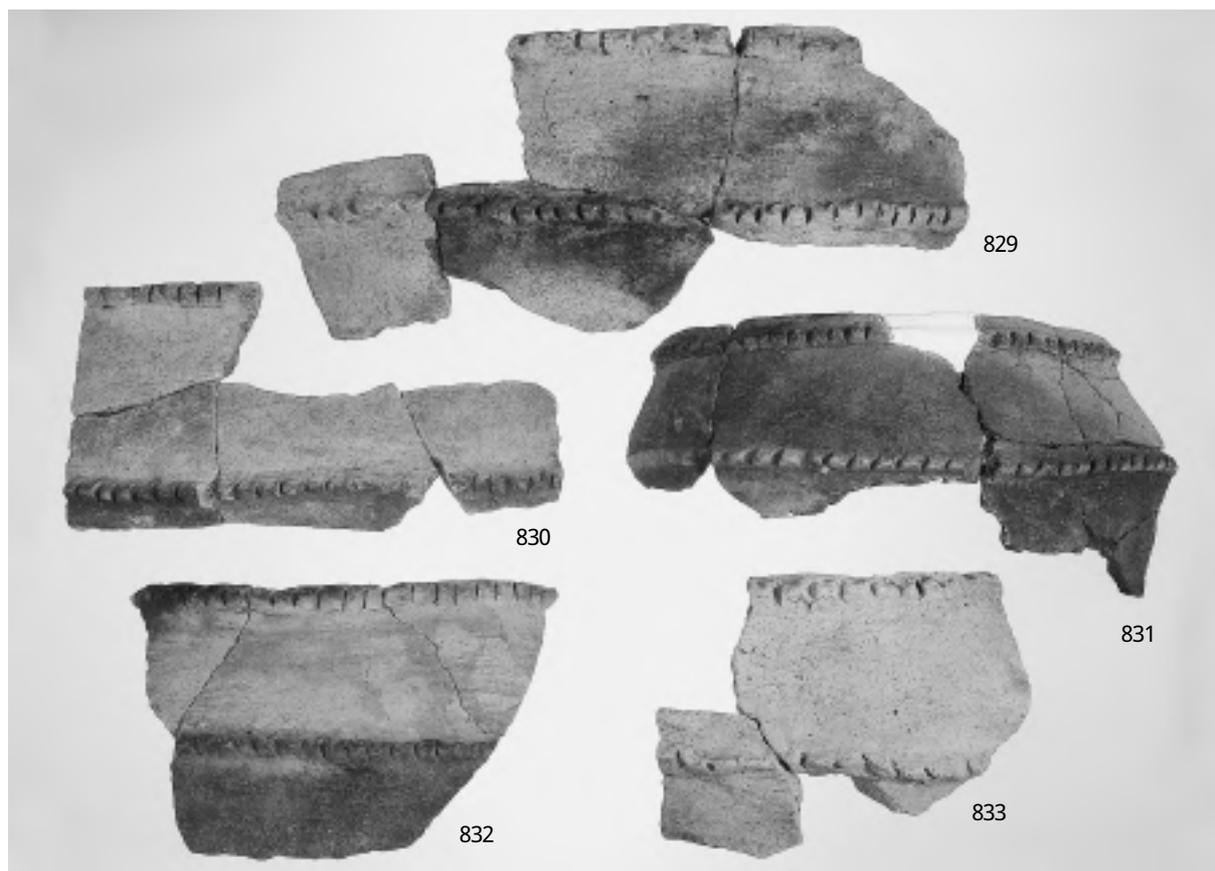
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



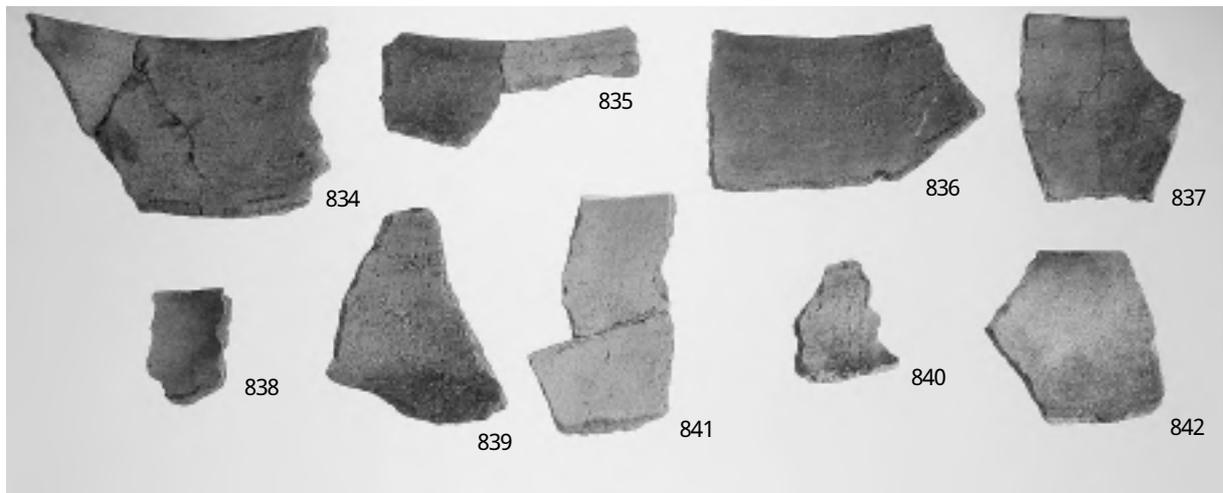
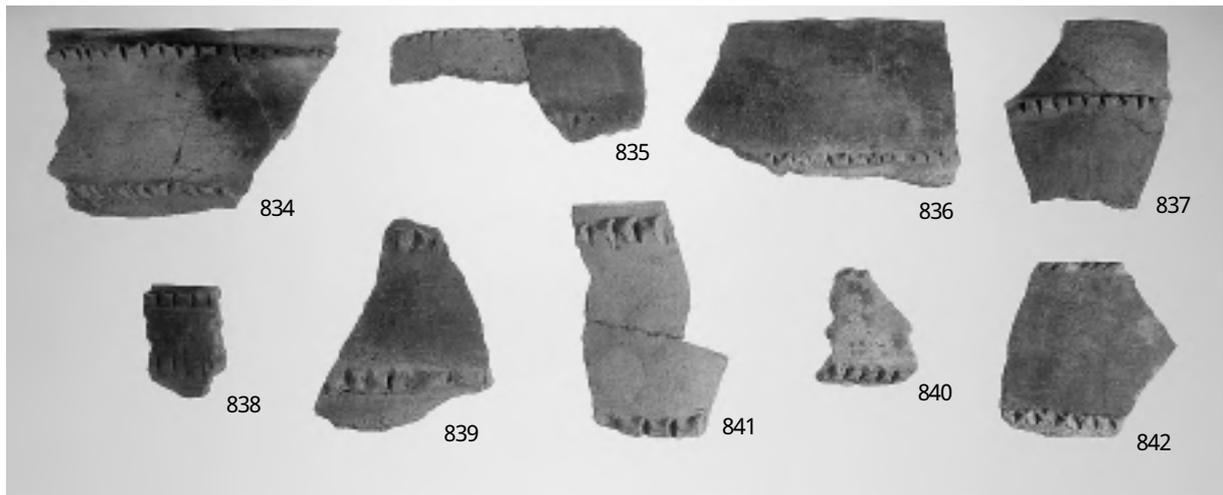
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



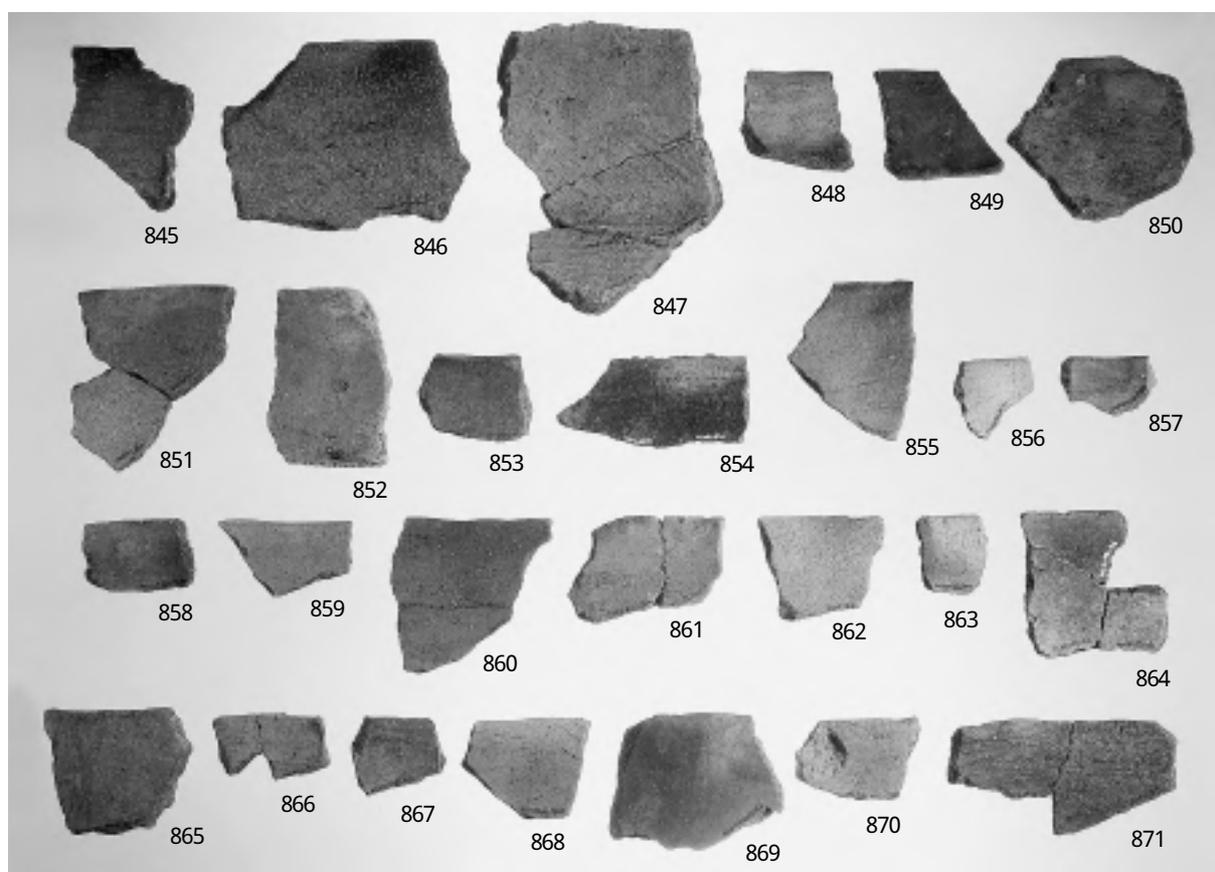
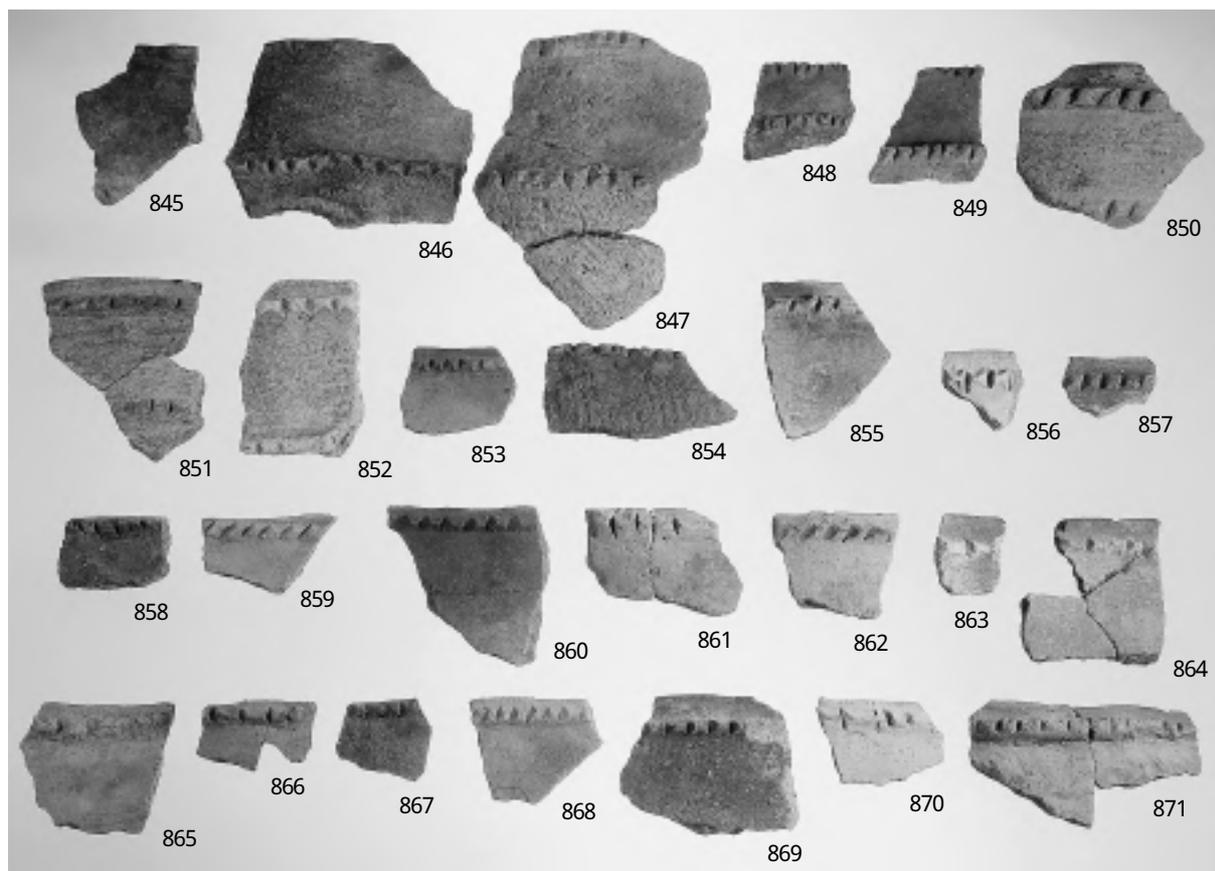
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



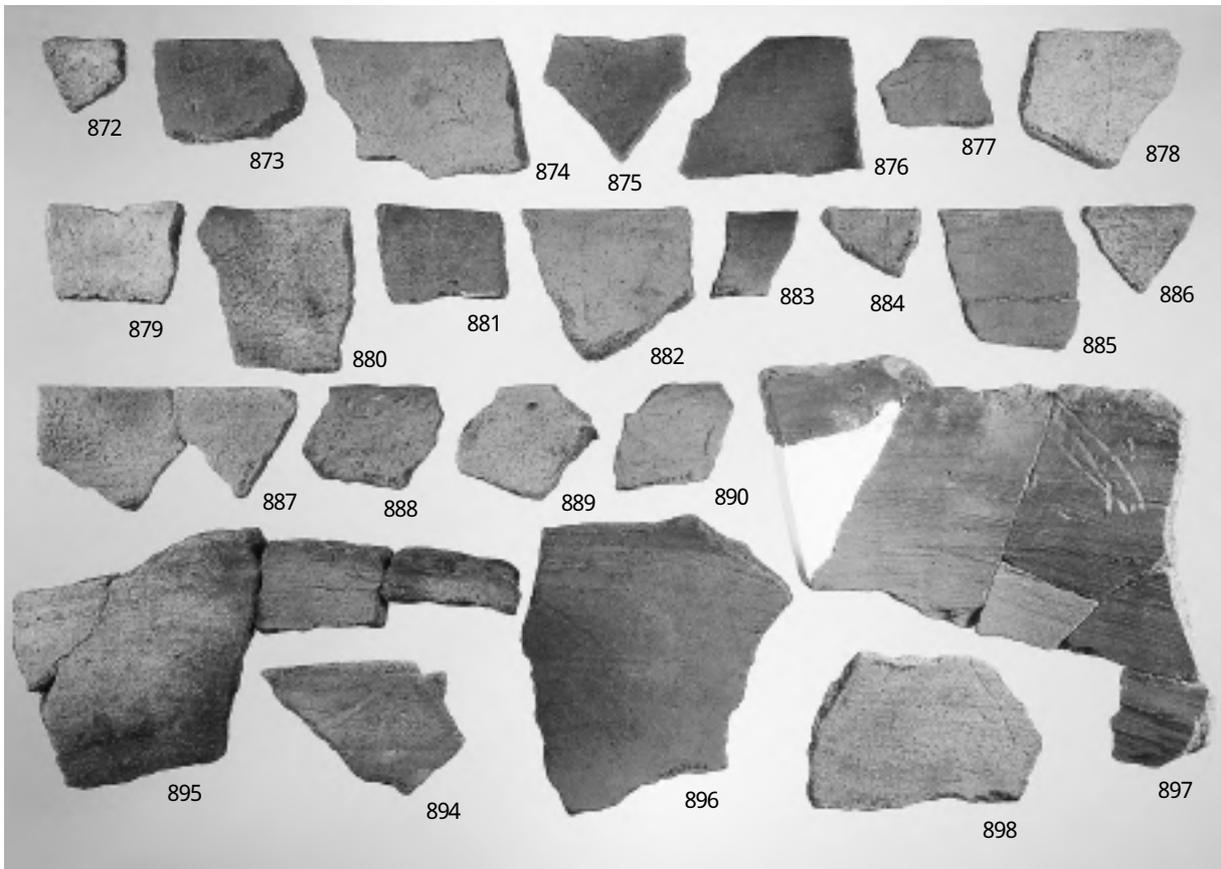
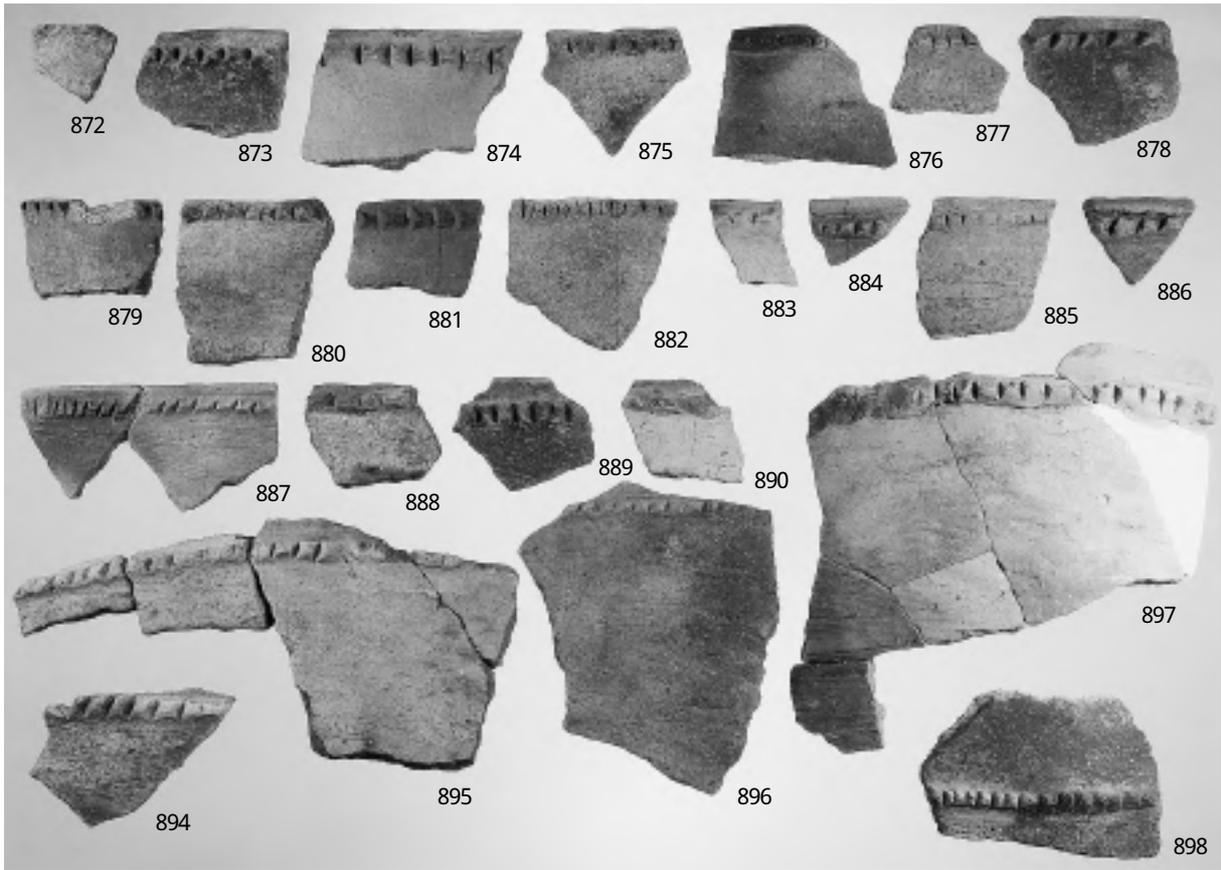
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



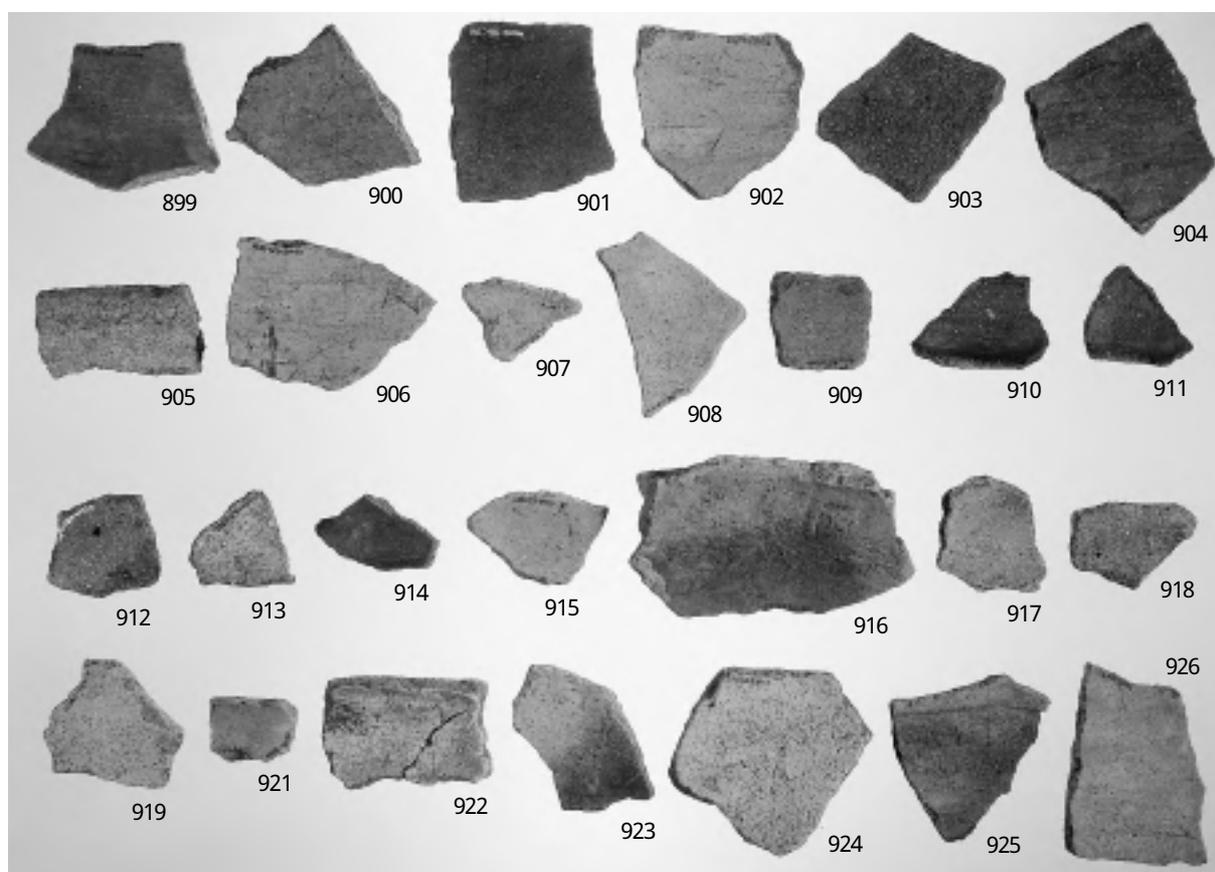
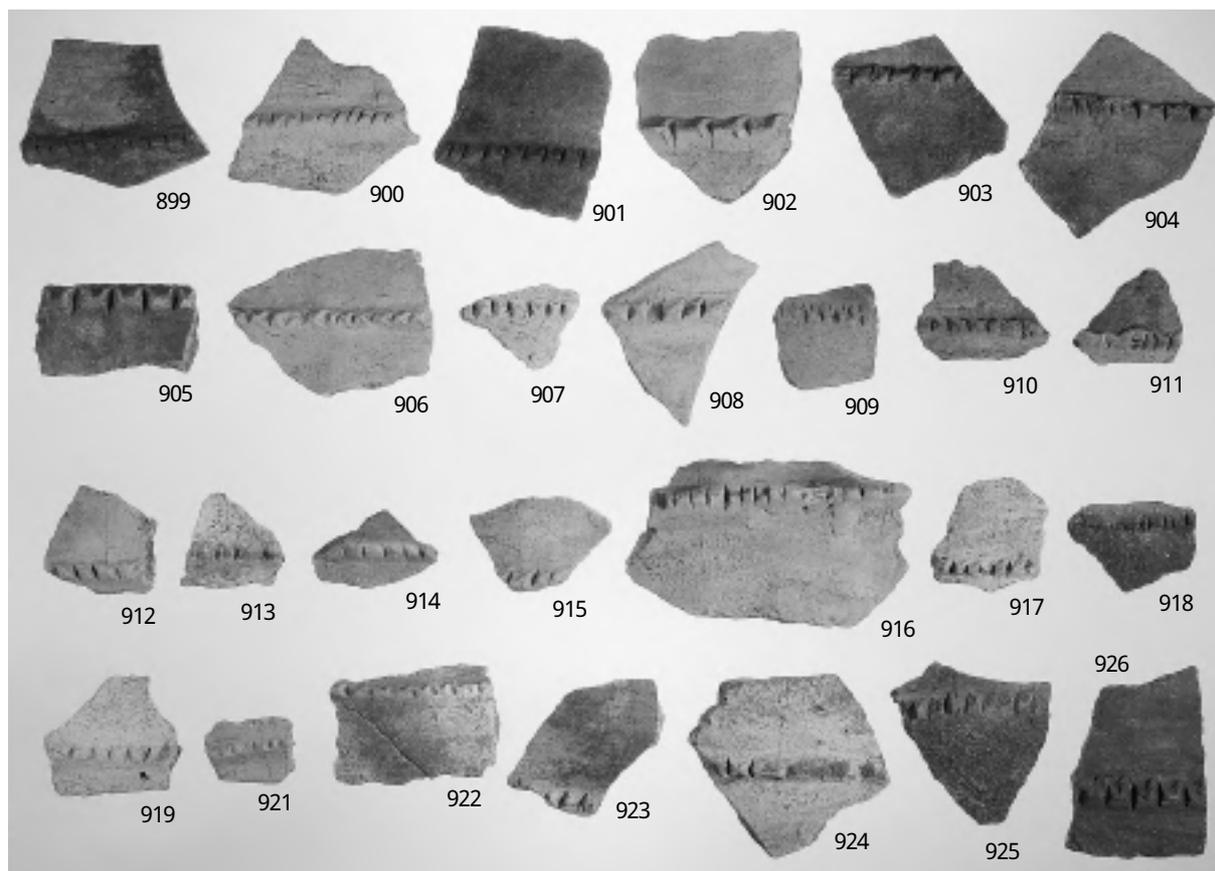
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



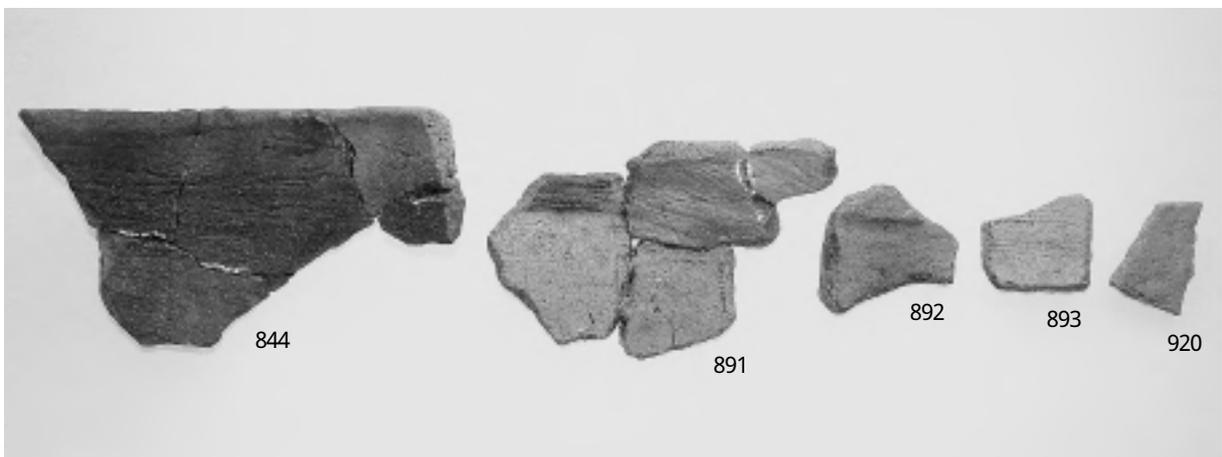
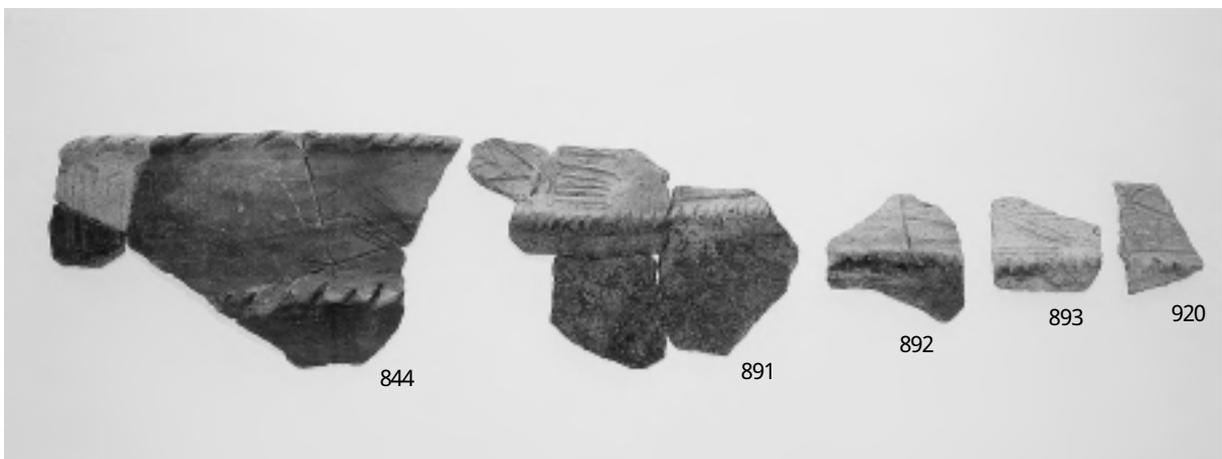
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



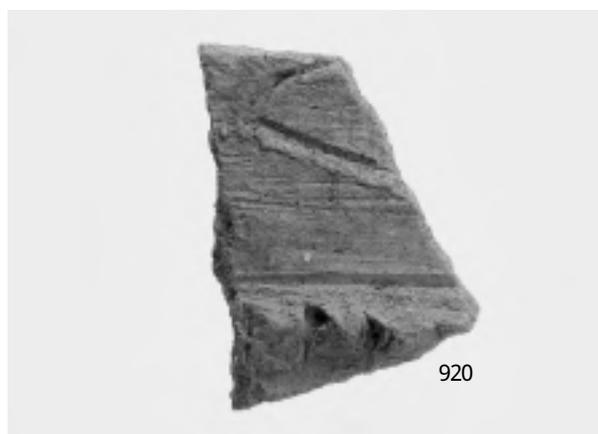
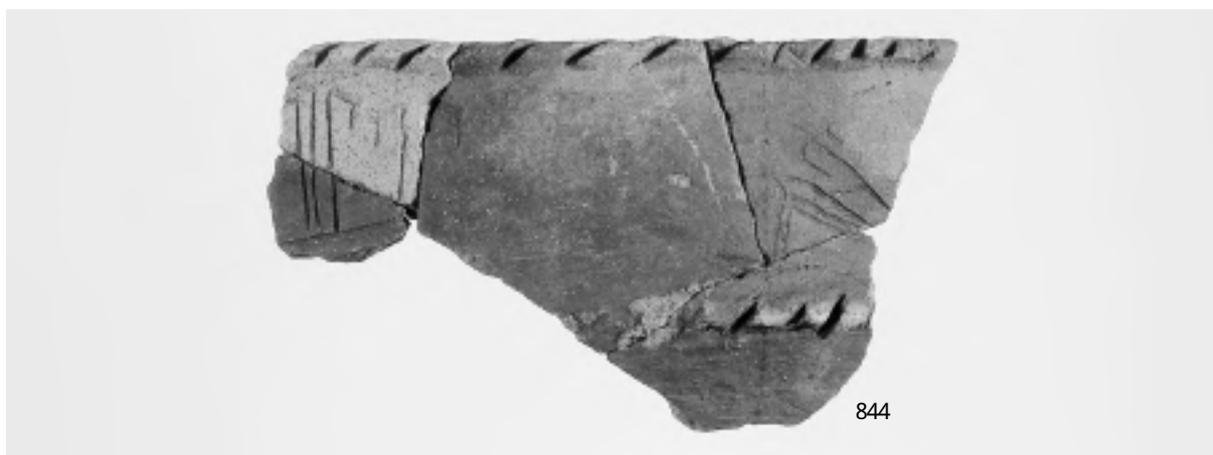
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



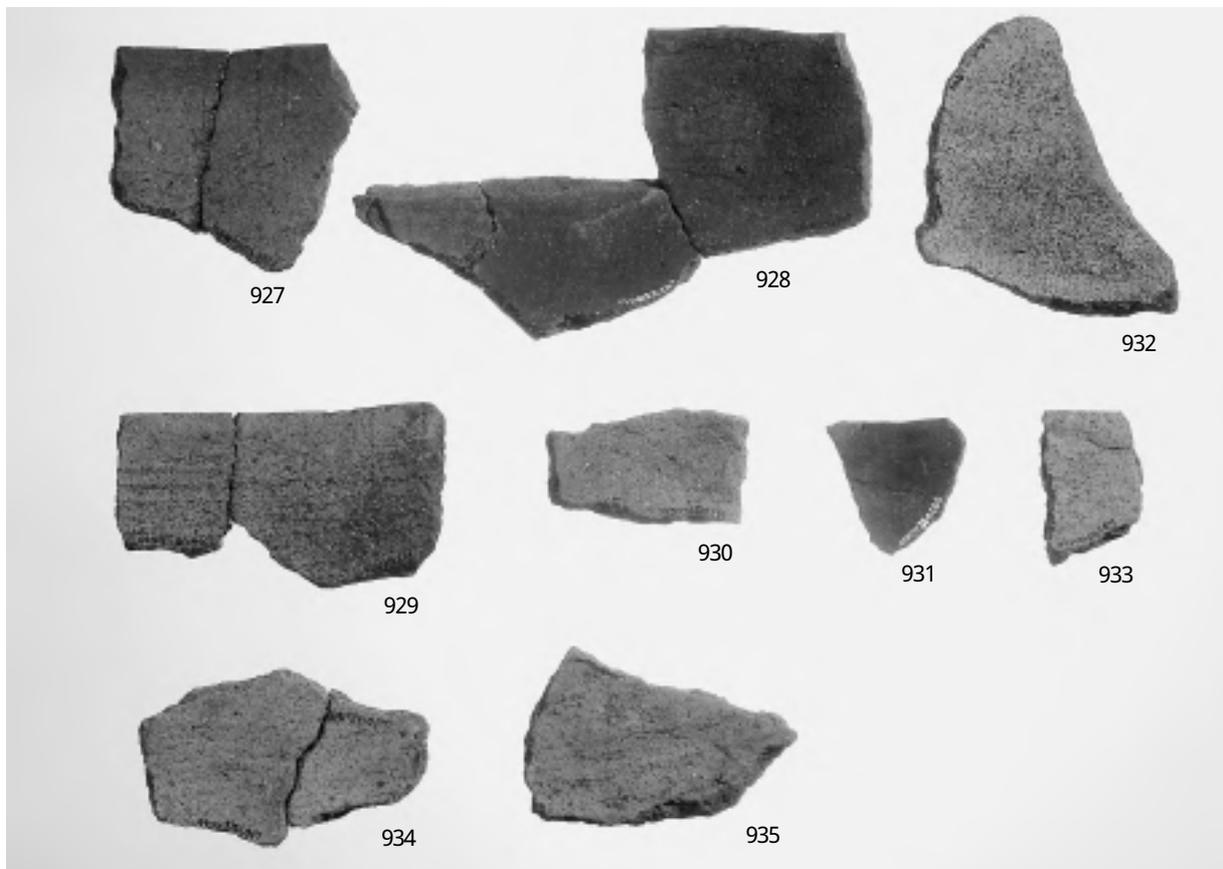
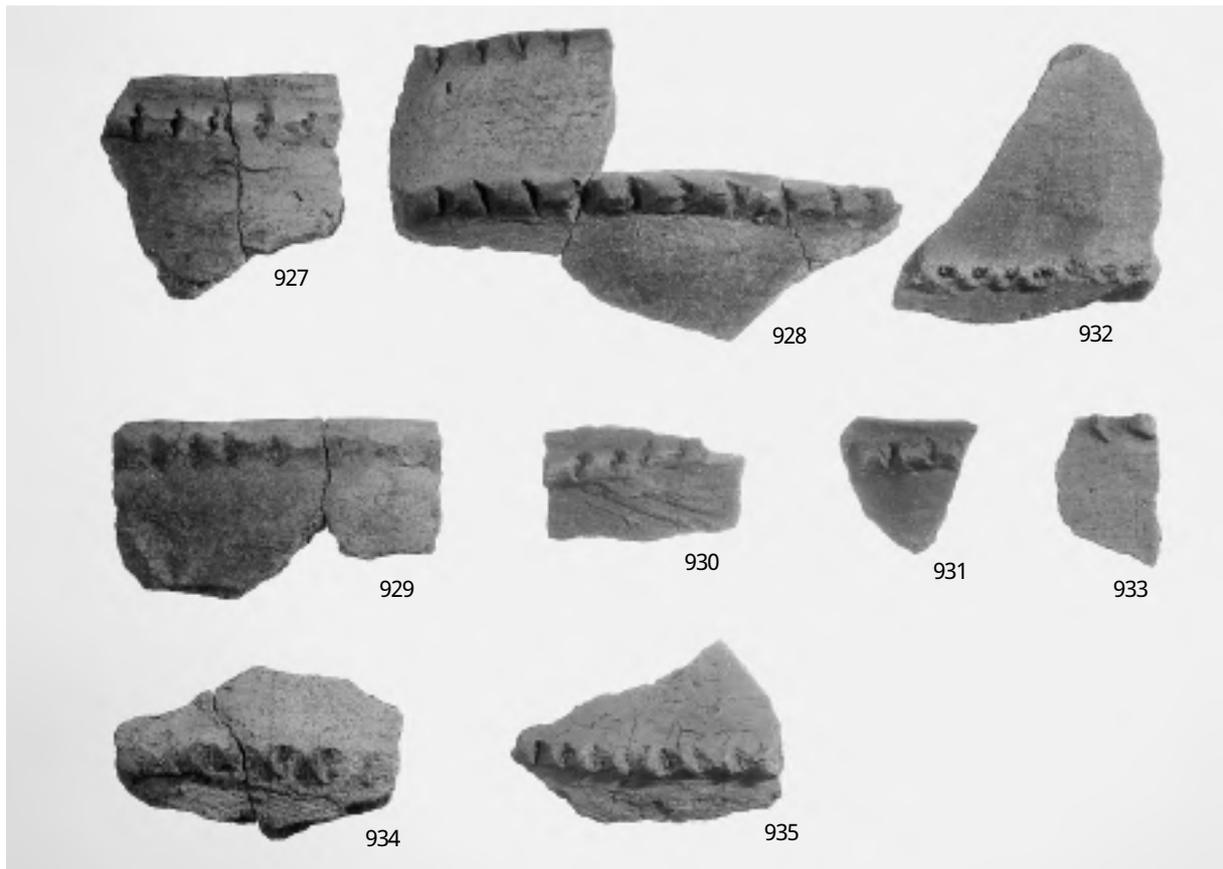
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区・線刻土器拡大）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



709 (口縁部)



709 (胴部)



710 (胴部)



711 (胴部)



712 (胴部)



713 (口縁部)



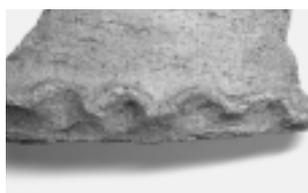
714 (胴部)



716 (胴部)



715 (口縁部)



715 (胴部)



717 (口縁部)



717 (胴部)



718 (口縁部)



719 (口縁部)



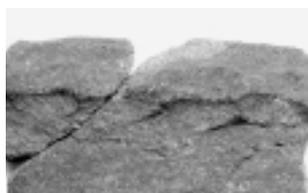
720 (口縁部)



721 (口縁部)



722 (口縁部)



725 (口縁部)



723 (口縁部)



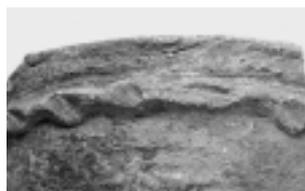
723 (口唇部)



724 (口縁部)



724 (口唇部)



726 (口縁部)



727 (口縁部)



728 (口縁部)



729 (口縁部)



730 (口縁部)



731 (口縁部)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)

図版104



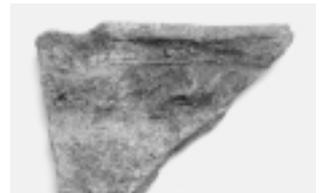
732 (口縁部)



733 (口縁部)



734 (口縁部)



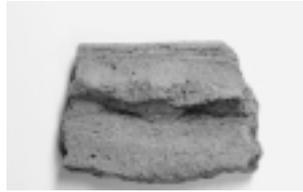
735 (口縁部)



736 (口縁部)



737 (口縁部)



738 (口縁部)



739 (口縁部)



740 (口縁部)



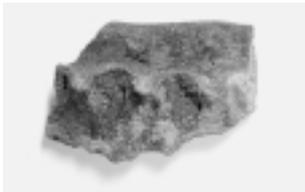
741 (口縁部)



742 (口縁部)



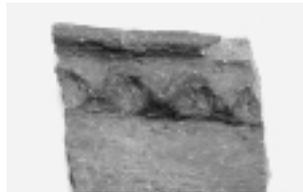
743 (口縁部)



744 (口縁部)



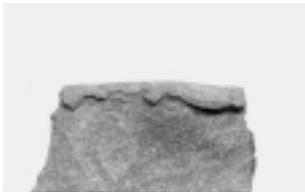
745 (口縁部)



746 (口縁部)



748 (胴部)



747 (口縁部)



747 (口唇部)



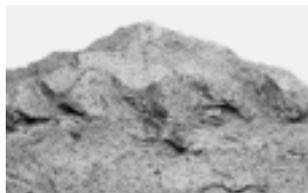
749 (胴部)



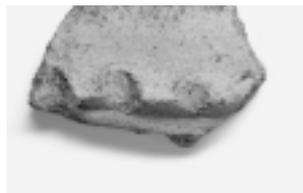
750 (胴部)



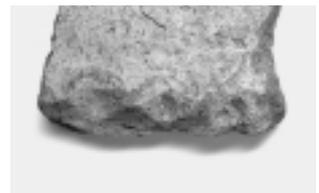
751 (胴部)



752 (胴部)



753 (胴部)



754 (胴部)



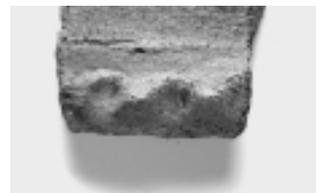
755 (胴部)



756 (胴部)

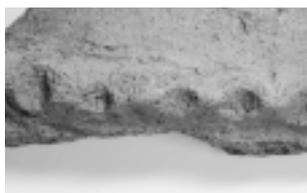


757 (胴部)



758 (胴部)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)



759 ( 胴部 )



760 ( 胴部 )



761 ( 胴部 )



762 ( 胴部 )



763 ( 胴部 )



764 ( 胴部 )



765 ( 胴部 )



766 ( 胴部 )



767 ( 胴部 )



768 ( 口縁部 )



768 ( 胴部 )



769 ( 口縁部 )



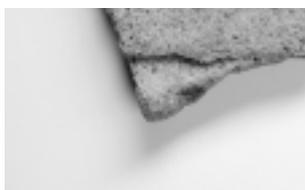
769 ( 胴部 )



770 ( 胴部 )



771 ( 口縁部 )



771 ( 胴部 )



774 ( 胴部 )



772 ( 口縁部 )



772 ( 胴部 )



773 ( 口縁部 )



773 ( 胴部 )



775 ( 口縁部 )



775 ( 胴部 )



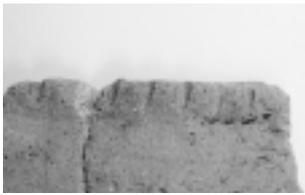
776 ( 口縁部 )



776 ( 胴部 )

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 ( B・C区・刻目突帯文土器拡大 )

図版106



777 (口縁部)



777 (胴部)



778 (口縁部)



778 (胴部)



779 (口縁部)



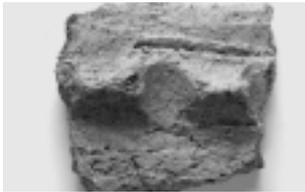
779 (胴部)



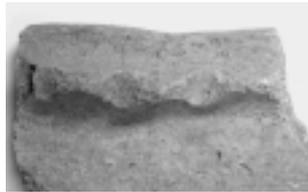
780 (口縁部)



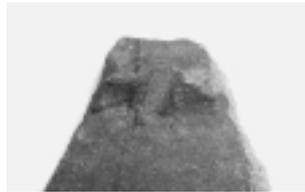
781 (口縁部)



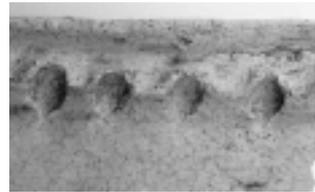
782 (口縁部)



783 (口縁部)



784 (口縁部)



785 (口縁部)



786 (口縁部)



787 (口縁部)



788 (口縁部)



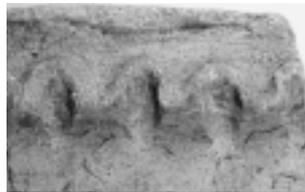
789 (口縁部)



790 (口縁部)



791 (口縁部)



792 (口縁部)



793 (口縁部)



794 (口縁部)



795 (口縁部)



796 (口縁部)



797 (口縁部)



798 (口縁部)



799 (口縁部)



800 (口縁部)



801 (口縁部)

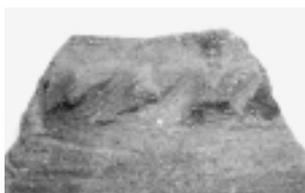
縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)



802 (口縁部)



803 (口縁部)



804 (口縁部)



805 (口縁部)



806 (口縁部)



807 (胴部)



808 (胴部)



809 (胴部)



810 (胴部)



811 (胴部)



812 (胴部)



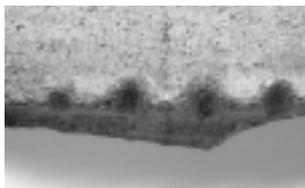
813 (胴部)



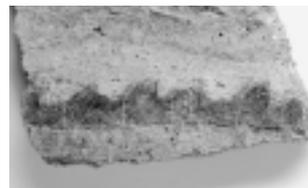
814 (胴部)



815 (胴部)



816 (胴部)



817 (胴部)



818 (胴部)



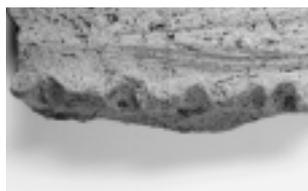
819 (胴部)



820 (胴部)



821 (胴部)



822 (胴部)



823 (胴部)



824 (胴部)



825 (胴部)



826 (胴部)



827 (胴部)



828 (胴部)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)

図版108



829 (口縁部)



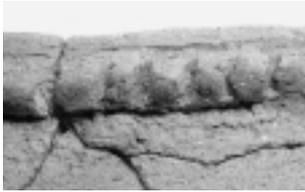
829 (胴部)



830 (口縁部)



830 (胴部)



831 (口縁部)



831 (胴部)



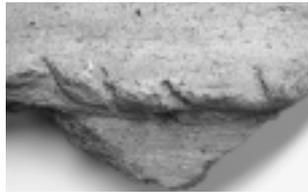
832 (口縁部)



832 (胴部)



833 (口縁部)



833 (胴部)



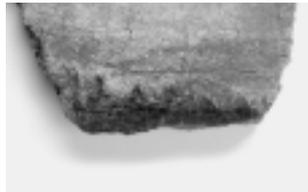
834 (口縁部)



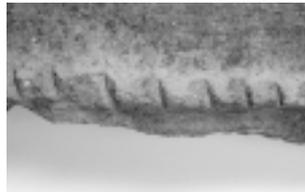
834 (胴部)



835 (口縁部)



835 (胴部)



836 (胴部)



837 (胴部)



838 (口縁部)



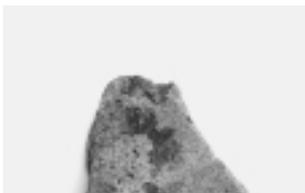
838 (胴部)



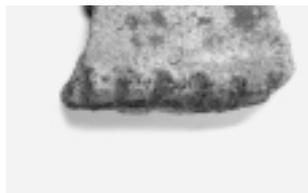
839 (口縁部)



839 (胴部)



840 (口縁部)



840 (胴部)



841 (口縁部)



841 (胴部)



842 (口縁部)



842 (胴部)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)



843 (胴部)



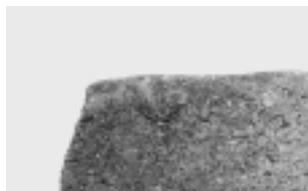
844 (口縁部)



844 (胴部)



845 (胴部)



846 (口縁部)



846 (胴部)



847 (口縁部)



847 (胴部)



848 (口縁部)



848 (胴部)



849 (口縁部)



849 (胴部)



850 (口縁部)



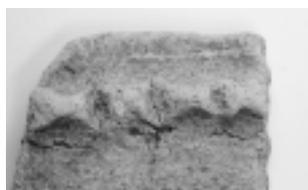
850 (胴部)



851 (口縁部)



851 (胴部)



852 (口縁部)



852 (胴部)



853 (口縁部)



854 (口縁部)



855 (口縁部)



856 (口縁部)



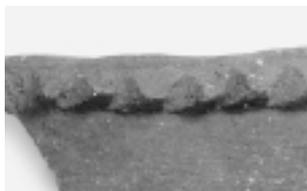
857 (口縁部)



858 (口縁部)



859 (口縁部)



860 (口縁部)



861 (口縁部)



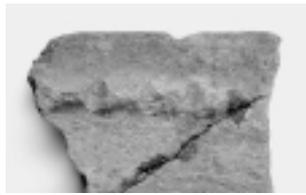
862 (口縁部)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)

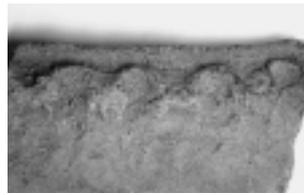
図版110



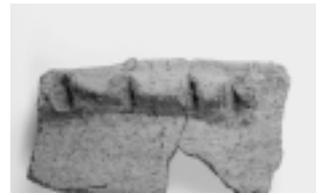
863 (口縁部)



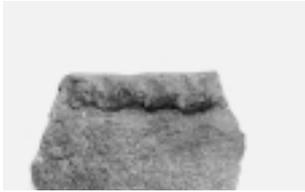
864 (口縁部)



865 (口縁部)



866 (口縁部)



867 (口縁部)



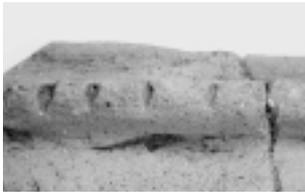
868 (口縁部)



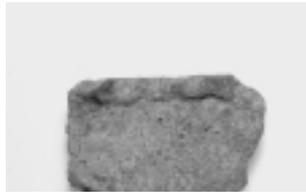
869 (口縁部)



870 (口縁部)



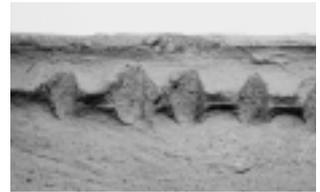
871 (口縁部)



872 (口縁部)



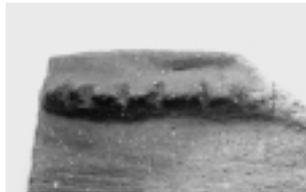
873 (口縁部)



874 (口縁部)



875 (口縁部)



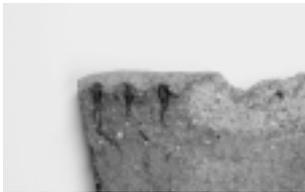
876 (口縁部)



877 (口縁部)



878 (口縁部)



879 (口縁部)



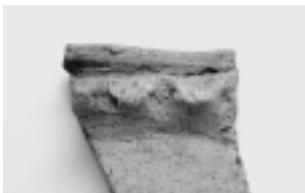
880 (口縁部)



881 (口縁部)



882 (口縁部)



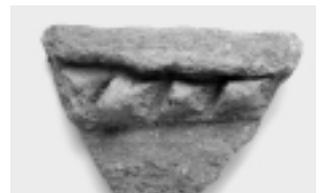
883 (口縁部)



884 (口縁部)



885 (口縁部)



886 (口縁部)



887 (口縁部)



888 (口縁部)



889 (口縁部)



890 (口縁部)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)



891 ( 胴部 )



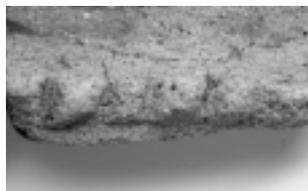
892 ( 胴部 )



893 ( 胴部 )



894 ( 胴部 )



895 ( 胴部 )



896 ( 胴部 )



897 ( 胴部 )



898 ( 胴部 )



899 ( 胴部 )



900 ( 胴部 )



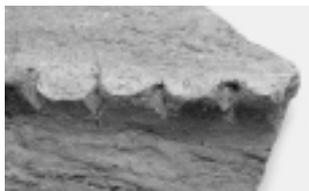
901 ( 胴部 )



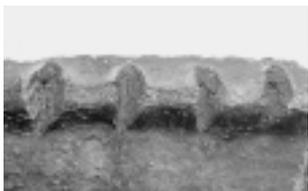
902 ( 胴部 )



903 ( 胴部 )



904 ( 胴部 )



905 ( 胴部 )



906 ( 胴部 )



907 ( 胴部 )



908 ( 胴部 )



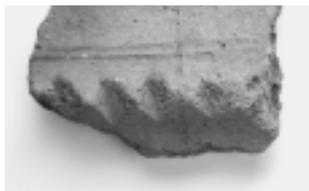
909 ( 胴部 )



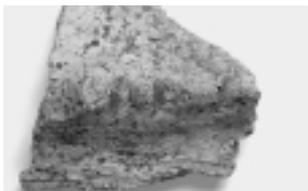
910 ( 胴部 )



911 ( 胴部 )



912 ( 胴部 )



913 ( 胴部 )



914 ( 胴部 )



915 ( 胴部 )



916 ( 胴部 )



917 ( 胴部 )



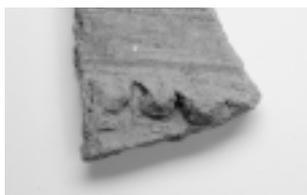
918 ( 胴部 )

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 ( B・C区・刻目突帯文土器拡大 )

図版112



919 (胴部)



920 (胴部)



921 (胴部)



922 (胴部)



923 (胴部)



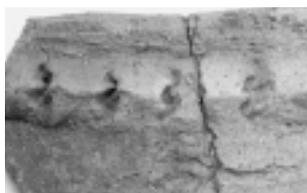
924 (胴部)



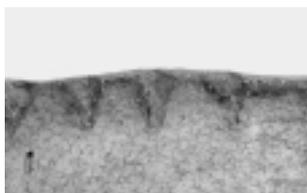
925 (胴部)



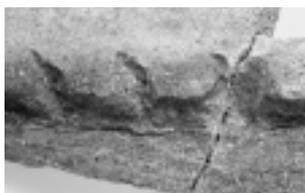
926 (胴部)



927 (口縁部)



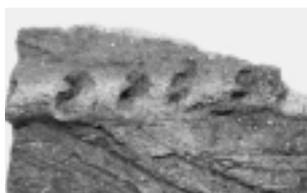
928 (口縁部)



928 (胴部)



929 (口縁部)



930 (胴部)



931 (口縁部)



932 (胴部)



933 (口縁部)



934 (胴部)



935 (胴部)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区・刻目突帯文土器拡大)



936



937



938



939



940



941



942



943



944



945



946



947



948



949



950



951



952



953



954



955



956



957



958



959



960



961



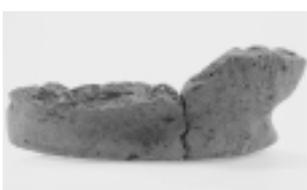
962



963



964



965



966



967

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）

図版114



968



969



970



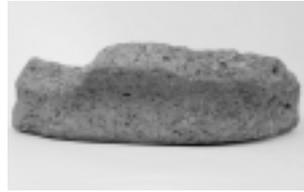
971



972



973



974



975



976



977



978



979



980



981



982



983



984



985



986



987



988



989



990



991



992



993



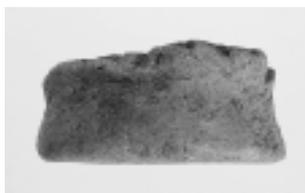
994



995



996



997



998



999

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



1000



1001



1002



1003



1004



1005



1006



1007



1008



1009



1010



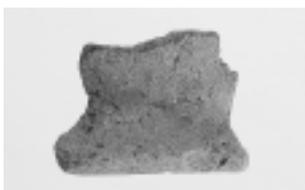
1011



1012



1013



1014



1015



1016



1017



1018



1019



1020



1021



1022



1023



1024



1025



1026



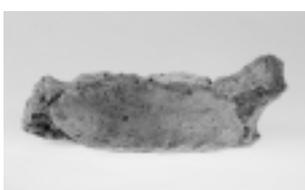
1027



1028



1029



1030



1031

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）

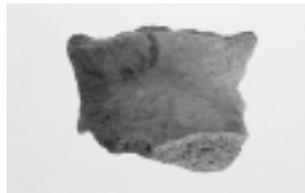
図版116



1032



1033



1034



1035



1036



1037



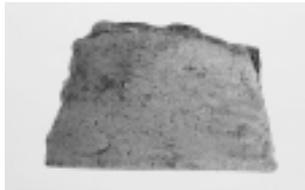
1038



1039



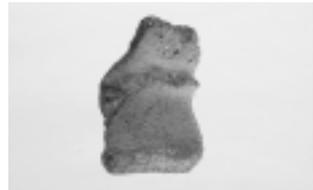
1040



1041



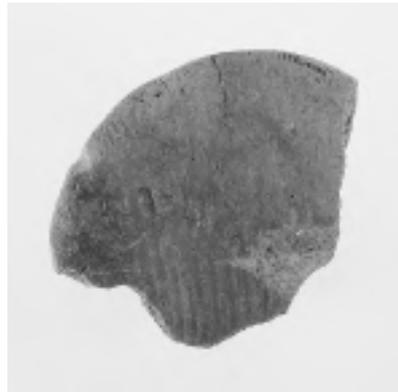
1042



1043



948 (底面)



991 (底面)



997 (底面)



1004 (底面)

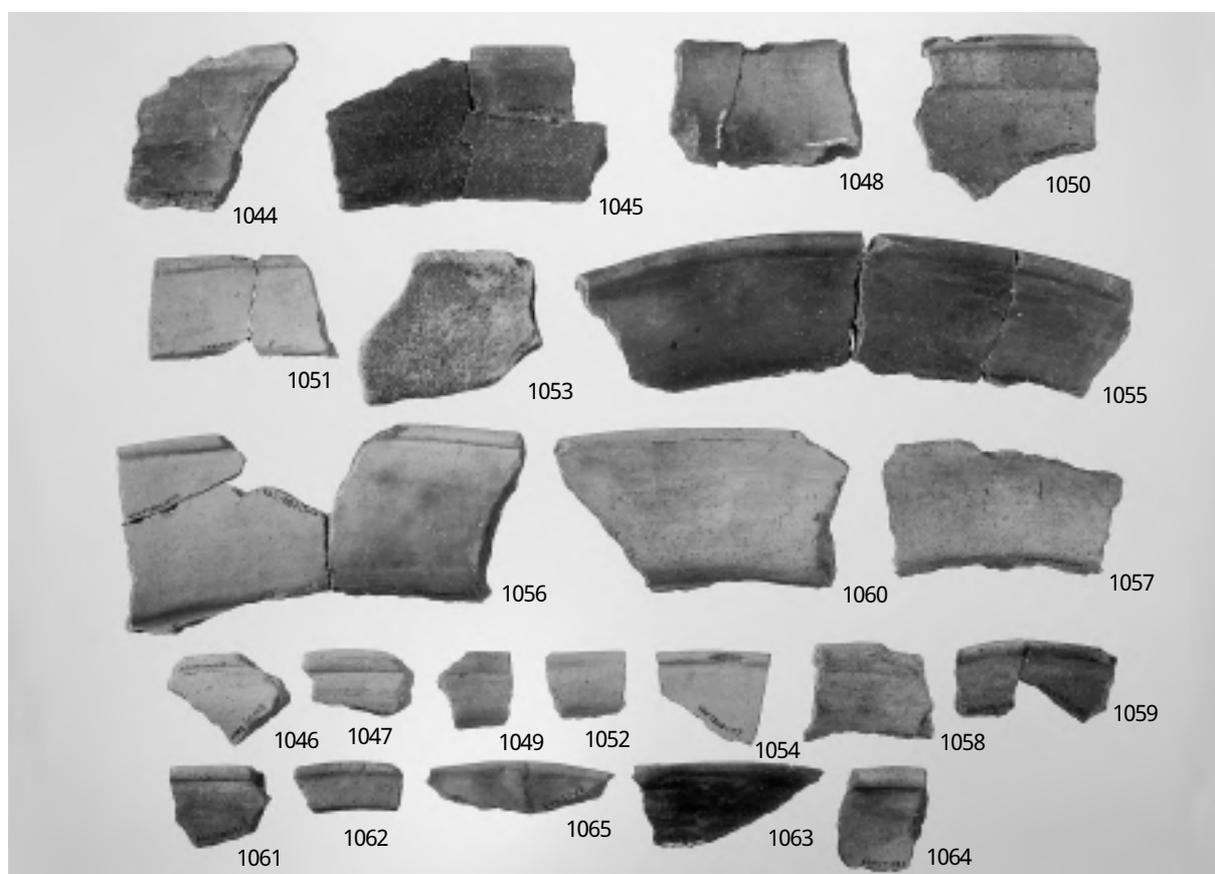
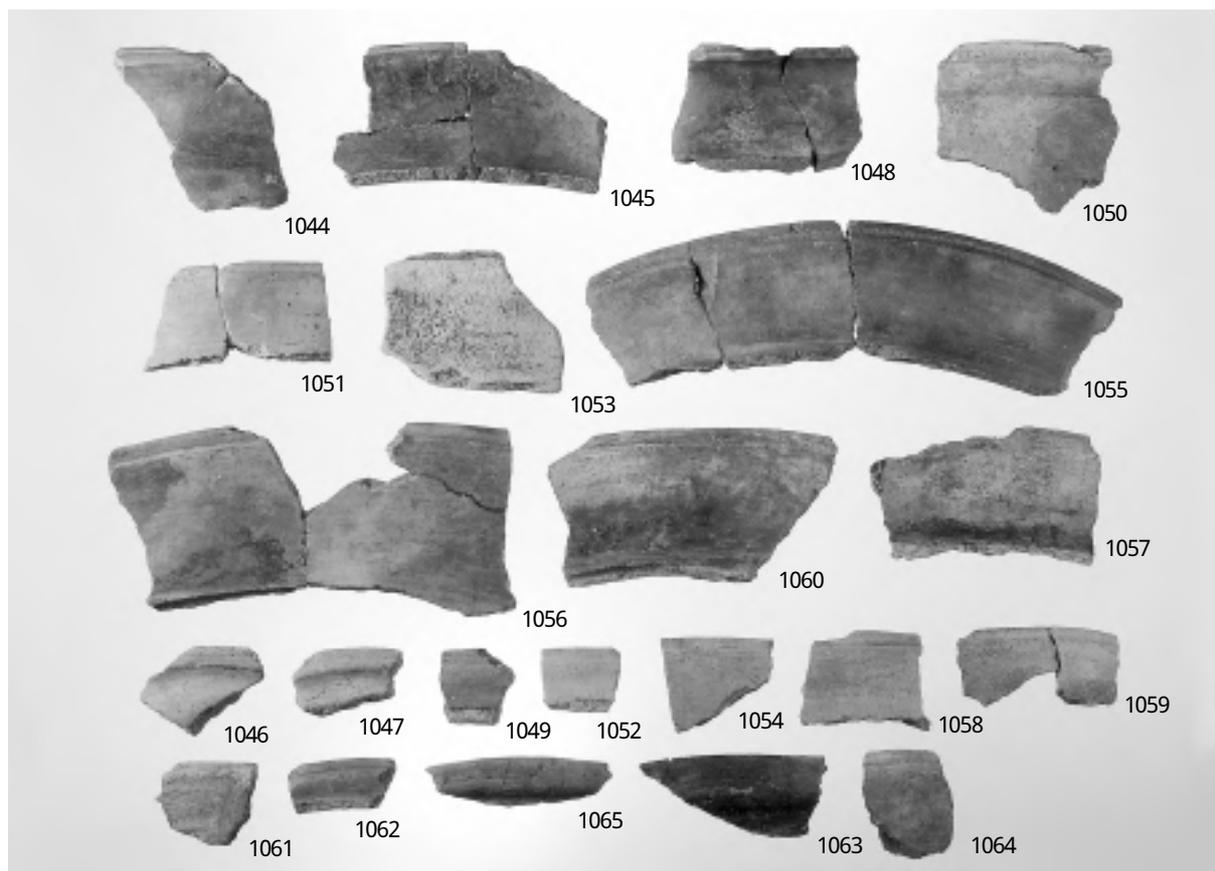


1013 (底面)

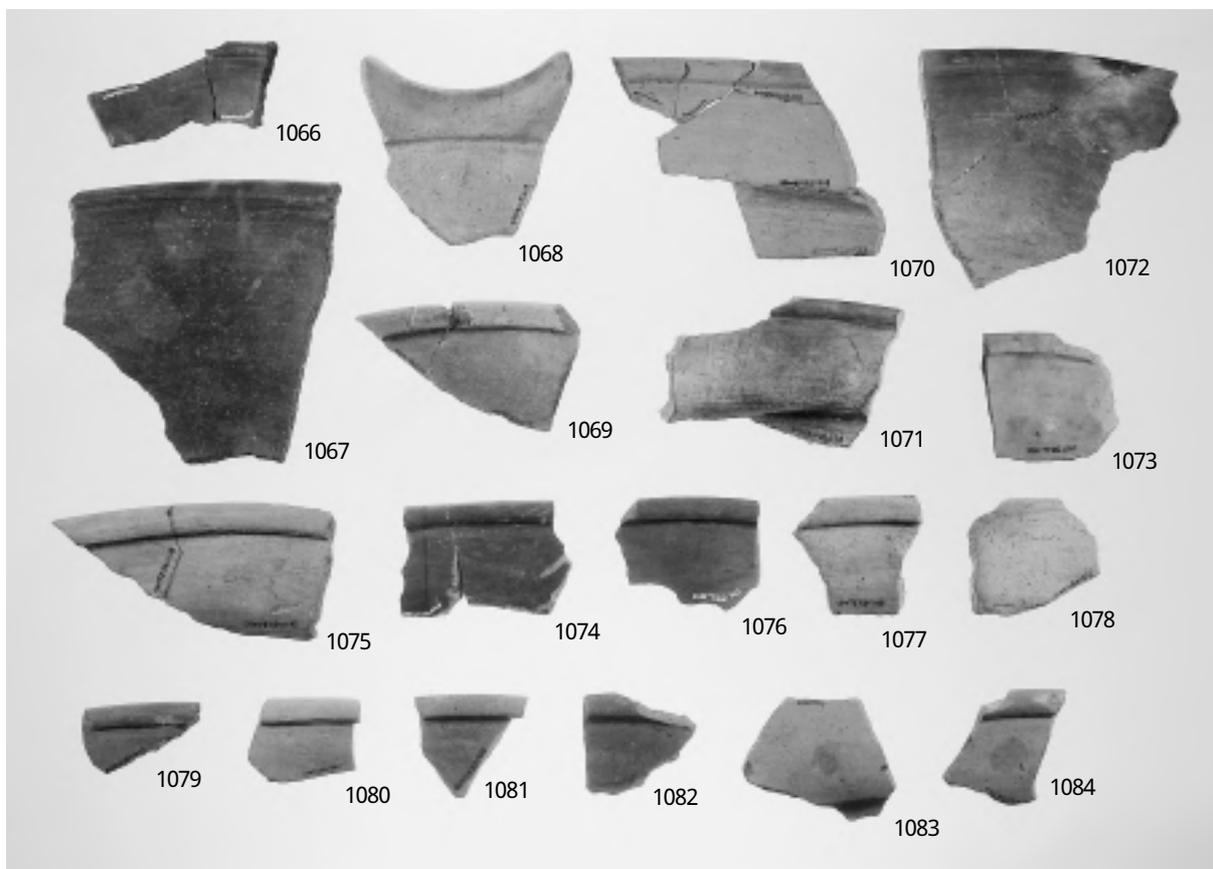
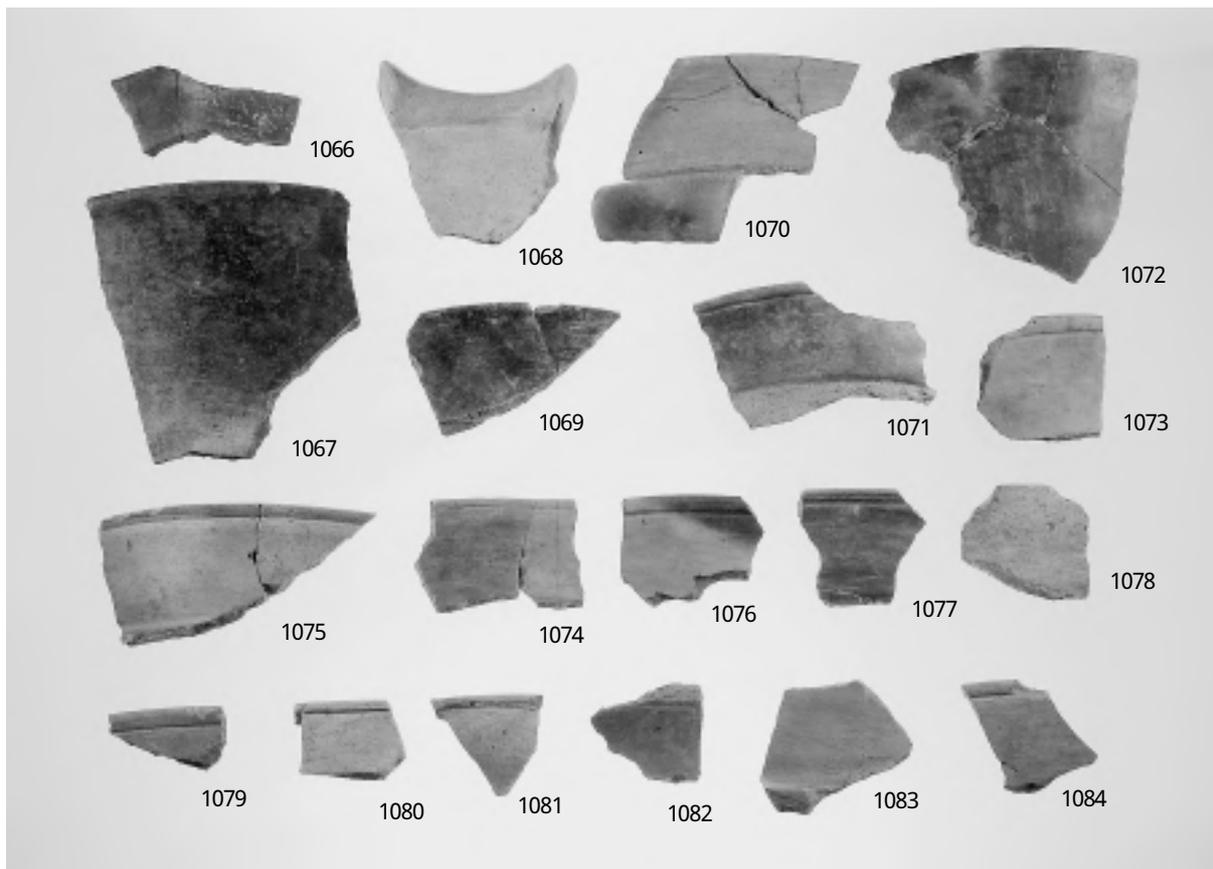


1033 (底面)

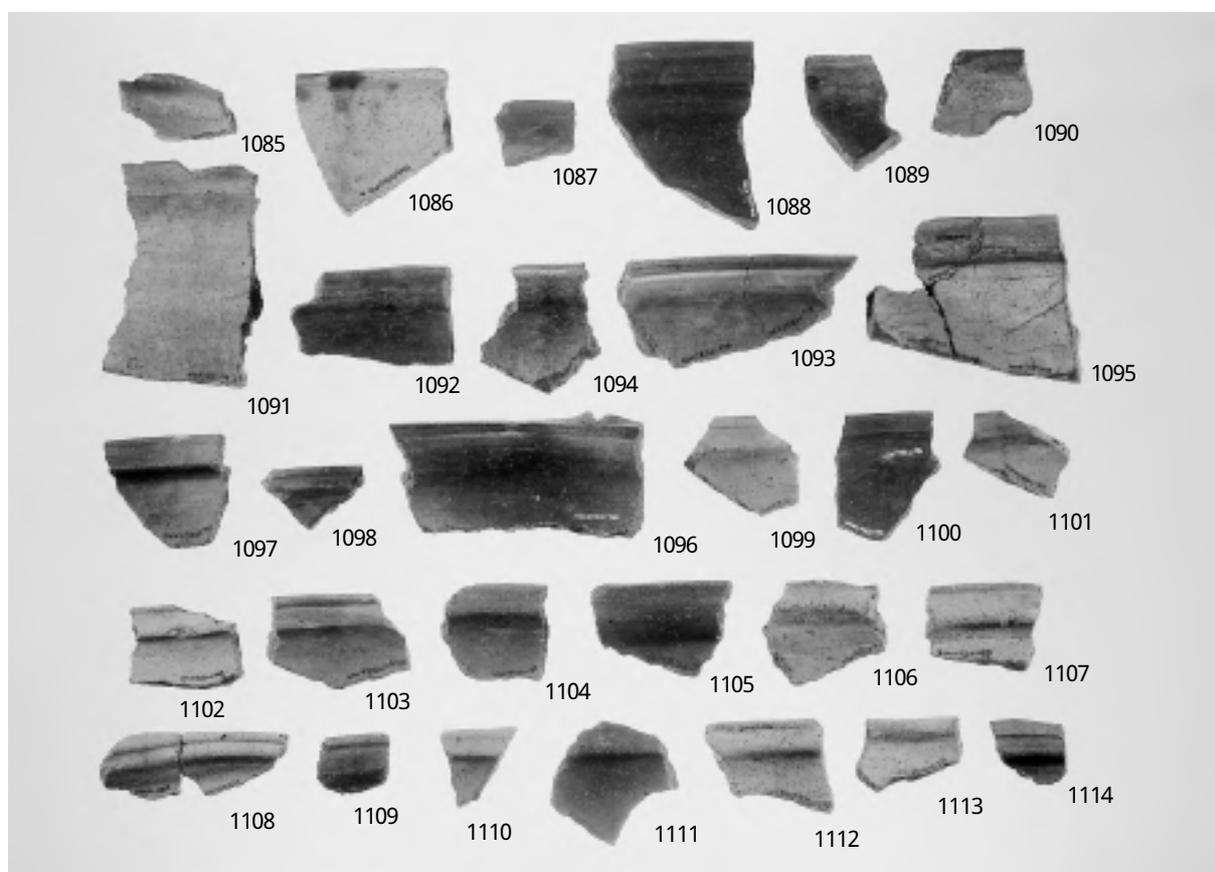
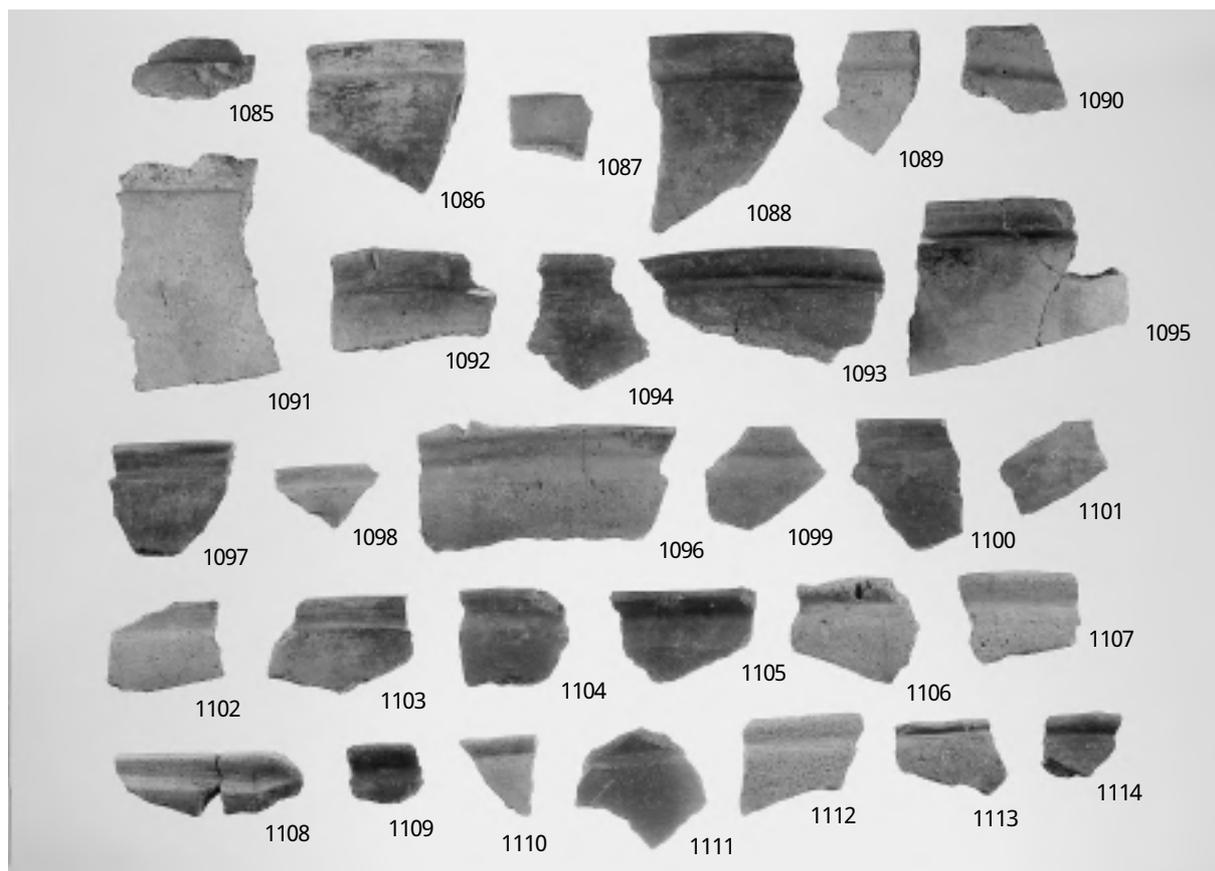
縄文時代後期～弥生時代前期の土器 (B・C区)



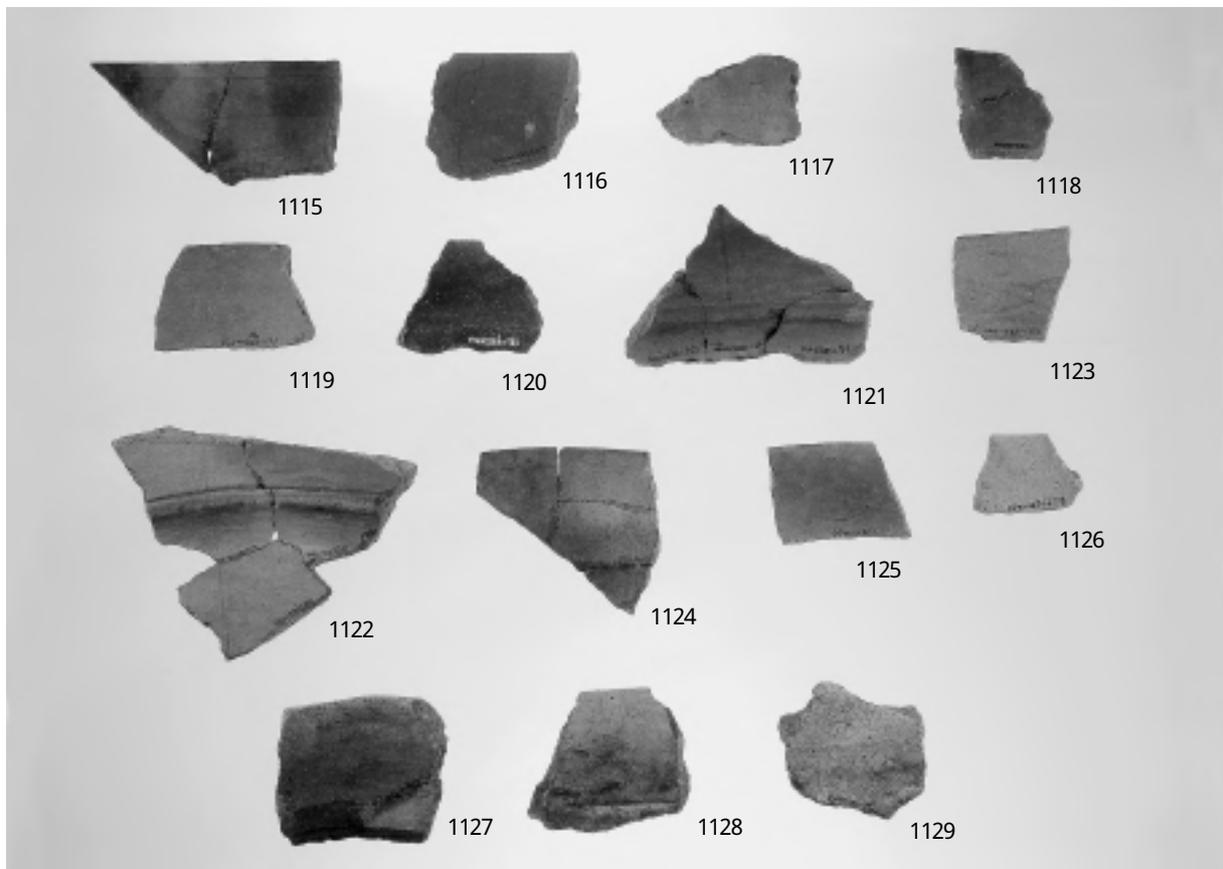
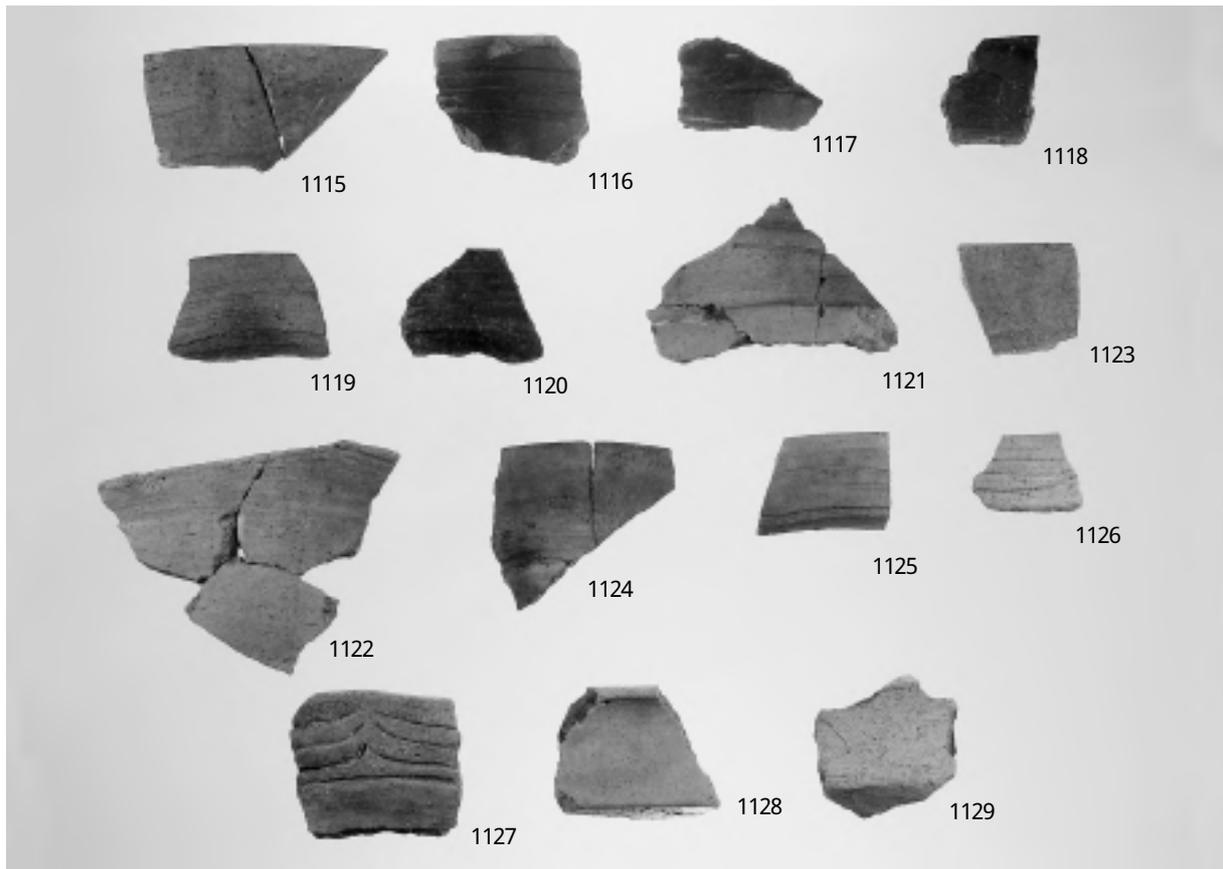
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



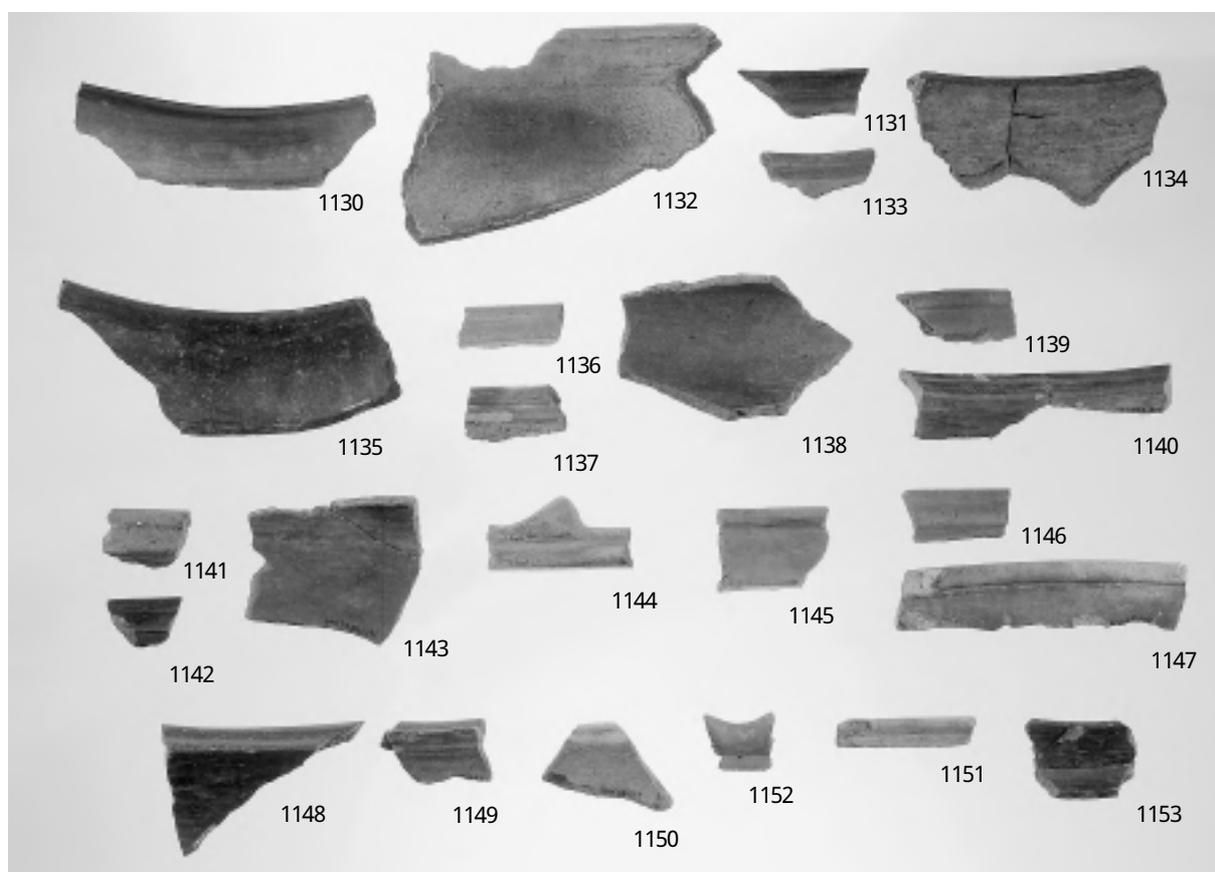
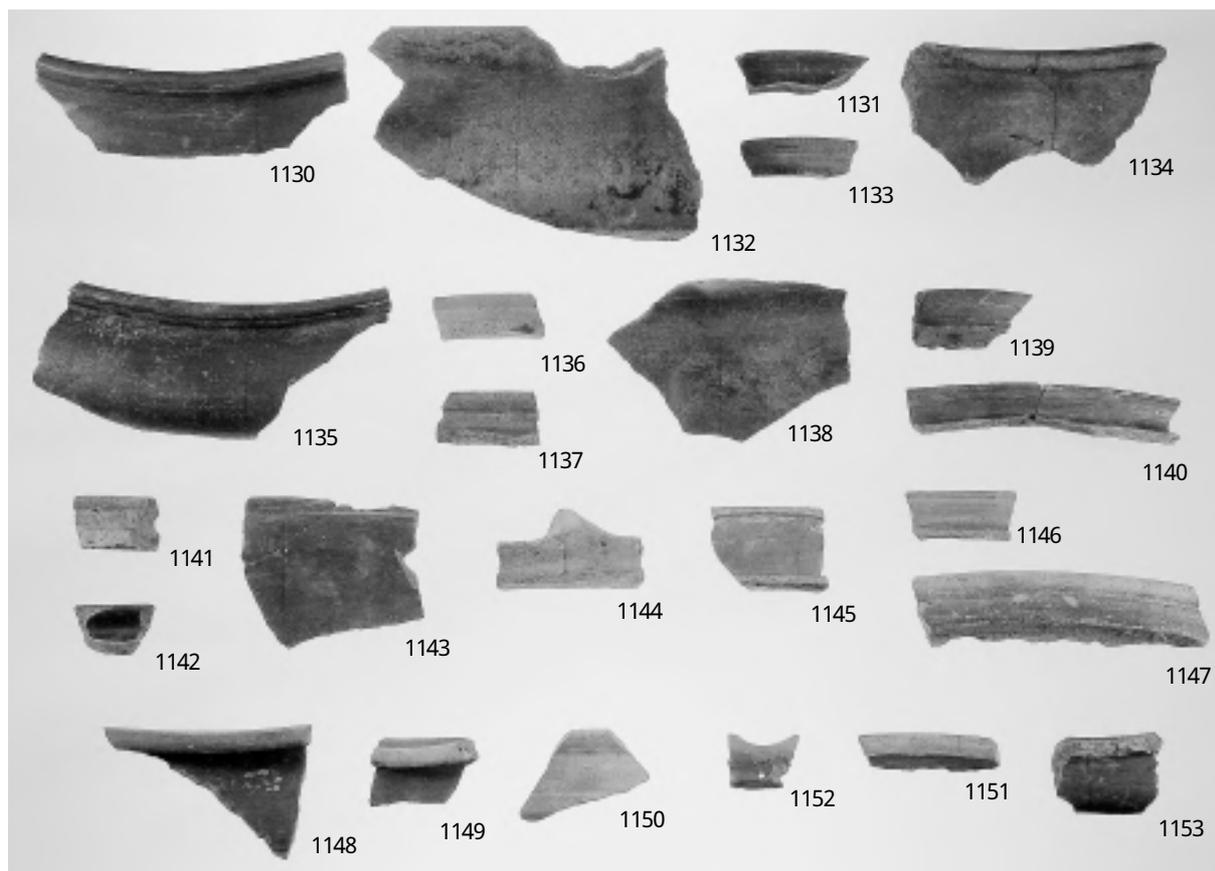
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



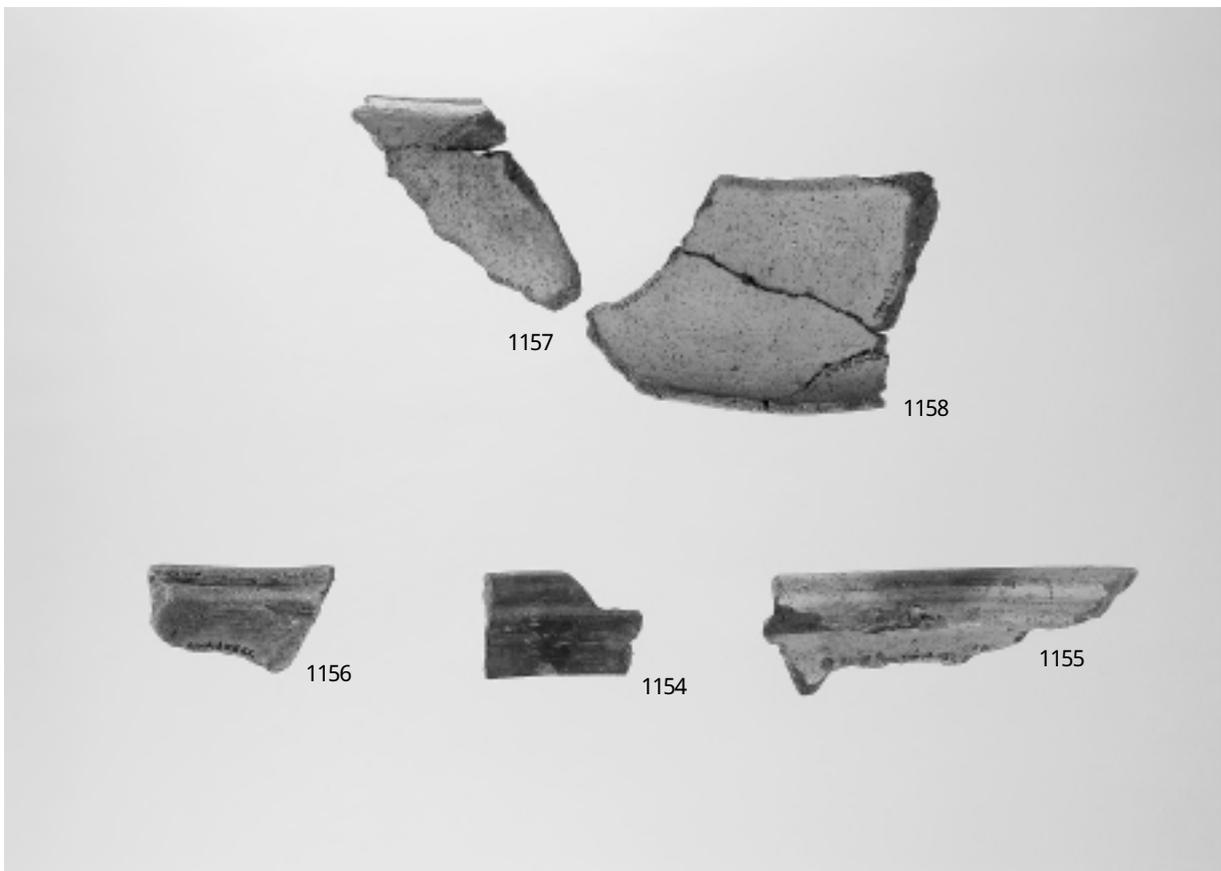
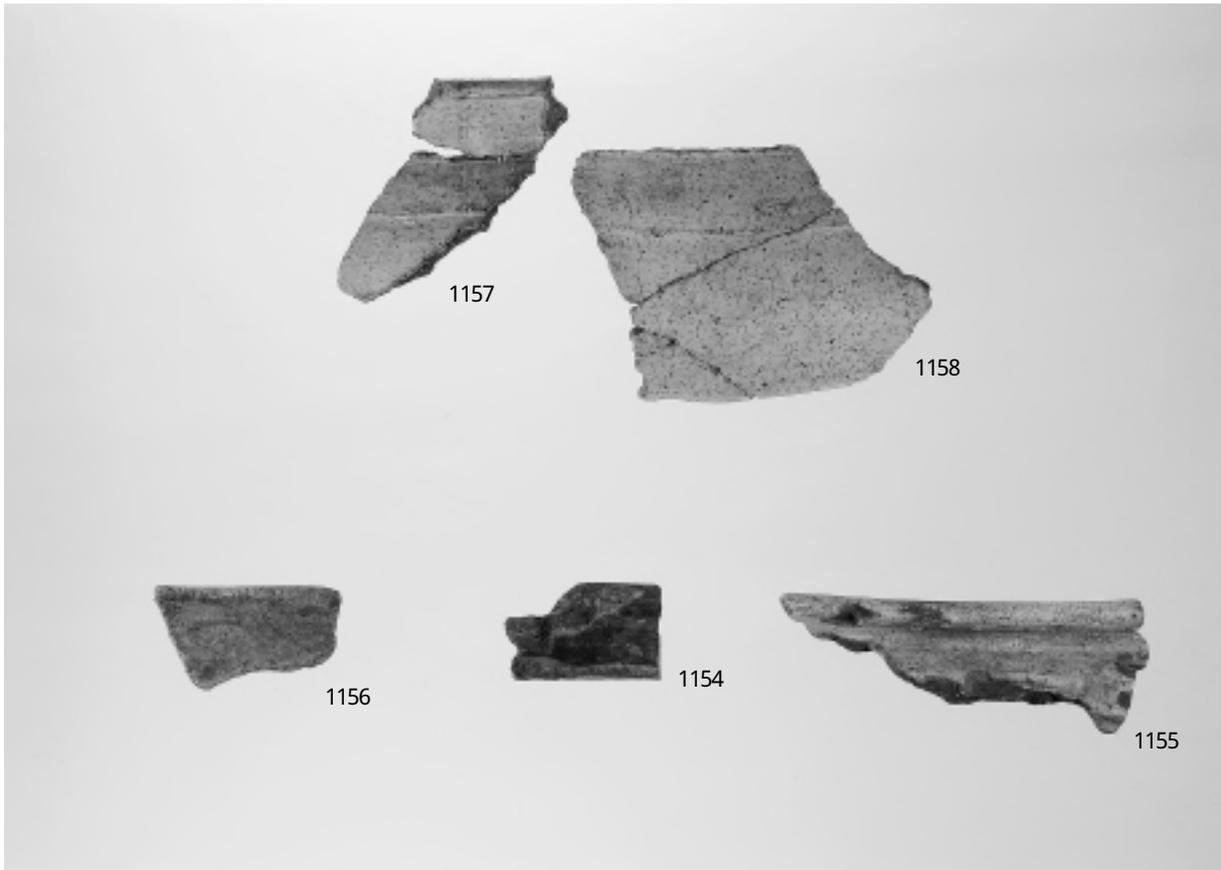
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



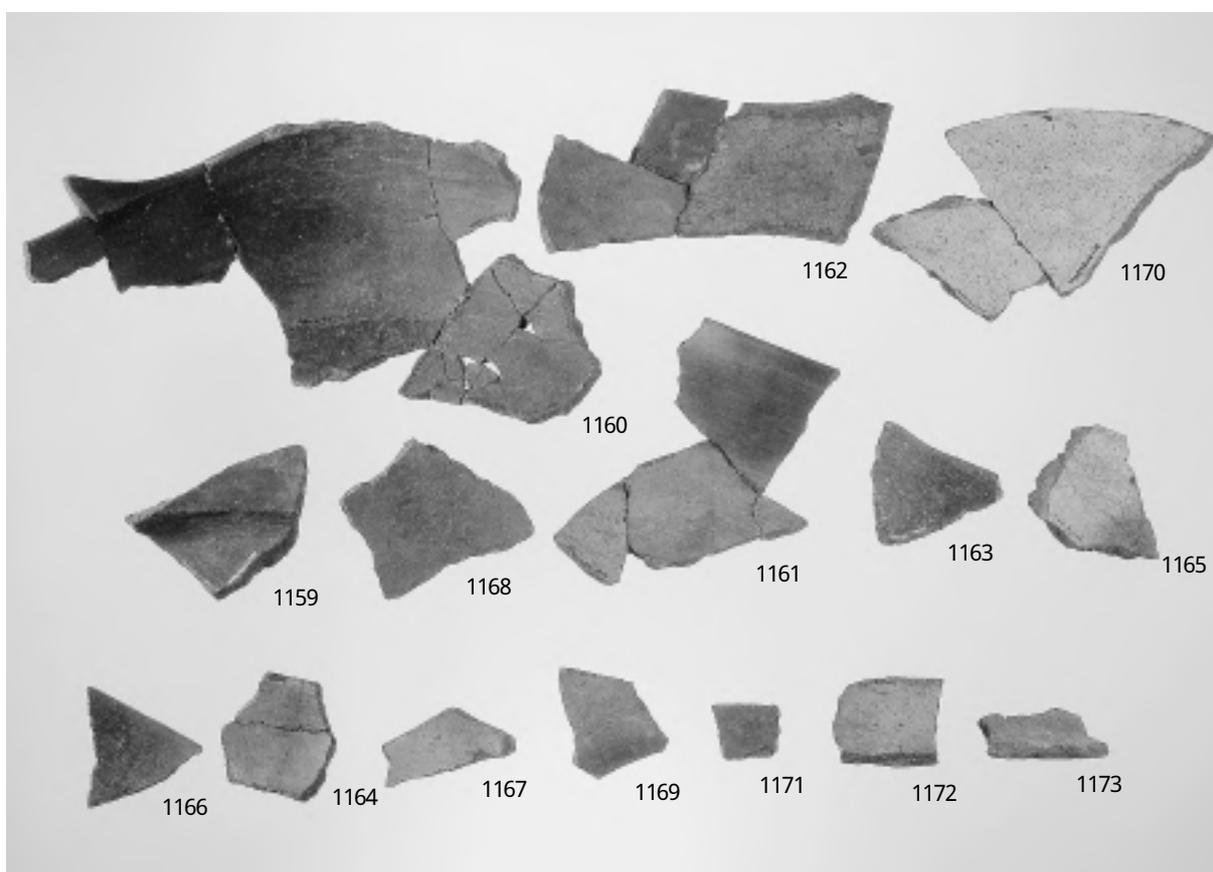
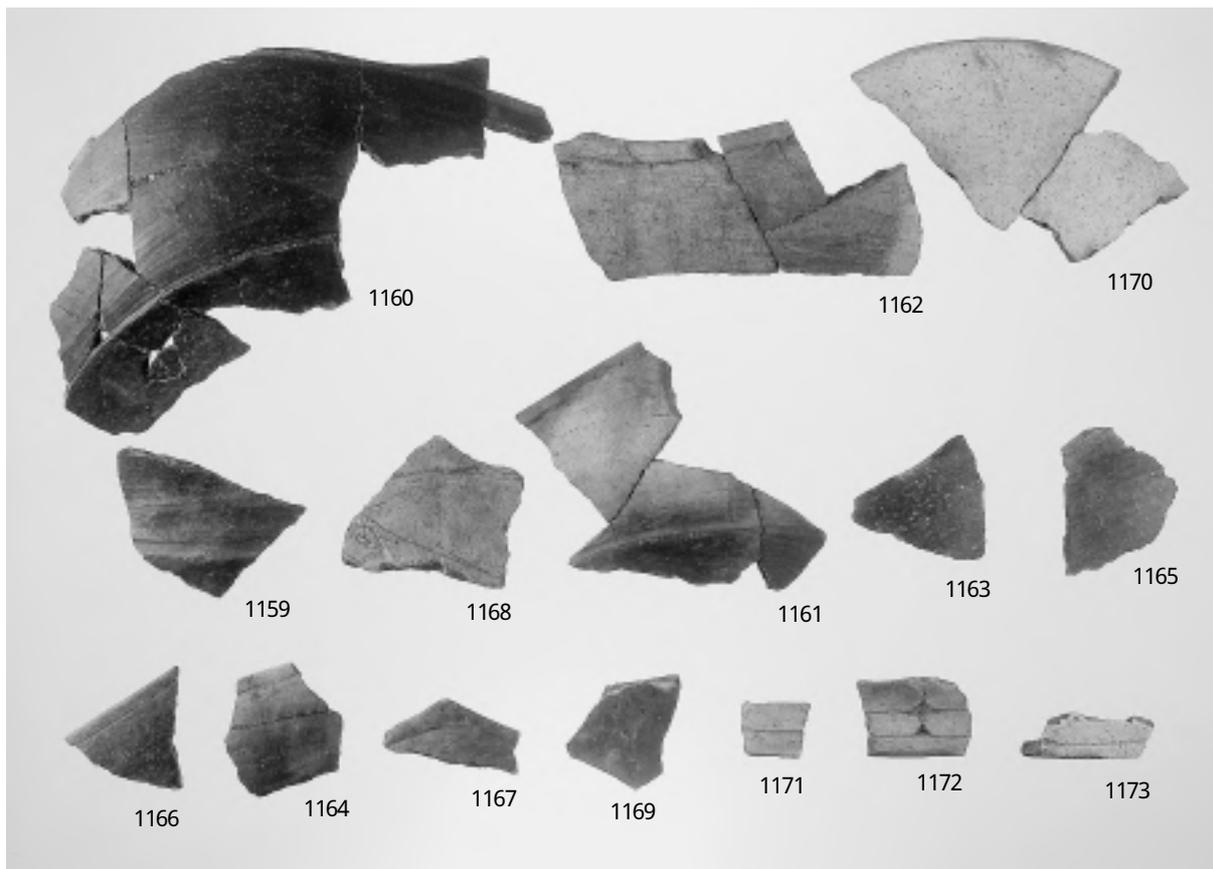
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



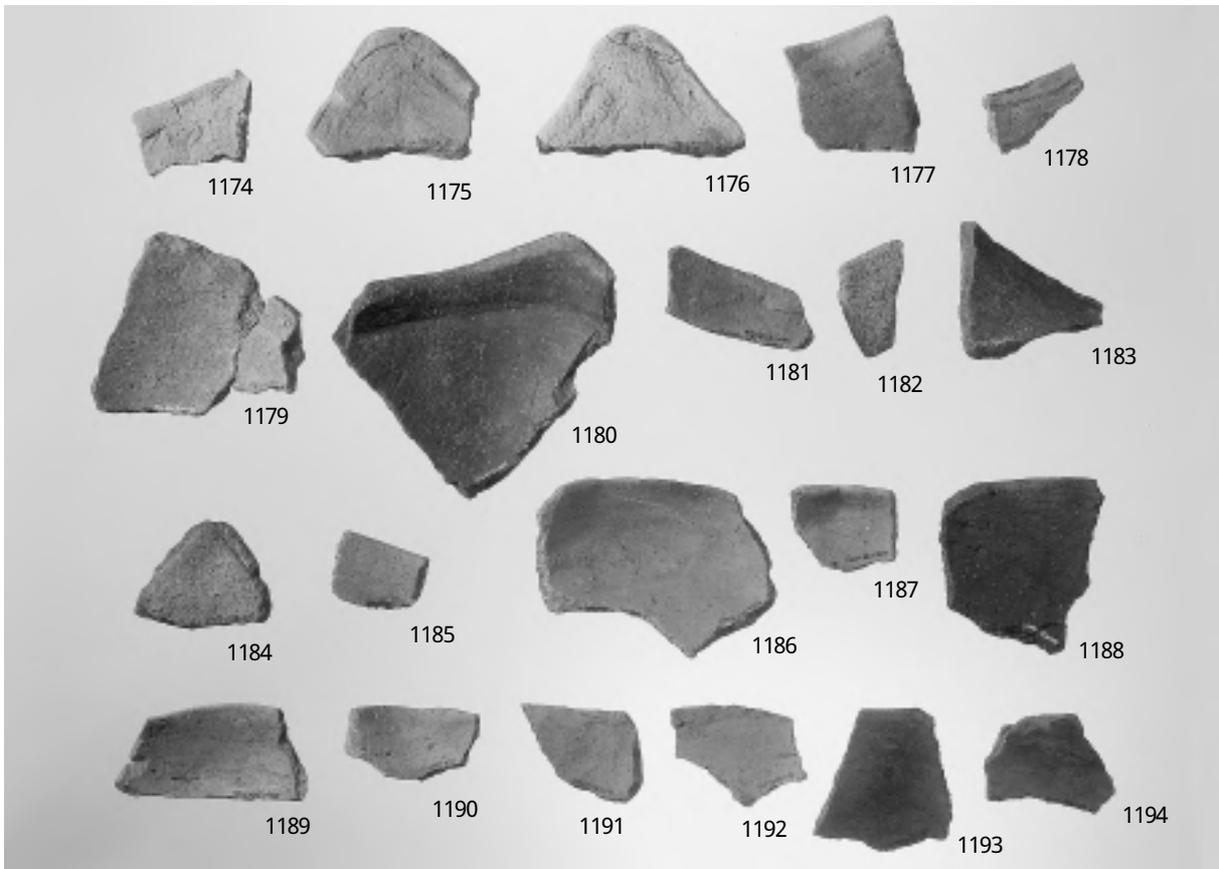
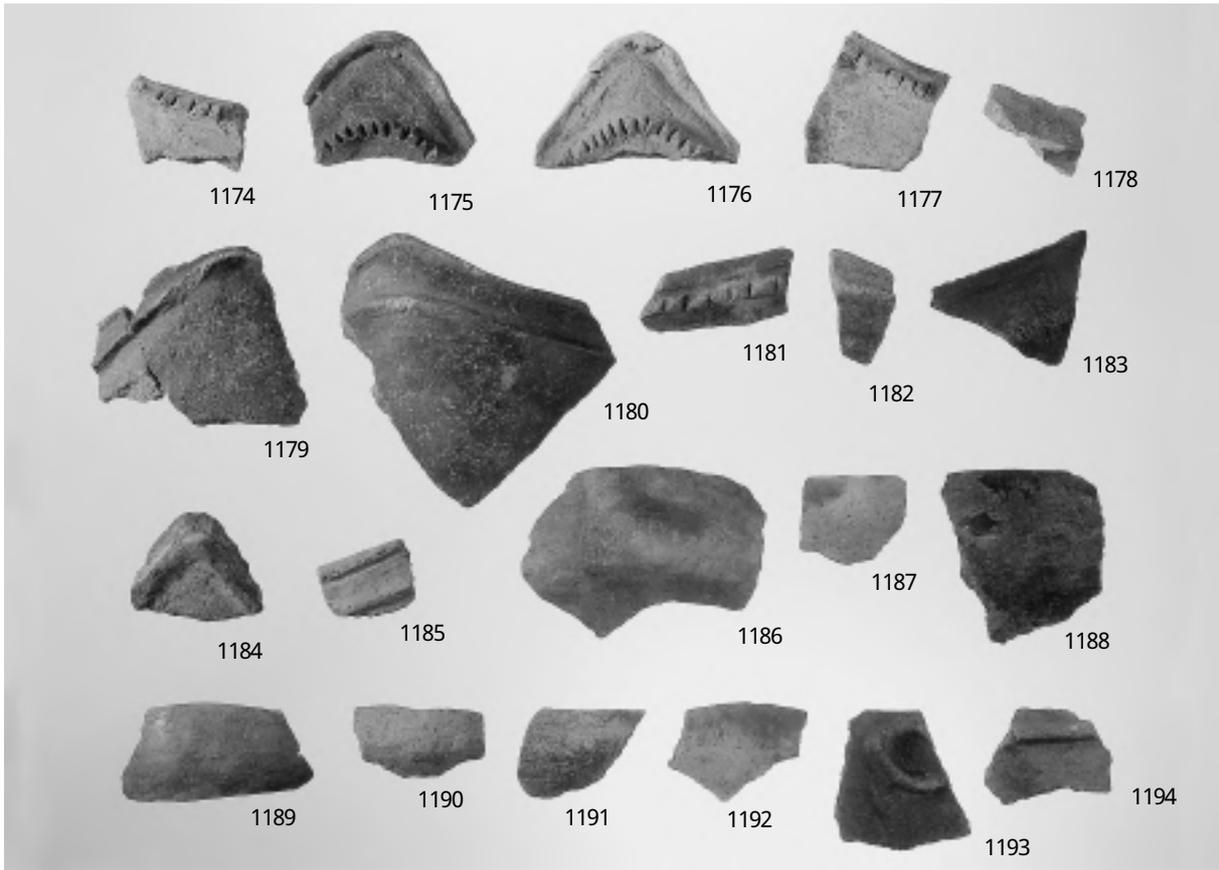
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



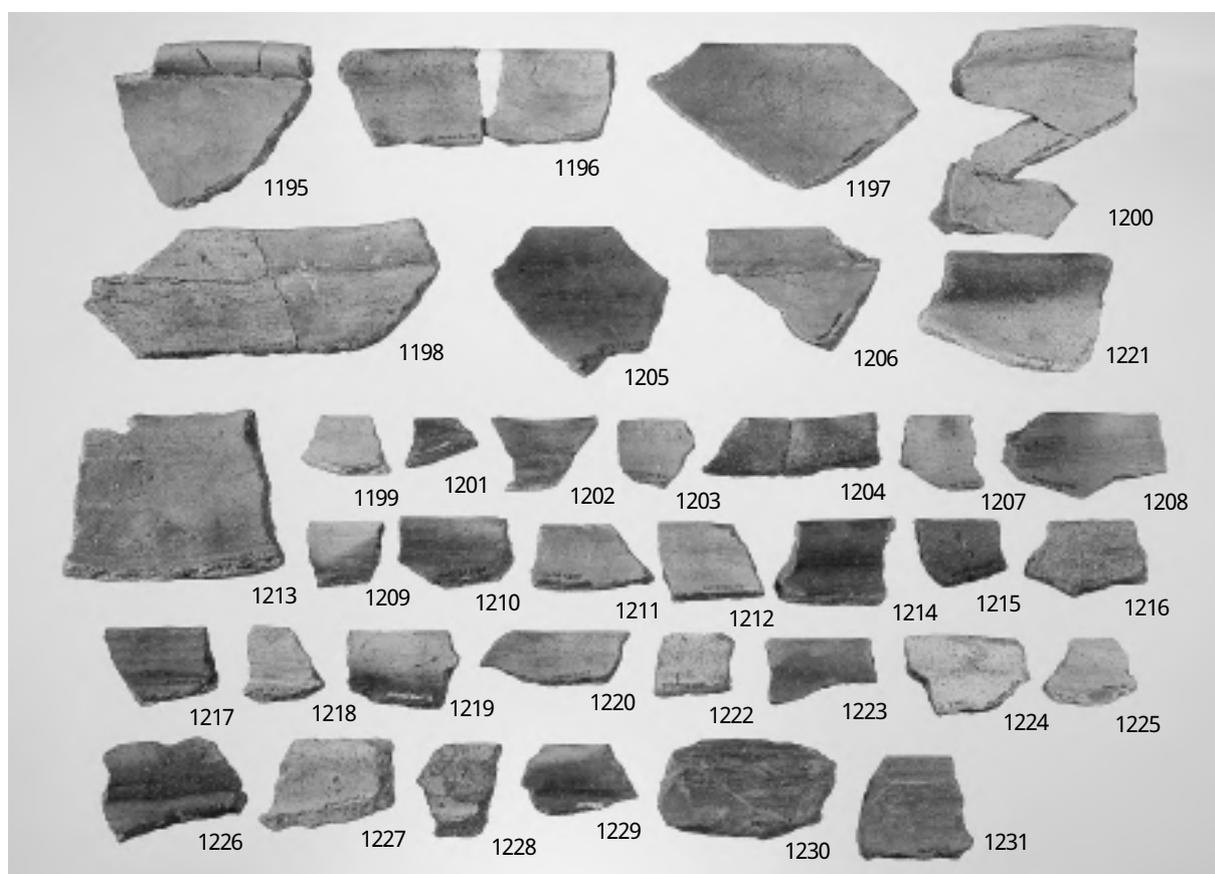
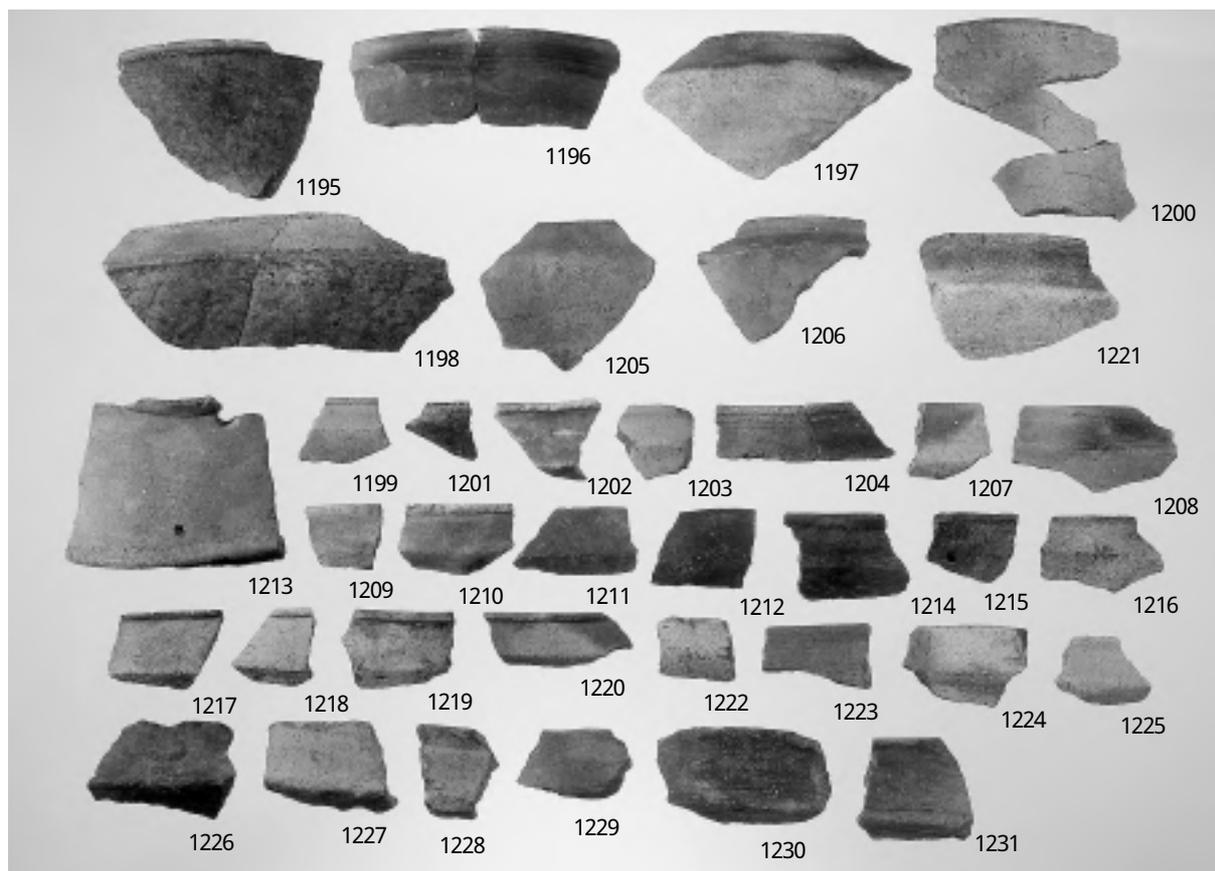
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



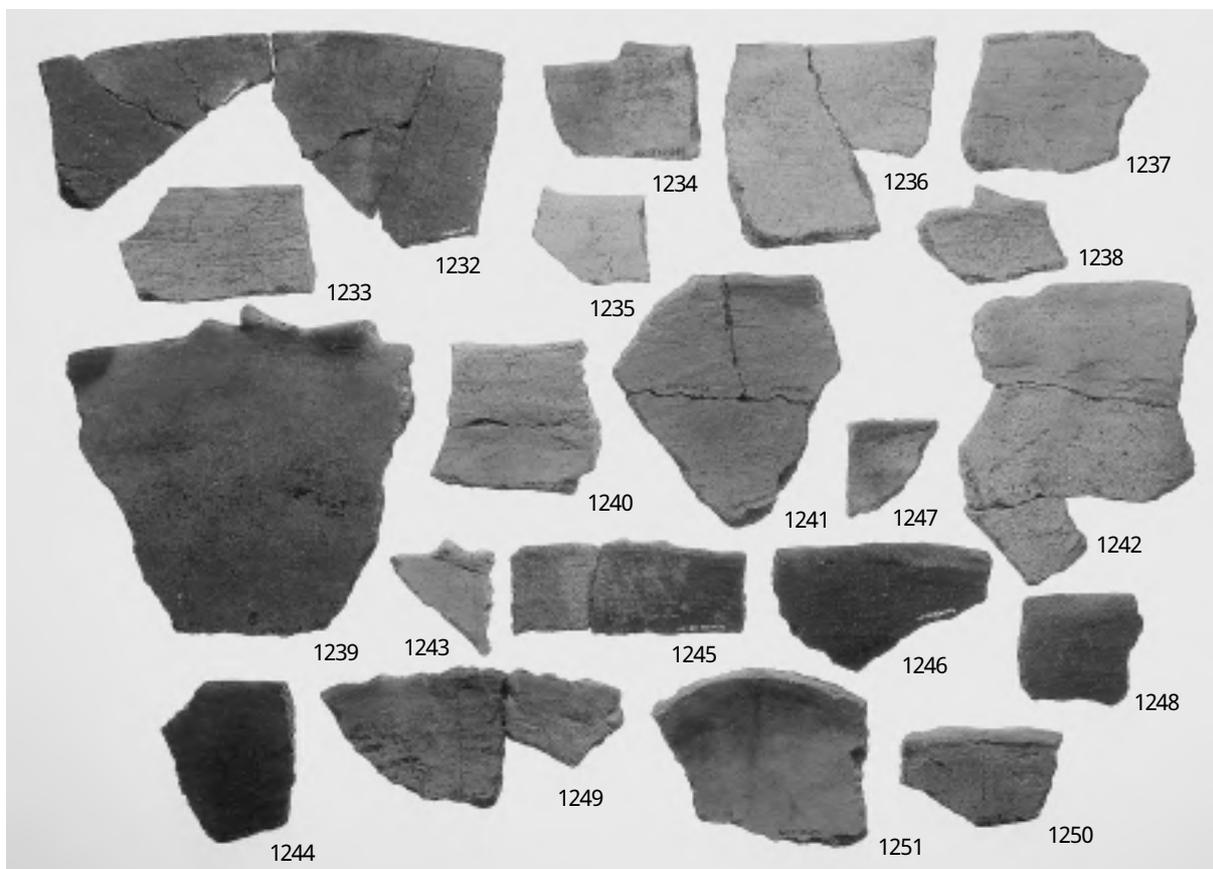
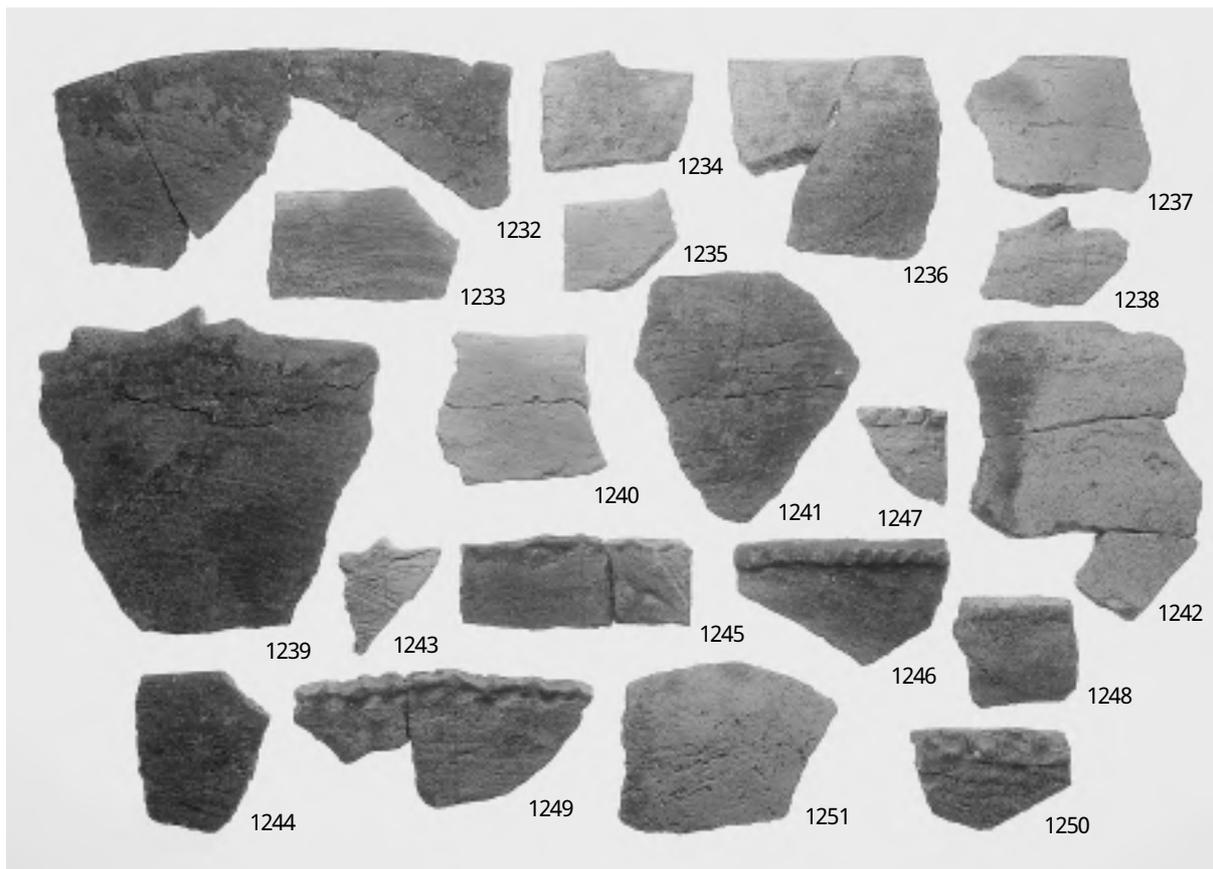
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



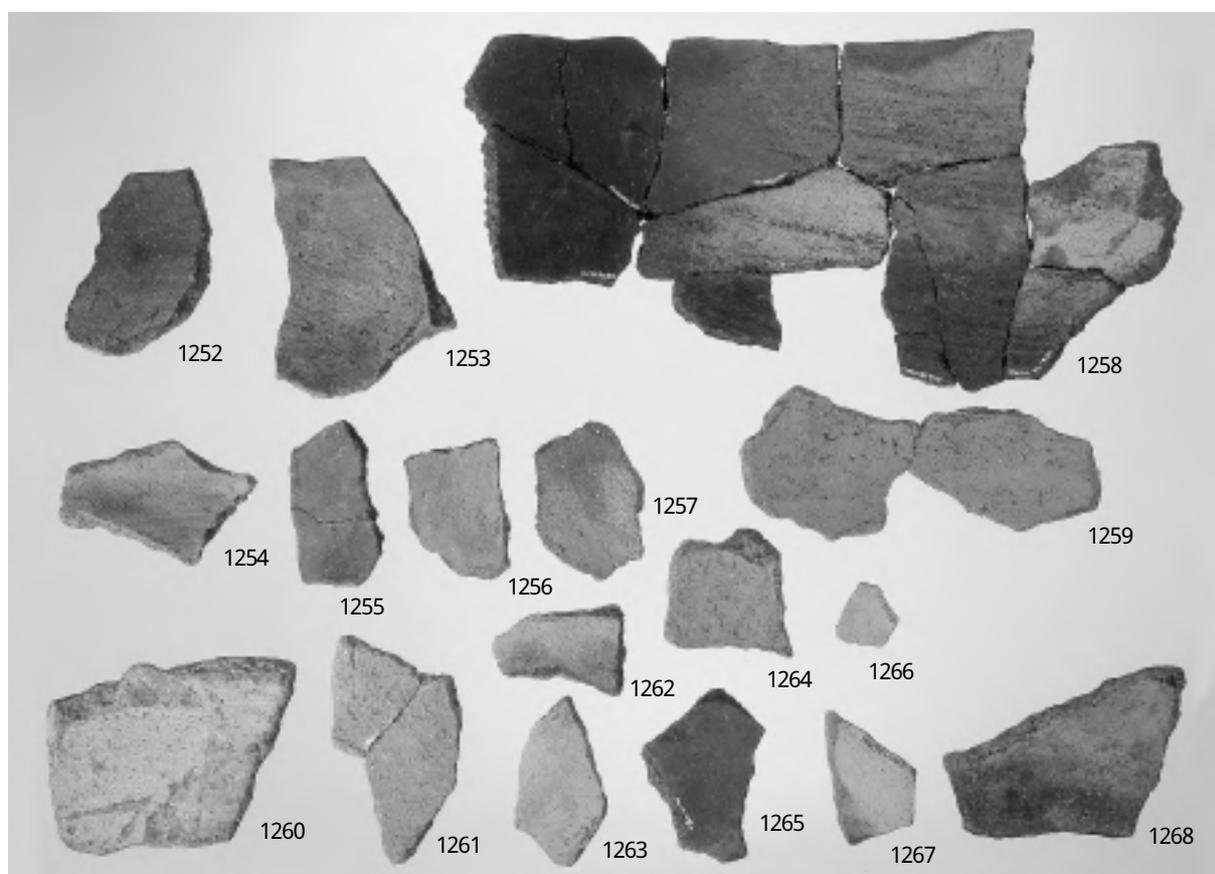
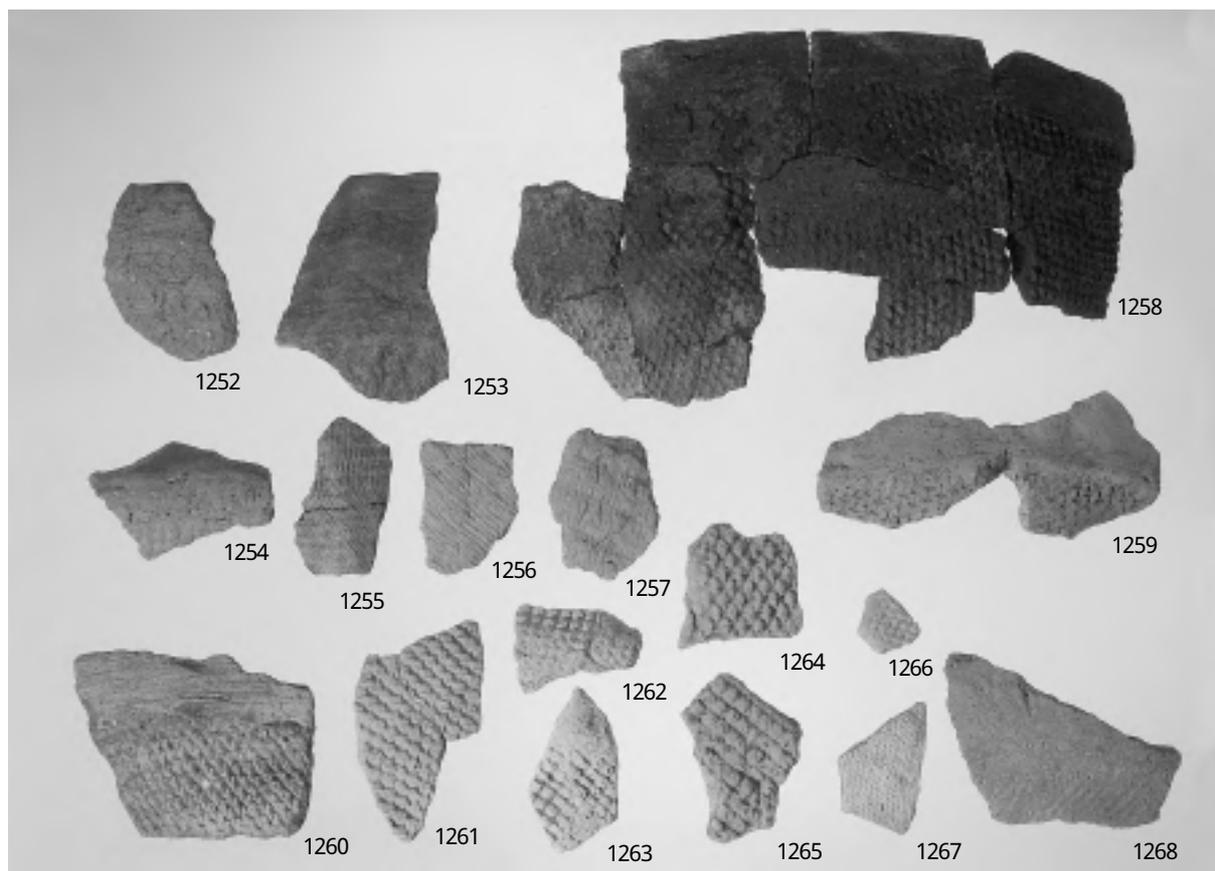
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



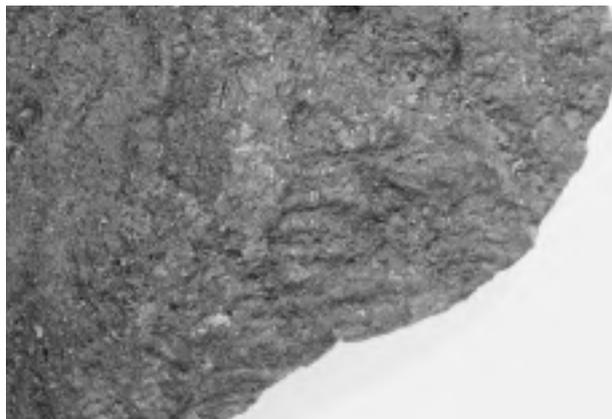
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



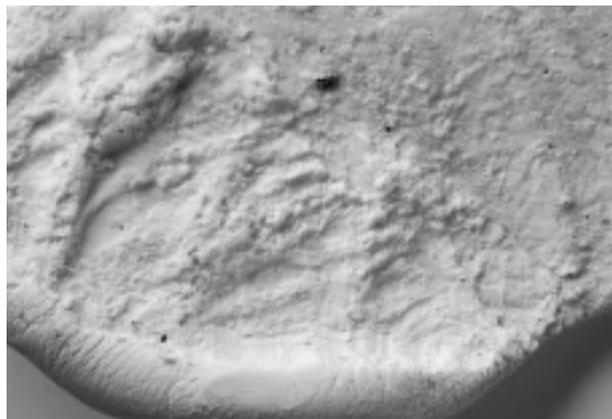
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



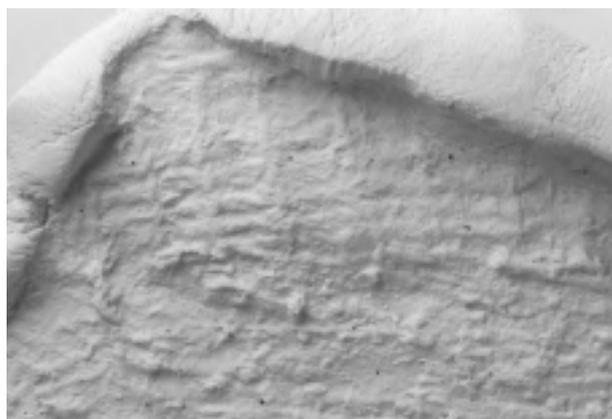
1253



1253 (モデリング陽像)



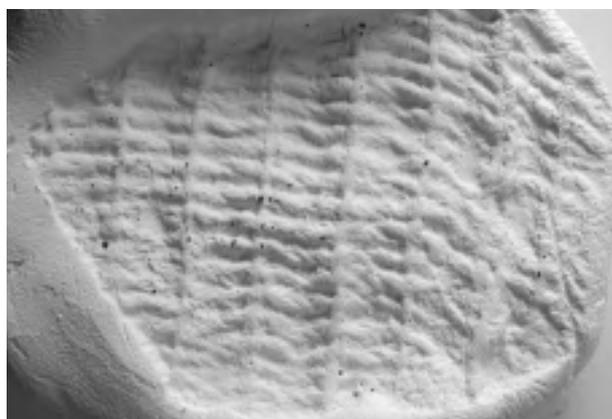
1254



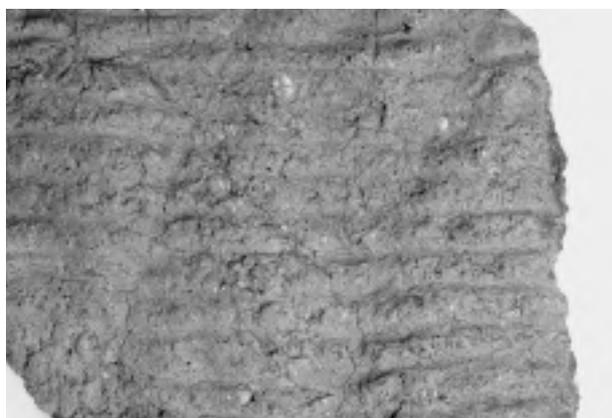
1254 (モデリング陽像)



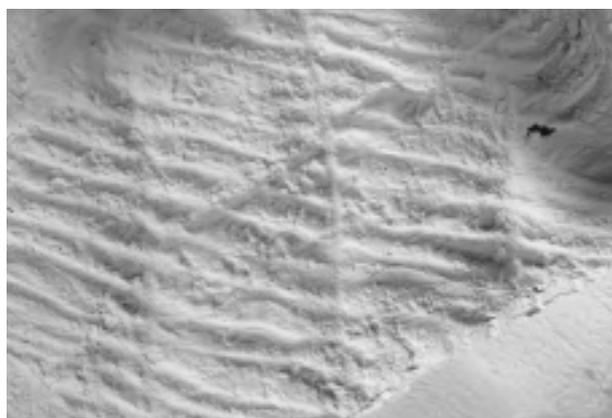
1255



1255 (モデリング陽像)

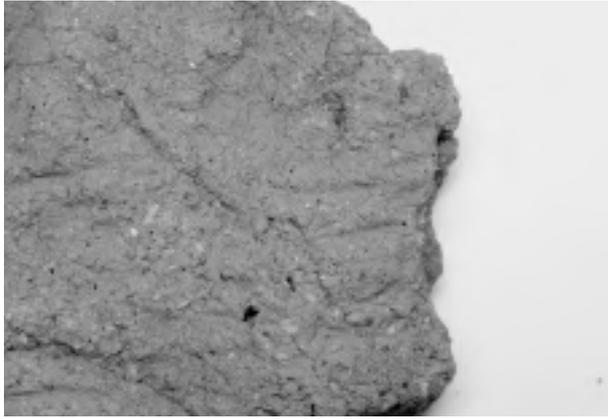


1256

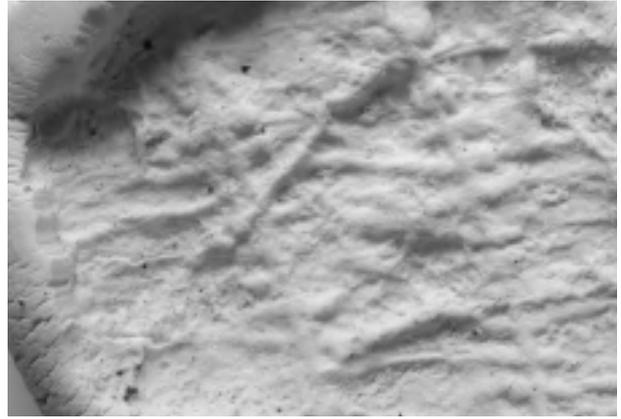


1256 (モデリング陽像)

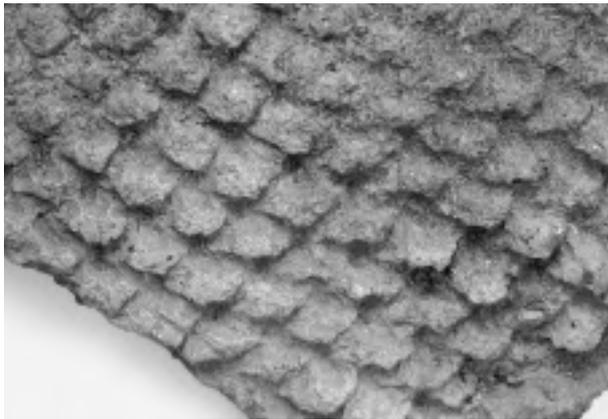
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区・組織痕土器拡大）



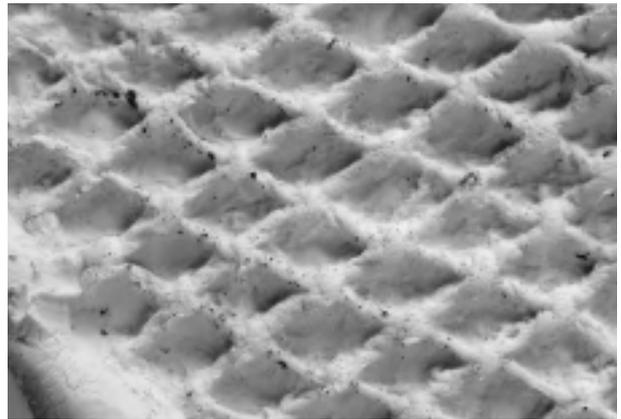
1257



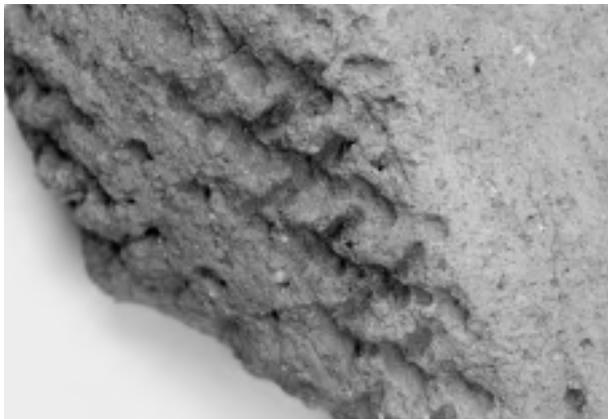
1257 (モデリング陽像)



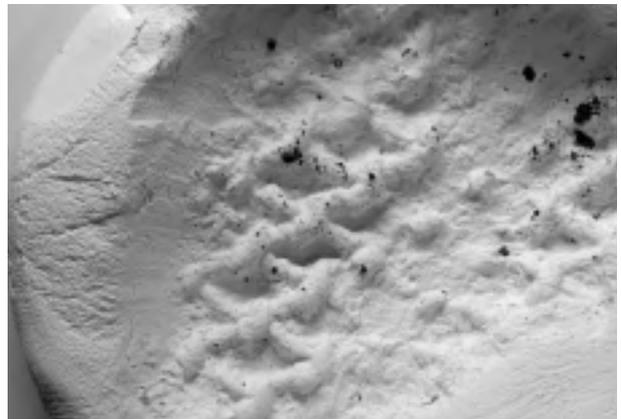
1258



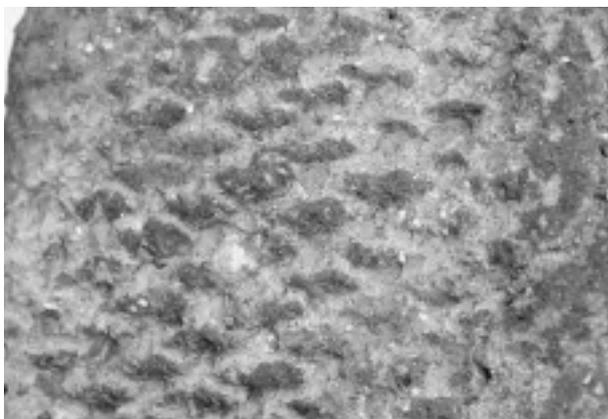
1258 (モデリング陽像)



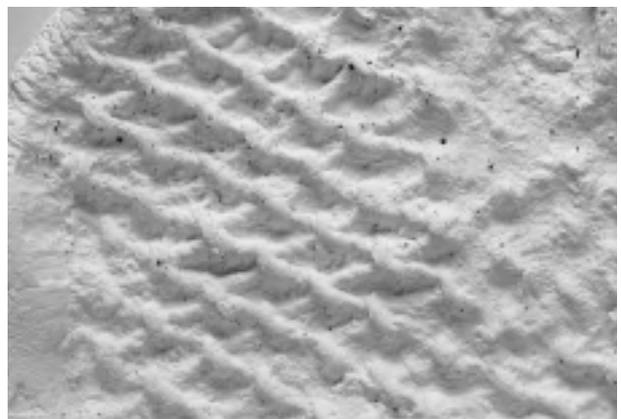
1259



1259 (モデリング陽像)

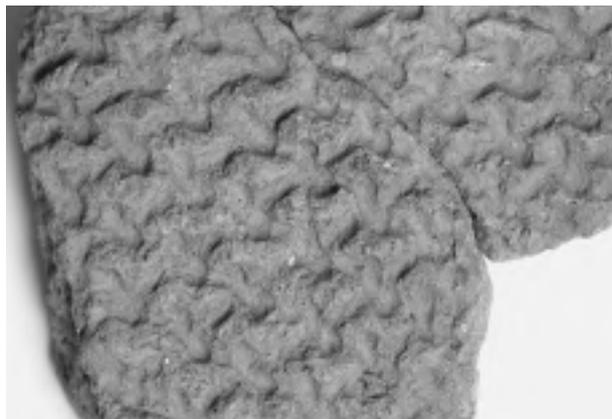


1260

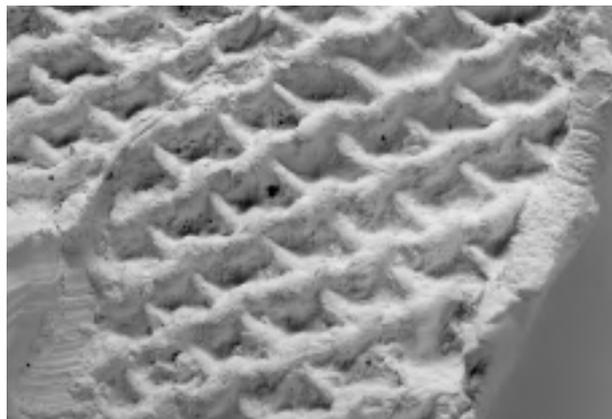


1260 (モデリング陽像)

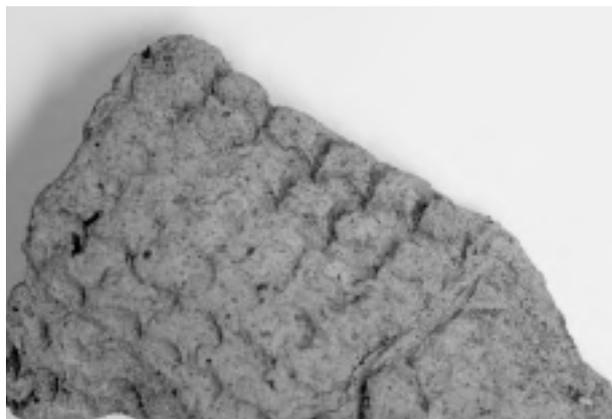
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区・組織痕土器拡大）



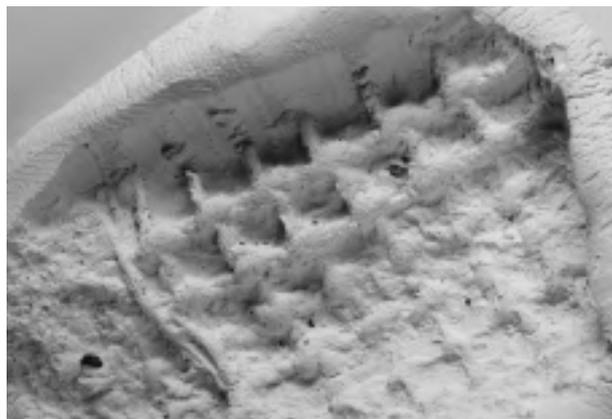
1261



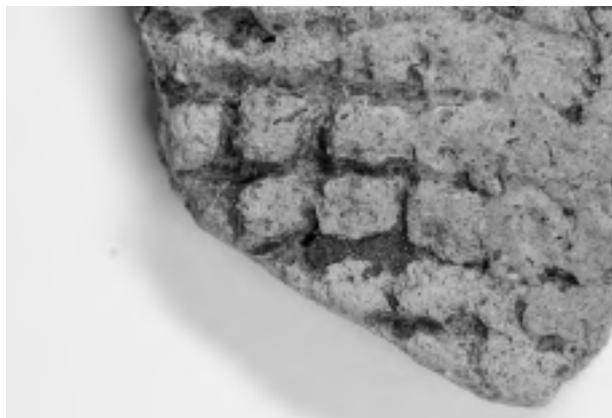
1261 (モデリング陽像)



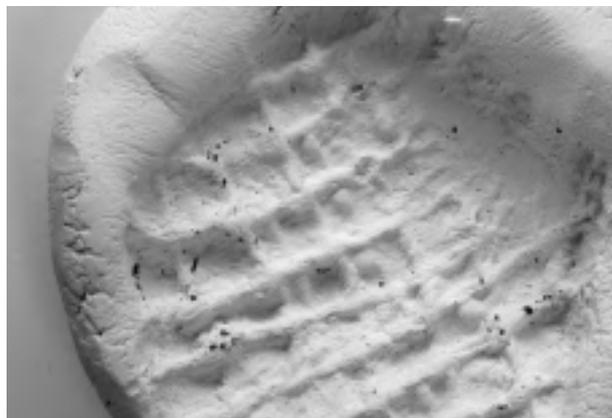
1262



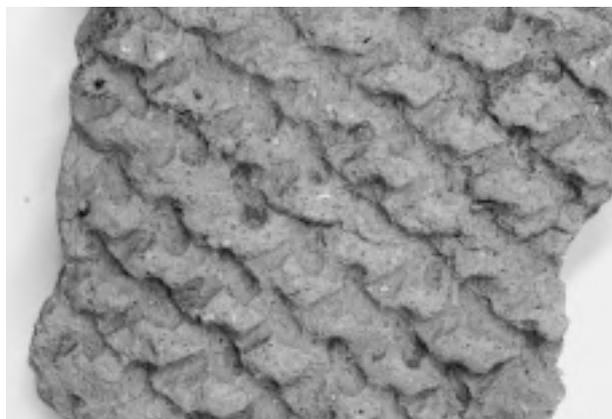
1262 (モデリング陽像)



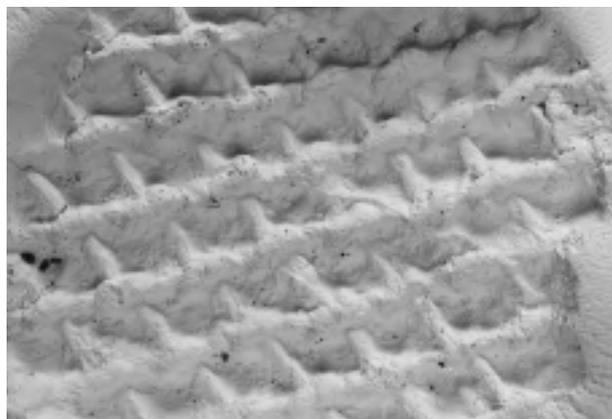
1263



1263 (モデリング陽像)

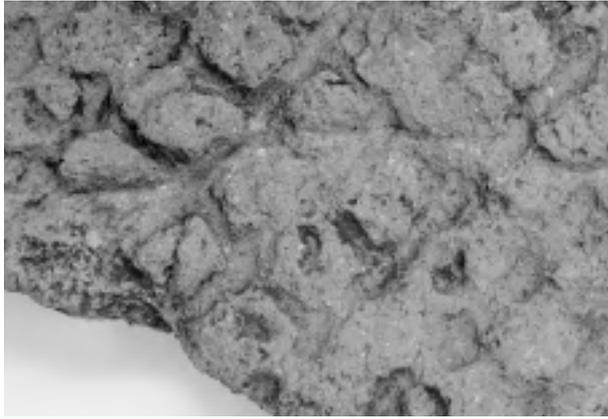


1264

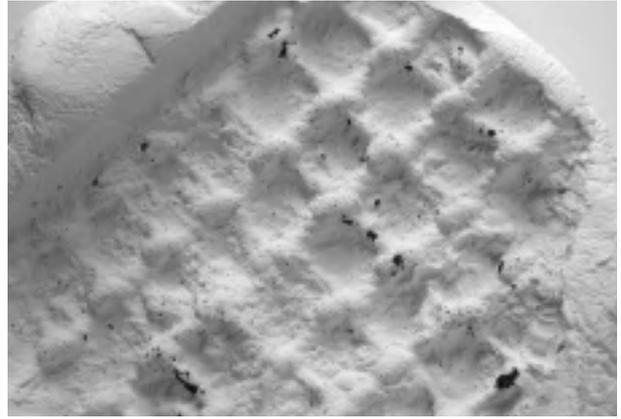


1264 (モデリング陽像)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区・組織痕土器拡大）



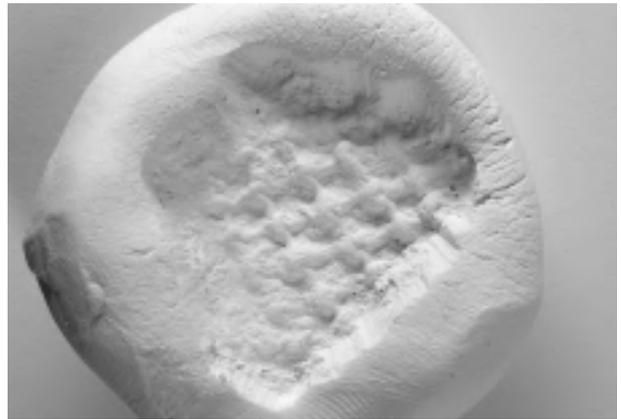
1265



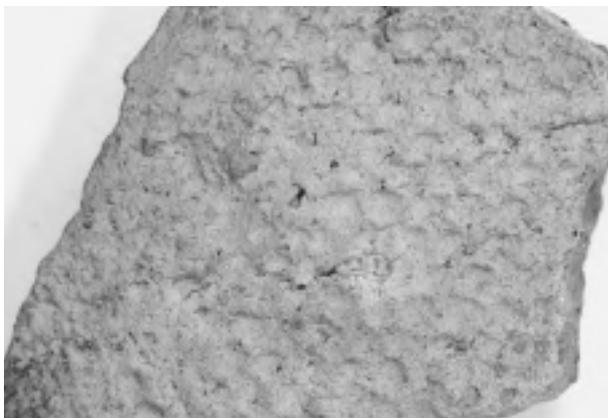
1265 (モデリング陽像)



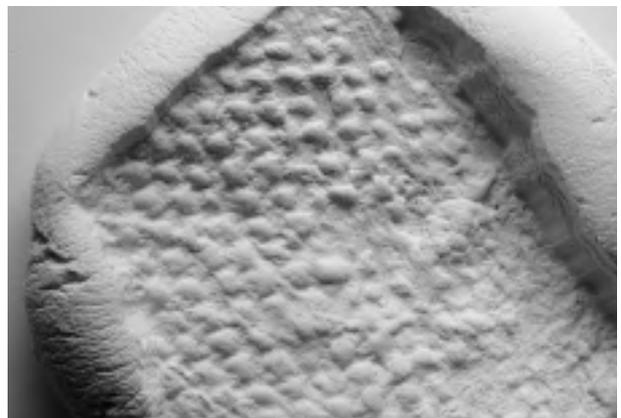
1266



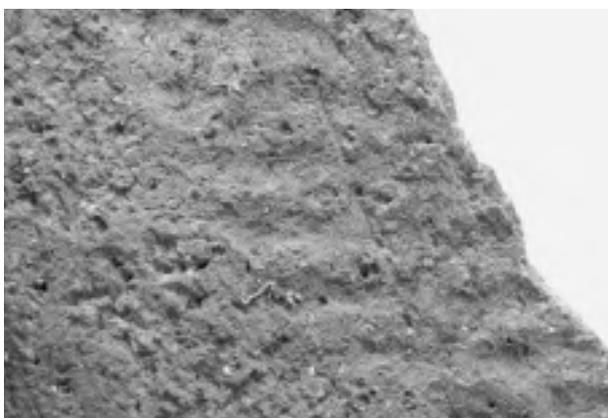
1266 (モデリング陽像)



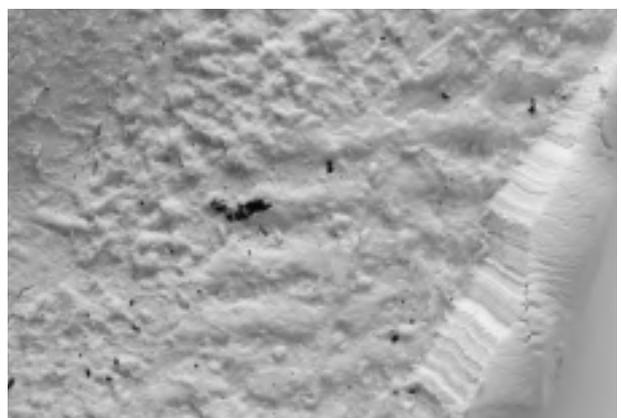
1267



1267 (モデリング陽像)



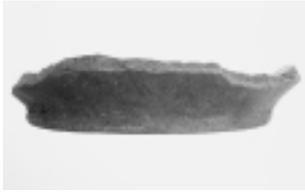
1268



1268 (モデリング陽像)

縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区・組織痕土器拡大）

図版132



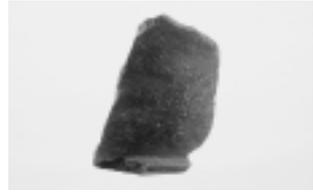
1269



1270



1271



1272



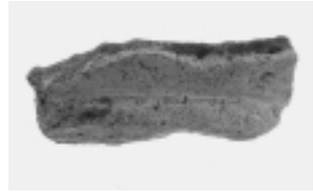
1273



1274



1275



1276



1277



1278



1279



1280



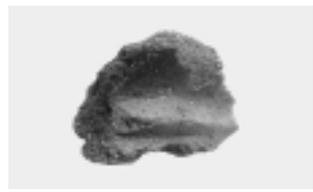
1281



1282



1283



1284



1285



1286



1161 (拡大)

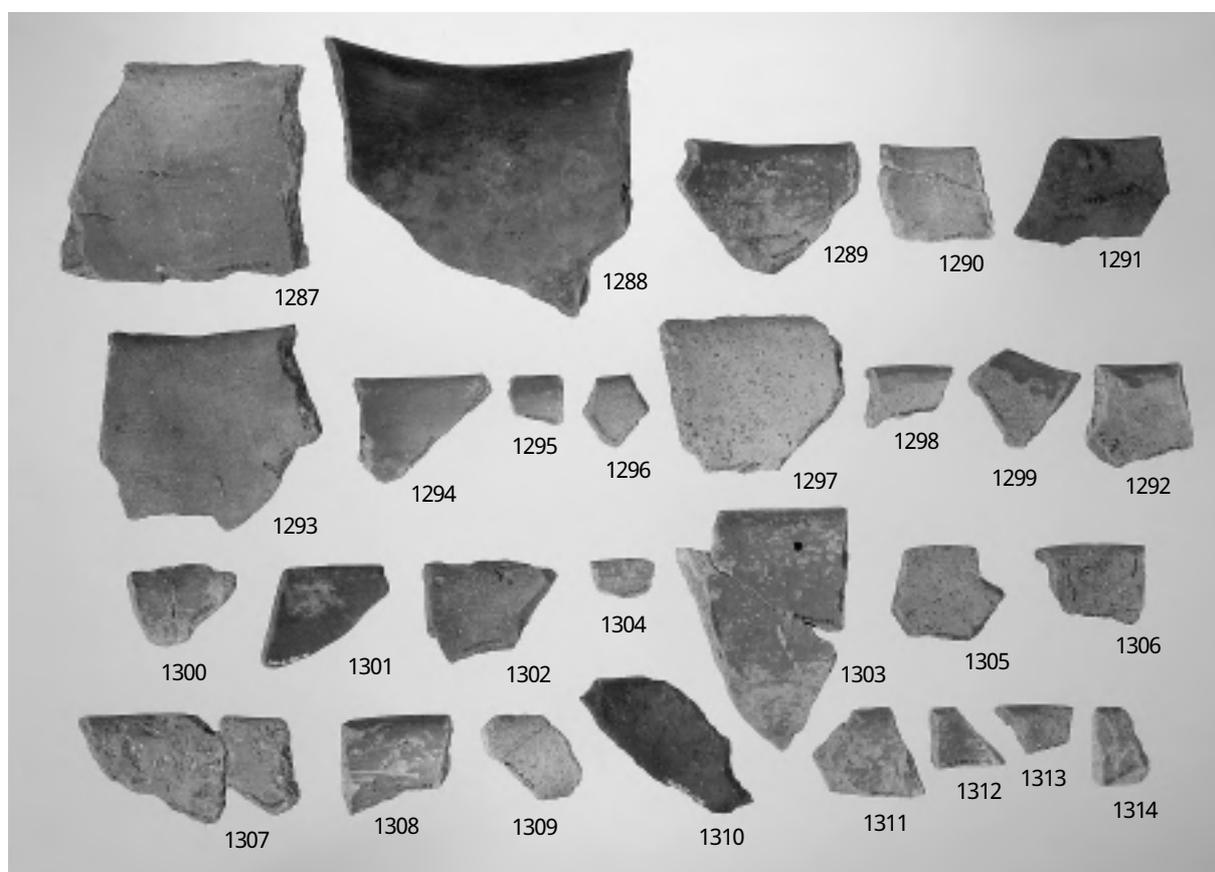
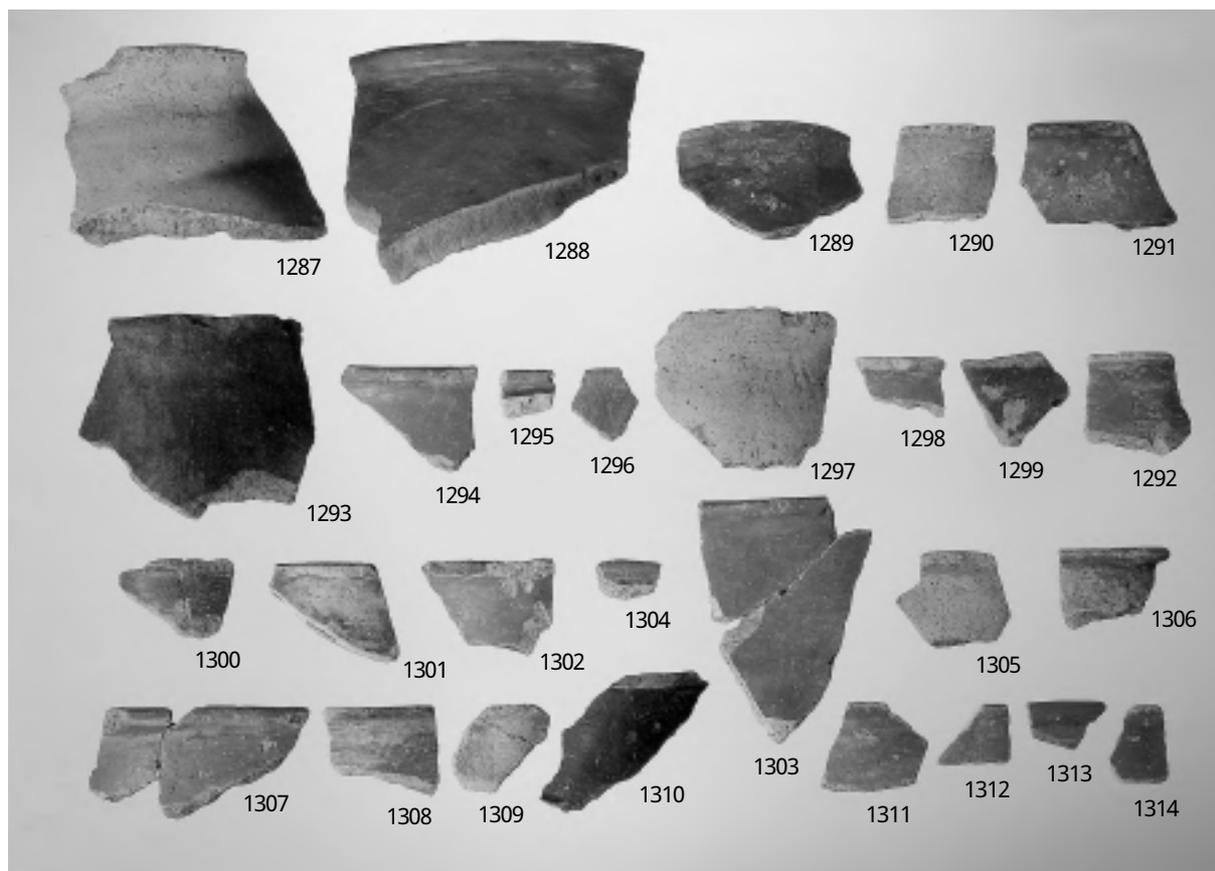


1171 (拡大)

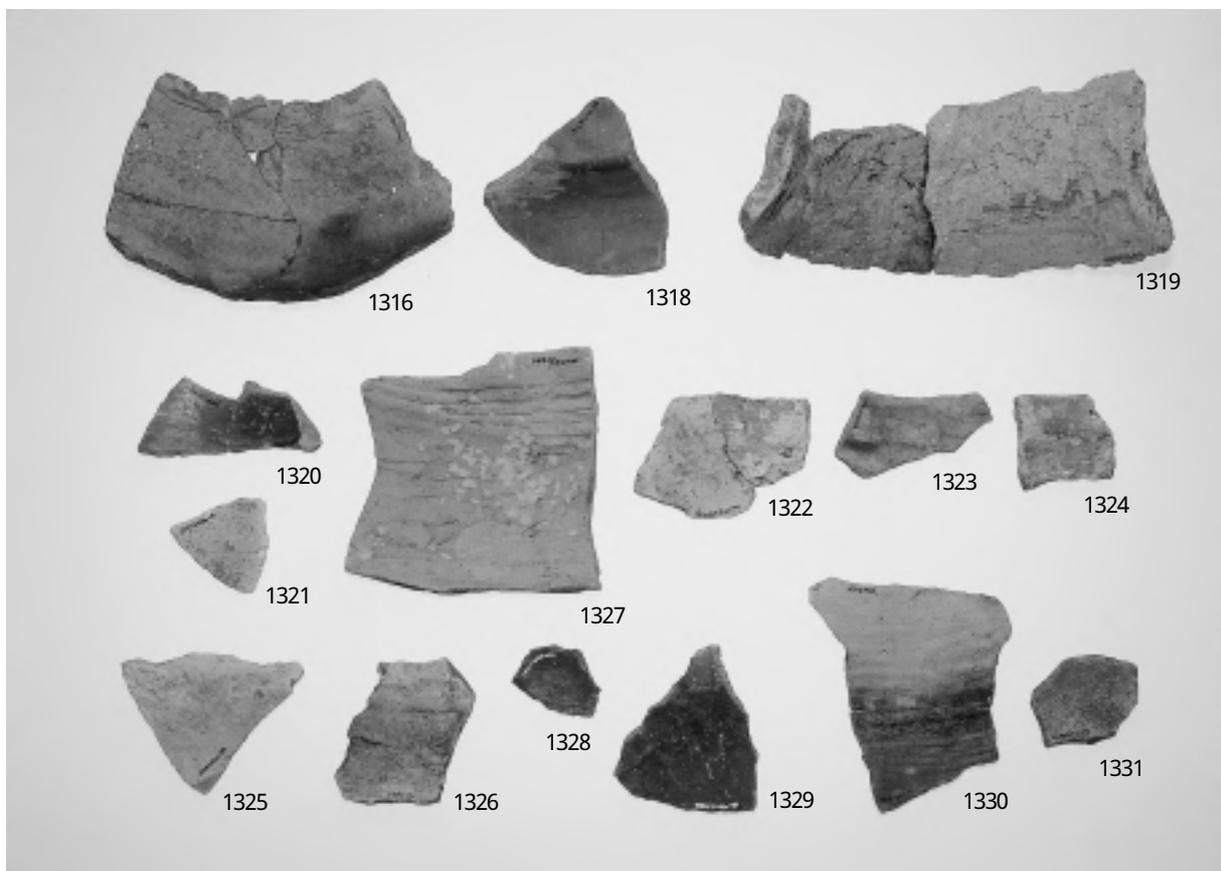
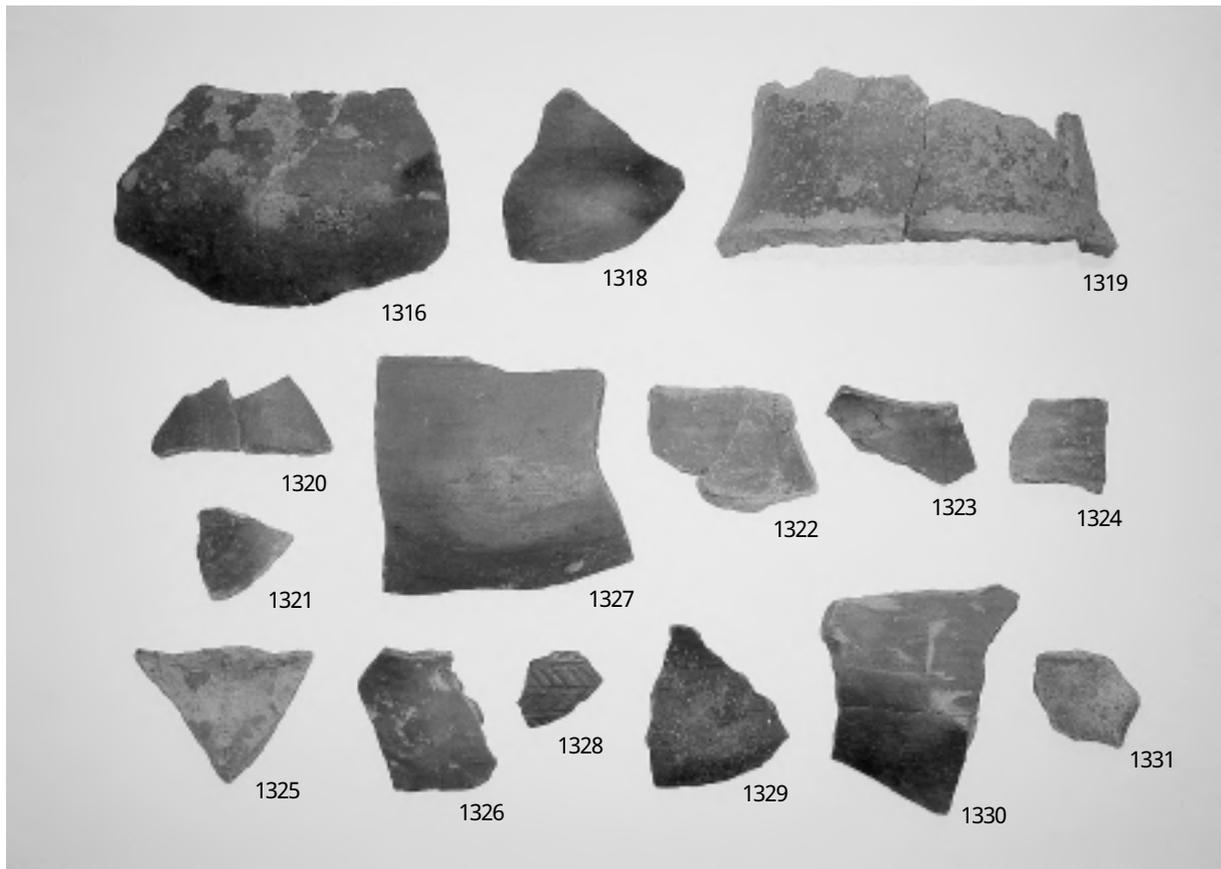


1172 (拡大)

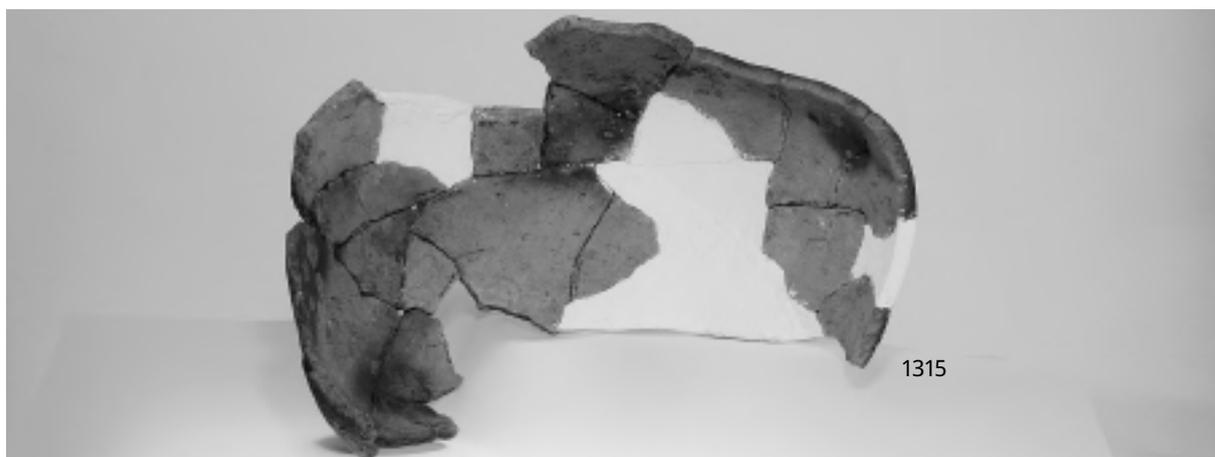
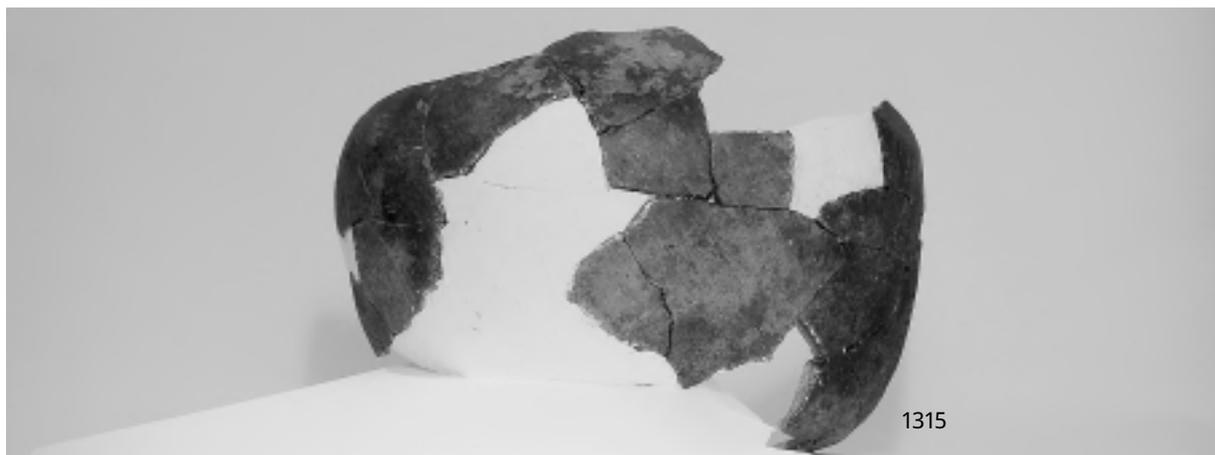
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



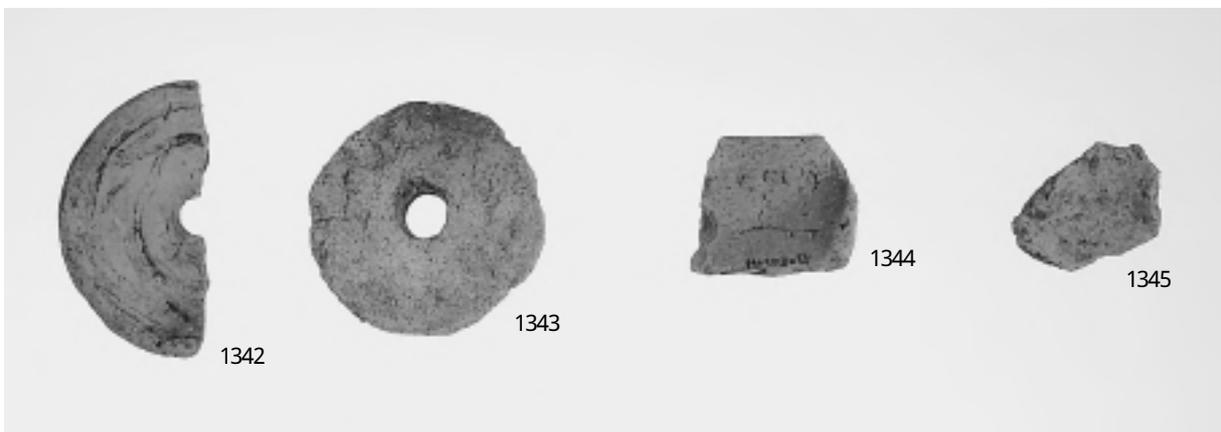
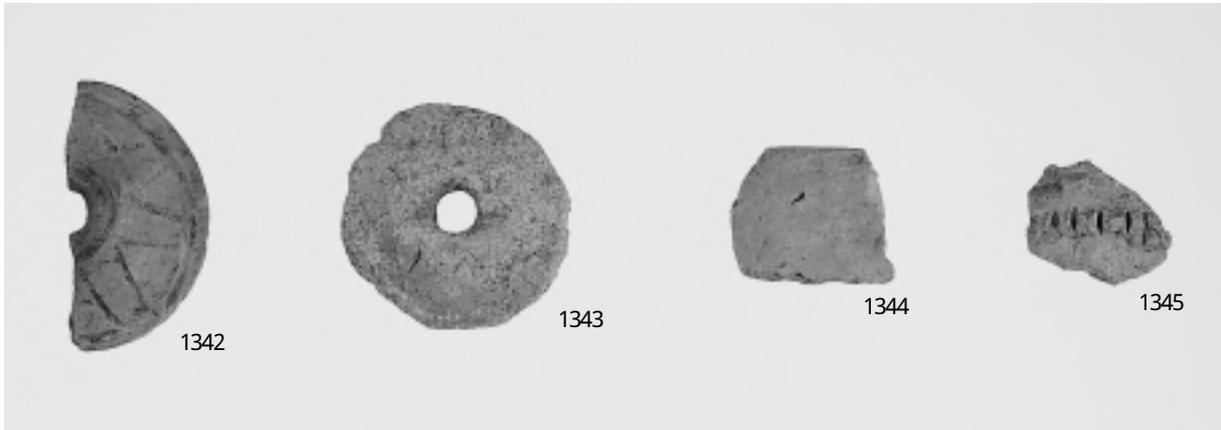
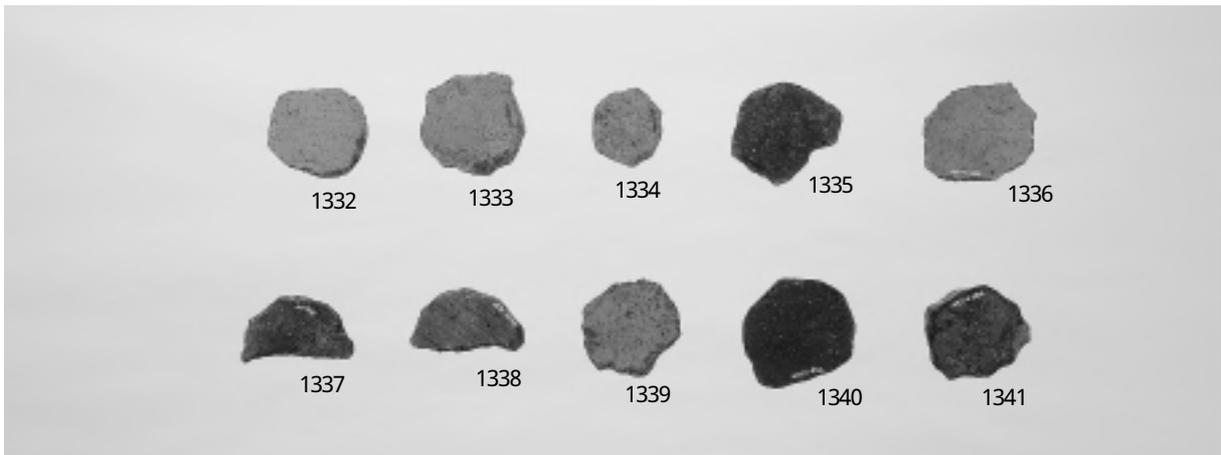
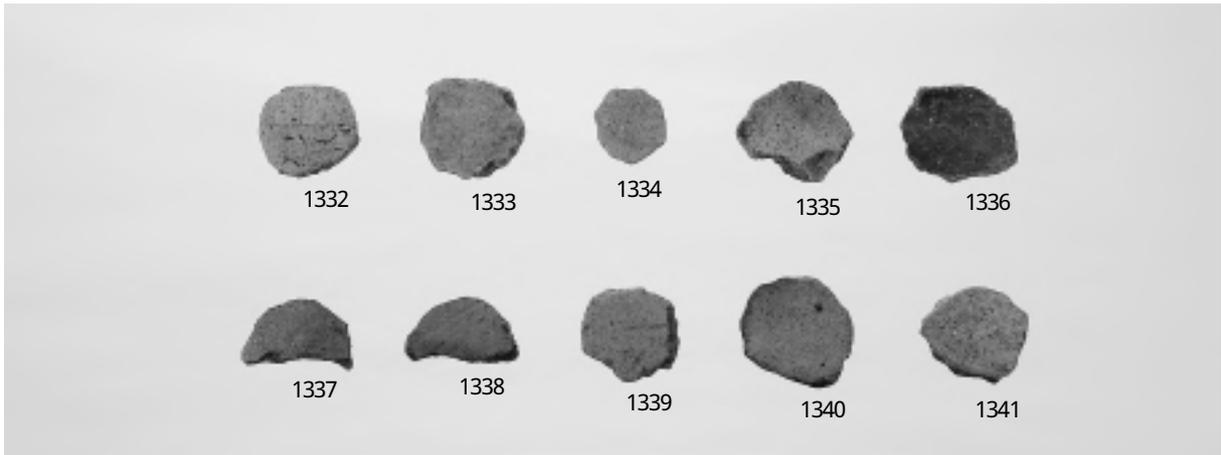
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



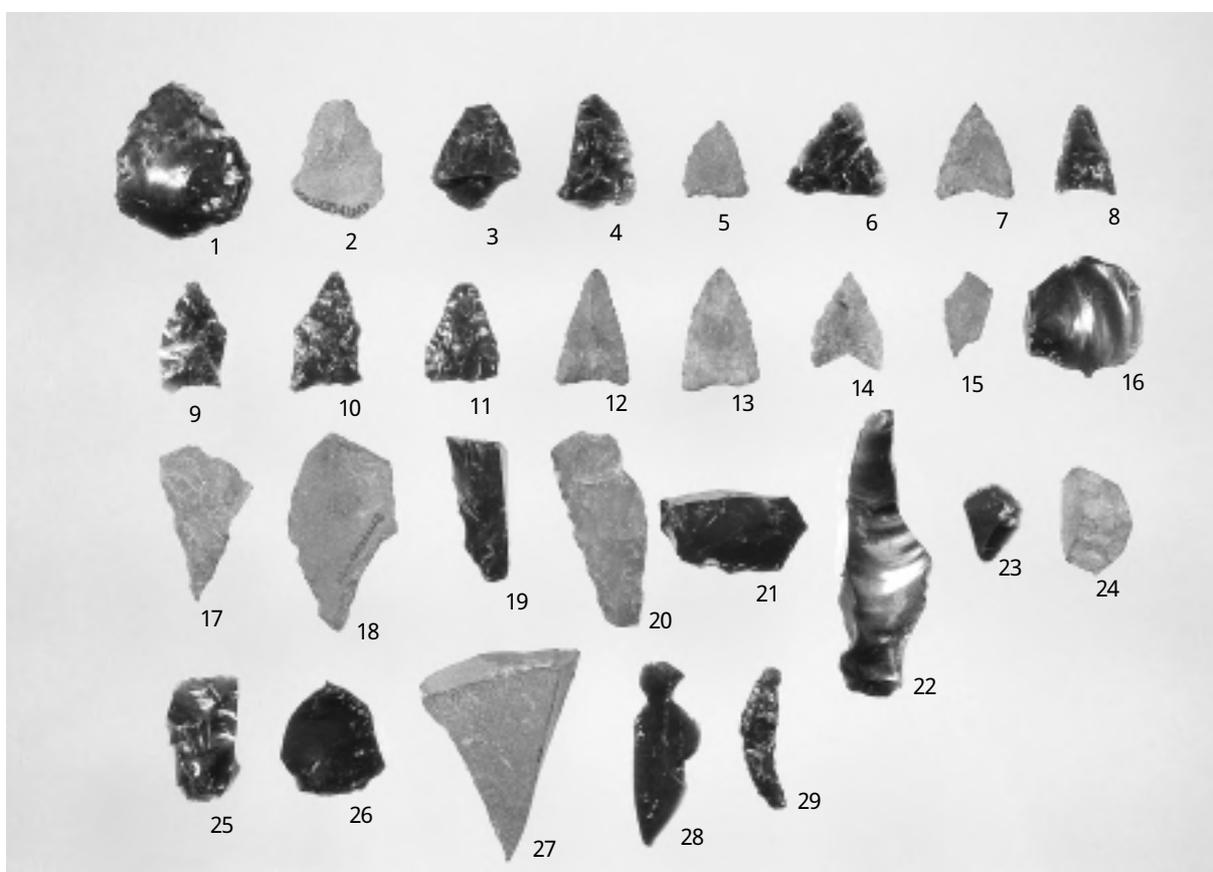
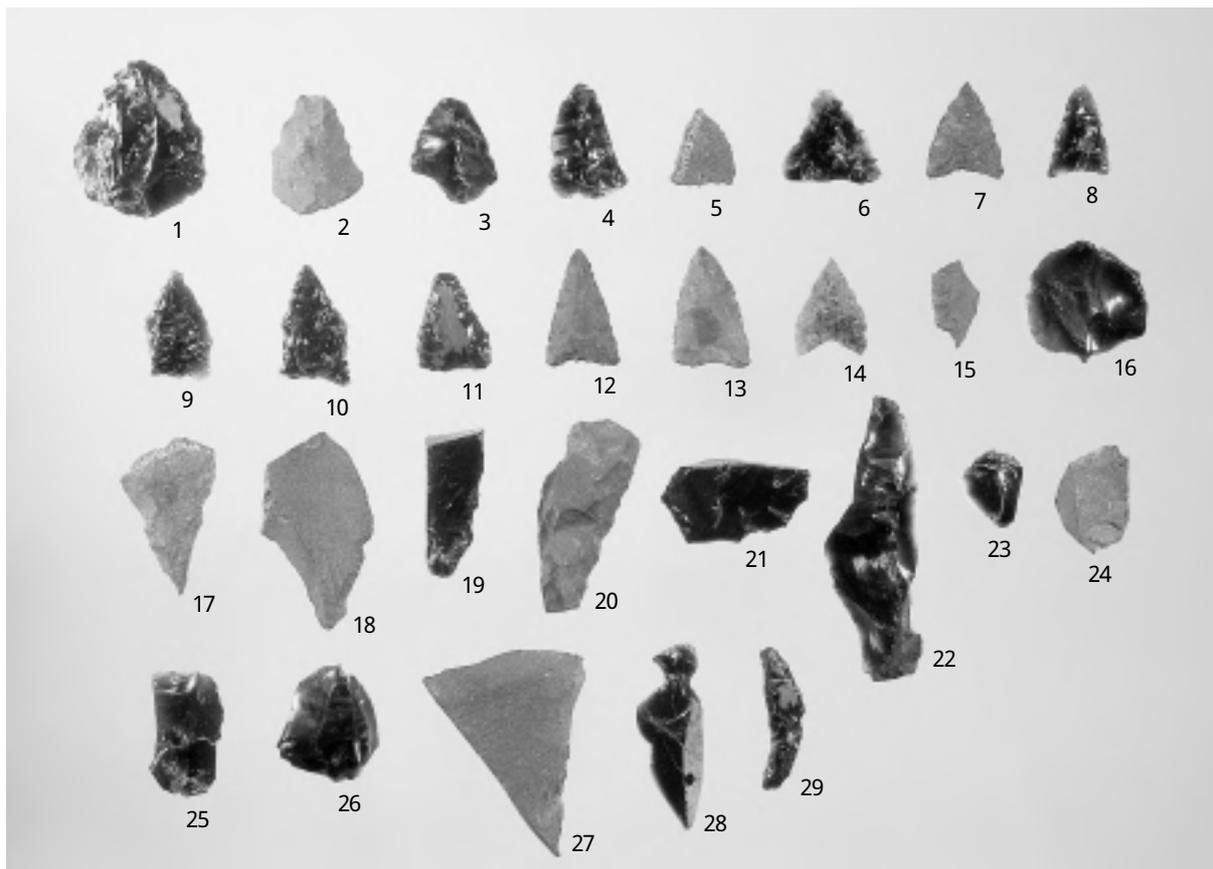
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



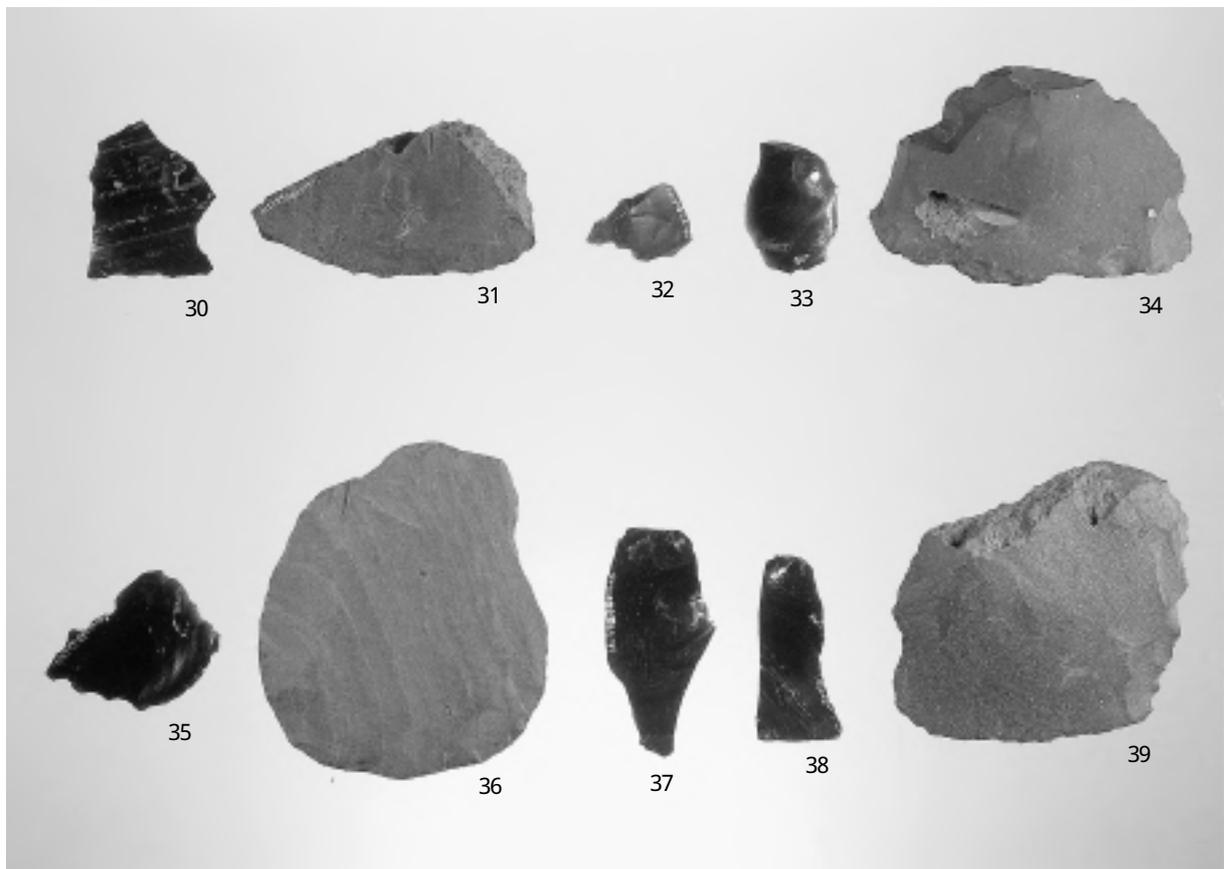
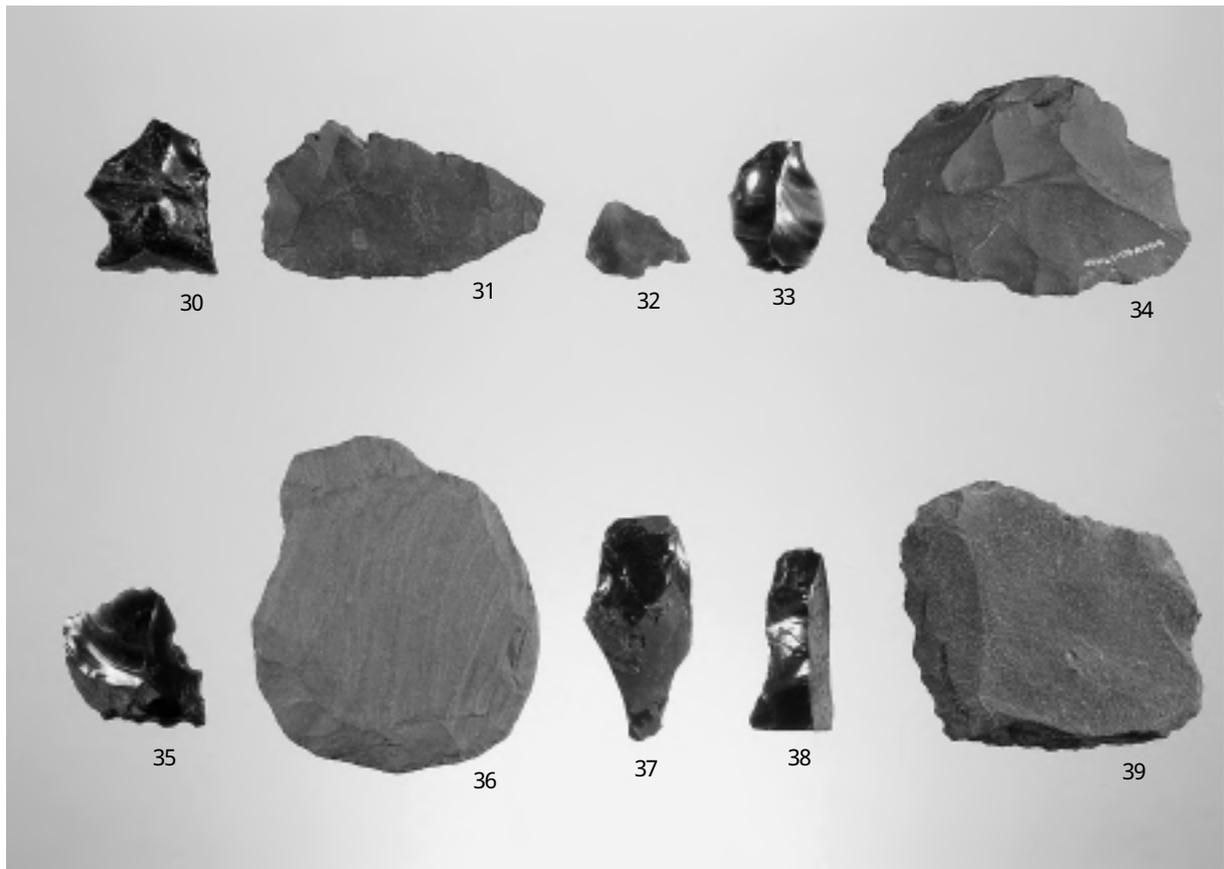
縄文時代後期～弥生時代前期の土器（B・C区）



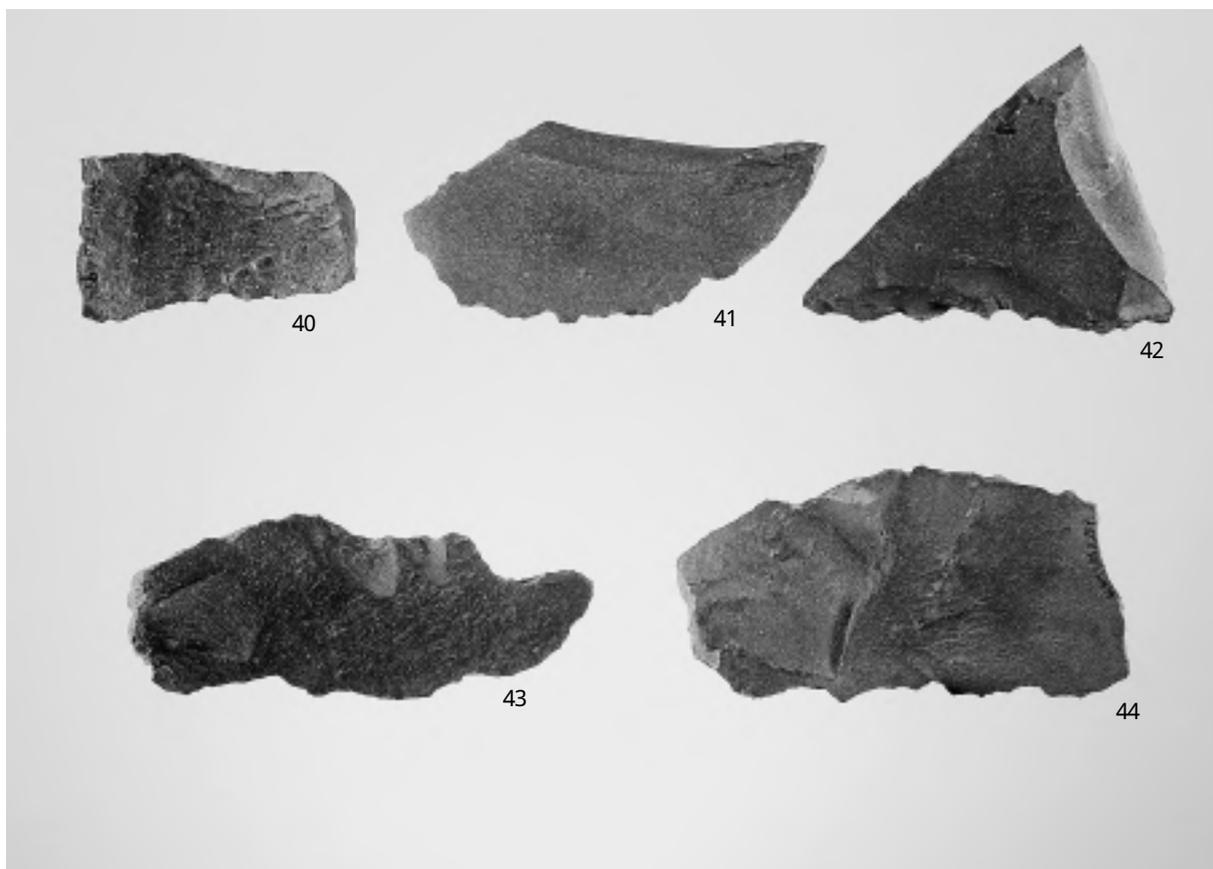
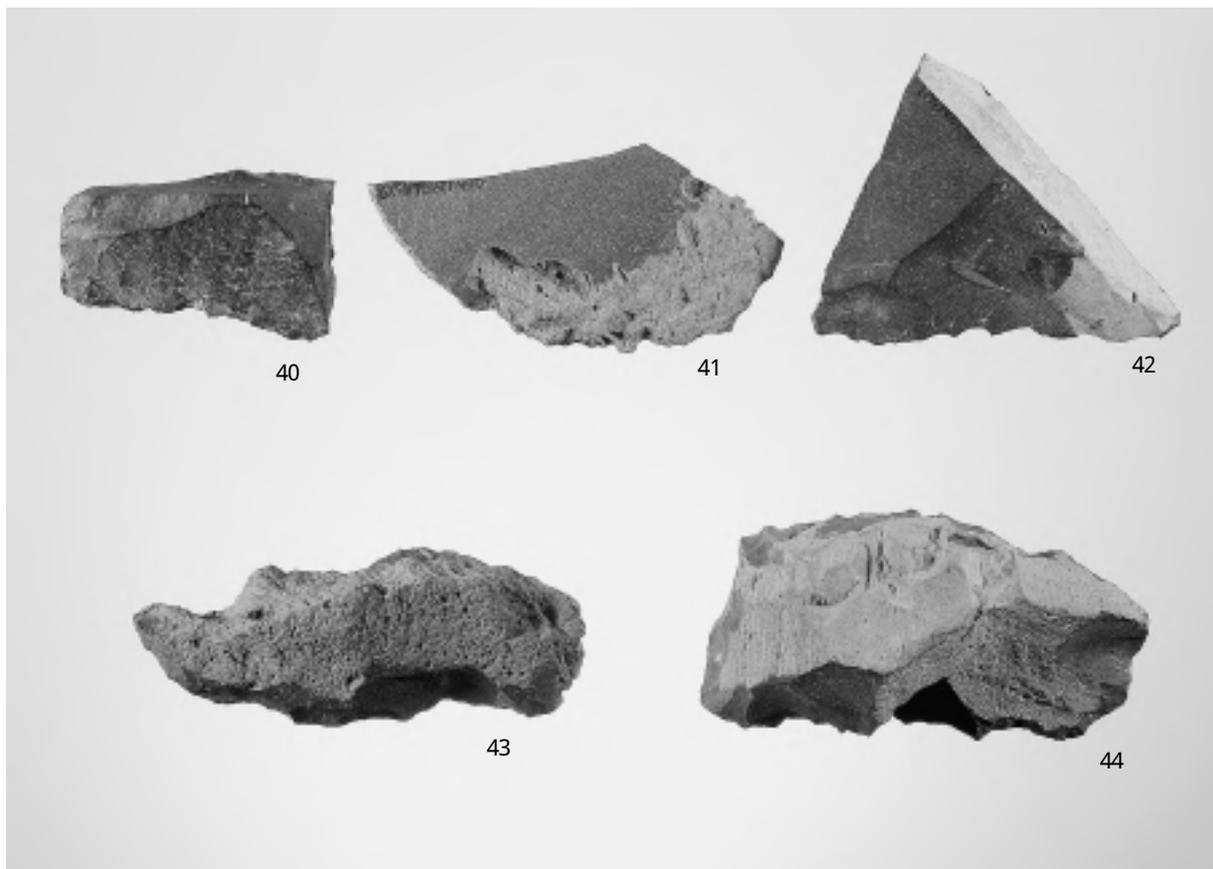
縄文時代後期～弥生時代前期の土製品（B・C区）



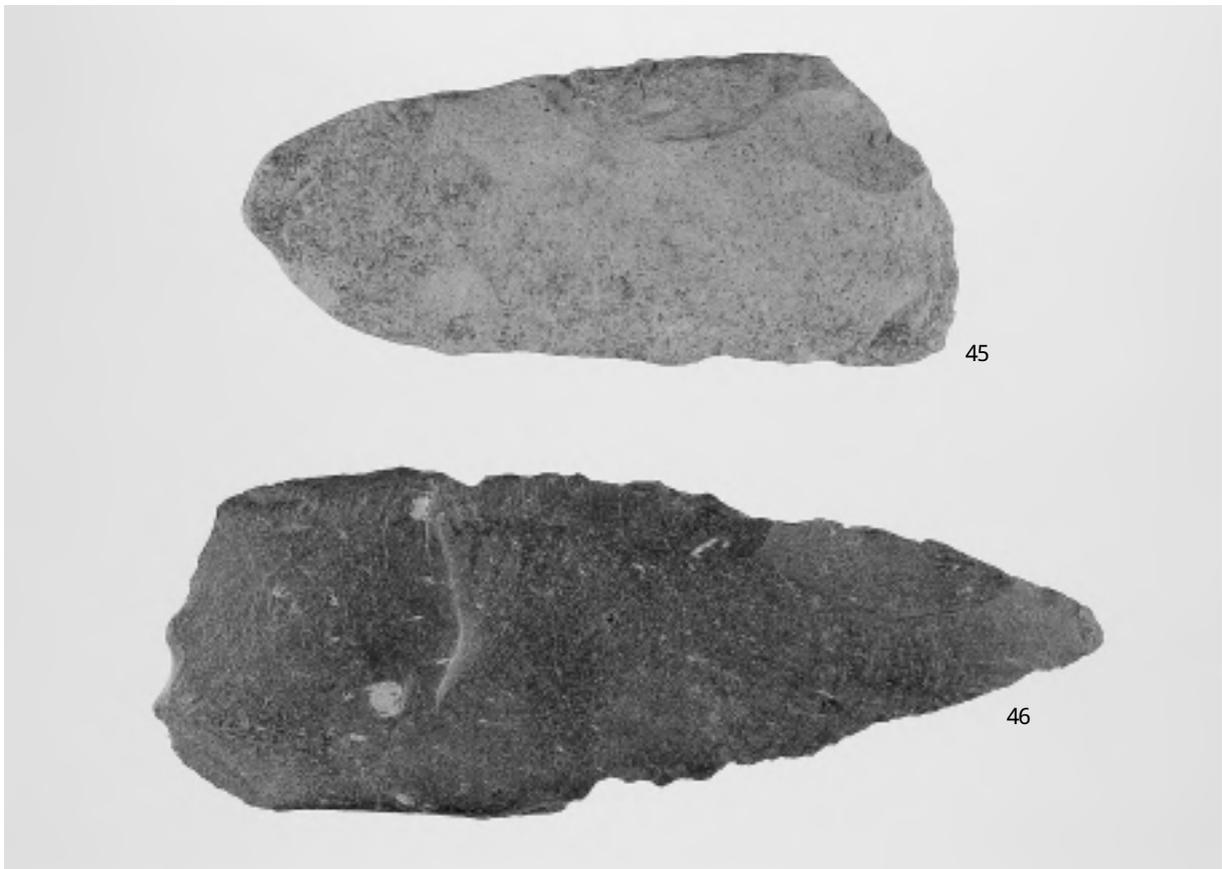
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



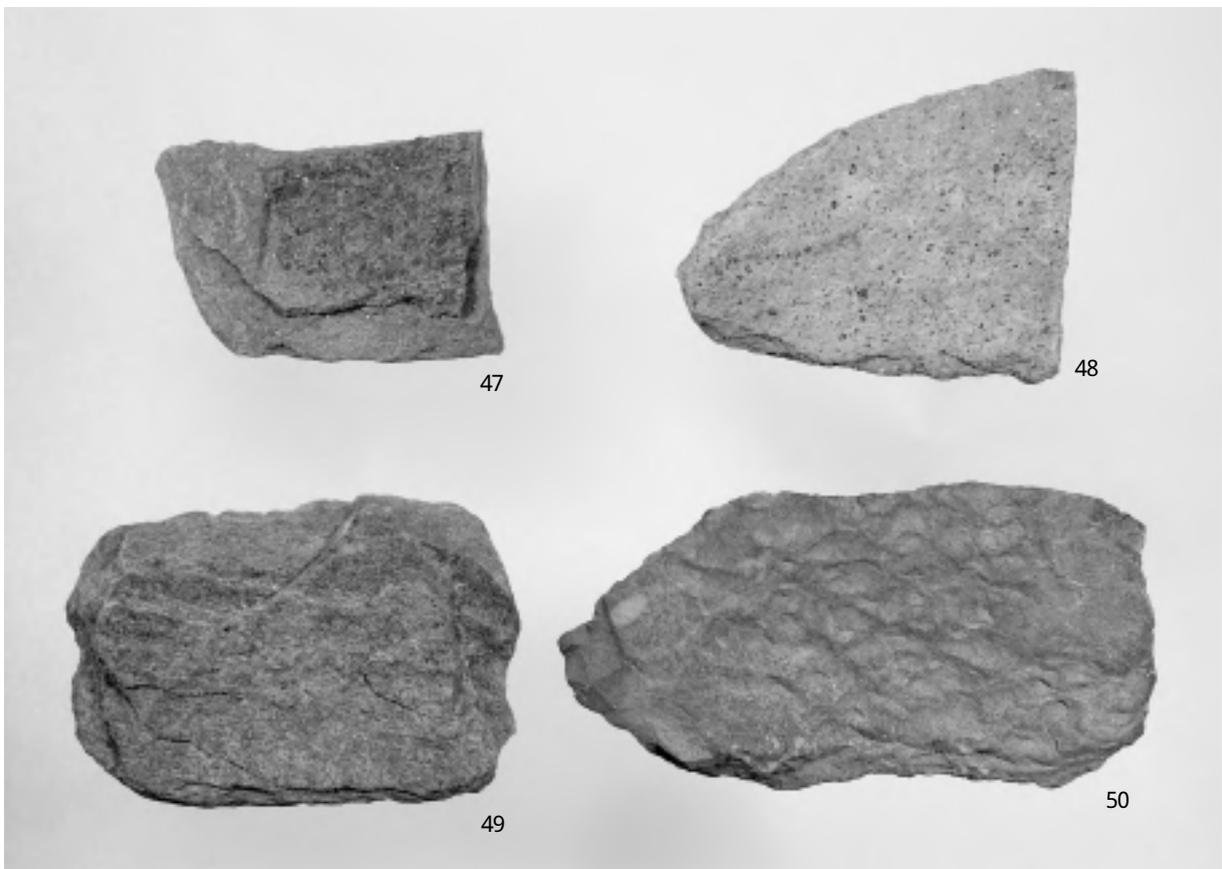
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



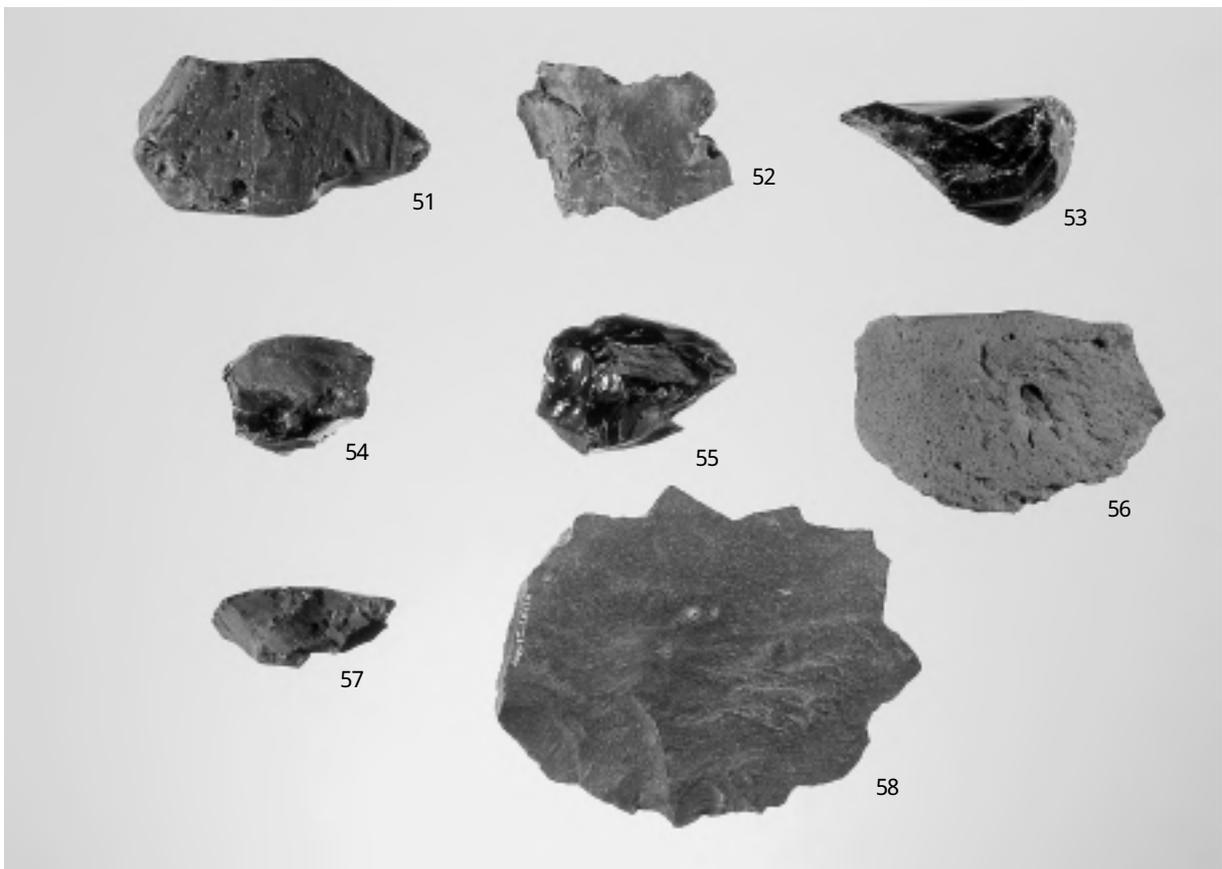
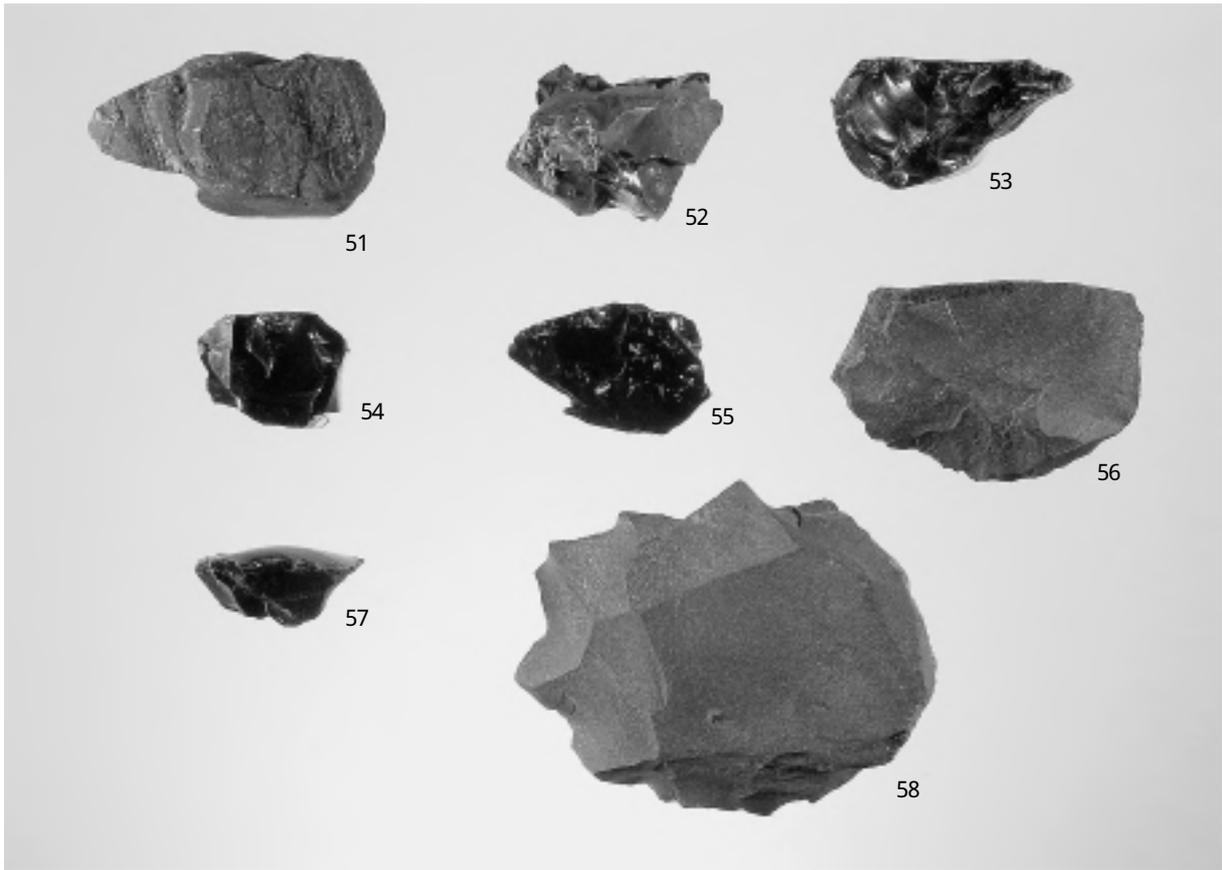
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



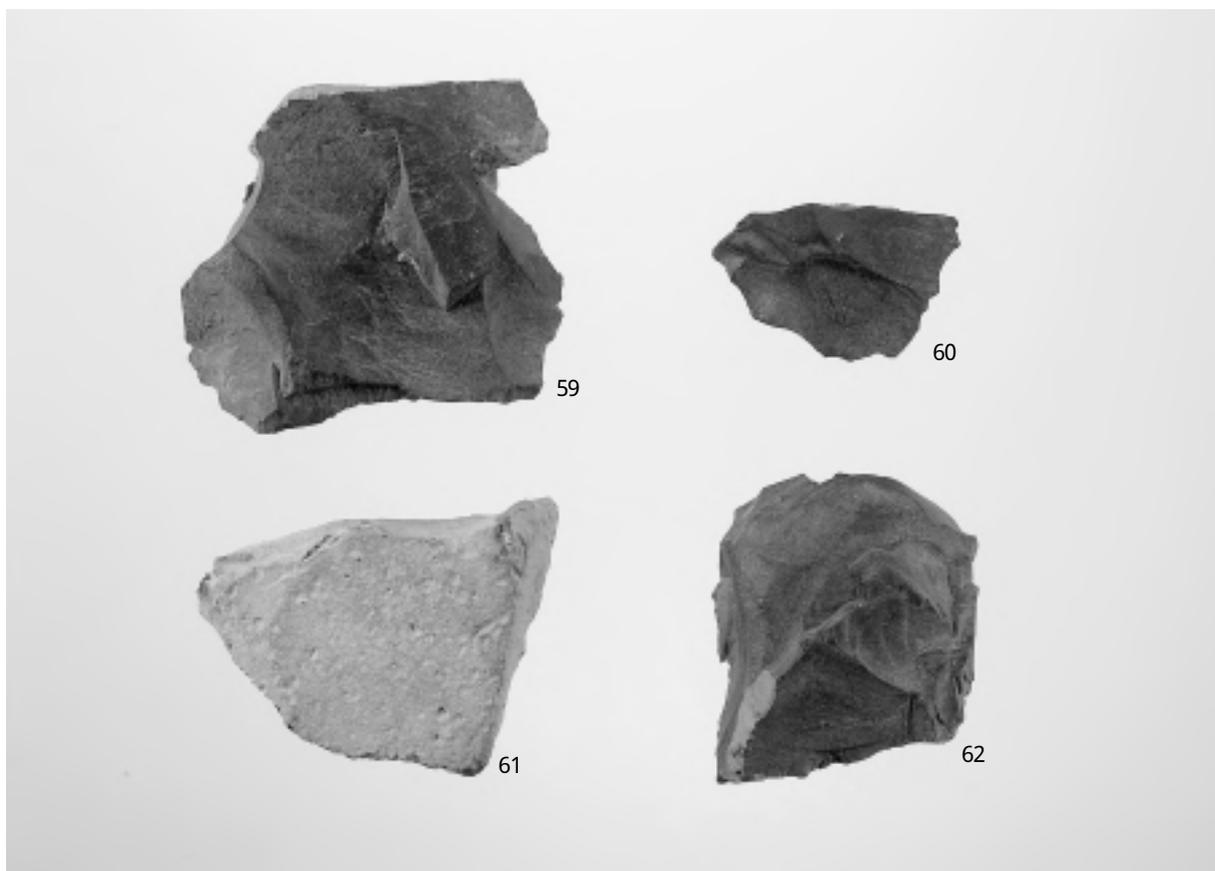
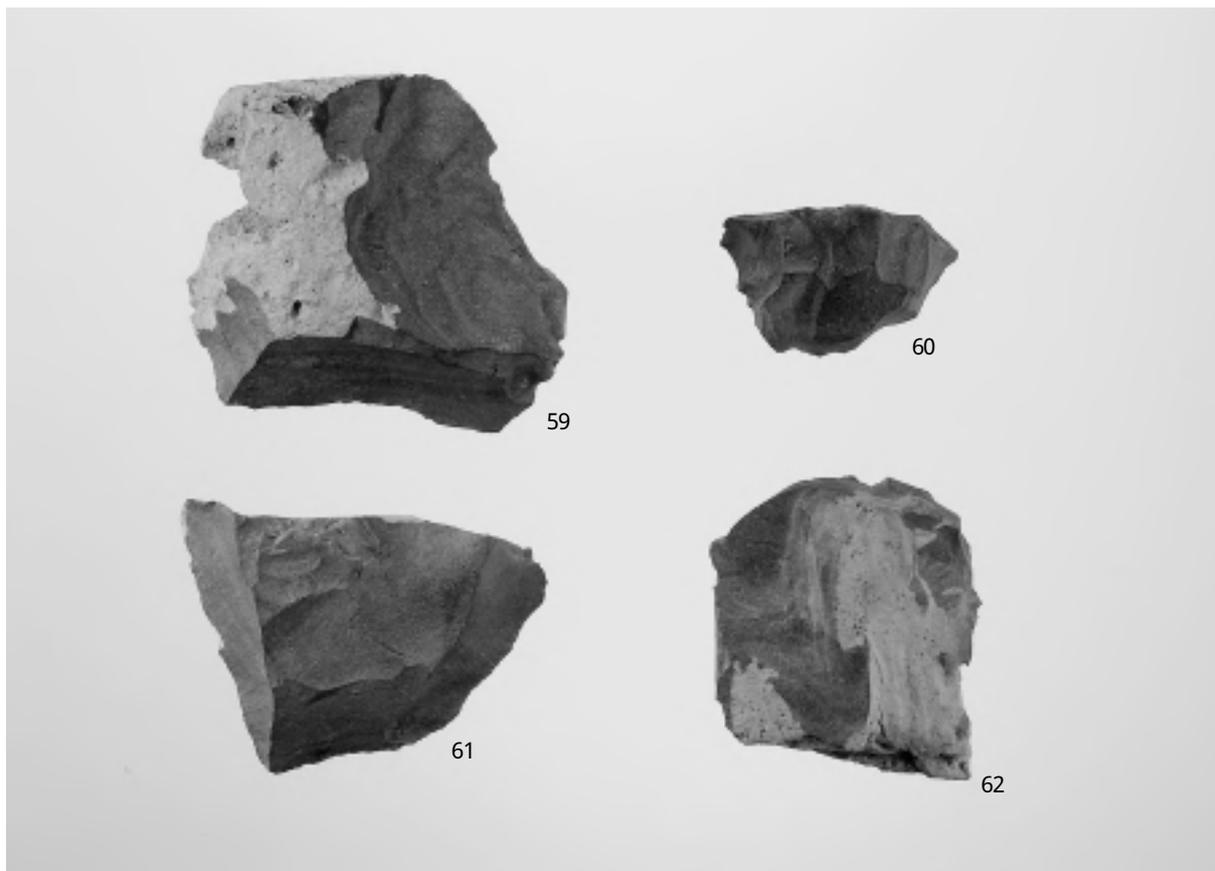
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



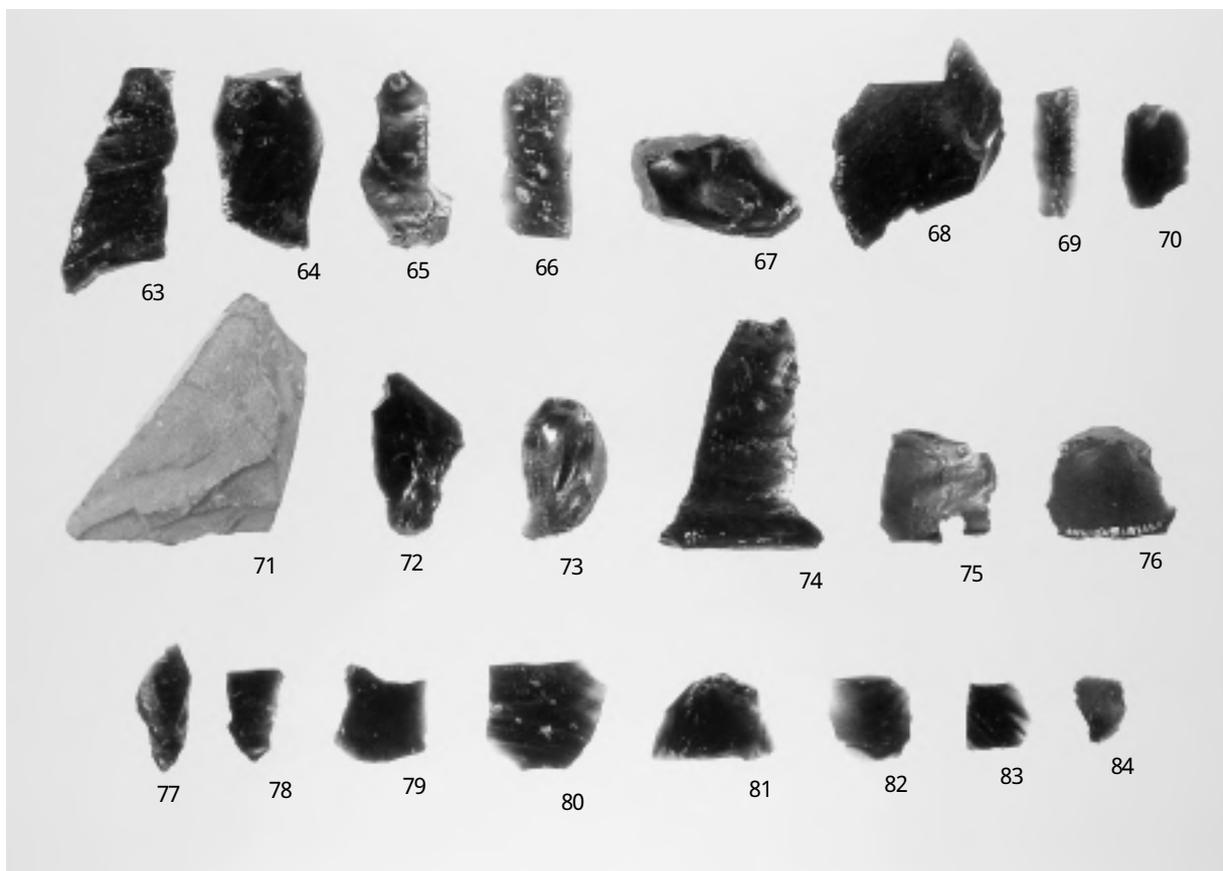
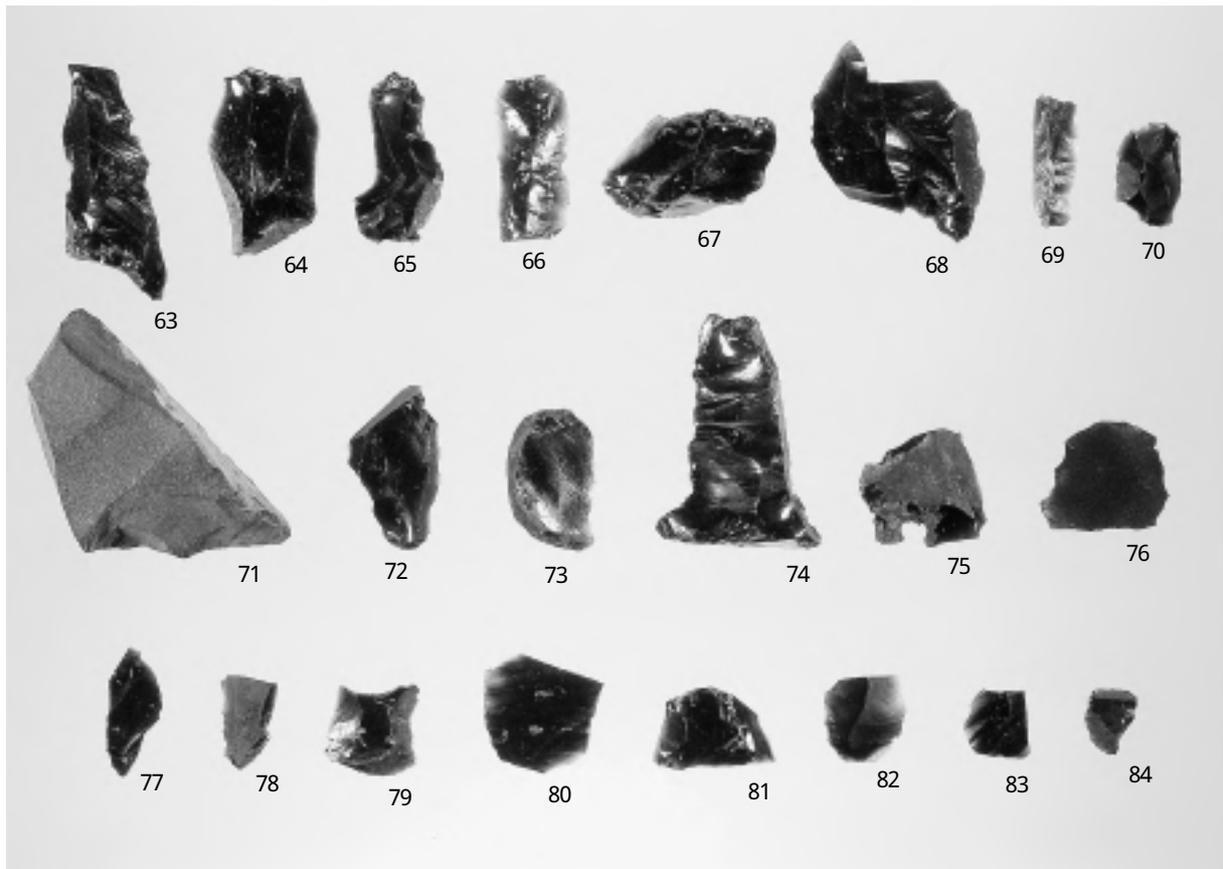
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



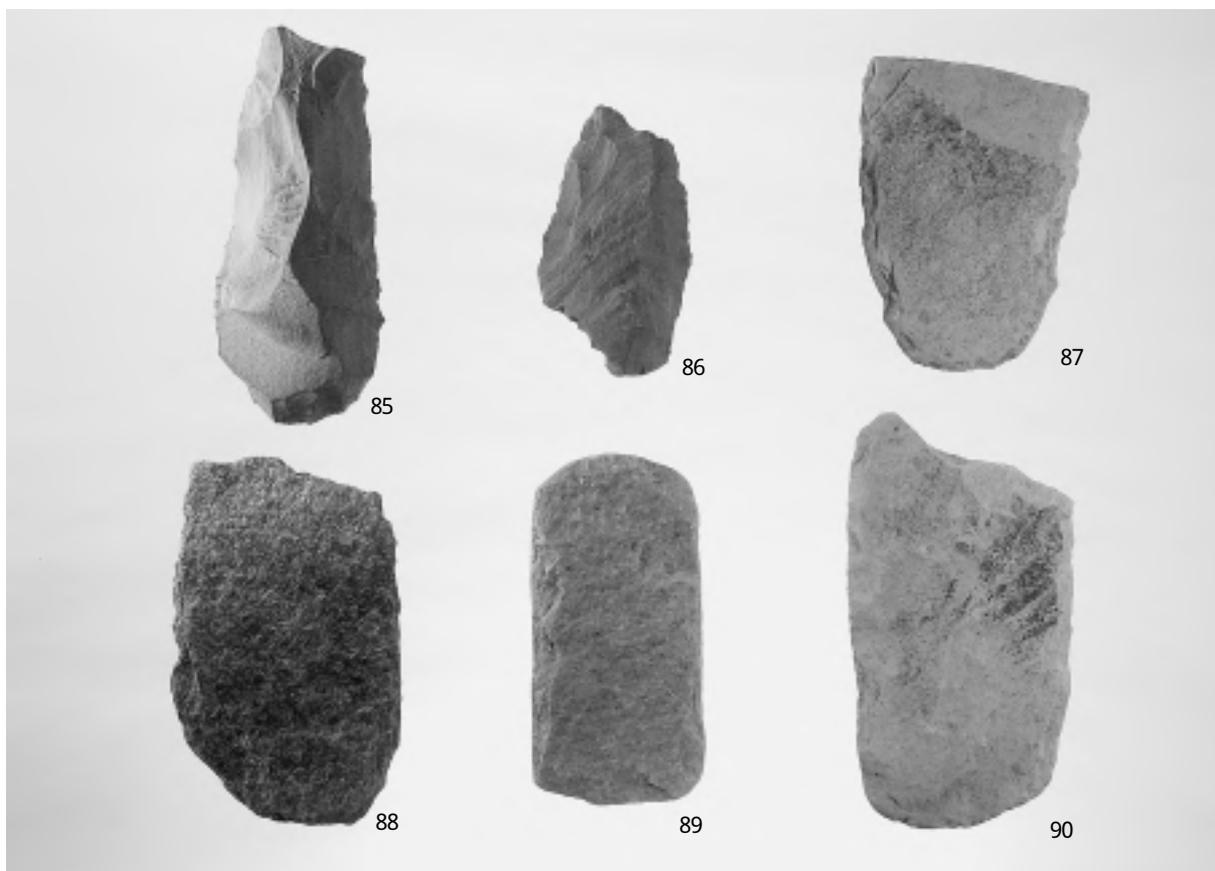
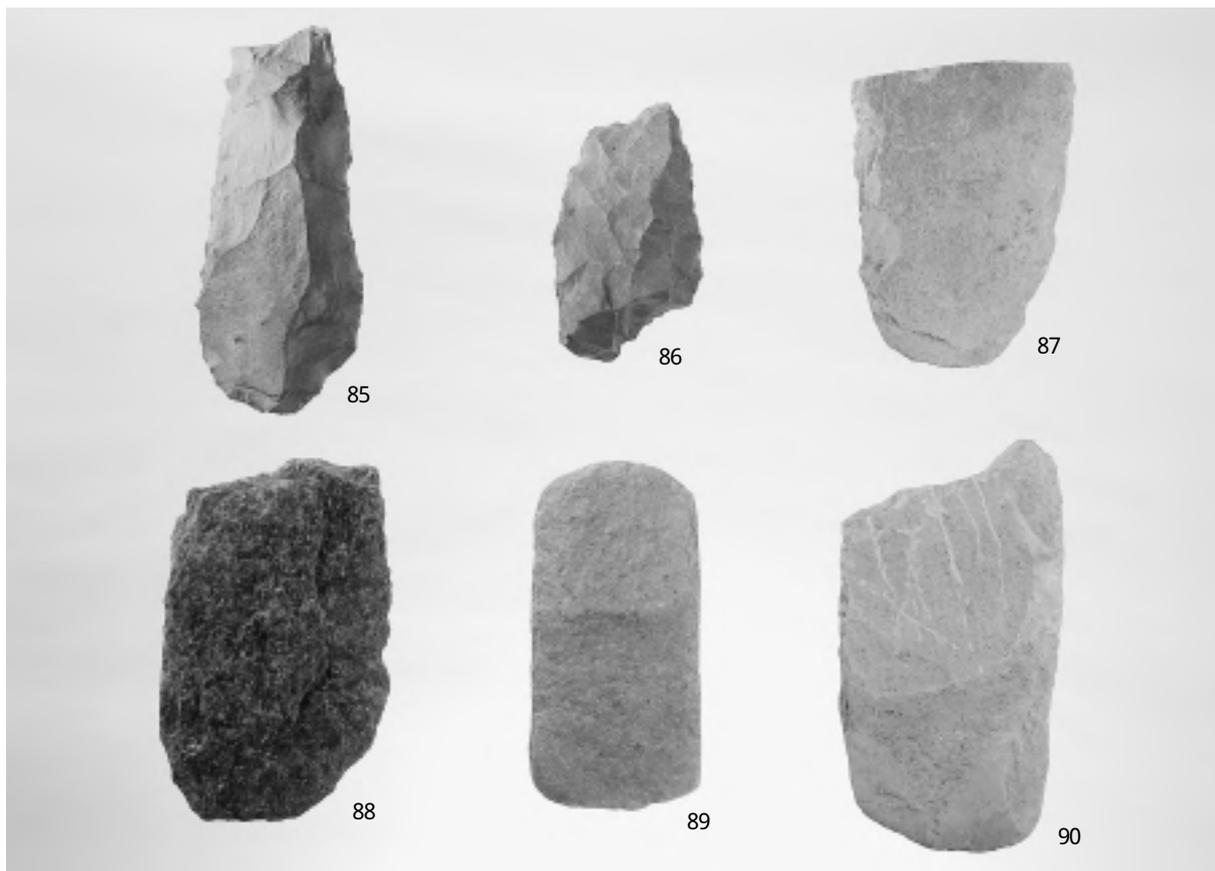
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



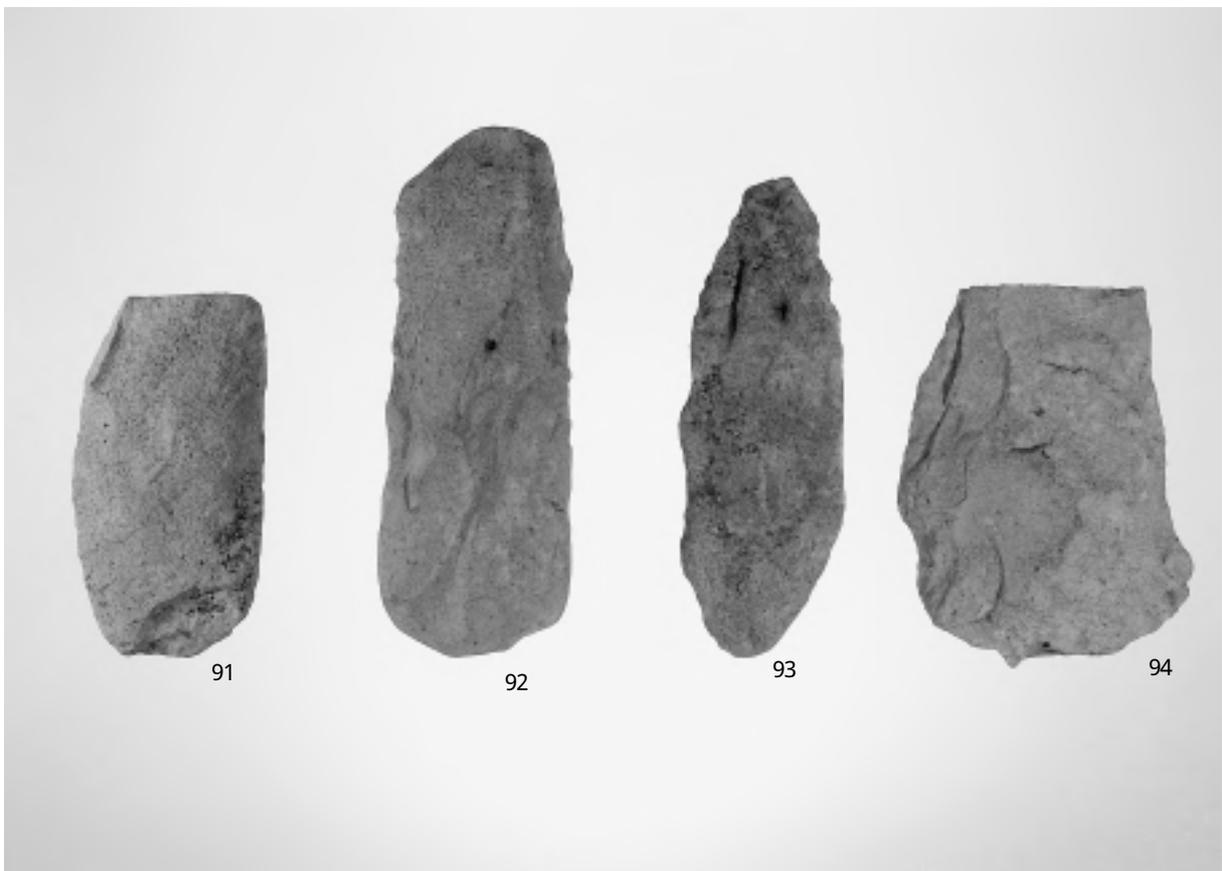
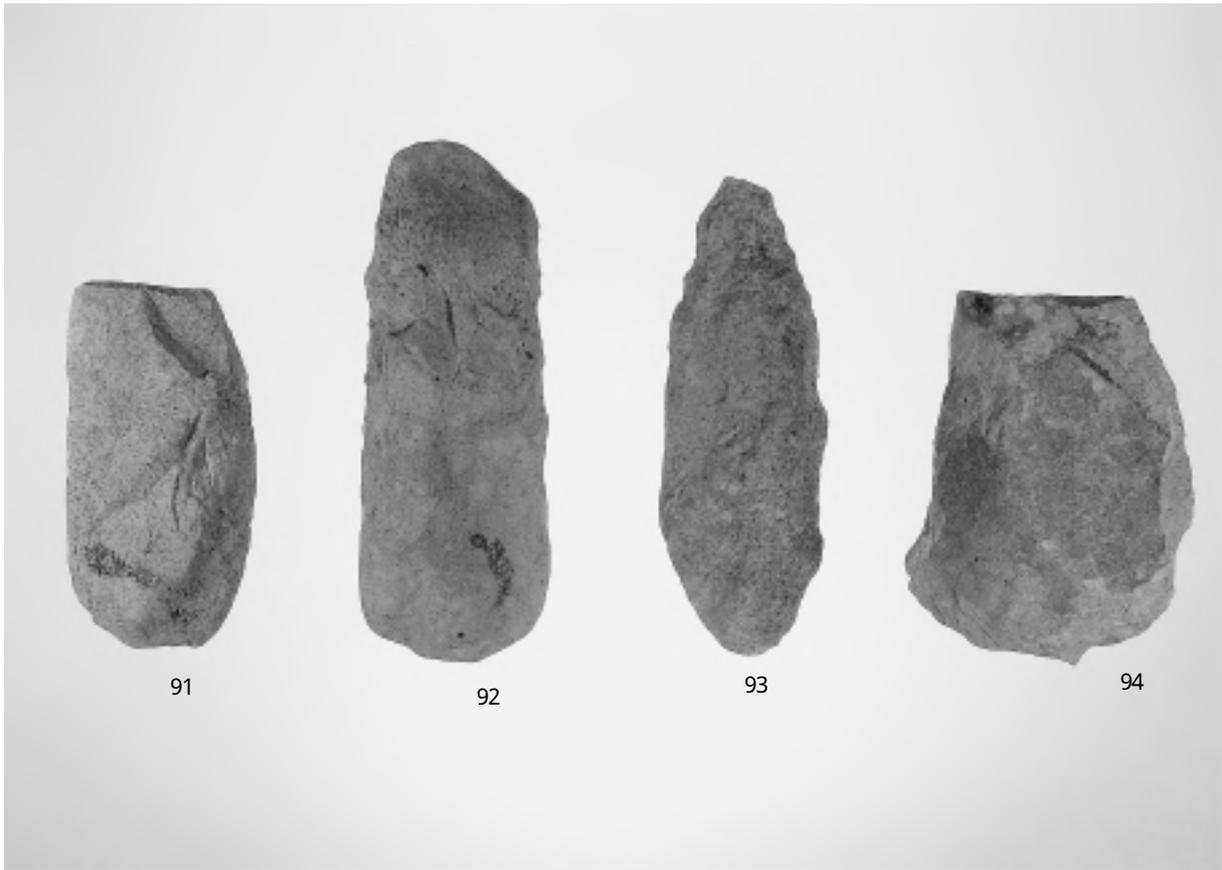
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



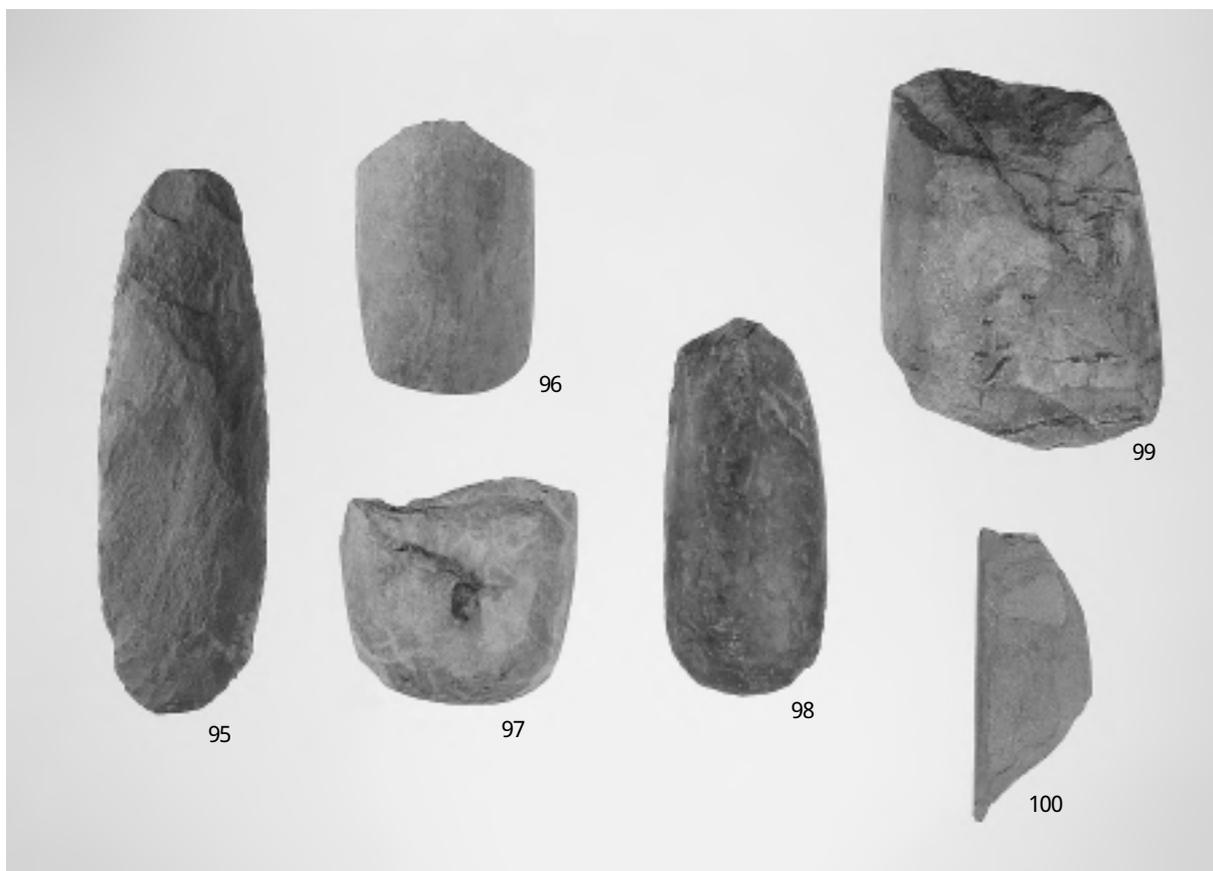
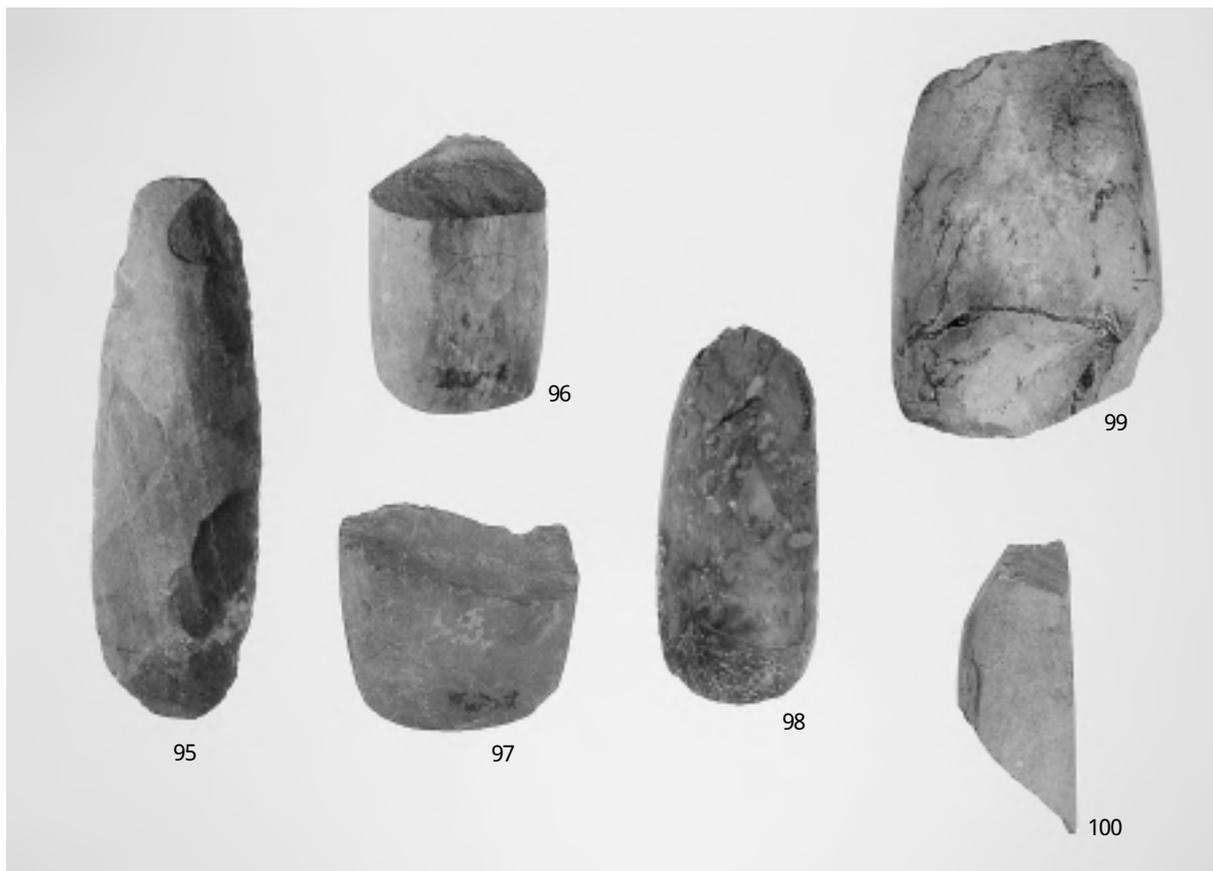
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



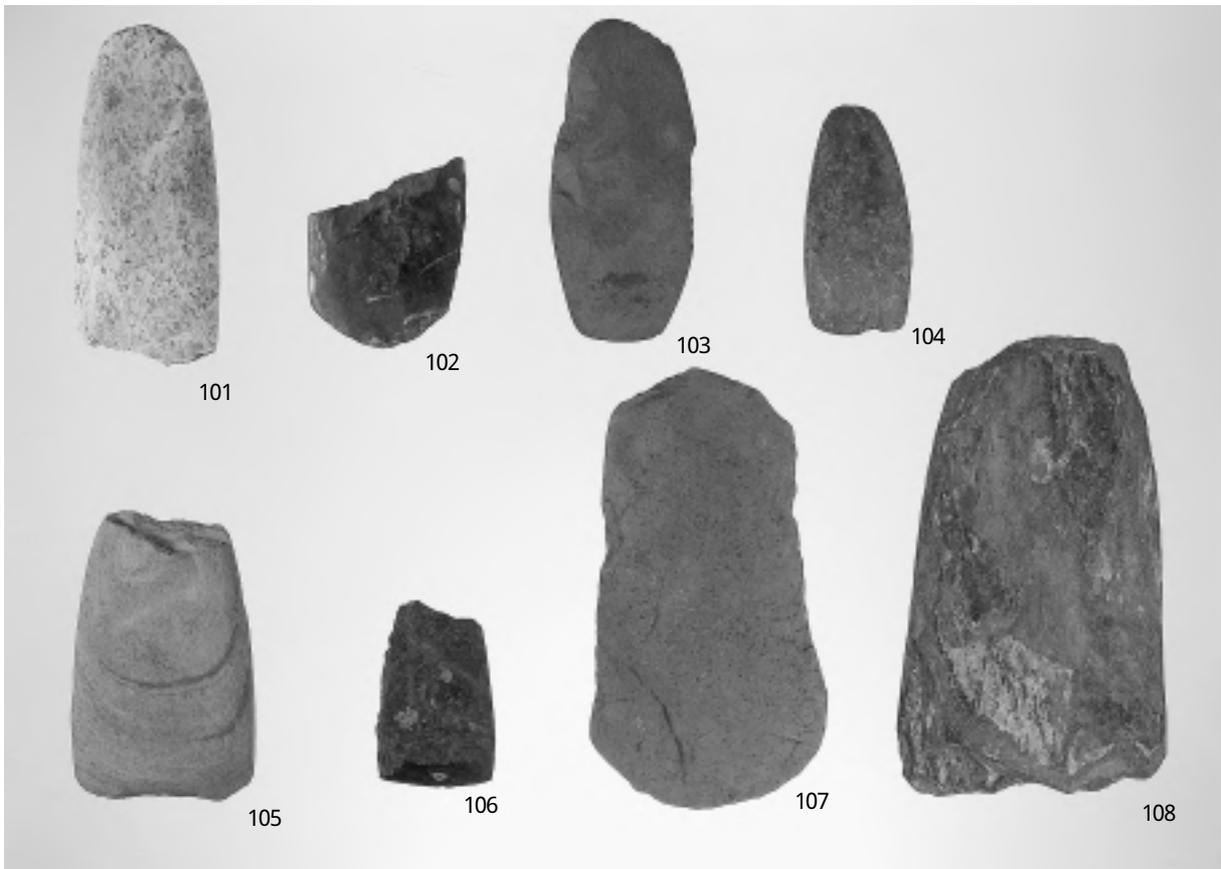
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



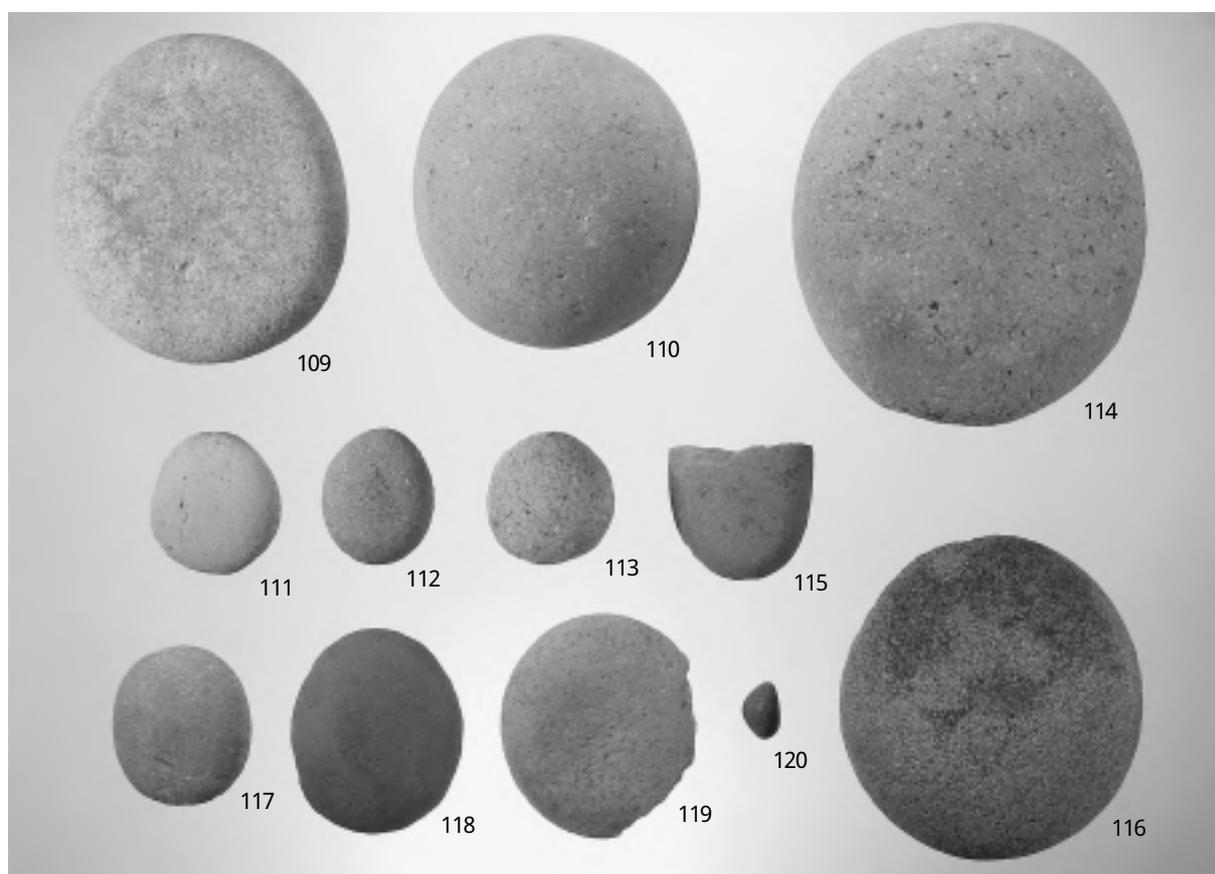
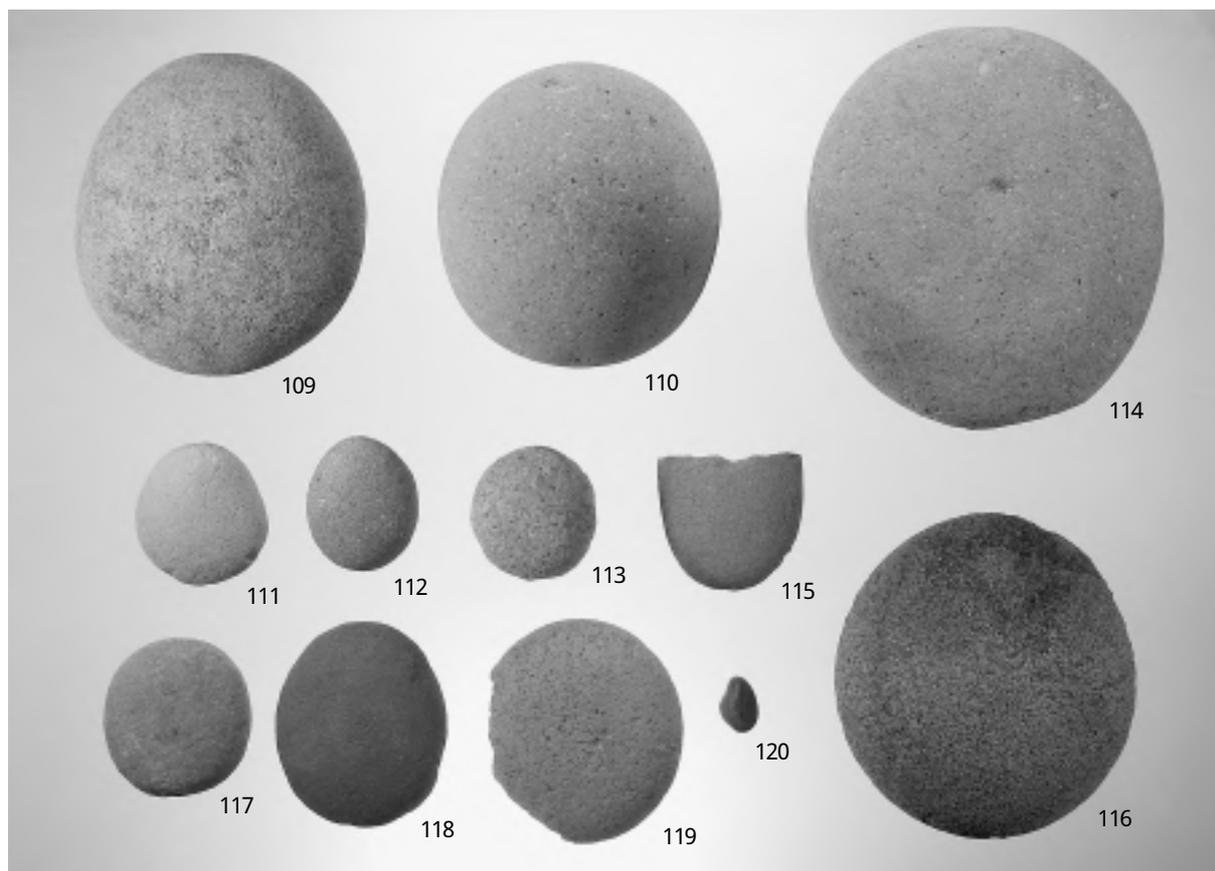
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



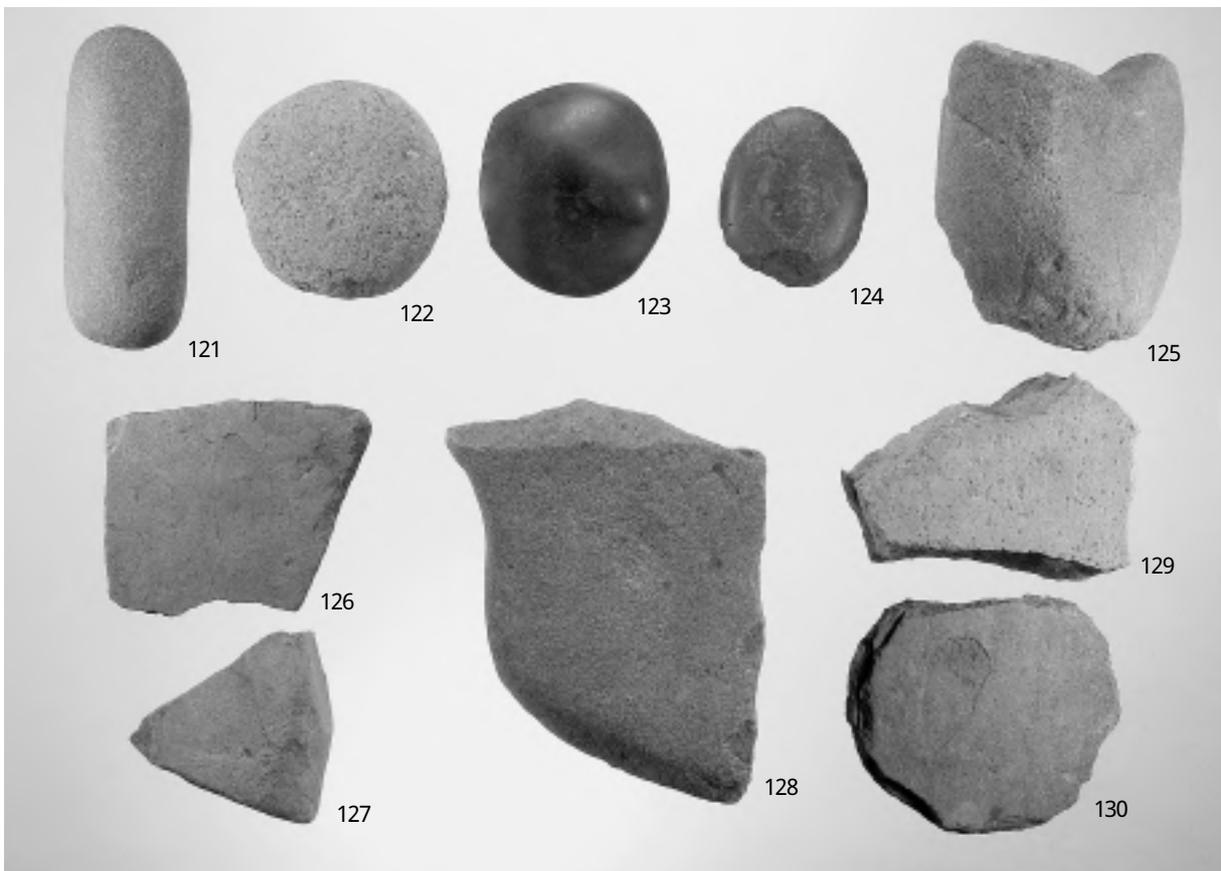
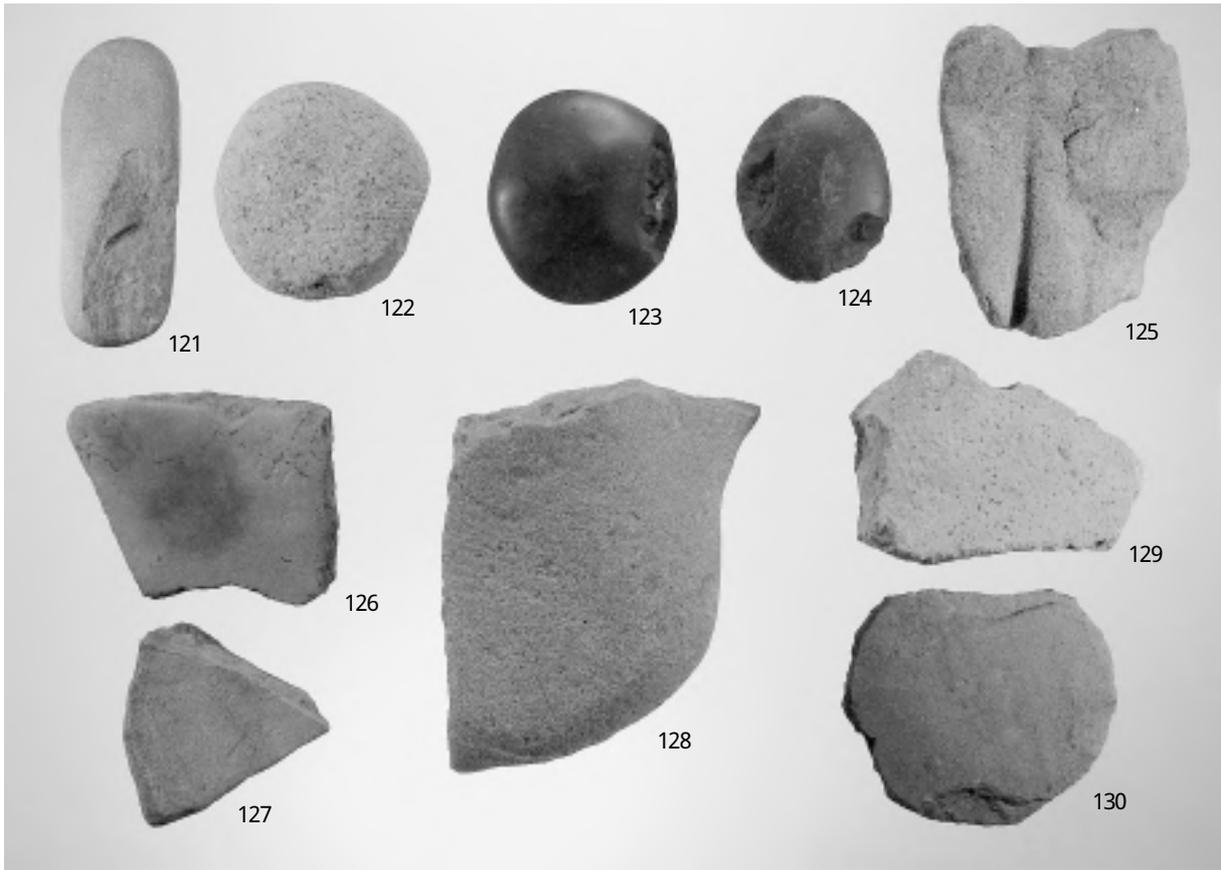
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



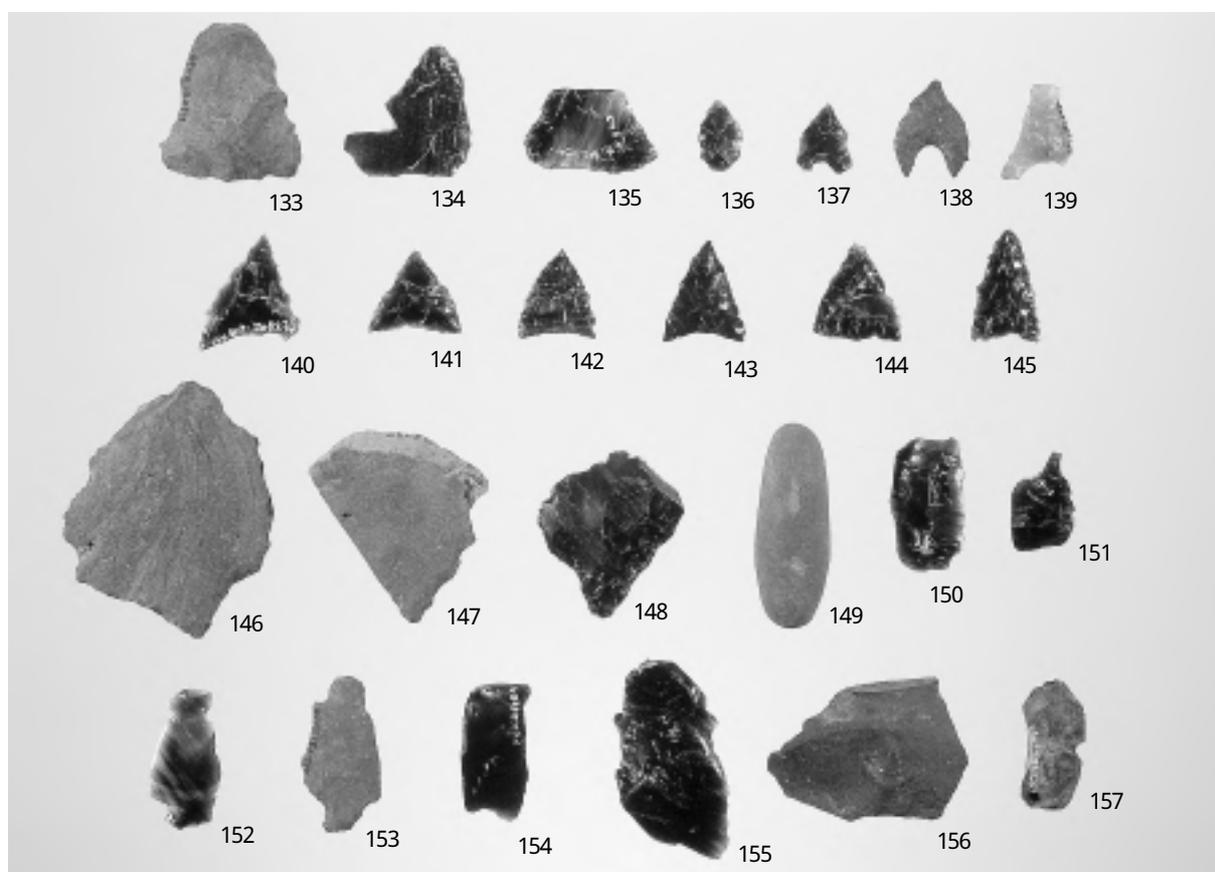
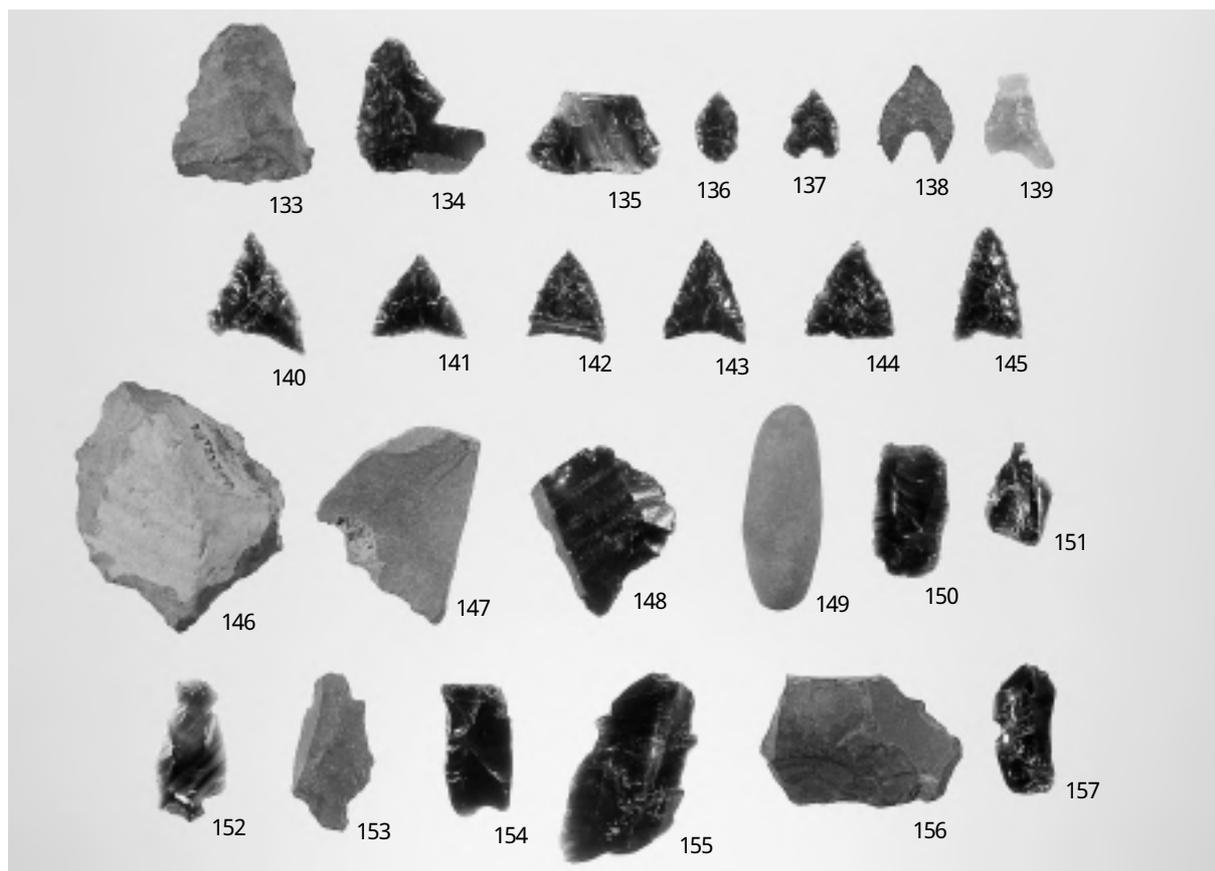
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



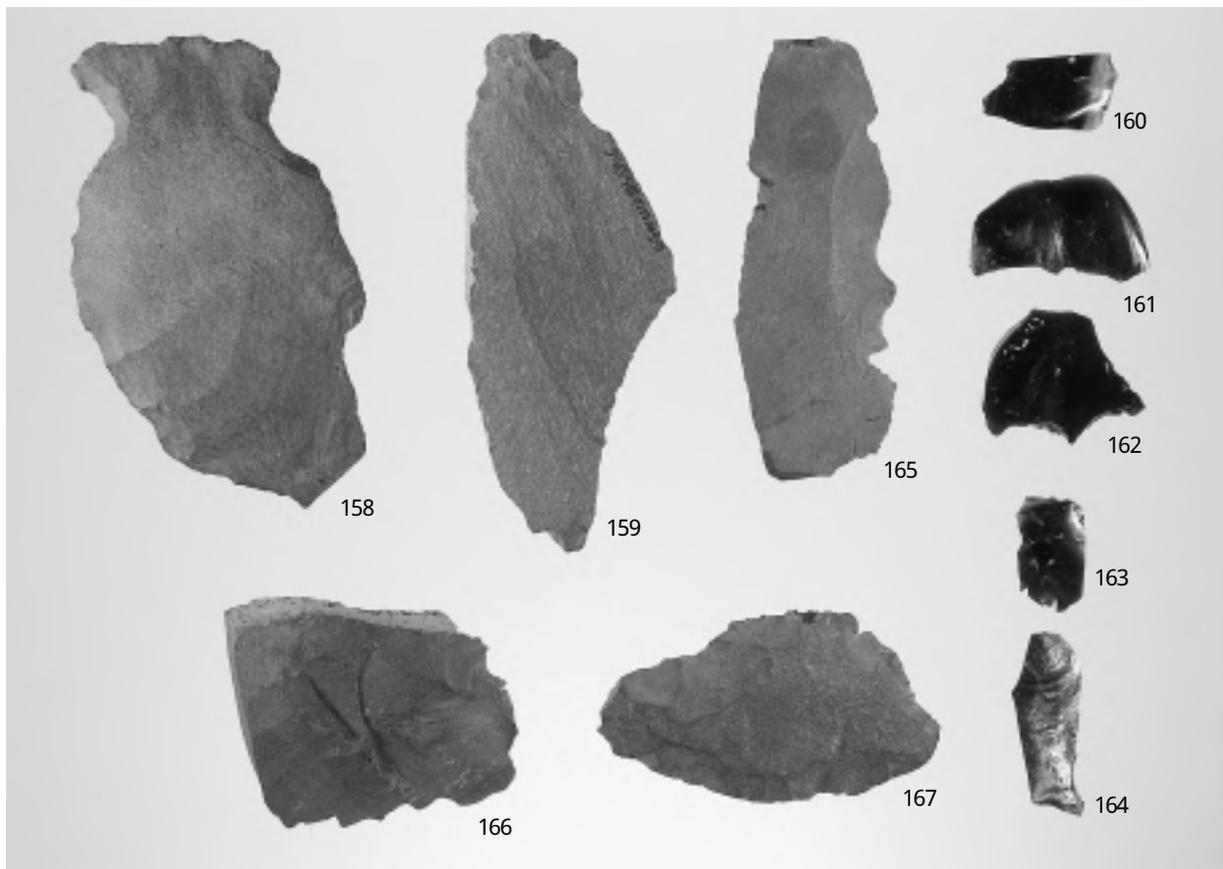
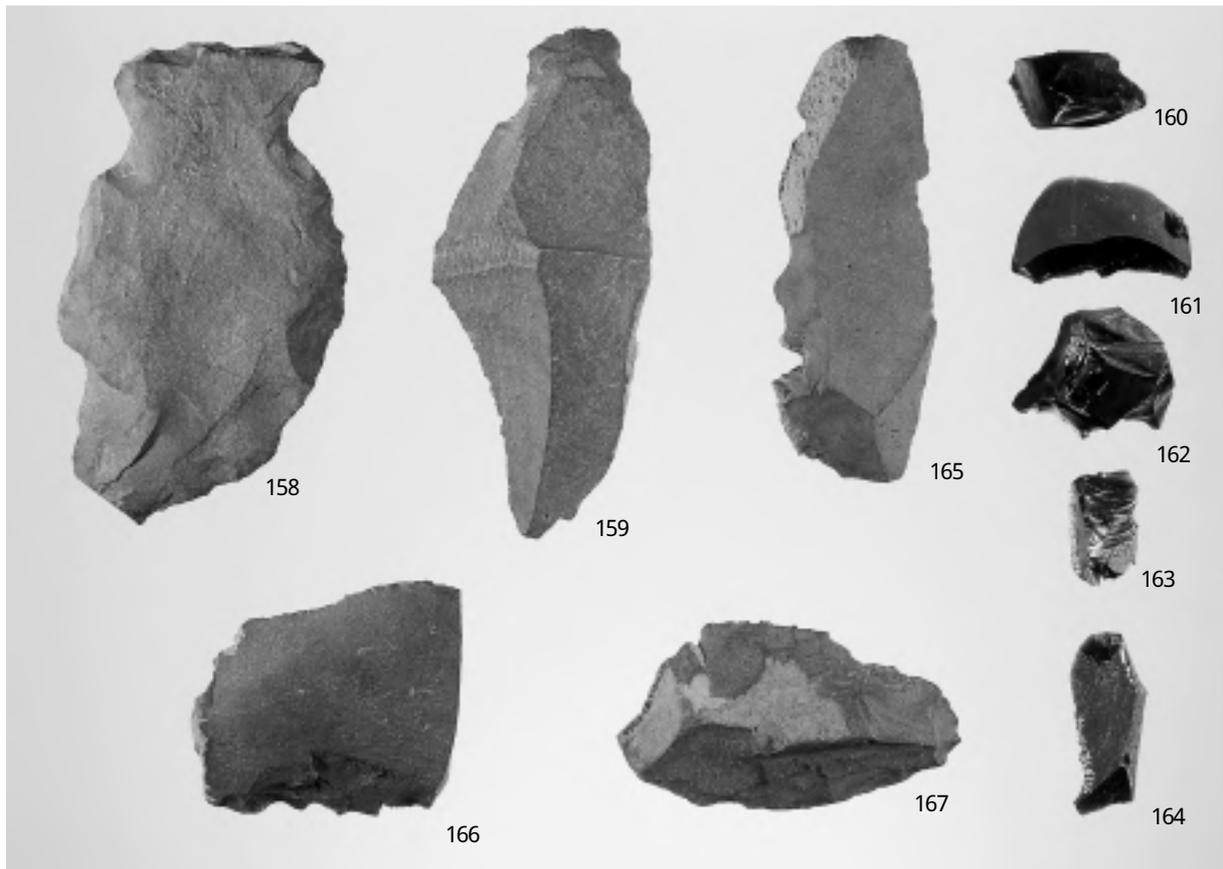
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



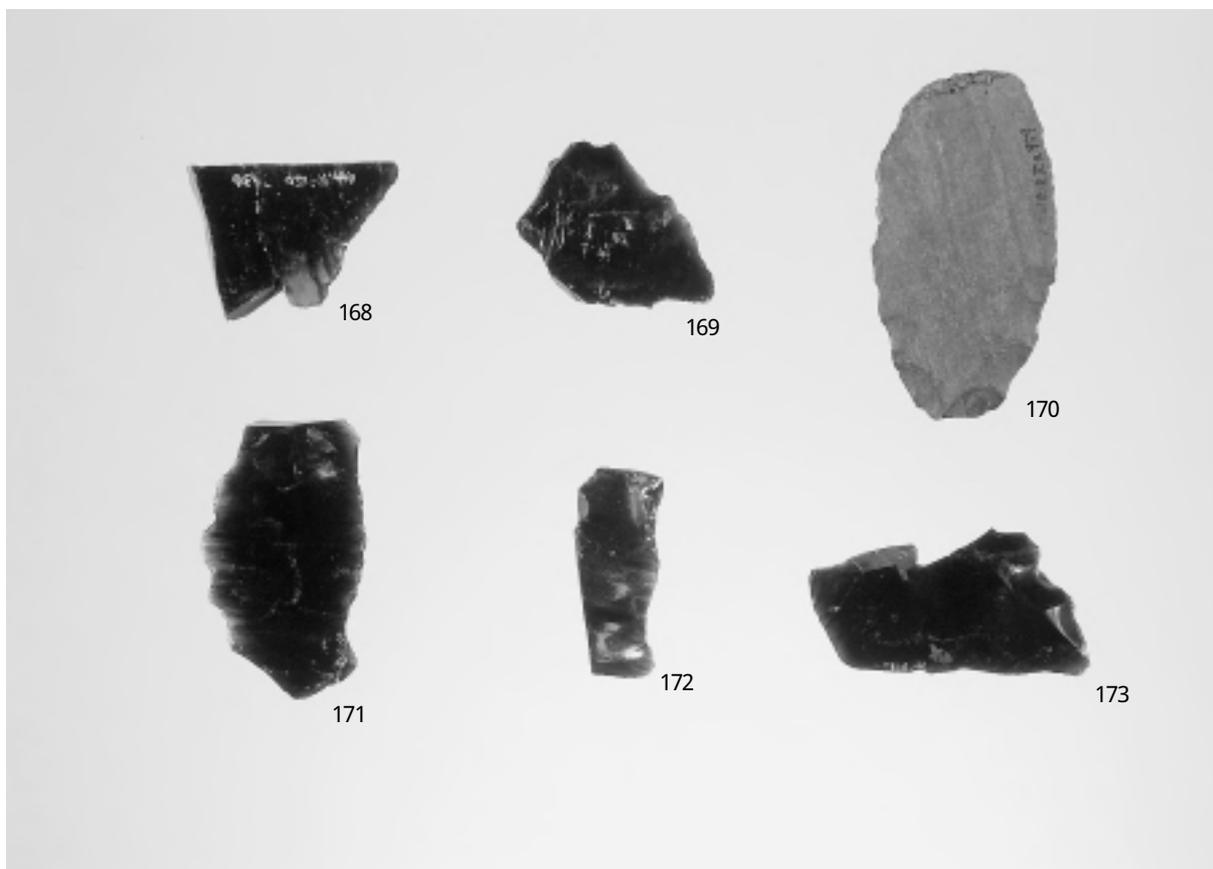
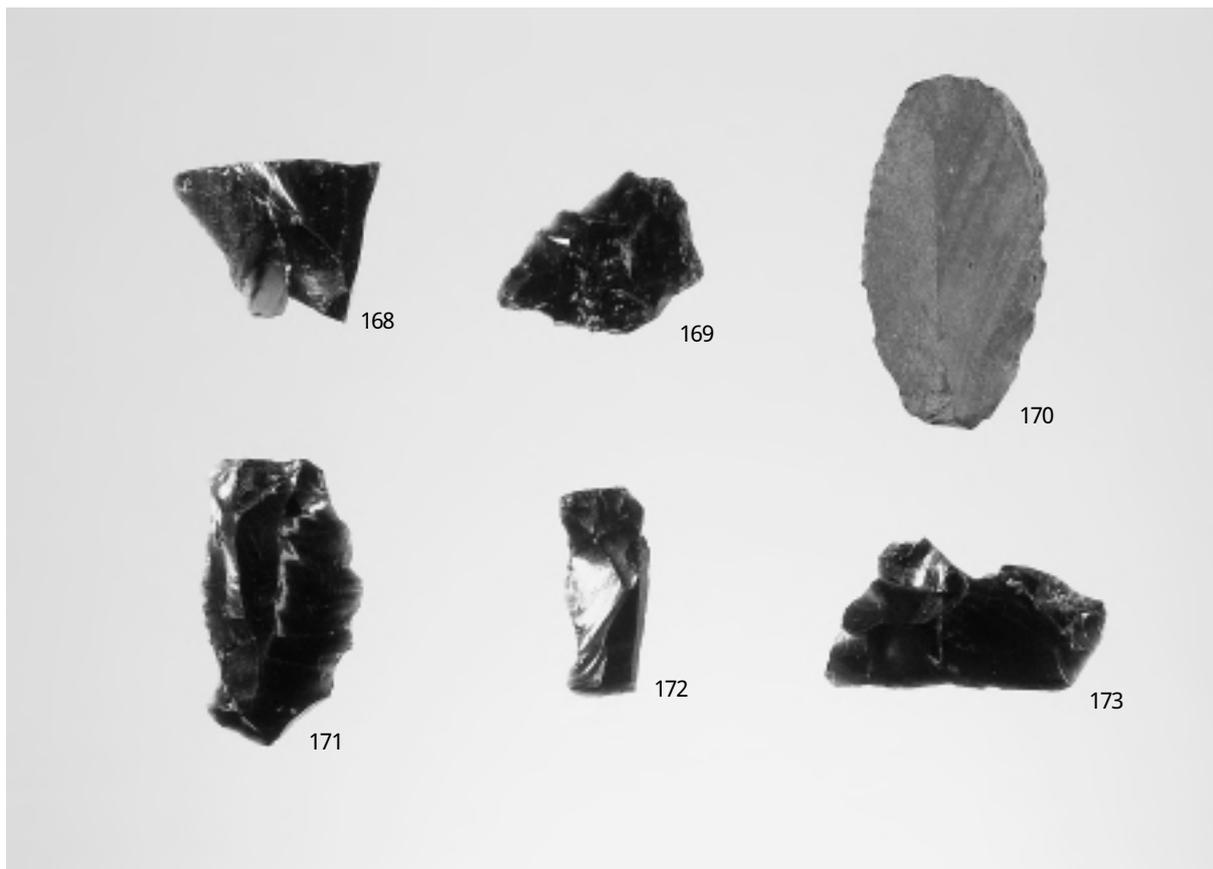
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区）



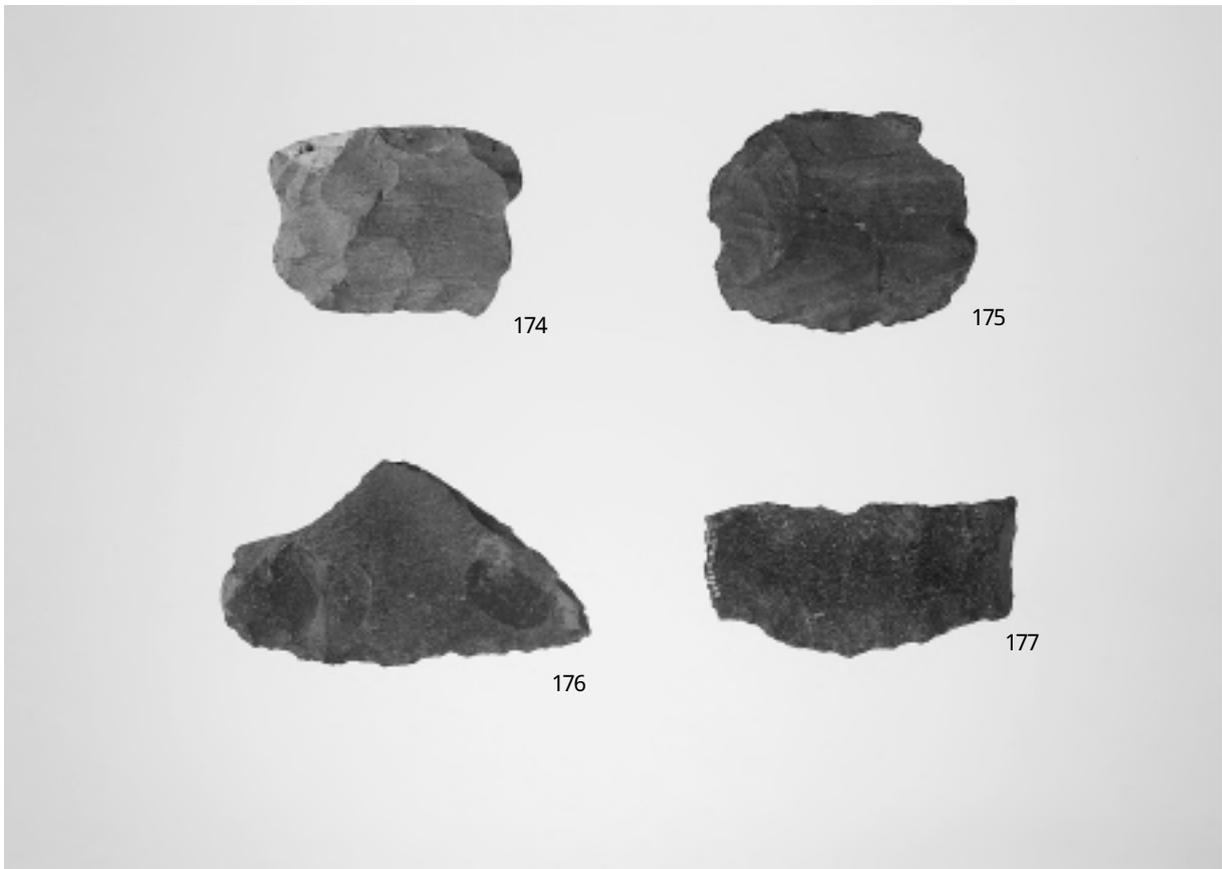
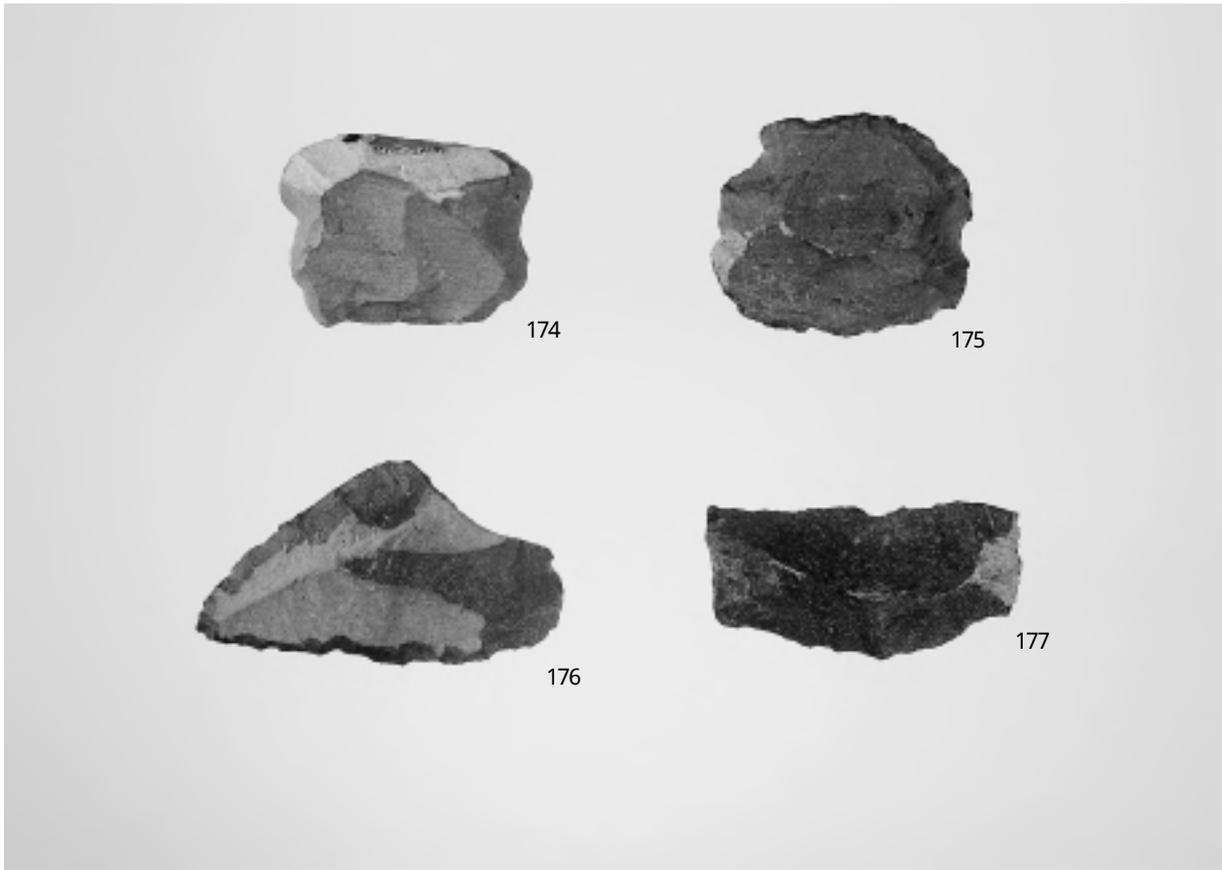
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



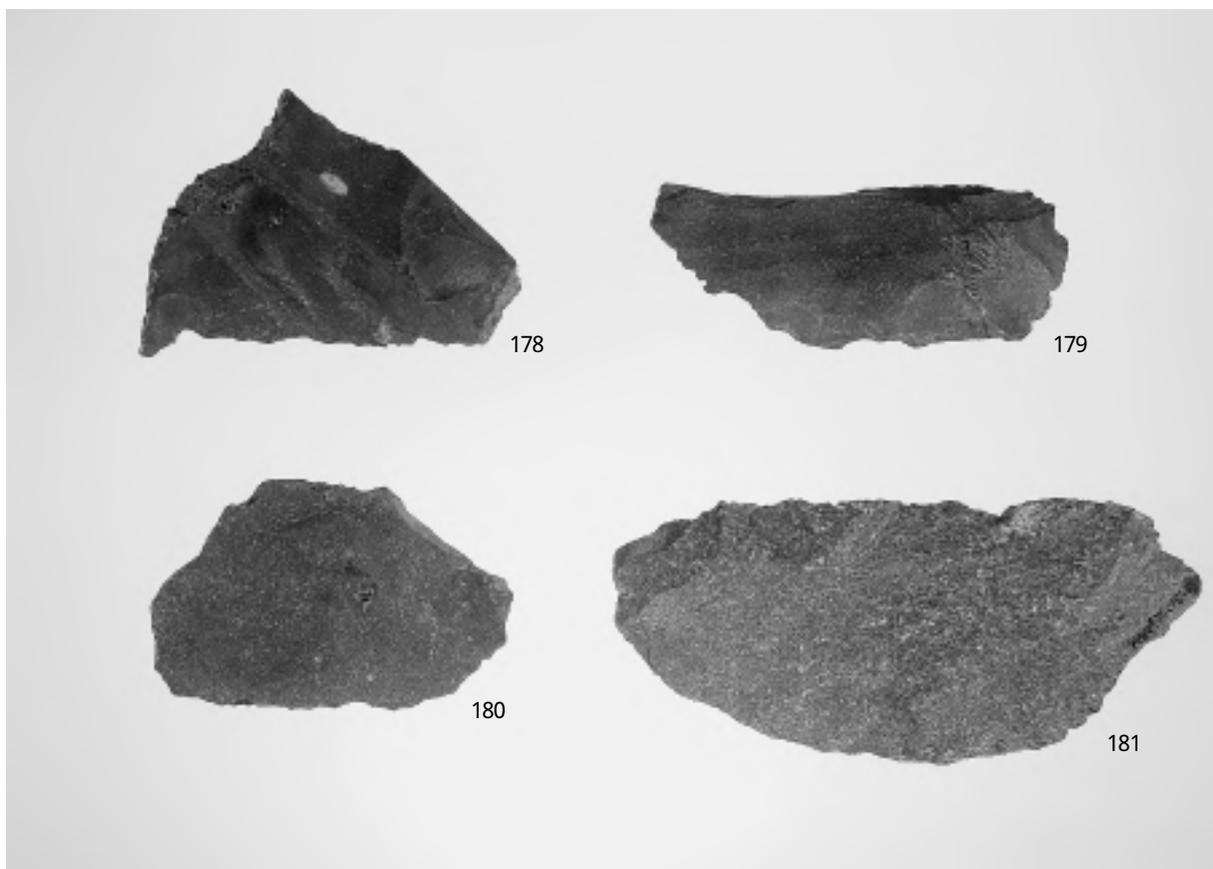
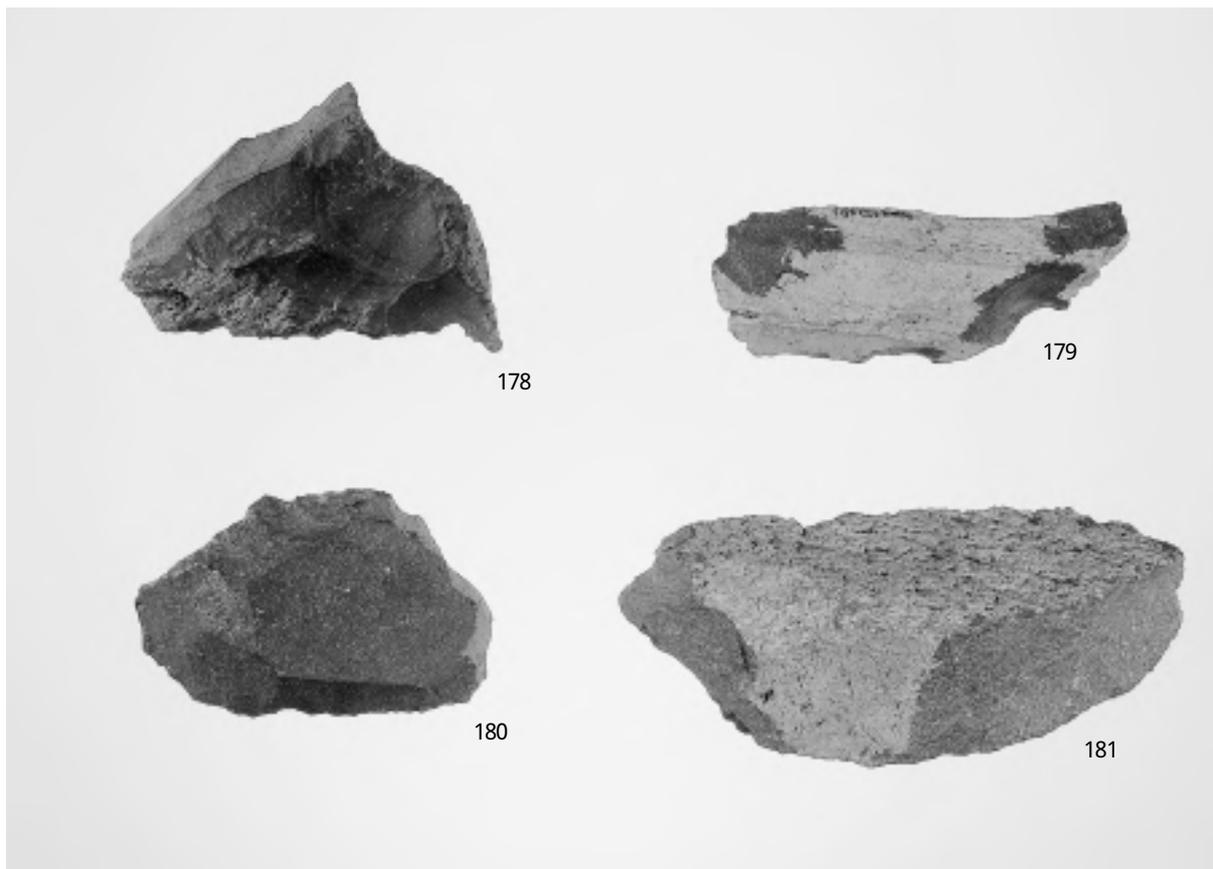
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



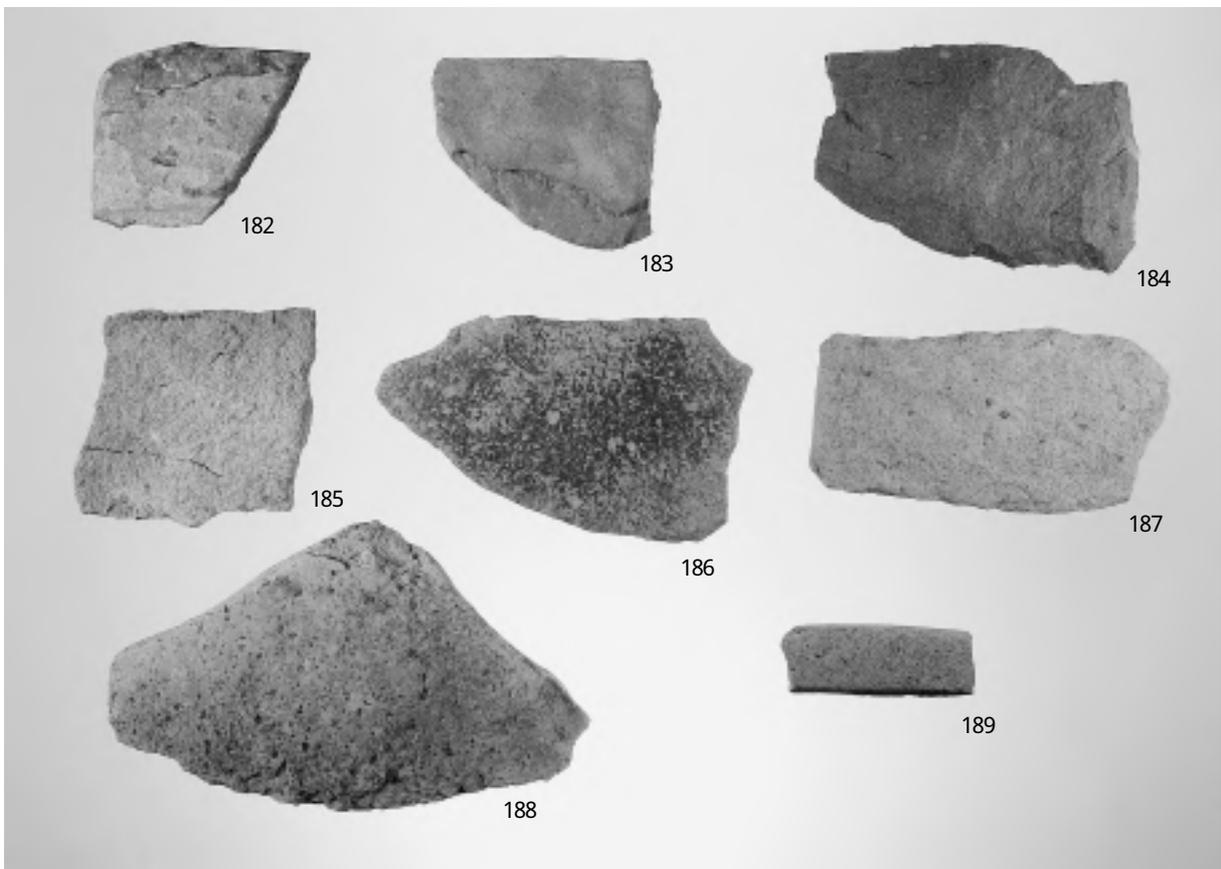
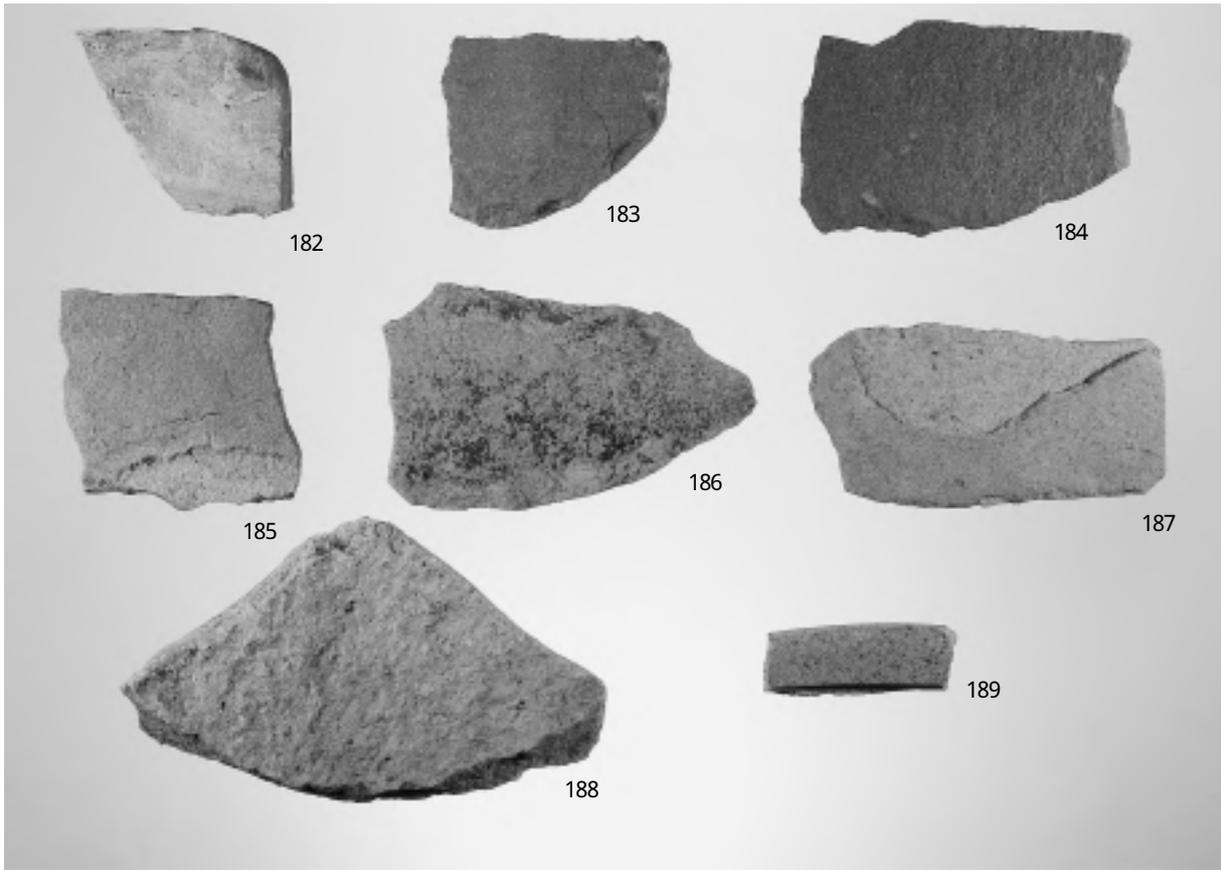
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



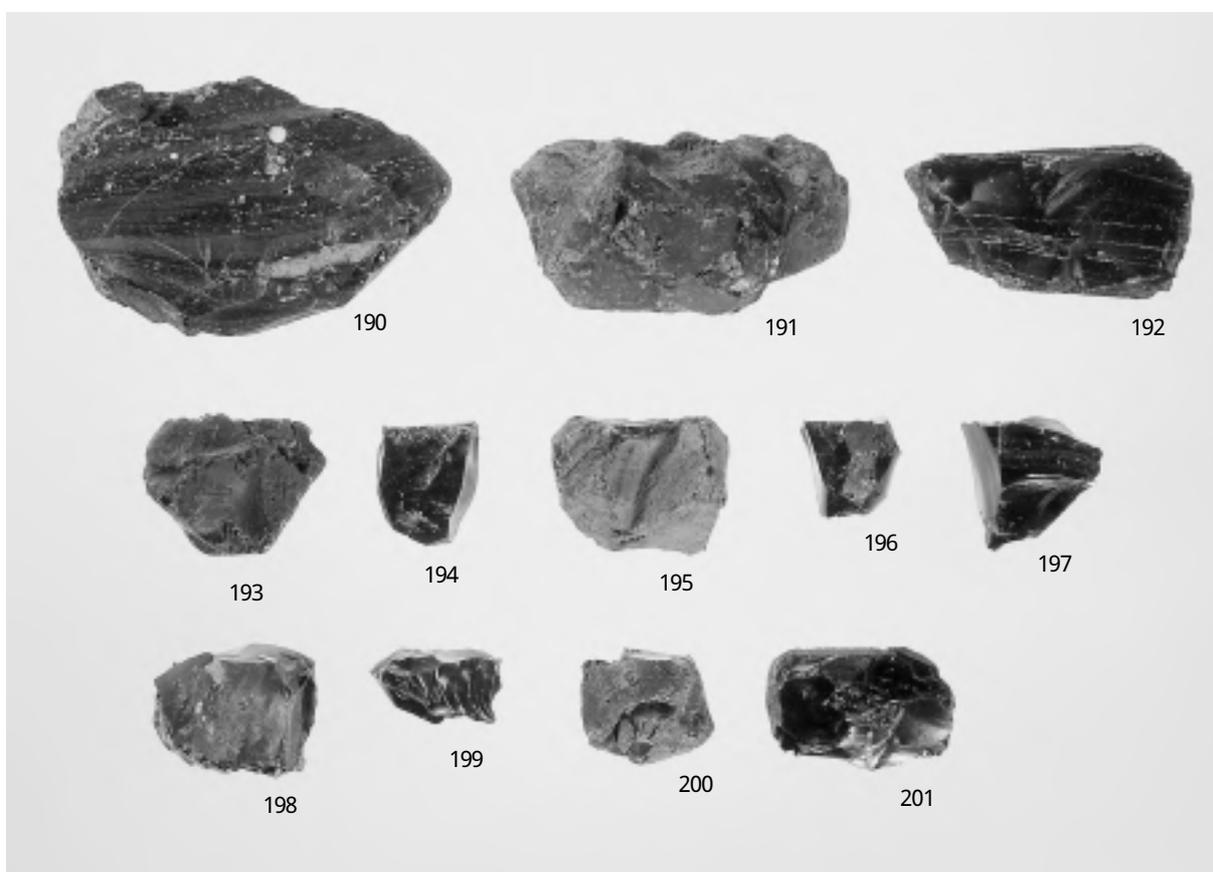
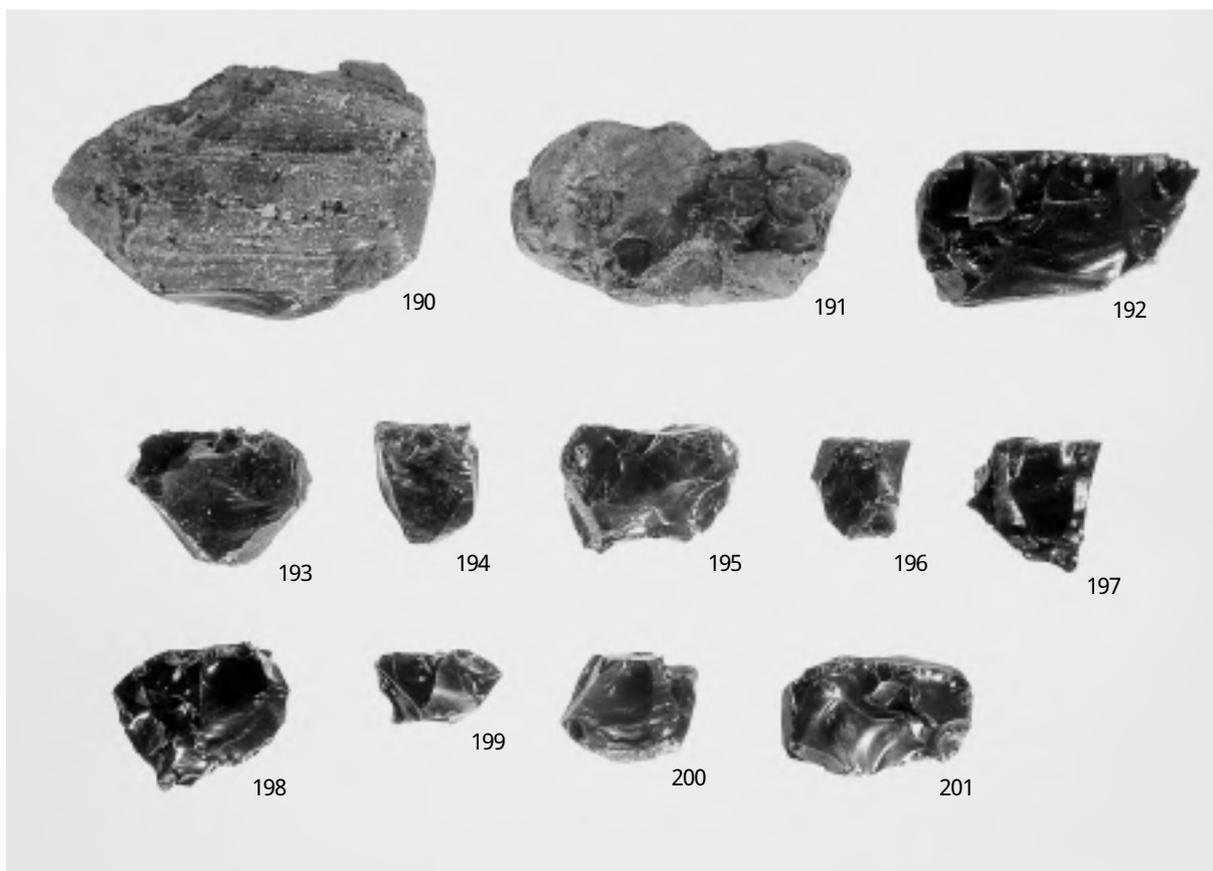
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



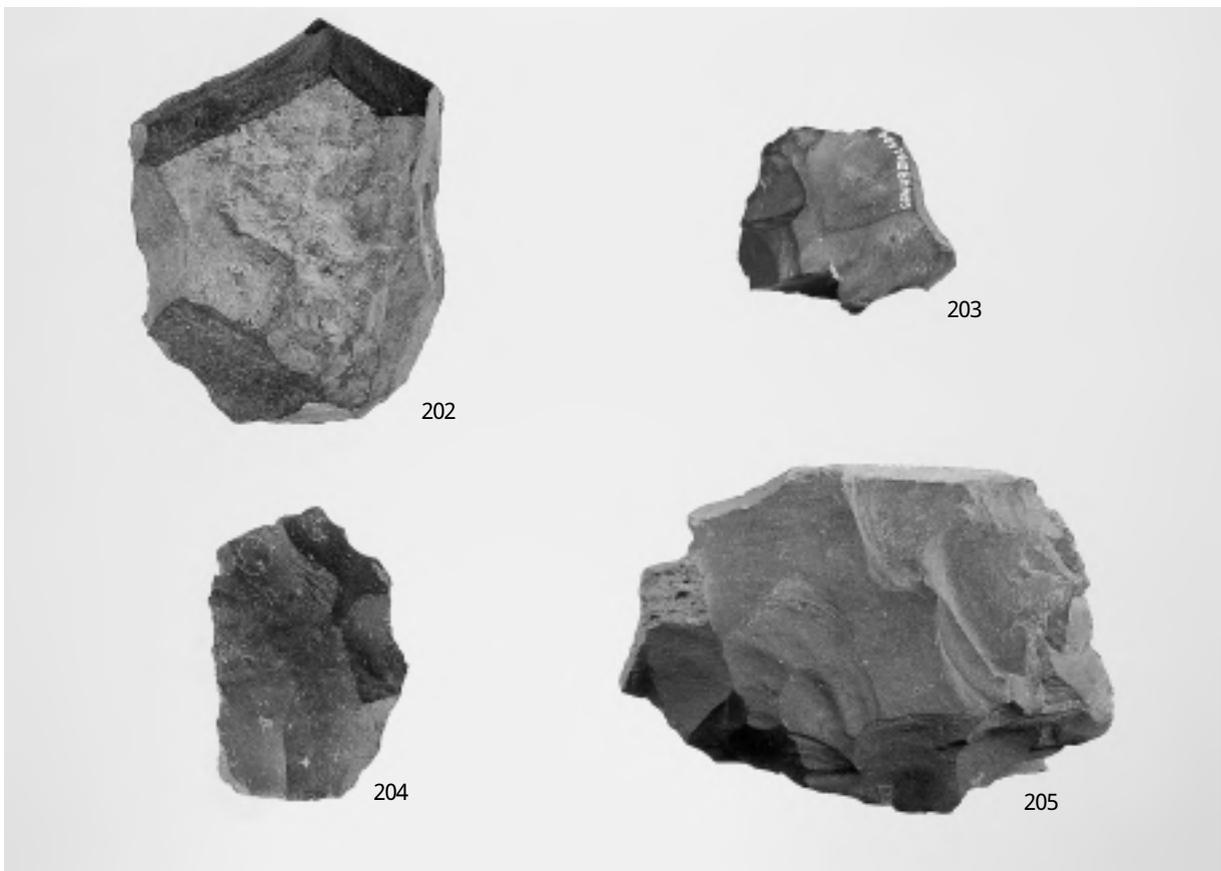
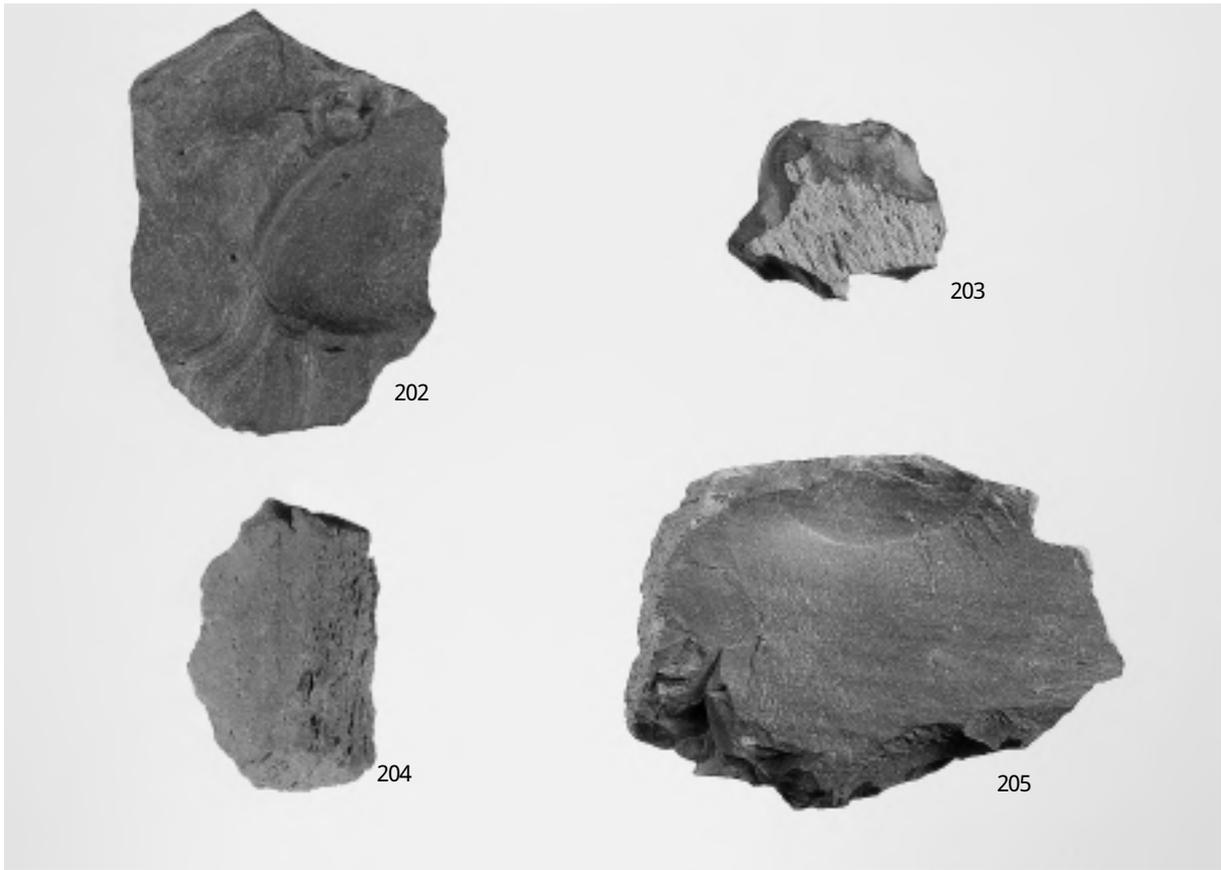
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



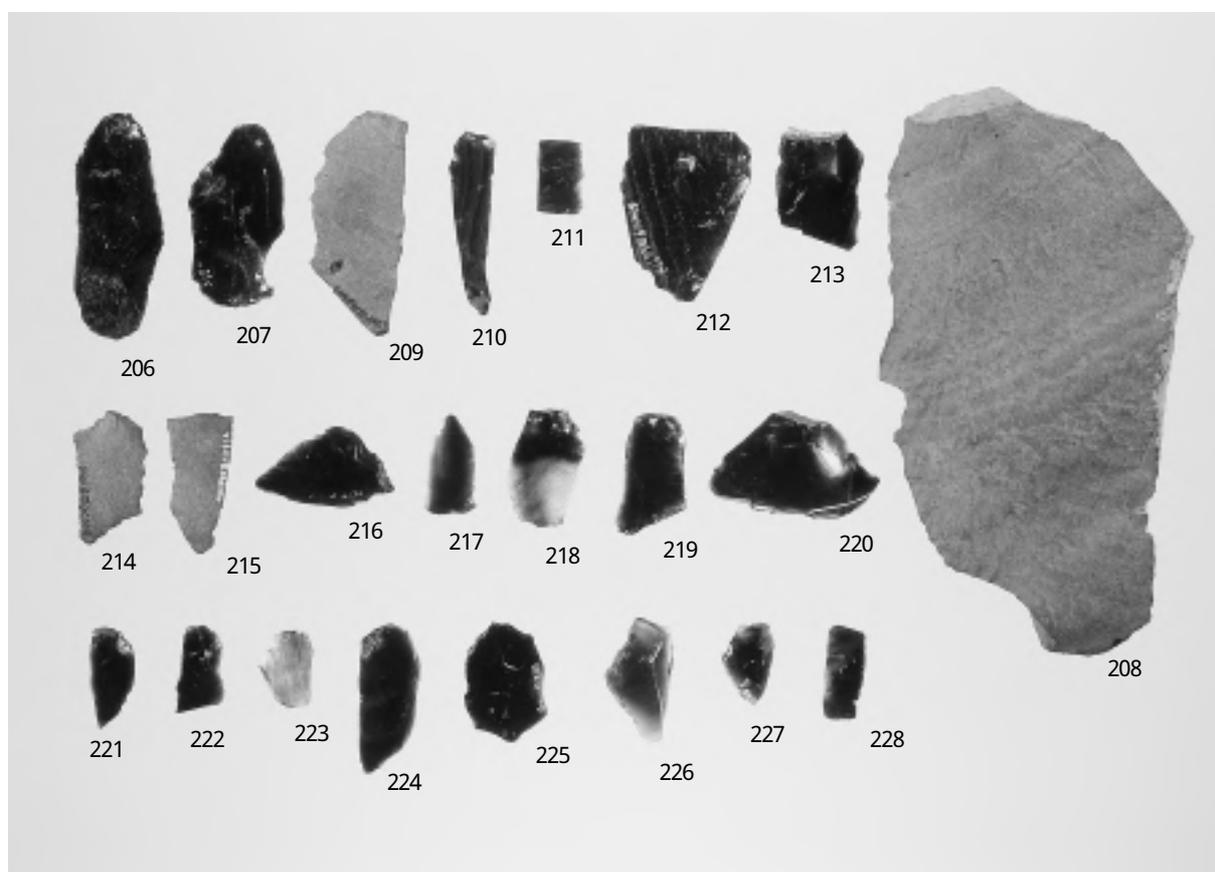
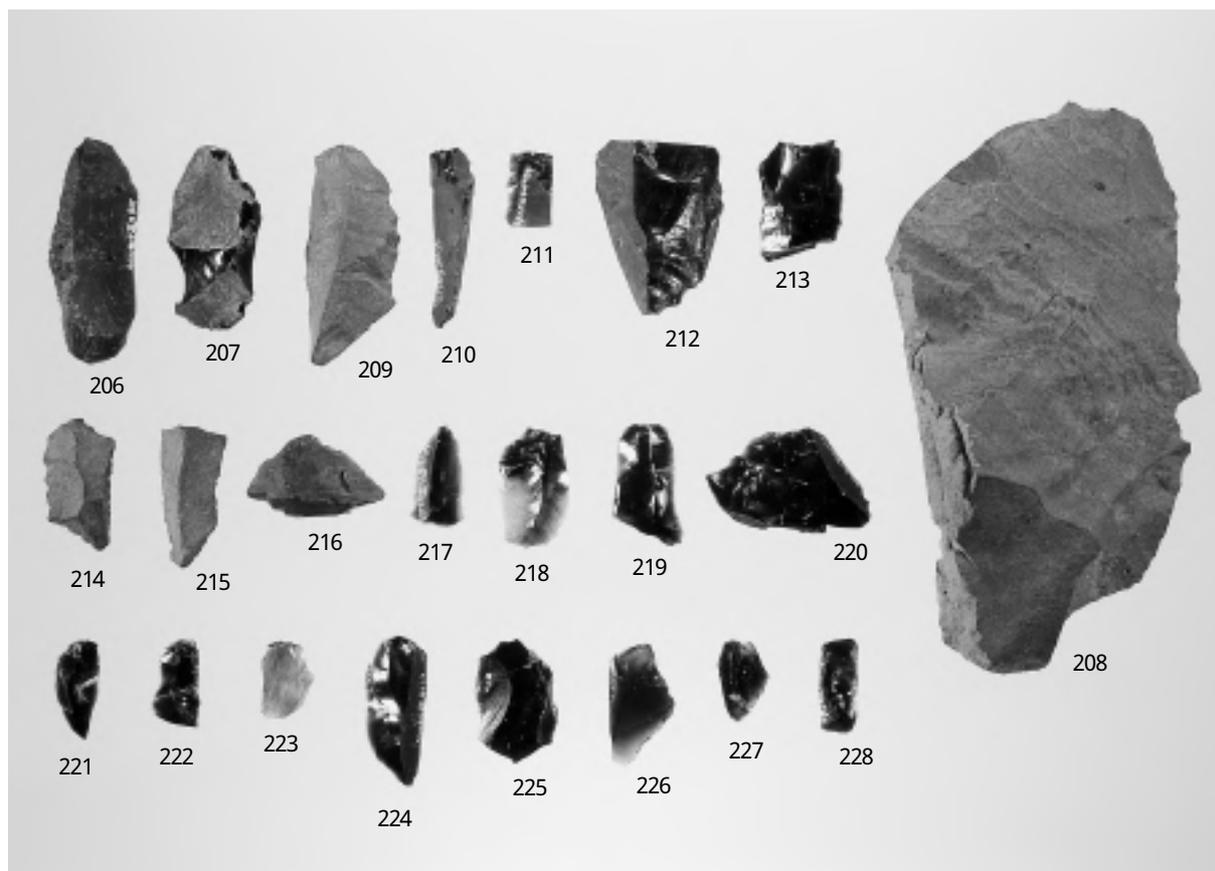
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



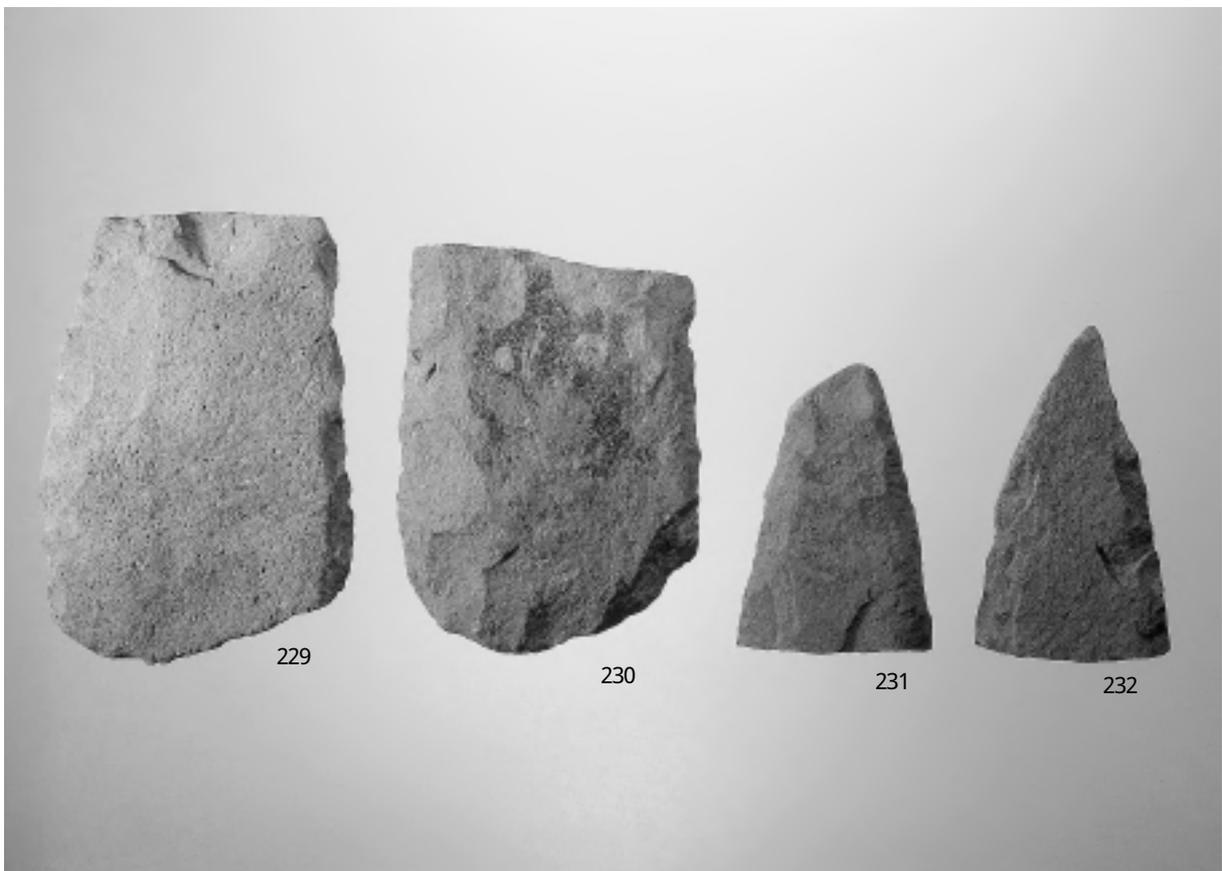
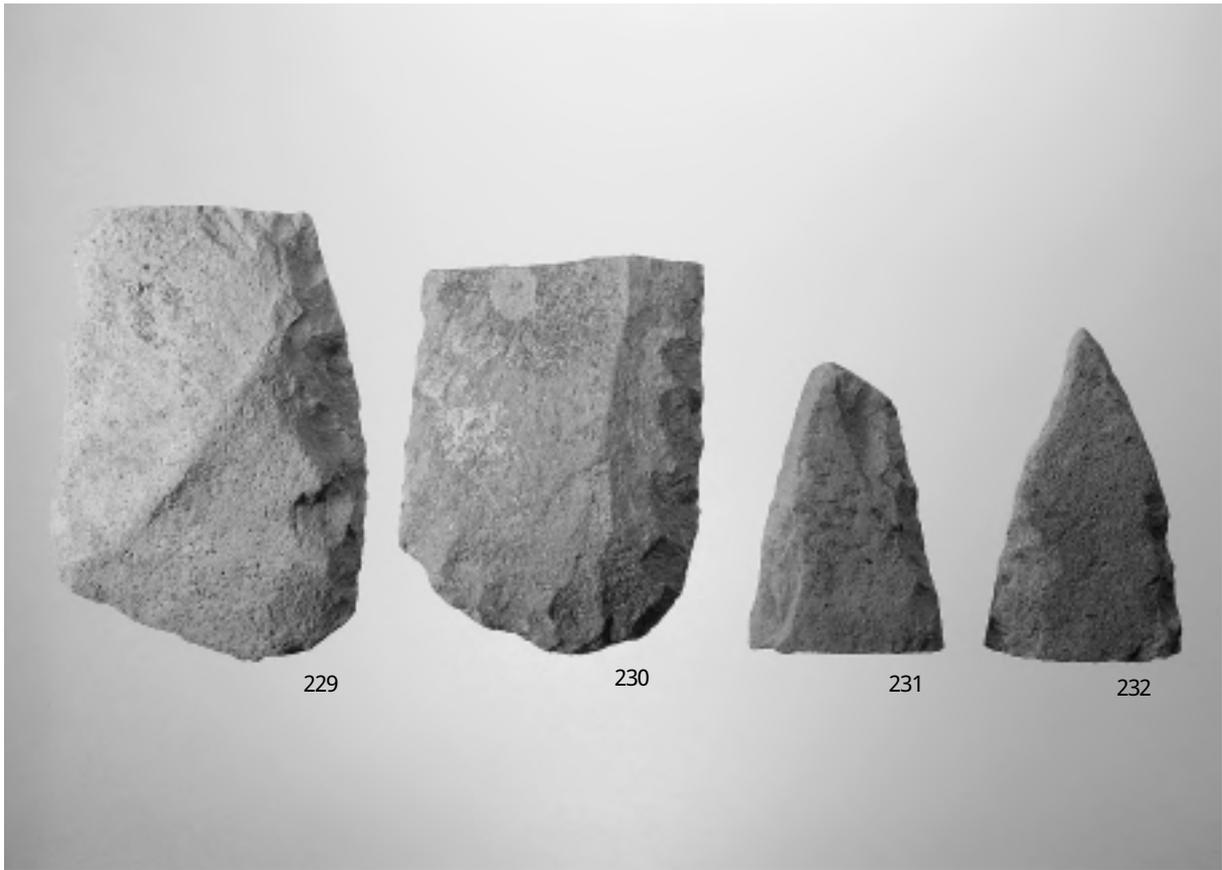
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



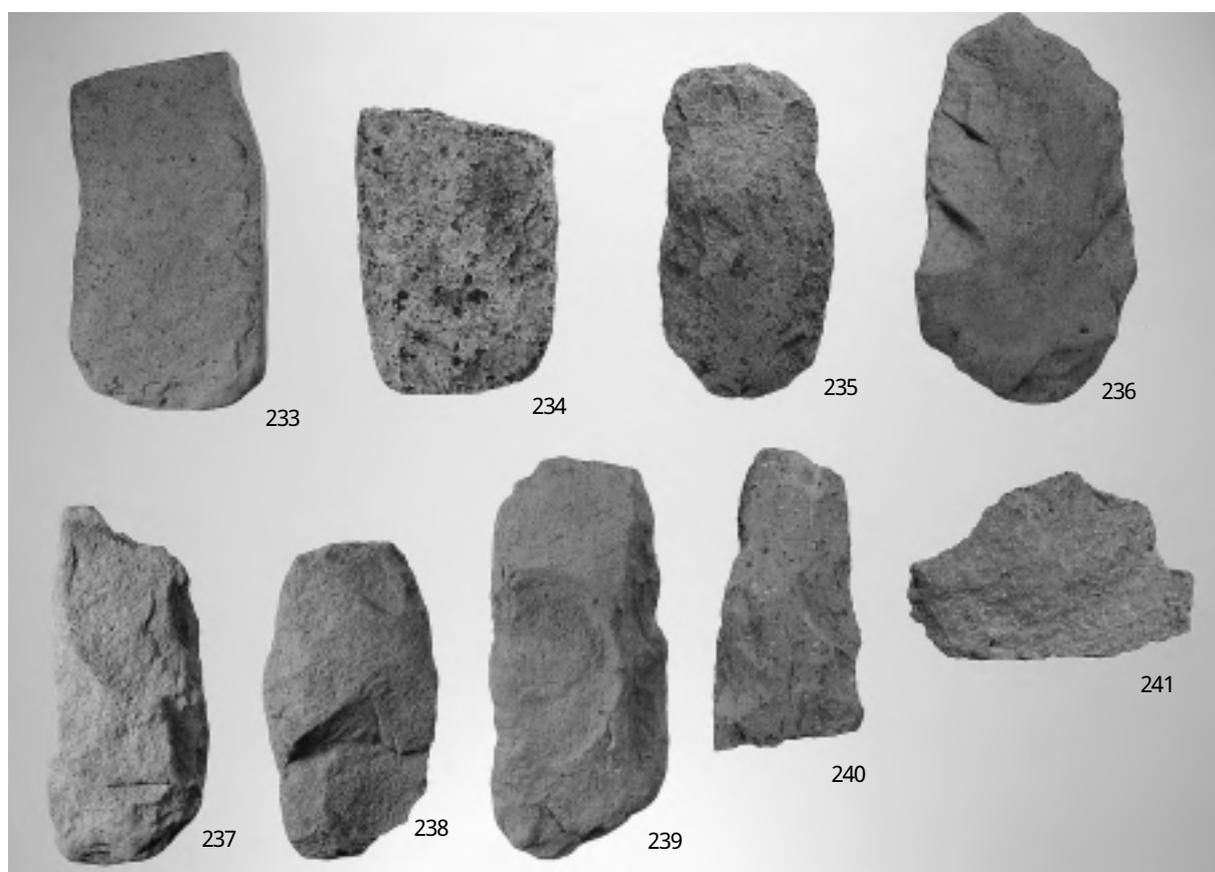
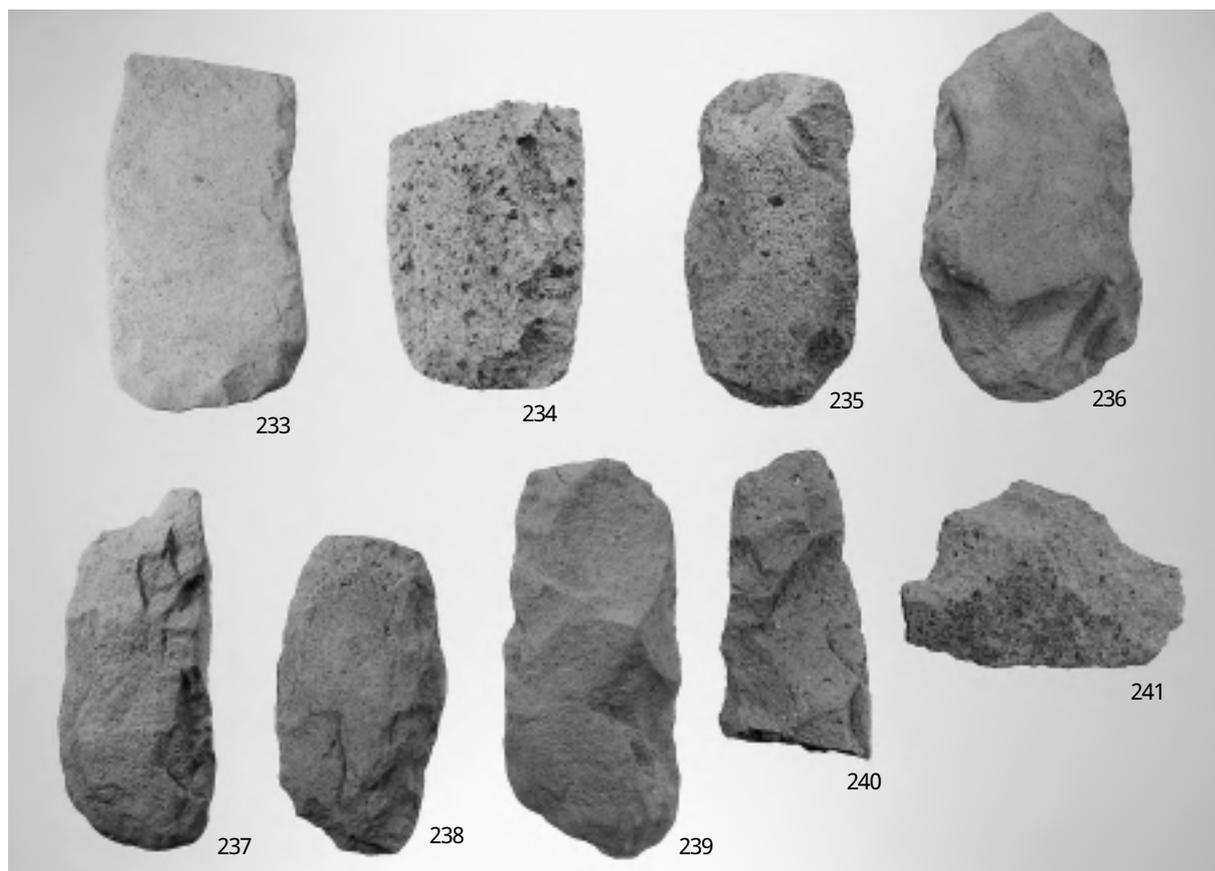
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



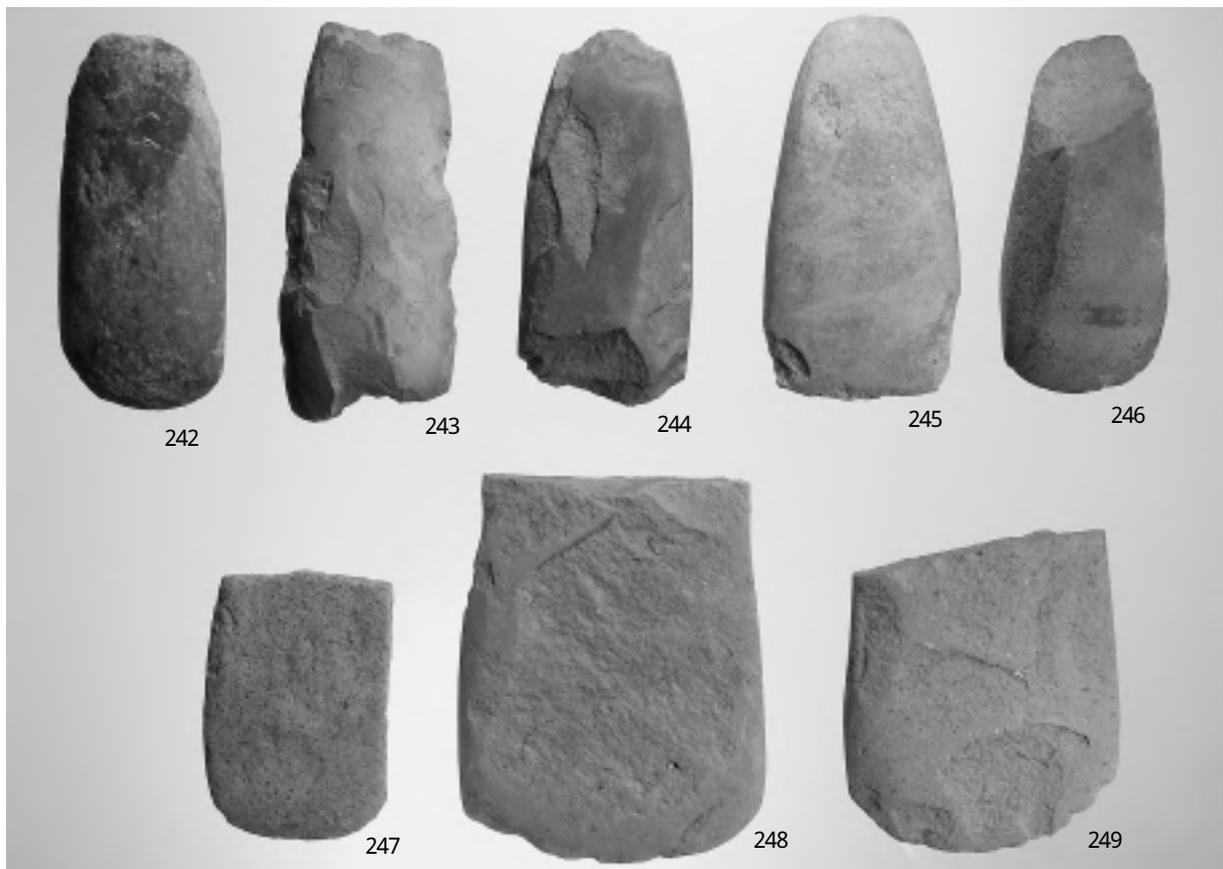
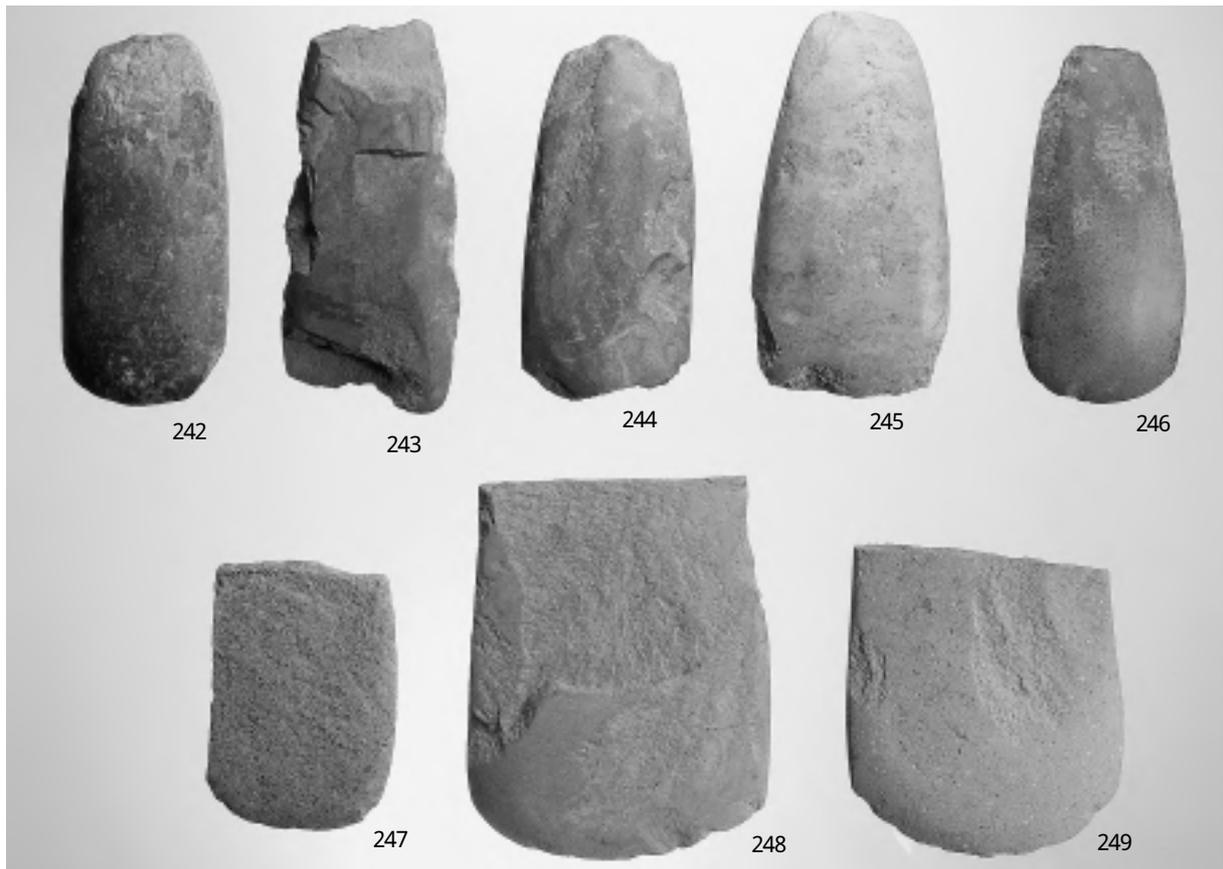
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



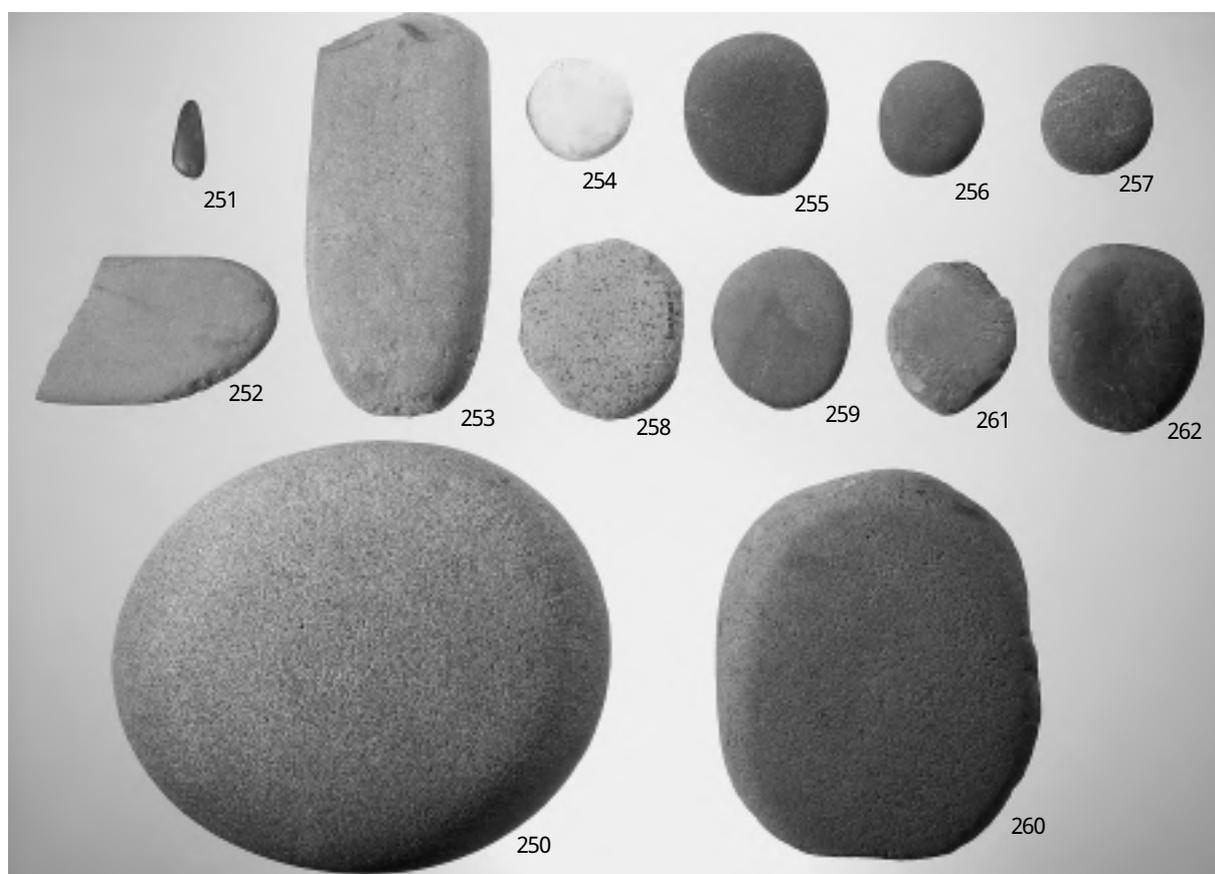
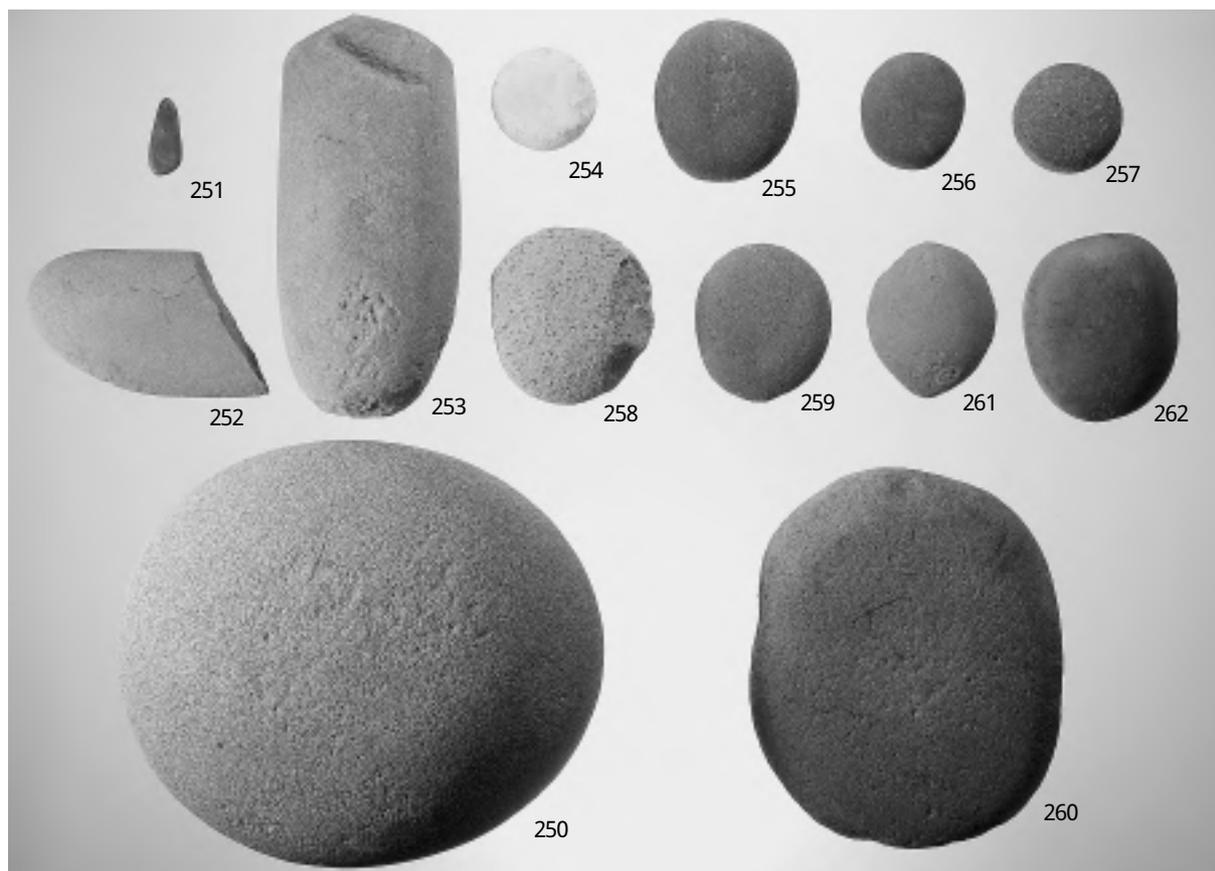
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



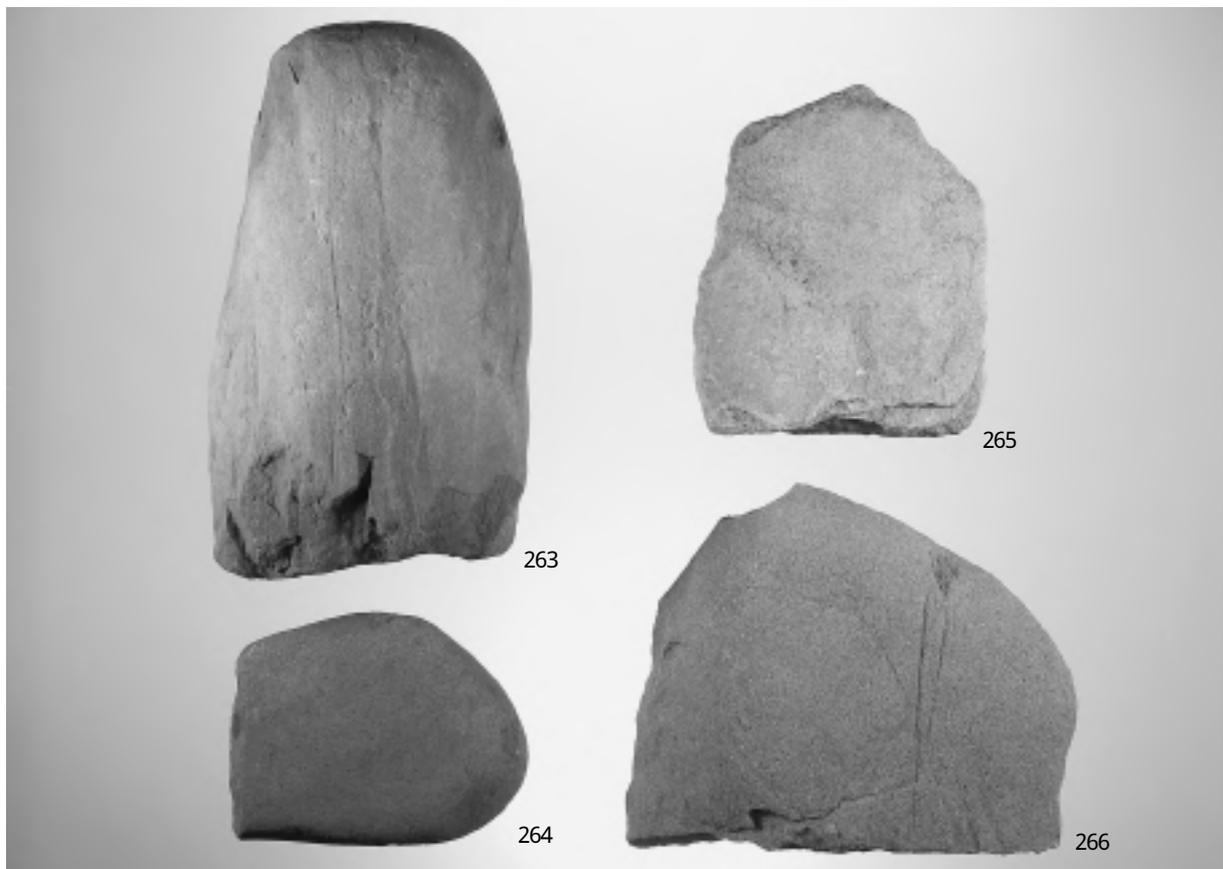
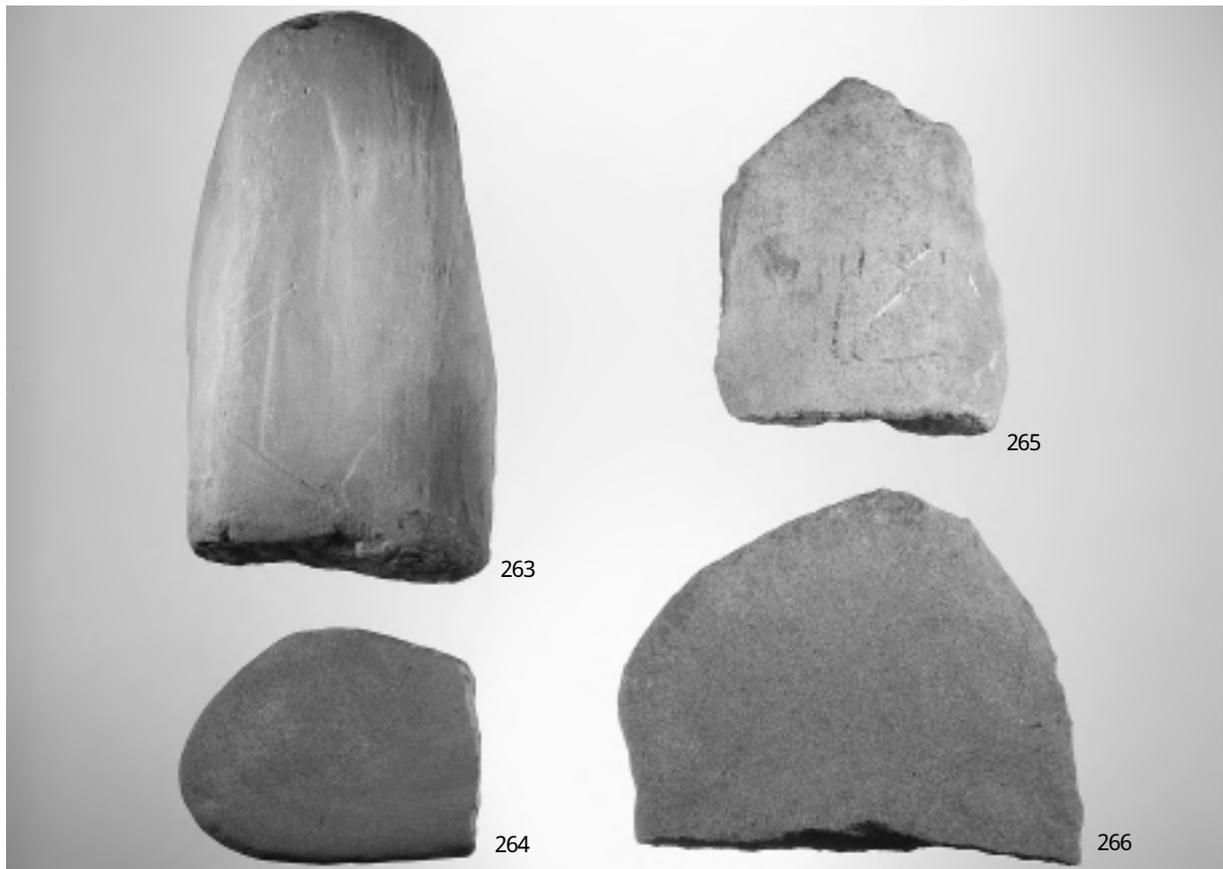
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



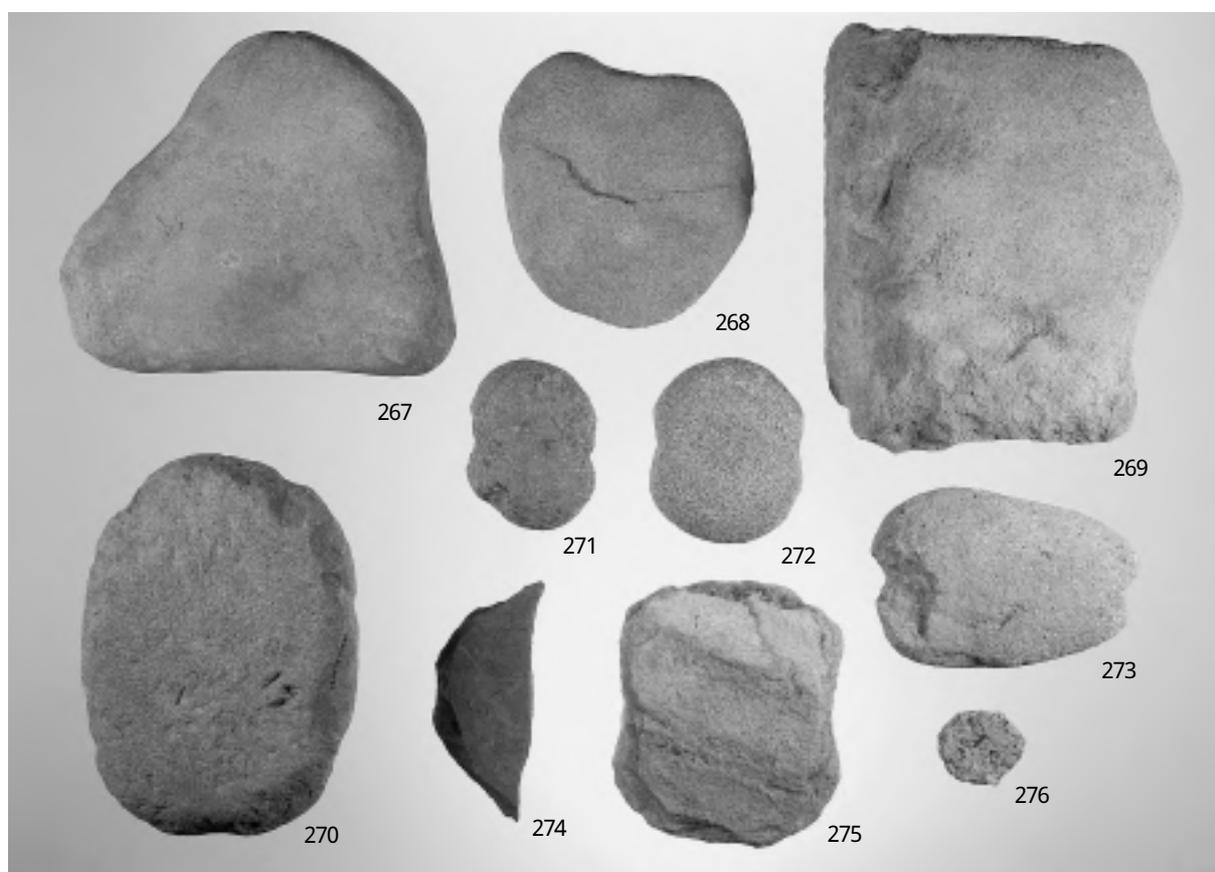
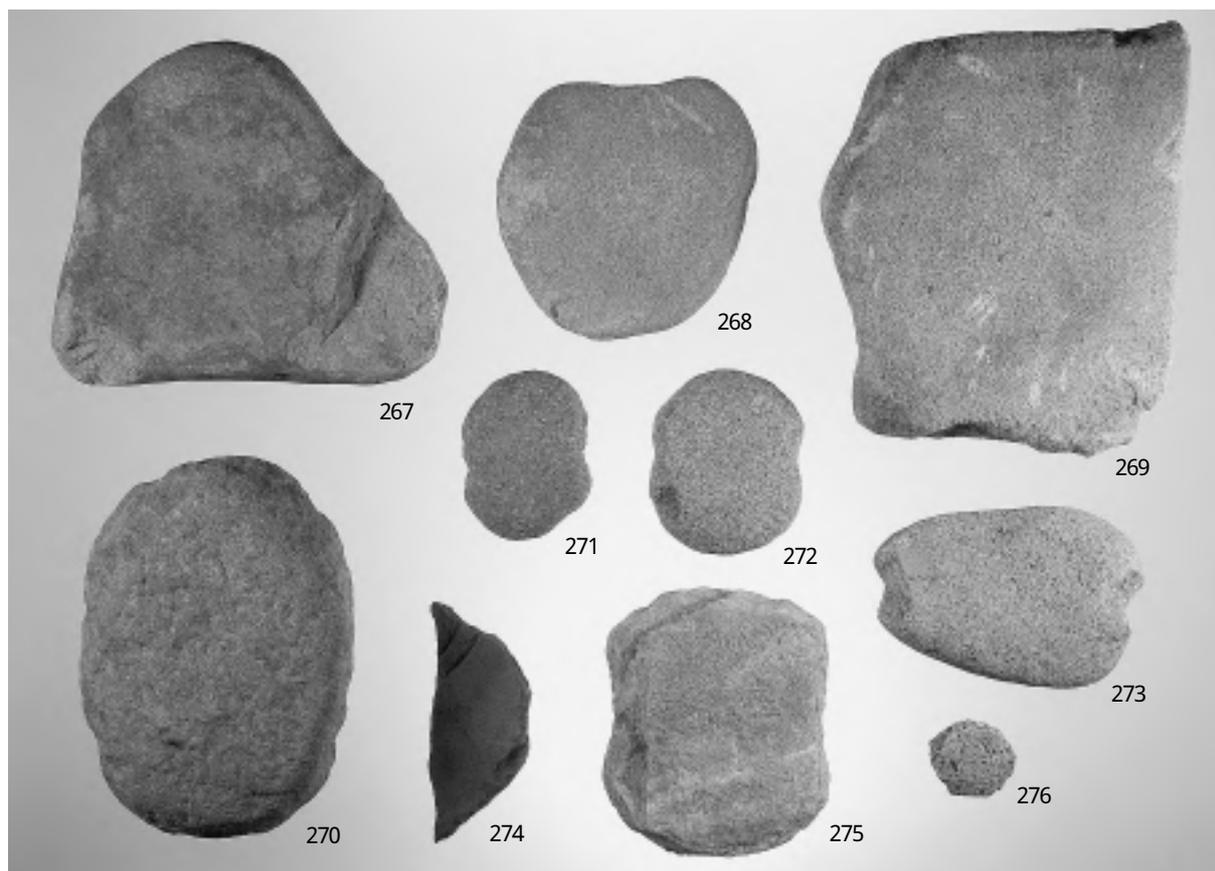
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



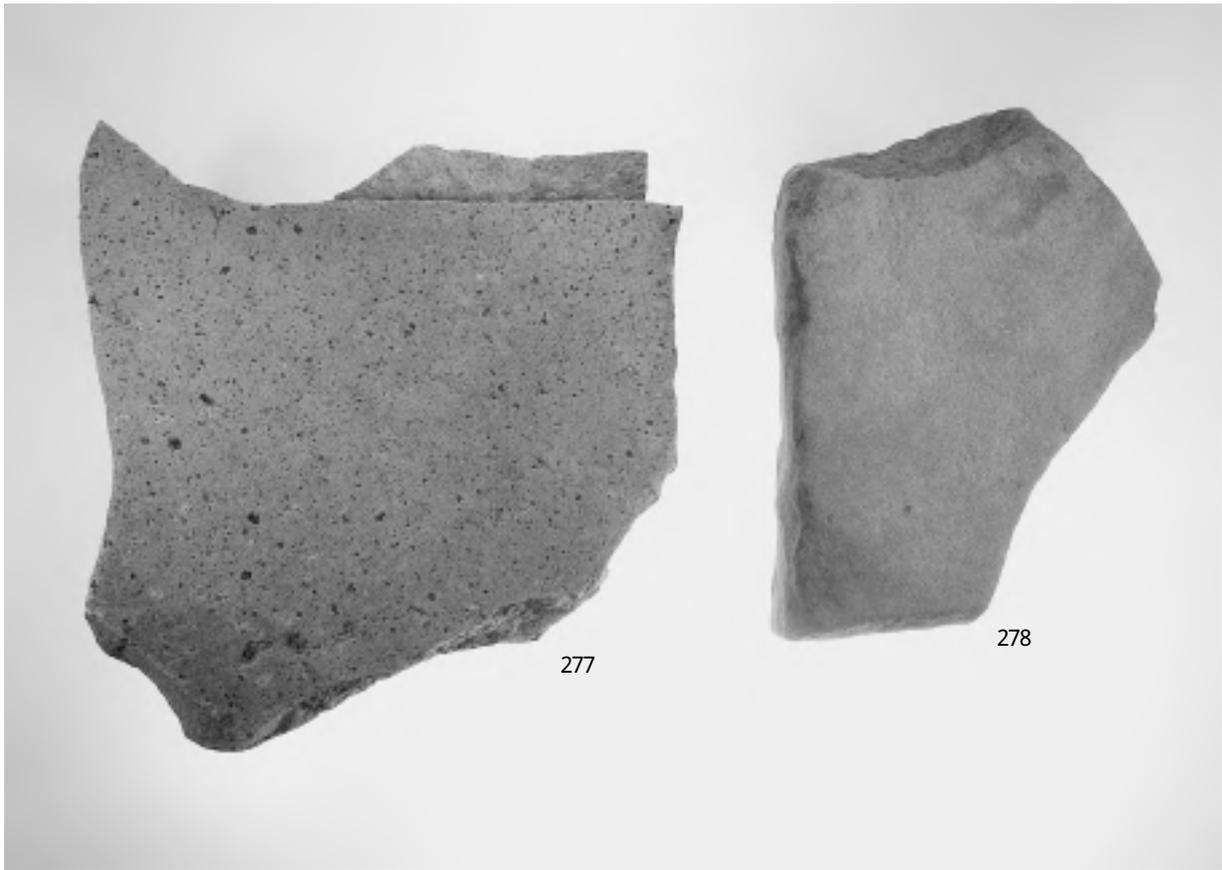
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



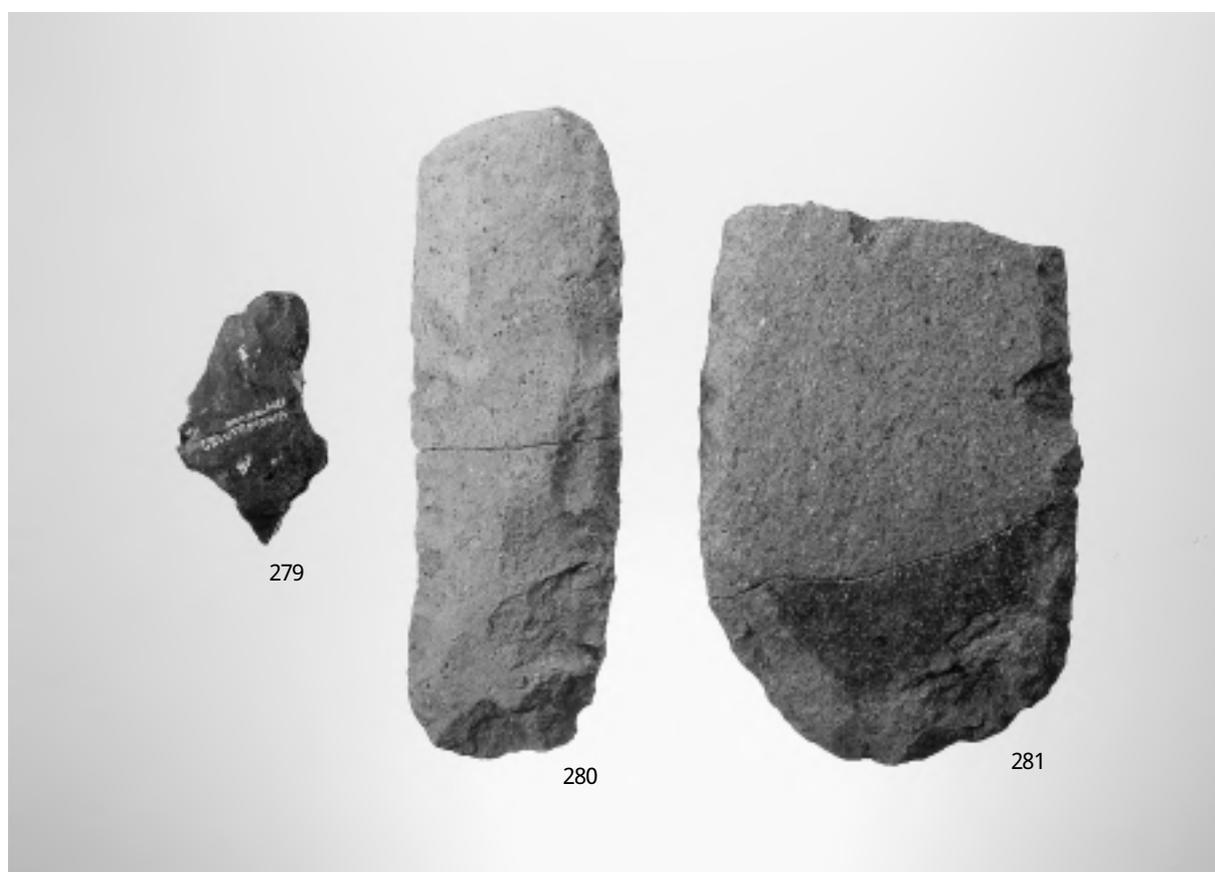
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



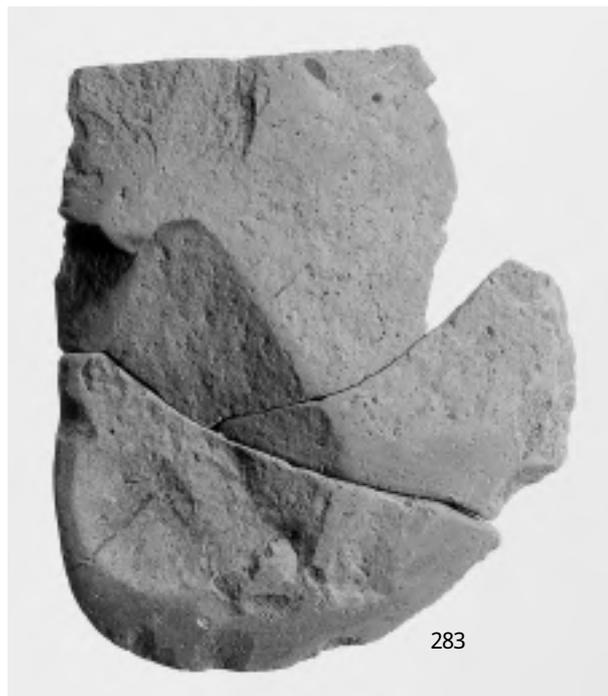
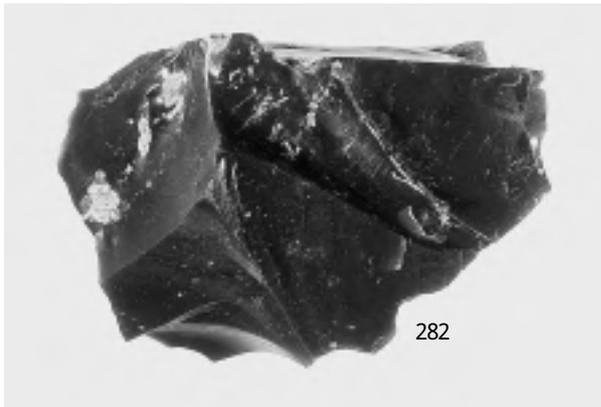
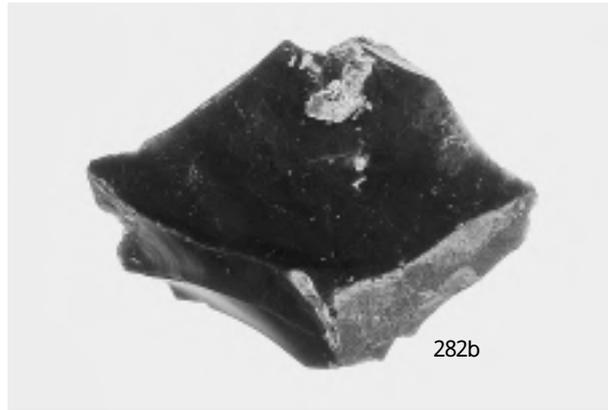
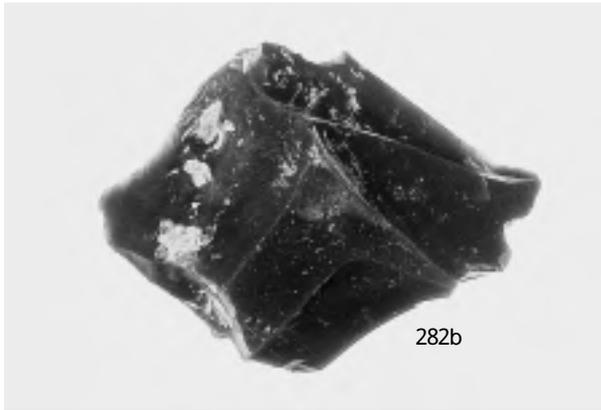
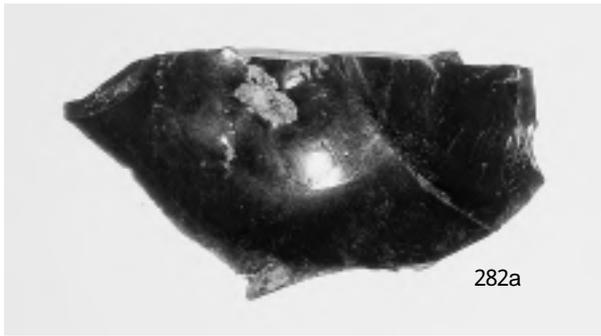
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



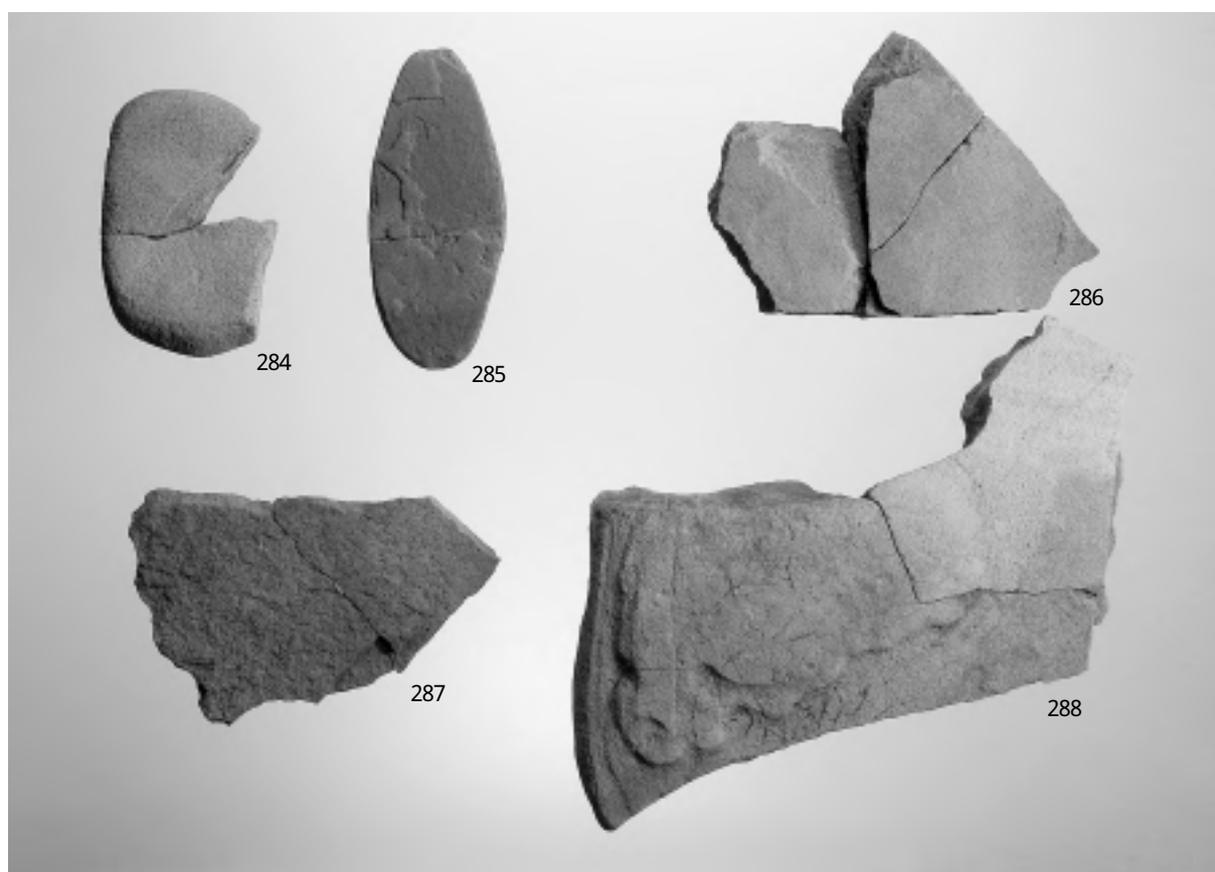
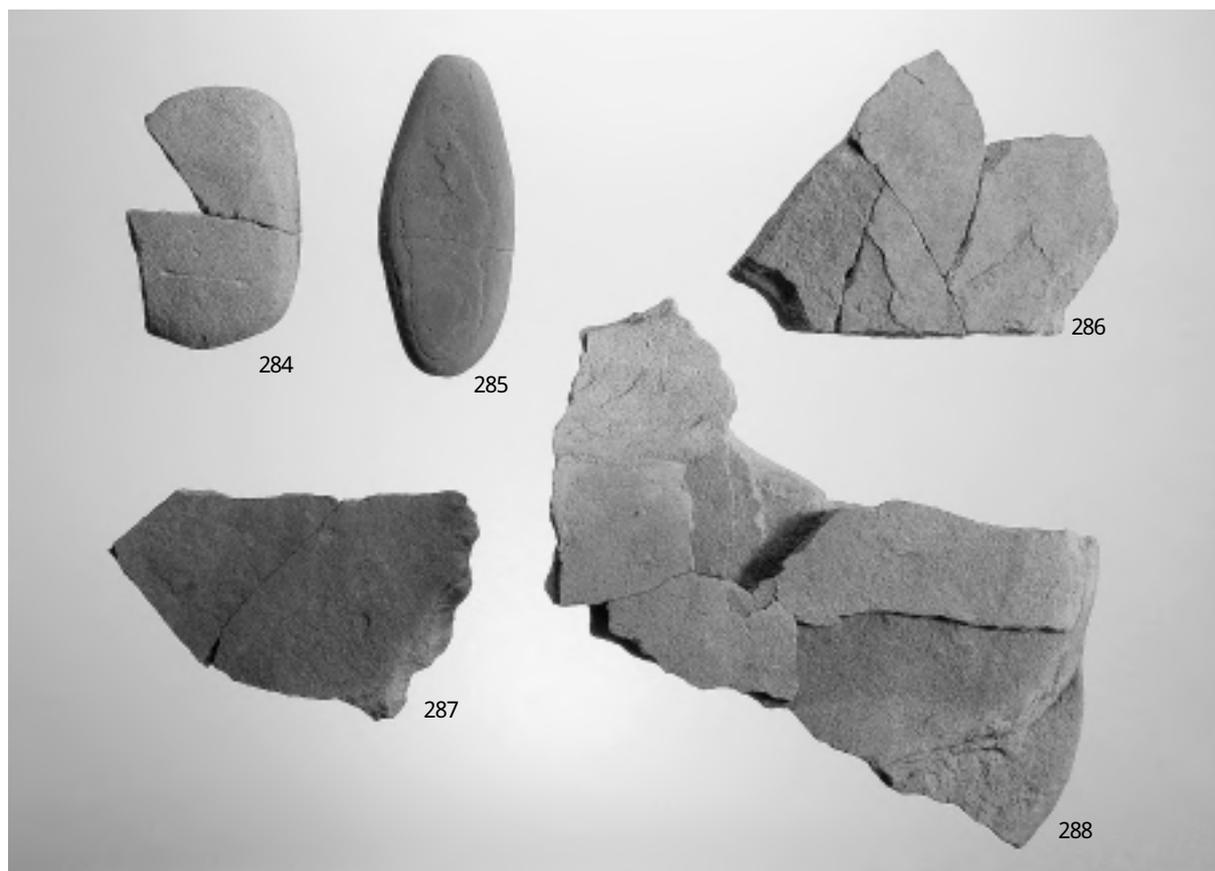
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区）



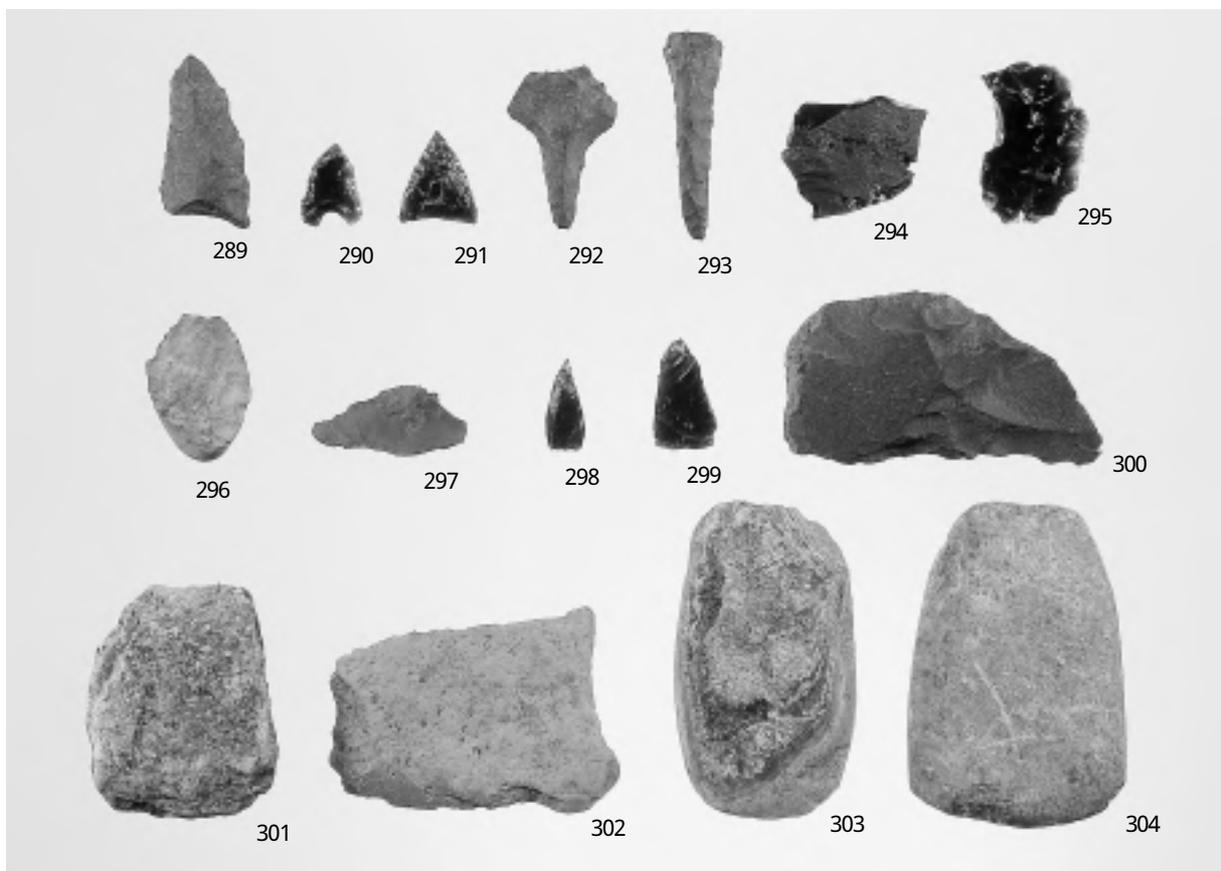
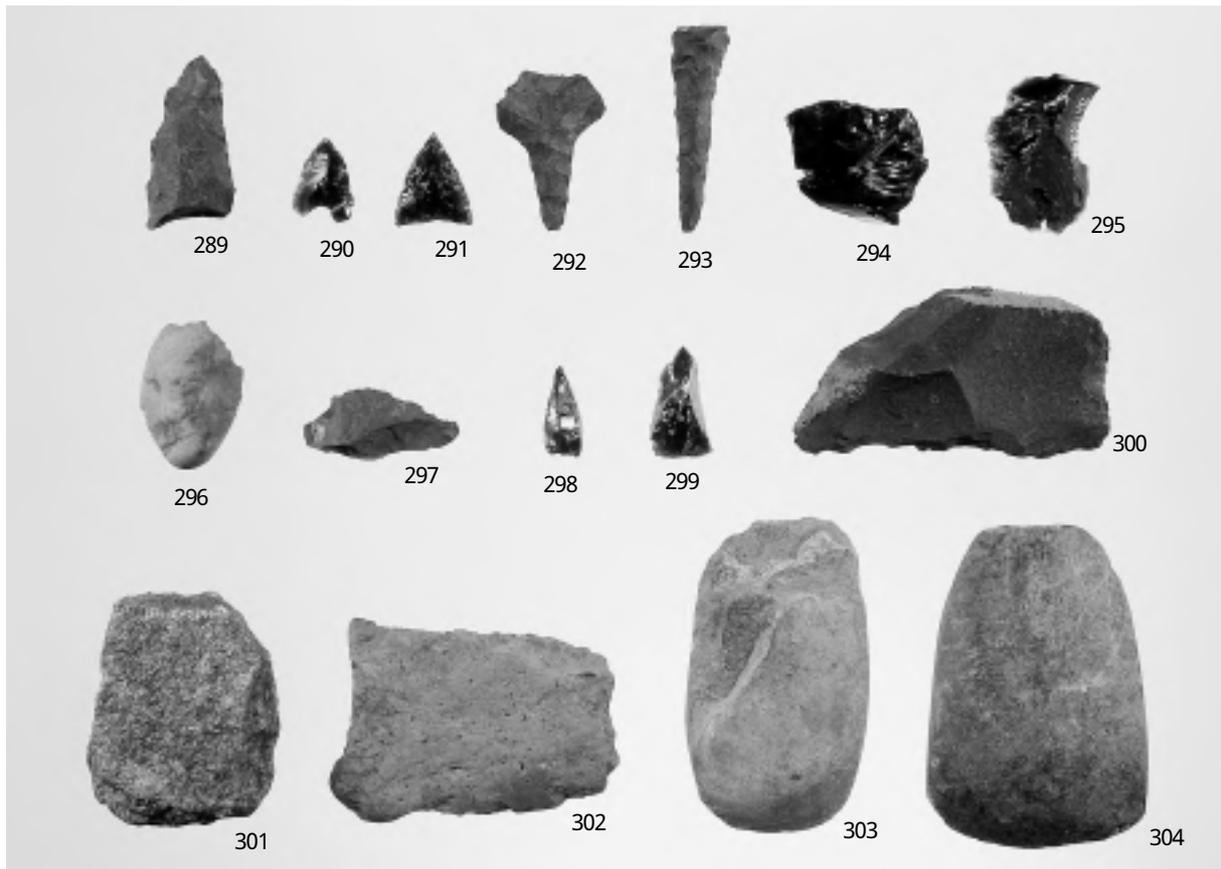
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（A・D区・接合資料）



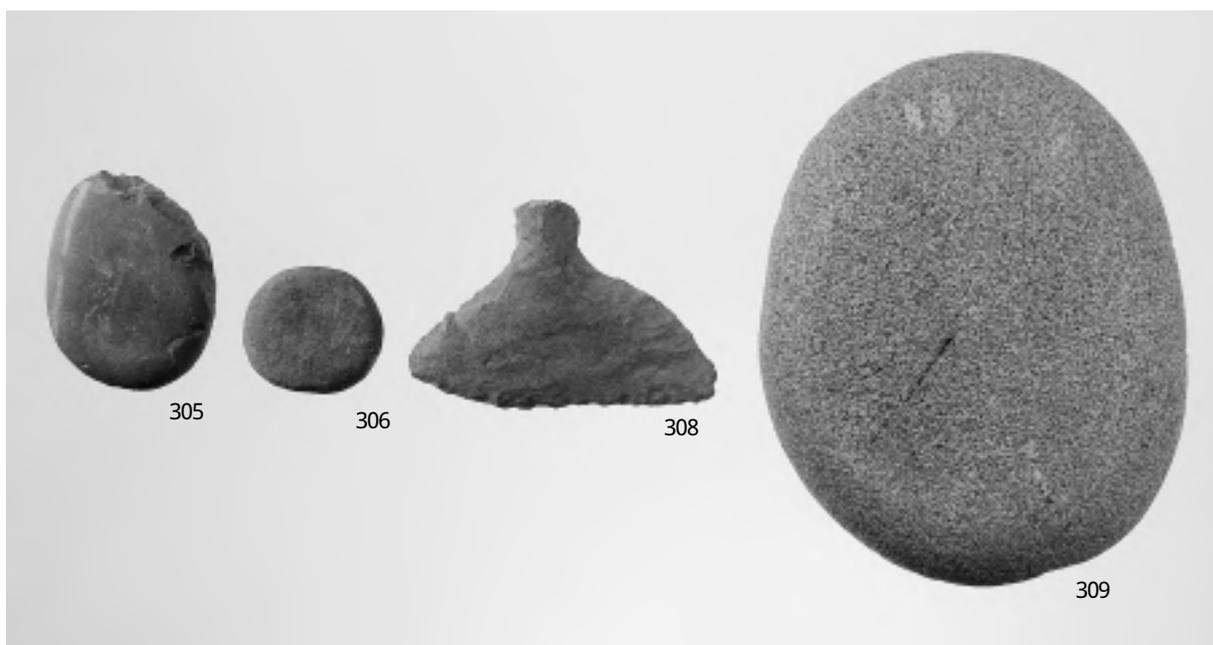
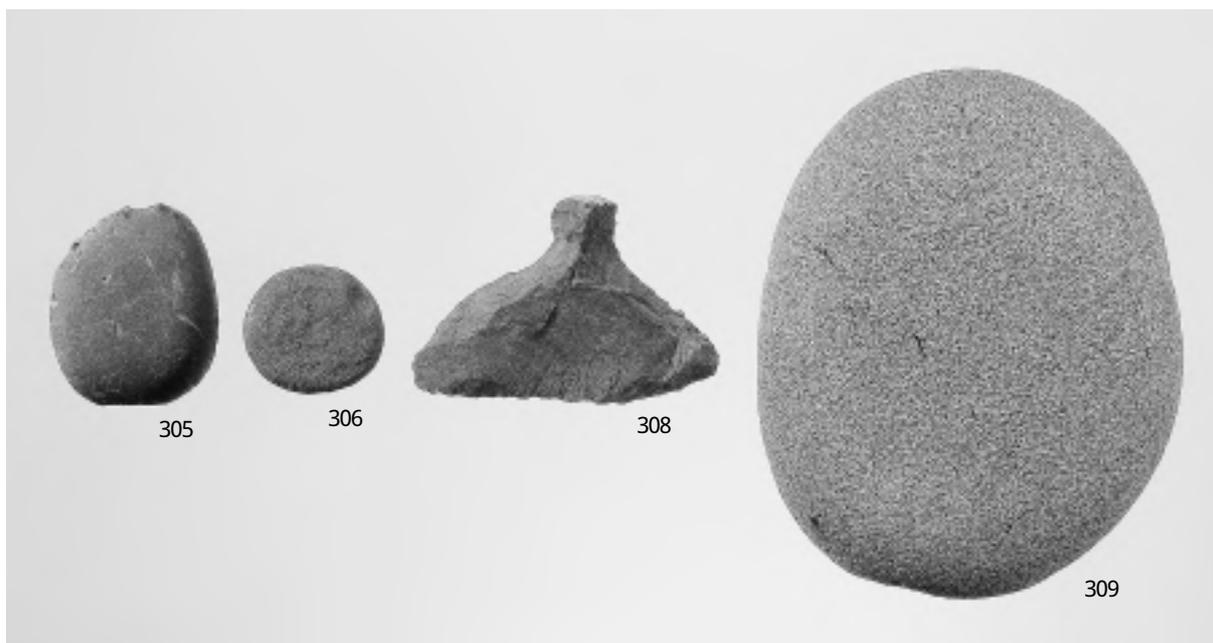
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区・接合資料）



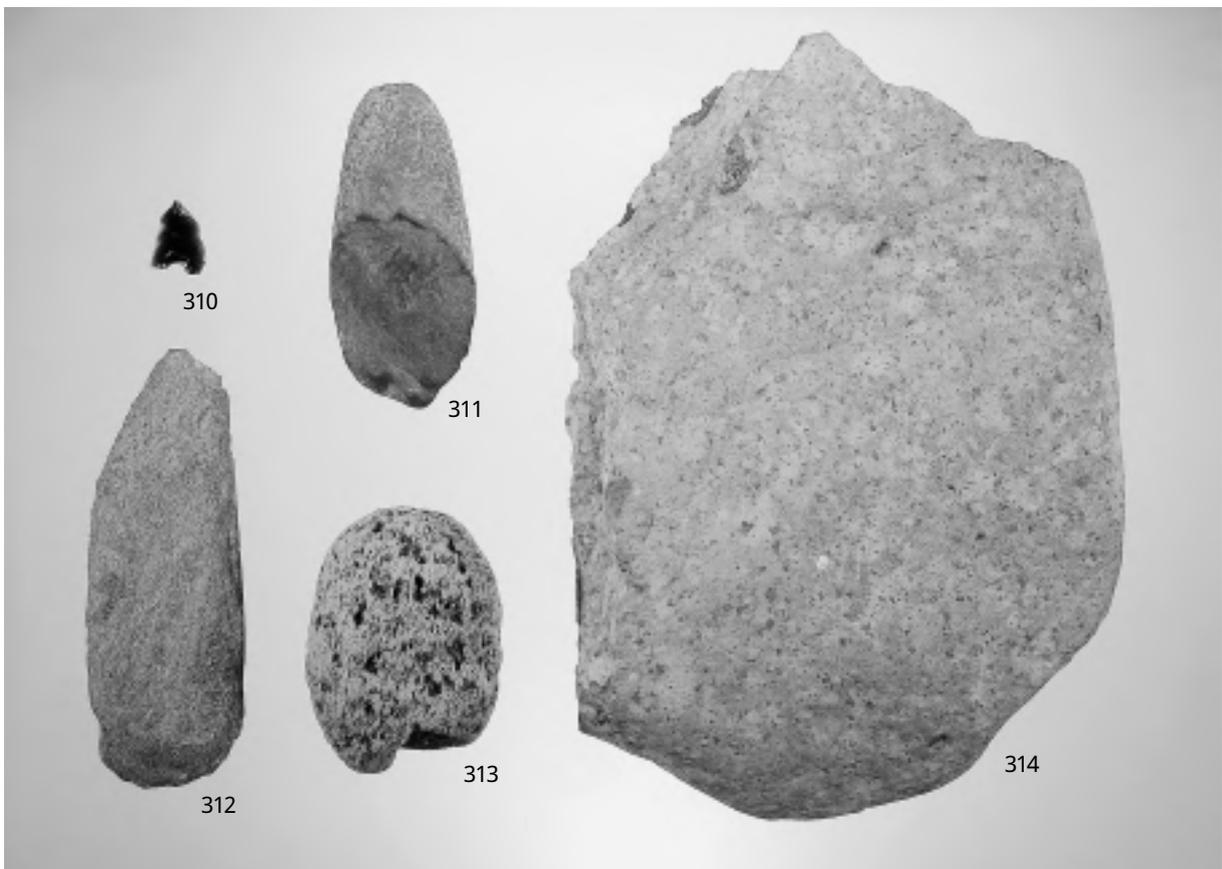
縄文時代後期～弥生時代前期の石器（B・C区・接合資料）



縄文時代後期～弥生時代前期の石器（Ⅱ層）



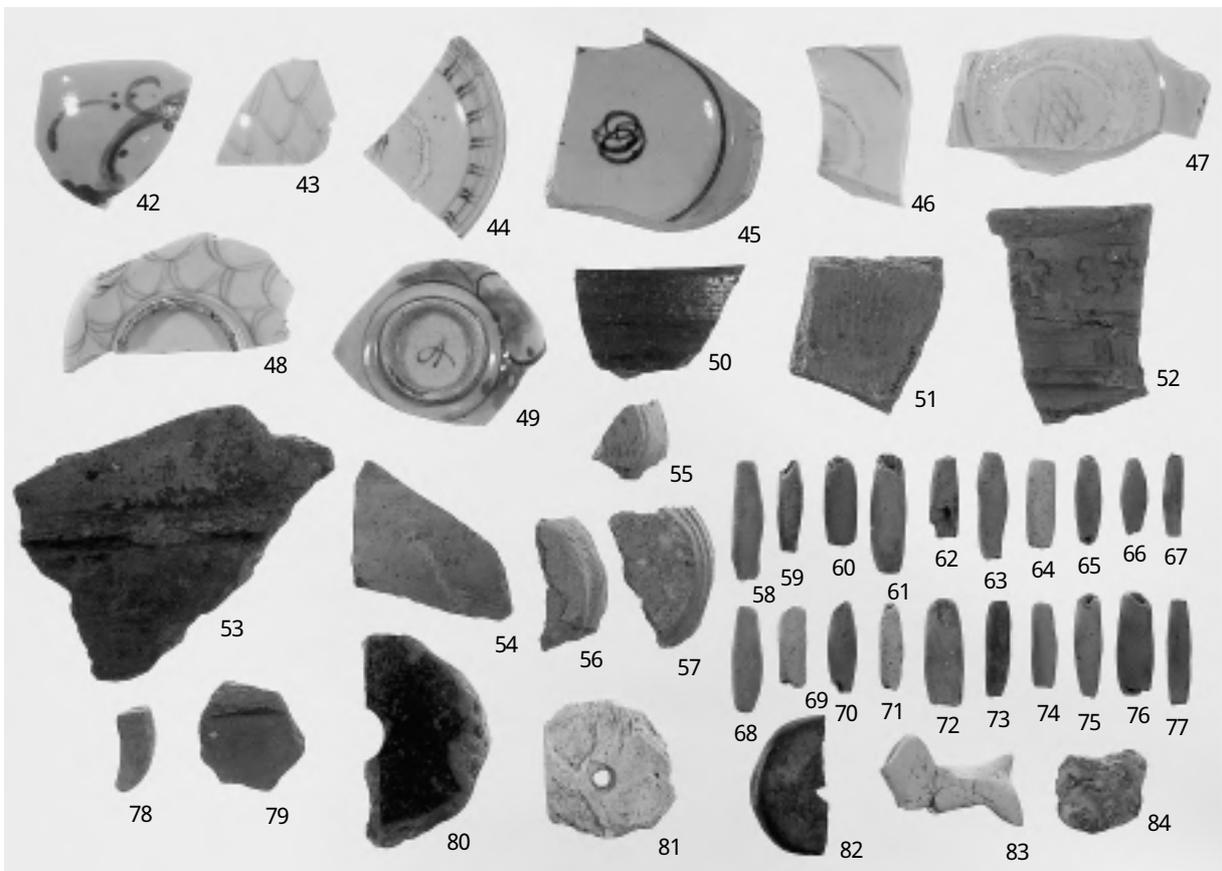
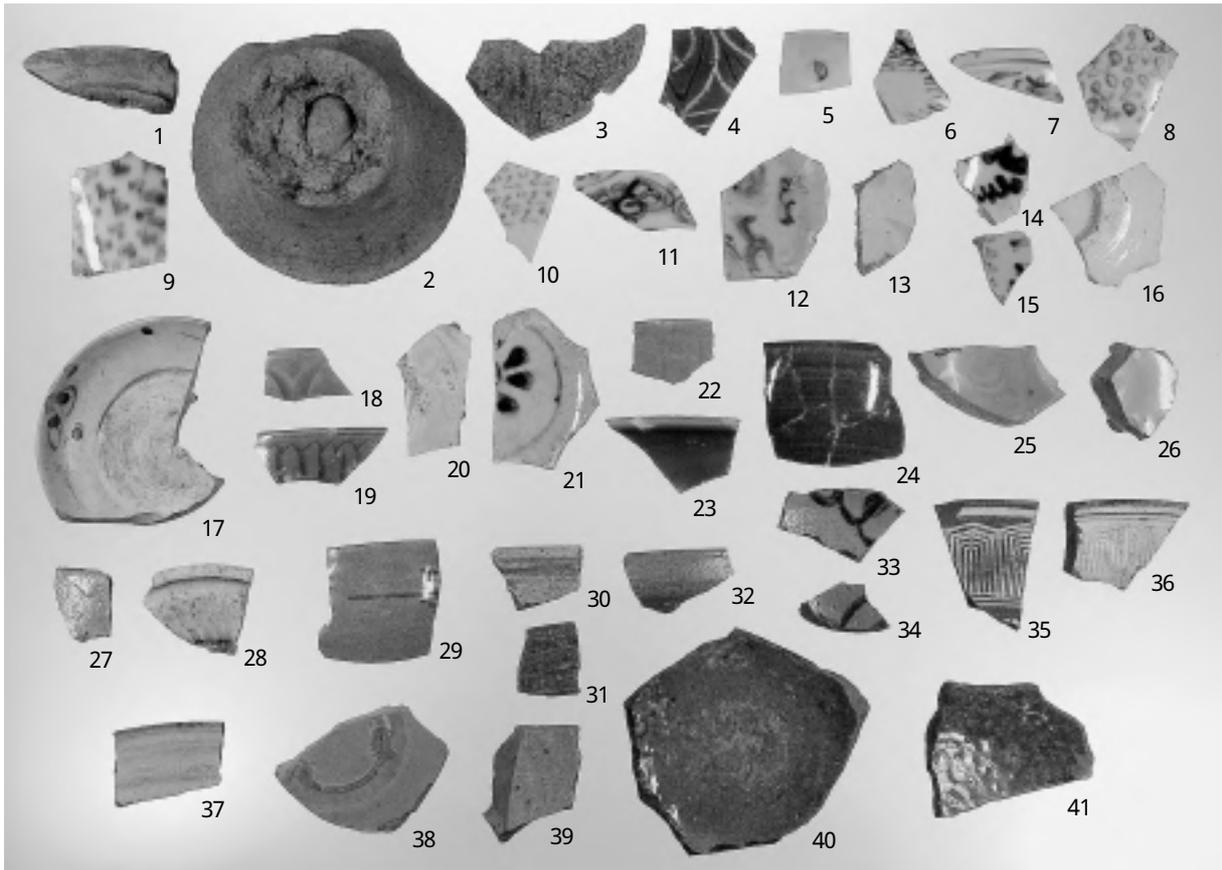
縄文時代後期～弥生時代前期の石器



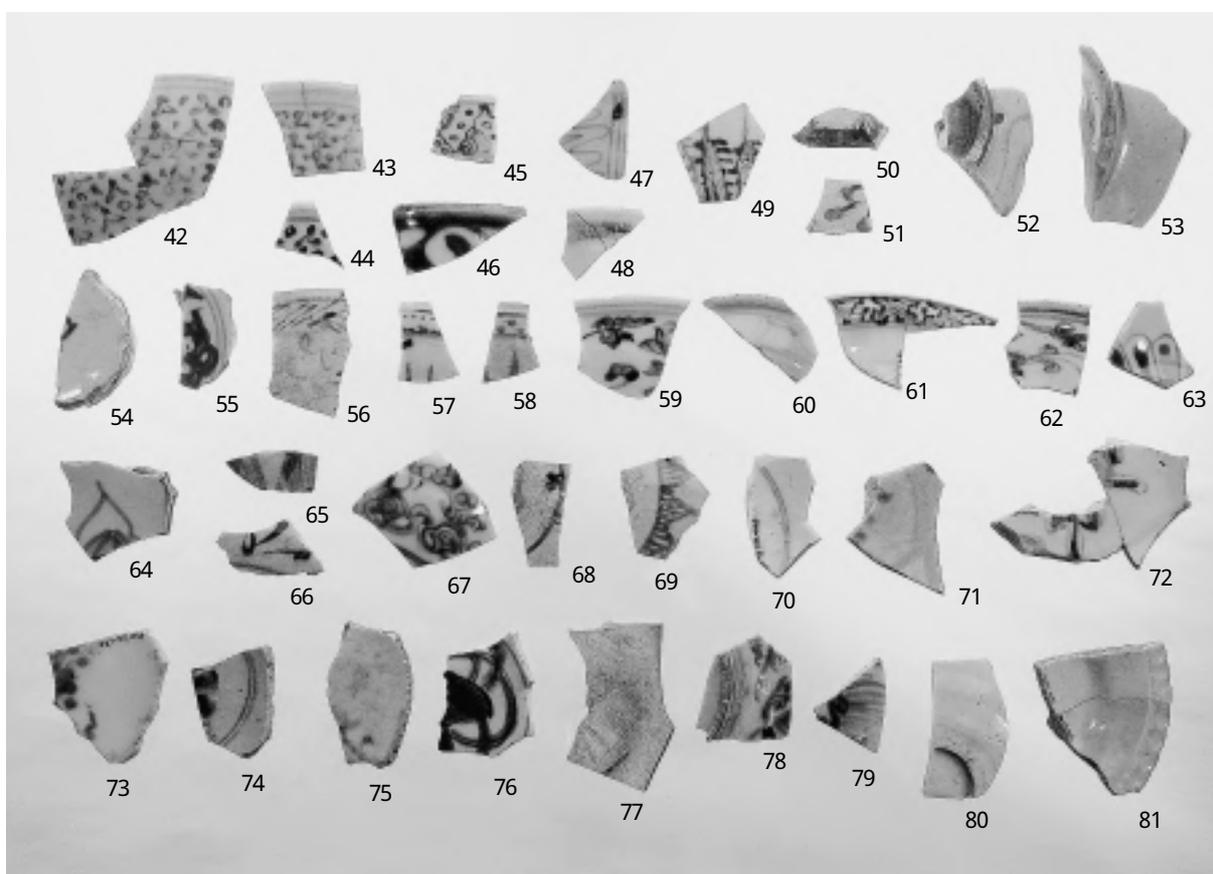
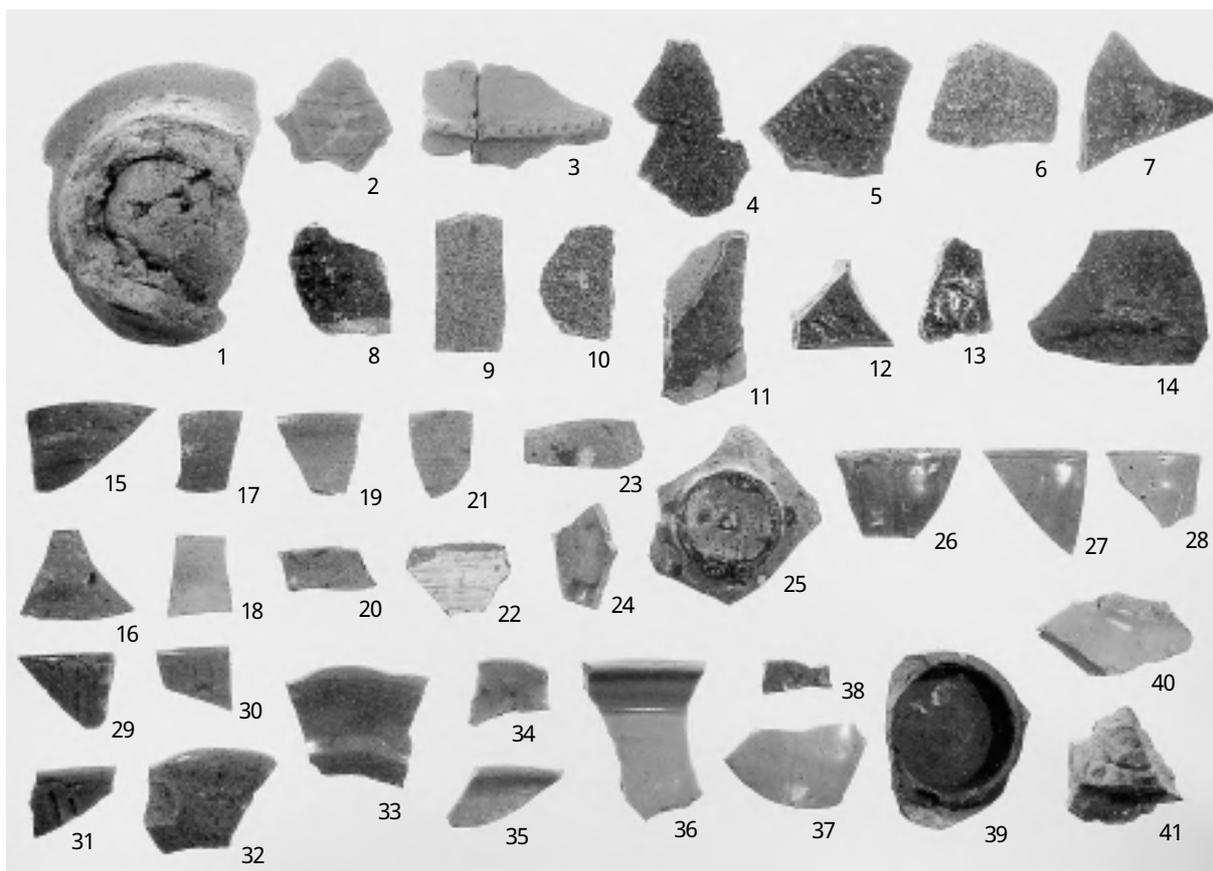
縄文時代後期～弥生時代前期の石器



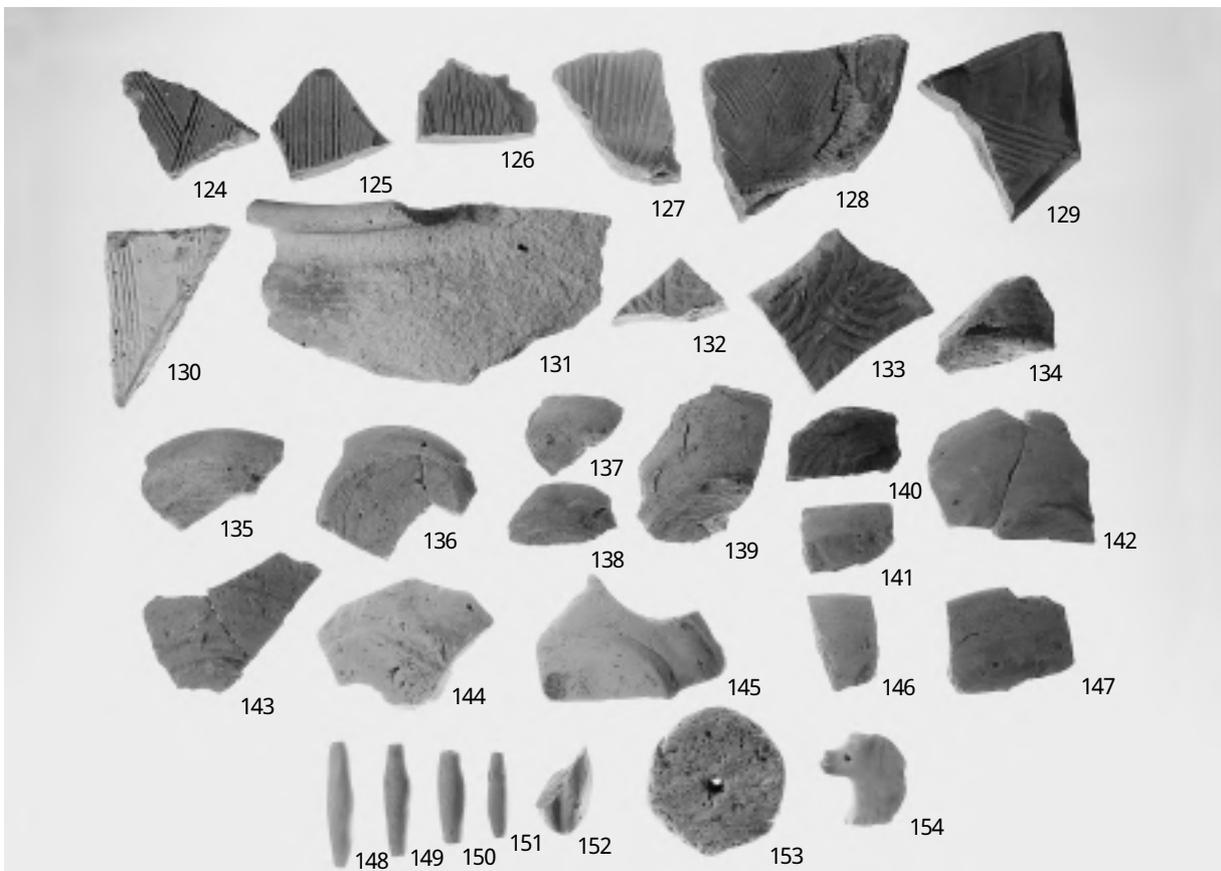
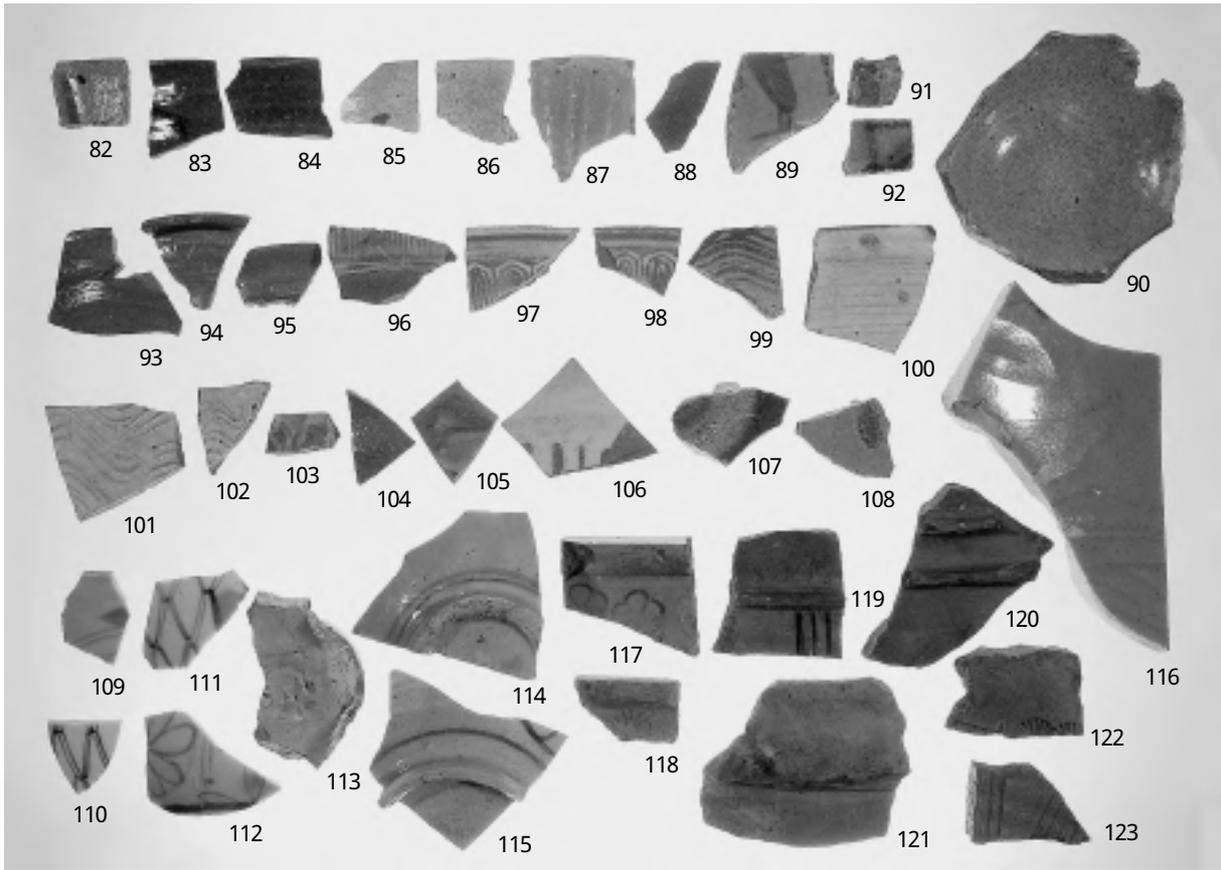
B区出土鉄器



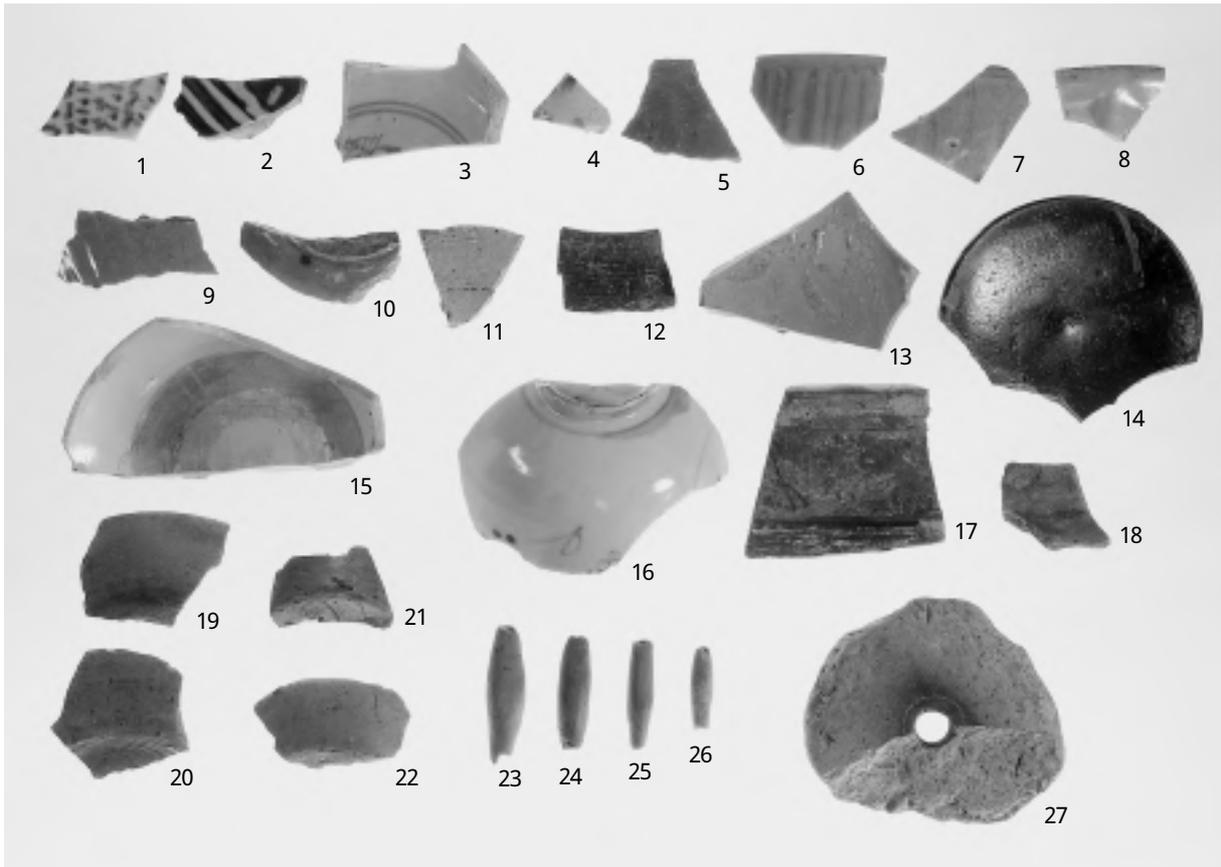
弥生時代中期以降の遺物（A区）



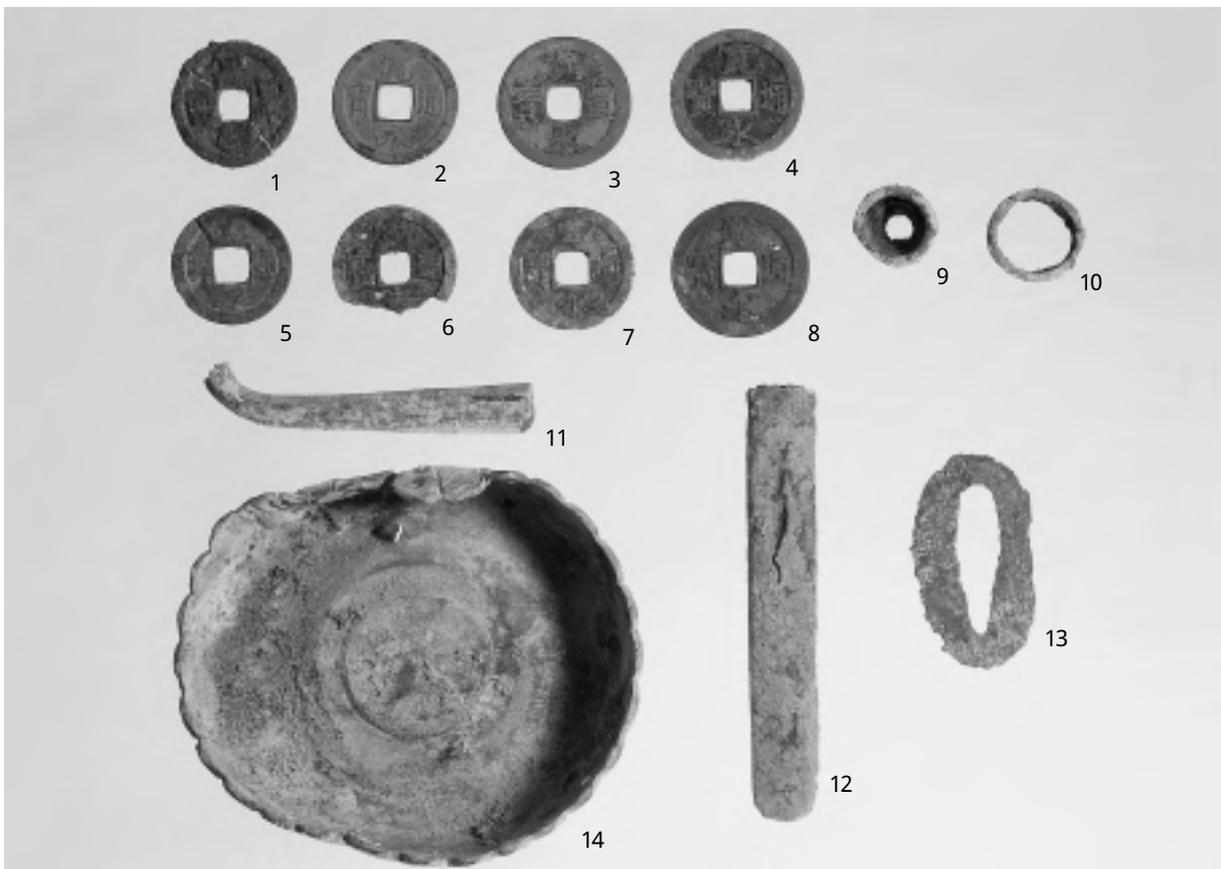
弥生時代中期以降の遺物（B区）



弥生時代中期以降の遺物（B区）



弥生時代中期以降の遺物（C区）



弥生時代中期以降の金属器

# 附 編

# 長崎県深江町権現脇遺跡出土土器に 付着した炭化物の炭素14年代測定

国立歴史民俗博物館研究部

藤尾慎一郎・小林 謙一

## 1 調査概要

長崎県深江町字権現脇に所在する権現脇遺跡の調査によって出土した縄文晩期末から弥生前期に比定される土器8点に付着した炭化物10点の炭素14年代を調査した結果、次の点が明らかになった。

調査したのは黒川式(5点)、山の寺式(1点)、原山式(2点)に比定された深鉢・鉢形土器である。いずれも口縁部や胴部外面に付着した炭化物をAMS-炭素14年代測定した結果、それぞれ、前11世紀(1点)、前10世紀～前9世紀(3点)、前8世紀～前6世紀(6点)の較正年代を示した。これらはいずれも従来考えられていた年代より、500年ほど古い較正年代であった。本遺跡ではまだ10点しか測定していないが、これまで九州北部や西日本で測定した縄文晩期末から弥生前期の較正年代からみるときわめて整合性のある年代であるといえよう。さらにこれまで黒川式として一括してきた組織痕文土器や浅鉢、粗製鉢の中に、弥生前期に属する前700年代まで下るものがあることも初めて明らかになり、突帯文土器である原山式とセット関係をなすものとして注目される。

## 2 調査の経緯と資料の選定

本遺跡を調査した深江町教育委員会の本多和典氏から、縄文晩期末から弥生はじめにかけての土器に付着した炭化物の炭素14年代測定を依頼したいというご連絡を受けた。藤尾慎一郎は、本多氏の申し出以前より、福岡市教育委員会の山崎純男氏から、本遺跡には縄文晩期の火山灰台地を舞台とした焼畑農耕が存在した可能性が高いという情報を得ていた。またこの地域が九州北部における縄文後・晩期農耕論を語る上で長い研究史を持つことや、いわゆる弥生開始期の九州北部土器編年の標識遺跡である山の寺遺跡や原山遺跡がある地域であることなどから、この申し出を快諾し、2003年11月5日と2004年8月22日の2回に分けて調査を行った。

サンプリング総数は33個体に及んだが、測定値がでたのはここに示した10点である。

以下、試料を採取した土器の説明、前処理、測定方法の順に述べ、最後に得られた炭素年代および較正年代についての考察をおこなうことにする。

## 3 年代測定をおこなった土器の考古学的位置づけ

本遺跡の土器は、包含層を中心に出土している。中心となるのはⅢb層で、弥生早期の山の寺式や原山式などの突帯文土器を中心に、縄文晩期の天城式・古閑式や黒川式、弥生前期の突帯文系土器などを含む層である。Ⅲa層になると縄文晩期の古い段階の土器はみられなくなり、突帯文土器が中心となる。Ⅱ層は弥生早期の原山式や亀の甲Ⅰ式などの弥生前期の突帯文系土器が中心となる。今回測定をおこなったのは、Ⅲb層とⅡ層から出土した土器が中心である。



資料1 FJ0428 No 4118



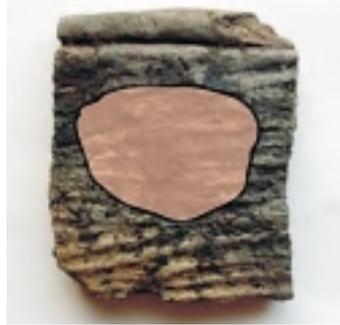
資料2 FJ0431 No 225



資料3 FJ0571Re No 4161



資料4 FJ0436 No 30310



資料4 FJ0434 No 4180



資料5 FJ0437 No 30812



資料6 FJ0442・577 No 425



資料7 FJ0440 No 623



資料8 FJ0576 No .1779

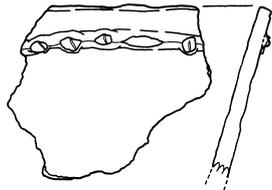
写真1 炭化物の採取箇所(上段左から資料1, 2, 3, 中段左から資料4, 5, 下段左から資料6, 7, 8: 網掛けの部分がサンプリング位置。縮尺不同)

土器以外には、各種打製土掘具、石庖丁状石器、擦り切り石庖丁、打製石鎌などの農耕関係と思われる石器のほかに、スポーク状や同心円状の線刻を表裏にもつ紡錘車、丹塗り磨研土器など、かねてより島原半島で見つかる当概期の遺跡と同じ遺物の組み合わせをもつ、典型的な縄文晩期から弥生開始期の遺跡である。もちろん、水田稲作をおこなっていたと思われる痕跡はみられない。

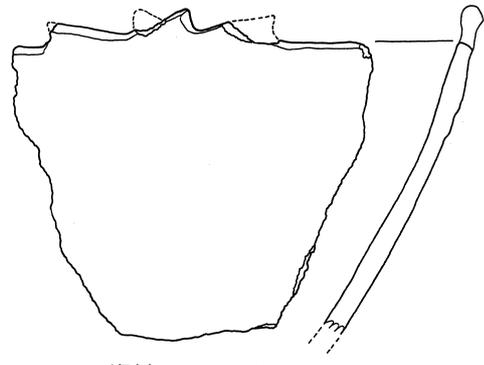
資料は8点である。写真1に資料の写真を、図1に実測図を示した。以下、測定した土器の特徴について列記する。写真には9片の土器が写っているが、サンプリング後の整理で、資料4の2点がくつき、資料6と8も接合したので、個体数は7となる。

**資料1** Ⅲ b層から出土した突帯文土器の甕である。刻目の大きさ、条痕調整をナデ消している点などから原山式に比定した。おそらく胴の屈曲部に刻目突帯をもつ、二条甕と考えているが、口頸部がかなり外傾するので、いわゆる九州北部型の二条甕ではない可能性がある。玄界灘沿岸の夜臼Ⅱ b式前後に併行しよう。頸部外面に付着した炭化物を採取した。

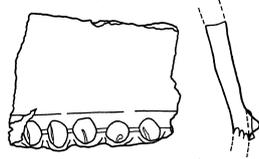
**資料2** Ⅲ b層から出土した黒川式鉢の口縁部破片である。口縁部にリボンをもつ、黒川式の砲弾



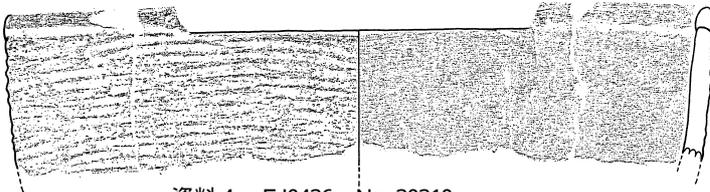
資料1 FJ0428 No 4118



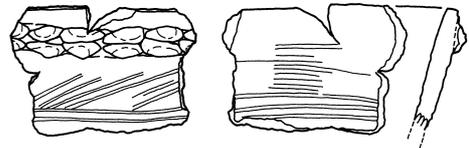
資料2 FJ0431 No 225



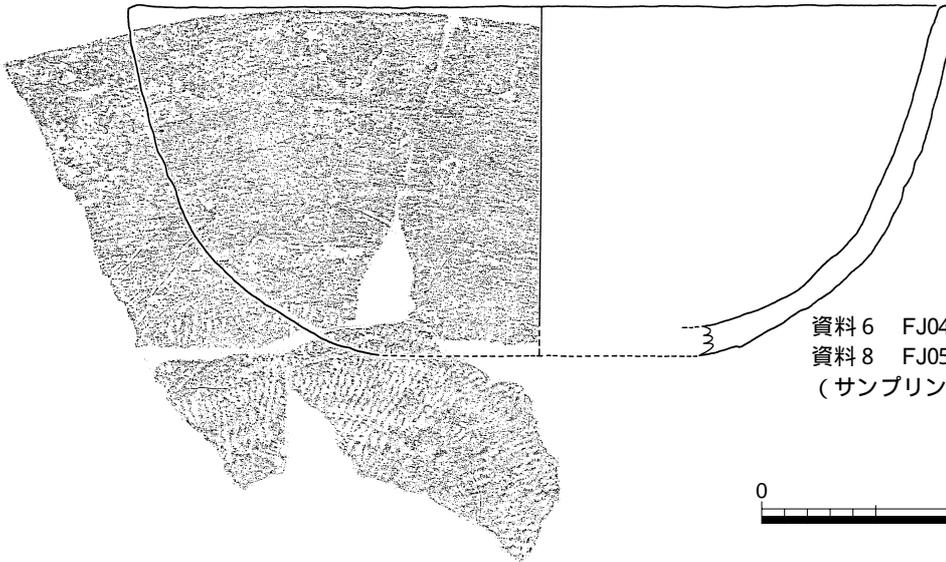
資料3 FJ0571 (Re) No 4161



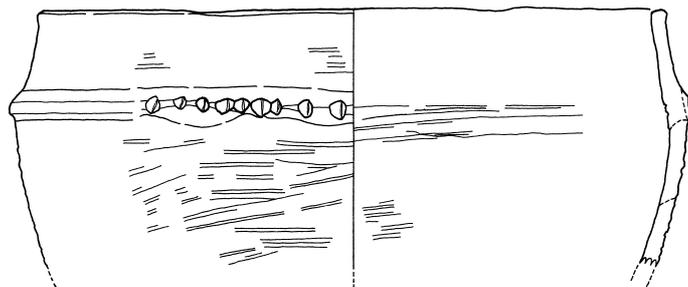
資料4 FJ0436 No 30310  
FJ0434 No 4180  
(サンプリング後に接合)



資料5 FJ0437 No 30812



資料6 FJ0442・577 No 425  
資料8 FJ0576 No .1779  
(サンプリング後に接合)



資料7  
FJ0440 No 623

図1 権現脇遺跡出土の炭化物を採取した土器実測図 (S = 1/3)

型粗製深鉢と考えた。口縁部外面にびっしりと付着した炭化物を採取した。

**資料3** 山の寺式新と考えた突帯文土器である。二条襷の胴部突帯文の上に付着した炭化物を採取した。中ぶりの指刻目状の刻みをもつ点や、刻んだ後突帯上を丁寧にナデ消していること、ナデ調整からみて、この土器は原山式まで下る可能性をもつと考えられる。

**資料4** III b層から出土した30310とII c層から出土した4180を2回測った。サンプリング後に同一個体であることがわかったりボンをもつ粗製鉢の破片で、胴部外面の貝殻調整の間にたまった炭化物を測定した。口縁部は玉縁状に仕上げ、内外に沈線の名残を残している。いわゆる黒川式の粗製鉢とみてよいだろう。

**資料5** 一見、突帯文土器に見えるが、突帯上につけられているのは、いわゆる刻目でない。口縁部外面に作り出した突帯状の隆帯の上下に、それぞれ横長の刻目を付けたものである。つまみ出し状の突帯にもみえる。III b層から出土した。隆帯の下から炭化物を採取した。刻目突帯文のプレタイプと考え、黒川式に位置づけている。

**資料6** III a層から出土した。粗製鉢の口縁部破片で、底部には組織痕が観察できる。粉痕土器である。口縁部外面にべっとりと炭化物が付着していたので試料とした。黒川式と考えている。測定はF J442とF J577の2回行っている。また今年になって資料8と同一個体であることが確認されている。

**資料7** II c層から出土した。口縁部には突帯をもたず、屈曲部だけに突帯をもつ甕である。口縁は波状を呈す。刻みは粗野な感じを残す中ぶりで、しかも施文後のナデ調整はあまりおこなわれていない。したがって、原山式に位置づけている。玄界灘沿岸の夜白II b式から板付I新式にかけての時期に併行すると考える。

**資料8** III a層から出土した組織痕文をもつ黒川式の粗製大形鉢である。口縁部全面に大量の炭化物が付着していた。吹きこぼれの印象を持っている。組織痕文は、米粒状である。資料6と同一個体である。

#### 4 炭化物の処理

年代測定用試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林・新免歳靖、(2)(3)は、坂本稔・尾寄大真が行った。

##### (1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA 処理）

AAA 処理は、土器付着物については、アセトンで洗浄し、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA 処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）、さらにアルカリ溶液（1回目0.001N、2回目以降0.01N、最終回0.1NのNaOH）でフミン酸等を除去する。5～8回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（6時間以上）を行い中和後、純水により洗浄した（4回）。

試料は、AAA 前処理を行った量（処理量）、処理後回収した量（回収量）、二酸化炭素化精製に供した量（燃焼量）、精製した二酸化炭素の炭素相当量（ガス）の重量（mg）を表1に記す。処理した量に対するAAA 処理後に回収された試料の重量による重量比を回収量/処理量比、二酸化炭素に精製した際の炭素含有率を収率、前者と後者を掛けて求められるところの処理した量に対する炭素量の重量比を炭素量/処理量として付す。

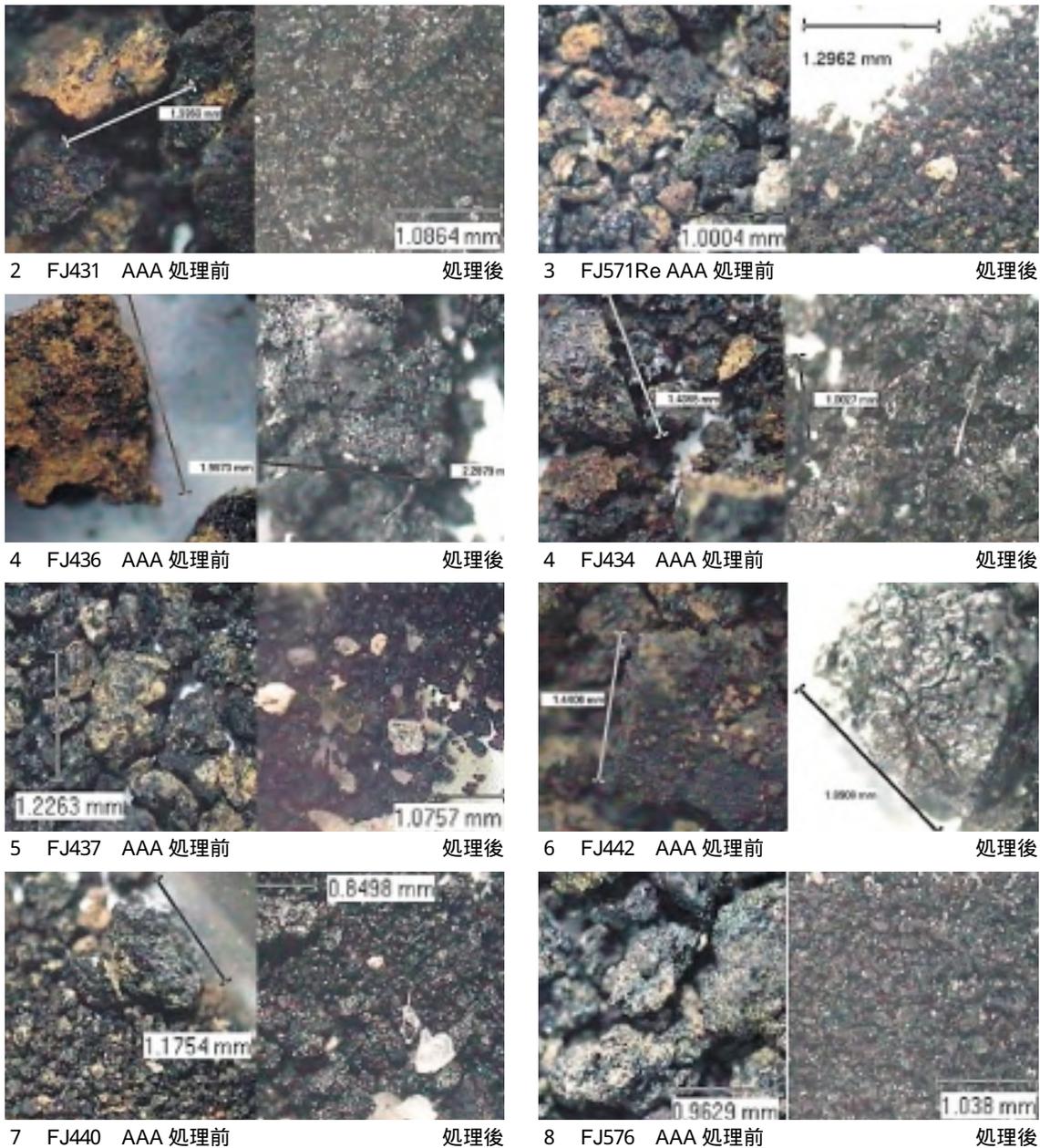


写真2 試料の炭化物写真1 (24倍: 数字は資料番号)

- (2) **二酸化炭素化と精製**: 酸化銅により試料を燃焼 (二酸化炭素化), 真空ラインを用いて不純物を除去する。

AAA 処理の済んだ乾燥試料を, 500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投げ, 真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので, ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

- (3) **グラファイト化**: 鉄触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換し, アルミ製カソードに充填する。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し, 水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。

これを電気炉で650℃で12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、孔径1 mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

以上の試料では、FJ571、FJ437の収率がやや不良であり、炭化物の拡大写真からも若干鉍物の混入が認められ、顕微鏡下で不純物を除去しているものであるが、二酸化炭素化精製時の収率が、約30%は認められ、年代測定には十分と判断した。他の試料は、収率が50%以上であり、土器付着物として、良好な炭素含有率であり、年代測定に適している。

表1 試料の重量 (mg) と炭素含有率

No.	採取量 (mg)	処理量 (mg)	回収量 (mg)	回収 / 処理	燃焼量 (mg)	CO <sub>2</sub> (mg換算)	収率	炭素量 / 処理
FJ428	54.2	32.29	4.57	14.2%	2.84	1.61	56.8%	8.1%
FJ431	245.5	40.14	3.16	7.9%	2.57	1.54	60.0%	4.7%
FJ571	32.6	32.58	9.46	29.0%	5.20	2.01	38.6%	11.2%
FJ434	123.8	32.49	4.35	13.4%	3.82	2.55	66.7%	8.9%
FJ436	182.7	40.26	9.78	23.5%	5.13	3.27	63.8%	15.0%
FJ437	30.9	23.01	2.39	10.4%	1.68	0.48	28.6%	3.0%
FJ442	45.3	25.60	8.65	33.8%	5.33	3.37	63.3%	21.4%
FJ577	227.4	69.41	6.28	9.0%	4.09	2.58	63.0%	5.7%
FJ440	10.6	10.57	2.93	27.7%	2.01	1.03	51.0%	14.1%
FJ576	487.3	87.06	3.35	3.8%	2.84	1.75	61.7%	2.3%

## 5 測定結果と暦年較正

AMSによる<sup>14</sup>C測定は、5番 (FJ437) は、地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した (測定機関番号 Beta)。その他は、同時に調製した標準試料とともに、加速器分析研究所 (測定機関番号 IAAA) に依頼して測定を行った。

年代データの<sup>14</sup>C BP という表示は、西暦1950年を基点にして計算した<sup>14</sup>C年代 (モデル年代) であることを示す (BP または yr BP と記すことも多いが、本稿では<sup>14</sup>C BP とする)。<sup>14</sup>C半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差 (1標準偏差, 68%信頼限界) である。

AMSでは、グラファイト炭素試料<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比により、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比に対する同位体効果を調べ補正する。<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比は、標準体 (古生物 belemnite 化石の炭酸カルシウムの<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比) 偏差値に対する千分率 <sup>13</sup>C (パーミル, ‰) で示され、この値を -25‰に規格化して得られる<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比によって補正する。補正した<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、<sup>14</sup>C年代値 (モデル年代) が得られる (英語表記では Conventional Age とされることが多い)。ベータアナリティック社は安定同位体比質量分析計で測定しているが、今回測定した5番 (FJ437) は、測定できる炭素量がなく、測定不能であったため、NAと表記されている。加速器研究所の<sup>13</sup>C値は、加速器による測定であり、括弧をつけて参考値として記しておく。前処理した炭素試料が十分にある場合、別に(株)明光通商に委託して、安定同位体比質量分析計により測定した。

測定値を較正曲線 INTCAL98 (<sup>14</sup>C年代を暦年代に修正するためのデータベース, 1998年版) (Stuiver, M., et. al.1998) と比較することによって実年代 (暦年代) を推定できる。両者に統計誤差

があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal Program に準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%の信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BC で示す。( ) 内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。

## 6 年代的考察

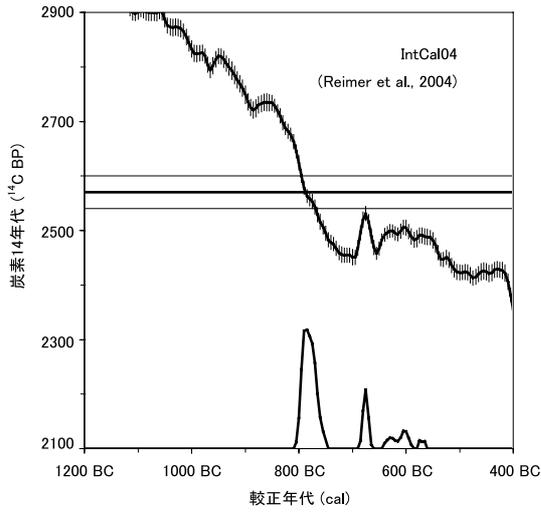
表1 長崎県深江町権現脇遺跡出土土器外面に付着した炭化物の年代

資料番号	測定機関番号	炭素14年代 ( <sup>14</sup> C BP)	暦年較正 cal BC ( 2 ) ( % )は確率密度			<sup>13</sup> C
1 原山式	IAAA 40541	2570 ± 30	805cal BC 685cal BC 635cal BC 580cal BC	755cal BC 660cal BC 585cal BC 545cal BC	( 66.5% ) ( 10.8% ) ( 11.9% ) ( 6.2% )	( - 27.6 )
2 黒川式	IAAA 40542	2910 ± 30	1245cal BC 1210cal BC 1190cal BC 1130cal BC	1240cal BC 1195cal BC 1135cal BC 1000cal BC	( 0.7% ) ( 4.4% ) ( 18.5% ) ( 71.6% )	( - 26.2 )
3 山の寺式新	IAAA 41100	2570 ± 40	820cal BC 715cal BC 700cal BC	755cal BC 710cal BC 540cal BC	( 49.5% ) ( 0.4% ) ( 45.2% )	- 26.1
4 黒川式	IAAA 40543	2600 ± 30	825cal BC 675cal BC	760cal BC 665cal BC	( 91.9% ) ( 3.2% )	( - 27.1 )
4 黒川式	IAAA 40544	2590 ± 40	830cal BC 685cal BC 640cal BC 580cal BC	755cal BC 660cal BC 585cal BC 540cal BC	( 69.3% ) ( 8.2% ) ( 11.3% ) ( 6.5% )	- 26.4
5 黒川式	Beta 194400	2530 ± 40	795cal BC 530cal BC 455cal BC 435cal BC	535cal BC 515cal BC 450cal BC 430cal BC	( 92.3% ) ( 2.0% ) ( 0.4% ) ( 0.4% )	NA
6 A 黒川式	IAAA 40546	2750 ± 30	970cal BC 935cal BC	955cal BC 825cal BC	( 5.7% ) ( 89.3% )	- 26.4
6 B 黒川式	IAAA 41101	2780 ± 40	1015cal BC	830cal BC	( 95.0% )	- 26.3
7 原山式	IAAA 40545	2590 ± 40	830cal BC 685cal BC 640cal BC 580cal BC	755cal BC 660cal BC 585cal BC 540cal BC	( 69.3% ) ( 8.2% ) ( 11.3% ) ( 6.5% )	( - 29.7 )
8 黒川式	IAAA 41894	2790 ± 40	1040cal BC 1030cal BC	1030cal BC 835cal BC	( 94.4% )	( - 27.9 )

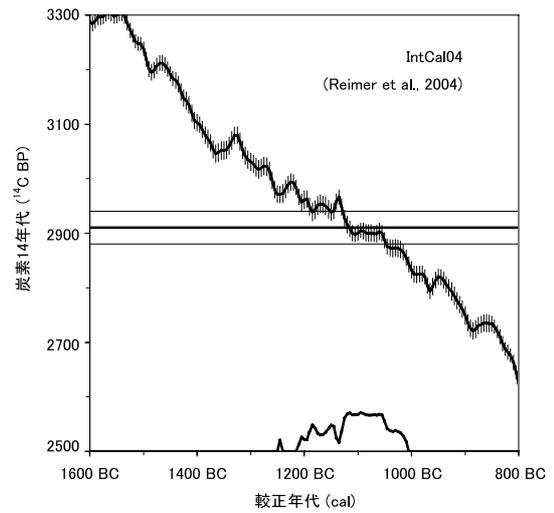
は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BC で示す。括弧内は推定確率である。図2は、各試料の暦年較正の確率分布である。

測定の結果、7個体の土器の各面付着炭化物の炭素14年代は、順に2570 ± 30<sup>14</sup>C BP, 2910 ± 30<sup>14</sup>C BP, 2570 ± 40<sup>14</sup>C BP, 2600 ± 30<sup>14</sup>C BP と2590 ± 40<sup>14</sup>C BP, 2530 ± 40<sup>14</sup>C BP, 2750 ± 30<sup>14</sup>C BP と2780 ± 40<sup>14</sup>C BP, 2590 ± 40<sup>14</sup>C BP, 2790 ± 40<sup>14</sup>C BP。較正暦年代は805cal BC ~ 545cal BC ( 95.4% ), 1245cal BC ~ 1000cal BC ( 95.2% ), 820cal BC ~ 540cal BC ( 94.3% ), 825cal BC ~ 665cal BC ( 95.1% )と830cal

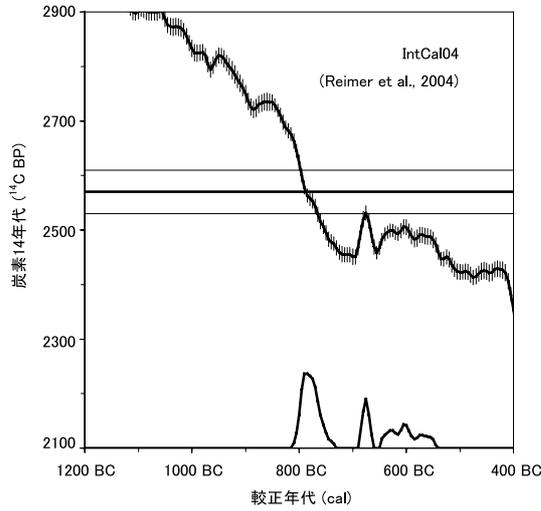
試料番号 資料1(原山式 旧1 FJ-428)  
 機関番号 IAAA-40541  
 炭素14年代 2570±30 <sup>14</sup>C BP



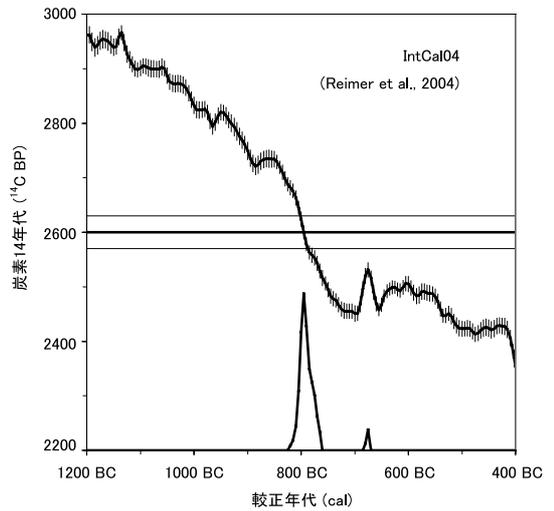
試料番号 資料2(黒川式 旧4 FJ-431)  
 機関番号 IAAA-40542  
 炭素14年代 2910±30 <sup>14</sup>C BP



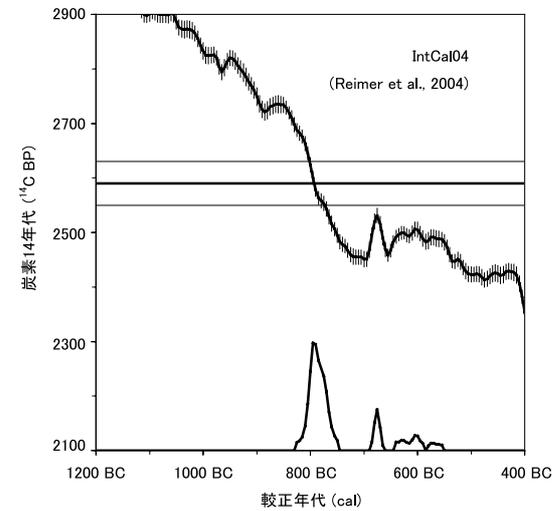
試料番号 資料3(山の寺式新 旧4461 FJ-571-(re))  
 機関番号 IAAA-41100  
 炭素14年代 2570±40 <sup>14</sup>C BP



試料番号 資料4(黒川式 旧7 FJ-434)  
 機関番号 IAAA-40543  
 炭素14年代 2600±30 <sup>14</sup>C BP



試料番号 資料4(黒川式 旧9 FJ-436)  
 機関番号 IAAA-40544  
 炭素14年代 2590±40 <sup>14</sup>C BP



試料番号 資料5(黒川式系 旧10 FJ-437)  
 機関番号 Beta-194400  
 炭素14年代 2530±40 <sup>14</sup>C BP

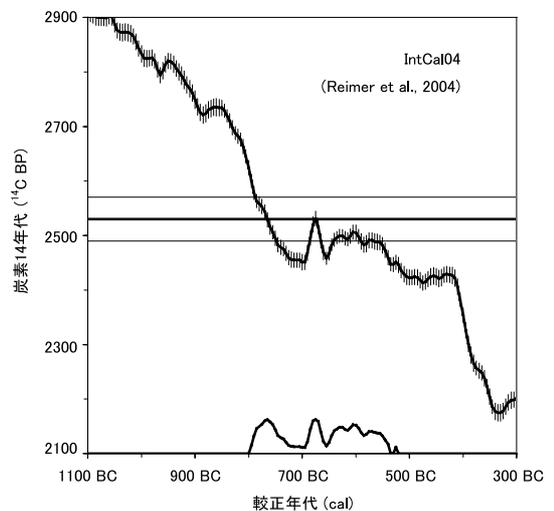


図2 暦年較正の確率密度分布図 (IntCal04による)

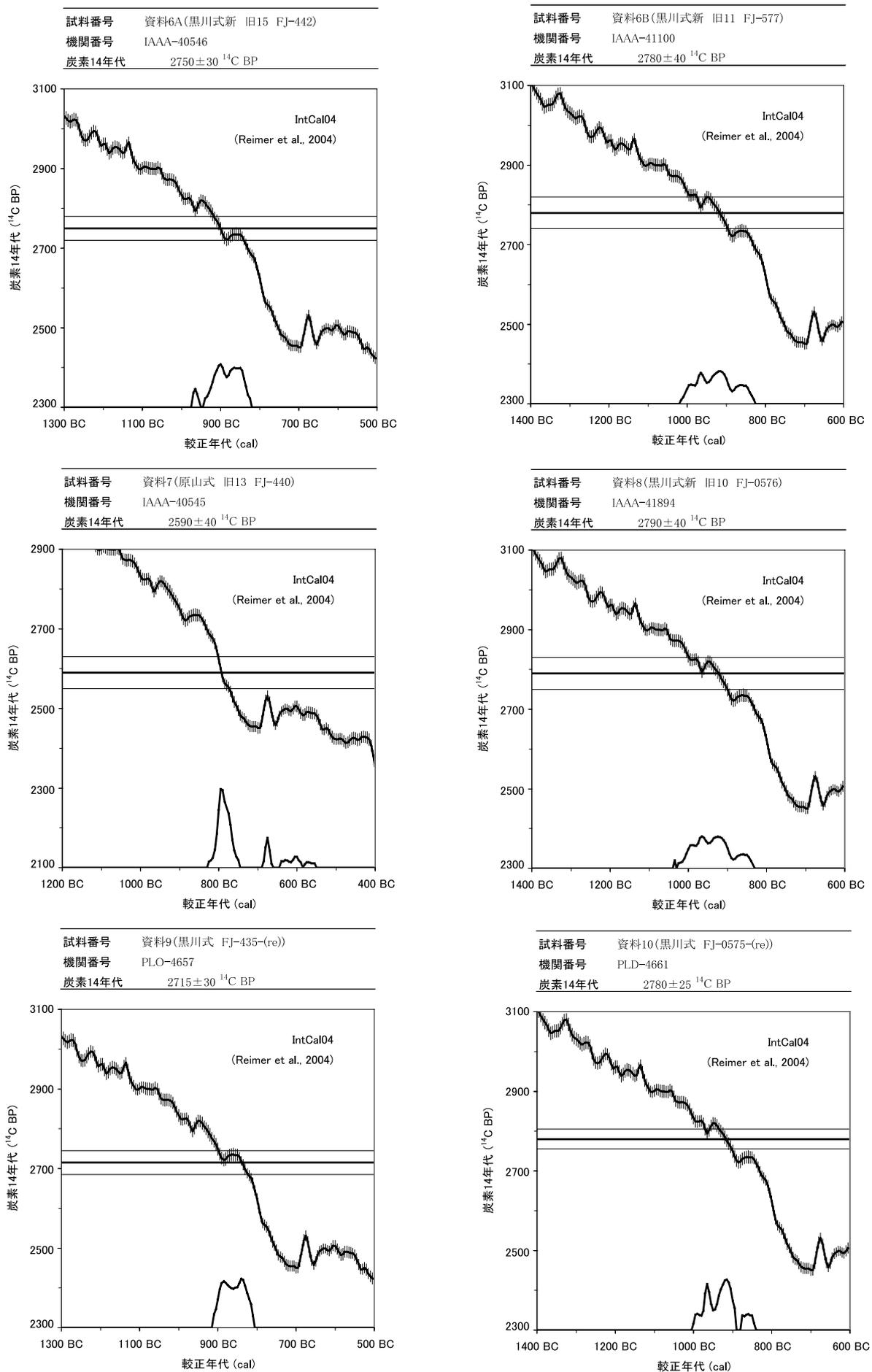


図3 暦年較正の確率密度分布図 (IntCal04による)

BC ~ 540cal BC (95.3%), 795cal BC ~ 430cal BC (95.1%), 970cal BC ~ 825cal BC と1015cal BC ~ 830cal BC (94.3%), 830cal BC ~ 540cal BC (94.3%), 1040cal BC ~ 835cal BC (95.0%)であった(表1)。95%という数字は20点測定すれば19例がこの範囲内に収まる確率であることを意味している。存続幅ではない。なお、<sup>13</sup>Cの値は加速器による測定(括弧ありのもの)と(株)明光通商による正確な値が混在しているが、いずれも海洋リザーバー効果等を考慮する必要は薄いと予想している。これら10点の値が正しいかどうか調べるために、すでにこの時期の較正暦年代研究が進んでいる九州北部の較正年代と比較してみよう〔藤尾ほか2005〕(図3)。

学術創成研究グループでは、縄文晩期の始まりを前1250年頃、山の寺式の始まりを前10世紀後半、夜臼Ⅱa式の始まりを前900~860年頃、板付Ⅰ式の始まりを前810年頃と考えている。この較正年代を目安に各資料の年代をみると、突帯文土器出現以前の黒川式まであがりそうなのは資料2だけ。突帯文土器に伴う黒川式新は資料6・8、残りの黒川系鉢類(資料4・5)と山の寺式新や原山式とした突帯文土器(資料1・3・7)は、すべて夜臼Ⅱb・板付Ⅰ式共伴期から板付Ⅱ式の後半(2400年問題後半という意味)までのどこかに位置する土器群であることがわかる。問題はこれらの黒川系鉢類とこの地域の突帯文土器である原山式との関係なのである。

これまで原山式は、山の寺式に後続する島原半島の突帯文土器と位置づけられてきたが、福岡平野との関係については、おおむね、板付Ⅰ式よりも古いと考えられてきた〔森1962〕。1980年代になって島原半島と同じ有明海沿岸に位置する佐賀平野や熊本地方の調査が進むと、亀の甲タイプや斉藤山式のような完全に弥生化した突帯文土器よりも型式学的に古い特徴を残す土器群であるという認識が共通の理解になった。

今回の年代測定の結果をこの脈略の中でとらえると、次のようになる。

島原半島の突帯文土器は、炭化物の量が少なく測れなかった山の寺式(Ⅲb層4595など129頁第95図-709)が資料6・8のような黒川系鉢類に伴って存在すると予想され、前10世紀を中心として前9世紀までを下限とする。

次に原山式が出現する。今回測定した突帯文土器3点はいずれも山の寺式新と原山式の段階となる。上限は板付Ⅰ式が成立する前9世紀の終わり、下限は較正年代では板付Ⅱb式までの値がでているため、先述したように較正年代からみるとこの間のどこかに収まることになる。しかし型式学的な特徴から板付Ⅱb式に併行する亀の甲タイプと同じことはあり得ず、また最古の弥生化した突帯文土器である亀の甲Ⅰ式までもくだらないと考えられるため、下限はほぼ板付Ⅰ式、もしくは板付Ⅰ式新段階におさまると考えられる。将来的にはウィグル・マッピングによって確定したい。

以上の島原半島の状況をふまえて縄文晩期末から弥生前期の突帯文土器の動きについて、まとめて終わりにしよう(図3)。編年案は〔藤尾1991〕に準じている。

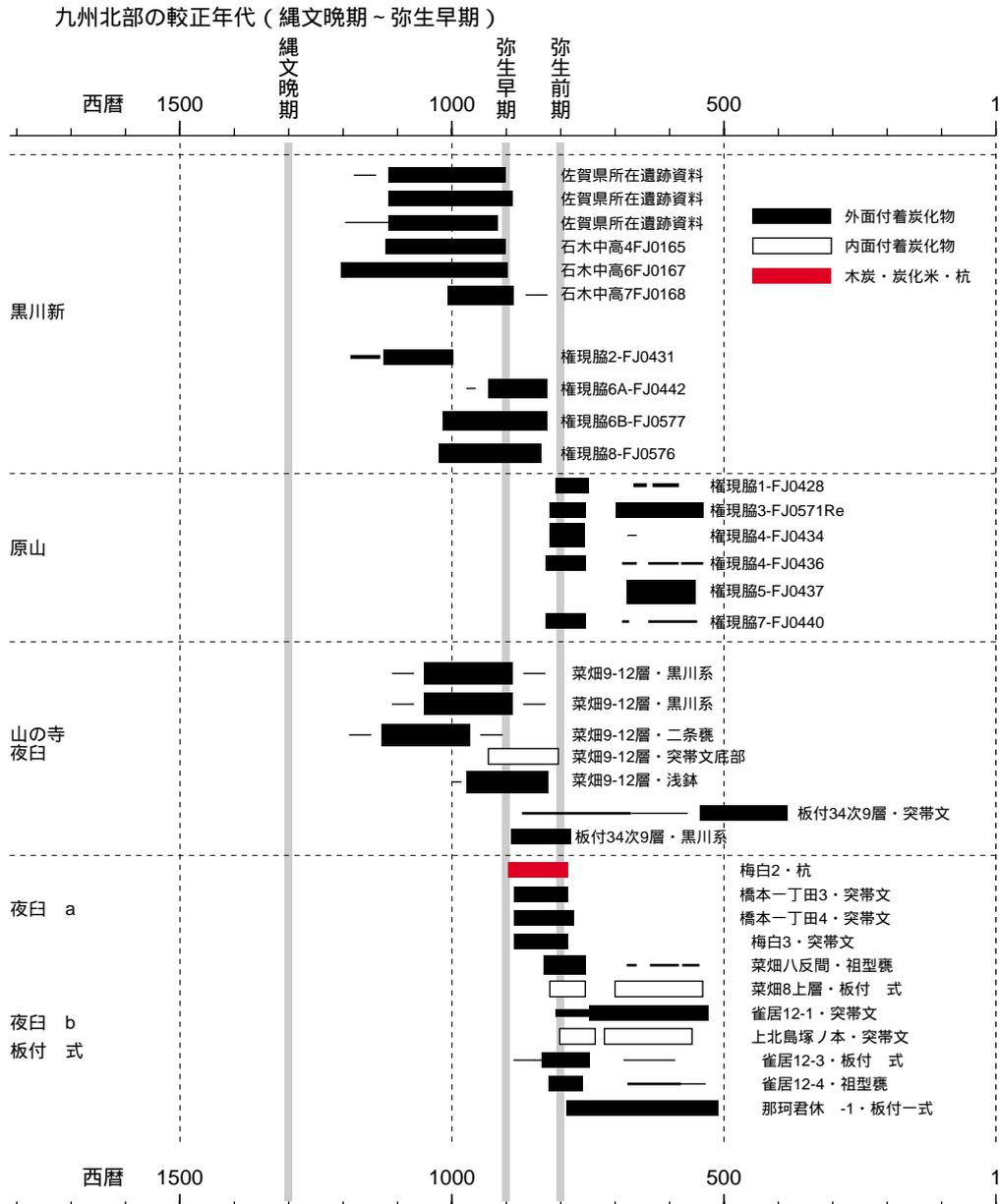


図4 九州における縄文後・晩期から弥生前期の較正年代一覧

### 縄文晩期末（黒川式単純）

この段階に正確に絞り込めているわけではないが、権現脇2，佐賀県所在遺跡，石木中高遺跡，菜畑9～12層の資料などはその可能性のあるもので，前11～10世紀に位置づけられる。次の段階の遺跡からはこれら黒川系の土器が山の寺式と一緒に出てくるわけだが，その場合の黒川系はもともとⅠ期のものである。今後の測定数の増加が急務である。

#### Ⅰ期（早期前半＝山の寺式段階）

前10世紀の後半頃，九州では山の寺式が出現している。有明海沿岸では，佐賀県所在遺跡や三日月町石木中高遺跡の山の寺式の炭素年代をおさえているわけではないが，もう少し上がる可能性が残されている。権現脇では資料6・8の粗製鉢が該当するが，数が少なく統計的に絞り切れていない。次のⅡ期までのどこかに収まる可能性がある。玄界灘沿岸地域では唐津市菜畑9～12層において山の寺式に黒川系土器が伴っている。夜臼Ⅰ式はまだ1点しかはかっていないし，その測定値もかなり新しいところに分布の中心があるため，夜臼Ⅰ式と山の寺式との関係を明確にできないが，板付34次の最下層である第9層から出土した黒川系粗製深鉢が明らかに一段階新しいⅡ期の測定値を示していることは確かである。やはり類例の増加が必要である。

#### Ⅱ期（早期後半＝夜臼Ⅱa式）

権現脇では測定値として明確に存在を指摘することはできないが，遺跡の連続性からみて必ず存在する。Ⅰ期で指摘したように測定数をふやせば，将来，絞り込めてくる可能性がある。玄界灘沿岸地域では福岡市橋本一丁田遺跡や唐津市梅白遺跡の夜臼Ⅱa式に代表されるが，先述した板付34次のように黒川系鉢類も確実に存在している。

#### Ⅲ期古段階（前期初頭＝夜臼Ⅱb式・板付Ⅰ式）

権現脇の原山式の段階である。佐賀平野の最古式の板付系外反口縁甕にともなう突帯文系土器よりも古い傾向をもつことが根拠である。玄界灘沿岸地域では板付Ⅰ式が成立し，菜畑8上層や福岡市雀居遺跡12次，那珂君休遺跡にみることができるが，有明海沿岸地域ではまだ出現していない。この地域に板付系外反口縁甕が現れるのはⅢ期新段階からである。

本稿は1～3を藤尾が，4・5は小林，6は藤尾と小林が執筆した。なお本稿を草するにあたり，深江町教育委員会本多和典氏，長崎県教育委員会安楽勉氏，古門雅高氏，本田秀樹氏にお世話になった。試料の前調整をおこなった歴博年代測定資料実験室の新免歳靖氏と尾寄大真氏に記して感謝の意を表したい。

この報告は，平成16年度文部科学省・科学研究費補助金 学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア 炭素年代測定による高精度編年体系の構築」（研究代表 西本豊弘）の成果の一部である。

### 【参考文献】

今村峯雄 2004『課題番号 13308009 基盤研究(A・1)(一般)縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』  
(代表今村峯雄)

藤尾慎一郎 1991「水稻農耕と突帯文土器」(『日本における初期弥生文化の成立』pp.187～207，文献出版)。

藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘 2005「弥生時代の開始年代」(『総研大文化科学研究』創刊号，pp.71～96，総合研究大学院大学)。

森貞次郎 1962「島原半島の考古学的調査 長崎県南高来郡原山遺跡」(日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会編『島原半島の考古学的調査』)

Stuiver, M. et. al.1998 INTCAL 98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. *Radiocarbon* 40 (3), 1041-1083.

追記) 本稿脱稿後の2005年3月に、較正曲線が IntCal04に更新されたが、縄文晩期ころの年代については、データ自体には大きな変化はなく、計算方法のちがいで若干の差異がある程度である。本稿では、本文中の記載などは INTCAL98を基にした較正年代であるが、以上の理由から結論に変更はない。

下記に参考までに、IntCal04を基に、RHCAL3で計算した較正年代を載せておく。また、パレオサーベイに委託して測定した2点について結果が得られたので、9(試料 No.FJ 0435 re)・10(FJ 0575 re)として追加して示しておく。

表2 長崎県深江町権現脇遺跡出土土器外面に付着した炭化物の年代

資料番号	測定機関番号	炭素14年代 ( <sup>14</sup> C BP)	暦年較正 cal BC (2 ) IntCal04 <sup>1)</sup> による(%)は確率密度			<sup>13</sup> C (‰)
1 原山式	IAAA 40541	2570 ± 30	805cal BC 685cal BC 640cal BC 580cal BC	745cal BC 665cal BC 590cal BC 560cal BC	(70.4%) (12.8%) (10.2%) (2.0%)	(-27.6)
2 黒川式	IAAA 40542	2910 ± 30	1250cal BC 1210cal BC	1240cal BC 1005cal BC	(1.0%) (94.4%)	(-26.2)
3 山の寺式新	IAAA 41100	2570 ± 40	810cal BC 690cal BC 650cal BC	735cal BC 660cal BC 545cal BC	(55.2%) (13.9%) (26.4%)	-26.1
4 黒川式系	IAAA 40543	2600 ± 30	820cal BC 680cal BC	760cal BC 670cal BC	(92.1%) (3.4%)	(-27.1)
4 黒川式系	IAAA 40544	2590 ± 40	830cal BC 685cal BC 645cal BC 580cal BC	745cal BC 665cal BC 585cal BC 550cal BC	(72.2%) (9.7%) (10.1%) (3.4%)	-26.4
5 黒川式系	Beta 194400	2530 ± 40	795cal BC 530cal BC	535cal BC 520cal BC	(94.9%) (0.6%)	測定不可
6 A 黒川式新	IAAA 40546	2750 ± 30	975cal BC 945cal BC	955cal BC 820cal BC	(6.6%) (88.9%)	-26.4
6 B 黒川式	IAAA 41101	2780 ± 40	1015cal BC	830cal BC	(95.4%)	-26.3
7 原山式	IAAA 40545	2590 ± 40	830cal BC 685cal BC 645cal BC 580cal BC	745cal BC 665cal BC 585cal BC 550cal BC	(72.2%) (9.7%) (10.1%) (3.4%)	(-29.7)
8 黒川式新	IAAA 41894	2790 ± 40	1040cal BC 1030cal BC	1030cal BC 835cal BC	(1.0%) (94.4%)	(-27.9)
9 黒川式	PLD 4657	2715 ± 30	915cal BC	810cal BC	(95.4%)	(-30.1)
10 黒川式	PLD 4661	2780 ± 25	1000cal BC 880cal BC	890cal BC 845cal BC	(83.0%) (12.1%)	-26.2

1) Reimer et al 2004 IntCal 04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP *Radiocarbon* 46 (3), 1029-1058(30)

# レプリカ法による長崎県権現脇遺跡 出土土器圧痕の種子類の同定

小畑 弘己・仙波 靖子

## 1. 遺跡の調査と概要

遺跡名称：権現脇（遺跡）

所在地：長崎県南高来郡深江町大野木場名

調査期間：平成15年2月26日～平成16年8月31日

担当者：本多和典

時期：縄文時代晩期後半

立地：雲仙普賢岳東麓に展開する扇状地の北端部，標高220～235m

## 2. 扱った資料と検索方法

植物圧痕検索の対象とした土器は，調査で出土した縄文時代晩期後半の黒川式土器から刻目突帯文土器の時期に属する資料である。

圧痕の検索は以下の手順で行った。

- ① 肉眼・実体顕微鏡による圧痕部の観察。
- ② 圧痕内の洗浄後，土器全体写真・実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真撮影。
- ③ 離型材（アセトン＋パラロイドB 75）を圧痕部に塗布後，GE 東芝シリコン SE350＋硬化剤 CE621を圧痕部に充填する。シリコン＋増粘材を塗った走査電子顕微鏡のマウントを圧痕部のシリコンに接合し，固まったら取り外してアセトンで圧痕部の離型材を洗浄する。
- ④ 走査電子顕微鏡による観察・同定。

今回の分析において，観察した土器の点数は150点であり，うちレプリカ資料を製作したものが39点である。その中で，植物種子・昆虫の可能性のあるものは10点あり，同定可能なものは5点であった。今回種名が不明なものについても資料を提示し，大方のご教示を請うものである。

## 3. 確認された種子と昆虫（第1表）

イネ（第1図・第2図）

確認されたものは2点で，どちらもほぼ完形である。1点は穎果であり，もう1点は脱穀後の玄米で，内外穎や胚が取り除かれた状態であった。第1図②およびその圧痕である④には籾（外穎）表面組織が明瞭に観察できる。種子の計測値は第1図の圧痕レプリカが長さ5.0mm，幅2.0mm，第2図の圧痕レプリカが長さ4.5mm，幅2.5mmである。

第1表 権現脇遺跡出土圧痕種子類

図面番号	整理番号	出土地点	出土層位	土器型式	資料名	報告書中図版番号
1	1021	Q12	Ⅲ a	刻目突帯文	イネ	第96図 - 750
2	672	R12	Ⅲ a	黒川新	イネ	第94図 - 696
3	2705	Q15	Ⅲ b	黒川新	ワクド石タイプ	-
4	030626	R11NB	Ⅲ a	黒川新	ワクド石タイプ	-
5	2677	Q15	Ⅲ b	黒川新	不明種子	-
6	2688	Q15	Ⅲ b	黒川新	不明種子	-
7	A306	M26	Ⅲ a	黒川新	不明種子	-
8	407	R11	Ⅲ a		不明種子	-
9	030529	Q14d	Ⅲ a		不明種子	-
10	A4319	N24	Ⅲ b		不明種子	-
11	A1854	N21	Ⅲ a	黒川新	コクゾウムシ	-

#### ワクド石タイプ種子 (第3図・第4図)

熊本県ワクド石遺跡の圧痕から確認された種子が指標となっており、未同定のためワクド石タイプという名称が便宜上用いられている(中沢・丑野2005)。細長い楕円形をしており、種子の表面には周囲に沿って線状の突起部がある。中央には溝状の凹みを持つ。イネ科の植物と思われる。種子レプリカの計測値は、第3図のものが長さ5.0mm、幅1.4mm、第4図のものが長さ4.4mm、幅1.4mmである。

#### 不明種子 (第5図～第10図)

第5図の圧痕レプリカは長さ2.4mm、幅1.8mmの楕円形であり、種子と思われるが、表面が荒れて組織などは不鮮明である。

第6図の圧痕レプリカは長さ2.8mm、幅2.0mmの楕円形であり、種子と思われる。表面には細かな凸凹の組織が認められる。

第7図の圧痕レプリカは上部が欠損している。もとは楕円の球状をしていたと思われ、表面には繊維状の凹凸が縦に走っているのが見られる。現存部の長さは6.7mm、幅は3.7mmである。スダジイやツブラジイなどのシイ属種子に似るが、種を特定できない。

第8図の圧痕レプリカは細長い紡錘形をしたほぼ完全な種子と思われる。土器の胎土が粗く、表面細胞は確認できない。長さ4.1mm、幅1.6mmである。

第9図の圧痕レプリカは長さ3.0mm、幅2.1mmで、先端に突起をもつ角錐形を呈する種子と思われる資料である。

第10図の圧痕レプリカは細長い紡錘形をしている。長さ4.8mm、幅1.3mmである。イネ科植物の種子であろうか。

#### コクゾウムシ (第11図)

オサゾウムシ科に属する *Sitophilus* 属の一般的総称で、米などの貯蔵穀類に害を加える世界共通種の貯蔵害虫である。日本の在来種としてはコクゾウムシ (学名 *Sitophilus zeamais* ・英名 Maize weevil), ココクゾウムシ (学名 *Sitophilus oryzae* ・英名 Rice weevil) の2種がある。

本資料は、口吻の一部、右中脚の一部が残っており、頭部、前胸、腹部の節も明瞭に認めることができる。また、翅鞘もしくは後翅の縦縞の文様も明瞭に観察できる。長さ4mm、幅1.2mm。大きさからみてコクゾウムシの可能性が高い。

#### 4.まとめ

今回分析した資料は、すでに調査者によって圧痕が確認されていた第1～3図の3点(2点は肉眼でイネであることが判明していた)に加え、新たに探し出した8点の資料である。結果的に、十分な種の特定が行えなかったが、昨今問題とされている「ワクド石タイプ」の種子を2点明らかにすることができた。さらに、貯蔵害虫であるコクゾウムシの類例を追加することができた。

土器圧痕の種をレプリカ法によって同定する研究は、すでに丑野毅氏や中沢道彦氏らによって全国的なレベルでの研究が行われ、九州地域における実践例も存在する(中沢・丑野2003・2005)。また、最近では山崎純男氏によって熊本県下の縄文時代後～晩期資料を対象にした圧痕レプリカ法による研究が精力的に実施され、多数の穀類や貯蔵害虫が検出されつつある(山崎2005)。そこでは、縄文時代の穀物や有用植物の渡来時期の遡及やその組成が明らかになるなど、大きな成果が上がっている。山崎によると、熊本県域では、縄文時代中期末からすでにイネが出現し、後期には確実にイネ、アワ(ヒエ)などの穀物やシソ(エゴマ)、ゴボウなどの栽培植物が存在するという。

今回の資料は縄文時代晩期後半の時期であり、当地域でも栽培穀物・作物がすでに存在していたと予想される時期のものであり、新たな発見といえるものではない。しかし、島原半島における農耕史を語る上で科学的な裏づけをもった確実な基礎資料を提示できたという点では評価できよう。本地域は、1960～70年代にかけて縄文農耕の存否論争が起こった、いわば農耕論に関しては先進地域であるにもかかわらず、今日的な学問レベルでの再検証が十分に行われているとはいえない。実際、われわれの一連の作業過程で、イネ圧痕とされたものがまったく異なるものであった例も存在した。

今回は種名を特定できなかった不明な種子も多数あり、経験的にも未熟であることから、不備の感は否めないであろう。しかし、私たちが抱いていた本方法の有効性は今回の調査で実証できたと感じている。

## 謝 辞

今回、走査電顕による資料の観察および写真撮影に際しては福岡市埋蔵文化財センターの機器を使用させていただいた。撮影にあたり同センターの片田雅樹氏の全面的な補助およびご指導があった。また、同定に際しては福岡市教育委員会埋蔵文化財部の山崎純男氏のご教示があった。両氏に感謝したい。また、今回、資料調査と発表の機会をいただいた深江町教育委員会本多和典氏にも御礼を申し上げます。

なお、この研究には、小畑が受けている日本学術振興会平成17年度科学研究費補助金基盤研究B(課題番号：16320110)の一部を使用した。

## 【参考・引用文献】

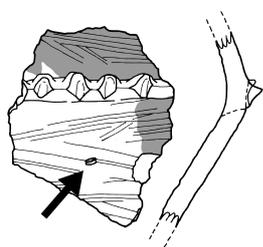
- 中沢道彦・丑野 毅 2003「レプリカ法による鹿児島県末吉町上中段遺跡出土粘土印痕時の観察」『鹿児島考古』37, 33 - 40頁, 鹿児島県考古学会。
- 中沢道彦・丑野 毅 2005「レプリカ法による熊本県ワクド石遺跡出土土器の種子状印痕の観察」『肥後考古』13, 24 - 37頁, 肥後考古学会。
- 山崎純男 2005「西日本縄文農耕論」『韓・日 新石器の 農耕問題』, 111 - 130頁, (財), 慶南文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会。



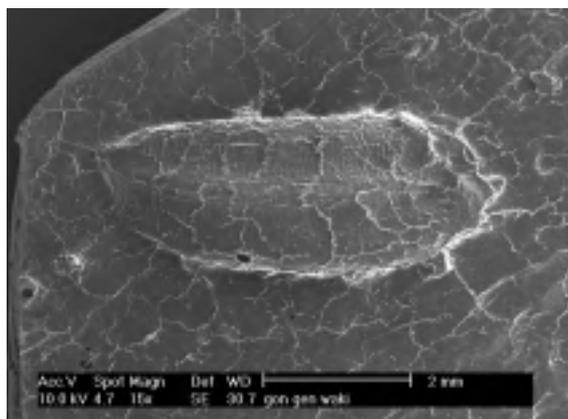
第1図 - ① No .1021 土器全体写真



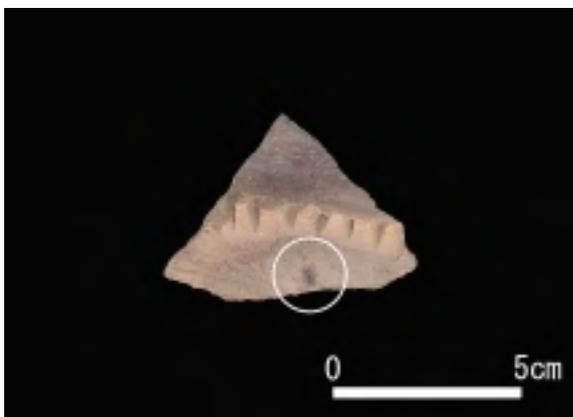
第1図 - ② No .1021 土器圧痕部拡大写真



第1図 - ③ No .1021 土器実測図 ( S = 1 / 3 )



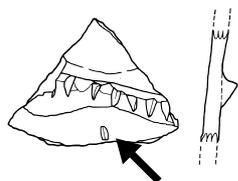
第1図 - ④ No .1021 レプリカ SEM 写真



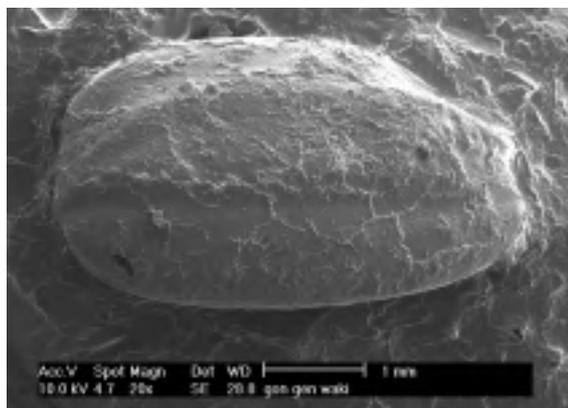
第2図 - ① No 672 土器全体写真



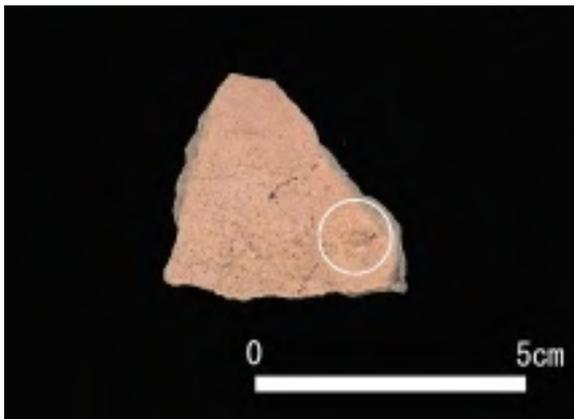
第2図 - ② No 672 土器圧痕部拡大写真



第2図 - ③ No 672 土器実測図 ( S = 1 / 3 )



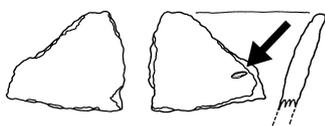
第2図 - ④ No 672 レプリカ SEM 写真



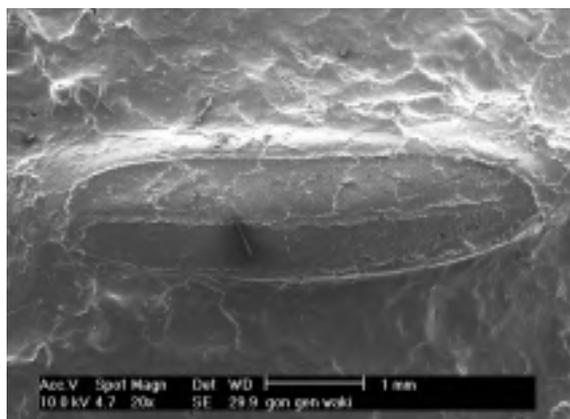
第3図 - ① No.2705 土器全体写真



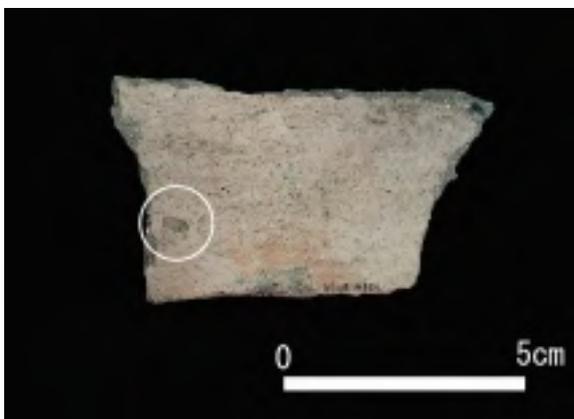
第3図 - ② No.2705 土器圧痕部拡大写真



第3図 - ③ No.2705 土器実測図 (S = 1/3)



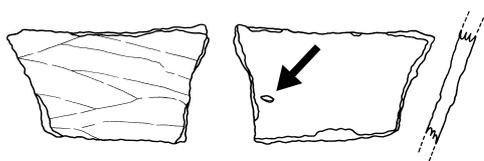
第3図 - ④ No.2705 レプリカ SEM 写真



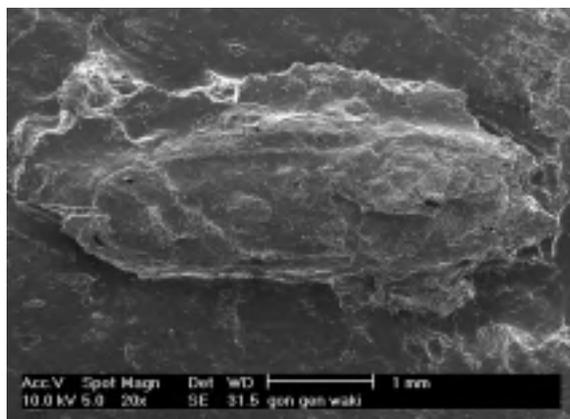
第4図 - ① No.030626 土器全体写真



第4図 - ② No.030626 土器圧痕部拡大写真



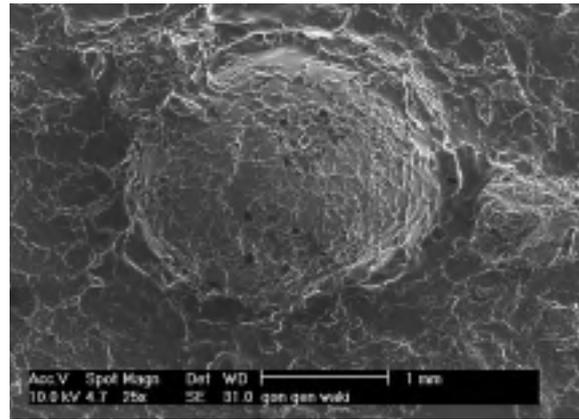
第4図 - ③ No.030626 土器実測図 (S = 1/3)



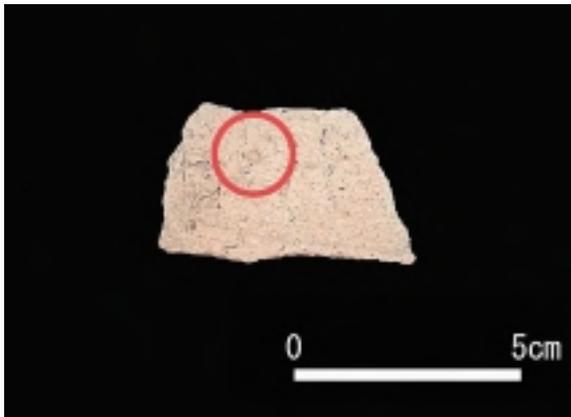
第4図 - ④ No.030626 レプリカ SEM 写真



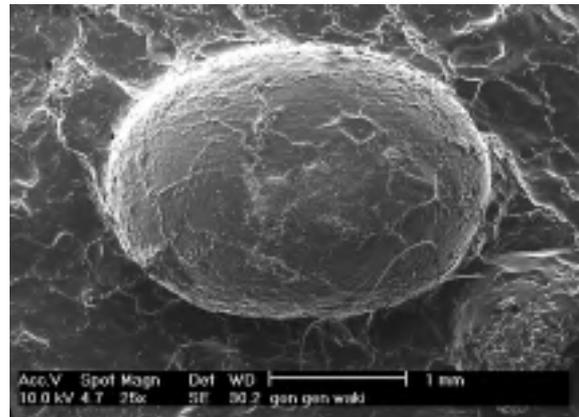
第5図 - ① No. 2677 土器全体写真



第5図 - ② No. 2677 レプリカ SEM 写真



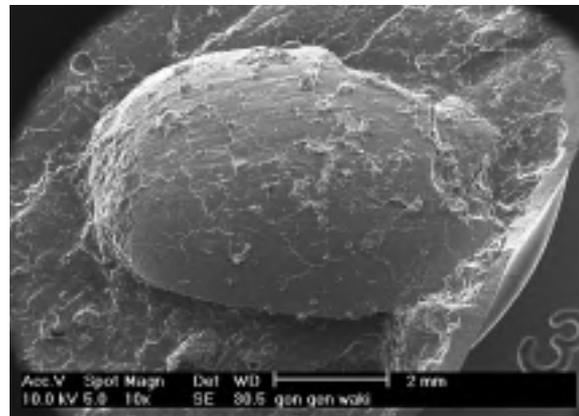
第6図 - ① No. 2688 土器全体写真



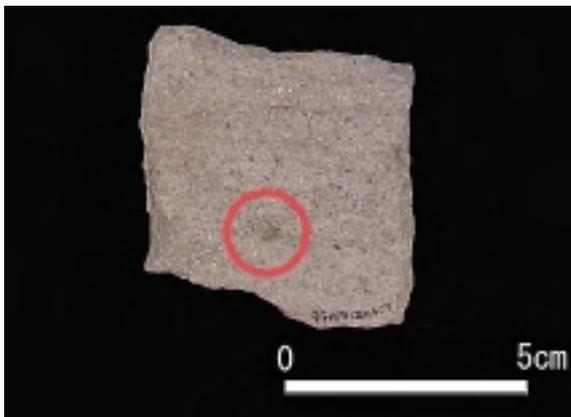
第6図 - ② No. 2688 レプリカ SEM 写真



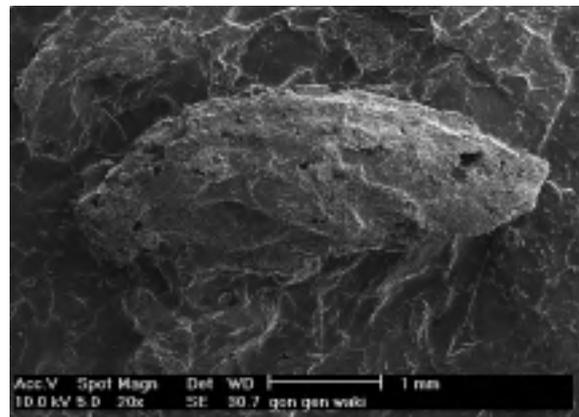
第7図 - ① No. A306 土器全体写真



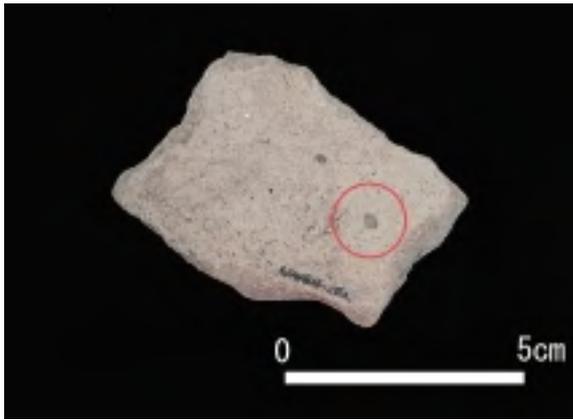
第7図 - ② No. A306 レプリカ SEM 写真



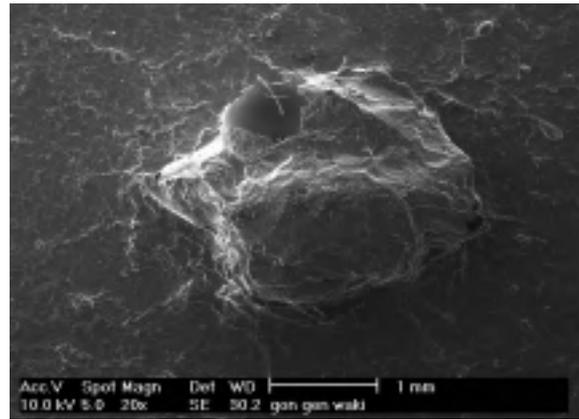
第8図 - ① No. 407 土器全体写真



第8図 - ② No. 407 レプリカ SEM 写真



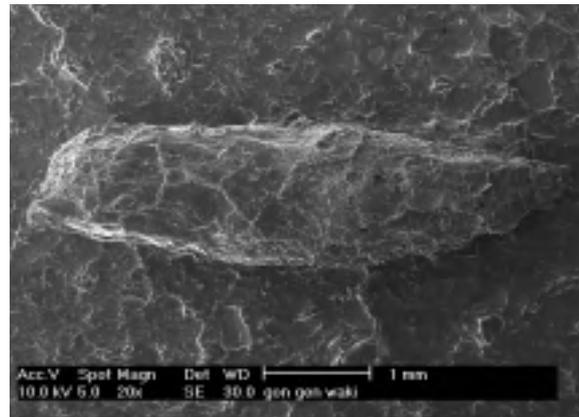
第9図 - ① No. 030529 土器全体写真



第9図 - ② No. 030529 レプリカ SEM 写真



第10図 - ① No. A4319 土器全体写真



第10図 - ② No. A4319 レプリカ SEM 写真



第11図 - ① No. A1854 土器全体写真



図11図 - ② No. A1854 土器圧痕部拡大写真

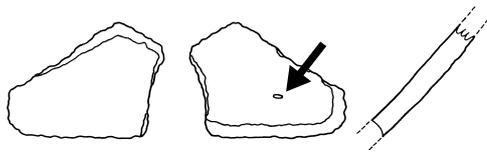
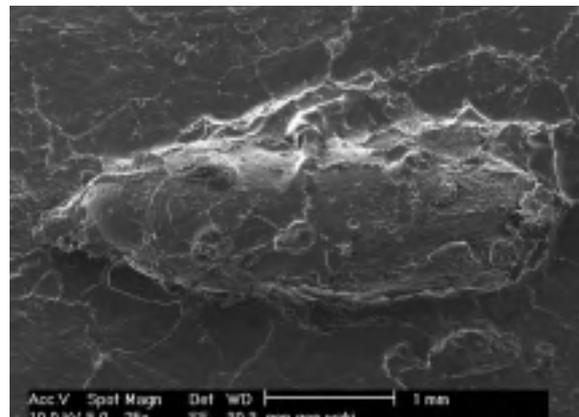


図11図 - ③ No. A1854 土器実測図 (S = 1/3)



第11図 - ④ No. A1854 レプリカ SEM 写真

# 約5600年前の眉山起源，権現脇火砕サージに伴って生じた倒木の跡

長岡 信治（長崎大学教育学部）・松末 和之（応用地質(株)）

権現脇遺跡では多数の埋没ピットが発見された。これらの埋没ピットからは土器や石器などの遺物が発見されず、遺構ではないと判断された。その成因を明らかにするべく、トレンチ掘削によってピットを三次元的に復元し、詳細な地質調査を行った。その結果、これらは火砕サージに伴い立木が根こそぎ倒された跡と判断されたので、ここにその概略を報告する。

権現脇遺跡は旧大野木場小学校上流の水無川の右岸の約1万年前の扇状地（長崎県，2004；2005）の上であって、1990 - 1995年噴火では、サージ堆積物に薄く覆われたのみで火砕流本体による破壊や埋没を免れた地域である（渡辺・星住，1995；図1，写真1）。遺跡では最下部に約1万年前の扇状地礫層があり、それを覆って下位より厚さ50cmの暗褐色シルト質土壌，厚さ15 - 150cmの赤褐色極粗～粗粒砂サイズ火山灰（後述の権現脇火砕サージ堆積物），80cmの暗褐色土壌，20cmの灰白色細～極細砂サイズ火山灰（平成火砕サージ堆積物）が堆積している（写真2）。埋没ピットは十数カ所の地表下1～2mで、平成火砕サージ下位で赤褐色極粗～粗粒砂サイズの火山灰からなる火砕サージ堆積物（後述の権現脇火砕サージ堆積物）の直下に発見された（図3，写真3～15）。各ピットは円形または楕円形で、直径1 - 3m深さ150 - 50cmであり、中は直上の火山灰で充填されていた。さらによく観察すると、ピットの内部にあったと考えられる土壌や扇状地礫などの地層が、一方の縁でめくれ上がり、直立したり、裂けて楔状の隙間などが出来ていた（写真3～15）。この地層のめくれ上がりはピットの南～南西の縁と一定の方向で発生していた。このような状況から、このピットは、倒木により地層が根ごと掘り上げられた跡で、めくれ上がりは木が倒れた際に根と共に約90°回転して立ち上がった旧表層と考えられる（図5）。また、めくれ上がった地層の傾斜方向から、木は、北または北東から強い横圧を受けたために倒れたと推定される（図2，4）。更に、火山灰がピットを充填し、めくれた地層を覆っていることから、この火山灰の堆積直前かほぼ同時に倒木が起きたと考えられる（図5）。

ピットを充填する赤褐色極粗～粗粒砂サイズ火山灰は、高温酸化したデイサイト質礫を交える黄褐～赤褐色の極粗～粗粒砂で、厚さが15 - 150cmと変化し、谷埋めの堆積構造が認められる（写真3）。全体に均質だが、一部、不明瞭ながら成層構造や弱い斜交層理が認められる。一方、吹き抜けパイプや炭化木など高温の証拠はない。以上から、この火山灰層は、比較的低温の火砕サージ堆積物と判断される。このサージ堆積物を権現脇火砕サージと呼ぶ。堆積物は細粒なことから、サージそのものによるのではなく、直前の爆風などによって木がなぎ倒されたことも考えられる。

火砕サージ堆積物直下の土壌の<sup>14</sup>C年代が5890 - 5600yBP（長崎県，2004；2005）を示しており、権現脇サージの発生は約5600年前と推定される。爆風の方向は眉山であり、火砕サージ堆積物は、眉山南麓で岩屑なだれ堆積物（おそらく渡辺・星住，1995の仁田町岩屑なだれ堆積物か島原岩屑なだれ堆積物）へ変化するので、権現脇遺跡の倒木と権現脇火砕サージは眉山で発生した岩屑なだれに伴うものであろう。

なお、現地調査およびとりまとめにあたって長崎県雲仙活断層委員会の各委員，長崎県危機管理課，深江町教育委員会および(株)埋蔵文化財サポートシステムの皆様に大変お世話になった。ここに心から御礼申し上げます。

## 【引用文献】

- 星住英夫・宇都浩三（2000）雲仙火山の形成史 月刊地球 22巻 4号 237 - 245頁  
長崎県（2004）平成15年度 地震関係基礎調査交付金 雲仙活断層群に関する調査成果報告書  
長崎県（2005）平成16年度 地震関係基礎調査交付金 雲仙活断層群に関する調査成果報告書  
渡辺一徳・星住英夫（1995）雲仙火山地質図 火山地質図8 地質調査所



図1 権現脇遺跡周辺の地形図

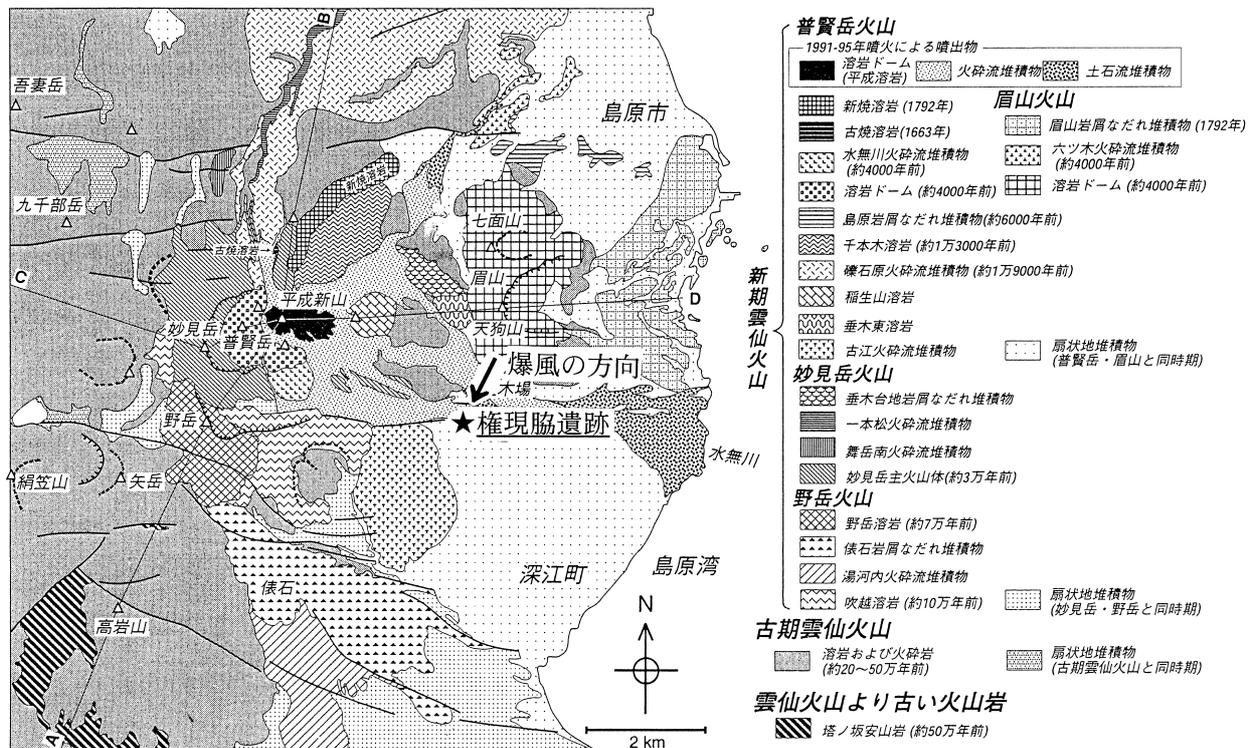


図2 権現脇遺跡周辺の地質図, および遺跡の位置と権現脇火砕サージの方向  
地質図は星住・宇都 (2000) による

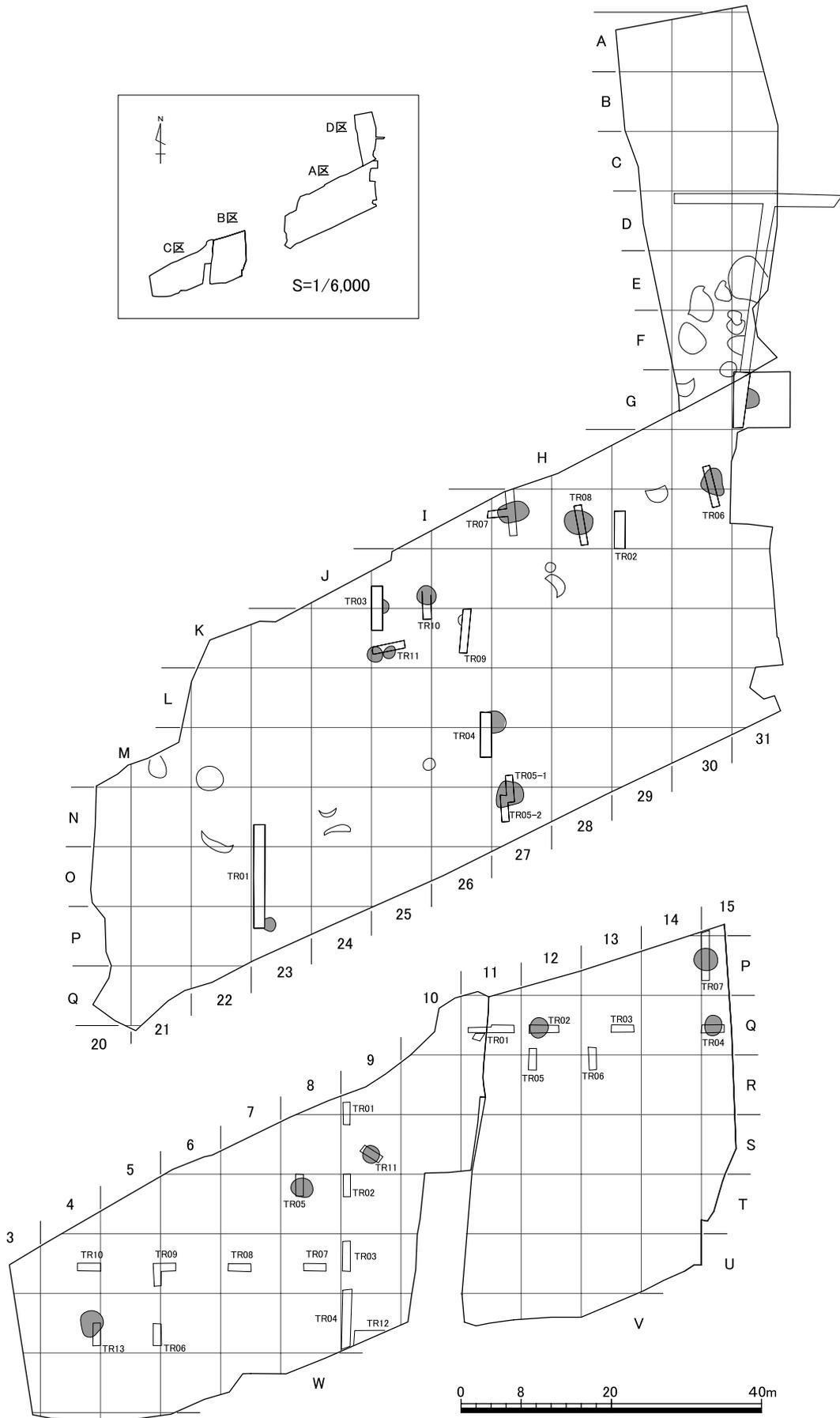


図3 権現脇遺跡における倒木跡を示す埋没ピットの分布

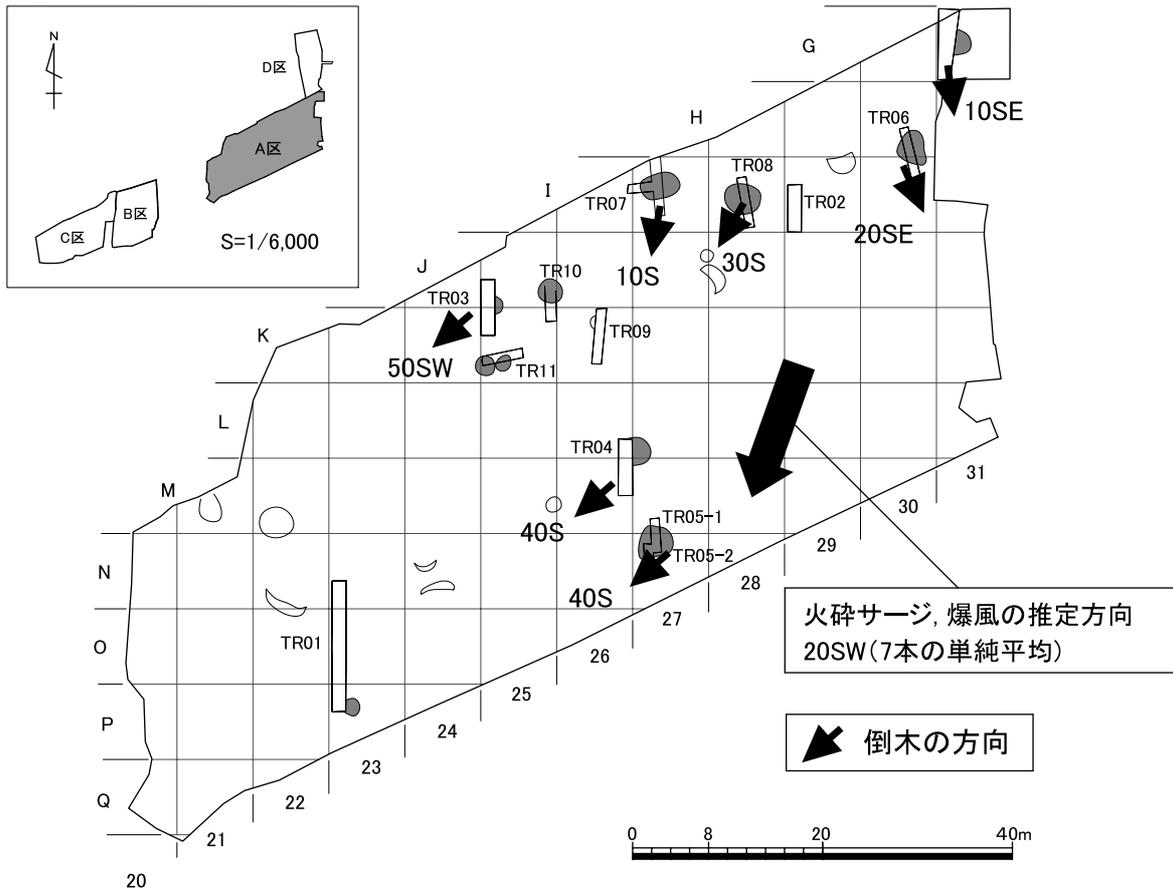


図4 権現脇遺跡A地区における倒木の方向

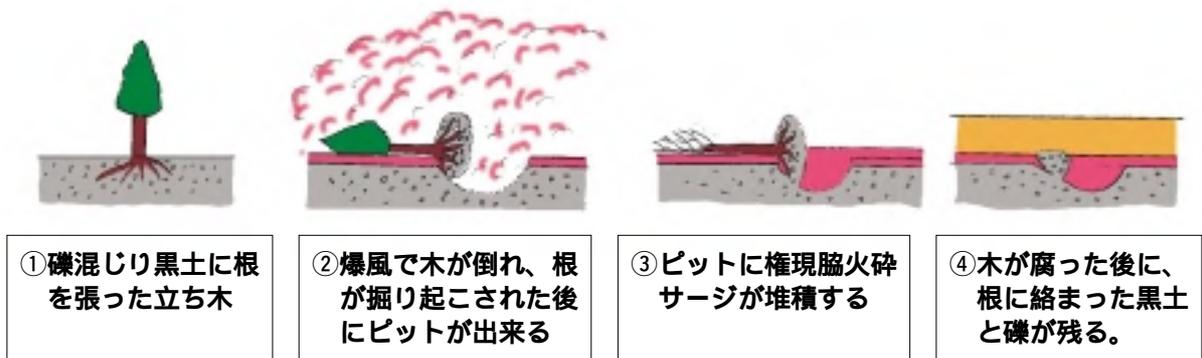


図5 権現脇火砕サージの堆積と倒木の仮定



写真1 南西側からみた権現脇遺跡A地区



写真2 遺跡北東部の模式露頭と柱状

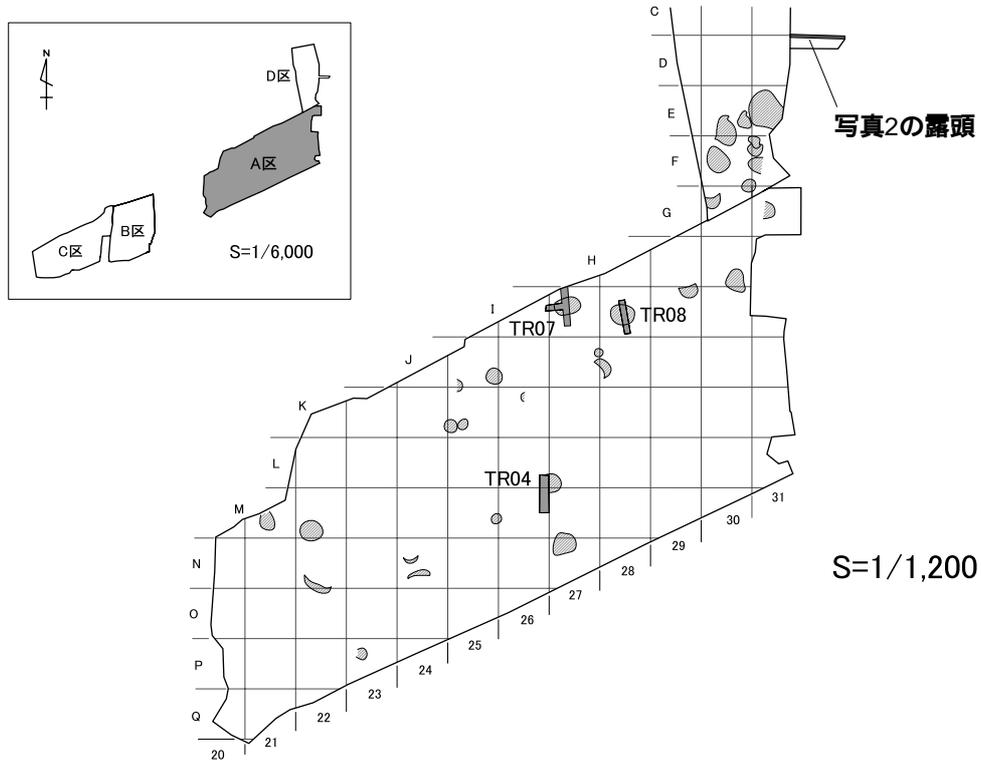


図6 写真2, 写真5~写真7の位置



写真3 ビットを充填する権現脇火砕サージ堆積物とそれを覆う平成火砕サージ堆積物



写真4 TR04トレンチ東面における倒木跡

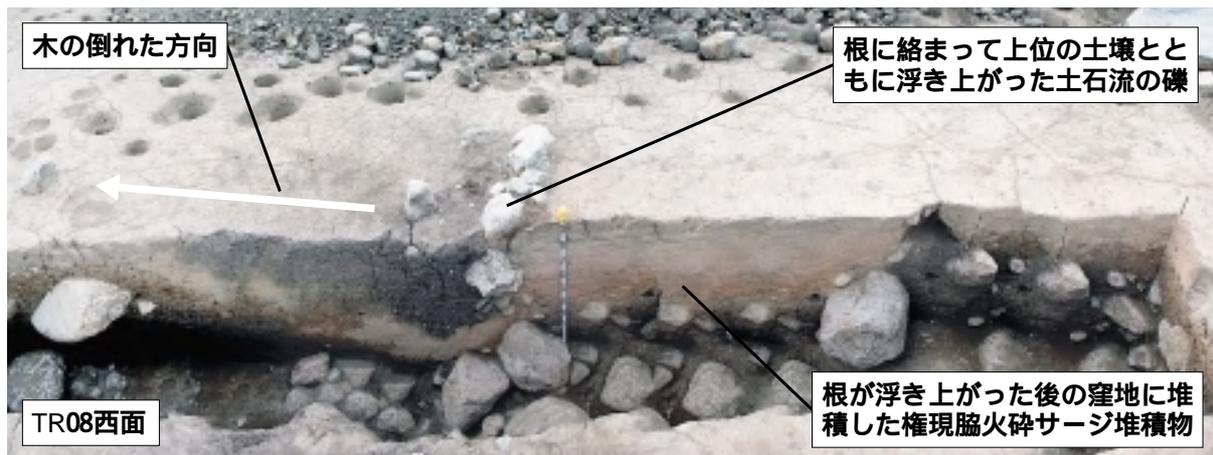


写真5 TR08トレンチ西面における倒木跡



写真6 TR08トレンチ全景



写真7 TR07トレンチ東面の倒木跡

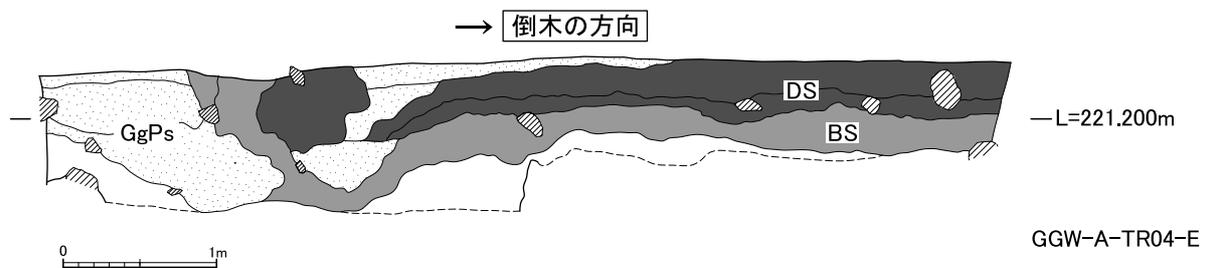


写真8 TR04トレンチ東面における倒木跡

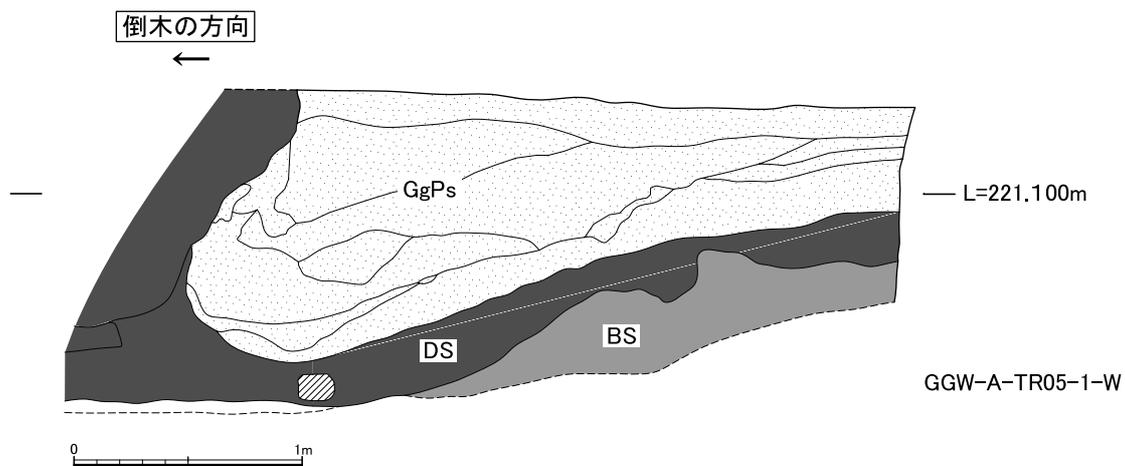


写真9 TR05 1トレンチ西面における倒木跡

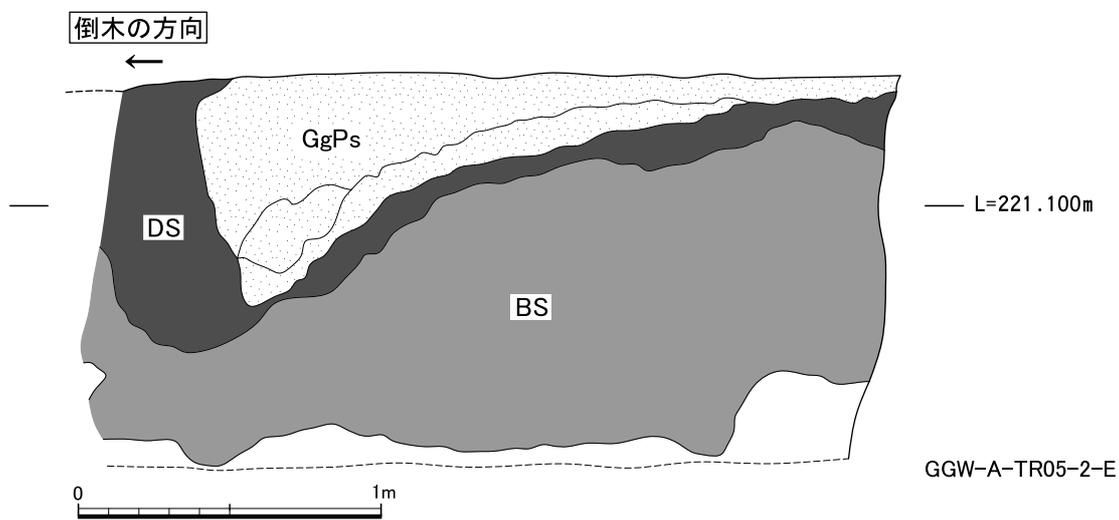


写真10 TR05 2トレンチ東面における倒木跡

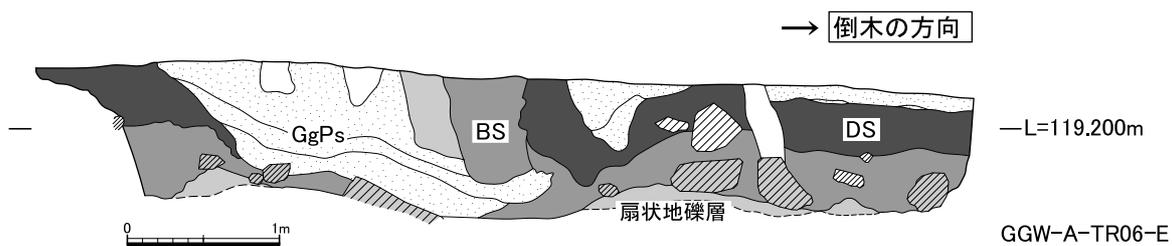


写真11 TR06トレンチ東面における倒木跡



倒木の方向 ←

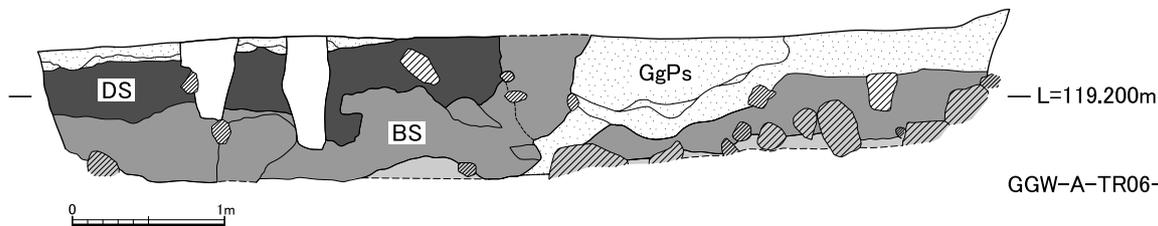


写真12 TR06トレンチ西面における倒木跡



→ 倒木の方向

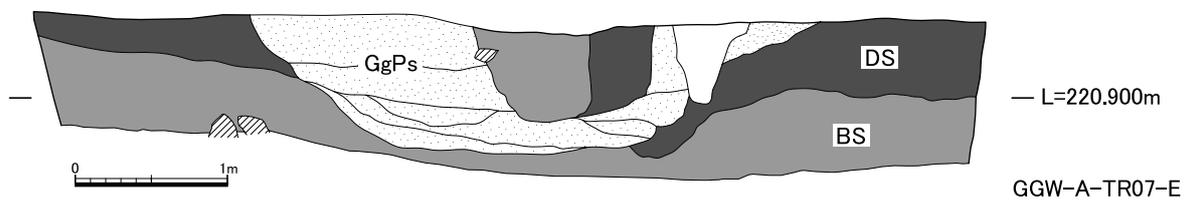


写真13 TR07トレンチ東面における倒木跡



倒木の方向 ←

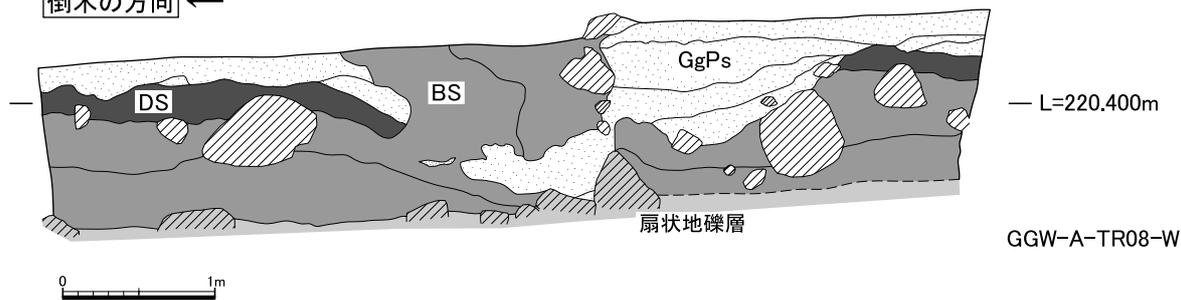


写真14 TR08トレンチ西面における倒木跡

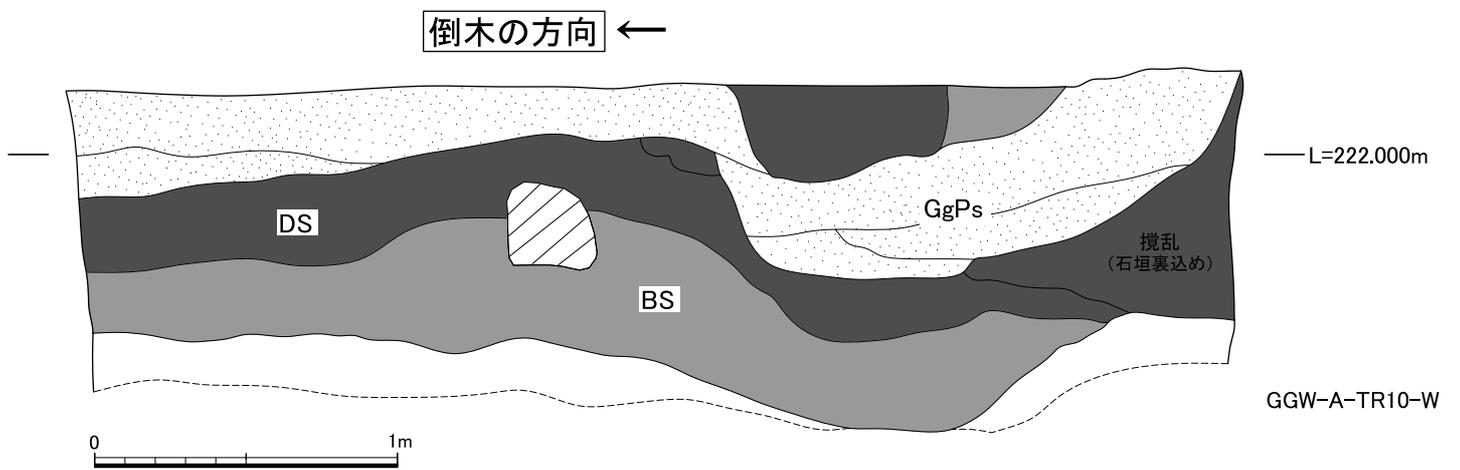


写真15 TR10トレンチ西面における倒木跡

# 報告書抄録

ふりがな	ごんげんわきいせき							
書名	権現脇遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号	第2集							
編著者名	本多 和典 渡邊 康行 島内 浩輔 大坪 芳典 藤尾慎一郎 小林 謙一 小畑 弘己 仙波 靖子 長岡 信治 松末 和之							
編集機関	深江町教育委員会							
所在地	〒859 1504 長崎県南高来郡深江町丁2117番地 0957 72 2140							
発行年月日	西暦2006年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
ごんげんわき 権現脇遺跡	南高来郡 深江町 大野木場			32° 44 38	130° 19 57	20030226 ~ 20040831	8,157m <sup>2</sup>	赤松谷川 2号導流 堤・ 赤松谷川 2号堰堤 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
権現脇遺跡	遺物包含地	縄文時代後期 ~ 弥生時代前期	埋甕 土坑	刻目突帯文土器 組織痕土器 モミ圧痕土器 打製石斧				

深江町文化財調査報告書 第2集

**権現脇遺跡**

2006 .3 .15

発行 長崎県深江町教育委員会

〒859 1504 長崎県南高来郡深江町丁2117番地

印刷 株式会社 昭 和 堂